
魔法と魔術と超能力と・・・

2のぞろ目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と魔術と超能力と・・・

【Nコード】

N4999Q

【作者名】

2のぞろ目

【あらすじ】

神の座にまで辿り着いた男が創りだした世界は、どのような流れであろうとも全てが同じ結果となる世界だった。ゆえに彼はかつて戦った者と同じ起源、同じ魂の持ち主に力を託し送り出した・・・その行いが自身の消滅に繋がるとしても。(A's編突入)

はじめの注意書き(2011/2/12追加)

この作品は。

- ・作者の突発的妄想が暴走した産物
- ・若干チート物(複数予定)
- ・上条さんは上条さんでも上条さんじゃない
- ・一部のキャラに関して本作品オリジナル設定(年齢・能力の有無・あと出番とか)

- ・大部分(7割程)がwiki頼り
- ・とあるのキャラだけ原作と色々違う
- ・後半に続くにつれてオリストローリーに入っていく予定
- ・原作と違いフラグが立たない人がいる
- ・でもハーレムになるかも?
- ・感想、指摘大歓迎
- ・となっています。

それでも「ok!」という方はどうぞ「魔法と魔術と超能力と・・・」をお楽しみください。

追加設定

2011/2/12

念話をへゝ

デバイスのセリフを「」
となります。

プロローグ（前書き）

空想を文字化するって以外に苦戦する。長編作家ってすごい

プロローグ

——???

水平線さえも見えない一面水面だけの世界。その透き通った水の上に一人の青年が寝ていた。

「んゝ・・・っん？・・・って此処どこだ？！（まてまて！たしか昨日は明日から三連休だから徹夜覚悟で買ったのはいいけど読まずに溜まりまくったラノベを読み続けて、その後空腹と眠気が・・・）腹減って・・・ない？」

『現実逃避の後にえらく現実的な意見が出たがその必要はないぞ？』
「誰だ！」

突然声をかけられ声が見た方を見て・・・動きが止まった。

全体的に赤を基調とした服装、セミロングの赤髪、とくに鍛えているように見えない身体付きの男、しかし武道の経験がない青年にさえ分かるほどの威圧感を持った男だった。けれど青年にとっては重要なことは別にあったそれは・・・

「フ、フィアンマ?!」

『びっくりしたか?』

「フィアン、マ？」

『いや違うぞ？これは■■■■■にとって印象がある人物の姿になっただけだ』

「そんなこと出来んのかよ？その姿の人物は空想上の存在だぞ？」

『神様だって人から見たら空想上の人物だろ?』

「ぶっちゃけやがった!？」

只今、逆転する裁判張りに良い争いが発生しています。しばらく

くお待ちください。

「で？なんでおれは此処にいるんだよ？あんたが神だとするならネツトの中でよく聞くミスして殺しちゃったってやつか？」

『殺したとは人聞きの悪い。厳密な審査の結果・・・魂を抜きとっただけだ』

青年の問いに男がそう言った。

「それは実質的な死だろう！てめえ！神様だろうと何だろうと、やって良い事の上限ぐらいあるだろう！それがなんだ？魂を抜きとっただあ？」

そう言いながら青年は男に近づき・・・

「勝手すぎるだろ！命つてもんをなんだと思ってやがる！！」

思いつきり殴る・・・が、見えない壁のような物があるのか途中で拳が止まる。

『・・・神であろうと迷いなく殴りかかってくる、か。そうではなくては幾多の世界、幾億人の中から選んだ意味がなくなる。おい■■■■

■■■■、後ろを見る』

「ああ！？・・・ん？なんだ、これ？」

男は不意に言う、青年も自身の後ろを見て再び動きが止まる。

そこには気づかなかったのが不思議なほど大きな球体―中身は真っ黒で時々小さな光が現れては消えていく、さらにその周りを透明な物でコーティングされたもの―が浮いていた。

『これは俺が作った『世界』だ』

「へえゝすげえゝなく、で？」

『この世界は様々な可能性が詰まってる』

「・・・そんな世界に俺が行けと？」

『ああ、行かなかった場合。俺はこの世界の管理を手放す』

「手放した場合どうなるんだよ？」

『ジョジョの・・・違った、徐々に消滅していくことになるな』
「ネタ入れんな！・・・分かったよ行ってやるよ！行ってお前の掌てのひらで踊ればいいんだろ！」

『分かればいい。ほら餞別だ力をやろう』

——ズシュツツツ

「カハッ！！」

男が青年の胸に自らの右手を突き刺す。

「てめえ、こん、ど、あったら、ブツこ、す・・・」

Side OUT

青年が眠ると同時に男が右腕を引き抜く・・・前に右腕うでが無くなっていた。

——バシャン

支えを失った青年が床に崩れ落ちる。だが深い眠りについた青年は目を覚ます事はなかった。

『ふん、元を植えただけで俺様の右腕を喰らったか』

男は青年を見下ろす。

『貴様は掌てのひらで踊ると言っていたな、それは大きな間違いだ』

男が青年を担ぎあげる。

『俺様がかつて欲した力を手にした貴様という存在がこの『世界』
入ることによって』

男が『世界』に近づいていく。——同時に男の右腕から空気に
溶けるように消えていく

『初めてこの世界は俺様の、神の手を離れていく』

男が『世界』のすぐ傍に立つ——右腕が消え、胸も消えていく
『そこから先は俺様にも想像もつかない結果になる……だが、そ
れでも』

男が青年ごと腕を上げる。——下半身も消えてなくなっていく
『かつて犯した過ちを再び見るよりはまし、か』

すでに足がなく、その場に浮かびながら青年を見上げる。——
上半身も消えていく

『二度と会うことはないだろう。ぶっ殺せなくて残念だったな『神
ならぬ身にて天上の意思となつた者』■』

そして青年を『世界』に投げ入れる。——同時に左腕も消え、
頭だけになった

『人を超え、神の座に辿り着いても最後に頼ったのは人、か。貴様
の言うとおりだったな上条当麻』

そして……其処に存在するものはいなくなった。

——おまけ

男が消える寸前、何かを思い出す。

「そう言えば、力の使い方。知識を埋め込むのを忘れたな・・・」
その表情を言葉で表すなら「やっちまたな」と言う表情をして
いたが・・・

「まあ上条当麻も不幸慣れしてたし大丈夫だろ」
そして誰もいなくなった。

——不幸って言うんじゃないー!!

その時どこぞの学園都市で、幻想を殺せる少年が叫んだとか叫ば
なかったとか

プロローグ（後書き）

この前半年ぶりに某電気街に行ったらあまりにも変わってたのでびっくりした（汗

引っ越しと出会い

SIDE…当麻

あの神に殺されて転生して二年がたった。・・・何？いきなり飛んだ？そんなには飛んでないだろ、第一未発達の生まれたての赤ん坊の脳に二十年とはいえ人生経験積んだ成人の知識なんかブチ込んだら脳死すらあり得るぞ？・・・まあそこはあの神が何かしたんだろ。俺が転生したことに気づいたのは一歳の誕生日の時だ。誕生日の深夜に急に眼が覚めて自分がどういいう存在か思い出して思いつきり声をあげたんだっけ？・・・赤ん坊だから泣き声だけだな！！

それから四ヶ月は四つん這いで、さらに三ヶ月後にはふらつくけど二足歩行で情報収集してました。さらに二カ月月たって我が家は引越することになりました。

んで！今どんな状況なのかというと。

「はじめまして。一昨日から隣の家に引っ越して来ました。上条かみじょう詩菜しいなです」

「夫の刀夜やです。そしてこの子が息子の当麻とうまです」

はい出ました俺の名前です。ご存じ不幸体質で死亡し恋愛フラグの一級建築士の上条当麻です。

そして今隣の家に挨拶に来ているのですが。

「こちらこそ。御坂みさか旅掛たびかけです。そしてこちらが妻の」

「美鈴みすずです。それと娘の美琴みことちゃんです！」

あるえ？この人たちがココで出てくるの？あの神、本気でどんな可能性をこの世界に詰め込んだのさ？

「へえー美鈴さんって聖祥大付属の小学校で教師をしているんですか？」

今母親ズが言っていた聖祥大。ようするに引っ越した先というのが、ご存じリリカルでマジカル事件が発生する事で有名な海鳴市で

す。・・・原作ほとんど記憶の彼方だけどこれだけは言える、俺一人歩きが出来るようになったら翠屋でシュークリーム食うんだ（微死亡フラグ）。

しかし、もし俺が本当にあの上条当麻だったら絶対に巻き込まれるよな絶対？なら問題は何処まで戦えるかってことだな。後は主人公が今何歳なのかってことぐらいだ。

「美琴が生まれる前ですよ？それに、今はお腹の中にも家族がいま
すから」

「あらあら今何カ月？」

「もう六ヶ月ですよ。それに、今度の子は双子なのよ」

確かにお腹の下あたりが不自然に膨れてるが、双子？これってもしかしてシスターズフラグ？考えても仕方ないか・・・それに。

「あうあううう（はらへった）」

「あーうー」

お隣で寝かされてる美琴嬢もそろそろぐずり始めるな。それに、しても身に着けてる腕輪状の機械なんだろう？

「あらあら2人ともお腹が空いちちゃったのかしらね」

「そうねーそろそろ晩御飯の支度もしないとね。・・・あの人たちも何時の間にか飲み始めちゃったし、今日は一緒にどうです？」

「じゃあ、お言葉に甘えて御馳走になります。それに親睦を深める
為に私もお手伝いします」

「うああ（親父ズは後で絞られるな）」

しかし、いつの間に酒なんか飲み始め始めたんだ？・・・それに
うぜえ。

「はあっはあー！どうだ家の妻は！気がきくだろ？！」

「はっ！何を言ってるんだ？家の母さんの味付けは最高だぞ！」

「ほおう！ならば見せてもらおうか上条家の家庭の味を！」

「見せるんじゃない、味わうんだ！」

「・・・」「・・・」

「やるな！」

「だあー！（だからネタに走るな！）」

「むっ！刀夜お前の息子から素質を感じる！」

「当たり前だろ？誰の息子だと思ってる！」

「あー！（仲良いな〜ホント！）」

「ふっ、当麻もそう思うか？」

「当麻君もその内分かるさ、友を得るのに時間なんて関係ないということが」

「あう〜？（・・・俺まともにしゃべってないよな？）
——ギユ

「うあ？（ん？）」

なんか右手が握られたと思い、見てみたらお隣にいた美琴嬢が見事に俺の右手を握りながら寝ていた・・・何この寝顔？ちょー和むんですけど？

「ほう！見ろ旅掛！美琴ちゃんは家の当麻を気に入ったみたいだぞ？」

「何！家の娘を誑かしてるだと！」

「うあー？（何言ってるんだおっさん？）」

「まあいつか。それよりもこの状態を写真に撮って将来的にからかってやるとするか」

「だあー、めー！（やめろ！親父殿！）」

「くっくくく！もし家の美琴を泣かすようなら○○して△△して××××してやる！」

「——不幸だー！」

SIDE・・美鈴

今日は一昨日隣の家に引っ越してきた家族が挨拶に来た。その人たちを見て何故か知らないけれど急に肩の荷が下りた気がした。・・・いや原因は分かってる。娘の美琴だ。その事が発覚したのは生まれて直ぐの事だった。

——二年前。海鳴大学病院

「高機能性遺伝子障害者、ですか？」
こうきのうせいでんししょうがいしや

『ええ、通称HGS。数年ほど前から発症し始めた先天性の遺伝子病で、死病の類ではないのですが・根元的な治療は現代の医学では不可能な難病です。おそらく死ぬまでずっと付き合い続ける事になるでしょう』

「それは、どういうことですか？」

『簡単に言うならば『超能力』です』

「ちよ、超能力、ですか？」

『ええ。世間での格差が生まれるのを防ぐ為に政府があえて発表していないのですが、私たち医療関係やご家族の方、警察内には黙秘を条件に教えているんです』

「それは私たちにも黙秘しろということですか？」

そう言った夫の問いかけに対し。

『知らされずに居るより、知った方がいいでしょう？・・・それに』

「「？」」

『私の友人の親戚にも同じような症状の方がいるものですから、人事じゃないんですよ』

そう言って医師の方が数枚の書類をファイルから出してくる。

『最初の書類をよく読んでから、次の書類に必要な事を書いて受付の人に「総合医療科をお願いします」って言えば専門の方が見られます。・・・正直な話、貴女方は運は良い方です。今のところ専門としている人は国内でも少ないんです、幸いなことに内の病院には専門の人が数人いるんですよ』

そう言った医師の人は辛そうに話していた。

その後、美琴を診察してもらったカエル顔の医師に詳しい話を聞くと、超能力とは脳で演算処理を行い力を行使する為、自我の発達していない赤子で発覚したのは少ない例らしく定期的に来て欲しい

らしい。それに、養育費の何割かは国で負担して貰える事になった。そして数日後に力を制御する装置をもらい今は左腕に付けている。・・けれど不安は残っていた。これから先、成長した時にこの力を制御出来なかったら、この子の人生は歪んでしまうのではないかといった不安に思っていた。

「（でも、この人たちを見ていたらそんな不安なんて霞んじゃうわね）」

そんな事を思いながら料理を進めるが・・・。

「あらあら？刀夜さんの遺伝かしら？手が早いわね」

横からそんな声が聞こえ、一旦手を止めて娘の方を見る。

そこには左腕を伸ばし安らかに眠る娘の姿と、伸ばされた左手を右手で握る男の子―当麻くん。それに言葉が噛み合わないのに赤ん坊と漫才をする夫達。そんな彼らの姿を見て微笑んでいる詩菜さん・・と、私。

自然と笑みがこぼれていることに気づき、今まで感じていた悲壮感が薄れていく。

「（当麻君は皆に愛されているのね、あの子がいれば美琴ちゃんは大丈夫そうかしら？・・むしろ元気な子に育ちそうね）」

そして自分のお腹を撫でて呟く。

―――楽しそうでしょ？あなた達も何時に日かこの輪の中に入るのよ

姉さん事件です。って、俺に姉なんていねーよ！（前書き）

誰か！オラに文才を分けてくれ！っと切実にそう叫びたい

姉さん事件です。って、俺に姉なんていねーよ！

SIDE…当麻

海鳴に引越してから、さらに二年の月日が経ち四歳になった。
・何？また飛びすぎだど？別にいいだろ、魔法にも魔術にも超能力者にも不幸にも遇わなかったんだから。それでも聞きたいならこの二年間をダイジェスト版で教えてやる。

当麻・美琴、大地に立つ。——ついに歩きまわるようにもなった誕生日を迎える。——二名ともそれぞれ二歳の誕生日を迎え、両家で祝った

コイツら、しゃべるぞ！——ようやくしゃべれるようになりました。美琴の時も同様です

双子が生まれた。——四カ月後に予定通りに誕生した。ちなみに名前は姉が『とまり』、妹が『はずみ』。

誕生日を迎える。——三歳の誕生日を迎える。

保育所に通いませんでした。——俺はともかく、美琴の方は双子が生まれたから面倒を見なくてはいけない↓けど美琴も自分で面倒見たい↓女の友情発生↓母親二人で四人の面倒をみる、という感じだ。これに関しては意外と他にもいるらしく不幸なのか判別がつかん。

以上、二年の回想でした。な？たいした事のない二年ちよつとだろ？本来ならまだ右も左も、危険な行動も分らないチビッ子なんだから親が一人にさせる訳ないじゃん。ちなみに今は買い物から帰ってきた後で、母親二人に見守られながら公園の中を近くにいたチビッ子達と一緒に駆け回っています。まあ俺自身も体を鍛えるのも兼ねて一緒に走り回ってるんだが・・・この体は何かおかしい。普通なら既にバテ始める頃——（現に美琴は遊び初めたときの勢いが無い）なのにまだ走り回れる余裕がある。「とーまー！」っと、そう言ってる間に何時の間にか離れていた美琴がこっちに走ってきた。っ

て！思いつきりこけた？！

それは普通の光景だった、当麻が立ち止まっているのを見た美琴が、心配になって近づいて来ただけの光景。

超能力とは脳から引き出す力。

感情もまた脳からのシグナル。

つ
か
り

腕輪に亀裂が入る

「ふえ（ピリッ）、うつ（バチイ）、うああああああん」

チツチチツチチチツチツチツチ

SIDE..
当麻

音が聞こえたと思ったら、美琴の周囲を電撃が暴れまわっていた。

れていた。
・
・
・
はい？

「へ？　って、かあさん？　あれ？　いつの間にこんなに離れたの？」

(あれ？スルー？)

「たぶん転んだときに機械が壊れたと思うんです・・・先ほど医師の方に連絡したら専門の方が来てくれるそうです。」

「それは何時来ますか？」

「少なくとも一時間以内かと・・・こんな時に私は何も出来ないんですね」

近くで二人が話しているのを聞きながら、俺はずっと考えていた。それは、御坂美琴に超能力があった。なら自分にも力上条当麻が在るのではないかと・・・右手を見る。

（だが実際に力があったとして、この電撃の中に飛び込んでいけるか？）

足が竦み、前に歩いて行けない。

そして美琴がいる方向見て・・・その光景を見てしまった。

——泣いている美琴の後方、反対の出入り口側の近くにあるブランコ間

——電撃の範囲内に存在するその場所で同年代と思える男の子が、もう一人の子を庇って伏せていた

「（こんな電撃怖くねえ！もっと怖いのは・・・美琴の心に傷が出来る事だ！！）」

その瞬間、不思議と体が軽くなり、雷撃の嵐の中に走りだす。

——その瞬間、エサに食いつこうとする猛獣のように電撃が上から襲いかかる

直感か、生存本能からか右手を平手を盾の様にして防ぐ・・・右手に触れた途端、電撃がかき消える。

後ろで誰かが叫んでいるが、数秒で四分の一の距離を走る。

——右から進行方向に向かって雷撃が迫る

一度立ち止まり、右腕で振り払い電撃を消したら再び走りだす。半秒で半分の道を走り抜ける。

今度は背筋に悪寒が走り前に転がり、再び走りだす。

——電撃が走り地面に一本線を描く

そしてブランコの周りにある鉄柵に帯電した電気を右手で打ち消

し、そのまま飛び越え辿り着く。

「（なるほどね、ブランコ自体が避雷針の役割をしてたのか）・・・
よう、大丈夫そうか？」

目の前で驚きと恐怖と困惑で固まっている二人に、何事も無かったかのように声をかける。

「そこにいれば安全だから、少しの間我慢してろ」
そしてすぐに美琴に向き合い、後ろの二人にまた話しかける。

「（直線距離にして二十四、五メートルってどこか。まだ体は軽い感じがする・・・あとはただ突き進むだけだ）・・・よっしゃ！やるか！」

その時になって後ろから声が掛けられる。

「な、なあ！」

「ん？」

「こ、怖くないのか？」

「そりゃ怖いに決まってる。けどそれ以上に、今あいつの手を取らないともっとダメな気がするから」

「ダメだった時は？」

「知らね！病院送りになっても傍に居続ければいいんじゃない？」
そのまま自分自身に語るようにしゃべり続ける。

「この電撃は怖い・・・けど、あいつは怖くない！だから、ただ真っ直ぐに、あいつに向かって行くだけだ！」

そして美琴に向かって真っ直ぐに駆けだす。

——真っ直ぐに電撃が向かってくる。

それに対して右手を前に出し左手で支え、楯のようにして突き進む。全身に幾つも直撃しながらも、掠り傷と中規模の火傷で済みながら真っ直ぐに突き進む。

——美琴が泣きながらも、必死に電撃を抑えようとしているのが分かる。

「（安心しろ、今すぐ抑えてやるから！）」

——近づけば近づく程、電撃も強くなる。

三メートルに來た時点で微量な砂鉄で切り傷が増えていく。
——残り一メートルで足のダメージが限界にきて前に倒れる。
が、その前に両手で地面を叩き・・・右手で美琴に触れる。

「パアアン

「・・・ふえ？」

弾ける様に電撃が消えた事に美琴が驚きの声を上げる。

「よう」

「あ、とお、ま？」

俺が声をかけるとようやく近くにいる事を知って、泣き顔を向ける。

「とーま、それ、ち？」

「そーだな、いてー。それよりも手、離すなよ？こうしてれば安全だから」

「う、うん？・・・とーまと、て、つないでたら、かみなりさん出てこない」

「おう、雷さんより俺は強いからな、だから安心しろ。・・・一人にならないから」

「・・・うつ、ひつ、うああああああ」

泣き始めた美琴に押し倒され、ようやく救急車の来たらしく、出入り口の方がうるさくなる

「おい、大丈夫か？」

「ん？さっきぶり、もう大丈夫なのか？」

「超能力は初めてじゃない、ただ、動きが取れなくなってただけだ」
「もう一人は？」

「家族の人が来て預けた」

「そっか、じゃあ俺寝るわ。流石に限かい、だ・・・zzz」

「ホントに寝たよ。それにしても、『傍に居続ける』ね。・・・確かに避けてたり、逃げてばっかじゃ伝わらないよな」

「「zzz」」

方や怪我と疲労から、もう一方は精神的な疲れと安堵感からか既

に眠りについていた。

ふと目が覚める。初めに見えたのは見知らぬ天井、次に起き上がろうとして、ふと気づく。

「お決まりのパターン言い忘れた」

「それは『知らない天井だ』の事かい？」

独り言だったのに反応が返ってきた事で、声のした方を見る。その人物を見てまず一番初めに思った事、それは・・・

「カエル顔？」

「よく言われるね」

「体が動かない」

「右手と胴以外の全身あますことなく火傷と擦り傷、切り傷だらけ。けどあの惨事でこれだけ怪我で済んだのは異常だね。あと医者のお点から言わせてもらえば、後一週間は絶対安静だね。・・・しかし異常なほど怪我の治りが早いね君？」

「・・・あれから？」

「君が病院に担ぎ込まれてから・・・もう日を跨いでるから、四日目だね」

「此処には」

「夜の見回りついでに寄ったら、たまたま君が起きたただだよ」

「・・・」

「他に何か聞きたいかね？」

「ストーリー？」

「担当している患者の症状とかは大体覚えてるよ」

「美琴は？」

エレクトロマスター

「電撃使いの女の子かい？治療しようとしてもなかなか離れなくってね。毎日朝から夜まで君のお見舞いに来てたよ」

「そっか」

「君は年の割に随分と落ち着いてるね？」

「・・・」

「まあ、患者の個人事情にまでは突っ込まないさ。今日はもう遅いし、君も特に問題はないから、明日の朝にでも親御さん達には連絡しておくよ？」

「ありがとうございます。あつ、あと今度お話聞かせてくれませんか？」

「あの女の子の親からも話を聞くとは思うけどね、まあ構わないさ。患者の疑問に答えるのもまた、医者務めだからね。じゃあゆつくりお休み」

そう言って医者は出て行った。

そして目を閉じて体の内側に意識を集中させ、公園の時のような感覚を引き出そうとする・・・が。

「あれ？出せない？おつかしいな？確かに感じることは出来るのに・・・まあ考えても仕方ない。第一右手があるのに身に纏えるのが不思議だったんだ、この事はおいおい考えていくしか、ない・・・よ・・・なあ・・・zzz」

そう言ってる間に眠気に勝てず瞼が重くなっていき、再び眠りにつく。

「うん、・・・んあ？」

「おや？起きたね」

起きて最初に気づいたのは明るい日差しと、カエル顔の先生。

「あれ、カエル先生？・・・いま何時？」

「今はお昼のご飯だね」

「オレ、オナカ、ヘッタ」

「その前に診察したいのだけど？なに、ほんの十分程だからすぐに済むよ」

「じゃあお願いします」

「やっぱり君、年相応じゃないね精神的に」

「・・・そう言えば俺の親は？連絡してくれたんでしょ？」

「さっきまで居ただけけど、今はお昼にしてるんじゃないかな？さて、衛生課に連絡したから直ぐにお昼も来るし、それまでに終わらせようか？」

「おう！」

——ガラッ！

「「当麻（ちゃん）！」」

昼の食事中に親父たちと美琴がドアを豪快に開けて入ってくる。

「むあ？」

「おや来たね」

——ガララララ、ピシャン

「あなた達早いわよ」

最後に、とまりとはずみを抱いた美鈴さんと旅掛さんが入ってきてドアを閉める。

「ほら美琴ちゃん、言いたい事があるんでしょ？」

「う、うん」

そう言われてベットの近くまで来る美琴、逆にさっきから各バラバラに言ってた大人組は静かになり壁際に離れる。俺も空気を読んで一旦食事を止める。

「と、とーま！あ、ありがと！」

「何に対してのありがとうなのかな分かんが、どういたし（——チユッ） ま・・・し・・・て？」

な、何が起こったのかさっぱり分からなかった頬に柔らかい感触があったとか壁際に嫉妬に燃えてるおっさんとか楽しそうにニヤついている母親ズとか感心して頷いてる親父とかを気にする余裕なんてなかった。な、何を言ってるのか分からないが、俺自身何言ってるのか分からなくなるほどの衝撃を受けたぜ！

「エヘヘ」

そんな衝撃も美琴が笑ってるのを見て自然とどうでもよくなった。
——やっぱ泣いてるより笑ってる方がいいよな

姉さん事件です。って、俺に姉なんていねーよ！（後書き）

最近就活ってどうなんだろう？と考える。

(将来の魔法) 少女との出会い (前書き)

おそらく後十話近く書かないと無印編に行かないと思う。

（将来の魔法）少女との出会い

Side…当麻

目が覚めてから一日たった。

あ後は旅掛のおっさんがご乱心したが、速攻で母親ズマザーズの同時攻撃に沈黙。手加減したらしく数分で復活し、俺の容体をカエル先生から説明された。やっぱり傷の治りが早く一週間安静だったのが6日に縮まった。その後医者も交えた美琴の力の説明会。医者話によれば気琴の力は高機能性遺伝子こうきのうせいでんし障害者、通称HGSと呼ばれる病気で所謂『超能力』らしい、対応できる病院は海鳴を含め十件に満たないそう。一応俺の事も調べたが治癒力も含め全て能力の類じゃないらしい。・・・それで説明できれば悩まなくて良いのに。

そして一日たった今現在、俺は病院の外れに建てられた建物の中にいる。この施設は例のHGS患者の為の施設で、全て核シェルター並みの強度設計で建てられている。中は一応合法的な実験室や能力解析を行う部屋、能力制御の為の訓練施設等があって専用のパスがないと中に入れない。ついでに言うと、この施設を建てる際に近隣の土地を国経由で買い取り、病院全体も改修・改良し食堂やらリラクゼーションルーム、各階に急患の家族の為の宿泊施設まで造ったそう。

そんな中に何で俺が居るのかというと、美琴の能力制御の訓練の付添いだ。・・・専用のパス？そんなの親父たち十カエル先生権限で（本人無視して）発行されましたが何か？今は保護者の方々（美鈴さんと何故か俺の両親（旅掛さんは今日から出張））とは別行動で、落ち着いた場所で本読んでます。タイトルは『刀語』。何故か親父の書齋にあったので前から読んでます・・・和むわ。

——二時間ほど経過

「んゝ！中々面白い」

「暇そうだね」

「あ、カエル先生」

何時の間にか隣にカエル先生が座っていた。

「退屈かい？」

「いや、だって俺、超能力と関係ないし？」

「・・・それもそうだね、そう言えばそろそろ今日の訓練も終わる頃だよ」

「お、じゃあ合流しないとな」

「案内しようか？」

その質問に俺はお願いしますと答え、カエル先生の案内で訓練室に歩いていく。

「お、当麻やつと来たか。」

「あ！とーま！」

ーギユ

訓練室横の待合室に來ると美鈴さんと親父達が待っており、既に訓練を終えていた美琴に抱きつかれた。

「――っ！（痛てえっす美琴さま！）」

「傷に響くというのに声も出さないか、これが漢おとこってやつか」

「医者の前では止めて欲しいんだけどね？」

「~~~~っ！？（そこの二人見てないで助けるよ！特に医者ア！！）」

「ほらほら美琴ちゃん、当麻君は怪我してるんだから。あんまり強く抱きついちゃだめよ？」

「（ありがたいんですけど、抱きつく前に止めて欲しいんですが？）」

「そうよ美琴ちゃん？せめて右手をつなぐだけにしなさい」

「（母さま！あなたも鬼ですね！）」

あれから昼も近いという事で昼食タイム。そして俺は午後一で診

察という事で待合室にて待機。付添いとして親父と二人・・・というか。

「こう言うのって普通母さんも一緒に来るべきじゃないの？」

「当麻、あんなった母さんは動かないぞ」

現在母親ズ＋御坂三姉妹は居ない。今はこの病院内の遊技場で我が子の（一人違うが）遊んでいる姿を見て癒されている事だろう。

その後話し合っていたら名前を呼ばれたので、診察室に移動。現在医者のお話を聞いている真っ最中。

「うん、順調すぎるほど治りが早いね。この早さを考慮すると後四日で退院できるね、他に何か聞きたい事はあるかな？」

「はい！カエル先生！」

「なにかね？」

「先生って超能力専門じゃなかったんですか？」

「一応僕は総合医療科でね、どの分野でも活動できるんだよ」

「本音は？」

「部下が育ってきたから意外と暇なんだよ」

「ぶっちゃけた！」

「静かにしなさい。それで先生、当麻は特に異常とかはないのですね？」

漫才になりつつあった俺とカエル先生の会話に親父が割り込む。

「そうだね」

「妻の話では電撃を消したと聞いたのですが」

「そちらに関しても、調べた限りじゃ超能力でもなかったね」

「そう、ですか・・・ありがとうございます。ほら当麻行くぞ」

そして診査室を出て行くこうとすると。

「ああ、少年。君は中々良い素質を持ってるね、コレをあげるよ」

そう言って渡された物、平たい紙の端に妙にリアルなカエルの形をした紙が貼りついた物が幾重も重ねた板状の物体。その名も・・・。

「げ、ゲコ太ハリセン！？」

「頑張ってね？」

「それは何を?! ツッコミか? ツッコミのか?!」

「ほら当麻、他の人に迷惑だから行くぞ」

そう言われながら親父に抱えられ診査室を出る。

「待って父さん! まだ言い足りって! 下ろしてー!!」

結局下ろしてもらえず。合流場所のリラクゼーションルームで休憩中。

しかし俺には休まる暇などないらしい。まったりとしていた所突如袖を引っ張られ、原因を見ると栗色の髪をツインテールにしている女の子がいた・・・どこかで見た気がする。

「何か用か？」

「あ、あの、あの!」

取り敢えず声をかけたら、慌て始めるが何か言いたそうだが、迷子か?

「なのはー!」

「あっ」

何処かで女性の声が聞こえた途端、女の子が何処かに走り去って行った。って! なのは? これって、もしかしてもしかするともしかするかも!?

「こっちか? なのは」「なのは?」

そう言ってやって来たのは一組の男女―男性の方は入院患者らしく患者服を着て車椅子に座っており、所々包帯が巻かれていた。その後ろで車椅子を押している女性は、先ほどの女の子と同じ栗色の髪をストレートに下ろしており、若干痩せた感じがするがそれでも美人と言える女性―が先ほどの女の子と一緒にやって来た。・・・やっぱりこの二人って、あの二人だよな?

「なのは? この子が?」

女性の質問に女の子―なのは―が頷く。・・・やっぱり知らない振りだよな?

「あの？」

「ああ、ごめんなさい。私は高町 桃子、この人が私の夫の士郎さん。」

「高町士郎だ。よろしく」

士郎さんから手を差し伸べられたので、握手だと思い俺も手を差し出す。むっ！素人目で見ても鍛えられてると分かる！

「えっと上条当麻です」

握手のついでに俺も名乗る。

「で、この子が娘のなのは。ほらなのは、御挨拶は？」

「た、たかまちにゃの、はう！？なの、なのは！二才さい」
何このかわいい生物？なんか癒される。

「えっと、それで何か御用ですか？」

自己紹介して終わったので質問してみると、士郎さんが口を開いた。

「娘を助けてくれて、ありがとう」

「???」

トウマは こんらん した。

「こ、このまえ！こうえんで、たすけてもらったの！」
しかし たすけ が あらわれた。

「・・・おお！もしかしてブランコにいた？」

「うん！そうなの！」

「本当にありがとう」

「い、いえ。お礼ならもう一人の方にも言って下さい。俺はただ美琴を、あの時泣いてる子を放って置けなかったから、助けるついでに助けたようなものですから」

「当麻君」

俺が思っていた事を言うのと士郎さんが話しかけてきた。

「君がそう思っていたとしても・・・他の子を助けるついでだったとしても、俺たちにとって大切な娘を助けられた事には変わらないんだ。だから・・・ありがとう」

こんなこと言われたら受け取らないと駄目だよな？

「・・・いえ、こちらこそ、ありがとうございます？」

「えっと、と、とうま君！ありがとうございます！」

「おう」

「当麻、話は終わったか？」

話の終わりを見越したのか親父が、ついでに母親ズがニヤニヤしながら話しかけやがった。双子は寝てる、美琴は何故か家の母親に抱っこされて顔が真っ赤で不機嫌そうだ・・・後でご機嫌取りかな？

どうしてこうなった？

母親ズ（母さん・美鈴さん・桃子さん）はおしゃべりタイム、若干惚気や娘自慢、悩み事の相談有り。親父は士郎さんと共に、話し合いという名の愚痴と苦労話。んでもって俺は美琴となのはに挟まれながら、両方のご機嫌取りと双子の子守り。片方に構ってるともう片方が不満をまき散らし始め、その又逆は不機嫌になり始める。よって苦肉の策として、二人の頭を撫でる撫でる撫でる・・・腕への負担が半端ねえ！

後桃子さんの話を盗み聞きしたところ、高町家は五人家族（父・母・兄姉となのは）で、翠屋という喫茶店を経営しているそうだ。桃子さんが翠屋のパティシエール兼経理担当、士郎さんは喫茶店の店長をやる傍らボディーガードの仕事。長男の恭也きょうやさんは小学校五年生。長女の美由希みゆきさんは小学四生らしい。

順調に翠屋の経営が安定した頃、三ヶ月程前に士郎さんがボディーガードの仕事で大けがを負い意識不明の重体で入院。そして桃子さんは喫茶店を経営しながら家事と見舞いで大忙。恭也さんは桃子さんを手伝うが、父親と同じ剣術の修行にのめり込んでいて鬼気迫る物らしく怖くて近づきにくく、その一方美由希さんは剣術の修行のめり込んではいないもののまだ小学生の為、店の手伝いと

不慣れな家事を担当して精一杯。そんな中なのはも手伝おうとしたが、危険な事はさせられないと言ってやんわりと拒絶。その後わがままを言わなくなったが、逆に甘えてくれなくなって悔しいらしい。十日前に士郎さんの意識が戻ったが未だにその状態が（逆に酷くなつて）続いてるらしい。・・・これは、原作通り、なのか？取り敢えず一言。恭也さんをまずどうにかしろよ！

その後、あっつつという間に時間は経ち夕食時になり一時解散、各家は一時帰宅するらしい。あの後、途中で双子が駄々こね始めた、親にからかわれたり、なのはが涙目＋上目使いの精神攻撃を仕掛けたりしてきたが何とか事態を収拾したけどな！桃子さんは愚痴ってストレス発散したのか、はたまた良いアドバイスを貰ったからなのか、帰り際かなりの良い笑顔だった。ただ、ちよくちよく俺の方を見ては頷いたり、士郎さんと話し合って納得した顔だったのはかなり、いや、ひつつじょおおに気になったけどな！

そして俺は今士郎さんの病室に向かっている。もはや使い物にならない原作知識を、先ほどの話し合いの中で思いだした。確か士郎さんは古くから伝わる剣術の使い手だったはず。なら少しでも強くなる為に専門家に稽古をつけてもらえばいい、最低でも基礎と技術ぐらい学べれば後は何とかするしかないと思うが、そればかりは今の話し合い次第だな。っと着いた。

ーコンコン

「どうぞ？」

ーガラッ

許可が下りたのでドアを開け中に入る。

「やあ、当麻君か。どうしたんだい？」

来てみたもののどう話せばいいか悩む・・・取り合えず無難に切り出すか。

「士郎さんは剣術家なんですよね？」

「・・・確かにそうだが、興味があるのかい？それとも・・・強くなりたいのかい？」

「強くなたいです、だから基礎でも良いので鍛えて欲しいと思ったので」

考えを読まれたのかストレートに返されたので、正直に答える。

「何の為に、誰の為に強くなりたいのか聞いても良いかい？」

何の為・誰の為、か・・・。

「今こんなこと言うのは気が引くんですけど・・・士郎さん、士郎さんがもし将来的に事件、或いは事故に巻き込まれる事を知ってしまつたらどうします？またはどう動こうとしますか？」

俺の言葉にわずかに苦笑し・・・。

「そうだな・・・やっぱり周りに被害が及ばない内に解決する為に動くと思うな」

そう答えた。

「そうですか、・・・俺も同じ様な答えなんですけど、最後は皆が笑っていられるようなハッピーエンドが良いです」

そう言つて士郎さんを見る。士郎さんもまた、俺を見ていた。

「だから、力が欲しいです。最悪も最低もぶっ飛ばせるような強さが！さっきの質問「何の為に、誰の為に強くなりたい」って言う質問の答えですけど・・・俺が守りたい日常を、大切な人たちの心も体も守る為に！俺自身の為に強くなりたいんです！」

士郎さんは先ほどから黙っている。

「・・・」

「・・・」

「当麻君」

「はい」

沈黙の後士郎さんが口を開く。

「中々良い覚悟だが、一つ聞きたい君が守りたい日常風景の中に君自身は入っているのかい？」

「もちろんです、だって俺が見たい物を見れなかったら嫌じゃないですか！」

「・・・はっ、はははははははは！」

何やらいきなり笑いだした士郎さん。

「当麻君、まずはお互い怪我を治す事にしよう。君は何時頃退院出来るんだい？」

「医者の話では後四日程で退院できるそうです」

これは、説得できた？

「じゃあそれまでは座学かな、明日のそうだな・・・午後にまた来てくれるかい」

「はい！よろしくお願いします！・・・それじゃあ、おやすみなさい」

そういつて部屋を後にしようとする。

「あっと、当麻君」

「はい？」

「これから大変だと思うけどがんばってね？」

「？よく分かりませんが、がんばります？」

そう答え今度こそ部屋を出る。

「すまない当麻君、これも我が家の平穩の為なんだ」

——士郎さんの呟いた言葉は誰にも聞こえず、虚空に消えていった。

士郎さん
こういう事っすかししょー。

「という訳でお願いね☆」

「お、おねがいし、しします！」

再び部屋に帰ってきてしばらくすると桃子さんとなのは、そして・・・。

「じゃあ美琴ちゃん、がんばりなさい！」

「何をー？」

美鈴さんと美琴の母子ペア＋既に半睡眠状態の双子の計三組。

話を聞いたところ、桃子さんは今日中に恭也さんを説き伏せるの

で、少しでも被害を減らす為に最初は御坂家に預けようとしたらしい。が、美鈴さんが暗躍した結果なぜか俺の所に廻って来た・・・巻き込まれる美由希嬢と、俺の意志南無。

「あの、許可とかは？」

「大丈夫！ちゃんと貰ったから」

そう言って見せてくれた許可書にはカエルのマークが押してあった。

「（またあんたかー！！）・・・はあ、もういいです」

「じゃあお願いね当麻君、美鈴さん。なのは、明日向かいに来るか」

そして足早に桃子さんが去って行った。

「それで美鈴さん、なんで美琴が寝泊まりすることになったんですか？」

「こう言う貴重な体験はね、後に大きな結果を生むのよ」

「本音は？」

「とまりとはずみは寝付きが良いし、美琴は当麻君の傍が一番落ち着くって言うのよ？」

「うぐ」

何処かからかう様な美鈴さんの言葉に、そうなった原因を思い出す。

「そ・れ・に、今日あの人が返ってくるのよ！」

「それが本音かあ！！」

———この人まだ子共を作る気か！！

おまけ

「さて、まだ時間もあるし」

「嫌な予感がするのですが!？」

「カラダを綺麗にし・ま・しょ・う・か♪」

「ひい!!」

「美琴ちゃん、なのはちゃん、ちよつと手伝ってくれな〜い?」

「何するのママ?」「え、え〜と?」

「ちよつと当麻君抑えててくれる?」

「わかった!」「えつと、ご、ごめんね?」

「ふ」

——不幸だああああああああああ!!

「ん?聞いたような気がする」

「士郎さん、じゃあまた明日来るわね」

「ああ」

そして一度だけ二つの影が一つになってまた離れる。

「あ、流れ星」

(将来の魔法) 少女との出会い (後書き)

無印の構想とかは出来てるのに主人公の小学生編も書かないとうまく繋がらないこの矛盾・・・どうして書き始めたんだろ？

ここまでの人物設定（前書き）

作ったのに投稿するのを忘れてた。

ここまでの人物設定

・上条家

上条 当麻（かみじょう　とうま）

本作の筆頭主人公？神様に魂を抜かれ現世を死去、同時にこの世界に転生させられた。前世の名前は不明、本人も思い出す事が出来ない。転生させた神によると『神ならぬ身にて天上の意思となった者』と言われる存在。海鳴市に御坂一家がいることで既に原作知識は当てにならないと判断している。ある程度の恋愛経験はあるしそんなに鈍感でもないので、原作主人公のように無自覚の一級フラグ建築士ではない。

固有スキル

幻想殺し《イマジブレイカー》

言わずと知れた禁書目録の上条当麻の右手。右手首から先にしか効果が発揮しないが、あらゆる幻想（魔力や術式、神の奇跡さえ）を打ち消す事が出来る。その際自身の運さえ打ち消しているので基本不幸体質。その一方二話ではなぜか当麻自身が発した気（？）は打ち消していない。

意味不明の気（？）

何故か幻想殺しに弾かれない気のようなもの。自分自身に纏わせある程度身体能力を上げる事が出来る。現時点では引き出す事も制御も出来ないが、自身の中に存在している感覚は掴めている。

聖人（偽）

筋力・運動能力・反射神経・耐久力、治癒力等が普通よりも高い。ただし肉体がまだ出来あがっていない子供なので長時間の全力運動は体に過負荷がかかるため普段は一般的な基準の中の上で抑えている。

（偽）なので神の子の弱点などないし、本物の聖人程強力ではない。

御神虚刀流

父・刀夜の書齋に（何故か）あった小説・刀語と御神真刀小太刀二刀流の技を掛け合わせ再現した。肉体が追いつかないため数個しか使えない。

神ならぬ身にて天上の意思となった者（STSTEM…■）

正体不明の力。神が主人公を殺し、この世界に転生させる際にそう表した。

上条 刀夜（かみじょう　とうや）

原作通り外資系企業の証券取引対策室に勤めている。最近になってまた出張が増えた。当麻が転生者だと知ったが、それでも自分の息子だと認めている。逆にもう一人ぐらい子供を創っても良いんじゃないかと思っている人。フラグ体質も原作同様。

上条 詩菜（かみじょう　しいな）

外見年齢は20代前半であるとは原作通りで現在専業主婦。当麻の事を自分の子だと認め、精神的に育ってるなら夫が出張の際に自分も付いて行って良いんじゃないかと考え、当麻に（気付かないように）少しずつ家事を教えていつてる人。

・御坂家

御坂 美琴（みさか　みこと）

原作と違い能力開発はしていないがHGS患者という設定の為超能力は健在。能力名も電撃使い（エレクトロマスター）。年齢も違い当麻と同年代。レベル的には5だが能力開発よりも遊ぶ事を優先

していた為、超電磁砲（レールガン）の予定はない。過去に能力暴走事件の際、当麻の近くで安全な場所という認識がある。

固有スキル

電撃使い（エレクトロマスター）

発電能力系の超能力者。まだ超電磁砲（レールガン）は思いついていない。

御坂 美鈴（みさか みすず）

ほぼ原作通り。見た目は着飾れば高校生に見えなくもない。本作設定では聖祥大付属小学校に勤務していた。現在は専業主婦。美琴の事は当麻に任せれば将来的にも大丈夫だろうと思いい双子の方を優先して面倒を見ている。

御坂 旅掛（みさか たびかけ）

世界規模で営業する統合コンサルタントの社員。はずみとまりが生まれて数カ月は国内を中心に活動していたが最近になって海外出張も増えた。社内では意外と上の立場らしい。親バカである。

御坂 とまり（みさか とまり）

本作でのラストオーダー。成長してもアホ毛は無くならない。ミサカネットワークの代わりに双子のはずみと精神的につながっており、離れていても心の中で会話が可能。口調は「〜ってとまりは〜してみる」。

固有スキル

ネットワーク

双子のはずみと精神的に繋がっており、離れていてもお互いの事を感じ取れ、言葉を交わす事の出来る能力。（ガンダムXに出てくる兄弟のようなもの）

御坂 はずみ（みさか はずみ）

本作でのシスターズ。原作と同じようにほとんど感情が乗らないしゃべり方をする。時に毒を吐くようにツツコミをする。ミサカネットワークの代わりに双子のとまりと精神的につながっており、離れていても心の中で会話が可能。口調は「〜とはずみは〜してみます」

固有スキル

ネットワーク

双子のとまりと精神的に繋がっており、離れていてもお互いの事を感じ取れ、言葉を交わす事の出来る能力。（ガンダムのXに出てくる兄弟のようなもの）

・高町家

高町なのは（たかまちなのは）

リリカルなのはの主人公。当麻、美琴とは二歳年下で、はずみや、とまりと同年代。士郎が事故で入院した際、良い子になろうとしたが美琴の超能力暴走事件を切欠に上条家、御坂家と関わり特に寂しい思いをしなかったが。他人（特に親しい当麻と美琴）に対しての依存傾向は治っていない。

固有スキル

???

高町 士郎（たかまち しろう）

高町家の大黒柱。もとボディガードだったが事故が原因で引退、以降は翠屋のマスター兼店長一筋になる。怪我を負って家族（特に桃子とはのは）に心配を掛けた事を悔いており、それ以降は家族の仲を大切にしている。当麻の事は何処まで成長するか楽しみにして

いるのと、将来的にはなのはを貰ってくれないかと考えている人。

高町 桃子（たかまち ももこ）

高町家のお母さん。ザ・グレート・マザー。高町家の最高権力者。士郎の入院で多忙な翠屋と家族の不和で日々を送っていたが、なのはが超能力暴走事故との遭遇を通して上条家、御坂家と出会い解消。それからはなのはとのスキンシップが顕著になる。

高町 恭也（たかまち きょうや）

高町家の長男。現在中学二年。父親の高町士郎と同じ御神真刀小太刀二刀流を学んでいる。父親がボディガードの仕事で事故に遭い入院した際、率先して店の手伝いをしていたが、同じ位に剣術の修行にのめり込み家族の不和の原因だったが、上条・御坂の両家と出会い覚醒した母・桃子によって鎮圧。当麻の事は口に出さないが弟が出来たようで密かに喜んでいる。

高町 美由希（たかまち みゆき）

高町家二女。現在小学六年。生まれは違うが士郎を父と慕い、兄・恭也の事を密かに思っている。父や兄と同じ御神真刀小太刀二刀流の正式な後継者だが、本人にとってはそれほど重要とは思っていない。当麻の事は弟と思っている。

入学と出会い2（前書き）

上「いつの間にかお気に入り登録されてたな」

ぞろ目「読んでくれた方々、お気に入り登録してくださった方々。
ありがとうございます」

入学と出会い2

S i d e ..当麻

よう上条だ、いきなり飛ぶが一年半程経った。何詳しく教えろ？
なら知りたいなら詳しく教えてやる。

鍛錬については、退院するまで士郎さんによる座学やトレーニングルームで型の練習。ちなみに最初の稽古で俺に剣の才はない事が分かった・・・いや何処ぞの無刀の剣士よりは酷くないぞ？ただ士郎さん曰く「普通に握って振る位なら出来るが実践では使えない」らしい・・・だから浪漫を求めた、ズバリ『虚刀流』！何気に士郎さんも刀語を読んだらしく訓練そっちのけでー親父も混ざってー語り合いました。ああ、親にはちゃんと報告したよ？次の日に迎えに来たゲッソリした親父とつやつやな母さんにな！後美琴と双子を迎えに来た御坂夫婦も同様の現象だったさ！その後なのはを引き取りに、士郎さんを除く高町家の面々にも会いました・・・恭也さんの、戦場から帰還した兵士の様な覇氣のない姿が印象的だった。

そして退院してから一番最初にやった事は、親父達に自分が前世の記憶を持った転生者だという事を（原作とか小説だとかはなしで）暴露した。暴露したら盛大に納得された、どうにも行動の節々が不自然だったらしい。その後「自分達の子供という認識は変えるつもりはない」とも言われ不覚にも泣きそうになった・・・ただ「妹と弟どっちが良い」と言われて思わずイラッ☆としたのは秘密だ。

それから大した事件も無く、起きる↓体力づくり（美琴も能力制御訓練）↓昼↓訓練↓なのはと双子のお迎え（幼稚園）↓遊ぶ↓夜寝る というサイクルで生活。そう言えば俺と美琴は行かなかったな幼稚園。などと思いだしながら半年経つと士郎さんも退院し、起きる↓体力づくり（美琴も能力制御訓練）↓昼（翠屋）↓訓練（高町家道場）↓なのはのお迎え↓遊ぶ↓夜寝る の繰り返し。おか

げで虚刀流の技がいくつか、御神流の徹とおしと貫ぬきが出来るようになり、鋼糸と飛針の命中率と制御もだいたい出来るようになった。いや、まだ原作が始まってもないのに日常編で地獄を見るってどういう事よ？おかげで病院に「上条当麻です」って言えばカエル先生がすぐに対応してくれて「おかげで新薬の実験も進んでありがたいね」とか言われました。不幸、だよな？不幸で良いよね！？

そして今日は小学校の入学式！ 白を基調とした制服に袖を通し、鏡の前で確認する。

「当麻行くぞー！」

「当麻ーいくぞー！」

おっと親父と美琴が呼んでるので、気を取り直して行きますか！
新たな戦場、聖祥大付属小学校へ！

あっという間に終わった校長の話し and 入学式。現在位置1ーA組、A組って聞くとなんかカオスなイメージがしないかい？うん、実際にカオスなんだ。分かる範囲だと美琴はまだ良い、金髪に何故かグラサンだったり、青髪だったり、真っ白だったり、明らかに令刀っぽい物持ってる女の子だったり、何故かおしぼりを持っていたり、美琴と同じような機械の腕輪をしてる女の子とか、絶対面倒事を一カ所に纏めただろこのクラス！

——ガラッ

おっと担当の教師が入って来た、けど・・・何故に白衣？

「皆さんはじめまして、このクラスの担任になる木山きやま 春生はるみです」

この人って確か超電磁砲レールガンの人だっけ？

「とりあえず初日で済まないが自己紹介でもしてもらおう。なに、自分の名前と何か言いたい事があれば言って構わないさ、では端の方から順々にやって行こう」

そして始まる自己紹介。

Case 1…金髪にグラサンの少年

「土御門 元春だにゃー。よろしくだぜい！好きな者は妹、嫌いな奴は妹に危害を加える奴だにゃー」
——— どんだけ妹好き？！

Case 2…青髪の少年

「青髪ですわあ。かわいい女の子がいっぱいで感激ですう！」
——— 美琴に手え出したらとりあえず凹る。

Case 3…真っ白な男の子？

「アクセルいちかたⅡ一方」
——— ぬ？ 鈴科すずしな ゆりこ 百合子じゃないの？

Case 4…令刀っぽい物持ってる女の子

「神裂かんざき かおり 火織です。宜しくお願いします」
——— 礼儀正しいのは良いんだけど、その令刀は本物ですか？

Case 5…おしぼりを持ってる女の子

「え、えっと五和です。よ、よろしくお願いします」
——— まともだー。願わくはこのクラスの個性に染まらないように願ってます！

Case 6…腕輪してる女の子

「麦野むぎの しずり 沈利よ、とりあえず用も無いのに話しかける場合は浜面を通して頂戴」

——— 我が儘女王様ですね、頑張れ浜面！

Case 7…その取り巻きもしくは下僕っぽい男の子

「浜面はまづら しあげ 仕上だ。あー麦野が言ってた事は気にしないで仲良くしてやってくれ」

——— 居たのか！？それに保護者？！

Case 8… 美琴

「御坂 美琴です！宜しく願いします！好きな者は当麻とゲコ太です！」

——元気があって宜しいんだが、俺とゲコ太を同列に扱うのは止めてくれないか？

Case 俺

「上条 当麻です。宜しくおねg（ガスンッ！）ったあゝ！なんでサッカーボールが？！ここ確か3階だよな！？」

——ふ、不幸だなんて思っていないからな！

自己紹介の後は簡単な授業の説明、教科書の配布、校内見学、S HRで終わる。……はずだった、結果的に言えば校内見学が異常すぎた。

Case 1… 教職員室

「此処が普段先生たちが居る場所だ、何か問題ごとがあればここに来ると良い」

それよりも俺は、いや俺たちは部屋の中が非常に気になった。何故なら……

『うお！九●！何度言ったら分かるんだ！机の下に潜り込むなど言ってるだろう！』

『えへへゝもう、先生ったら！我慢しなくても良いんだよ？』

『流石童貞ですね。人目も憚らず生徒に、しかも小学生に手を出すなんて……変態』

『おわっ！●！何時から、と言うか何処から出てきた？！』

——こんな風紀で大丈夫か？

Case 2… 保健室

「ここは保健室だ、具合が悪くなったり、怪我をした時はここに来る事になる。場所ぐらいいは覚えて置きたまえ」

それより中の状況が深刻そうです！先生！

『先生、オレ、妹とどう向き合っているか分からないんです』

『一体どうしたのかしら？』

『オレ・・妹に将来結婚しようって言っちゃったんです！』

『そ、そう・・それは、大変、ね』

「芳川の奴いたのか」

——土御門ー！出番だー！！

Case 3…音楽室

「ここは音楽室、音楽の授業などではここに来ることになる」

『私たちの、歌を！聴けええええ！！』

『響かせて！世界の、果てまでー！！』

「では、次に行くぞ」

——ちよっ！最後まで聴かせて！

Case 4…理科室

「ここは理科室、普段は教室での授業だが実験の際にはここに来る事になる」

『進●、先ほどの一手は悪手だぞ！』

『だからさー●谷、俺の場合そこを利用するんだよ！』

『それが通じるのは初見の人だけだ！』

『なんだとー！』

——理科関係ないっす

Case 5…図書室

「ここが図書室、本を借りたり調べ物をする時に利用すると良い。ちなみに私は本を買って読む性質だ」

『ゆ、裕●さん、あの、今度の休みなんです、けど、その・・・』

『春●？』

『あ、あああ秋葉原にいい行きませんか！？』

「さて次に行くぞ」

——へ、返答は如何に！？

Case 6…体育館

「最後に体育館だ。体育の授業の際はここが校庭になる」

『きいさあまらああ！このぐらいのレシーブウ、受け止めなくて全国に行けると思っただのか！貴様らは何の為にここに来た！！』

『』『』『バレーをしに来ました！！』『』『』『』

『ぬうあーらば！我らの競技を何と捉える！！』

『』『』『熱き血潮滾るバレーボールです！！』『』『』『』

『ならば、バレーを始めるぞお！！打って、叩いて、弾いて、拾いあげるバレーを始めるぞお！！』

『』『』『Y A — — H A — — ！！』『』『』『』

——なあにこれ

カオスな校内見学が終わり。SHR後解散、そしてすぐさま美琴が話しかけてきた。

「当麻、今日って翠屋で入学パーティーやるんだよね？何時だった？」

「営業終了後の一時間後だから七時だな」

「それまで何してよっか？」

「鬼ごっこなんてどうよ？」

「二人で？」

「・・・」

「・・・」

「夜まで・・・二人っきり、だな」

「きゃ、あなた（棒読み）」

「なあ、ちょっといいか？」

このままだららない漫才に突入する寸前に、声をかけられた。

「・・・誰だっけ？」

「浜面だ。浜面仕上」

そこに立っていたのは浜面仕上だった。その後ろには麦野沈利がいる。

「ん？何か用？生憎と・・・告白されても、その気持ちに答える事が出来ないんだ」

「当麻は渡さない！」

「誰がいるか！！」

ちよつとしたギャグにしっかりと反応出来る浜面に俺と美琴の目が見開く。

「み、美琴！コイツ、数少ないツツコミキャラだ！」

「そ、そうだね！中々いい鋭さとツツコミ力を持ってるわね！」

「お前らってどんな環境で育ったんだ？」

「聞きたい？」

「・・・遠慮する。って、そうじゃねえ！なあお前さ、かなり前の事なんだが、公園で電撃事件に遭遇しなかったか？」

その言葉に美琴が反応し、麦野が視線を向ける。そして俺も少し警戒する。

「一年と半年ほど前に起こったやつか？確かに居たが、それがどうした？」

「そう！それだ！その件の事なんだが・・・」

その後に続く言葉と行動に唾然する。何故なら・・・。

「あん時は助かった。それと、ありがとうな」

感謝の言葉と頭を下げられた。麦野は何故か明後日の方向を向いている・・・顔を赤くしながら。

「はい？」

意味が分からず首を傾げる。美琴を見ると同様に首を傾げている。「えっと、あの時ブランコで会ったんだが・・・覚えてないか？」

そう言われ、あの時の事を思い出してみる。

「・・・あっ」

「思い出したか！」

「さっぱり」

「ガクッ」

浜面と麦野が足を挫いた様に前につんのめる。

「む、よく訓練された芸人だ」

「おおう！」

俺と美琴の称賛？に勢いよく喰いついてくる。

「お前な！あれだけの事件で覚えてないって事ないだろう！」

「冗談だって。場の空気を和ませるジョークだよ」

「浜面この程度で怒ってちゃ私たちにはついて来れないよー？」

「あんた達どんな環境で育ってんのよ？」

その言葉に女子グループと男子グループに分かれる。

話を聞いたところ。麦野とは同じ孤児院に住んでいて、あの事件に遭遇する前日に車に轢かれそうな所を麦野が能力を使って助けてくれたが、その後に差し伸べられた手を拒絶してしまい、絶縁状態になってしまう。しかし、その翌日に例の事件に遭遇し、その時俺が言った事（あんま覚えてねえ）や孤児院や知り合いの子に言われた事で考えを改め、事件後麦野との話し合いの為特攻、怪我を負いながらも和解した（その後怪我の治療の為、俺が入院していた病院に2日ほど入院したらしい）。

はつきり言おう。キャーハマツラクンカッコイイー。

「んじゃあ、あの時庇った子とは会ったのか？」

「いや、あの時家族の人にお礼を言われたっきりだな」

その言葉に心の中で目を光らせる。

「この後って何か用事とかある？」

「いや、家に帰って昼飯ぐらいだが」

「なら一緒に食わねえ？」

「それも良いかな、ほら麦野ってあの性格だろ？」

「あの女王様体質？」

「そう、それ。本当は良い奴なんだけど、そのせいであんまり友達が出来ないと思ってたんだよ」

なんとなく分かるので頷いておいた。

「待ち合わせは何処にする？」

「まだオルソラ姉さんと、ルチ姐が何処かに居る筈だから言っとけばいいと思う。そっちは？」

「俺たちは元々そこに行くつもりだったから大丈夫だ。まあ一応言っておくけど」

何か聞き捨てならない名前が出てきたが無視する。

「じゃあ校門か？」

「そうだな・・・おい！美、とおく？」

合流場所を決め美琴を呼ぼうとしたが、美琴がいる場所は大変なカオスになっていた。

「いつもは真面目だし、気がきくし、そ、それにアレを気にせず接してくれたし・・・」

「それでね当麻はね、恭也さんとかと戦ってる時が一番カッコイイの！」

「最後の部分だけは超納得します。が、所詮浜面はヘタレの超浜面です」

「うん、それで？みことは何処が一番いいと思ったの？」

ふ、増えてる！？何か二人程増えてる！

「あれ？理后に最愛じゃねえか、何でここに？って言うか何時の間に？」

「し、知ってるのか雷dじゃなかった、浜面！」

「あ、ああ俺と同じ孤児院育ちの絹旗最愛と、近所に住んでる滝壺理后だ。どっちも幼馴染ってやつだな。所でなんて言おうとしたんだ？」

その間も女性陣のテンションが上がっていく。俺と浜面の目と目

が合う

——おいお前、慣れてるだろ？行けよ

——あそこに突っ込んで逝けと？逝きたくねー！

——じゃあどうすんだよ？話が進まねーぞ？

——じゃあお前逝けよ、電撃の中にも突っ込んで行っただろ！

——あの時とは状況も数も違いすぎる！

——じゃ、じゃあ話しやすそうな美琴ペアに話しかけようぜ

——む、それなら・・・大丈夫、かな？

——グイッ

な、何か袖が引っ張られてる！？

「なんでしよう？美琴さん？」

「当麻なんか変だよ？」

変な人扱いされた！って！よく見たら浜面の方には麦野達が詰め寄ってる？！

——タスケテ、トウマ

——じ、事情を聞け！状況を把握するんだ！

——や、やってみる！

「で、どうしたんだ？美琴」

「うん、あのね。沈利たちも一緒に食べていい？」

美琴の攻撃 縫るような上目使い。

当麻にクリティカル ダメージ。当麻は じゅうしょうだ。

あの後一旦別行動にして双方の保護者に連絡した後、校門前に集合っと言う事になった・・・が、別れる必要はなかった。浜面たちの保護者オルソラ・アクイナスは既に親父達と和やかに談話していたからだ。他にもシスター・ルチア、アンジェレネ、アニューゼもいた、ルチアさんはオルソラさんの経営する孤児院の補佐兼幾つかのマンションの管理、アンジェレネは俺達の4歳下で最近になって二本足で立てるようになったらしい、アニューゼは現在聖祥大付属

女子中に通い、将来的に孤児院の経営を手伝うらしい。ちなみに、オルソラさんの話し方は例え世界や年齢が違くとも健在だった。

「そしてやって来ました。喫茶翠屋！」

「当麻、誰と話してんの？」

「さあ？誰とだろうな」

ツッコミが欲しい！

ーカランカラン

「いらっしやいませ。お、当麻君に美琴ちゃんか、いらっしやい」

「士郎さん、テーブル空いてます？」

「ん？・・・ああ、もう友達が出来たのかい？なのは達もそろそろ来るから、お願い出来るかい？」

「もとよりそのつもりです」

士郎さんに案内され窓側の席に着く。

「なあさっきの人知り合いなのか？」

「あの人は高町士郎さん、喫茶翠屋のマスターさん」

「なんでそんな人と知り合いなんだ？」

「そんなことは超どうでもいいです！ここはシュークリームが超おいしい事で超有名な翠屋ですか！」

「きぬはた、それホント？」

「うん！桃子さんのシュークリームはおいしいんだよ！」

「マジ！オルソラとか、アニニューゼがたまに買ってくるやつ！？」
女性陣の目が光る。女は甘い物に目がないって本当だなー。

「あ、桃子さん。注文良いですか？」

「あらもう決まったの？」

たまたま通りかかった桃子さんに声を掛け、注文する。

「オムライスとサンドウィッチ、甘めのカフェ・オレ」

「私オムライス！」

「ミートスパゲッティで」

「私は、たらこスパ」

「昼のサンドウィッチセット「きぬはた」二人分で超お願いします」

「あと」

「「「シュークリーム十個!!」」「」」

「あ、浜面のツケでお願いします」

「おいしい!」

「冗談だって・・・全部親父のツケでお願いします」

「容赦ないな、お前!」

いやゝツツコミ役が増えるとボケに回れて楽だなゝ。

その後なのはと浜面の再会だったり、麦野の愚痴が始まったり、夜には『祝☆入学祝THE ENKA I』があったり、猫が二匹引っ付いて来たり!!あの親共何時か絶対泣かす!

おまけ とある喫茶店のナイトフィーバー

「当麻くゝん!見て見てゝ!!!」

「ん?ブフォ!!!――っがは!げふ!」

夜の入学祝いの席で美鈴さんに呼ばれ、そっちに目を向けると・・・

・リトルネコミミメイドが二匹いた。

片やフリフリの黒メイド服を纏い、何時ものツインテールを解いてストレートに下ろし栗色のネコミミ。もう一方もフリフリのメイド服だが学校の白い服をベースとしており、頭の上には茶色のネコミミを装備していた。そして二人してポーズを決める。

「「二人はネコ〇ユア!」」

「カットオー!それは何かヤバいですよ、お二人さん!!」

「あはははー!よかったわねゝ二人ともゝ、当麻君のハートにドストライクだって!」

「そっちじゃない!!今の決めポーズですよ!?!」「とゝまゝ」ん?」

「あーん!」

ーピシッ!

美琴の方に振り返ってみれば、夕食のおにぎりを持って「あーん」

攻撃を仕掛けていた。後ろを見れば母親ズと美由希さんがおかずが盛ってあるお皿をなのはに渡していた。親父ズの方を見れば全員酒を飲みながらニヤニヤしてやがった。って！恭也さんが絡まれて酒を飲まされている！？まだ未成年でしょその人！？双子はデザートに食いつてる・・・あそこは平和そくだな。

「当麻、あゝん！」

「と、とうま君！あ、あゝん」

痺れを切らした美琴がさらに迫り、援護攻撃でなのはまで加わりやがった！

「もしかして、お腹一杯になるまで続きますでしょうか？」

その質問に大人全員が首を縦に振る。ってカメラ持ちだすな！！

「ふ、不幸dもが！」

口を開いた瞬間、二人に食い物を入れられる。

——不幸だあ——！！！！！！

入学と出会い2（後書き）

ところでこの後のことなのですが。

本作オリジナル最強の超能力者VS最弱の一般人（？）1Round

もしくは

最凶のA組1班＋a VS テロリストin遠足編
のどちらを見てみたいですか？

外伝・一人のヒーロー（前書き）

外伝です。時系列は前話のおまけの前の話？

外伝・一人のヒーロー

SIDE…浜面

俺は麦野の隣で昼食を食べながら、対側で同じ様に飯を食っている当麻を見る。はつきり言ってこいつは自分がどんなに凄い事をやったのか気付いていない、まるでそういった事が日常茶飯事だと言うように、麦野と同じ超能力者の子の隣に座っている。

「（でも、確かに超能力が使えるなんて大した壁じゃなかった）」

そう思いながら、昼メシを喰いながら未だにオルソラ姉さんに対しての愚痴を言い続けてる麦野を見る。そして反対側に座っている滝壺と絹旗を見る。

「（今ならお前の言ったことが分かるぜ、理后^{りこう}、最愛^{さいあい}）」

俺達が住んでいる孤児院は海鳴市の海側に近い場所に立っていた。近隣との交流は良好で子育てや相談事、親御さん達の交流の場所としても知られている場所だった。そんな場所に俺は預けられ、麦野は捨てられていた所を施設長のオルソラさんに拾われたそうだ。けれど俺たちはそんなことを気にせずに――（施設長自身の性格がアレなので気にすることも無かった）成長し・・・事件は起こった。

その日はまだ夏の暑さが続く日だった。事の発端は夕方、麦野と俺と背中では寝ている滝壺（たきつぼ）と共に帰り道を歩いていた。そして十字路の道路を渡ろうとした時にそれは起きた。渡っている途中にパトカーに追いかけられていた車が急に交差点の真ん中で右にドリフトを決めながら曲がり、車の進行方向にたまたま俺達がいるた。その瞬間俺は死を幻視し滝壺ごと轢かれると思った。体は動かず、瞬きする事も忘れたように硬直し・・・その光景を見た。

一瞬にして麦野が前に出た。

――右手が薄く光っていた。

ブレーキも踏まず、車は真っ直ぐに走ってくる。

——右手から閃光が奔る。

光線から逃げようとハンドルを右に切ろうとするが、既に遅く。

—ズガアアアアアアアアアン——！！

光が車に当たり、当たった部分を溶かしていく。

そして浜面たちの左側を通り過ぎ、ガードレールに当たり止まる。運転していた人は運よく頭をぶつかっただけで車から降りたところを警察に捕まった。が、浜面には目の前で見た光景に恐怖を覚えた。それは死ぬ事を幻視させた車なのか、それとも車を簡単に溶かす事の出来た麦野にかも分からなかった。

「浜面？」

「むぎ、の？」

「大丈夫？」

そういつて差し伸べられた手を。

「ひっ！」

—パシンッ！

拒絶した。

「・・・そっか。先、帰るね」

「あ・・・」

麦野が立ち去る間際、顔を見る・・・ソレは悲しみでも、泣きそうな顔でも、いつもの笑っている顔でもなく。

——何の変化もない無表情だった

その後は病院で軽い検査の後、滝壺と俺は家に帰えしてもらった。そして、夕食の時に麦野の姿はなかった、オルソラ姉さんの話では体調が良くないとのこと・・・たぶん嘘だ。おそらく俺が居るからだろう。そして俺も夕食を残した。

その晩、俺は寝る事が出来ずに庭の縁側に座って星を眺めていた。
—ギシッ

「ん？」

不意に誰かが傍に寄って来た音が聞こえた。

「はまづら、超お悩みですね」

「最愛（さいあい）？もう寝る時間だぞ？」

声をかけられ振り向いた先には、同じ孤児院に住んでいる絹旗きぬはた最愛さいあいだった。

「超気になってるのは麦野さんの事ですね？」

絹旗はそのまま俺の隣に座る

ービクッ

最愛の言葉に一瞬だが肩が揺れる。

「気づいてたのか？」

「麦野さんが帰ってきてから、一度も部屋から超出しようとしなないの
で」

「そういえば同室だったな」

「で？超何があったんですか？」

「・・・なあお前は麦野が、その、他の奴らと違うって思った時っ
てあるか？」

悩んだ末、浜面は口を開く。

「・・・それは麦野さんが超超能力者か？ってことですか」

「超、能力？・・・そっか、超能力か」

「そうですね。浜面も超超能力がある事を知ってしまったんですね」

「お前は知ってたのか？」

俺の問いかけに絹旗は素足のまま庭先に立つ。

「さ、最愛「浜面」 最愛？」

「私たち超能力者はですね、生まれた時から自分が持つてる力がど
ういうものか、誰よりも超知ってるんです」

「・・・」

突然の告白に俺はただ黙るしかなかった。

「その力に超疑問も持つことなく、超曖昧な知識でも簡単に扱えて、
超怖がられて、そして捨てられる」

先ほど絹旗が言った『私たち』と言った。それはつまり自分も超
能力者で、今話している事は最愛が実際に体験した事を話している

のだと感じ、言葉の中に込められた感情を知ることができなかった。

「浜面」

「なんだよ」

「超能力者ってなんでしようね？」
私たち

その問いに俺は答える事が出来なかった。

「浜面」

「・・・今度は何だ？」

「超眠いのです。もう超寝ます」

「あ、ああ、おやすみ」

その言葉を聞きながら最愛は足裏を叩きながら縁側に上がり、そのまま二階の寝室に歩いて行った。

「結局のところ何しに来たんだ？」

そう呟きながら夜は更けていく。

朝起きて朝食を食べる為に下に降り、食堂に入り麦野を捜す・・・が居ない。それどころか絹旗まで居なかった。

「あ、ルチ姐。麦野と最愛は？」

朝食の準備をしていたルチ姐に二人の事を聞いてみる。

「二人なら病院に行きました」

「病院？」

「ええ、浜面仕上。麦野の事は・・・」

「昨日の夜に最愛から聞かされました。それに「超能力者って何だ」って聞かれました」

「そうですか・・・夜遅くまで起きていた事は、今回は目を瞑ります。私から言える事は、その問いに関しては存分に悩み答えを出さない」

「はい」

「ただし、麦野沈利の件に関しては別です」

「分かってる、つもりです」

そう答えると、ルチ姐は俺の目を見つめてくる。

「逃避してる訳じゃ無いようですね。かと言って答えも出ず迷ってる。そんなところでしよう」

「・・・はい」

「・・・冷めてしまいます。朝食にします、他の子を起こして来て下さい」

ルチ姐に言われるままに、幼年組を起しに行く。

朝食の後、俺はまた縁側に座りながら庭で遊んでるチビ達を見ながら、麦野の事を考えていた。

「超能力者、か。考えたことも無かったな」

「はまづら・・・」

独り言を言った時に、何時の間にか目の前にいた近所の滝壺^{たきつぼ}理^り后^{こう}に声をかけられた。

「理后か、何時来たんだよ？」

「さっき。それよりも」

そう言って滝壺は縁側に座り、俺の方を見る。

「むぎのとケンカしたの？」

「いや、ケンカじゃ無くてな？何て言ったらいいか・・・」

「むぎの泣いてた」

言われた意味がわからなかった。

「泣いてた？麦野が？」

「うん、泣いてないけどココロの欠片が泣いてた」

「は？欠けrって！？お前・・・その目」

滝壺の目を見た瞬間その目に見とれた。何時もならその目は髪の色と同じ黒なのだが、今の滝壺は片側だけが吸い込まれるような蒼い色をしていた。

「なんかね、偶にあるの、人には見えないものが見えたり、強いココロの欠片が近くにあると見えるの」

「そ、そうか」

たぶんこれも超能力の一種なのかと思った。それでも滝壺の話は

続いていく。

「さっきね？むぎのの部屋に入ったんだ」

「麦野の？」

「そしたらね、一瞬見えたの、むぎのがね怖い、助けてって言いながら泣いてたのが」

「そう、か」

「あとね、嫌わないでって言った。ねえはまづら・・・」

「はまづらは、むぎのの事嫌い？」

「・・・」

その言葉を聞き、俺は無言で立ちあがる。

「はまづら？」

「理后・・・ありがとな」

「？」

「あと、ちょっと出かけてくる」

「??？いってらっしゃい？」

その言葉を聞き、家から出る。いつも麦野に遊びに連れ出される公園に。

公園について誰も座ってないベンチに座り日常光景を思い浮かべる。いつもの「（気がついた時には一緒にいて、他の孤児院の奴らや、一緒に遊びに来た子供と一緒に遊んでた。その時の麦野は笑ってた）」

同時に、昨日の事件を思い出す。

——手を差し伸べた時は心配そうにしていた。

その後を思い出す。

——拒絶した時、何の感情も浮かんでなかった。

その夜、最愛との話を思い出す。

——超能力者私たちって何なんでしょうね。

さっき理后の会話を思い出す。

——はまづらは、むぎのの事嫌い？

「あゝ、どうすりゃいんだよ」

その時、目の前を左から通り過ぎた子がこける。

——バチチチチチチチチチチチチチチチチチ！

——その瞬間、その子を中心に電撃が発生する。

「へ？って、逃げなきゃやばい！」

逃げようとした時に、それは視界に映った。まだ電撃が届いていないが、それなりに近い場所にあるブランコ。そこに孤児院にいる幼小組みぐらいの年齢の女の子が動けずにいた。

——特に考えていなかった。

自然と体が動き女の子の近くまで走り、とっさの判断でブランコの中心に女の子を庇うように伏せる。

「な、何とか間に合ったか？」

周りを見ると既に人はいなく、電撃はブランコに当たって自分達に襲いかかって来る事はなさそうだった。

「取り敢えず大丈夫だけど、動きが取れない」

ふと腕の中にいる女の子を見る。思わぬ事態に対して困惑と驚愕が混じった顔をしている。

「（この子も俺と同じ様に超能力に恐怖を覚えるのかな？）」

その時、反対の出入り口から声が上がる。

「なんだ？」

女の子も反応しそちらを見る。

——そいつは真っ直ぐに走って来た

——同年齢ぐらいの男の子が、押し寄せてくる電撃を右手で払い目の前にやってくる

そいつは目の前に来てこう言った。

「よう、大丈夫か？」

そいつは電撃に囲まれてる中で平然としゃべってきて次の行動に驚愕した。そいつはあろうことか、未だに電撃を放ち続けている女

の子に向いて、今にも駆け出すような行動をとった。

「そこにいれば安全だから、少しの間我慢してろ」

そんな今すぐにでも女の子に向かって走っていきそうな姿に羨望を抱き・・・質問した。

「な、なあ」

「ん？」

「こ、怖くないのか？」

その質問に対し、そいつは・・・。

「そりゃ怖いに決まってる。けどそれ以上に、今あいつの手を取らないともっとダメな気がするから」

その真っ直ぐな答えに対し、つい言ってしまった。

「ダメなときは？」

そいつはそんな問いに対して・・・。

「知らね！病院送りになってでも傍に居続けばいいんじゃないね？」

実に愉快的な返答を返してきた。

「この電撃は怖い。・・・けど、あいつは怖くない！だから！ただ真っ直ぐに、あいつに向かって行くだけだ！」

その言葉は自分自身に言い聞かせている言葉だったが、その言葉に俺は麦野の笑ってる顔を思い浮かべた。

「おい、大丈夫か？」

本当に超能力をどうにかしやがったズタボロな奴に声をかける。

「ん？さっきぶり、もう大丈夫なのか？」

そんなお気楽な声が返ってくる。

「超能力は初めてじゃない、ただ動きが取れなくなってただけだ」
気づけばそんな言い訳じみた言葉が出てくる。

「もう一人は？」

自分の怪我など気にもとめず、他人の心配ばかりする奴に簡潔に答えてやった。

「そっか、じゃあ俺寝るわ。流石に限かい、だ・・・zzz」

「ホントに寝たよ。それにしても、『傍に居続ける』ね・・・確かに避けてばっかじゃ伝わらないよな」

さっきまでの光景を見て自然と、虚勢でも良いから意地を張りたくて声に出す。

「やってやるさ、超能力者なんざ楽勝だ！」

ぐっすり眠ってるやつの親らしき人が来て、近くまで来ていた救急車に運ばれる。

その後、真っ直ぐに家に帰り麦野の事を聞くと、既に帰って来てまた部屋に籠ってるらしい。そしてすぐに麦野の部屋の前に来てドアを叩く。

「ガチャッ

「あっ・・・」

出てきたのは最愛だった。俺が来た事を知るとそのまま出てきて俺の前に立つ。

「麦野に超御用ですか？」

「ああ」

「その前に超質問良いですか？」

「ん？なんだよ」

「昨日私は超言いました『超能力者ってなんでしょね？』と、その超答えはありますか？」

「あゝその答えなんだけどな・・・」

頭の裏を掻きながら自分なりの答えを出す。

「さっぱり分からなかった」

目の前にいる最愛の力が抜けたように感じる。

「だからその質問の答えはまた今度って事にしてくれないか？俺はただ、麦野に酷いことしちゃった。だから謝りに来たんだ。罵倒も暴力も覚悟の上で、だ」

「はぁ、超呆れました。私は理后を連れて下に超降ります、後は超お好きにどうぞ」

そう言って最愛は一度中に入り、滝壺と共に部屋から出ていく。

「はまづら」

「なんだ理后？」

「私はそんなはまづらを応援するよ」

「おう！」

「超がんばってください」

そう言って二人は降りていく。

「よし」

ーコンコン

「麦野く入るぞ」

ーガチャッ

「しつれいしまー（ゴンッ）っだぁ!!」

入ったとたん足に何かが当たった。よく見れば小さめの目覚まし時計。

「くくくっ！ず、随分な挨拶だな麦野?!」

「出てけ」

中に入ると一番奥に色々な物に囲まれている麦野を見つける

「そっち行くぞ」

「来んな」

動いた瞬間、近くの物を投げつけられる。

——次々に固い物から当たってもたいして痛くない物が投げられてくる。

——ツウー

「（いてえ）」

額か瞼辺りが切れたのか血が頬を伝ってくる。それでも前に進む。投げる物が無くなるのと、麦野の前に来るのはほぼ同時だった。――ぼすっ

今度は胸を殴られる。が、麦野の手はそのまま動こうとしない。

「なあ麦野」

「なに」

「ごめん」

「・・・」

「いまさら謝っても仕方ないんだと思う、けど俺は謝りたい」

「・・・」

「俺は何度も謝るし麦野は何回でも殴ればいい、それで麦野の気が晴れるなら良いさ」

未だに胸の位置で止まってる拳を手取る。

「なんなら超能力とやらで八つ当たりすればいいさ、それと助けてくれてありがとな」

「っ！」

麦野の顔を見る。

「だからさ」

その顔は。

「そんな顔しないでよ、いつものように笑えって」
必死に無表情を装いながら泣いていた。

「ひうつ、うあ、っ――――――！！」

「ごめんな、拒絶してごめん、離れてごめん」

泣き崩れた麦野を抱きしめながら俺は謝り続ける。

Side out

おまけ

その後泣き止んで正気に戻った麦野は、血で濡れた俺の顔を見て the 混乱。気を利かせていた年長組みも俺の惨事を見て軽いパニック。マイペースなオルソラ姉さんの一令のもと、体の痛みから気

を失った俺はそのまま病院に搬送、その流れでそのまま入院する
ことになった。

外伝・一人のヒーロー（後書き）

自分で書いという、この浜面に燃えた／（。口／）（／口。／

三つ巴の戦い―だから俺は巻き込ま（ry

――何時ものように少年は一人で学校に行く
――何時ものようにつまらない授業を受け
――何時ものように少年は一人で昼を食べ
――何時ものように少年は一人の放課後を迎え
・・・そして少年は、何時もと違う・・・一人じゃない日常にな
った

Side..アクセル

その日も何時ものように俺を引き取った奴に起され、一人の食事を摂って、何時ものように戸締りをして家を出た。

何時ものように一人で登校して、誰にも挨拶をせずまた誰も挨拶をしてこなかった。何時ものように授業を受け、一人で昼を食い、放課後になる。・・・そして少年は気まぐれに校舎をフラついた。

そして体育館と校舎を繋ぐ渡り廊下を通り過ぎる時に、ソレをみた。
「（イジメかナンパってエやつか?・・・しかし、古典的ってやつだなアあれ）」

丁度校舎から見えない場所、体育館の横で四、五人で一人の少女に絡んでいた。と、その時、生徒の一人が自分に気付き、全員が自分に近いってくる。

「お前見たな?」

「おい、どうするよ?」

「・・・とりあえず、ボコツとくか」

「あんま派手にやるなよ?高町先輩が怖えーし」

「大丈夫だって!こいつ細せーし、言うこと聞かせるぐらいに留めておくから」

どうやら全員上級生らしく俺よりも背丈が高かった・・・が、程

度俺には何の脅威にもならなかった。

「（後で芳川の奴がうるせーし、骨エ折ンのはやめとくかア）」

何時もは周りを傷付けないように、セーブしていた力を解放する。

「はぁ・・・さっさと来いよ三下以下がア」

「「「――！！」」」

Side..当麻

今日はビックニュースだ。何と何時もは遅刻寸前に登校するのだが、今日は普通に登校出来たのだ！クラスメイト全員が驚愕していた。土御門や青髪、浜面は何やら頻繁に窓の外を見たり、クラスメイトの奴らに身の回りに変な事が起きてないか聞きまわってたがな！失敬な奴らだ！！俺だって何時も・・・いやちよくちよく・・・ち、遅刻寸前に登校する訳ないじゃないか！？

そんなこんなで、あっという間に放課後。

「おかしい、未だに不幸な事が起こってない？・・・いや！何かの前触れ！？そうだよな！皆！？」

まだ残っていたクラスメイトに同意を求めると一斉に目を反らされたり、隣に居る人と急に話し始めたりした。・・・え？これはどう受け止めればいいの？

「当麻、当麻」

「美琴？」

「私、今日病院に行く日だから」

「ああ、確かその腕輪の改良型が出来たんだっけ？」
能力制御装置

「うん！今度のは耳に着けるタイプなんだって！」

「ピアス、な？」

「そう！それ！じゃあ行くね！」

「おう、気をつけてな」

そう言った途端に美琴は急ぎ足で教室を出て行った。

「当麻」

「ん？浜面？何だ、麦のんに連れられてなかったのか」

「そのあだ名、本人の前では言うなよ？」

「面白いのに」

はまづら が こうべを たれた。

「もういいや、じゃあ俺、麦野のどこに行くから」

「結局行くのか」

「行かなきゃ原子ビームくらっちまうしな。また明日」

「おう、また明日」

浜面も帰った。

「・・・なんか暇だな・・・一人校内見学でもするかな、今なら美由希さんもいるだろうし」

そして俺も教室を出た。自分が不幸体質ハードラックだという事をすっかり忘れながら。

校内見学は数分で飽きた。何故なら大して珍しい物がなかったからだった。

「そりゃそうか、なんたって二度目だしな。・・・あんま目立つのも嫌だし、勉強もそこそこ出来る程度に抑えるかな」

と、体育館に行く渡り廊下に来た時、前方から何か飛んできた。

「のわっ!？」

飛んできた物をとっさの判断で受け止め、確認する。

「こいつ、上級生か？」

飛んで来た男子生徒を下ろし、飛んできた方向を見ると・・・白い悪魔がいた。周りには二、三人倒れており、恐らく最後の一人であろう男子生徒に迫っていた。・・・取り敢えず声を掛けてみる。

「おい、その白いの」

「ああア？」

俺に気付いたのか、男子生徒に迫るのを止め俺の方を見る。

「まアだ居やがったかア？」

「いや、それよりもさつき男子生徒が飛んで来たんだが、やったのお前か？」

「俺だがアどうしたア？」

「頭から落ちたら大変だろうが!？」

「・・・その可能性は考えてなかったなア」

その瞬間、そいつの隙を衝いて、迫られていた男子生徒が俺に駆け寄って来た。

「た、たすけてくれ!!」

「あ、こら、引っ付くな! お仲間だと思われるだろ!? ―っ!」

その時背筋に悪寒が走り、男子生徒を横に突き飛ばし、俺も反対側に避ける。

―ベコン!!

後ろから何かが凹んだ音が聞こえ、後ろを振り返る。・・・渡り廊下の柱が曲がっていました。

「ヘェーお前エなかなか楽しそうだなア」

「まてまてまて! 何か知らんが俺は無関係ですよ!?! ほら! そっちの方もって! 気絶してるー!?!」

先ほど横に突き飛ばした男子生徒は、体育館の壁にぶつかって気絶していた。

「(あれ? アレって俺のせい?)」

「さアゝて」

―ビクッ!

「無関係かどォーか分かんなくなっちゃったなア?」

「ソソソソソウデスネ」

無駄だと思いが一応聞いておく。

「・・・平和的解決は?」

「却下だア」

「・・・はあ、不幸だ」

初手は白い少年―アクセル―が仕掛けた。初速から一気に加速し

当麻に迫る。逆に当麻はそのスピードに動揺し、大きく避け後退する。アクセルもその後を追ひ、スピードを落とさずに追撃する。

――避ける

――追う

――避ける

「オラオラア！どオしたどオーしたア！！避けてばっかじゃア勝てねエぞオ？！」

「くっ！ テメエ！教室じゃ！黙りっ子ちゃんの！癖！して！よくしゃべるじゃ！ねえか！」

――追う

――避ける

次第に拓けた場所に辿り着く。

――ズサアアアア

「ハア、ここ、ハア、校庭か？ハア」

「ハッ！よく、避けるじゃ、ねエか、サルかお前？」

「誰がモンキーパンチだ！・・・で、やっぱまだやるの？」

「そオーだな、お前がさっきの奴とは関係ねえって事は分かったがア」

「分かったが？」

「どオでもよくなった。正直言って能力制御の訓練はよりかア、テメエと戦^{やりあ}ってた方が楽しそうだア！」

思わず天を仰ぎ言ってしまった。

「――不幸だああああ！！！！」

Side・・・？？？

「ん？」

「どうしたんつつちー？」

「ほらあそこ、グラウンドだにゃー」

「あ、上やんやね。それに、もう一人はうちのクラスの・・・確か

アクセラ？」

「アクセルだにゃー。って、ねーちん何処行くんだぜい？」

「クラス委員長としては見過ごせません。それと何度言ったらそれを止めてくれるのですか！」

「行っちゃったにゃー」

「いきましたねえー」

「はわわわわ」

「取り敢えず」

「「面白そうだし、いきますかい（いくかにゃー）！」」

Side Out

Side…当麻

「さアて犯り^やあおオゼエ！準備ぐれエはさせてやる！」

そう言いアクセルは腕を少しだけ開いた状態にした。

「ハァー不幸だ。ま、逃げられないなら戦うしかねえよな」

そう言って俺は構えなかった。

「ああア？ヤル気ねえエのか？だっ「良いから来いよ真っ白いのっ！？」」

「ただし、終わる頃にはお前は八つ裂き^{地に這いつくば}になってるだろうがな」

「良いィなアオマエ！なんて名前だア？」

そう言いいった瞬間、先ほどと同じ様にアクセルが真っ直ぐに突っ込んできた。

「同じクラスの上条当麻だよっ！」

それを俺は、当たる寸前に半歩左に避け、右手を拳にしてカウンターの要領で殴る。が、当たる瞬間、アクセルは逃げた。

「・・・」

「お？どうしたよ？」

「嫌アな予感がした・・・テメエ、能力者かア？」

「あ、やっぱ超能力者だったんだ。けど残念ながら、上条さんはた

だの一般人ですよ？」

「・・・」

「なんなら試してみろよ、テメエの力で」

「・・・俺の超能力はベクトル変換、あらゆる物の流れを操作できる力だア」「？」つまり、俺に触れるだけであらゆるベクトルを曲げる事が出来る「それがどうしたよ」っ！」

そしてまたアクセルは突っ込んでくる。そして当麻は・・・。

―バキィ！

今度はクロスカウンターの要領で殴る。

「――っ！！やっぱ能力者じゃねエかアア！嘘つきやがったなア！？」

「いやいや、嘘はついてないですよ？カエルの医者もそう判断してたし」

「あの医者か！・・・そうかテメエが芳川の奴がア言ってた変わり者の子供かア！」

「・・・まあいっか。それよりも殴った割にダメージがないな、殴られる瞬間飛んだのか？」

「ああア、そうだ・・・しかしテメエがア噂の存在かア・・・ますます勝ちたくなったア！」

「あれ？逆効果！？」

再びアクセルが攻撃を仕掛けてようとする。が、その瞬間・・・。
―ズバンッ！

校庭に閃が入り切り裂かれる。

「二人とも！そこまでにしなさい！」

「ん？」

「ああア？」

声が出た人物に目がいく。

「お前、確か神裂だっけ？俺はただの被害者なんですけど？」

「邪魔だア引っこんでろオ、これは俺とオこいつの戦いだア」「おい俺は違うって！」

「そうですか、ならば二人とも叩きつぶします！」

「ええ!!」

「ハッ！やってみやがれ！ただし攻撃は俺の一方通行だかな!!」

「戦いに絶対など無いと師範に教わりました！来なさい！お二人とも!!」

「テメエらは俺の獲物だア！」

「（―ブチン）良いぜエ！てめえらのその思いあがった幻想、ぶち殺してやる!!」
潰して

Side Out

神裂が一瞬でアクセルの懷に入り蹴りを放つ。

「（早エ!）」

「はああ!!」

神裂の蹴りに反射が間に合わないと思ったアクセルは、先ほどと同じ様に避けるが・・・。

―ガッ!!

「ッテエ!!」

間に合わずに腕でガードして離れる。

「あなた、戦い慣れしてませんね「それは俺も思った」っ!？」

その神裂を当麻の手刀が突いて来る。

「（狙いは・・・お腹!）つくう!!」

一瞬で狙いを見切り、腕でガードするが・・・ガードごと突き飛ばされる。

「それは囧!」

追撃で当麻の左が何かを放ち、その何かは神裂を絡め捕る。

「これは、鋼糸!？」

「おら!」

そしてそのままアクセルの方へ投げられる・・・が。

「させません!」

「のわっ!？」

逆に神裂が鋼糸を引っ張り、当麻をアクセルに投げる。

「やばっ!」

ソレに気付いた当麻が防御をとった瞬間。

「いらアっしやアーいっ!！」

アクセルが思いっきり蹴りを放つ、そして蹴りの衝撃波が当麻を、その後ろにいた神裂ごと吹き飛ばす。

「があっ!！」

「くっ!！」

「ザアアアア!！」

「これが、超能力者ですか!？」

いち早く神裂が体制を立て直し、自身が思っていた事を言う。

「はははは! まだまだアお休みの時間じゃねエーぞ!」

そこへアクセルが突っ込んできたのを・・・。

「っそれは!」

「!？」

横から出てきた当麻が右手で掴み。

「飽きた!！」

すぐ近くにいた神裂に投げた。

「はあっ!」

「糞がア!」

「ボキィッ!！」

「「「「「っ!！」!！」!！」」」」」

そして神裂が能力を使われる前に殴り、右腕を折るが。アクセルも神裂の腕を蹴り折る。

「「「「「っ! え、援護ありがとって、あなた血が!」

助けた当麻も、服はボロボロの上、血が滲んでおり顔は冷や汗が出ていた。

「ん?・・・ああ、気にすんな、ちょっとした切り傷だ」

「・・・嘘、ですね。他にも、あるでしょう?」

「・・・実は腕が痛い、たぶんヒビかな？・・・そっちこそ、何か冷や汗っぽいぞ？」

「それは「やって、くれたなァ！」」

「「!？」」」

すぐ近くで声がし、一気に警戒する。アクセルがすぐ傍に立っていた。

「呆れるな、さっさと気絶しろよ？」

―両腕が激痛で体もボロボロの上条当麻。

「よく、立てますね」

―骨折した左腕と、体中痛みで直ぐにでも気を失いそうになる神裂火織。

「デメエらをブツ倒した後でなァ」

―右腕を骨折し同じく体中ボロボロのアクセル・一方。

「「「・・・・・・っ！」」」

三人が一気に走りだす。そして・・・

「「「っ!!！」」」

アクセルに当麻の右腕が顔面に突き刺さり。

「ここ、までで、すかつ・・・」

神裂のお腹―鳩尾―に勢いがついたアクセルの左手がブチ込まれており。

「「「「っ!!！」」」」

左腕ごと神裂の蹴りが決まった当麻がいた。

―ドサッ!!!!

そして三人同時にぶっ倒れた。

「「と、トリプルカウンター!!！」」

「か、神裂さん!？」

「いや―見事に決まりましたにゃ―実況の青髪さん!」

「そうですね―解説の土御門さん!この場合、勝者は誰になるんで

すか？」

「この場合「の、呑気に解説なんてしてないで、きゅ、救急車！救急車呼んでくださいー！」まあまあ落ち着くんだけい五和」

「おお！つっちー誰か起き上がったで！？」

Side..当麻

「ぐっ！「ーっ！らあああ！！」

根性で立ち上がる。体のあちこちが痛い加气合いで立ち上がり、そして・・・。

「ま、まだア！」

すぐ傍でアクセルが起き上がろうとしているのを。

「寝てろ！！」

ーガンッ！

「がっ！・・・」

右手で殴って気絶させる。

「う、ううう・・・こ、ここは・・・」

その又、すぐに神裂が気付き始めたので。

「テメェもだ！」

ーガスッ！！

踵落としを頭に決めて意識を落とさせる。

「ーっ！」

ードサッ！

そして次に懷から携帯を出す。

「よかったー壊れてねえ。・・・比較的頑丈なのにしておいてよかった」

ーピ、ピ、ピ、ピ

数回のコール音の後に電話が繋がる。

『はい、海鳴大学病院です』

「あ、上条当麻です。総合医療科のドクターフロッグをお願いします」

す」

『っ！ケースK発令、ケースK発令！ドクターフロッグ！例の患者です！はい・・・はい・・・では替わります』

『・・・もしもし？当麻君かい？また何かやらかしたのかい？』

「失敬な！っ！・・・きゅ、救急車をお願いします、三台。場所は聖祥大付属小学校の校庭です」

『はいはい、急ぎかい？』

「急ぎで、骨折が三人、その内一人は超能力者、あと、宜しく」

『取り敢えず死んじやだめだよ？』

「わかって、ますよ」

ードサツ

「あーいてえーちくしょー不幸だー」

「そんなに元気なら大丈夫そーだにゃー上やん」

「ああ？土御門か・・・それに、青髪に・・・えっと、五和だっけ？あと誰？」

「えっと、はじめまして風霧^{かざぎり} 氷華^{ひょうか}です」

その数分後に救急車が来て俺たちは即病院に搬送された。

「ふむ、まあ結果から言うとな、一ヶ月半は掛かるね。入院自体は体の傷が治れば退院できるよ」

「何気に最長記録！？」

そして随分久しぶりの入院となった。

「あの三人の中で君が一番ひどいね、特に左腕。一番治りにくいヒビが幾つか入ってた上に折れてたよ？ほんとに、幸か不幸か君のおかげで医薬品は進歩したから、治らない事はないけどね」

うわーホントに幸か不幸か分かんねー。

「じゃ、お大事に「あ、ちょっと」何だい？」

「残りの二人は？」

「ああ、女の子の方は怪我自体は大したことは無かったけど、大事

をみて今日は入院。男の子の方は担当の人が見てるけど、骨折以外は大した事がないってさ」

「ホントに俺が一番ひどい!？」

「ちなみに二人とも今は両隣りの個室にいるから。じゃあお大事に」
入れ替わりに美琴が入って来た。

「当麻」

「ミコトサン？」

「何か言いたい事は？」

「・・・差し入れお願いします」

「バカア!!」

「あべし!!」

Side…アクセル

隣がうるせェー。

「あら、お隣は楽しそうね」

「うるせえーだけだ」

「ふふ」

「何笑ってやがる!？」

今日はやけにやかましいィ事に巻き込まれるなァ。

「ねえアクセル」

「何だァ」

「楽しかった? 例の男の子に出会えて」

「・・・」

「別に答えなくていいわ。・・・ただね、私には出来ない事でもあの男の子なら出来るか持って考えたのよ」

「やっぱりあのクラス仕組まれてンのかよ」

「まあ様々な観点から見た場合、一ヵ所にした方が面倒を見やすかったしね。で、どうだった？」

「やっぱり気になってンじゃねェかよ」

「そりゃそうよ、だってあなたは血が繋がらないとはいえ、私の息子だもの」

この女……。

「ふん、退屈しねエ学校生活には……なりそうだな」

背後で芳川の奴が笑っているのが分かるが、特に不快な気分にはならなかった。

おまけ

「そう言えば……」

「ああア？」

「あの男の子」

「野郎がどォした？」

「隣の病室にいるって」

―バツ！↑起き上がる

―ガラッ！↑ドアを開ける

―バンッ！↑隣のドアを開ける

『テメェ！』

『お前！アクセル！！』

『当麻、誰？』

―ガラッ！↑再び隣のドアが開く

『うるさいですよ！ってあなた達は！？』

『また来た！？』

『あれ？確か神裂さん？』

『ちっ！テメェも近くにいたのかア！』

『――！』

『――！！？』

「あらあら、お隣は楽しそうね」

犯罪者 v s 小学生 i n 遠足 (前書き)

今回は以外と長くなった。

犯罪者vs小学生in遠足

Side…当麻

今は夏休みが近づいた一学期。ただいま遠足の最中で二つ程隣町に午前中に技術館、午後に水族館に来ている・・・方が良かったな。

え？今どういう状況下って？それはな？

ーパアン！パアン！！

「静かにしやがれ！！」

昼メシ時に水族館近くのレストランにて事件に巻き込まれてます、はい。

「ふ、ふ、不幸だー♪かーみじょーさん♪」「がーんばれ、がーんばれ、と・う・ま♪」

「よ、余裕だな当麻？」

「いや、だってさー俺の班見てみろよ」

A組三班リーダー俺（歌を歌いながら大富豪中）・御坂美琴（合唱）・神裂火織（大富豪参加、考え中）・アクセルⅡ一方（不機嫌ながら大富豪参加）・麦野沈利（二やつきながら大富豪参加）・浜面仕上（達観しながら大富豪参加）・五和（大富豪参加、嵌められて混乱中）以上七名。その他に、別の班の土御門（何やら調べ物中）・青髪（同じく大富豪参加、あわあわしてる五和に悶えてる）・そしてC組の風斬氷華（何故か美琴の世話係り）。

はい、いい加減現実逃避も飽きたんで現実を見ますか。

「ほい、ハートのA」

「甘エ、クローバーの2だ」

「しまっ！」

「甘いのはあなたです。ジョーカーを切らせてもらいます」

「「「なっ！」」」

「え、えっとすみません。スペードの3」

「「「なっ!!」「」」」

「くっ! 完璧に決まったと思ったのですが、やりますね五和」

「はっ! きょどってるだけかと思ったがやるじゃアねーか!」

「ちっ、ここで大穴か!」

「やべえ俺」

「五和ちゃんやるゝ!」

「やばい、やばいです、やばいですよ! もう切れるカードがない!」
「ん? 現実ってのは目の前のゲームにだよ?」

「「うるせーぞ! ガキ共!! 静かにしてろ!!」」

むう、短気だな犯人の人。

あれから二回程大富豪をやったが未だに解放されない。せいぜい一度昼飯が配られたぐらいだった。

「なんか飽きてきたな。・・・ホイ、チェンジ青」

「! 一枚引きます」

「けゝさっつのゝ役立たずゝ♪・・・リバーズ!」

「い、一枚お願いします!!」

「そろそろ何かあっても良いのにな。スキップ」

「犬なんざア飼い主がいなけりや何も出来ねェんだよ、スキップ」

「それよりも今日中に帰れるのこれ? 私もスキップ」

「ま、また私ですか!? い、一枚お願いします!」

「む!・・・リバーズ!」

「こ、これです! ドロー2」

「あ、ドロー4」

「ドロー2と」

「同じくドロー2と」

「ドロー4だア」

「ボクもドロー2ですわ」

「五和」

「か、上条君？」

「すまん、ドロー4だ」

「いやああああ!!」

「合計で二十枚ですね。・・・頑張ってください五和」

合計二十枚が何故かディーラー系の神裂から渡される。ちなみに風斬は一度自分の班に戻って此処にはいない。

「にゃー、わかたぜえい」

「ん？土御門？何が分かったんだ？」

「この事件、どうやら俺達が此処に来る事が分かったから実行したらしいにゃー」

「・・・不幸だ」

「それよりも土御門、ということですか？」

俺が落ち込んだのを放置して神裂が話を進める・・・ゲームをしながら。

「彼らの目的はズバリ『金』だにゃー」

「ああ、それなら狙われたのも分かります。確かこの学校の生徒は大概裕福層の親がいますね・・・まあ私の家はただの道場経営しているだけです」

「ねーちんねーちん」

「土御門！何度言えばその名前を止めてくれるんですか!？」

「まあ、その答えは保留して。アレはただの道場と言い難いぜい？」

「そ、そうなのですか!？五和!？」

「えっと・・・その・・・」

神裂の質問に五和が目を背ける事で答える。

「そん、な、では父上が言っていた事は・・・」

「それで？今はどんな状況なの？」

神裂が落ち込んだ事によって、たまたま近くにいた芳川先生が話を進める。

「今は近隣の警察が武装してこのレストランの周りを包囲してるに

やー。犯人側の要求は八億と逃走用のワゴン車四台。それぞれに二億づつ詰め込むことらしいぜい」

「なるほど、チームを少数に分ける事で捕まった際のリスクを下げ、少しでも逃走の確立を上げる。仮に全員がバラバラの目的で集まっていたとしても逃走の段階まで持っていけば問題なし・・・効率的だわ」

土御門の情報に芳川先生が犯人側の思考を読む・・・この人・・・。

「先生、専門家の人みたいっすね」

俺の疑問を浜面が代弁する。他の皆も同じ様・・・。

「知的で美人のオネーサン・・・これは最高やね！」

訂正。一人を除いて・・・いや、アクセルだけ驚いてない？

「当たり前だ、こいつ一応研究者だぞ？」

「「「「「え？」」」」」

「あら失礼ね？れっきとした研究者よ？保健医は兼任しているだけ」
「どとどどう言うこと！？」

「あら、話した通りよ上条当麻君」

「・・・もしかしてドクターフロッグと知り合いか？」

その言葉に一瞬だけ表情が固まるが、すぐに笑みを浮かべる。

「彼の言う通りね、不思議な力を持った精神年齢の高い男の子。そう私は、本来は海鳴大学病院の総合医療科に所属しているわ」

「当麻くしょぞくって何？」

「つまり芳川先生は、本当はいつも行ってる病院のお医者さんってことだ。美琴が能力制御を頑張ってる事も知ってると思うぞ」

「えへへえ」

相変わらず和むわ。

「ちなみに担任の本山先生も同じ病院の医者の人よ。国の方からの指示で能力者が学校に通った際、起こり得る問題の洗い出しと解決、対処マニュアルの作成の為に今は学校に勤務してるのよ、まあ転勤扱いね。ちなみに対象はA組に集められているわ」

「あ、やっぱり？」

と、ここで犯人が数人やってくる。ってこっちに来る？嫌な予感
しかない！？

「こいつらでいっか」

「それもそうだな、所詮ガキだせいぜいお荷物にならない程度が
ちょうど良い。」

「何人だっけ？」

「後の事も考えて・・・七人だな。ちょうど良い、お前ら立て！お
つと先公さんはそのままでもいいよ？」

この選択に心底同情する。なんとやつらが選んだのは俺達一班。
土御門も青髪も既に周りに退避していた・・・早えーなオイ！

そして連れてこられたレストラン入り口。其処にはすでに他の犯
人グループと見知った子が一人！？

「あ！氷華ちゃんだ！」

美琴がその人物、風斬氷華の名前を呼ぶ。

「あっ・・・当麻、くん？美琴、ちゃん？」

俺たちが風斬の周りに集まると同時に、犯人達も話し合いを始め
る。

「おい、あの子供どうしたんだよ？」

「俺が目えつけた」

「何でだ？あの子裕福層のガキだったのか？」

「いや・・・メガネが一番似合ってた」

『・・・』

「よ、よし！テメェら、ここからが本番だ！合流場所は分かってん
な！」

「グループ2、オッケーッス」

「グループ3、何時でも」

「グループ4、かまいません！けどガキはどう分けるんで？」

「適当につれてけ・・・一番身軽な3班が三人、俺んところが一人

だ・・・そのガキ！テメエはこっちだ！！」

「ああ？」

これはチャンス？

「（おいアクセル、ここは素直に従っとけ！どうやら全員グルだから最終的には一か所に集まる。暴れるならそこでしろ！ここじゃ被害が大きい！）」

「ちっ」

俺の提案に一応のつてくれるらしく、大人しく犯人グループのリーダーに従ってくれる。その間、俺も密かに根回しをする。

「（浜面）」

「（麦野は任せろ）」

浜面がこっそりと麦野の近くに寄る。恐らく小声で宥めているだろう。

「（神裂）」

「（しかたありません。ここで争えば周りに被害が出ます・・・構いませんね五和？・・・大丈夫です師範との練習に比べれば、彼らはただ人数が多いだけです）」

「（ーコクコク！）」

そう言って二人が離れる。すまん神裂、俺はその師範の人が気になる！

「美琴、風斬」

「何？当麻」

「？」

「傍に寄れ、必ず守る」

「大丈夫！私も戦えるもん！」

「わ、私も足手纏いにならない様に頑張ります！」
そして犯人の一人が近づてくる。

「め、メガネっ娘萌えー」

——駄目だこの犯人

Case 1…アクセル班

「遅せえ！右から来るぞォ！」

「す、すみません！」

「ほう！小僧、中々見所があるな」

「ほらア、さつさとアクセル踏み込めエ！グズグズすんじゃないエ捕まりてえのかアア！？」

「ひいいいいい！！」

『く、早い！その逃走者！子供を解放しろ！』

Case 2…浜面班

「へえ、車ってそんな風に運転すんのか」

「・・・坊主、車に興味があるのか？」

「ああ、家、孤児院だしあの人たちって車とか乗らないしなー」

「ふっ、良いか坊主、今右足が踏んでる板があるだろ？これがアクセルっていったな——。——？——」

「これは何だよ？」

「（アクセルってあいつの名前じゃん）」

Case 3…神裂班

「五和ありましたか？」

「恐らくこれだと思います」

五和の手に小さな機械があった。

「機械には疎いのですが、恐らくそれでしょう」

「まさか、発信機か！（と言うよりなんで正座してんだよ！本当にガキか?!）」

「「（この子何者!?!）」」

「（何故だ！何故曲がってる時もその体勢を保てる!?!）」

Case…当麻班

「確かに風斬はめがねっ娘だと思う！しかし何故それ以外を見ない

!?」

「ガキが！めがねっ娘以外の存在など俺にとっては無いに等しい！」

「そんなにめがねっ娘が好きかー!!」

「逆に聞こう!! 貧欲にも色々なジャンルに手を出す必要性が何処にある!? 一つを極めれば他の物など必要ないだろ!!」

「くっ！だが他のジャンルと組み合わせる事によって様々な可能性を生みだす！それが萌えてやつじゃないのか!？」

「ぐっ!!」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

俺の右手と奴の右手が上がる。

「やるな!!」

「ガシッ!!」

「前！前見て下さい！ぶつかっちゃいます!!」

「ビリビリ☆」

夜遅くに海鳴市から遠く外れた所にある漁港の倉庫の一つ。その中の一室に今日犯行を犯した犯人数人と、その隅の方に子供たちが纏まっていた・・・後ろで手を縛られた状態で。

「リーダーうまく行きましたね・・・あの子たちのおかげで」

「そうだな、中々良い手際だったじゃねーか・・・ガキ共が」

「所でおっさんたち、今まで何回こんなことしたんだよ？」

俺の言葉に、犯人グループのリーダーらしき人が俺に目を向ける。
「さあな・・・初めはただ金が欲しくて二、三人でスリの類をやってたんだが、それが人数が増えた途端、計画的な集団行動を始め、裏社会にも足をつっ込んで・・・へっ、何でこんなガキどもに愚痴っちまってんだ俺は・・・」

男は自分が言った事を恥じる様にドアに向かって歩いて行く。

「・・・ガキ共、俺たちも自分らの生活が懸かってるんでな、明日の朝にはお前たちは国外に売られる・・・悪く思うなよ」

そう言うって男たちは外に出て行った。

「生活が懸かってる、ね。悪いが俺たちも俺達の生活が懸かってるんだ本気でやらせてもらおう。美琴、麦野」

「おっけー！」

「たく、命令すんな」

彼女達は既に耳のピアスをしておらず、自らの力で縄を焼き切る。能力制御装置

「ふん」

アクセルも自分ではずす。

「五和」

「大丈夫です」

神裂と五和も縄から抜け出し。

「よっと！」

俺も縄を無理やりはずし。

「大丈夫？氷華？痛いとかかない？」

「・・・うん、大丈夫だよ美琴ちゃん、ありがと」

美琴が風斬の縄を焼き切り。

「惨めな姿ねーはあまづらー」

「うっせ、ていうか抜け出せる皆さんが変なんですが!？」

「鍛えてますから」

「体を心配していたのか緩めだったし」

「ああア？問題ねェだろ、こんくらい」

「ビリビリ☆」

俺が浜面の縄を解く。

「ガチャッ！」

「メガネちゃー（ドスッ!）カハッ！（グイッ）っ!」

「えい!」

「ビリッ」

「うっ！・・・」

ちょうどドアを開けたメガネ萌えの男の水月を神裂が肘で打ち、五和が鋼糸で男を引きずり込み、美琴が電撃で気絶させる。

「お見事（えっとまず口に咥えさせて縛って・・・）」

そして俺と浜面が男を縛る。

「じゃあ確認だ、犯人は二十人程、拳銃を所持している・・・この部屋はここを含め全部で四つ、一階に二部屋、二階に同じく二部屋。それ以外はこの部屋に来る前に見た限りじゃ全部倉庫だった」

話してる合間に、五和が男の持っていた銃を分解し、浜面がその光景を見ていた。他はウォーミングアップをしていた。

「そこで班を三つに分ける。まず第一班アクセルのみ。目標は一番居そうな倉庫、あと問題ないようなら外も頼む」

「ふん、ちょオど良い派手に暴れていいんだろ？」

「殺さない程度にな？」

「動けない様にすれば良いのよ」

俺の言葉にアクセルが反応し、麦野が補足的に付け加える。・・・様は死ななきゃ良いって事である。

「第二班は麦野、浜面、神裂だ、目標は二階の二部屋だ」

「ふん」

「りょーかい」

「分かりました・・・これは他にも囚われた人がいないかと言う事ですな？」

「ああ、ついでに言うとな浜面は麦野のストッパーな？」

「ああ、分かってる！」

「浜面、後で話がある」

「ビクッ！」

浜面のバカ！余計な事は言わなきゃ良いのに！

「んで、最後の俺、美琴、風斬、五和は一階のもう一部屋と、問題ないようなら他ののフロアだ、良いか？」

「おっけー！」

「はい」

「は、はい！」

「んじゃ、たぶん後数分で救護も来ると思うし、それまでには片づけようぜ」

『おー（おう）（（はい））（（ふん））！』

Side..アクセル

ーズドン！

倉庫の中に通じる邪魔な扉障害物を蹴り飛ばし、中に入る。

「ああ？・・・テメェあの時のガキか！どうやって抜け出してきた！？」

多分俺と一緒に車に乗っていた奴が話しかけてきた。・・・五人つてとこか、詰まらねェ・・・報酬として当麻の奴を能力訓練に付き合わせるか。

「おい！聞いているのか！？坊主！」

うるさい奴が俺に触れようとしてきたので、その手を掴み・・・。

ーボキイツツ！

ベクトルを操作して折る。

「へ？・・・あ、あア、アアアアアッアアアアアアアア！！」

「どうした！？」

他の仲間が駆け寄る間に、左の脛辺りを蹴り。

ーバキッ！

足が折れ、地面に倒れる前に軽く飛び上がり。後頭部を回し蹴りで叩き、顔面から地面に叩きつける。

ービシッ！

勢いが強かったのか叩きつけた瞬間、地面に罅が入った。・・・痙攣してるし死んではいねえな。

「て、テメェ！」

「おいてめェら！やるぞ！」

「「ガキが!!」」

「何の武術か知らんが、少しは武術の心得があるようだな!？」

『おお!!』

今を見て他の奴らも俺を敵とみなした様だな。

「来いよオ三下共!こつから先は一方通行だア!」

Side…浜面

アクセルが突っ込んだみたいだな。あいつの能力は当麻からこっそり教えてもらったが・・・正直反則だと思う。それに勝った当麻も正直凄いと思うが、それでも友達を止めるつもりはない。

「さて、こつちもいきますか」

「そうですね、二階に上がるには、一旦倉庫内に入る必要がありますが・・・この様子なら大丈夫そうですね」

「ならさっさと行くわよ、早く終わらせて夕飯にしたいわ」

正直俺も腹が減った。

倉庫の中は阿鼻叫喚の状態だった、既に何人かは倒されており、若干痙攣してたり、呻き声を上げている様子を見るに死んではいなさそうだった。既に戦いの場は外のコンテナ置き場辺りに展開しているのか倒れている人以外いなかった。そして神裂、俺、麦野の順に二階に続く階段を上がる。

「これが、超能力者、ですか。改めて見ると凄まじい物ですね」

神裂が驚愕しているが、そんなに驚いている様子は見られなかった。

―ガチャッ!

つとそう言ってる間に二階のドアが開く!

「なんだ、この騒ぎは!?!これからお楽しみタイムだったのに!」

「?よくわかりませんが失礼します」

その瞬間、神裂が踏み込み、出てきた男の腹の少し上―水月―を

肘で打ち足を掛けて仰向けに倒れる。

「があっ！！——この野郎！？「ふん！」（ゴン！）ぐえっ・・・」

倒れた男が、映画とかでよく見る懷に手を入れる仕草をしたので浮き上がっていた頭を、足で思いつき叩きつける。

「おみごとです。何か武術の経験でも？」

「映画鑑賞を少々」

「それは関係ないと思うわよ？」「そうですね」

「じゃあ今度、神裂が習ってるのを教えてくれ。当麻とか麦野とかといるとこういう事にまた巻き込まれそうだし」

「・・・師範に相談してみます」

「そ、それよりまだ居るみたいだしさっさと行くわよ！」

何故か顔が赤くなった麦野が先に行こうとする。

「（クスッ）そうですね、どうやら他にも囚われた方がいるようですし」

「（ん？あれって）・・・待てって麦野！」

足元に落ちていた物を拾い麦野と神裂の後を追い、二階の通路に入る。

Side…当麻

アクセルも浜面たちも行ったので俺たちも行動を開始する・・・前に部屋から二人の男が出てきた。

「・・・お前さんたちか、この騒ぎは」

「おう」

「まったく、これじゃあ計画がパーじゃねえか」

「リーダー」

「下がってろ・・・この落とし前つけて貰うぞ？小僧」

リーダーの男がもう一人を下がらせる。

「・・・その前に一つ良いか？」

五和と美琴が俺の横に並ぶのを視界の隅に見ながら、俺が声を掛

ける。・・・風斬は後ろに下がったみたいだな。

「何だ坊主？」

「・・・あんたどっかで止まりたかったんじゃないのか？」

「・・・ふっ。・・・舐めるなよ小僧！俺はこのチームのリーダーなんだよ！！」

その瞬間、男と俺が駆け出す。

「ふん！」

「っ！」

男が右腕を振り下ろし、俺を狙ってくるのを右側に跳んでかわす。

「（いくら鍛えてあっても子供と大人じゃ大格差がありすぎる。・・・

・当たったらやべえかもな！）」

「（はっ、意外と鍛えてあるじゃねえか！）」

追撃で左足が横薙ぎで来るのを、さらにしゃがみ込んで避け、左足が真上に来た所を・・・

「りゃあっ！」

「うお！」

上に押し上げて体制を崩す。その間に五和と美琴が男の横を通り過ぎ、もう片方の男に向かっていく。

「・・・お前一人で良いのか？」

「俺を、俺達をただの子供と見ない方が良いぜ？おっさん」

「そのようだな」

そして腰からナイフを引き抜く。

「・・・計画変更だ」

「銃じゃなくて良いのかよ？」

「後ろの嬢ちゃんに当たっちゃまうだろ。邪魔な奴らだけ片づけてから売らせてもらう」

「残念。後数分で警察も来るし・・・あんたは此処で八つ裂きになる運命だ」

「やってみろよ！」

そして男が踏みこんでくる。

「（なんちゃって）虚刀流 上条当麻。参る！」

男がまた右腕を振り下ろしてくるのをギリギリまで引き付け……。

「薔薇！」

「っが！」

一気に懐に入り込み、右足を腹に蹴り込み。

「野苺！」

「っ！」

若干、前のめりになった所を右肘で鳩尾を打った後、左肘で脇下を狙い。

「雛罌粟・改！」

相手の顎を徹^{とおし}を込めた掌手で穿つ。

「ドスン！」

「っ、かはっ！ 強えな、ガキンちょ」

「あんたが手え抜かなきゃ、こんなあっさりいかねえよ。それに……」

「ツウー」

「少しかすった」

左頬が少し切れて血が出ていた。

「はっ、なんの、こと、やら」

「そう言う事しておくよ……あと三十分は動けないだろし、たぶんその頃には警察も来てるだろうな」

「ここで終わり、か。……ざまあねえな」

「じゃあな、他の奴らが心配なんで行かせてもらう」

離れた所から、美琴と五和がやってくるのが見え、少し安堵する。

「小僧、楽しかったぜ」

「俺は少しビビった」

「かははははは！ っげほっ！ がはっ！ ハァー！ ハァー！……」
「おっさんバカだろ」

Side…浜面

通路に入ると一つの部屋だけ開いていた。恐らく先程出てきた男が居た部屋だろ。その部屋に神裂が中を見る。

「!・・・お二人とも隣の部屋をお願いします。恐らくもう一人程居ると思いますので気を付けて下さい」

―バタン!

神裂が中を見た途端、早口でしゃべった後ドアを閉めた。

「何だったんだ?」

「・・・それより隣行くよ」

「あ、ああ?」

麦野につられもう一つの、反対側のドアの前に行く。

「浜面。あんたがドアを開けな、私が撃つから」

「わ、わかった。三秒な」

ドアの前に立ち取っ手を掴む。

「三・・・二・・・一!」

―バンッ!

「っ!」

―ビュン!!

「アアアアアア!」

部屋の中から男の絶叫が上がる。

「麦野?」

「当たった。浜面、縛ってきて」

「おう、お疲れさん」

そう言って俺は座り込んだ麦野の頭を一撫でして部屋の中に入る。後ろで何やら煩いが気にしない。

「こいつか」

中には両足に焦げ跡が付いている男がいた。

「えっとまず足を縛って・・・次に腕を後ろで交差してっど・・・
・・・よっしゃ!こんなもんか?」

これで終わ리ると思ひ麦野の方を見て・・・。

「麦野！後ろ！！」

「え？」

麦野の後ろで蹴ろうとしている男に気付いた。

―ガスッ

「あぐ！！」

―ズサァァ！

麦野が蹴られ男が入ってくる。その手には、銃が握られていた。

「大丈夫か！麦野！？」

「ううう・・・」

「へ、へへ！さっきはよくもやってくれたな！」

「お二人とも！大丈夫っ！」

その後ろから神裂が来て、この状況に気付く。

「おっと！動くなよ？！テメエもさっきは良いモノをくれてありがとうよ！」

麦野は・・・気絶してる。先ほど麦野が撃った男は起きそうになり。神裂も動けない。麦野を蹴った男は・・・神裂に目を向け、俺たち銃を向けている。

「（・・・いけるか？）」

ズボンのポケットから先ほど拾った物を取り出す。

「（この状況だと・・・っ！）」

「さて！テメエも隣に居る女同様、可愛がってやるぜ？！まっ！全体的に物足りない感じがするがな！」

「ゲスがつっ！」

「何だと？！ガキ！」

そう言つて男が銃を神裂に向ける。

「（今！）っ！」

―ズシュ

一気に駆け出し、男の太ももにナイフを突き刺す。

「っぎゃああああああ！」

「っ！はあっ！！」

男が痛みで銃を落とすのを見た神裂が一期に近づき、鳩尾を肘で突き。体制が崩れ前のめりになった所を、芸術的な踵落として意識を刈り取る。

「はあはあはあ！っ麦野！」

「ううつ、はま、づら？・・・っ！わたし？！」

「安心しろ、もう大丈夫だから」

「大丈夫ですか？二人とも」

男を縛った神裂が近づいてくる。俺が突き刺した太腿も、糸の様なものと男の服から切り取った布で止血してあった。

「あれ、あんたが？」

「い「ああ、神裂がやってくれた」・・・（よろしいのですか？）」

「（ああ、この事は黙っててくれ）」

今更ながらに震える腕がばれない様に麦野を宥める。さて、残りは何処だ？

Side…アクセル

「つまんねェな・・・これでラストっとお」

ホントつまんねえ奴らだった。

「ん？なんだやっときたのかぁ、おっせーんだよ、たく！」

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる。

「お、来た来た！」

後ろの倉庫から知ってる声が聞こえてきた。

「おう！けーさつだー！氷華！かつ井って食べるかな！？」

「た、たぶん貰えないんじゃないかな？」

「えー！私お腹減ってるのに！」

「後で母さんか美鈴さんに作って貰うから大人しくしてなさい」

「むー。ビリビリ☆」

「おわ！何すんだ美琴さん？！」

「神裂さん！お怪我はありませんでしたか？！」

「大丈夫です。それより五和こそ怪我はありませんでしたか？」

「はあくまぐづぐらゝお腹すいたわ」

「もうすぐ警察が来るから直ぐに送って貰うから。というか麦野、おぶってるんだから疲れないだろ！」

「今何時だと思ってるのよ！」

「・・・何時だ？」

「えっと・・・げ！もうすぐ八時じゃん！！」

「「携帯（が）あるなら先に言えよ（言ってください）！」」

「当麻ー！おんぶ！」

「はいはい、勝手にぶら下がってろ「えい！」っと！あ、アクセルお疲れさん」

「声掛けるのが遅せえだろ、今度訓練付き合え」

「はいはい今度今度」

むかつくが、余計腹が減るだけなのでやめといた。

――ハードな遠足が終わる

おまけ

「腹へったな」

「今日なんだろうねゝ」

「肉は遠慮したいな俺」

「私あっさり系が良いな」

「私の家は大抵和食です」

「同じくです」

「私は・・・何でしょう？」

「おせえ！！」

「仕方ないじゃん?! 倉庫周辺って入り組んでるし!」

「じゃん言うな! うざってえー!!」

「――!」

「――?! ―――!!」

「――」

「?!」

犯罪者 v s 小学生 i n 遠足 (後書き)

ところでこの後どう書いていこう？

それぞれの日常―12月25日

Side…当麻

あつと言う間に時が過ぎ十二月。何？また時が飛びすぎだと？別に大したことなんか無い日だったぞ？例えば、夏休みは高町家と一緒に山にキャンプに行ったら二週間遭難したとか。二期期には運動会―人数が多いので一年ごとに学芸会と運動会を交互に行っているらしい―でA組の奴ら（俺らとか俺らとか）がこっそりと能力使用してたりとか（ちなみに組ごとに色分けされていた）。・・・夏休みの宿題が間に合わなくて入学一年目から補習を受けたりとか。・・・何故か偶にアクセルの能力実験に付き合わされたりとか。・・・うん、別に大したことはないな。

そして、現在クリスマス。学校は昨日の時点で終業式を終え、今は美琴となのはを連れてデートと言う名のお守をやっている。

「当麻！次はあっち！あの！ペンギン見に行きたい！」

「早く行こ！当麻くん！」

場所は某所の水族館。ちなみに親共からはたつぷりと軍資金を貰ったので懐は痛まない。まあ夜にはクリスマスパーティーin翠屋（二日目）だからそれまでには帰らないとな。確かアクセルとかアキナス孤児院組も参加するらしいし。

「当麻！次クマ！」

「ガルルルル！！！」

「にゃー！！！」

「はいはい、落ち着こうな、なのは」

ああゝ見てて癒されるわゝ。

――上条当麻、現在お守と言う名のリア充中。

Side Out

Side..浜面

「はっ！」

「くっ!!」

相手の上段蹴りを左腕で防御する、が。

「甘いです」

「ガッ！」

「のわ!？」

直ぐに防がれた足を戻すと同時に回転しながら足払いを掛けられる。それを転がりながら離れ、立ち上がろうとするが。

「獲りました」

立ち上がろうとする瞬間、首に短刀を模した木刀が触れる。

「そこまで！」

審判の言葉で体の力を抜く。

「はあ、はあ、まだ、はあ、勝てそうに、無いな」

「当たり前、です。あなたは漸く技の稽古に入り始めた、ばかりなのですから、そう簡単に負けてあげません。何より・・・年月が違います」

俺は今、神裂の実家の道場『天草式総合格闘技』の実践式を習っている。この流派どうやら昔から伝わる戦いの為の技術殺し合いだったのを表と裏の二つに分けたらしい。表では護身術や格闘技として教え、用人の警護に裏を教えたり、活動して経営してるらしい。そして神裂は将来的にこの道場を背負う後継者らしい・・・正直スケールがでか過ぎて分らん。ちなみに俺が習ってるのは裏を基準に習っている。

「浜面・・・あなたは凄いですね」

「はあ? い、いきなり何だ?」

「いえ、私はこの家に生まれ必然的に学ぶ事となりました、分家に当たる五和や遠縁に当たる土御門もそうです。けどそれは、誰かに決められた道筋です・・・けれど、あなたは自分で決めて進んで学びに来ています。しかも殺しの為の技術を・・・」

神裂の悩みは、血縁関係も分からず、将来的に家を継ぐ事も強要されていない俺には分からない悩みだった。

「私はそれが少し、羨ましいのかも知れませんか」

「神裂さん・・・」

「・・・じゃあさ「？」在り来たりな事言ってるのかもしれないけどさ。家とか血筋とか、そんなの関係ない事でも始めれば良いんじゃないか？」

「は、浜面さん・・・」

「・・・く、くくっ、は、はは、あはははははは！」

「か、神裂さん!？」

「くっ、それは、考えた事ありませんでした。・・・麦野さんが信頼を寄せているのが少し分かった気がします」

「あれは、玩具扱いされている気がするだけなんだが・・・」

「そんなことは無いと思いますが。・・・さて、まだ続けますか？」

「おう！少し休んだしな！」

「では次は五和です」

「わ、私ですか!？」

「建宮さんや、鈴木さんもしませんし、見てるだけでは貴女も訓練にならないでしょう？と言うかやりなさい」

「うう、わ、分かりました・・・宜しく願います」

「おう！」

——浜面仕上。汗臭い青春を謳歌中。この後、約束を忘れられた麦野、絹旗、滝壺に強襲される。

Side Out

Side…アクセル

「なア・・・何で俺はこんなことやってんだ？」

俺は今現在、理解不能の現象にあってる。場所はただのファミレス。連れの連中は・・・。

「あら？楽しいじゃないこの子達」

保護者の芳川に買い物に連れ出され。

「そうだよーお母さん達が言ってたけど『人生楽しまなきゃ損よ！』って、とまりは目の前のお子様ランチに目を奪われながら言うてる！・・・ねえもう食べていいの？」

「どうぞ」

途中で迷子なのか彷徨っていた御坂とまり。

「とまり、少しは反省してください。っと目の前のハンバーグラッチに目を奪われながら叱りつけます。・・・では頂きます」

おまけの様に着いて来た御坂はずみに

「君かー当麻君と喧嘩したっていう子は」

同じく買い物に来ていた御坂美鈴の御坂母娘だった。

初めは夜のクリスマスパーティーに行くまで、部屋で惰眠を貪ろうかと思ったが芳川によって阻まれ。芳川の荷物持ちにされて買い出しに付き合わされ、途中で変なガキにぶつかったと思ったらそのガキに名前を言い当てられ。そのガキを捜しに来たもう一人のガキが、何時の間にか一緒に買い物を手伝い始め。最後にガキ二人を捜しに来た母親が芳川と話し合い始めたと思ったら何時の間にかファミレスと一緒に昼食を取る事になっていた。・・・何だアこれエ？

「そう言えば今日は美琴ちゃんはいないんですか？」

「ーんぐ！・・・お姉ちゃんのはちゃんと一緒に当麻にいとデパートに行ったのだ！と、とまりは此処にいない姉と親友を思っている」

「私たちも行きかったです。と、はずみは親を恨んでみます」

「はいはい拗ねない拗ねない、今度一緒に行く？」

何アンか一部変なところがあつたなア今。

「ねえ御坂さん？今、女の子二人とデートに行つたって聞こえてんですけど？」

「あら？そうだけど？」

「・・・良いんですか？その」

「自分の娘以外の子と付き合ってるのに良いのか。って事ですか？」
「ええ」

ああ、なるほどさっきの違和感はその事か。

「さっきもこの子達が言ってた様に人生は楽しまなきゃ面白くないでしょ？それに、まだあの子たちは恋をする事も、恋される事もまだ先よ？・・・今はまだ、自分の気持ちに正直に生きて、楽しい時を過して欲しいの。今という時間を大切にしたいの」

俺はこれが親というものと初めて知った。幼い頃から周りの物を反射して、拒絶して、そして捨てられて、施設を転々とし、自身の能力を制御して俺は芳川に引き取られた。ゆえに親の顔も、匂いも、温もりも知らずに育った。

「ねえねえあなた！そんな顔してないでもっと笑った方が良いよ！ってとまりはあどばいす？をしてみる！」

「ああア？」

不意にガキ共が騒ぎ始めた。

「・・・その通りですね、そんな顔をしてるとますます周りが暗くなりますよ」

「ほおっておけ！俺の不機嫌顔は生れつきみたいなもンだア」

「そうじゃなくて！なんかその・・・」

「その悲劇的なまでの悲壮感を漂わせた顔をやめてください。と、とまりは言いたいのですこの冬ウサギ！っとはずみは代弁してみました」

「・・・！？」

「はずみ！？私はそこまで思っていないよ！？ってとまりは訂正を求めてみる！」

その言葉に昔の事を考えるのを止めた。

「（そオだなア。いちいち昔の事オ考えてちゃアきりがねエなしな）」

「ま、もっとも！当麻君には美琴を貰ってくれるのは確定してるけどね！」

さっきまでの感動を返せこのヤロウ。

——アクセル・一方。この後、夜まで精神攻撃をくらい続ける。

Side Out

Side 士郎

ーカラーン

既に閉店の看板を下げた翠屋のドアが開く。恐らくパーティ参加の人達が来たのだろうと思い入り口を見る。

「お、いらっしやい浜面君・・・なんでボロボロなんだい？」

「聞かないでください」

当麻君の知り合いの浜面君が、以前恭也が桃子にOHANASIされたような雰囲気です店に入って来た。その後ろから三人の女の子が不機嫌な様子で入って来たのを見るに、たぶん怒らせるような何かをしたんだろう・・・あの年頃の女の子は機嫌を損ねるとご機嫌取りも大変だろうな。

「今日はお招き頂き有難うございます」

「こちらこそ、今日は楽しんで行つて下さい」

彼らの保護者のオルソラさんが挨拶をしてくる。この人も桃子とそう変わらない年齢なのに孤児院を経営しているのは凄いと思う。ただ話が所々飛ぶのを我慢すれば完璧だと思うが。そのすぐ傍をルチアさんが通り過ぎる。

「あなた達！待ちなさい！まずは手を洗いなさいと、何度も言うてるでしょう！と・く・に！アンジェレネ！」

「ご、ごめんなさい！シスタールチア！？」

「まったく。っ！すみません高町さん、家の子供たちが騒がしくて」「そう言えば何で浜面君はボロ雑巾のようになっていたのでしょいか？」

「また話が飛んでますよ！オルソラ！？」

「まあまあ、構いませんよ。子供って言うのは元気な方が良くいで

すから」

「すみません。ほら行きますよオルソラ、貴女の方が子供たちが言う事を聞くんです」

そう言つてルチアさんがオルソラさんを引き摺って行つた

―カラ―ン

「高町さん、今日はお招き有難うございます。夫も今年は出張先から帰つてこれないそうなので、寂しい夜を過ごす所でした」

「いらつしゃい、美鈴さん。・・・後ろに居る男の子は？」

「あ、彼が当麻君と喧嘩したつていう男の子ですよ」

「ああ、話には聞いていたが。そうかあの子か」

と、その後ろから女の人が前に出てきた。

「始めまして、でいいのかしら。芳川桔梗です。一応あの子の保護者です」

そう言つて手を差し伸べてきた。

「と、此方こそはじめまして、ここ翠屋のオーナーを務めています高町士郎です」

その手を握り返す。その後ろから例の男の子が近づいてくる。

「アクセル・一方だ」

「はじめまして、ここのオーナーの高町士郎だ・・・あと当麻君の師匠もやっている」

そういつて手を差し伸べる。

「ああアあいつの・・・ふん」

そう言つて彼も手を握り返した。

「ふふ」

「何笑つてやがる芳川ア!？」

「あら？ 気にしなくて良いのよ？」

「―――!」

「―――?―――。」

良い争いながらパーティー会場のテーブルに歩いて行く。

「ところで美琴ちゃん達は？ まだ来てないの？」

「そうなのよ、なのは達まだ来ないのよ」

奥から桃子も出てきたな。

「……」

おっと！ここはヤバいと戦士の感が言ってる。逃げねば！

―カラーン

「「!？」」

「いらっしゃい……刀夜さん、詩菜さん」

入ってきたのは会社帰りなのかスーツ姿の刀夜さんと詩菜さんだった。

「こんばんは士郎さん。今夜は招いてくれてありがとうございます」

「こんばんは士郎さん。……あら？当麻たちはまだ来てないの？」

「ええ、まあ」

―カラーン

「「!？」」

「「？」」

「いらっしゃっと、恭也と美由希か」

「……何だか凄く扱いが酷い気がするんだが」

「そうだね恭ちゃん」

「それよりも配膳手伝ってくれ二人とも」

「「……わかった」」

「まったく、またトラブルかしら？」

―カラーン

「「「!？」」」」

「き、鍛えててよかった!!」

「いらっしゃい、当麻君？」

「あ、士郎さん。それよりも桃子さんに……美鈴さんもいたんですか、助けて下さい」

当麻君の背中にはなのはと美琴ちゃんが寝ていた。

「あらら、美琴ちゃんったら寝ちゃったのね」

「あら、なのはも幸せそうに寝ちゃって」

当麻君の背から桃子と美鈴さんが二人を受け取り店の奥に入っていく。

「疲れた」

「頑張ったな当麻」

「さすが私たちの息子ね」

「・・・よせよ。あ、士郎さんこれ二人の荷物です」

そう言って当麻くんが二人分の袋を差し出してくる。

「お疲れさま当麻君。それと、なのはのお願い事を叶えてくれてありがとう」

「『水族館に行きたい』でしたっけ？・・・構いませんよ、資金もたっぷり貰いましたし」

「？『当麻くん和美琴お姉ちゃんと一緒に遊びに行きたい』で、一番の候補が水族館だったんだけど。お父さんから聞いてなかったのかい？」

「マジ！？そんなの聞いてないんですけど！？・・・母さんだな！？」

「士郎さん、そろそろ全員待ち切れなさそうだし始めます？」

「あらあらじゃあ私も手伝いに行きましょうか」

「ちよっ！？話聞けよお二人さん！あ、こら！綺麗にスルーすんな！！」

・・・皆も待ちきれそうにないし。そろそろ料理も運び終わりそうだし始めようかな。

Side Out

Side..当麻

「では！メリー・クリスマス！！」

『メリー・クリスマス！！』

宴が始まった。そして直ぐに浜面が近くにやって来た。

「よう当麻、メリークリスマス」

「メリークリスマス・・・なんでボロボロなんだお前？」

「聞くな、頼むから」

その雰囲気は、かつて恭也さんが桃子さんにOHANASIされた時とそっくりだった為、深く突っ込ま無い事にした。

「色々あったな」

「そうだな・・・なあ俺達まだ入学一年目だよな？」

「？そうだけど？」

「何でハードな記憶しかないんだ？」

「それだけ濃密な人生って事じゃね？」

「大半にテメエが関わってんだろオが」

何時の間にかアクセルが傍に居た。

「ん？メリークリスマス、アクセル。それと運動会は俺が原因じゃないぞ？」

「・・・ああア」

「？なんか何時もと雰囲気が違う？」

「・・・確かにそうだな、なんていうか・・・何時もはもっと不機嫌そうだよ、お前」

「否エはしねエが、朝っぱらから芳川の買い物に付き合わされて、追加で糞ガキ二人とオ惚気話をオ聞かされりゃアどんな奴だつてエヤル気なんざア起きねエよ」

「あー・・・美鈴さんか、今年は旅掛さんいないからな」

「そりゃ疲れるわな」

「飲むか？士郎さんの入れてくれたコーヒー」

「ああア・・・うめエな」

「だろ？」

「にげえ！？よく飲めるなお前ら！？」

「「ああア?!」」

「テメエ！士郎さんのコーヒーにケチつける気か!？」

「この美味さがア分からねエだとオ！この三下がア！」

「なんでお前らキレてんだよ!？」

——騒がしいパーティーは続く

おまけ

「当麻！」「当麻くん！」

「ん？二人とも起きたぁー！？」

二人に呼ばれ、振り向いてドツキリ。

「またこのパターンか！？」

そこには再びネコミミメイドが居た。しかも・・・。

「はまづら、どう？」

「たまにはこんなのも超良いですね」

「わ、私が着てやったんだから感謝しなさいよ！はーまーづーらあー」

ウサミミメイド隊が浜面に迫り。

「わー！どおどお！似合ってる！？って、とまりはあなたに聞いてみる！」

「今ならセットでもう一人付いてきます。と、はずみはなんで私までこんなを着ているのでしょうかと心の中で思ってみます」

オーソドックスタイプの双子メイドがアクセルに感想を聞いていた。

「・・・う・・・あ・・・」

それに対し、浜面は放心し。

「おいイ当麻ア！テメエの知り合いつてエのはア、頭がおかしいイ奴らしか居ねエのか！？」

アクセルは俺に八つ当たりしてきた。・・・アクセル、それだとお前も入る事になるぞ？

「はい、当麻！あーん！」

そして再び始まる美琴の「あーん」攻撃。後ろの方では親達がか

メラを構えている。

「これもおっ!？」

——祝いのたんびにコレやんのか!？

それぞれの日常―12月25日（後書き）

当麻「なんか一気に飛んだな？」

ぞろ2「いや、あのな？もう無印編のストーリー構成は出来てんだよ」

当麻「ふんふん、それで？」

ぞろ2「ただ、お前がまだ出会ってない奴とか、高町兄と月村の姉との物語を入れるかどうかとか、どっかの子狸との出会いを入れるかどうかで迷ってたんだよ」

当麻「テメェ！無印編の前にまだ騒動に巻き込んだり、フラグを立てせるつもりか！？」

ぞろ2「さて、今日はもう一つ投稿するんだが人物紹介なんだ。この物語を見てくださった方々、登場する人物が多くてすみません」

当麻「テメェもスルーか！こん畜生！」

????「ていうか人物紹介で一気に纏めちゃった方が早いんじゃないの？」

当・ぞろ「!!!!!!」

美琴「あんたはまだ出てきちゃだめでしょ！さっさと控室に帰れ！」

????「ぶう~~~~！だって私このままじゃ数話経たないと出番がないんだよ!？」

当・美・ぞろ2「帰れ！」

ggd ggdですいません。

ここまでの人物紹介2（前書き）

相変わらず感想がない・・・ or z

ここまでの人物紹介2

・学校関係（生徒教師の順でアイウエオ順）

青髪（あおがみ）

当麻のクラスメイト。原作では当麻のクラスメイトの青髪ピアス。今は小学生なのでピアスは付けていない。原作同様、小学生にして女性に興味深々の男の子。

アクセルⅡ一方一（アクセルⅡいちかた）

当麻のクラスメイト。原作同様「ベクトル操作」の超能力者。白い肌に白髪、血の様に赤い目。本来の名前は鈴科すずしな百合子ゆりこだったがカエルの先生の部下の芳川よしかわ桔梗きぎょうが引き取る際に交渉し名前を変える。命名は芳川。普段は能力制限の機器を付けないが、紫外線のみベクトルを曲げている。名前の由来は昔、研究者の一人が言った「一方通行（アクセラレータ）」という言葉を少し変えたただだが、本人は元の名前よりかは気に入っている。

固有スキル

ベクトル操作

運動量・熱量・光・電気量など、体表面に触れたあらゆるベクトル（向き）を任意に操作（変換）する能力。重力や空気さえも操作できる。

五和（いつわ）

当麻のクラスメイト。神裂と同じ道場に通っている少女。普段から何故かおしぼりを鞆に入れている。

固有スキル

天草式総合格闘術（表・裏込み）

詳細は神裂火織を参照。

風斬 氷華（かざきり ひょうか）

本作品では普通の人間で何の能力も持っていない一般人。家族構成は両親は既に他界し祖父母（母方の親）に引き取られている。ちなみに当麻とは別のCクラス。

神裂火織（かんざき かおり）

当麻のクラスメイトで、A組のまとめ役。実家が道場経営しており、必然的に武術を習っている。今は自分のやってみたい物を探し中。ちなみに剣術も学んでいる。

固有スキル

天草式総合格闘術。昔から伝わる戦いの為の技術を表（活人術）と裏（殺人術）に分けて教えている。裏では要人警護の依頼も受けている程、名のある家系。

土御門元春（つちみかど もとはる）

当麻のクラスメイト。土御門家の養子として引き取られた少年。小学生のくせにサングラスを掛けている。一応、護身術程度には天草式総合格闘術を学んでいる。原作同様シスコン。

固有スキル

天草式総合格闘術

????

浜面 仕上（はまづら しあげ）

幼い頃にアキナス孤児院に引き取られた少年。当麻や麦野沈利と同年齢。四歳の頃に麦野の超能力を見て拒絶するが、美琴の能力暴走、当麻との出会いを経て麦野と和解する。強くなる為に神裂の実家の道場「天草式総合格闘術」を学び始める。

麦野 沈利（むぎの しずり）

原作と同じ「メルトダウナー原子崩し」の超能力者。赤ん坊のころにアキナス孤児院預けられたまま両親が行方知れずになった為、そのままオルソラに引き取られた。原作と違い、同じ孤児院の子や近所の滝壺にはある程度心を開いている。浜面に関しては同年代兼遊び道具兼下僕扱いだが、自分の能力を恐れず受け入れた所は評価している。普段はピラス型的能力制限装置を付けているので能力は使用していない。同じ能力者の美琴とはそこそこの仲。最近遊び相手が増えた事をひそかに喜んでいる。

固有スキル

メルトダウナー
原子崩し

電子を波と粒子のどちらでもない状態に固定し、自在に操る能力。

木山 春生（きやま はるみ）

当麻のクラスの担任。元は海鳴大学病院に勤務していたが脳力者の出産率増加に伴い、学校生活における問題の解決と、対処マニュアル作成の為に、教員免許を持っていた為聖祥大付属小学校に転勤された。本人曰くトラブルの大半が当麻達の方に向くので楽が出来るらしい。

芳川 桔梗（よしかわ ききょう）

当麻の通う学校に木山春生と同じく派遣された女性。普段は保険医として勤務している。アクセル・一方の保護責任者にして改名した名付け親。当麻達の出会いを経て次第に角がとれてきた事を密かに喜んでいる。

・アキナス孤児院組

オルソラⅡアキナス

原作と違い既に成人。両親は既に他界しており、残されたお金で孤児院を設立余ったお金で株を購入したら大当たり、現在はマンションを購入しオーナーになっている。原作同様テンポのずれたしゃべり方をしては周りにストレスを与えるが、持ち前の人当たりの良さによって怒る事が出来ない。家事は優秀でそれゆえに孤児院の方を本業としオーナー業はルチアに任せている。親がローマ教の為その影響を受けている。

ルチアⅡアキナス

原作と違い既に成人。幼い頃にアキナス家に拾われ育てられる。原作同様性格が潔癖症でお堅い人、自身も自分の性格が分かっている。孤児院はオルソラの補佐になり、マンションの経営を受け負っている。オルソラと同じローマ教信者だが原作と違いそれほど固執していない。

アニニューゼⅡアキナス

オルソラが拾った孤児院入居者第一号。ホームレスだった為、オルソラが養子にする際に姓名をアキナスに変える。将来的はオルソラへの恩返しとして孤児院の助けになる為に、現在勉強中。現在聖祥大付属女子中に通っている。

アンジェレネIIアキナス

赤ん坊の頃孤児院にルチアに引き取られた少女、保護責任者はルチア。浜面や麦野とは四つ下。戸籍を作る際にオルソラが正式に引き取りアキナス家の一員になる。

絹旗 最愛（きぬはた　さいあい）

オフエンステーマー

原作同様「オフエンステーマー窒素装甲」の超能力者。日常生活を送る際に特に必要のない能力の為に訓練に力を入れていない。親に捨てられた経験から、周りの人を信用しないが孤児院の人間や浜面、麦野經由で知り合った人には心を開いている。口癖として「超」という言葉がつく。浜面や麦野とは一歳年下で、理后とは同年代。

固有スキル

オフエンステーマー

窒素装甲。周囲の窒素を自身に纏わせる事の出来る力。

・その他

ドクターフロッグ

カエル顔の医者。海鳴大学病院総合医療科勤務の医者。普段は能力者を診ているが、ちよくちよく入院する当麻の担当となる。偶に臨床実験が終わった新薬を当麻に使用している。原作同様、生きているならどんな状態・症状でも治療することから冥土返し（フンキヤンセラー）の異名を

持っている。なお病院内に自信をモチーフにしたゲコ太グッズを売っている。

滝壺 理后（たきつば りこう）

アクィナス孤児院の御近所に住んでいる滝壺家の長女。原作と違い超能力者ではないが「浄眼」を保持している。本人曰く「目に見えないココロの欠片の声を聞く事が出来る」らしい。それでも麦野達の近くに居るのは居心地が良いらしい。麦野・浜面とは一歳年下で絹旗と同年代。普段でもピンク色の服を着ている。

固有スキル

浄眼

任意での発動は出来ないが強い思念・怨念が近くにある場合強制的に発動し、見聞きできる力。

まだ日常―4月7日（前書き）

次回からやっと、やっとと無印編に入りたいと思います。書けば書くほど無印編が遠ざかっててびっくりした。

まだ日常―4月7日

Side…当麻

突然だが、二年たった。驚いただろ？決してネタが無くなったとか、話が進まねえとか、神の都合とかじゃ^{作者}ないぞ？・・・おかしい右手があるはずなのに変な電波が来る。

この二年間の変化と言えば、まず第一に超能力者が世間に公表された。それは去年の三月で、しかも聖祥大付属小学校が大々的に公表された、よって四月の新生の入学式の時多くの記者とかメディアの住人が訪れた。ちなみにその新生の中に滝壺理后と絹旗最愛がいた。

そして今日は新たな新生の入学式。今年はなのは、とまり、はずみの入学式。・・・俺も三年かゝあれ？何故だか涙が出るぞ？

パッと終わった入学式。そして俺は・・・アクセルに拉致られ某病院の能力制御実験室（アクセル専用）にいます。

「で、やっぱやるの？」

「つたりめエーだ、おらアいくぞォ！」

そして、アクセルが走りだし・・・。

「っ！！」

残り三メートルの所でアクセルが一気に加速する。それを逆に半歩踏み出して右手を突きだす。が・・・。

―パシッ！

それを奴は左手で掴み、さらに・・・。

「つく！（懐に入って来た！？）」

右足で蹴りを入れてくる。それをギリギリ左腕で防御するが・・・急に左手が離れる。

「しまっ！」

―ドオオン!!

「がっ!!」

―ズサアアアッ

数メートル程吹き飛ばされる。

「はア、とっさに跳んだかア? それでもオ完璧に防げなかったみた
いだなア!？」

「ぐっ! (左手が、しびれるっ! 肋骨もやばい!?) ……何時の
間に、そんな小技、出来る様になったんだよ?」

「テメエに負けてからアだよ! よォーやく披露できるぜエ……お
らア! さっさと立てエよォ!」

「は、はは、光栄だな……。だが、負けてやるつもりはねエ!」

「良いぜエ! それでこそ潰しがいがアある!!」

足幅を半歩程開き足を前後して立つ、右手を真っ直ぐに伸ばし掌
を相手に向け、左手を腰辺りに置き同じく掌を相手に向ける。

「御神虚刀流、上条当麻」

「最強の超能力者、アクセラレータ」

「いくぜ!」「来いよォ!」

Side..美琴

―ゴオン!

「派手にやってるわね」

「程々にして欲しいんだけどね?」

「無理でしょ? だってあいつらだもん、またどっちかがブッ倒れる
まで続けるわよ」

私は今能力実験棟に来ている。既に目的の定期能力検査を終えて、
今は担当のカエル顔の医者と世間話をしている。

―ズウウン

「おーおー派手に殺ってるわねーあいつら、ああゆうのマゾって言
うんだっけ?」

何時の間にか麦野が近くに来ていた。

「あ、むぎのん。来てたんだ」

「そのあだ名やめろ、て言うか良いの？あの人達の事だから祝賀パーティーやるんじゃないの？」

「いやいや私に止めろっていうの？・・・大丈夫よ死にはしないし、怪我しても介護のコツは掴んだから」

「そう言う問題か？」

「そう言う問題なの、別に構わないでしょ？むぎのんの浜面が巻き込まれてるわけじゃないし」

「むぎのん言うなつつたろーが！あと誰が浜面のだ！！」

「むぎのん、逆、逆だよ」

これがツン100%ってやつ？

ーゴン！！！！

「きゃあ！？何よこの音！！」

ん？今聞いた覚えがある声でした。

「ねえ、あんた達！この音何よ？」

すぐ近くでまた聞こえ、後ろを振り返る。

「（知ってる声だけど、知らない子だ）」

「（随分生意気なガキね）」

そこには金髪の長い髪をツインテールにして、碧眼の女の子だった。そこまで見て一言。

「アニニューゼさんとむぎのんを足して割った様な子ね」

「みーこーとー、やっぱケンカ売ってるだろテメエ」

「誰よその人たち。ってそんなことどうでも良いわよ！私は！このうるさい音は何って聞いているの！？」

この子。

「あなたの方がうるさいわよ？」

「お前の方がうるせーよ」

「ムキィー！！」

ああ、やっぱり弄られ属性の子だ。

『ドクターフロッグ、ドクターフロッグ。至急治療室までいらしてください。繰り返し——』

「おっと、僕はこれで失礼するよ?」

終わったみたいね。今回はどっちかしら?

「美琴、賭けない?」

「もちろん当麻に」

「私は今回はアクセル、物は?」

「ん?・・・翠屋で奢りってどう?一応金額は千円まで」

「乗った」

「だから!何がどうなったのよ!?」

この子短気ね。

「簡単に言うと、最強を目指して日々修練を積んだ男二人が出会い、互いの意地と意地、魂と魂のぶつかり合いの結果?」

「それ、何処のバトルマンガ?」

「もしかしたらゲーム化かも?」

「ぜんっぜん分からないわよ!」

むう、良い出来だと思ったのに。それにだいたい合ってるわよ?

「じゃあ着いて来なさい」

そう言って若干早歩きになりながら移動する。

「ホントは物凄く心配なんじゃない」

後ろでむぎのんが何か言ってるけど無視する。

やって来た治療室、今は処置中のランプが点灯してる。

―ガチャ!

「おや?やっぱり来たね」

「先生!当麻の・・・あの人の容体はどうなんですか!?!」

「奥さん残念ながら・・・」

「そんな!?!」

「医者の観点から見るとドロ―に近い負けかな?」

「よっしゃ!」

麦野がガッツポーズをする。

「ズデン

「「「ん?」「」」

見ればついて来た女の子が転んだた。

「大丈夫?」

「あ、あんたら! 間際らしいのよ!?!?・・・で、ホントの所どうな
ってんのよ?」

「ホントもなにも、さっき聞いた通り能力制御訓練と称して本気の
喧嘩してただけよ?」

「ついでに言う一人は能力者でもう一人は・・・ちょっと変わっ
てるけど一般人、よね?」

「彼を一般人と言うカテゴリーに入れるのは悩む所だけだね?」

「超能力者に勝てるわけないでしょ!?!?」

「いや、結構互角よね?」

「今日は負けたけどな」

「うっさいわねむぎのん」

「ヤルかこのアマっ!」

「遠慮する、この後宴会だし。ってそうだ! 当麻の事聞いてない!
?」

「それじゃあ移動しようか、場所は何時もの病室だよ?」

「はゝい、あ、じゃあねー麦野くまた明日」

「あゝはいはい、奢りは今度で良いわよ」

「そう言って何時も当麻が入院する病室に向かう。その時ふと思い
出す。

「そう言えばあの女の子の名前何だっけ?」

数日後、なのはの友人として紹介されることになる。

「不幸だ」

病室に着いて一番最初に聞いた言葉だった。

「当麻く生きてる？」

「おお、美琴か。見ての通り生きてはいるぞ？」

「良かった・・・これで私となのはと氷華の将来設計は、無駄にならずにすんだわね」

「なんだそりゃ！？――っ！！」

私のボケに突っ込みを入れるが今一切れがない。結構重傷ね。

「やれやれ、無茶しないで欲しいね」

カエル先生が病室に入ってきて来る。

「じゃあ彼も起きた事だし、容体の説明に入るよ？」

「おねがいます」

説明に入るので静かにする。

「まず、重傷って言う所はなかったから後遺症の心配はないね。今回一番酷いのは右手の骨折と肋骨が折れたぐらいだね、それ以外は左肩の脱臼と全身の打撲、擦り傷ぐらいかな？」

「あんた右手が折れてるのにどうやって勝ったのよ？」

「ん？いや、ほら、あれだ、あいつの反射を利用して空手の要領で顔面に蹴りを入れたんだよ。いやアレが決まらなかったら今回は負けてたな」

「ついでに言うとな彼も左手骨折、全身打ち身に内臓にもダメージ、顔面強打に脳震盪だね」

呆れるしかない。よく毎回毎回そんなことになるまでやるもんだと思う。

「で、入院？それとも退院？」

「脱臼はもう何ともないね、肋骨もナットを入れて補強してサポートもしてある。後は体の麻痺が取れたら退院できるけど、どうするね？」

そんなもん決まってるでしょう。

「「退院で」」

なのはを悲しませる訳ないじゃない。

「じゃあ一応痛み止めとを渡しとくよ、それと明日からしばらく通

院すること・・・後で松葉杖を持ってこさせるから」

そう言ってカエル先生は部屋を出て行った。

「・・・まったくあんたは・・・今日は大人しく奉仕されなさい・・・

・なのはに」

「なのはにか!?!」

「・・・心配、したんだから」

「あゝ・・・すまん」

――傷だらけになる度に心配になるんだから。

おまけ

「ところで、さ・・・」

「ん?」

「その怪我じゃ、日常生活もままならないわよ、ね?」

「げっ!?!」

すぐさま美琴が携帯（俺と同じ型）を取り出す。

「あ! 母さん? 私、当麻が怪我したから御泊り道具一式お願い!」

「待て! 美琴! っ! あゝだだだだだ!?!?!」

そしてもう一軒連絡する。

「あ! 詩菜さんですか? 私です、美琴です・・・はい・・・そうです・・・じゃあ今晚から宜しくお願いします!」

「っくくく! っく! 間に合わなかったっ!」

「じゃあ当麻、今日からよろしく!」

「これなら大人しく入院してればよかった!」

「何言ってるの、私が一日中治るまで付添ってあげるのよ? か、感謝しなさい!?!」

「お前! 男女七歳にして席を同じゅうせずって言葉知らないのか?」

「知ってるわよ?・・・ねえ当麻、こんな言葉知ってる?」

「何だよ?」

「金も欲しい、当麻も欲しい、なのはも欲しい、氷華も欲しい!私
は、多重婚姻届けを手に入れる!」

「新手的ヤンデレっぽい!?!?」

「強欲のG（グリード）M（美琴）です（キラッ）」

まだ日常―4月7日（後書き）

ぞろ2「そろそろ無印編に入りたいと思う」

当麻「入ればいいじゃんか」

?「そうだよ！そして早く私を出すんだよ！」

ぞろ2「その前に当麻」

当麻「なんだよ？」

ぞろ2「某一族の騒動に巻き込んで良いか？」

当麻「断る！それ明らかにフラグ立つだろ！？」

ぞろ2「まあどっちにしたってストーリー上お前にフラグ立つんだけどな」

当麻「不幸だー！ー！」

?「どっちでもいいから私を出してー！」

ぞろ2「じゃあ一気に二年飛ぶけど、さっさと無印に入るか」

???「やっとなと主役のターンなの」

?「私もようやく出れるんだよ。行こ！スフィックス」

「ナ」

と言う訳で次回から無印編開始！

幻想殺しと魔道図書館（前書き）

やっとなこさ無印編突入・・・さてゴールはどこだ？

幻想殺しと魔道図書館

Side…???

そこは何処とも知れぬ場所。世界と世界の狭間。ある者は次元空間と呼び、またある者は『海』と呼ぶ場所に浮かぶ一つの島。

「・・・よく私の連絡先を知ってたわね」

そこに一人の女性がいた。濁った灰色の長い髪に、見る人がいれば思わず目を反らしそうになる服装をし、魔法使いの様な杖を持った女性は目の前のモニターを睨むように見ていた。

『なあに、少し伝があってね・・・それより良い知らせがあるんだけど聞かない?』

画面にはsound onlyの表示しかなかったが。聞こえてくる声からしてまだ若い男の様な印象を受けた。

「・・・怪しいわね、何か裏があるんじゃないかしら?」

『ふっ、やっぱりバレたかい。そうだね、君に必要だった例の実験のデータが欲しいんだけど?』

女性に自分の考えが見破られたというのに、何処か楽しそうに要求してきた。

「条件次第よ、どの道、アレでは私の願いは叶えられなかったわ」

『そうかい、じゃあ言葉では伝わりにくいからデータで送るよ。あつ、もしその情報を気に入ったのなら、付属して添付してあるアドレスに例のデータを送ってくれたまえ』

「なぜ私に?」

『君がやろうとしてる事。一研究者としては興味を引くし、意外と面白そうだったからね』

「・・・何処で私のやる事を知ったのか知らないけど、データぐらいあげるわ」

『おや、それはありがたい。でわ・・・』

ーブウン

そういつて通信が途切れた。そして女性は受けとった情報を見る。
「・・・っ！これは！・・・ふ、ふふ、ははは、あははははははははは！！これで！これで長年の夢が叶う！！」

その女性はが狂喜の声を上げる。そして部屋の真ん中を見る。

「・・・待っててね——」。私の可愛い愛しの——」

そこには、縦長のシリンダーの様な物に一人の少女が浮かんでいた。

——狂気に支配された魔導士は動く・・・膨大な魔力を秘めた、願いを叶える宝石の元へ

S i d e ..当麻

なのはの入学から三年近くたった。春休みで既に月日を跨いだ今日。のんびり過ごそうと思いい目を覚ましたら昼近くだった（1不幸）、色々家事が溜まっていたので、それに夕方近くかかってしまった（2不幸）。ちなみに親父達はいない、別に夫婦で旅行に行ったとかじゃなく、親父の長期出張に母さんがついて行ったので二人ともいない（まあ二ヶ月に一・二回ほど帰ってくるが）

掃除が終わった後、夕食を何にしようかと迷い冷蔵庫を開けたら、昨日の時点で食材はほぼ空の為、食材の買い出しに行ったら夕方の買い物ラッシュに遭遇し（3不幸）、肉の特売セールで無事二パック確保出来たと思ったらオルソラさんにエンカウントし、一時間ほどオルソラワールドに引きずり込まれ体力と精神力を削られ（4不幸）（ちなみにオルソラさんは、あの後アニューゼに引っ張られていった）。

そして現在、近道を通り家の前。玄関先で思いつき不幸フラグ臭がするものがある。

そこには、真っ白い物があつた。・・・否、よく見れば所々に金色の刺繍が入った服で、銀髪の髪と手足が生えてた。

「・・・やっぱり、人、だよな？（だいたい八・九歳辺りか？）」「意外と小さい子だった。」

「うっ・・・だれ？」

「それはこっちのセリフだ！？お前がぶっ倒れてるせいで家には入れねーんですけど？！」

「・・・お腹、へった」

「しかも食い倒れと申すか」

「お腹減ったって言うてるんだよ？」

「あゝ・・・正直に答えたら考えてやらん事も無い」

「ホント?!」

「元気だなオイ！？・・・んんっ、お前家は？」

「んゝ此処から遠い所かも」

「家出か？」

「お仕事かも」

訳分からん。

「その服、シスター服？て事はローマ教会の人か？（この辺りだとオルソラさんがローマ教徒だったよな）」

「この服？一応シスターっぽいデザインなんだけど、あと私は十字教の人間だよ！」

「・・・十字教って何？」

「む！十字教って言うのは、百数十年前から次元世界に存在してる魔術師が集まって出来た組織でね、主な活動は魔術の探究、悪用されないよう魔道書の管理・保管とかを目的とした――――」

「ストオープ！！長げえよ！！その話しまだ続きそうか!？」

「え？そうだけど？っていうかお腹減ったんだよ」

「分かった！メシ食わせてやる！」「やった!」「ただし!」「?」詳しく聞かせて貰うぞ、特に次元世界とか、魔術とかを、な」

「あ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「ほ、他を当たるかも!!」

「待てい!」

「ガッ!」

逃げようとする少女の肩を右手で捕まえる。

「パキイン!」

その瞬間、何かが碎ける音と共に、白い服が一瞬で黒を基調とした地味なシスター服に戻る。

「へ?」

「うそ!? 何で!? どうしていきなり服が元に戻るの!? って魔力が練れない!?!」

「(・・・何にも出来ないってんなら好都合だな)・・・とりあえず、メシ食うか?」

「・・・御馳走になるんだよ」

「にゃー」

「ん? 猫?」

何時の間にか、足元に三毛の子猫がいた。

「あ、この子はね私の使い魔でスフィンクスって言うんだよ」

「使い魔ときたか、最早隠す気ねーだろお前?・・・ところで、何か苦手な物とか嫌いなものってあるか? あと宗教的に禁止されてる物とか」

「特に禁止されてる物はないよ? 取り敢えず、お腹一杯食べたいな!」

「具体的には何人前?」

「んゝ三人前ぐらい、かな」

買い足した食材を見る。

「俺の分もあるから精々二人前にしろ」

そう言い家に入る。

「御馳走さま！えっと、みこと？」

あの後軽く自己紹介した後、速攻で夕飯を作った。ちなみにメニューはチャーハンにワントンスープ、サラダに肉じゃが（御坂家からのおすそ分け）。

「はいはい・・・洗い物するからちよっと待ってなさい。確か・・・インデックスって言ったっけ？」

そう言って美琴が洗い物をしにキッチンに向かう。そう美琴が！あの後、美琴がおすそ分けついでに夕食の手伝いに来たのだ（今はサポート程度の実力）。・・・美鈴さん絶対に美琴を俺に嫁がせる気だな。

「そうだよ。あと、このりよ、緑茶？だっけ。なんか落ち着くかも」
こいつ、人さまの家に入って一時間程で適応しやがった。

「さて、詳しい話を聞こうか」

「ん。まず初めに言うとな世界は一つじゃないの」

「「・・・」」

「あ！信じてなさそうかも」

「あー・・・それって平行世界って言う意味じゃ・・・」

「ないよ。そうだね、ある研究者の言葉なんだけど『並行他次元世界』って言い方もあるかな」

やっぱり、もう以前（前世）の記憶なんてさっぱり無くなってやがる。これって確かりり・・・なんとかって話に出てきたやつだったよな？たしか・・・次元世界だっけ？

「とくまあゝ」

「はいはい、そうだな今の話を上条さん流で理解して説明するなら・・・」

そう言って台所にあった煎餅の袋を持ってくる。

「これだな」

「ぬれ煎餅？」

「・・・とうまって意外と頭良い？」

失礼な奴だな。

「まず、これが俺たちが住んでる世界」

そう言って袋から煎餅を一つ取り出す。

「そしてこれが、インデックスが住んでいた世界だしよう」

そしてもう一つ取り出す。・・・ついでにスフィックスが持っているとしたので左手ではたく。

「そしてこれが・・・そうだな、森ばっかりしかない世界」
もう一つ取り出す。

「辺り一面荒野な世界、アニメやゲームが現実になった世界、他にも似通った世界があるでしょう。・・・此処までは分かるか？」
次々に袋から取り出し空っぽにする。

「う、うん」

「それらが一緒くたに入っていたのが、この袋。つまるところ・・・」

そう言って取り出した煎餅を全て袋の中に入れる。・・・一枚取られた。

「それが今インデックスが言った次元世界ってやつだと思う」

「へえ〜！」

「すごい！とうま！合ってるよ!!!」

「じゃあ続き言ってくれ」

「分かったかも。その前にそれ頂戴！」

話が進まなそうなので素直に渡す。

「（―パリッ）その次元世界の中心が、魔法文化発祥の地が第一管理世界ミッドチルダ、時空管理局って言う組織が発足されたのこの世界。ちなみにこの世界は第九十七管理外世界だったかな」

「ねえ時空管理局って何？」

「ん〜簡単に言うと警察と軍隊と司法機関が一緒になった所、かな」

うわぁ〜絶対まともじゃなさそうだな。

「（―パリッ）それで、私がいたのは第三管理世界でね、まあそこにある十字教会って所に所属していたんだよ」

取り敢えず入れなおしたお茶を一口。・・・うめ。

「なんか世界的なスケールがでかいし、今も実感がないな」

「私もさっぱり。あ、続けて」

「（―パリッ）私が所属していたのは十字教内でも特に危険な必要^{ネセ}悪の教会って所にいたんだ」

「危険って、あんた今いくつよ？」

「今は・・・八歳かな？危険と言っても私にとってはあんまり危険じゃないんだよ？」

「・・・どういう意味だ？」

「・・・私たち必要悪の教会が行う主な行動は、魔道書の解析、封印、管理、保管すること。知らないと思うから言っておくけど、魔道書ってね精神に物凄く有害なんだよ。少し読んだだけでも発狂する危険性があるんだよ？」

「そんな物燃やしちゃばいいじゃない」

たぶん、それが出来ないんだと思う。

「無理なんだよ、完成された魔道書、特に原典はページ一つ一つ表紙さえも魔方阵になって壊れないし、力の強い物は自己修復、自己復元能力までついてる物があるんだもん封印するのがやっとなんだよ」

やっぱりか。

「それでなんでお前は危険じゃないって言えるんだ？今聞いたばかりじゃ結構危ないんだが？」

「私はね、魔法を使用する為の器官、リンカーコアもある、魔法もある程度は使える。けど魔術だけは何でか知らないけど使えなかった。それに・・・私は最初っから知っていたの、十字教内に保管してある十万冊以上の魔道書を、まるで、生まれた瞬間から言葉を知っていた赤ん坊の様に。だから私を育ててくれた人がインデックスで私に名付けたの」

「ん？育て親って事はお前もしかして」

「うん、赤ん坊の頃に拾われたの」

「そっか」

沈黙が下りる。

「そう言えば聞いてて気になってたんだけど、魔法と魔術って違うの？」

美琴が質問する。

「ん」と、空气中に存在する魔素、魔術用語で言うならテレズマもしくはマナって言うのを、体内のリンカーコアって呼ばれる器官を通して変換したものを魔力って言うんだけど。それを術式に流して使用したのが魔法。全く別の法則を用いて超常現象を引き起こす事が出来るのを魔術って言うんだよ」

「とーまー」

「俺だって専門外だ」

「ん」簡単に言うとは。魔法は才能のある人間が、魔術は才能がない人間が何年も下積みして初めて使用できる物って考えた方がいいかも。あとはデバイスを使用するかどうか、かな」

「「デバイス？」」

「うん、これ」

インデックスが青いひし形の宝石が付いたペンダントを見せる。

「この子の名前は「ヨハネ」。あっ！とうまは触らないでね！・・・魔法を使う人の事を魔導士って言うんだけどね、デバイスって言うのは古い言い方すれば魔法使いの杖かな、この中に魔法を使うための術式が入ってるの。他にも魔導士は魔法を使う際に魔法陣が視覚化するんだけど、魔術師は発動条件さえ整っていれば速攻で使う事が出来るし、魔法陣も視覚化しないから気付かれ難いのが特徴かも」

「「へえ」」

一気に色んな事を知ったから知恵熱が出そうだな。

「そうだな、一番肝心な事聞くの忘れてた。・・・インデックス、結局お前何しにわざわざ管理外世界まで来たんだよ」

「さっきも言ったけど、私達ネセサリウスはあらゆる魔道書の解析・封印・確保してるって言ったよね？」

「言ったな」

「そういえば言ってたわね」

「えっとね何処経由か知らないけどね、ずっと管理局が最上級危険物扱いしてる魔道書が、この世界にあるって聞いて、一人で来たんだけど・・・個人で長距離転送を何回もしたらお腹が減ってね」

「家の前で倒れてた、と」

「後ね、お願いがあるんだけど」

「家に住まわせてくれ、か？」

「う、うん。魔道書の問題が解決するまでも良いの」
「どうするか・・・」

「まあ良いぞ？ただし、家に住むからには、ちょっとでも良いから家事を手伝ってもらうぞ？」

「ありがと！とうま！」

「また安請け合いです」

さてまずは予備の着替えと部屋だな。・・・あ。

「そういえば、その魔道書、なんていう名前なんだ？」

「確か管理局では『闇の書』って名前だったかも」

「何か不吉な名前ね」

まったくだ。

「そうなんだよ！・・・で、本来の名前は『夜天の書』って言う名前なんだよ」

「ロマンがあるな」

「良い名前ね」

「・・・当麻達ってなんでそんなに冷静なの？」

「「鍛えられてるからな」」

「もういいかも、そう言えばとうま、とうまはどうやって私のバリアジャケットを破ったの」

「バリアジャケットってあの真っ白いシスター服の事か？あれって

魔力ってやつで出来てんのか？」

「そうだよ！あの服には衝撃吸収、防弾・防刃の物理障壁、対魔防御、気温調整その他もろもろの機能がついてたんだよ！ただ触れただけじゃ一瞬にして破壊される訳ないんだよ！？」

「それなら簡単だな、俺の右手は幻想殺^{イマジンプレイカー}して言ってな。超能力も、たぶん魔法も魔術も・・・神様の奇跡だって打ち消せる力が宿ってるんだよ」

「・・・」

「どうしたインデックス？」

「ヨハネ」

「Understanding. (了解)」

いきなり目の前に光る球が出てきたので・・・取り敢えず右手で触れる。

―フツ

触れた途端、いきなり消えた。

「ヨハネ？」

「Blotted out. (消されました)」

「・・・うん信じてあげるよ（ニツコリ）」

「ぜってえー信じてねえだろ」

「当たり前かも！？何その右手！理不尽かも！反則かも！」

「お前の物言いが理不尽だよ！？」

「あ、お風呂沸いた・・・当麻！一緒に入ろ！」

「何でだよ！？」

「聞ってるの！とうま！？」

「ああもう！やっぱ不幸だー！」

――役者は揃い始める

おまけ

翌日。

「っ！（なんじゃこりゃー！）」

大声を出さなかったのを幸運と思った。

「すうー・・・すうー・・・」

昨日自分のベットをインデックスに貸し、自分は床に敷布団を敷いて寝たはずだった。それが朝起きたらインデックスが左側に潜り込んでいた。さらに・・・。

「ん・・・んにゃ・・・」

昨日、きちんと御坂家に送り届けたはずの美琴が右側に潜り込んでいた。

「（おかしいっ！俺は確かに鍵を掛けてチェーンも掛けたはずだ！なぜここに美琴がいる！？）」

起きた後聞いてみた。

「え？合いかぎはともかくチェーンをどうしたかって？あのチェーンって銅よ？私の電磁波で簡単に開けられるわよ」

——絶対にチェーン変えてやる。そう誓った当麻だった。

幻想殺しと魔道図書館（後書き）

ぞろ2「やっとか」

当麻「やっとかだな。てか無印編始まるまでに十話って」

ぞろ2「しかたなかったんだよう、なかなか頭ん中の妄想空間が止まらなかったんだから」

当麻「それは良いんだけどこの作品の主人公とかヒロインとかどうなってるんだ？」

ぞろ2「えっと現段階で決まってるのは主人公3人、正ヒロインが7人、ヒロイン兼主人公が1人」

当麻「ヒロイン多いな！てか最後の1人分りやすいな」

ぞろ2「あと準主人公が1人？一匹？に、準ヒロインが6人」

当麻「これもわかりやすい、か？準ヒロインがまた多いし」

ぞろ2「まあこれが現段階での役割かな？」

当麻「よく考えてあんだな」

ぞろ2「さて、無印編をだらだらと書き始めるか」

当麻「まあ頑張ってくれ」

次回「少女の出会い」

——少女は手にする。自身に眠る力と翼を・・・

ぞろ2「もしかしたら前後半に分かれるかも」

当麻「おい！！」

少女の出会い（前編）

Side..???

―ドオオオオン！！

ひきりなしに警告音と爆発音が鳴る中、一人の少年が走っていた。

「へわかった！あなたは他の皆と一緒に脱出してください！>」

「へー坊はどうするんだ！？>」

頭の中に響いてくる知り合いの男性の声に答えを返す。

「〈僕はアレを確保してから脱出します！幸いここから近いですし、アレを放つとく訳にはいきませんから>」

「へくっ！死ぬんじゃないぞ！ー坊！>」

「〈分かってます！>・・・さて！急がなくちゃ！」

そして走りだし、目的の物が保管してある部屋の前に辿り着き、ドアを開ける。

―プシュッ！

「！あった！！（ドオオン！！！！）！？しまった！外壁が！っおわ！！」

少年が目的の物を発見したのと同時に、外側の壁が爆発する。少年もまた、爆風で吹き飛ばされる。

「っあれは！！・・・管理か管理外か知らないけど、次元空間に投げ出される心配はなさそうだ」

その後すぐに、自らが確保しようとした物を見つける。

「アレもあの世界に落ちるのか・・・今からじゃ間に合わない。出来れば纏まって落ちてくれますように」

そして、少年もその世界に落ちた。

自分がバリアジャケットに包まれているのにも関わらず、全身が風を切って落ちてる事が分かる。

目を開けると真下は闇に包まれた街・・・街？

「つて！高！！っ、ジュエルシードは？！」

少年は自分の直ぐ近くを落下している物を見つける。

「二つ・・・バラバラになったのか。確保しなきゃ・・・そう言えば僕ってデバイスとの適正って低いんだっけ」

そう言っって自分の首からぶら下がってる赤い玉を見つめる。

「レイジングハート、すまないけど、手伝ってくれるかい？」

「問題ありません。頑張りましょうアナザーマスター」

――数十分後

「はぁ、はぁ、一つ、はぁ、はぁ、逃しちゃった・・・」

辺りは木々に囲まれた場所で、少年は今にも倒れ込みそうなほど疲れていた。

「ごめん、レイジングハート。君を使いこなせば、良かったんだけど、僕には無理みたい」

「お気になさらず、取り敢えず一つだけでも封印出来ました」

「ちくしょおへ誰か、この声が聞こえる誰か、お願い、力を貸して・魔法の・・・力を・・・」

ドサッ

その場に倒れた少年が光、その場には一匹のフェレットが横たわっていた。

「っ誰！？こんな時間に強制念話なんてやった人は！此処、管理外世界なんだから念話なんて聞ける人なんて何も知らない一般人だけなんだよ！？」

上条邸の一室で突然の念話に叩き起され辺りを見渡す。

「むう〜」

しかし一向に念話は来なかった。

「もういいかも、寝よ。・・・明日・・・とうまに・・・相談・・・しよ・・・ZZZ」

Side…なのは

『起きろー起きてー起きて下さーい！まずはその眠気を吹き飛ばす！』

録音した特製の目覚ましの声で目が覚める。

「何か、変な夢見たの・・・朝、起きなきゃ」

起きて制服に着替え、部屋から出る。

「おはよう！お母さん！」

一階に降りてお母さんに挨拶をする。

「あら、おはようなのは、顔洗ったら恭也たちを呼んで来てくれる？」

「分かった！」

すぐに顔を洗い、離れの道場に向かう。

「お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん朝食だよー」

「ん？もうそんな時間か、二人とも今日は此処まで」

「・・・ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

道場の中にいたのは私のお父さん―高町士郎―と、お兄ちゃん―高町恭也―とお姉ちゃん―高町美由希―でした。この中に休みになると知り合いの男の人、上条当麻くんが増えます。

「じゃあ、いただきます」

お母さんの合図で朝食を食べ始める・・・そして、ある意味居づらい時間でもある。父と母、兄と姉が当麻くん曰く「イチャつくカップルな雰囲気」になるので、必然的に一人で黙々と食べ進める・・・早く休みになるか当麻くんの家に寝泊まりしたいの。その事で思いつく。

「（そう言えば、当麻くんのお父さんとお母さん海外に出張して一人だったけ・・・間違えた、この前居候が出来たって言ってた。・・・美琴お姉ちゃんはかじり虫って言ってたけど、どういう意味だろ？）」

朝食後歯を磨き、身だしなみを整えて自室から鞆を背負う。部屋を出る際に机の上に飾ってある写真立てを見る・・・その中には私が入学する時に撮った写真があった。私を真ん中にして左右に男女一人ずつが並んで立ってる写真―後ろで火柱が立ってたり、人が吹っ飛んでたり、長刀を振り回している人たちがいるが無視する―を見ると胸のあたりが温かくなる。

「行ってきます」

そして元気よく家を出る。・・・今朝見た夢に違和感を感じながら。

――少女は出会う。己の人生を変える出会いと魔法に

Side…当麻

「と、言う訳なんだよ当麻・・・おかわり！」

「朝から不幸だ、1不幸だ・・・ほい、これで朝飯はもうないぞで、どうすんだ？」

「んゝおいしいー・・・取り敢えず、どんな状況か分からないんだよ」

ふむ、何か忘れてる気がするが。

「ちよっと待ってろ。・・・私に良い考えがある」

「とうま？何でいきなり口調が変わったの？」

ツツコミが欲しい。そう思いながら自室からある物を取って来る。

「これだ」

「これって・・・地図？」

「おう、海鳴市近辺の地図だ。つとここだ」

地図の一部―海鳴公園―に丸印を付ける。

「今日の放課後、だいたい三時半ぐらいに此処で合流な」

「む。とうまはやっぱり首を突っ込んでくるの？危ないんだよ？」

「アホかお前、自分の住んでる所に危ない物が落ちてたら怖えーだろうが。それに俺には右手があるし、魔法関連なら結構有利だろ？」

「むゝゝ確かにロストログア関連だったら物凄く頼りになるけど・

・・・」

「もし待ってなかったら夕飯は無しな？」

「分かったかも！ちゃんと待ってるかも！！」

ふっ、ちよろいちよろい。

「ほい、後は此処つとこの地図失くすなよ、インデックス」
翠屋の場所を三角印で囲み、インデックスに地図を渡す。

「この三角形なに？」

「そこは翠屋っつー喫茶店だ、昼はそこで食べ。後これも
そう言って二千円程財布から出して渡す。」

「じゃあ行ってくるなインデックス、あとスフィックスも」

「あ、まって当麻！私も一緒に出る！鍵閉めなきゃいけないんでし
よ？」

「ん？ああそうか、助かる」

そしてインデックスと一緒に家を出る。

「お！来た来た当麻、おはよー！あと、あんたもね」

「む、おはよう短髪」

何やら火花が飛んでいるが気にせず鍵を掛ける・・・余ってる合
いカギをインデックスに渡すかどうか親父に相談だな。

「じゃあインデックス、気をつけろよ？あと補導されないようにな
？」

ちなみに学校までは徒歩で三十分程の距離だ。その為良く知り合
いが集まる。

「分かってるかも？」

「「かもかよ！？」」

そう言っただけ方向に歩きだす。

「まうた厄介事？」

「そんなもんだ。まあ、状況次第で他の連中の手を借りるかもな」

「ふーん・・・気をつけてね」

「分かってる。伊達に場慣れ不幸慣れしてねえよ。そういえば双子は？」

「前に知り合った子の家に泊まりに行った。今日はそこから通うみ
たいよ？」

そう言えば何か忘れてる気がする・・・宿題とかじゃねえよな？
——彼もまた非日常に足を踏み入れる

Side…とまり

「むう〜」

「どうしたんや？アホ毛ちゃん」

朝に見た夢を考えていると、この家の家主八神^{やがみ}はやてが車椅子の上から話しかけてきた。

「とまりはそんな名前じゃないよ、はやて！？ってとまりは憤慨してみる！」

「ごめんごめん」

もはやお馴染みと成りつつある一連のやり取りをする。

「とまり、行きますよ」

二階からはずみが降りて来てそう言った。

「はやてはやっぱり、不登校？」

「そうやな・・・やっぱこの足だと不安やし、家の事もしなあかんからな」

「そっかー残念。ってとまりは心の中で！この不登校見めって罵ってみる」

「相変わらず心の中が駄々漏れやん！？」

「では行ってきました、と心の中でこのサボり魔めと思いながらとまりを置いて行きます」

「なんやこのドS姉妹！？」

「わ〜まって！はずみ！！いってきますはやて！ってとまりはとまりは〜！！」

慌ててはやての家から出ると。はずみが待っていた。

「とまり、今朝の事なのですが。っと、双子の片割れに尋ねてみま
す」

「やっぱりはずみも感じたんだ。って、とまりはとまりの思い過しじゃなかったんだって思ってみる。それに、何時もと違って海

鳴の空気が・・・」

「「違和感を感じる（ます）」」

私達の意見が重なる。

「なんか何時もの当麻にいの不幸とは」

「おそらく別物ですね」

「・・・あの人にも相談してみる？って　とまり　は　はずみに
意見してみる」

「では昼に保健室で昼食ですね。っとはずみは密かにあの人の動向
を探っておいて良かったと思ってみます」

「まって　はずみ！何時の間にそんな事って！バスが来た！？」

——彼女達は今日を境に自分たちのいる『世界』の広さを知る事
になる

Side..なのは

「将来かー、美琴お姉ちゃんは何かあります？」

お昼時。私は学校の屋上で親友のアリサちゃんとすずかちゃん、私
にとって大切な人の一人美琴お姉ちゃんと、そのお友達の風斬氷華
さんと一緒にお昼ごはんを食べている最中に、午前中に言われた将
来設計について聞いてみた。

「ん？・・・そう言えばそんなことやったわね。私は・・・特に考
えてないかな。氷華は？」

「私？私も・・・特に無い、かな」

その時アリサちゃんが話しかけてきた。

「なのははあるでしょ、ほら、あの男と将来翠屋を継ぐって「にや

「にゃー!!」むぐう!？」

アリサちゃんが小声で余計な事を言ったので慌てて口を塞ぎます。
・・・私の卵焼き。

ちなみに今日は美琴お姉ちゃんの双子の妹さん、とまりちゃんとはずみちゃんは別行動。学校の問題児集団「上条組（トラブルメーカー兼トラブル解決を込めた呼び名）」は大半が今度の夏休み企画＋体育祭の飛び入り企画で人目につかない所で集まってるか、言葉通りの単独行動の為、屋上にはいない。

「ん? どうしたのよ・・・ほい」

横目で美琴さんを見たが、どうやら聞こえていなかったようで安心していたら・・・おかずが差しだされた、しかも卵焼き。・・・
・あむ。

「はわあゝ」

「(クスクス)」

「?」

そしたら美琴さんと氷華さんが幸せそうな顔になった。

「ーむぐむぐ、っん。やっぱおいしわね桃子さんの卵焼き」

「アリサちゃん、はしたないよ?」

「そう言えば」

「「?」」

私の言葉にアリサちゃんとすすかちゃんが首を傾ける。

「二人は考えてあるの?」

「私はもちろん! 家を継ぐのよ! その為に今も頑張ってるんだし!」

「私はやっぱり工学系かな」

「・・・やっぱ二人はすごいんだねゝそれに比べて私は・・・取り柄とかないし」

「ばかなのは!」

「ふええ!!」

突然アリサちゃんに怒られたと思ったら頬被抓られた。しかも結構痛い!？」

「いはあいひよはふいふあふあん!？」

「あんた私より理数の成績良いでしょうが！」

「いはい!いはい!いはい!」

「アリサちゃん、アリサちゃん。頬、引っ張りすぎてる」

「あ、ごめん」

やっと離してくれたの。

「そうよ!なのは!不安になる事は無いわ!」

突然さっきまで精神がどっかに飛んでいた美琴お姉ちゃんが会話に入ってきた。

「美琴お姉ちゃん?」

「私と当麻の経営する翠屋の癒し系ペットとしてのポジションがあるじゃない!」

「美琴ちゃん?それは何か違うと思うよ?」

「私もそう思います」

「わ、私もかな?」

美琴お姉ちゃんの言葉が心の中で反芻する。

「癒し系、ペット・・・二人と一緒に・・・あー!ストオオツプ!なのは!」

「ゴン!!」

「痛い!?!はっ!今のは夢!?!」

何か幸せな夢だったの!

「大丈夫かな、なのはちゃん」

「大丈夫だよ、きつと。だって当麻くんが居るんだも」

あ、そろそろ予鈴が鳴る。

Side…アクセル

——時は遡り保健室

昼のチャイムが鳴り、保健室で静かに飯を食ってる最中に双子が騒がしく来たと思ったら。いきなり訳の分からねえ事をしゃべりだした。

「—という訳！ってとまりは説明してみる」

「そう。なるほどね・・・」

それら全てがメンドかったので芳川に全て丸投げした。

「でエ？何言ってるのかア分かったのかア？」

「そうね・・・単純に言うのと、この子達はこの町で何かが起こるかもしれないって言ってるのよ」

「何かってエ・・・なんだよ？」

「さあ？」

使えねエー。

「私には分からないわよ、私は科学者よ？理論的な事しか言えないわ。・・・ただ、この子達も一応超能力者なのよ」

「ああア？はじめて知ったぞオ？そんな事」

「それはそうでしょ、あなたやお姉さんの美琴さんの様に、目に見える現象じゃなくて内面的な能力だし、能力制御しようがしまいが関係ないのよ」

芳川の言葉で改めてガキ共を見る。

「私達の能力名は『ネットワーク』、思ってる事やもう片方の存在を感知できる力です。っと、はずみは自分の力を説明してみます」

「双子の共有感覚ってやつだね！ってとまりは簡単に述べてみる！」

「ああアなるほどなア」

そう言われて一応納得する。

「そういう事。双子のこの子達が夢とはいえ同じ物を見て、知らない人の声を聞き、さらに今日の海鳴は何処か空気がおかしいって言うて来た」

「本当に何かあるってエぐらいしか分かってねエじゃねエか」

「だからそう言ってるじゃない。オカルトだとかファンタジーとかは専門外よ」

これあいつ絡みの不幸じゃねえよな？

「所で二人とも携帯持ってる？」

「持ってますが？と、はずみは見せびらかします」

「持ってるよ。はいこれ！何時トラブルに遭っても良い様になってお母さんが買ってくれた！ってとまりは自慢してみる！」

「じゃあ・・・はい」

そう言って芳川は二人に紙切れを渡す。

「「？」」

「私の携帯の番号と、あの子の携帯の番号よ。あの子のアドレスも書いてあるわ」

「やった〜！ありがとう！芳川先生！ってとまりは早速登録してみる！」

「芳川アア！テメエなに勝手に人の番号教えてやがる！！」

「あ、予鈴が鳴ります、行きますよとまり。とはずみは密かにポケットの中に紙をしまいます」

「わかった〜。またねアクセル！ってとまりは手を振りながら部屋を出る！」

うるさい二人が出て行った。

「ちィっ」

「アクセル」

「なんだよ？」

「あなたの力は結局のところ自信を守る事に特化しているわ」
「・・・ンなのとつくのとうに知ってるよ」

「けど、あなたが前に出れば前からの攻撃だけは防ぐ事が出来るわ。後ろは後ろにいる人を守ってもらいなさい」

「コンな時に説教オカア？」

「違うわよ・・・あなたはもう一人じゃない、一人でいる必要も、

一人になる必要もない。その事を覚えておきなさい」

「・・・ふん。どっちにしたって、一人のオ方が戦いやすい」

・・・結局説教じゃねエーか。

Side..なのは

放課後になり、今日は塾の日なので向かってる最中です。・・・

二人ともお嬢様なのにこんな無防備で良いのかな？

「そういえば、なのは」

「ふえ？何？」

「はすみ と とまりって何で塾に通ってる私達と同じ点数取れてんのよ？」

「やっぱりお姉さんに教えてもらってるの？それに、なのはちゃんも文系は苦手なのにテストだと赤点取ってないよね？」

そう御坂家の三姉妹は塾にも通っていないのにも関わらず、テストの成績は上位に組み込んでる。けどそれって確か・・・。

「えっと、何と言いますか、氷華さんと・・・その、当麻くんに教えてもらってるの・・・」

「「へ？」」

二人が驚愕してる。分かる気がするの。

「あいつって、いつも騒動に巻き込まれて、時には授業にさえ出てこれなくて毎回半分以下の点数しか取れないんじゃないの？！」

「うんうん。私、毎回美琴さんに勉強教えてもらってるんだと思ってた」

「えっと何でか知らないけど当麻くんって、勉強できるんだけど、テストの時だけ何でか知らないけど実力が出せないって言ってた」けど、なんとなくそれは嘘だと思うの。

「人を見掛けによらないのね」

「・・・今度教えてもらおうかな？」

「すずか？」

「すずかちゃん？」

「へ？・・・！な、なんでもないによ！？」

怪しいの、美琴さんに報告しとくの。

「あ、ここ。ここ通ってくと塾の近道になるのよ」

海鳴公園の入り口近くで、アリサちゃんがそう言うときさっさと行ってしまった。・・・本当、何でこんな人通りが少ない所歩いて行けるんだろ？

「た・・・けて」

「ん？」

「どうしたのなのはちゃん？」

「え？いや・・・なんか聞こえたような」

「どうしたのよなのは？」

先を歩いていたアリサちゃんが戻って来た。

「・・・す・・・けて」

「まただ」

「どうなってんの？」

「さあ？」

「たすけ・・・て」

頭に響いてくる声に誘われる様に、雑木林の中に入って行く。

「なのは！？」

「なのはちゃん？」

後ろで二人が声を上げてるが無視して突き進む。・・・たぶん美琴お姉ちゃんも・・・当麻くんもそうしただろうから。

「はあ・・・はあ・・・何処！？」

へたすけてっ

ふと目が一本の木の目元にいく。

「急に、走り、だして……どうしたのよ　なのは！　なのは？」

「大丈夫？　アリサちゃん……この子。確かフェレットだっけ？」

そこにはクリーム色の毛並みで、首に赤い玉を付けた小さな動物。フェレットが傷だらけで横たわっていた。

「怪我、してるのかな？」

「えっとこの近くの動物病院は……確か槇原動物医院があったわね」

「じゃあ行こう！」

「なのはちゃん。しー」

すずかちゃんが口到人差し指を当てて静かにしろっというジェスチャーをとる。

「……そつとよ？」

「わかったの」

フェレットさんを静かに持ち上げる。

「外傷は処置したから傷とかは残らないわね、今はまだ疲労で寝てるわ」

「あの、お金とかは？」

「ああ、いいわよ子供が自分の感情に素直なのは良い事よ？」

優しそうな獣医のお姉さんが無料で診てくれた。

「「「ありがとうございます！」」」

「良いつて良いつて！　それよりもこの子をどうするか、ね」

「あの、このままだと、どうなるんですか？」

「……やっぱり保健所送りかもね。まあ数日はここで保護しておから親御さん達とよく相談しなさい。……それはそうとして、お見舞いしてく？」

「「「はい」」」

そういつて案内され、診療台の上に寝かされている子を見る。

―ぴくっ

「あ、起きた」

「よく見るとこの子変わった毛並みしてるわね」

起きて周囲を見渡した後、私達・・・いや、私を見ていた。試しに手を近づけてみる。その子は始め匂いを嗅いだ後、指を舐め。

―ぱたっ

また気を失う様に寝てしまった。

「あっ！ヤバい！塾の時間に間に合わなくなる！？」

「ふえ！？」

「い、急がないと！？」

その後、慌てて病院を出る。さっきの女医さんに怒られた気がするけど気にしない事にするの！

そして塾に向かう曲がり角で・・・。

―ドン！

「にゃあ！！」

「あうっ！」

誰かとぶつかった。

「いたたたた」

「大丈夫なのは！？」

「なのはちゃん大丈夫？立てる？」

「はっ！あ、あのごめんなさい！大丈夫ですか！？」

すぐさま立ち上がり、ぶつかった人に謝る。

「ううゝ大丈夫、かも」

「にゃ〜？」

そこにいたのは真っ白いシスター服を着た女の子だった。足元には小さな三毛猫がいた。

「あ、ねえねえ。ぶつかったついでに聞きたいんだけど。この丸印の付いてる所、海鳴公園ってどこに行きたいんだけど。どう行けばいいの？」

「あっと！此処からだと――。――、――ってなってるんで

すけど分かります？」

「・・・うん、大丈夫！ありがとうね！」

そう言って足早に去って行った。

「なんか不思議な感じのする人だったね？」

「そう？」

「そうかな？って！急がないと！？」

「じゃあ！！！」

「そうだった！急ぐわよ！」

——日常で出会った存在は非日常への案内人

少女の出会い（前編）（後書き）

更新した途端、書き換えられたので再投稿しました。

少女の出会い（後編）

Side…当麻

「それで、何か分かったのかよ？・・・野菜が安いな大量に買っとくか」

現在インデックスと一緒に夕食の買い出し。大食いの誰かさんがいるおかげで二・三日で食材が無くなる。・・・やっぱ親父に連絡して月々のお金を増やして貰うか、こいつの言うのとやらに請求出来ないだろうか？

「えっとね、今日一日歩きまわってみただけど、魔法を使われた痕跡はなかったから、事故でこの世界に落ちて何処か分からないから、取り敢えず強制念話で救難信号を発したんじゃないか。つてのが私の推論だね・・・とうま、プリン」

「小さいのを二パックか大きいのを一個のどっちかだ。・・・で？肝心の人物には会えたのかよ？・・・白身魚が安い、買いだな」

「それが結局、見つからなかったんだよ。・・・とうま、ケーキは？」

「翠屋のシュークリーム買ってきてやるからそれで我慢しろ。・・・じゃあこれからどうすんだよ？」

「んゝその人次第、かな？基本的に魔術を使う人は魔術、魔法を使う人は魔法って感じだから。その人も魔法しか使わないと思うし。私も魔法を使われないと大気中の魔素の流れを把握して術者^{発信源}を特定できないし」

ふうん色々あるんだな。魔法の法則ってのも。

『ただいまから！豚肉、鶏肉二百グラム、百五十円！御一人様二パックまでと——』

「なん・・・だっ」

「とうま、これって絶好のチャンスってやつ？」

「インデックス！お前はここで待ってろ！^{確保して}すぐにけりつけて来る！

「！
何の為に今まで鍛えてきた！？こんな時の為だろ！！（※違います）」

Side…なのは

夕食後、私はフェレットを見つけた事、塾でアリサちゃんとすずちゃんと話し合い家で飼えないかを家族に話しているところなの。・・・そう言えば、私がこんな風に我が儘を言うのって誕生日とか特別な日だけだったのを思い返す。

「そうだな・・・飼っても良いが、散歩に行く以外は檻に入れておく事。触ったら手を洗う事。きちんと面倒を見る事を守るか？」

「えっと、ちゃんと檻に入れておく事、触ったら手を洗う、私が面倒を見る事・・・うん！やる！ちゃんとやる！」

「じゃあ決まりだ。明日引き取りに行こう」

「うん！お休み！お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

「」「お休み、なのは」「」

階段を上がり、自室のベッドに寝っ転がり二人にメールする。

「・・・今度当麻君とか、美琴お姉ちゃんに見せに行こ」

〈助けて〉

「ふえ？」

〈誰か、助けて〉

「呼んでる・・・あの時の声？」

〈誰か助けて！〉

「っ！行かなきゃ！？」

急いで玄関に向かい駆け出す。

Side…当麻

「っ！？・・・」

さっきまで煎餅をがつついていたインデックスが目を閉じて動きが止まった。例えるなら某吸血鬼の時を止める攻撃をくらったかのように。

「とうま！動きがあった！」

そう言って朝渡した地図を広げる。

「・・・ここ！」

「ここって・・・確か、動物病院があったはずだ。・・・行くぞインデックス！」

「分かってるかも！」

急いで玄関に向かう。

「ガチャン！！」

ドアを開けると同時に、隣の御坂家のドアも開き二人の人物が走って行くのが見えた。

「あれって双子か？」

「どうしたのとうま？」

「ガチャン！！」

「ったく！どうしたってのよ、あのシスターズは！？」

またドアが開き今度は美琴が走りだした。・・・あの方向！確か例の動物病院！？」

「インデックス！急ぐぞ！」

「ど、どうしたのとうま！？」

「お隣の三姉妹が首突っ込みそうだ！」

「っ！？ヨハネ！戦闘モード！」

「イエス、マスター。バリアジャケット展開」

インデックスが一瞬にして真っ白なシスター服を纏う。

「じゃあとうま、先行くよ！」

「おい！場所分かんのか？」

「大丈夫！今魔力の衝突を確認したから！」

そう言ってインデックスも走って行った。

「走るのかよ・・・じゃあ俺も行きますか！」

そして俺も行動を開始する・・・塀の上を走って。

Side..なのは

私は今、いきなり訳の分からない騒動に巻き込まれる当麻くんの気持ちがよく分かるの。

「来て、くれたんですか!?!」

「フェレットがしゃべったー! って何アレ!? 何がどうなってるの?!!?」

放課後拾ったフェレットがしゃべったと思ったら、病院の方から真っ黒くてドロドロした物が襲いかかって来たあ!?!

ーズドン!

重さで道路が凹んだの・・・。

なのは の せんたく。

↓にげる。

「い、今は逃げるの!」

「うきゅっ!?!」

そう言ってフェレットを持って逃げる。

「す、すみません、僕はユーノ・スクライアと言います。次元世界で発掘業を「い、今は自己紹介とか、経緯なんてどうでもいいからあ!?! あれをどうにかするのが先!?!」っそうでした! すいませんコレを!」

そう言ってフェレットさんーユーノくん?ーは首にぶら下げていた赤い宝石を渡してくる。

「こ、これは!?! (ーゴシヤッ!) にゃああ!」

すぐ横の塀にさっきの真っ黒いのがぶつかって・・・塀が崩れた。「それはデバイスって言って貴女の助けになってくれるはずです! 手に持って集中してください!」

「で、出来ませーん!」

今も絶賛逃走中である。止まってる暇なんかない。っと目の前か

ら誰かが走って来る!

「お!なのはだーって、とまりは、驚きの、声を、上げて、みる!」
「とまり、喜んでる暇はなさそうですよ。と、はずみ は なのは
の後ろを注視します」

双子が来たー! ついでにあの黒いのも来たー!?

——その瞬間気付いた。道路は一本道、後ろにはあの黒い化け物、
前方には友達。

「(だっ) ダメー!」

——不意に立ち止まった時には遅かった。真上には例の黒い化け
物。それが今……。

——パアァン!

——一瞬で破裂した。

「ふえ?」

——トンッ

すぐ傍に誰かが降り立つ。

「おい! 大丈夫かって、なのはかよ!」

「とうま、くん?」

「おう! 上条の当麻さんですよ」

その後ろで再び黒い化け物が再生してる。

「って再生すんのかよ! ……つーことはどっかに核でもあるって
ことか?」

「ど、どなたか知りませんが助かりました!」

「ん? って、イタチがしゃべってる!」

「違うよ当麻にい、オコジョだよ! ってとまりははっきり言ってみ
る!」

「……いえどうやらフェレットの様です。とはずみは心の中で嘲
りながら訂正を入れてみます」

「はずみ!」

「だからいつも言ってるだろ!? 少しは心に思ってる事をしゃべる
なと!」

いきなり現れたと思ったら一瞬にしてアットホームな空気にしてしまった。・・・うんもう大丈夫！

その時、手に持っていた赤い宝石が光る。

「魔力反応確認・・・私の後に復唱してください」

「ふえ？」

「レijingグハートが自発的に起動した!？」

手の中にあった赤い宝石が突然しゃべりだした。・・・でも、そんなに驚きはしなかった。

「あの化け物を倒す方法、知ってるの？」

「Yes」

「・・・わかった！」

私の前には、私の周りには・・・私の守りたい大切な達がいる！
「I received the mission and wh
o」

「我、使命を受けし者なり」

トクン

胸の奥が温くなる。

「Under the agreement, Its power
to liberate case」

「契約のもと、その力を解き放て」

トクンッ！

その熱が全身に行き渡る。

「Wind in the sky, Star in heav
en, And fortitude of the heart
on the chest」

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に」

トクン!!

その熱が掌の宝石に集まって行くのを感じる。

「Get this magic」

「この手に魔法を！」

——そして、この子の名前が必然と声に出る。

「Call me」

「レイジングハート、セットアップ！」

——今少女は魔法を手にする

Side Out

Side..当麻

後ろで知り合いの女の子が何かしてるが・・・すみません、気にしてる暇がありません。

ーヒュン！

ーズシャッ！

真っ黒いのからの触手っぽい攻撃を右手一本で切り落としていく。
対策練りやがったな？右手で触れても破裂しない。

ーヒュンヒュン！

ーズバ！ズバン！

はつきり言って千日手に近い。俺は鍛えてあるし触手の早さもそれほど速くないので見切る事が出来るが、切っても切っても次々と体？から生えてくるから攻め込めないし、後ろには守る者がいるから動けない。と、その時。

ーカアアアア！

後ろでピンク色の光の柱が上がる。

「ガア！？」

目の前の敵の動きが硬直する。

「っ（今っ！）」

一気に敵に肉薄する。

「っ！？」

奴も俺に気付いたのか、触手を放ってくるが。

「遅え、奥義・飛花落葉^{ひからくよう}！」

敵の懐に入り込み、右手で鎧崩しの技を放つ。

「!?!?!?」

「パァァン!!」

そして一気に破裂し……。

「!それかああ!」

内部に入っていた一際目立つ小さな宝石を右手で掴む。

「じゃああ!!とったどー!!」

「「「「「……」」」」」

「ん?どうしたお前ら?」

何時の間にかインデックスと美琴も揃って呆然としていた。

「とうまは、空気が読めないんだね」

「あんた状況考えなさいよ」

「当麻にい、それはないよって とまりは言ってみる」

「どうでもいいですけど状況説明を求めます。と はずみはあなたの行動を記憶の中から消去しながら言っておきます」

「えっと、その……」

「む、無茶苦茶だ!魔力反応も無かったのにどうやって!?!」

「えええ!!?何だお前らその反応!?!」

その時、遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる。

周囲を見渡す……塀はボロボロ、道路も所々陥没とヒビ割れ、動物病院に至っては道路側がボロボロ。

『……』

「撤収!総員!上条宅にて集合!」

「ほら行くわよ!」

「「「はい」」」

「ユーノくん、だっけ?行こ」

「えっと、わ、わかった」

全員が俺の家に向かって走って行く。

「と言う訳なんです」

あの後、なのはは自宅に連絡。後で俺が学校セット一式を持ってくる事になった・・・何でだ？御坂姉妹も一度家に帰った後再び集合。そしてフェレット―ユーノ・スクライアーから状況の説明となった。

「願いを叶える、ねえ」

「胡散臭な」

「願いは叶えるんじゃないく実現させるものなんだよ！ってとまりはかつこよく言ってみる！」

「特にありませんが、あの人が愉快な人になってくれればと、はずみは心の中で真っ白いあの人を想像してみます・・・プッ」

「???」↑難しすぎて解読不能

「むう。まさかのロストログアだったなんて・・・私の推測が外れた」

「み、皆さん凄い冷静ですね？」

「」「鍛えてますから」「」

「もう慣れたかも」

「うう、さっぱりなの」

理解力が足りないな。そう言えば文系って苦手だったっけ？

「ようするに、詐欺まがいの魔力爆弾がこの街に散らばってるってことだな」

「えっと間違ってるんですけど、なんか間違ってる気がします」

ユーノの言葉を見無視してテーブルの上に先ほど手に入れた宝石―ジュエルシード―を置く。

「じゃあコレどうすんだ？ユーノか？それともインデックスが持っておくのか？」

「私はやる事があるからユーノが持っておくのが良いのかも・・・けど君のデバイスってアレだよな？」

インデックスがなのはの持っている赤い宝石を指差す。

「はい、僕は元々デバイスとの相性が悪くて、レイジングハートも偶然手に入っただけのいいものうまく使いこなせなくて・・・」

「で、事故ってこの世界やって来たのはいいが、力不足で魔法のまの字も知らない子に助けを求めた、と」

「ううっ！か、返す言葉ありません・・・」

「まったく！管理局条約に物凄く違反してるんだよ？」

追撃…インデックス。

「うっ！！」

「まずは自分自身を見直すべきでは？とはずみは心の中でこのダメ人間め。と罵っておきます」

「ダメダメだねーってとまりはもうフォローできないかも？」

追加攻撃…御坂シスターズ

「はう！」

「どうでもいいけど、この後どうすんのよ？」

ユーノを無視して美琴が話を進める。

「ううう、あ、後は僕一人で何とかします」

「二個目でダウンしたのにか？」

「うっ！し、仕方ないじゃないですか！？これは僕の責任なんです

！僕がやらなきゃ！」

うっわゝ逆ギレした。

「・・・私、手伝う！」

なのはが参加を表明。

「で、でもさっき言ってた様に君は無関係「もう無関係じゃないよっ！？で、でも・・・」

「面白そうだから参加してみる！ってとまりも手伝う！」

「ではセットの私もですね。とはずみはあの人を強制参加させる方法を考え中です」

とまりとはずみが参加表明した。

「ごめんなさい美琴お姉ちゃん、当麻くん。でも私、自分の意志でやってみたいの！」

「なのは・・・」

「美琴はどうすんだ？」

「へっ！？当麻もやるの？」

「ああ、だってなんか危険な物なんだろ？そんなのほっとく訳にも
いかねーし」

「じゃあ私もやる！」

ホイ決定っと。

「あ、あの！？」

「どうした？ユーノ」

「なんで、そんなに簡単に言うんですか！？危険なんですよ！？」
イラッときた。

「良いかユーノ。危険だから？それがどうした、動いたって動かな
くたってどっちにしろ危険なんだろ？」

「っそれは」

「だったら、グダグダ言っていないで大人しく協力されろ！」

「で、でも」

まだ渋るユーノを美琴が論ずる。

「危険だって言うんでしょ？大丈夫よ安心しなさい」

「なんでそんな事言いきれるんですか！」

「だって、当麻がそんな幻想危険をぶち殺叩き潰してしてくれるから！」

ユーノ沈黙。決め手は美琴の惚気。

「じゃあ責任者が黙った所でチーム分けでもする？」

「そうだな・・・まずなのはチーム、なのは、ユーノに、美琴で」

「にゃ？！美琴お姉ちゃん？」

「わかったわ。なのはは死なないわ、私が守るもの」

ーギリ生存フラグですね。

「次、双子とアクセルな」

「おっけー！てとまりは笑顔で頷いてみる！」

「わかりました。あの人は参加するでしょうか？と、はずみは考え
ます」

「安心しろ、作戦はある」

「すみません。アクセルって誰ですか？他にも魔導士がいるんです

か？」

ユーノが復活して聞いてくる。

「ん？・・・口で説明するのも面倒いし、安心しろ。あいつなら心配いらない」

「はあ」

納得してないな、ユーノの奴。・・・理論派か。

「最後俺とインデックス」

「とうま？私は一人で動けるよ？」

「居候の分際で良く言う。それにお前って確か魔力弾ぐらいしか攻撃方法無かったんじゃないの？」

「・・・とうま？わたしだってやる時はやるんだよ？ただ攻撃するのが苦手で防御がうまいだけなんだよ？そもそも――」

「半人前追加」

「頑張ろう！とうま！」

ちよろいな。

「と言う訳だユーノ。まだグダグダ言うか？言うなら有無を言わず鉄拳ですよ？」

「あなたは滅茶苦茶です。でも、ありがとうございます」

「じゃあこれからしばらく宜しくな」

やっと折れたか。

「ご迷惑をおかけしますが、宜しくお願いします」

そう言っただけでユーノが頭を下げる・・・フレットが頭を下げる光景ってシュールだな。

「じゃあ今日は泊まって・・・俺はこれから高街家に行ってなのは荷物取って来るから」

そう言いながらユーノの頭を撫でる・・・右手で。

「カァッ！」

「「へ？」」

触れた途端、ユーノが人になった。

「うそ！どうして!？」

「あ、そう言えば・・・」

ユーノが驚き、インデックスが何かに気付く。

「スクライア一族って確か自身をフェレットとかの小動物になる魔法を持ってるんだったね」

「にゃ?・・・猫になる事とか出来るの?」

「んゝゝやろうと思えば出来るかも。あっ!今度その術式教えて欲しいかも!」

「インデックス先生!私に魔法を教えてください!」

なのはがインデックスに師事を仰ぐ。

「先生・・・分かったかも!きっちり教えるんだよ!あ、ユーノも手伝ってね?もし管理局とか出てきても擁護してあげるから」

お前は乗せられすぎだインデックス。

「それってある意味脅迫じゃないですか!」

世の中そんなもんだユーノ。

「あ。とまり　はずみあんた達どうすんの?こっちに泊まる?それとも帰る?」

「んゝ魔法って言うの気になるからこっちに泊まる。てとまりは答える」

「私も同じですお姉さま。とはずみはさらに淫獣でしたかあの少年はと考えます」

まあ男は幼くたって男だって事だな。さて最速で世界を縮めてくるか。

――高街家玄関先。

「じゃあなのはの事頼むよ?」

「本当に事情を聞かないんですか?」

今は士郎さんと桃子さんになのはの御泊りグッズを渡されたところだ。しかも来てすぐに、だ。

「本当は聞きたいんだけどね、もう夜遅いでしょ?今度聞くわ・・・」

なのはが話したくなった時に、ね」

「やっぱり俺の子だった。って事だろうな」
ホントこの夫婦は凄いわ。

「大丈夫ですよ。俺が守りますから」

「あら、じゃあなのはを貰ってくれるの？」

「そう意味じゃないですよ?!」

「ほう当麻くんが貰ってくれるのか・・・後は美由希だけだな」

「そっちも乗らないでください！」

本当読めないぜ！

「・・・じゃあ失礼します」

「当麻くん君も気をつけろよ？」

「当然です」

「なのはに言いたい時に言って良いわよって伝えといってくれる？」

「・・・分かりました」

ほんと良い親だな。

おまけ

「ふう、今日も疲れた・・・いい湯だ」

お風呂。それは一日の疲れを癒す祝福の時間・・・。

ーガチャ

「当麻ー！一緒に入ろー！」

「お、おじゃまします」

しかし幸せはそう簡単にやってこない。

「・・・幸せってのは儚い存在だからこそ求める価値がある」

「背中流してあげる！ほらなのはも！」

「えっと・・・確か体に洗剤を付けて・・・」

「待て！誰からの入れ知恵だ！？」

不穏な言葉が聞こえた。

「お義母さんから」
詩菜

「えっと詩菜さんから」

思わず脱力する。て言うか笑えない。

「すみません、もう入ってるんで出てけとは言わないんで、普通にタオルでお願いします」

「「？」」

——不幸だ！てか親に不幸にされたー！。

少女の出会い（後編）（後書き）

ぞろ2 「唐突なんだが、作者はとあるの原作を5巻までしか読んでいないんだ」

当麻「おい！大丈夫なのか！？それ！」

ぞろ2 「大丈夫だ、問題ない、と良いな」。読んでみてあれなんだが正直言っただけがなくなるキャラとかが出てきそうなんだよな・・・スキルアウトの人たちとか」

浜面「おい！駒場さんとか出ないのか！？半蔵とか出ないのか！？」

ぞろ2 「い、良いだろ！その分お前リア充組に入ってたんだから！」

当・浜「テメエの甘ったれたその幻想！ぶち壊す！」

アクセル「まあア原作でも知り合いがすくねエ俺にはア関係ねーがなア」

ぞろ2 「その分お前は周りの人たちに振り回されるけどな」

―ぶちい！

「良いぜエテメエがそおくるってンなら格の違いってエモンを味あわせてやる！」

―ゴオオオオオン！

土御門「それじゃ〜次回予告はいるぜい・・・あれ？俺の出番これだけ？・・・作者あ！！！」

―ガチャ！

―パァン！パァンパァン！

―少女は望む・・・幸せな1日を。

―少年は求める・・・勝利を。

―少年は嵌る・・・自分が掘った穴へ。

敗者に訪れるは屈辱か、羞恥心と体力の限界か、懐の危機か・・・
次回「ゲーム勃発―やっぱ俺って不幸を可能に（ry」
（仮）

超能力者と（魔法）少女の非日常（前書き）

新約の表紙にびびった俺がいた。

超能力者と（魔法）少女の非日常

Side…当麻

なのはが魔法少女になって一日が経った。ぶっちゃけ昨日なんだがな。昨日は魔法が興味ある組（インデックス、ユーノの先生陣となのは、とまり、はずみ）と興味ない組（俺と美琴）に分けて就寝した。・・・まあ俺は世話係として遅くまで起きてたんだが。そして朝起きたら美琴が見事に俺の布団に入ってた。

ちなみに俺は朝のランニングなんて行かない。何故なら以前、朝のランニングをしたら学校に行く日だったのに余裕で三時間目まで遅刻して昼食抜きだったからだ。そんな事より体力万全で、朝・昼の飯を作って行った方がよっぽど健全である。これも過去を学び未来へ活かす人間ならではの行動だ。

「言ってる悲しくなってきた」

「誰に言ってるの当麻？」

現在上条家キッチンで美琴と共に朝食を製作中。・・・何？リア充？バカ言うな朝から七人分（一人だけ三人前）を作ってさらに昼の弁当四人分（一人だけ二人前、御坂三姉妹は美鈴さんが作ってくれる）を作ってたぞ？一人で出来るか！！

「気にするな、大した問題じゃない・・・美琴、そっちは出来たか？」

「もうすぐ」

んじゃ魚に火を通しつつ未だ寝てるガキどもを起こすか。・・・えっと、お玉にフライパンっと。

「ガキ共起してくるわ・・・それ終わったら魚見ててくれ」

「わかったっ！」

美琴は今味噌汁を作ってる。なんでも『基本』なんだそうだ・・・突っ込まないぞ？

ちなみに、ガキ共が寝ている部屋は、最近になってインデックス

の寝室になつてゐる部屋で俺の部屋の隣だ。元々は時たま泊りに来る美琴とか、なのはとか、上条組の大半が泊りに来た際の女性陣の寝室だった部屋だ。

「おいおいおきろお？」

うん。何と言うか・・・樂園？

一つしかないベッドの上にインデックスがなのはを、はずみごとまりにそれぞれ抱き合つて寝ていた。双子の方はお互いの中心で手を重ねているのが高ポイントだ。反対に同年代なのに背の低いインデックスがなのはを抱きしめる様に寝ており、なのはも母親に抱かれるように丸くなつてゐる、しかもインデックスの長い髪が二人に覆いかぶさるように乗つてゐるのが神聖さを引き出している。・・・カメラカメラ。――よし！

「つとこんな事してる場合じゃないな。右手におたま！左手にフライパン！秘義・使者の目覚め（弱）」

―カンツカンツカンツカンツカンツ！

「「「うるさい（の）（かも）！！」」」

「うきゅ!?」

あ、ユーノ忘れてた。・・・端っこの方に簡易ベッド作つてフェレットの姿で寝ていた。

「おしっ起きたな！朝だぞ！飯も出来るぞ？」

「！ゴハン!?」

うん、予想通りでありがとう。

「ああ、もうそろそろ出来るから早く着替えて降りてこい」

そう言つてユーノを拾つて下に降りる。・・・さっきの写真、今

度桃子さんと美鈴さんに見せてみるか。

あつという間に昼。今日は保健室に来ている。

「―と言う事が昨日あったり！てとまりは説明してみる」

メンバーは保健室の俺、なのは、双子、アクセルそして。

「次元世界に魔法、ね。『高度に発達した科学は魔法と変わらない』という言葉の逆説が起こったって事かしら」

保健のボス芳川先生。手の平には赤い玉―レイジングハート―を転がしてる。

「どオーでも良いがよオそれが、何で俺がア手伝わなきゃアなんねエんだ？」

アクセルの不満たらたら言い分も分かる。

「ん？だって人数いた方が楽じゃん？それにもし双子が荒事に巻き込まれても、お前なら安心して任せられるし」

「チっ！」

「んじゃあゲームしないかアクセル？」

「ゲームだア？」

「おう！他人から奪うのは無しで、多く拾った方が勝ち。罰ゲーム有りだ」

「ヘエ罰の内容はア？」

「お前が勝ったら今度模擬戦してやる」

「負けたらどオ何だよ？」

「アクセル、上条組は負けるのを前提で戦おうとする人間はいないぜ？」

「はっ！良いぜエ！買ってやるよオ！その喧嘩ア！！」

言ったな？後戻りはできないぜ？

「じゃあ負けたら・・・双子をデートに誘え」

「―なッ！？」

「あら」

「なの！？」

「ホント！」

「・・・わざと負けるのも有りですね。とはずみは考え始めました」
うん。良い反応だな。

「はっははははは！ゲームは成立したぜ！アクセル！後戻りはできないぜ！？ちなみに！上条さんは昨日一個手に入れましたよー！」

「糞がア!・・・よオは勝ちやア良いんだろうが・・・オイガキ共! 確かアお前らが一緒に行動オしてれば良いんだなア?」

「? そうだよ? てとまりは肯定してみる」

「なら行くぞオ」

「待ちなさいアクセル。貴方もしかして今から行く気じゃ?」

・・・何ですと?

「ああアそうだが?」

「面白そう! てとまりは抜け駆けの先手必勝!」

「では行きましょう。とはずみは授業を初エスケープします」

あゝ取り敢えず言っとくか。

「とまり、はずみ。赤点は取んなよ?」

「「分かった! / 分かりました」」

「それで良いの?! 当麻くん!」

どう止めろと?

「はあ、本当に行っちゃったわよ・・・あなた達までやらないわよね?」

「上条さんはやりませんよ? なのはは知らんけど」

「・・・」

―グイッ

「なのは?」

こいつも抜け出すとか言わねーよな?

「当麻くん、私とも賭けしてくれる?」

「なんだ、そんなことなら構わねえぞ?」

「じゃあなのはが勝ったらなのはともデ、デート・・・してくれる?」

「お、おう?」

なのはからなんか凄いオーラが出始めた?!

「よし! 頑張ろう! レイジングハート!」

「All right」

あれ? 何かミスった?・・・そう言えばアクセルの奴どんな物探すのか分かってんのか?

Side Out

Side..アクセル

「む？当麻にいに不幸フラグが立った気がする。てとまりは首を傾げてみたり？」

「そんなン何時も通オリじゃあアねェか」

そんなん一々気にしてたら禿ンぞ？

「ンでエ？いったい何処まで行くつもりだアお前らア」

学校を出てからあっちこっち歩いてばっかだ。・・・どんな形か聞いておくんだったな。その後商店街を通り、市街地を抜け、海鳴の端っこまで来た・・・このガキ共、考えてねエンじゃねえか？

「とまり」

「ん？何何？！はずみ！っ・・・」

いきなり前を歩いていた双子が立ち止った。・・・此処はア。

「建設途中で廃棄されたビルかア？」

恐らくは建築途中で会社が潰れたんだろオナ。

「おいガキ共オ。はじめに言っておくがア、荒事になった際にはア俺に近寄ンなよオ？・・・死ぬぞ？もしくは見ンな、吐くぞ」

ガキ共の答えも聞かずに能力を完全に開放して中に入る。

――胸に感じる圧迫感を無視して。

中は鉄柱が組み立て途中で放置されて所々落下防止ネットが張り、地面にも置かれたままの鉄柱があった。

「ンでエ？どこら辺にあンだア？お探しのモンは？」

自分では独り言を言ったつもりだった。

「さあ？私には分かりません。と、はずみは心の中でこの人実は何も分かってないんじゃない？と思ってみます」

「えっとね、確か手で掴めるサイズの青い宝石！って、とまりは答えてみる！」

「ああア？」

後ろを振り返ると、少し離れた場所に双子がいた。

「何でついて来たア？」

「逆に聞きますがついて来てはいけないのですか？とはずみは質問返しをしてみます」

「ちィ！」

余計な荷物が付いて来やがった。

「あゝ！愛想がないってとまりはっ！後ろ後ろ！？」

「ああアン？」

突然アホ毛のガキが騒ぎ出したので後ろを振り返ると。

——でっかい蜘蛛が前足を振り落としていた。

—グシャッ！！

「~~~~~?!?!」

しかし、アクセルに当たった瞬間、前足が変な方向に折れ曲がり、赤黒い液体を振り撒き後退した。

「・・・オイ？」

「御想像の通りだよ〜とまりは答えてみるってうひゃー血！血いゝ！！！」

「頑張ってくださいと、はずみは距離を取りながら応援します」

再び振り返って見れば、双子は結構離れた所に避難していた。・

・状況判断は早エなオイ。

「所でとまり？封印のしかたって覚えてる？ってとまりは聞いてみる」

「さあ？なにしろ昨日知ったばかりですから。とはずみはあの人に期待してみます」

「「・・・」」

「がんばれー！アクセルー！！ってとまりは応援してみる！」

「ファイトですと、はずみは応援します」

役立たねェっ！

「確かア手で掴めるサイズだったなア」

敵はガキ一人なら丸のみ出来るほどの巨体見た所、それらしい物は見えない。おまけに折れ曲がった前足も再生してやがる。

「・・・はっ！おもしろェ！！こんな面白ェ事に巻き込んでくれた事に感謝してやる！！」

今の自分は、酷く好戦的な笑みを浮かべていると思う。

「ギギ、ギギギギ！」

蜘蛛が大きく跳び、辺り一面に糸を吐いき瞬く間に地面に、横側のコンクリの壁に、防止ネットを突き抜け天井近くの鉄骨に絡みつき張り巡らされ、一つの蜘蛛の巣になった。

「ヘェ！狩人の知恵てかァ？・・・だが、こんなンじゃア駄目だ」さらに追撃で真上から大量の糸が降り注ぎ、アクセルにぶつかる・・・が、その直前で全く違う方向に流れていく。さらに・・・。

「おらよォ！」

手刀を真上にいる蜘蛛に向かって勢いよく振り抜く。

「ズシャァァ！」

すると、手刀がなぞった線に沿うかのように蜘蛛が切られる。

「ギギギギギ！」

しかし、その傷もすぐに再生始める。

「ちっ！負ける気はしねェが、切りがねえェ・・・ン？」

「ボコッ・・・ボコッ！ボキッ！ボコンッ！」

切られた切れ目の――上半身――から何かが溢れ出すように盛り上がる。

「オ、オオオオ！」

中から人の様な上半身が出てきた。右手は細く二メートル近くあり、左手は蜘蛛とカマキリを合わせたような鎌で、胴体は首の部分はなく体と頭が繋がっており縦に鋭い牙のついた口になっていた。

「ンとに化けもンになっちまってンの」

「ねえねえ！頭の部分見て！ってとまりは叫んでみる！？」

ふと後ろから声が聞こえたので見上げてみると。ちょうど頭のとっぺん辺りに青色の宝石があった。

―ブシュッ!

その瞬間、周りの肉が細切れになり宝石が飛び出てくる。

―ザアアアアアア!

宝石が抜けると、周りの肉片から血溜り、そして糸さえも空気に溶ける様に消えていき、後には大規模な抗争があったような空間が残っていた。

「こんなもんかア・・・しかし親切設定だなア、終わったら肉片さえも残ンねエとは・・・ン?」

ふと足元を見ると、さっきまでいた蜘蛛の化け物の中心に小さい蜘蛛の死体があった。

「願いを叶えるねエ・・・コレを見るとオ胡散臭エなア」

その言葉は昨日ジュエルシードの説明を聞いた当麻と同じセリフだった。そしてその廃ビルから出ようとすると。

「すっごーい! ってとまりは驚愕してみる!」

「アアア?」

見れば入り口近くに双子が立っていた。

「ンだよ、まアだいたのか・・・見ただろ、俺はあんな化けモンと戦っても傷一つつかずに勝てる人間だぞ? 近寄ンねエほオが身の為だぜエ? つーかよく吐かなかったなア」

「んーでもでも今の私達ってチームだし・・・私は・・・その・・・一緒にいるの、楽しいよってとまりは一生懸命アピールしてみる」

「・・・ふン、なら精々足手まといになンねエよオ魔法とやらを身に付ケンだな」

「うん! 頑張ってみる! てとまりは勢いよく頷いてみたり! 行こ! はずみ!・・・はずみ?」

返事がなかったようなので視線を向ける。

「・・・あ・・・ド・・・しま・・・す・・・」

「どうしたの? はずみ? てとまりは耳を澄ませてみる・・・へ?」
「ンで? 何言ッてンだアこいつ? 気でもフツ切れたかア?」

「えっとね、なんて言うかね、とまりは双子の姉妹に理解できない

って・・・」

「良イから言え」

何か良い辛い事を口にするようにアホ毛のガキが声に出す。

「あのね『あの猟奇的な視線と行動にはずみは主わらず釘付けになりますと、はずみはドキドキする鼓d』『もオお良イ、正氣にイ戻させろオ!』む、無理だよってとまりは はずみの趣味が理解できないうー! って叫んでみる!？」

その後四十分に渡り作業は難航し、上条宅に向かうのは夕食時になった。

Side Out

Side..なのは

放課後。美琴お姉ちゃんとユーノくんと合流して取り敢えず街を歩き回る事になった。その際に美琴お姉ちゃんが探し物を捜すコツを話してくれた。

「こういった探し物とかは基本受け身に回る事が多いのよ」

「大勢で探すのも一つの手なんだよね？」

「まあそうね、けど魔法とかってあんまり人に教えちゃいけないんでしょ？ユーノ」

「はい、管理局法では管理外および観測世界の知的生命への、不用意な接触及び技術提供は禁止されているし、不用意に魔法の事も話しては駄目なんです」

「？でもユーノくん接触しちゃったし魔法の事も話しちゃったよ？この場合ってどうなるの？」

「・・・どうなるんでしょう、ボク」

何かユーノくんが暗くなっちゃったの。

「そう言えば美琴お姉ちゃん、お昼の時ねアクセルさんと当麻くんが・・・」

美琴お姉ちゃんに昼にあった事を話した。早退とか賭けとか。

「あんのシスターズう！後で思いっきり叱つとかなきゃ！・・・それにしても勝ったら私もお願い聞いてもらえるのかな？・・・いやいや！・・・でも・・・えへえ」

美琴お姉ちゃんが壊れたの。

―キィィン！

その時不思議な感覚が体を突き抜け、ユーノくんが叫んだ。

「お二人とも！発動しました！？」

「！？お姉ちゃん！」

「よっしゃあ！行くわよ！案内しなさいユーノ！」

「はい！」

ユーノくんが戦闘を走る。

ついた先は神社だった。そこに体が大きく見るからに凶暴そうな犬がいた。近くには飼い主だと思ふ女の人が倒れていた。

「おっきいーわね」

「大きいの」

「っ！なのは！レイジングハートを起動して！」

「起動・・・どうやるんだっけ？」

―ガクッ！

ユーノくんが躓いたの。

「き、昨日言った『我、使命を受けし』から始まる言葉です！」

「ガルルウウ！ガア！！」

そう言っている間に犬さんが襲いかかって来るが・・・。

―バチチチチ！！

「ガアアア！？」

横合いから跳んで来た電撃が命中する。

「なのは、よく分かんないけど取り敢えず時間稼げばいいのよね？」

「お、お願いします！」

私の代わりにユーノくんが答える。・・・こんなんじゃ駄目なの、

もつとしつかりしないと！」

「レイジングハート、もっと簡単に起動できないの？」

「OK, Master. Stand by Ready. Barrrier jacket Set up.」

レイジングハートがそう言った瞬間、私は昨日と同じ様な学校の制服をモチーフにした白い服を纏っていた。

「うそ！？昨日魔法を知ったばかりなのに、起動パスワードなしで起動させた！？」

ユーノくんがうるさいけど無視するの。

「ユーノくん！どうすればジュエルシードを封印出来るの？！」

「っ！なのは！落ちていて自分の精神を集中させて！そうすれば自分の中の魔法の言葉が浮かんでくるから！」

「自分の・・・中の・・・魔法の言葉・・・っ！レイジングハート！」

「モードチェンジ、カノンモード起動します」

レイジングハートの先端の金色の三日月のような物が機械的な音叉に代わり。先端下の柄の部分が下がりトリガーユニットが迫り出してくる。

「まずは自分の胸の奥にある熱を両腕に集めて下さい。後は私の方で調整します」

「胸の奥にある温かいものを・・・両手に集めるっ！」

レイジングハートの言われた通りにすると、体がピンク色に光り、音叉状の部分からピンク色の翼が三枚生え、ジョイント部分が開き中からトリガーが迫ってくる。

「トリガーを利き手で掴んで下さい」

トリガーを掴む。動かす事が可能みたいなので、持ちやすい位置に動かし、狙いを定め・・・。

「リリカル・・・マジカル！ジュエルシード 封印！」

言葉を発すると同時に引き金を引く。

ドオオオオン！

レイジングハートから発射された光は美琴お姉ちゃんに凹にされ

ていた大型の犬に当たり。

「ガァァー！！！」

子犬とジュエルシードに分かれた。

「良い資質をお持ちです」

「やった、の？」

「はい、後は私を近づけて下さい」

言われた通りに、近づきレイジングハートをジュエルシードに向ける。

「シリアルナンバー16、回収しました」

ジュエルシードがレイジングハートに吸い込まれた。

「・・・はあ」

「凄いじゃない！なのは！」

「あ、美琴お姉ちゃん。お姉ちゃんも凄いの！あんなに大きな犬にも引かないで戦えるなんて！」

美琴お姉ちゃんが戦う所を始めて見たけど、超能力者っていうのは凄い存在だっと思ってたの。

「なのは！大丈夫！？」

「あ、ユーノくん・・・うん、大丈夫なの。飼い主さんと子犬さんは？」

「大丈夫、飼い主の人は気を失ってるだけだし。子犬も今は寝てるだけだから」

よかった！

「じゃあ、翠屋に行く？それとも今日はもう家に帰る？」

美琴お姉ちゃんが聞いてくる。

「まだ探すの！」

「今日は止めましょう」

「・・・」

正反対の意見が出たの。

「ユーノくん」

「駄目だよなのは。始めて魔法行使したんだから目に見えないところ

ろで疲れが溜まってるはずだよ!」

「平気なの!」

「マスター、無理は禁物です」

「レイジングハートまで!」

「はい決定!今日はここまで」

「にゃあ!?!美琴お姉ちゃんまで!?!私!まだ大丈夫なの!」

「はいはい・・・当麻の家に行こっか?あの子なら体の診断とか出来るわよね、ユーノ?」

「ええ、たぶんインデックスさんなら診断できると思います」
「にゃああ!お話聞いてくれないの!?!」

Side Out

Side..当麻

「結局見つからなかったね」

「そくだなく・・・昨日に続き野菜が安いな。買った」

「おまえらー昨日も来たのかー?」

昨日と違い今日は土御門の妹、土御門舞夏と一緒にいる。

「とうまはいつも厄介事を引っ提げてはうちに来る人が増えるんだよ?まいか」

ちなみに、この土御門舞夏。なのはと同じ年の学年であり、既に一般的な主婦並みの家事スキルを持つ。

「現在厄介事の一つのインデックスさん?少し黙りなさい」

「むっ・・・ふんっ!」

ーガブッ!

「にぎゃー!痛い痛い!インデックスさん痛いです!痛いんだ!痛いですよ!?!」

「意外と余裕そーだなー上条当麻ー」

失敬な!

『昨日に引き続き肉の特売セール!肉の特売セール!本日は牛肉が

何と！三百グラム一パックで二百円！御一人様二パック――』

「「なん・・・だと・・・」

「?・・・とうま？まいか？」

「インデックス！お前は昨日と同じ様に此処に残っててくれ!？」

「すまーんシスター！今日はわたしの頼むー!!！」

「え？ええ?!！」

人は誰だって譲れねえもんがあんだよ!!!

「いやゝ大量ゝ大量ゝ!」

「ごっはん♪ごっはん♪」

あの後インデックスに協力してもらい四パック手に入った。

「さーて、この分と昨日の残りを合わせて・・・うん、二日は買いに行かなくて済むかもな」

「とうま！今日は何作るの!？」

「そうだなゝ今日は肉が多いし生姜焼きで・・・も・・・」

「とうま?・・・あ」

家の近くまで帰ってきた瞬間に分かったが・・・。

「また誰かいるね」

「・・・不幸だ。また明日買い出しに行く事になりそうで不幸だ。つーか誰だよ!?金取んぞ!？」

家に入る。そして一番に目に入っただのは。

「よオ上条オオ邪魔してンゼエ」

「出てけこのヤロウ!？つーかどうやって入った!?!」

丁度トイレから出てきたアクセルだった。

「ンなの決まってンでろオが・・・力づくでだ」
ベクトル操作

思いつきり犯罪でたー!!!!

「この不法侵入のプライベート侵害者 ああ!!！」

「とうま！それよりもお腹すいたかも!」

「テメエ居候だろ!？何でそんなに態度がでかいんですか!？」

「あ！当麻！お帰り!!！あのね今日なのはが一つ封印出来たんだよ

!!」

その時リビングの方からエプロン装備の美琴が来た・・・つか。

「それよりもお前今日もこっちに居る気か？」

「私以外にも居るよ？」

「あ、当麻にいおかえり！あのね今日ねアクセルがカッコよくてね！」

「おかえりなさいと、はずみは早く飯にするからさっさと着替えてこいと、目で訴えます」

その後ろ、リビングの扉からエプロン装備の双子が顔だけ出してきて。

「あら、いらっしやい当麻くん」

「美鈴さん？！って、いらっしやいじゃないです！此処俺の家です！！」

「何かね〜皆こっちにいるんだもん。お義母さん寂しくなっちゃって」

気持は分かりますけどね！？あとお義母さん言うな！

「お帰りなの！当麻くん！」

さらにその後ろからもう一人。

「なのはもか・・・家には？」

「？連絡済みなの」

——やっぱ不幸だった——！！

超能力者と（魔法）少女の非日常（後書き）

ぞろ2「2のぞろ目と」

当麻「上条当麻の」

ぞろ2・当「あとがき談話」

ぞろ2「正直よく持つな？俺」

当麻「いきなりそこ！？・・・まあ、それは置いて。今までの戦闘で俺って素手でしか戦ってないよな？何でだ？」

ぞろ2「それは、お前の場合、鋼糸とか飛針を使う前に殴ったり蹴ったりした方が早いからだよ」

当麻「じゃあ持っても意味ないんじゃないか？」

ぞろ2「でも意外と必要になるぞ？お前の場合いきなりサバイバルになるとか、強盗が襲いかかってくるとか、デバイスを弾き飛ばしたりとか」

当麻「・・・意外とありそう？！」

ぞろ2「じゃあ納得したところで次回予告いってみよう」

日常を過ごす中、突如訪れた災厄。

——少女は支えられた事を知り、自らの覚悟を手に入れる。

——日常を過ごしていた少女は、自らが非日常の異端である事を知る。

——そして、少年はまた一つ儚い幻想を背負う。

そして彼女もまた・・・。

次回「少女の決意と思い」（仮）

五和「ところで私と彼のラブロマンスはまだですか？」

ぞろ2「下手したらSTS近くかな？」

五和「七閃!!」

――にぎや――!!

少女の思いと決意（前書き）

デバイスのセリフを英文なしに変えました。正直に言うと言きやすかったO r z. . .

少女の思いと決意

Side…なのは

私が魔法を手にしてから一週間が経った。今日までに回収できたジュエルシードは合計六個（あれから一つアクセルさんが回収した）。そして今現在私達が通う聖祥大付属小学校の廊下を……。

「シャギイイ！」

「うひゃー！ー！！！」

「にゃああああ！！！」

「ちょ！二人とも！落ち着いて下さい！？」

爆走中なのですっ！お化け怖いいいい！！

「い、いつまでも、逃げてると、思うな、よっ！」

ーバチッ！！

「ギイイイイ！？」

美琴お姉ちゃんが急に反転して雷撃をお化けに当てる。

「レレレレイジングハート！！！」

「カノンモード、スタンバイOK」

「リリカル！マジカル！ジュエルシード、封印！！！」

「シャアア——」

追撃で放った私の魔法が当たり、お化けが霧散しジュエルシードになった。

「シリアルナンバー20、封印」

「あ、ありがとう、レイジングハート」

「どう致しまして」

気の緩みからか若干、眠気が襲ってくる。

「やっぱり」

「どうしたのよユーノ……なのは？」

「……あ？」

何だか眠いの……。

「連日のジュエルシード搜索に魔法訓練それに睡眠時間の減少、疲れが溜まっているんだと思います」

「じゃあ明日ぐらいは休みにする？ 丁度日曜だし」

美琴お姉ちゃんたちが何か言ってる気がするの。

「・・・そうですね、流石に無理は禁物です。明日は僕一人で搜索します・・・幸いと言っていいのか判断し辛いですけど、頼りになる人達がいますし」

「そうそう、何でも一人で抱え込んだって自滅するだけよ。っと、なのは？ 寝ちゃった？」

「起き、てる・・・の」

近くで話していた美琴お姉ちゃんがしゃがみ込んだ。

「ほら、おぶってあげるから」

睡魔の誘惑に勝てず素直におぶさる。

「・・・こっからだと私達の家が近いわね」

「(あった・・・かい・・・の)・・・ZZZZ」

Side Out

Side・・・当麻

迫って来る攻撃を手刀で防御せずに受け流し、その流れに乗って反対の手刀で刺突を放つが・・・一瞬にして相手の姿が消える。

ーゾク！

「っ！」

首筋に悪寒が走り一気にしゃがみ込むと、胸があった場所を木刀が通り過ぎるーおそらく避けなかったら、後ろから肺の辺りを突かれていたー攻撃後の硬直を狙い、此方も反撃にしゃがんだ体制から足払いをするが、跳んでかわされる。さらに追撃に掌手を繰り出すが・・・。

ーグンッ！

何時の間にかー恐らくは胸への刺突と同時にー放たれた鋼糸に片

足を取られる！

「ッシ！」

逆に相手は俺を飛び越え着地すると、再び刺突を放つ。それを前に転がる事で避け、両足で相手を天井に投げる。

——そのまま流れる様に立ち上がり相手を見る。

——相手も天井で上下反転したしゃがんだ体制を取る。

そして、一瞬だけ相手の目を見・・・同じタイミングで動く！

——御神虚刀流・奥義

——御神流・奥義之参

「花鳥風月！」
かちようふうげつ

「射抜！」
いぬぎ

手刀と木刀、貫手と刺突、お互い徹を込めた技と技のぶつかり合い。その結果・・・。

——ズルッ

「へ？」

——手汗で木刀が滑り。

——ガスッ！

「っ！？」

——木刀が額にブチ当たり。

——ゴンッ！

「カハッ！」

——体制を崩し背中から床に叩きつけられ。

「ど、どいてどいてっ！？」

——ドス！！

「っっ！？！？！」

落ちてきた相手を避けきれず、相手の膝が腹にブチ込まれる。

「・・・勝者美由希」

「こ、これって有りなの！？恭ちゃん！？」

未だに激痛に苦しむ俺を放置し、美由希さんが抗議の声を審判役の恭也さんに上げる。・・・それは良いから介抱してくれ！

――海鳴市河原のサッカーコート

「あゝ酷い目にあった」

「とうま、大丈夫？」

「それにしても、中々良い勝負だったんじゃないか？当麻くん」

現在士郎さんがコーチ兼監督をしているサッカーチーム、翠屋JFCの試合をインデックスと共に見ている。この後なのはとその友達のアリサ（そう呼べと言われた）とすずかちゃんが来る事になっている。

「昨日は、なのはが世話になったね」

「気にしてませんよ、たまたま家が近かっただけですし・・・不法侵入で知り合いが上がり込んでくるなら、可愛い子の方が遥かに良いですから」

「ははっ・・・なのはが今、厄介事を抱え込んでいるのは普段の生活を見れば分かる。話も聞こうと思えば、いくらでも聞きだす手段もある」

突然の話の切り替わりに俺とインデックスは自然と黙るしかなかった。

「けど、それはなのはの成長にはならないと思ってる。あの子は自分から何かをしたいとか言いださなかったから・・・当麻くんや美琴ちゃんの事以外では、ね。だけど今のなのはは自分から言い出して自分の意思で行動しているんだろ？」

その質問に俺は頷いた。それは幼い頃から面倒を見ていた俺には、士郎さんの言いたい事はよく理解できたから。

「それに、僕達が傍にいらなくても、ちゃんと見守ってくれる子がいる。親としては寂しいけど・・・あの子の成長してる姿を見ると、喜んでる自分もいるんだ」

「士郎さん・・・」

自然と声に出していた。

「大丈夫ですよ・・・前にも言いましたが、俺が守りますよ。なのはも、美琴も、俺の周りにいる大切な人たちを」

「・・・それはやっぱり、なのはを貰ってくれると言うことかな？」

「感動台無しだアンタ！」

「とうま・・・なのは来たよ・・・他にも知らない人いるけど」
さっきから黙っていたインデックスがなのは達に気付いた。

「あれは・・・風斬？」

やって来たのはアリサにすずかちゃん、それと風斬だった。

「お久しぶりです士郎さん。あんたも久しぶりね・・・それと、誰よ？」

「こんにちは士郎さん、上条さん。えっと・・・あなたは？」

「私？私の名前はインデックスって言うんだよ。そっちこそ誰なんだよ？」

「は、はじめまして、か、風斬氷華です！当麻君も、こんにちは。

えっと、あなたが美琴さんが言ってた、インデックスさん？」

「私はアリサ・バニングスよ！覚えときなさい！」

「あ、はじめまして、月村すずかです」

「よお、久しぶりだな・・・それより風斬はどうして此処に？」

「えっと、なのはちゃんに連れてこられて・・・」

「にゃはは」

何やってるんですかなのはさん。

「はははっ、どうやら当麻くんや美琴ちゃん以外にも甘えられる相手はいるみたいだね」

そう言う問題じゃないっす士郎さん。

「おっと、試合が始まるな」

Side..なのは

試合は無事に終了した。結果は翠屋JFCの二対一で勝ち、途中で何回か当麻くんがボールがぶつかっていたけど気にしないの。試

合の後は決まって翠屋で昼食になる。店内は混むので私達（氷華さん、インデックスさん、アリサちゃん、すずかちゃん、ユーノくん）は外のテラスで昼食、当麻くんはお母さんに引っ張られて行った（お母さんが「今から覚えれば将来は安心よ」とか言ってた）。

「それにしてもこの子、変わってるわね。毛並みも調べてみたのと違うし」

「ギクッ！」

「たぶん、突然変異じゃないのかな？・・・お手」

「ユーノくん?!」

「まかせて!」

「ポンッ」

ユーノくんがすずかちゃんにお手をしたの。

「か、かわいい〜!」

「そうだね〜」

「ユーノくん、ソレなんか違うの」

「あ、あれえ?」

「ユーノ、人としてのプライドは無くなったの?」

あ、ユーノくんが落ち込んだ・・・ごめん、フォローできないの。

「ひょうか! ひょうか! この子はスフィンクスって言うの!」

「えっと、それ名前なの?」

「? そうだけど、何か変?」

「へ、変じゃない・・・と、思う」

あ、氷華さんも同じ意見なんだ。

「珍しいな、インデックスから積極的に話しかけるなんて」

「あ、当麻くん。もう良いの?」

店の方から当麻くんが来た

「ピークは過ぎたからな、後はいいつて言われて久しく解放されて、今昼にありついた所だ・・・不幸だ。あ、風斬、隣良いか?」

「え? う、うん」

翠屋の方を見ると丁度翠屋JFCのメンバーが出てくるところだ

った。・・・あれ？

「どうしたの？なのはちゃん」

「え、ううん、何でもない」

気のせいだったのかな？そう思いテーブルを見ると・・・。

「ユ、ユーノくん!？」

ぐったりしたユーノくんがスフィックスに啜えられていた。

「あ!スフィックス!？ソレ食べ物じゃないから離しなさい!!」

そう言われるとスフィックスがユーノくんを離したの。

「だ、大丈夫？ユーノくん」

「不幸だ・・・」

「ん？」

「?どうしたの当麻君？」

「いや、何か今、俺のセリフ盗られた様な？」

感が良いの。

「あ、そろそろ時間だわ」

アリサちゃんが携帯の時計を見てそう言った。

「?・・・アリサちゃん何処か行くの？」

「今日はパパと買い物に行く約束なの!」

「私もそろそろ行かなくちゃ」

「すずかちゃんも？」

「うん、この後習いごとなの」

「そっか・・・じゃあまた学校で!」

「「またね!なのは(ちゃん)」」

そう言って送り出そうとした時。

——大気が震えた

「「「っ!？」」」

「・・・どうした？なのは、インデックス・・・ユーノも?（・・・

まさか）」

「どうしたのよ?なのは?」

「なのはちゃん?」

「い、インデックスちゃん？あれ？スフィックスまで？」

へなのは！インデックスさん！」

へ分かってるの！」

周りも気にせず駆け出す。後ろでアリサちゃん達が何か言ってる気がするけど、そんな事気にしてる余裕がないの！

Side Out

Side..アクセル

以前感じた様な胸を圧迫感を感じる。おまけに……。

「今回はア腕も震えやがる……どォなってんだ？」

「ゴォォォ！」

「ああア？」

大きな地鳴りが響いたと思ったら、遠くの方でバカでっかい木が暴れていた。

「アレもそォなのかア？」

「――アアアアア！」

「今度はア何だア？」

後ろから悲鳴が聞こえたと思い、振り返ると……坂から車椅子が迫っていた。ご丁寧に人も乗って居やがるし。

「だっ！誰でもええから止めてー！もしくは助けてー！？」

「（余裕あんな……）ちっ」

能力を解放し、その場から一步も動かずに滑り落ちてくる車椅子に当たると。車椅子が数十センチ程逆走、逆に乗っていた人物は慣性の法則に従いアクセルに当たる……寸前に、襟を掴まれ宙ぶらりんになる。その後再び、緩やかに滑ってきた車椅子を足で受け止める。

「ドサッ」

「わひゃあ！？」

……落とす。

「いたたたたあゝ」

「さてエ行くかア」

「ちょ！待ちいな！？助けてもろおたのはありがたいんやどな！？大雑把すぎるで！？」

「ちっ、テメエも無理ゲーな事ぐらい分かってるだろオが。助けてやったんだから文句言ってんじゃねエ」

「うっ！？そ、そらあ分かつとるんや・・・せやけど」

「おーい！はやてー大丈夫ー！てとまりは・・・あっ！アクセルだゝ坂の上からどっかで聞いた様な声が聞こえる。つーかあんなしゃべり方すんの一人ぐらいしか思い浮かばねエー。」

「おや？貴方と会うとは偶然とは恐ろしい物ですと、はずみはドキドキする鼓動を抑えて話しかけてみます」

「ちようど良いィ、テメエらも感じたか？」

「そうだよーだから手離しちゃったんだけどね。てとまりは驚愕の事実を話してみる」

「なんやなんや？何の話や？」

「話しに入って来んなガキ。黙ってるオ」

「はやてには関係ない事だよ！て、とまりは黙秘してみる」

「はやてには関係ない事ですと、はずみは案に黙ってるこの狸、と心の中で思ってみます」

「毒舌キャラが増えた！？」

車椅子のガキが黙ったので、再び暴れている木の方向を見るが。

「・・・ねえエ」

見る影も無くなっていた。

「多分ユーノカシスターちゃんが結界でも張ったんじゃない？てとまりは考えを出してみる」

「恐らくそうでしょう。とはずみは出遅れたと口に出してみます」

またファンタジーな単語が出てきやがった。

「（今回は見送るかア）・・・帰るかア」

「あ！待って！アクセルゝ！てとまりははやての車椅子を押しなが

ら追いかける!」

Side Out

Side…当麻

行き成り駆け出したのはとユーノ。それを追いかける俺とインデックス（＋スフィックス）と・・・。

「ど、どうしたの？なのはちゃん」

風斬氷華。あの後アリサとすずかちゃんはそれぞれ用事の為に別れたが、唯一暇だった風斬が付いて来てしまった。

「（おい、どうすんだよインデックス）」

念話とやらを使えない為、小声で話しかける。

「（大丈夫だよ、結界を張れば、通常、魔力がない人は結界外に放置されて、入る事も見る事も出来なくなるから）」

「（じゃあ早くやってくれ!このままじゃ巻き込まんじまう）」

「（分かってる。ヨハネ、封時結界構築、広範囲に）」

「Yes, Master」

その瞬間、世界が変わる。そして・・・。

「こ、これどうなってるの?」

「「え?」」

「「にゃ?」」

変わらずに隣にいる風斬がいた。

「ゴォォン!!!」

その時、地面から木の根っこが飛び出し襲いかかって来た。とっさの判断で右手を突きだして防ごうとするが・・・。

「（消え、ない!?）っ!——っらあ!？」

防ぐのを止め、後ろに行かないように反らす様に捌こうとすると・

・・楽に出来た。

「・・・消せはしないが、捌く事は出来る、か。・・・インデックス、風斬、無事か?」

「な、なんとか大丈夫かも」

「だ、大丈夫です」

「・・・とうまでも消せないって事は、私たちじゃあどうしようもないね」

インデックスの答えは俺も同意見だった。

Side Out

Side..なのは

普通の青空だったのが一瞬にして灰色の空に変わった。

「っこれは！」

「封時結界です！この結界の内だと、どんなに暴れても結界の外には影響が出ないようになってます！・・・それにしても、これだけ広範囲の結界を展開できるなんて！」

理屈は分かんないけど、これなら魔法を使っても問題ないのが分かったの。

「レイジングハート！」

「Stand by me, set up.」

一瞬でバリアジャケットを纏い、レイジングハートもスタンバイモードになる。

「ユーノくん！」

ユーノくんが私の肩に乗る。

「レイジングハート、翼を！」

「Yes, フライヤーフィン展開」

私の靴の側面からピンク色の羽が生え、飛翔する。

「っ！ひどい」

上から見た光景は酷かった。おそらく暴走の中心は高層ビル並みの高さの木が生えており、町の中は根っこが暴れ回っていた。

「なのは！悔むのは後にするんだ！今はジュエルシードの封印の事を考えて！」

「っ！うん！ユーノくん、レイジングハート、どうすればいいと思う？」

「確かインデックスさんとの訓練で、なのはは砲撃依りの魔導士って言う判定だったよね？」

「え？うん、そうだよ」

「今のマスターの力量では接近できそうもありません・・・遠距離攻撃を提案します」

「それしかないか・・・なのは、取り敢えずあのビルの屋上に下りて！」

ユーノくんが指示したのは、周り比べると高いビルの屋上だった。

「それで、どうするの？」

「まずは発生源を特定しなきゃ！」

「発生源・・・様はジュエルシードを見つければ良いんだよね」

「え？そうだけど」

「行くよ、レイジングハート！・・・探して、災厄の根源を！」

「エリアサーチ」

幾つかの光球が飛び散って行く。

「・・・っ！見つけた！」

「目標確認。カノンモードに移行します」

レイジングハートを構え、先端に私の魔力が集まって行くのを感じる。

「ターゲットロック！デイベインバスターセット」

「これが私の砲撃魔法！デイベインバスター！！」

引き金を引き、一条の光が駆け抜け・・・暴走の中心に当たる。そして周りの木々が次々に消えていく。

「当たっ、た？」

「モードリリース、シリアルナンバー10封印確認しました」

「・・・はぁ・・・」

「お疲れ様ですマスター」

強張っていた体の緊張が抜ける。そして、既に周りの木々も消え
結界も解除されいくのが分かった。

「・・・所々、壊されてる、ね」

「そうだね・・・」

私は結界が解除された街を見下ろし、そう呟いた。

「・・・私ね、さっき男の子がジュエルシードを持っていたのに気
付いたの、その時は違うんじゃないかっていう考えがあったんだ。
・・・でも違った」

「なのは、謝っても仕方ないと思ってるんだけど、それでも「止め
とけユーノ」!？」

「当麻・・・くん？」

何時の間にか屋上に当麻くんが来ていた。それにインデックスさ
んに・・・氷華さん？

「ねえ当麻くん。何で氷華さんが居るの？」

「あゝ何て言った言いのやら・・・巻き込まれた？」

「あの体質じゃあ、仕方ないと思う」

二人が言ってる事が分からないの。

「まあ・・・その話しは後にしよう・・・で、なのは？何か言いたい
んだろ？」

「えっとね・・・私、この力が・・・魔法の力があれば皆を守れるって
思ってた。ううん、違うな、何だろ・・・みんなを守ろうって思っ
たのは間違いない筈なのに・・・全然守れなかった。弱いまだね
私」

うまく考えが纏まらないの。

「あのな？なのは、インデックスやユーノは頼りにならなかったか
？」

首を横に振り否定する――何も知らない私に魔法を教えてください
た私の先生達。

「レイジングハートは使えない道具だったか？」

それも否定する――戦いの中で一番頼りになる私のパートナー。

「俺や美琴にアクセルは頼りにならなかったか？」

否定した——魔法使いでもないのに戦えて、守ってくれる凄
人達。

「厄介事に巻き込まれてる事も分かってるのに、なのは信じて、
いつか話してくれる事を待ってる士郎さん達は？」

否定した——こんなに危険な事に首を突っ込んでいるのにも関
わらず、信じてくれているお父さん達を思うと胸が、心が温かくなる
「なのは。なのははまだ、一人で戦ってると思ってるのか？」

ようやく理解する——私は色んな人に支えられていた事を。

「あれ？・・・なんで？・・・嬉しいのに、涙が・・・」

自然と涙があふれる。・・・そして、誰かに抱きしめられた。

「なのはちゃん」

「氷華、さん？」

「私は今日たまたま巻き込まただけだし、まだ何も教えて貰って
ないけど・・・頑張ったんだね」

頭が撫でられる。

「なのは、別に一人で強くなろうとする必要はねーぞ？出来ない事
は周りの奴がフォローするから。なのははどうしたい？」

当麻くんの手が頭の上に置かれる。

「私、守りたい、今の生活を、皆が居るこの街を！」

——この時、私は初めて自分の意志で前に踏み出した。

Side…当麻

あれから日ごろの疲労から泣き疲れ寝てしまったなのは・・・
近くの上条家におぶって帰り、高町家に連絡した所今日は泊めてあ
げてと言われ・・・御泊りセットと学校の荷物を持ってくる事にな
った。・・・あれ？

そして現在、上条家には俺、インデックス、なのは、ユーノ（人
型）、御坂家一同（夫抜き）・・・さらにアクセル、芳川先生、そ

して双子の友人八神はやてが居る・・・あるえ？

「どうしてこうなった？」

「ああ？ なンか気になン事でもあったのか？」

「お前だよ、お前。その真っ白いの」

「ああ？ 喧嘩売ってンのか？！」

「つーか何でいんだよ？！」

「・・・お前、厄介事専門だろオ？」

「テメエが引っかけた厄介事ぐらいテメエで片づけろ！ 何だその理不尽！？」

現在夕食時と言う事で美鈴さんと美琴、風斬が台所を占拠。双子とはやて、インデックスはリビングでゲーム（一人だけ機械オンチ）。なのははインデックスの部屋で未だ熟睡中。そして俺、アクセル、芳川先生、ユーノは俺の部屋にて今日の出来事を報告中。

「なるほどね、今日の不可解な事件はそう言う事・・・」

「話し終わりました？ ならこの理不尽引き取ってください」

「あら、それは出来ないわ、だってアクセルが密かに楽しみにしてるんですもの」

「おい！ 何暴言吐いてエヤがる！？」

「あ！ こら家で暴れんな！？ って！ 能力解放しようとしてんじゃねえ！？」

「テメエ！ 離せエ！？ 保護者だろうがア関係ねエ！？ 今すぐミンチにしてやらア！！」

不幸だー！！？

夕食後。アクセル、御坂一家、はやて、美鈴さん、芳川先生は帰って行った、インデックスは何故かついて行きたそうだったが・・・ちなみに夕食は大量の揚げ物と、煮物中心だった。そして現在、風斬に事情説明。

「で？ 当麻くん。結局なんで氷華さんが居たの？」

「あゝインデックス？」

「えっとね？ ひょうかはね、特殊な体質で・・・結界とか人払いの魔術とかが効かないの」

「それってどういう事なの？」

「ひょうかの体内には膨大な量の魔素が存在してるの」

「？それって氷華さんにも魔導士の資格があるって事？」

「話だけ聞けばそう思うが、風斬にはリンカーコアがないらしい」

「？それって結局どういう事？」

「えっとリンカーコアは、魔導士が魔法を行使する為に必要な魔力を空気中の魔素、あるいは魔術用語で神の力テレスマと呼ばれるモノを吸収・変換して魔力としてる器官なの」

「？」

なのは は こんらん した。無理もないな俺だってさっぱりだ。

「つまり、リンカーコアなしに体内に膨大な量の魔素が蓄積するのはあり得ない事なんだよ」

ユーノが簡単に説明してくれる。

「いや、そうでもないんだよ？ 十字清教の歴史の中ではこういった前例はあるんだけど・・・でも、氷華の場合、その量があり得ないの。多分ランクで言えば天使級」

「よく分かんが・・・風斬は問題ないのか？」

「元々の体質なら問題はないんだけど・・・」

「問題はないが？」

「・・・インデックスさん・・・大丈夫。言って」

風斬がインデックスに答えを求める。

「ひょうか・・・分かった。前例の人達の末路は二通り、自分からその力を取り出し、利用しようとして死亡したのと・・・百歳単位で生きて死んでいった人の二通り」

「・・・そっか・・・うん、ありがとう・・・もう帰らなくちゃ」

「・・・送ってくぞ、風斬」

家を出てからずっと無言だった。

「……」

「な、なあ「何で、でしょうね」風斬？」

風斬が急に話した。

「当麻君にも美琴さんにも……以前、言ったと思うんですけど。私のお母さんもお父さんも私が幼い頃に居なくなっちゃいました」

「前に聞いたな……」

「おじいちゃん達も最近は笑っている事が多くなりました。前に見た映画みたいに、最後を楽しんでいるように……」

以前にお世話になった老夫婦を思い出す。……そういえば、俺や美琴と一緒に居た風斬を見て、大切な物が増えた事を喜ぶ様な表情をしていた気がした。

「もっと生きていて欲しかった、もっと生きて欲しい……もっと、一緒にいて欲しい……そんなのは、我が儘なんですか？」

前世^{かつて}を思い出そうとする。……霞みがかった記憶の中で親の……そして祖父母の葬儀を思い出す。

「そんなこと、ないんじゃないか？誰だって大切な人を、知り合いを、好きな人を亡くしたくない、失いたくないと思うもんだし」

「でも、何時の日か……私の知っている人たちは皆……おじいちゃんもおばあちゃんも、美琴ちゃんもなのはちゃんも、今日会ったあの子も……当麻君も……私より先に死んじゃうんだよ、ね」

「まあ、何十年も先の事だと思うがな」

「うん……そうだよ、ね」

やれやれ、俺の周りには自分でため込む性格が多いな。

「じゃあさ、風斬。今度の休みに遊びに行かないか？」

「……！？えっと！それって！あの！……デ、デート……？」

「まあ美琴とか、なのはとかが一緒でも良いけどさ。で？返答は？」

「う、うん、喜んでっ!」

漸く風斬の表情に笑顔が戻る。

「やっと笑ったな」

「あ。・・・ふふふっ、あ、ここで良いです。・・・お休みなさい、当麻君」

「ああ、また学校でな・・・氷華」

一瞬驚いた様な顔をしたが笑顔のまま別れた。

「・・・クラスの奴らにまたぼこられるな。・・・ま、いっか」

——また一人。守るべき幻想^{思い}が増えた。

おまけ

「さあ!頂きましょう!」

そう言って食卓に置かれたドでかい四皿の上には大量の揚げ物。取り敢えず一言。

「見てるだけで胃もたれが起きる」

タネはエビ・白魚・ホタテ等の魚介類からアスパラガス・ナス・ジャガイモ・蓮・大葉等の野菜系、終いにはトンカツ・唐揚げ・牛肉のしそ巻き揚げ等のフライ系さらには。

「何でこんなのまで?」

梅干し・豆腐・にんにく・よく分からない肉の塊・冷凍のタコ焼き・ねぎま・ウズラの卵etc・・・

「っ?!」

正面から圧力が来る・・・アクセルか!?

俺とアクセルの目と目が合う。

——おいテメエ、先に行けエ

――殺す気か!?

――テメエの家だろオ?!

――お前が行けよ! 楽しみにしてたんだろ!?

――テメエ!? それでもヒーローかア!?

――ヒーローなんかっ! 必要ねえだろ!!

その時横合いから美琴が話しかける。

「はい! 当麻! あーん!」

手に持っているのは・・・よく分からない肉の塊。 って待て! 一番初めにコレか!?

「アクセル! はいコレ! ってとまりは親切にも遠くの物を取ってあげる!」

「どうぞ。 とはずみはさりげなく貴方のお皿に置いてみます」

!? ニンジン!?

「おい三下ア」

「く、食えよ、お、俺の、よりまし、だろ、くくっ」

ヤバイ、笑いがこみあげてくる!

「笑ってンじゃねエ!」

「い、良いから、た、食べなさい、アクセル」

「芳川アアア!」

ご愁傷様アクセル。さて俺もこっちをどうにかしないとな。

「なのは・・・これは、何だ?」

「?・・・チョコはんぺん」

「待て! ちょっと待って!? チョコはんぺん?! チョコはんぺん揚げたのか?! つーか、美味しいのかそれ!?!」

「頑張れ! 当麻くん」

「あんたかああ!? 美鈴さん!!」

「あ、そうだ当麻くん」

「今度は何です!?!」

「冷蔵庫の中身ほぼスッカラカンだから、ごめんね?」

――不幸だ――!!

少女の思いと決意（後書き）

ぞろ2「2のぞろ目と」

当麻「上条当麻の」

ぞろ2・当「あとがき談話!!」

ぞろ2「さて始まりましたあとがき談話」

当麻「結局なにすんだ？」

ぞろ2「ん？人呼んで悩み解決や質問にお答え？」

当麻「まあ良っか」

ぞろ2「ではまずこの方！本作品のヒロイン、御坂美琴！」

美琴「どうも・・・で？なんでも質問してもいいの？」

当麻「良いんじゃないの？」

ぞろ2「おう！ドンと来い！」

美琴「じゃあ・・・私が上条家に嫁入りするのはいつ？」

当麻「ストープッ!!」

ぞろ2「そうだな、まあ結構先だろうな。なんせまだ小学生だし」

当麻「お前も素直に答えんな!？」

美琴「ふうん。あ、あと、感想コメにあったHGS患者の羽はどうなるの？私羽生やしてみたいんだけど？」

ぞろ2「それも考えてあるけど筆記途中で御蔵入りの可能性があるな。ただ出てくるとしたらかなり後だし、結構凶悪設定だぞ？」

美琴「可愛くないならいいや」

当麻「お前もそんなんでいいのかよ!？」

ぞろ2「じゃあ、次回予告でも宜しく」

美琴「分ったわよ、ギブアンドテイクだもんね」

当麻「・・・え？ここのゲストってそれで成立してるの？」

——出会うは一人の使い魔

——邂逅する二人の魔法少女

——少年は少女の手をとる・・・

次回「邂逅——そして増える不幸」（仮）をお楽しみに!!

美琴「次回って私の出番殆んど無いのよね、ヒロインなのに」

当麻「・・・原作でもそんな感じだよな」

美琴「と・う・ま」

当麻「な、何でしょうか!? ミコトサン!」

美琴「追いかけてこしょうか? もちろん・・・あんたが逃げて私が追いかけるのよ!!」

——バリッバリバリバリ!!

当麻「ギャアアアアア!!」

邂逅。そして、不幸は最後にやってくるb y e e r (前書き)

新約発売！ \ (^ O ^) /

でも、22巻まで読み終わってないo r z

邂逅。そして、不幸は最後にやってくるbyユーノ

Side…当麻

俺は今、海鳴と隣町の間の森に來ている。インデックスの話によればここら辺で反応を感知したそうだ。ちなみに、あの大樹事件から一週間が経とうとしている。今日までにジュエルシードの発見数は全員ゼロ個。あれ以來全く見つからなくなった・・・まあ別に悪い方向には進んでない。

なのははあの後、色んな肩の荷が下りたのか魔法の訓練にも日常生活にも余裕が出てきた・・・が、逆に俺は賭けをしていた事を漸く気付き焦っている。なんせ俺が確保したのはたったの一個。対してアクセルは二個、なのはに至っては四個で飛び出ている。

「で？インデックス。何処にいんだよ、件の暴走体は」

「んゝヨハネの反応だところら辺なんだけど・・・逃げちゃったかな？」

「不幸だ・・・ん？・・・よっ」

「わひゃ!？」

殺氣を感じ、左側に居たインデックスを引き寄せる。

「何すんだよ!とう（―ズバッ!）まっ・・・へっ？」

抗議の声を上げたインデックスの横、さっきまで居た場所を一瞬にして何かが通り過ぎ、地面には一筋の切り傷があった。

「（動きが）早いな」

「（言うのが）遅いんだよ!！」

「はあ?!（敵の動きが）早いだろ!？」

「だから（言うのが）遅いって言うてるかも!？」

―ヒュン!

―ズドォオン!!

一触即発の瞬間、再び何かが通り過ぎ・・・木が切り倒された。

「・・・なあ、インデックス」

「そうだね、とうま」

「取り敢えずあいつを倒してからにしよう」

「うん、それが良いかも」

―スパァン！

「「！？」」

再びやって来ては木が切り倒された。

「？！さっきより早くなってやがる！」

「とうま！私の近くに！！でも触らないでね？」

言われた通りにインデックスの近くに寄り、何時でも動ける体制でしゃがむ。

「んで？どうすんだ？上条さんはあのスピードに追い付きませんよ？」

「・・・とうま、それって追いつけなくても反応する事は出来るの？」

「？まあ何処から来るかぐらいは分かるぞ。恭也さんとか士郎さんの神速ほど早くないし、殺気も来るしな」

「とうまの周りってホントに理不尽だよね？」

失敬な。

「まあいいかも、次は何処から来ると思う？」

「そうだな・・・」

ふと、殺気を感じる・・・これは。

「上！！」

―ヒュッ！！

「プロテクション！！」

その瞬間、インデックスが光の壁を作り出し。

「追撃！」

「バリアブースト」

―ドォォン！！！！

一瞬にしてバリアが爆発する。

「っ！そこ！！」

さらにインデックスの手に魔法陣が輝き、そこから数本の鎖が飛び出し敵を捕える。

「とうま！」

「了、解っ！」

インデックスの合図と共に、一步で懷に飛び込み……。

「らああっ！！！」

掌手を相手に放ち……。

「パアアアアン！！！」

相手が破裂し……ツバメとジュエルシードに分離した。そしてツバメはそのまま飛び去り、俺はジュエルシードを拾う。

「相変わらず反則だよ、その右手。魔力ダメージも封印魔法も解呪もなしにロストログアの封印どころか、取りこまれた生物も解放させるなんて……デタラメだよ、無茶苦茶だよ」

「ええい！うるさいぞ！反則とかデタラメとか無茶苦茶とか理不尽だとか不条理だとか？！仕方ねーじゃん！？こう言うもんなんだし！！！」

「そののあんた！それを寄こしな！！！」

再び言い合いになり一触即発の空気の中、第三者の声が響いた。しかもご丁寧なジュエルシードを寄こせと言ってきた。……次元世界の住人か？

「……なあインデックス。やっぱりあの犬耳がキュートな美女か？」

「うん、そうだと思う……とうま、なんで私とあの人を見比べるの？ていうか何処を見てるのかな？……まったく、とうまは何時も何時も何時もデリカシーがないんだよ！！私だって女の子なんだよ？もっと女の子扱いするべきだと思う！！！」

おっと、インデックスさんのオーラがヤバい域に！？

「と言う訳で、私からの要求はご飯の量を増やして欲しいな！」

「結局食い意地張ってるだけか太る……ぞ……やば」

「とうま……」

「イイインデックス、さん?——やめてっ! 歯をつ! 歯を光らせ
ないで下さっ—」

「ふんっ!!!」

「にぎやあああああああ!!!!!」

「・・・えっと、この場合どうすれば良いのかね?」

——数分後

「えっと? で、どちらさん?」

頭が痛い。

「いやどっちでも良いんだけど?・・・あんた大丈夫なの? 頭から
血が出てんだけど?」

「ん? おわっ!?・・・まあ、ほっとけば止まるだろ・・・イン
デックス、やっぱりタオルかハンカチない? やっぱ止まんねえ」
「・・・はいっ!」

投げつけられた。まあいいか取り敢えず頭を押さえておくか。

「・・・で、あんたこれが欲しいのか?」

そう言っ、未だ右手で持っているジュエルシードを見せる。

「そうだよ! 大人しく寄こしな! 痛い目見ない内にね!!」

うわぁゝめっちゃ悪役のセリフじゃん。

「あなた分かってるの? これ、危ない物なんだよ?」

「そう言われても私の御主人が欲してるんでね、簡単には諦められ
ないんだよ」

「ご主人?」

次元世界ではイヌミミ御奉仕の職業でもあるのか?

「・・・あなた、もしかして使い魔?」

「へえ・・・そっちのおチビさんの方が詳しいじゃないか。ま、ど
ちでも良いけど大人しく渡すか、力づくで奪われるか選びな!」

そう言われてもなゝ・・・結局こうなるのか。

「インデックス、持ってる」

持っていたジュエルシードをインデックスに投げる。そして・・・

。

「かかって来いよ。犬耳巨乳の犬っ娘！」

「アタシは狼だ!!」

「（イラッ）とうま、後で話があるかも」

う、後ろからのプレッシャーが!?

「か、かかって来て下さい!早く!?!」

「あんた・・・情けないね。・・・まあいいさ、フエイトが来るまでに片づけてやる!」

その瞬間、獲物を狩る捕食者の様に仕掛けてきた・・・やっぱ狼なんだ。

「はあっ!!!」

「たあっ!!!」

そして・・・拳と拳がぶつかり合った瞬間。

「きょうん!?!」

「なんですと!?!」

行き成り犬に変身して足元に転がった。

「やっぱりこうなった」

「な、なぜなにインデックス先生」

「とうまの言ってる事はよく分かんないけど、この子はミッドチルダ式の使い魔だね。使い魔ってのいうのは大抵が動物の素体を元にした魔法生命体の事だよ」

「で?」

先を促しながら、そこら辺から紐になりそうな物を探して適当に縛っておく・・・ここは亀甲縛りだろうか?

「つまり、魔力で生きてるペットみたいなものだよ。だからとうまに触れた途端、魔力が抜けるから変身魔法も解けて元の姿に戻るし、今みたいに動けなくなっちゃうの。まあ契約者が居るし、その内魔力も回復して動けるようになると思うけど」

「・・・なあ、俺に触れた途端にその契約ってのも消されないのか?」

「んゝ多分、それはないんじゃないかな？ 契約が切れた使い魔は魔力が無くなると消滅するの・・・その子、魔力が無いのに別に死んでないでしょ？」

右手で触れないように確認してみる。・・・うん。

「死んでないな、息してるし・・・よかったゝ」

「うん。よかった！ これでもし、とうまがスフィックスに触れても死ぬ事はないって分かったし！」

・・・あれ？

「そう言えば俺、スフィックス触った事ねえ！？」

「今気付いたの？」

な、何だその呆れた表情は！？

「ま、まあいいや。・・・こいつもその内、飼い主が拾いに来るだろ。厄介事が重なる前に帰ろうぜ」

「そうだね・・・お腹も減ったし」

「たまには胃袋以外から指令を出せよ」

「ふんっ！！」

―ガリッ！！

「にぎやあああああ！！」

――翌日

待ち合わせは確か九時に海鳴公園の噴水前。現在八時五十分、無事に来れた俺は既に待っていた氷華と合流した。今日は以前の約束通り、氷華とのデートの日。

「早いな、氷華」

「えっと、その、あの・・・待ちきれ、なくて」

可愛いなゝもう！ ちなみに髪型は何時もの左側に一房だけ束ねられたヘアースタイルに多少ずり下がったメガネ、そしてひざ下まであるワンピースの上からセーターを着ている。

「じゃあ、行くか」

そう言つて手を差し出す。

「あう・・・はい」

やべえ、俺今日で日ごろのストレス解消できるかも。と言うより・

・萌え尽きる!?

「そ、そう言えばあの子はどうしたんですか？」

「あの子・・・インデックスのことか？あいつなら美琴に預けた」

「あの、あの二人って仲、悪いんじゃないんでしたっけ？」

「ああ、別に悪くはないぞ？・・・ほら、よく言うだろ？『喧嘩するほど仲が良い』って」

「・・・ふふっ」

「んじゃあ、行こうぜ！」

「はい！」

「何処行く？やっぱまずは映画か？」

「あの、私行きたい所が・・・」

「どこ？」

さて、今日ぐらいは不幸な厄介事は・・・せめて夜に来てくれ！

——某所動物園

さて、やって来ました動物園。

「ところで何で此処に来たかったんだ？」

「・・・昔、まだお父さん達が居た時に、来た事があるんです・・・

・それに、お父さん達の初デートの場所なんです」

その初デートに此処を選んだのか。

「じゃあ行こうぜ？折角来たんだし楽しまないとな」

「はいっ！」

「・・・当麻？」

「ん？」

行こうとした瞬間、誰かに声を掛けられた。仕方なしに振り返ると。

「浜面？」

浜面仕上が居た。しかも・・・。

「ん」

「よう、久しぶりだな。滝壺」

滝壺理后と一緒にだった。

「なんだ？そっちもデートか？」

「そっちもって事はお前もか・・・良かったのか？麦野の事」

こいつの所有権は麦野にあったはずだけど。

「・・・言うな、考えない様にしてんだから。お前の方こそ意外・・・

でもないか。最近下の名前で呼んでたし。付き合ってるのか？」

「いんや。上条さんはまだ誰とも付き合ってませんですことよ？」

「・・・良く御坂と高町が許可したな」

「ふっ・・・浜面、男は後先考えずに突っ走る事が出来る生き物だぜ？」

「無許可?!」

今考えると、何か嫌な汗が出てくるな・・・ん？

「なあ浜面」

「どうした？」

「気付いてんのか？アレ」

「ああ。気付いたか・・・だから後の事は考えないようにしてる・・・
・なんせ二倍だし」

気付かれない程度に横を向いた視界の隅、丁度茂みに隠れる様な
感じで此方を覗っている微妙に怪しい二人組。麦野所有者沈利と絹旗最愛妹分
がいた。あと能力者だから二乗って考えとけ。

「まあ頑張れ？俺達は（巻き添え喰わない内に）行くわ」

「おう、（お互い）また（生きてたら）学校でな」

「じゃあ、またね滝壺さん」

「バイバイ、ひょうか」

そう言って二人と別れる。・・・嫌な別れ方だったな。

Side Out

S i d e ..なのは

今日は日曜日。前回の出来事から毎週日曜はお休みの日と決め、今日はすずかちゃんの家に遊びに行く約束をしていた為、お出かけの準備中です。ちなみに、インデックスさんとユーノくんからは魔法の基本は大体教えたと言われました。そう言えば今日当麻くんはデートって言ってた・・・氷華さんだからまだ許してあげるの。

「な、なのは？なんか物凄いオーラが出てるけど、どうしたの？」
ユーノくん？何でそんなに脅えてるのかな？かな？

「なのはーまだかー！」

あ、下でお兄ちゃんが呼んでるの。

「行こ！ユーノくん！」

「わ、分かった」

ユーノくんが何時もの定位置の肩に乗る。そしていつもの様に机の上の写真に声をかける。

「行って来ます」

――月村邸正面玄関

〈広いね〉

〈へやはは、よく来るけど私も毎回そう思うの〉

念話でユーノくんが話しかけてくる。私達は今すずかちゃんの家
の豪邸に來ている。ちなみにメンバーはお兄ちゃんに私、ユーノく
んの三人（二人と一匹？）。

ーリンゴー

・・・やっぱりお金持ちの家の呼び鈴ってこんな感じなのかな？
『はい・・・恭也様でしたか。いらっしゃいませ。すぐにお迎えい
たします』

声の感じからすると多分すずかちゃんのお姉さん、忍さんの専属
のメイド、ノエルさんなの。

しばらく待つと門が開いてノエルさんがお出迎えしてくれた。玄関辺りまで案内してくれると。玄関のドアが開いて、お兄ちゃんの恋人でもある、月村忍さんがお兄ちゃんを連れて行った（前に当麻くんが、アレは拉致って行くって言ってた）。置いてけぼりをくらった私は再びノエルさんの案内ですずかちゃんの居る庭のお茶会の席に案内された・・・アリサちゃんも既にいるの。

「遅かったわね、なのは」

「いらっしやい、なのはちゃん」

「お邪魔します、すずかちゃん。にやははは、アリサちゃんが早いんだよ」

何かこう言うのも久しぶりかも。

「そういえばなのは、恭也さんは？一緒に来たんでしょ？と言うよりなのはをダシにして一緒に来たんでしょ？」

ノエルさんが入れてくれた紅茶と翠屋の焼き菓子（持ってきた）を食べながら、アリサちゃんが聞いて来た。

「お兄ちゃんなら忍さんが連れて行ったよ？」

「お姉ちゃん、去年よりよく笑う様になった」

「にやはは、実を言うとお兄ちゃんも以前より表情が柔らかくなったの」

不思議と笑いが起きる・・・お兄ちゃんも素直じゃないの。やっぱりお母さんの作ったお菓子はおいしいの。

「そうだなのは、あいつって今日は氷華とデートなんでしょ？」

「もが？」

アリサちゃんがニヤニヤしながら聞いて来たけど、口にお菓子が入ってたからうまく返事が出来なかった。

「口の中整理してから話なさい」

「（――ゴクツ）・・・うん、そうだけど？」

「・・・」

「？どうしたの二人とも」

普通に答えたらアリサちゃんどころかすずかちゃんまで黙ったの。

「いや、その、ねえ？」

「え？・・・うん、もっと違う反応するんだと思ってたんだけど」

「そうそう、何かこく、もっと嫉妬すると思ってたんだけど」

「すずかちゃんもアリサちゃんも好き勝手言ってる。」

「んく・・・美琴お姉ちゃん以外の人ならそうなるんだけど、氷華さんだと・・・何か不思議と許せちゃうの」

「これは、どう突っ込むべきなのかしら？美琴が普通にカウントされてない事を突っ込むべき？」

「なのはちゃん、ますます戻れない道を走ってるね」

？二人の言ってる事が分からないの・・・そう言えばそろそろお昼時なの。

Side Out

Side..当麻

「ど、どうぞっ」

お昼時、と言う事で氷華が作って来たお弁当を堪能中。ただし・・・。

「ど、どうぞ！おしぼりです！」

「五和、お前さんそのおしぼり今日で何個目よな？」

お隣に五和と、天草式総合格闘術師範代理であり浜面の師匠の一人、建宮斎字さんがいる。お昼近くになり、一旦館内の外に出て場所を確保しようとしていたら、たまたま会ってそのまま一緒にお昼を食う事になっただけだ。

「うん、美味い」

「そ、そうですか！よかった・・・」

「それよりお前も食べようぜ」

しかし横がうるせえ。

「おっ！少年やるねく見たか五和？あの少女こそが乙女と言う生き物よな！」

「風斬さん・・・ご教授お願いします!」

「え? え? あ、あの、えっと! ?」

邪魔すんなー! 建宮ああ! !

Sid Out

Sid..なのは

軽めの昼食後、放し飼いにされていた猫にユーノくんが追い駆け回されたり、ユーノくんが逃げた先に、すずかちゃんのメイドさんのファリンさんが居て、こけてユーノくんの尻尾に紅茶が掛かったり、そのせいでユーノくんが逃げきれずに猫さんに啜えられたりした・・・あれ? ユーノくんが一番酷い目にあってるの。

〈大丈夫? ユーノくん〉

〈も、もうゴールしても良いよね?〉

何かダメダメな気がするの。その時・・・

ーキィィィン

「! ?」

この気配、ジュエルシード!? ど、どうしよう! ?

〈なのは! 僕に任せて!! 〉

ユーノくんから念話が来たと思ったら。離れた所にある森の茂みの中に走って行った・・・そう言う事!

「あ! ユーノくん!? アリサちゃん、すずかちゃんちよつとごめんね! ? ユーノくん探してくる!」

そう言って二人の返答も聞かずに走りだす。そして、途中で周りの色が変わったー恐らくはユーノくんが結界を張ったー。そして、森の中の拓けた場所に出ると。

「フニャ」

ーガクッ

思わず足の力が抜けた。

「ユ、ユーノくん?」

「た、多分子猫の大きくなりたいて願いが正しく反映されたんだと思う」

「・・・正しく？」

そこに居たのは元の子猫よりも十倍近く大きくなった猫が居た。

「とにかく、暴れない内にジュエルシールドを封印しよう。長く離れてると探しに来るかもしれないし」

そう言えばそうなの。

「レイジングハート」

レイジングハートが光り、私の体を光が覆うと何時もの白いバリアジャケットに変わっていた。

「えっと、少し痛いと思うけど我慢してね。猫さん」

レイジングハートを猫に向け封印しようとした瞬間・・・。

ーヒュン！！

「ニャオオオン！？」

横合いから何かが当たり、猫さんが倒れた。今のは、魔力弾！？

「っ！誰！？」

そして、撃って来た方向に振り返り・・・その子は居た。

金色の長い髪をツインテールにして、全体的に黒を中心とした服装に黒いマント。そして、デバイスと思われる戦斧の様な杖を持った、赤い瞳の女の子が木の枝の上に立ち、私を見下ろしていた。

「バルディッシュと同型のインテリジェントデバイス・・・同系統の魔導士か」

「バル、ディッシュ？」

あの子のデバイスの名前かな？

「まさか、管理局の魔導士？・・・いや違う、ジュエルシールドロストロギアを狙っているのかっ？！」

「ロストロギア、ジュエルシールドと確認・・・すみませんが、頂いて行きますっ！」

「サイズフォーム」

その子が持っていた戦斧が形状を変え先端から金色の鎌の刃が飛

び出し、私を避け、遠回りをするように飛び出した。

「（狙いは・・・猫！）レイジングハート！」

「ディバインシューター、セット」

私の周りに三つの光弾が現れる。

「行って!!」

「ファイア！」

打ち出される。一つは彼女を追いかけて、もう二つは進行方向上に打ち出す。

「っ」

当たると判断したのか、急に上昇し・・・。

「バルディッシュュ！」

「イエッサー、フォトンランサー、ファイア」

私に向かって二つの魔力弾が飛んでくる。って！早い!？

「くっ!!」

「プロテクション」

―バチィィ!

とっさにレイジングハートが防御魔法を展開するが・・・。

「遅い」

「へ?!」

「マスター!？」

「サイズスラッシュ」

「ごめんねっ」

後ろから声が聞こえた途端・・・私の意識は落ちた。

――――――――――

「――! なの――――」

誰かの声が聞こえる。

「なの――、なのは!」

「うっ・・・ユーノ、くん?・・・っ! あの子は!？ ジュエルシード

は!?!あと、あと、子猫さんは!?!」

「落ち着いて、なのは。なのはが気絶させられた後、ジュエルシードは封印されて持って行かれた。僕もバインドで拘束されて、見るだけしか出来なかった・・・子猫の方も、さっき目を覚まして何処かに行っちゃった」

「そっか・・・あの子と、また会うのかな」

「多分、僕達がこのままジュエルシードを集め続けるなら」

「(何だろ・・・あの子の目、何処かで見た気がする)・・・あ!?!」

「どうしたの!?!なのは!?!」

「大変ユーノくん!早くアリサちゃん達の所に戻らないと!?!」

「・・・そうだね、戻らないとね」

どうしたんだろ?ユーノくんが急に元気が無くなったの。

Side Out

Side..当麻

「大丈夫かよ浜面?」

「お前、ボロボロだぞ?」

「大丈夫、問題ない」

「(「(ホントに大丈夫なのか?コイツ)」」

時刻はそろそろ六時近く。俺と氷華は帰る前にお土産を買いに園内のお店に入った所、機嫌よさそうに商品を物色する麦野・絹旗・滝壺率いる浜面チーム(浜面がリーダーではない)と遭遇、さらに良いタイミングで齧りつく様にぬいぐるみを見つめる五和と、その後ろで既に幾つもの買い物袋を持った建宮とも合流した。そして、俺達男組は女性陣から少し離れて話し合っていた。

「やっぱり数時間前に聞こえたド派手な爆音ってお前らか?」

「・・・ああ。あの時は死ぬかと思ったぜ」

「話に聞いていたが、やっぱ超能力者と言うのは凄いもんだよな。」

同年代の中では意外と体力がある浜面が、そんなにボロボロの草臥れた様子とは・・・恐れ入るのよな」

そう、今の浜面は所々ボロボロで何処か煤けており、草臥れたサラリーマンそっくりだった。

「で、何があったよ？」

「いやな、転んだ滝壺を支えようとしたら誤って胸の所を触っちゃって・・・気付いたら空を飛んで地面に叩きつけられたと思ったら爆発が起きて、さらに吹っ飛ばされた」

「よく生きてたな」

ホントよく生きてたな。俺でも中々そんなフィーバー状態なんて・・・アクセルと戦う時ぐらいか。

「所で浜面。そのお嬢ちゃんの感触はどうだったのよな？」

「おい建宮！あんた高校生だろ！？」

そう、建宮斎字。十七歳。現在高校二年、将来は一流のボディガードとしても活躍できる程の腕前を持っている。

「いや、なんか手に柔らかい感触が」

「お前もなに暴露してんの！？」

止める！此処でそんな事言ったら！？

「へえゝはあああああずううらあああ？面白い話してるわねゝ？」

「今すぐその超軽い口を閉じて下さい。いえ、やっぱり私が超潰します」

「はまづらのえっち」

「！？ま、待て！此処は店内だ！なので俺は平和的な解決を希望します！？」

哀れな・・・一応フォロー入れるか。

「麦野ゝ」

「んだよ！今から浜面をぶち殺すんですけど！？」

「浜面の奴、揉むならやっぱり麦野が良いだつてさ」

「おまっ！？」

「へ、へえゝは、浜面あゝあんたそんなにわ、私のむ、むむ胸を触りたいのかよ」

おう、思いつきし反応してやがるぜ。おつ、絹旗が殴りかかった。

「お前さん、意外と策士よな」

「リア充はもげろ。もしくはさっさと結婚しちまえよ」

「はっはっはっはっは！！面白い事言う子供よな！五和！お前のクスメートは面白そうな奴ばっかりなのよな！！」

「え、えっと。ううう、ひ、否定できません」

お前もその一人だぞ？五和。

「お、氷華。それ気に入ったのか？」

「え？・・・はい」

「お前って猫好きだったけ？」

氷華が手にしたのは猫のキーホルダー。

「いえ、そんなんじゃないんですけど。なんか、見てると自然と嬉しい気持ちになるんです」

「ふゝん。じゃあそれで決まりだな」

「え？」

冷静に氷華の手の動きを見極め、キーホルダーを掠め取る。これぞ無駄な体術の使い方！と自分でボケをしている内にレジに行き。会計を済ませる。

「ほい、プレゼント」

「・・・」

「?どうした？」

「あ。・・・あの。い、いいんですか？」

「何言ってるんだ、初デートの記念ぐらい形として残しても良いだろうが」

「・・・ありがとう、当麻君」

——その瞬間、今日最高の風斬氷華の笑顔を見た。

Side Out

Side..なのは

「もう一人のジュエルシード探索者ね〜・・あんたはどう思う？」

「間違いなくロストログアハンターだと思う。それも話を聞く限り、ジュエルシードを確実に狙った」

あの後、アリサちゃん達の所に戻り、表面上では何事も無かったかの様に振る舞い。家に帰る途中でお兄ちゃんと分かれ、その足で当麻くんの家に来た。ちなみにまだ当麻くんは帰ってきていない。

「ねえユーノくん、どういう事？」

「えっとね、ジュエルシードは僕達スクライア一族が古代遺跡から発掘した代物なんだ。それを管理局に運ぶ途中にこの世界に落ちたんだ、つまり管理局内でも限られた人しか知らない物を狙って来た。って事なんだよ」

「ん？・・・それってその管理局の中の情報が洩れたって事？」

「そう、なるね」

たっ！大変なの！？

「ま、まさか、これ以上色んな人が狙ってくるの！？」

「そ〜なるわね〜」

「それか、早く管理局の艦隊が来てくれるのを期待するしかないかも」

な、何でそんなに冷静なの！？

「ただいま〜」

「と、とうま〜んっ！！」

「おわっ！？何で泣いてんだ！？なのは〜！？上条さんは予測不可能な事態に困惑しています！だ、誰か説明ー！ー！！」

Side Out

Side..当麻

「なるほどな〜。情報漏洩疑惑に新たな探索者ね〜」

現在、晩飯製作中&食事中に今日の出来事を聞いていた。氷華とのデート中にそんな事になっていたとは・・・まあでも。

「その女の子は、それほど危ない子では無さそうだな」

「とうまもそう思う?・・・おかわり」

夕食は大量唐揚げと中華スープ、サラダ（人数分だけ）に煮物（例によって御坂家のおすそ分け）である―ちなみに、最近になってインデックスが炊飯器の扱い（スイッチのみ）を覚えたので、お米をセットしておけば最低白米は食べられる―。

「何でそう思うの?」

「ん? いやだって、犯罪者がわざわざ非殺傷設定で攻撃する事ないじゃんか。普通に考えれば誰だって横取りされるのは嫌だしな・・・ほい大盛りな」

「ありがとう! とうま・・・よくあることだよ。人数が減ればその自分分の取り分が増える。それに、なのはが他にもジュエルシードを持っているなら・・・『結果』がどうなろうと奪う事を考えるし」
おう、なのはがガタブルと震えてる・・・プルプルなのは好評発売中。って! 違うだろ俺! ?

「なのは、もちつけ」

「ぺ、ぺったんぺったんっ!」

ボケとしては最高だが、駄目だこりゃ。そう言えば昔、美琴がトリオ漫才を組むんだって言ってなのはを教育してたな・・・いや、コレは素か。

「いいか? もしこの一連の事件が計画的に行われているとしたら、恐らくはこれ以上探索者が増える事はないと思うぞ?」

「・・・そう、なのかな?」

「ああ、もし次に介入してくる奴が犯罪者だったら・・・取り敢えず医者のお世話にさせる」

・・・よし、なのはの震えが止まった。

「それで、なのはから見てその子はどだった?」

「・・・強かったの。速くて、付け焼刃の私なんかとは違う、本当

の訓練を積んだ魔導士だと思う」

「なるほどな」・・・でも」？」

「何処か寂しそうな感じがした・・・そう・・・そうだ・・・あの目、昔の・・・当麻ちゃんと美琴お姉ちゃんに会う前の私とそっくりなの」
「・・・なのはは、どうしたい？」

なのはは、少し考えた後。俺の目を真っ直ぐに見てきた。

「私、あの子ともう一度戦う！戦って、分かりあって、あの子の寂しさを失くしてあげたい！私！あの子とお友達になる！！」

・・・高町流OHANASI術？

「インデックスさん！私強くなりたいたい！！」

「ん」と言っても私やユーノじゃ戦い方が違うし、他に魔導士がないから・・・どうしよう？とうま」

おい、そこで俺に振るなよ。

「やっぱ実戦が一番じゃねーの？」

「じゃあ宜しくね？とうま」

「はっ？・・・待て待て！俺じゃ駄目だろ！大体右手以外に触れちゃったら（両方に対して）アウトだし、大体！俺、空飛べねーですことよ？！」

「大丈夫だよ、とうま私に良い考えがあるから」

な、なんでそんなに良い笑顔何ですかー！インデックスさん！？

「当麻くん」

「当麻さん」

「なのは、ユーノ・・・」

「「よろしくお願いします！」」

不幸だー！ー！ー！

「って、待て！何でユーノまで俺に頼むの！？」

「えっと、僕も攻撃力克服の為に格闘術を教わろうかと思ひまして」

「・・・取り敢えず走れ。体力作りと根性試しだ」

「な、なんか凄い適当な感じがするんですが？」

「当たり前だろ、格闘術、っーか接近戦闘系のスキルなんて数日で

身に着くはずないだろ。俺だって十年近くの積み重ねだぞ？」

何甘い事言ってるんだか。

「す、数日で身に着く物は無いんですか？」

数日で身に付く、ね。

「回避と反応速度向上と危険感知なら、数日で身に付くかも知れんぞ？・・・死ぬほど痛いかも知れんが」

「・・・ちなみにどうやって？」

「限定空間内でインデックスの誘導弾三十発の時間無制限回避だ」

「だ、弾幕ゲーム！？」

「あ！私も混ざりたい！！撃つ方で！」

「いいぞ」

「あれ！？僕の意志は！？」

「強くなりたいなら弱気な発言及び提案、泣きごとは全て師匠権限で却下されます」

「ふ、不幸が感染したー！！」

「ああア！^{ハードラック}テメェ俺の不幸体質を感染病みたいに言うんじゃない！」

――巻き添え一名追加

邂逅。そして、不幸は最後にやってくるbyユーノ（後書き）

ぞろ2「2のぞろ目と」

当麻「上条当麻のー（棒読み）」

ぞろ2・当「あとがき談話」（1人棒読み）」

ぞろ2「・・・やる気ないな」

当麻「いやな、新刊出るだろ？俺1巻目で出てこれるのになって」

ぞろ2「そうだなーお前出てこないと魔術サイドの出番も少なくなるよなー表紙からして科学サイドっぽいし」

当麻「・・・」

ぞろ2「ま、まあ気を取り直して。今回のゲストはこの方！」

五和「は、はじめまして！天草式総合格闘術の五和です！！あ、おしぼりいかがですか？」

ぞろ2・当「遠慮します」

五和「そう、ですか」

ぞろ2「・・・さっさと進めるか。さあ質問があったらどうぞ？」

五和「あ、それじゃあ今回私って建宮さん一緒に動物園に行ったのは何ですか？」

当麻「そう言えばそうだな。五和ってヒロイン候補じゃないのか？」

ぞろ2「うむ、簡単に言う小学生の恋と言ったところか。現段階では近所のお兄さんとお出掛けって言った所だな」

当麻「ふーん。じゃあこれから先、他の人に引かれるかも知れないし。このまま五×建って事になるかもしれないと？」

ぞろ2「そう言うことだ。建宮の方も近所の妹とのデート（笑）って感じで付き合った。て感じだ」

当麻「なぜ（笑）が入ってるんだ？」

ぞろ2「本文見ろ」

五和「あ、あの、それじゃあ次元世界サイドには何時頃踏み込んでいくんですか？」

ぞろ2「それもかなり後だな。ミッドとかベルカの魔法と違って魔術って非殺傷とか使えないじゃん？小学生の頃から入りたいか？」

五和「え、遠慮します」

ぞろ2「ま、ネタばれとしては・・・天草式十字清教にはなります」

当麻「それってすごくギリギリだよな？」

五和「そうですね」

ぞろ2「伏線は1章『それぞれの日常―12月25日』だな」

当麻「そろそろ危ないから！？五和、すまん！次回予告言ってくれ
！！」

五和「は、はい！！」

――少年少女は一時の安らぎを得る

――忍び寄る戦いの時

――迫り来る酔っ払いの魔の手

次回「温泉旅行」

五和「また出てこなくなるんですね」

当麻「まあ、今ところなんの力もない一般人だからな」

ぞろ2「すんません。出来れば早く出番を増やしたいんだけど、無印編でこれ以上やるとパワーバランスと、主人公属性持ちの人の成長が出来なくなるんで」

五和「しくしく・・・どーせ私なんか」

当麻「（オイ！どうすんだよ作者！）」

ぞろ2「（なんとかして出番増やすから！お前！慰めといて！）」

当麻「俺かよ！？」

五和「ふふ、ふふふふふ、こうなったら・・・あなたを殺して私
が書きます！」

当麻「落ち着け！！！！つて居ない！？これ俺が止めるのか！？」
五和「作者アアアアア！ぶち殺オオオす！！」
当麻「不幸だーーーーーー！！」

温泉旅行・日常編（前書き）

生存報告も込めて投稿。書いてたら長くなったので二つに分けました。

温泉旅行・日常編

Side…当麻

なのはがもう一人の魔法少女と遭遇してから数日たった。その間もジュエルシードの探索は怠らなかったが、捜索者が増えたからか以前よりさらに見つけにくくなった。その代わりになのはの訓練もレベルが上がりが対人戦を意識した物になった。

左右、後ろ、真上から魔力弾が迫って来る。それを前に、正確にはそれを撃って来た人物、なのはに向かって跳んで行く。しかし、目の前には足場と呼べるものが存在しない、よって俺はそのまま空中から落ちる事になる・・・が。

―シュンッ！

新たに水色に光る床―フローターフィールドと言うらしい―が幾つも出現し、跳び移り魔力弾を回避する。しかし回避した途端、誘導弾だったのか弧を描き再び俺に向かって来る。

「（ホントっ、厄介だなっ、魔法ってやつはっ！）」

後ろから迫って来るのを感じながらも、なのはに向かって床を蹴る。

「ディバイイイインッ」

「っ！」

なのはが砲撃の準備していた。

「（やばっ！避けられねえ！？）」

「バスタアアアッ！！」

予測された床に向かって砲撃が撃たれる・・・が。

「間に合えよっ！」

飛び移った瞬間右手で床に触れ、そのまま重力に任せて落ちる。ギリギリ頭の上を砲撃が通り過ぎた。そして再びインデックスがフィールドを複数展開する。

「あつぶねえー！殺す気かつ！？」

「大丈夫だようま、非殺傷だから」

「そう言う問題じゃないです！インデックスさん！？」

いくら訓練とは言え当たると痛てえんだぞ！？」

「あははははっ！がんばれー当麻」

「笑い事じゃねえ！！！」

「頑張ってください！あと五分です！」

畜生！？味方がいない！！

――五分後

「う、うだゝゝい、生き残った」

この実戦式訓練、ルールはすごく簡単。戦闘フィールドは主に空中。勝敗は俺がインデックスの作るフローターフィールドから地面に叩き落とされるか、俺がなのはに触れるか、後は時間制限オーバー（三十分）の引き分けの主に三通りがある。ちなみに今現在勝ち4、負け2、引き分けが多数という戦績だ。

最初の頃は、なのはも遠慮してたのかディバインシューターしか使っていなかったが、一度叩き落としたら本気でシューターとバスター、引き分けが続くとついにはバインドまで使ってきた。

「畜生、不幸だ。なんで旅行当日の朝っぱらから、こんなに死にかけなきゃなんねーんだ？不幸だ、大事な事だから三回言います不幸だ」

「ご、ごめんね！当麻くん」

「大丈夫よなのは、当麻は強い子だから！」

「それ全然理由になってねーぞ美琴、あと謝んなよ？なのは」

「そうだよなのは、とうまは嫌だったら初めの一回目の時に思いっきり拒否してるはずだもん」

「あんた良く見てるわね？その通りよなのは、当麻はなのはの事が大切だから喜んでるのよ。もちろん私もだけどね！うりゃ！」

「にゃゝ苦しいの」

「そうだよなのは、当麻さんはこの程度の不幸じゃ何とも思っていないから」

こいつらっ！好き勝手に言いやがって！全部事実だけどさ！？

Side Out

Side..なのは

朝からハードな訓練だったが既に全国に晴れの今日。ゴールデンウィークに突入し高町家も毎年恒例の家族旅行（本音は高町夫妻の慰安旅行）。ちなみに当麻くんの家と美琴お姉ちゃんの家も毎年の如く便乗、今回行く所は二泊三日の温泉旅行。

「・・・何か嬉しそうね？なのは」

「え？うん楽しいよ？」

行き成りアリサちゃんが話しかけてきた。

「それは仕方ないよ、アリサちゃん。なのはって当麻くん一緒に出掛ける事ってないから」

「ああそう言う事・・・」

お姉ちゃんの説明でアリサちゃんは何故か納得したの。現在車で移動中、私達高町家の車には私たち家族と、アリサちゃん、すずちゃん、そしてフェレットスタイルのユーノくん。

「なのは」

「何？ユーノくん」

「例のあの子の事、大丈夫？気にかけてない？」

ユーノくんの念話に以前出会い、戦った女の子の事を考える。

「・・・大丈夫だよユーノくん。また戦う事になっても大丈夫。・・・

それより今は楽しもう？」

「・・・大丈夫そうだね、良かった」

ありがとう、心配してくれて。

「そう言えば、ユーノくんはこういう所来た事あるの？」

「僕？んゝ公衆浴場ぐらいなら行ったことあるけど。こういう自然

な所は初めてかな？」

「そうなんだ、温泉は良いよ。当麻くんなんか激動な日常の中のオアシスって言ってた程だもん」

「……いまいち参考にならないけど良い所だって言うのは分かった」

あれれ？ユーノくんの反応がいまいちな。そういえば今日は参加する人数が増えたって聞いたけど……誰が来るんだろう？

Side Out

Side…当麻

「誰でもいい……俺を、殺せ」

後ろで何やら凄い事になって真っ白いのが救いを求めているが、それを見て楽しそうに笑っているのは……美鈴さんぐらいだ。

「あの、良いんですか？」

「良いの、良いの、ほっときなさい。……はい当麻、あーん」

「はむっ……すっぱっ！」

「って！盗んな！！」

俺の両隣に美琴と氷華とが何やら話しあっているが……俺の方こそ助けて欲しい。何故なら……俺の膝の上にインデックスが座っているからだ。それを見て笑っているのは、やっぱり美鈴さん。と、母さんだった。ちなみに、インデックスとは昨日の時点で顔合わせは済んでいる。母さんの笑顔がすごく怖かった。

そして現在、この車に乗っているのは上条家（三人＋a）・御坂家（五人）＋アクセル＋芳川先生＋氷華＋はやての計十三人＋荷物。その為あらかじめレンタルしていたマイクロバス（ちなみに上条家には車は置いていない）に乗車可能なのは十人。つまり前から順に運転手親父、助手席旅掛さん、母さんに美鈴さん、芳川先生にはやての車椅子、並び順に美琴・俺・氷華・膝の上にインデックス、そしてはずみ・アクセル・とまり・アクセルの上にはやてという状態

になつてゐる・・・旅館に着くまでこのままか。

「当麻・・・ちっ！駄目だ、目が死んでやがる」

ああもうすぐそっちに行くよ（前世の）父さん。

――数十分後

「や、やっと着いたかつ」

あれから一時間近く天国に近い地獄を味わった。

「・・・生きてるか？アクセル？」

「ああア」

ヤバいな覇気がない。

「イエーイ！さっそく探険だー！てとまりは嬉しさのあまりはやてを強制連行！」

「よっしゃ行つたれー！アホ毛ちゃん！」

「私はアホ毛じゃないよ！？てとまりは何度も抗議してみる！」

「とまりがアホ毛なのはともかく早く行きましよう、はずみは内心ウズウズしています」

「こらこら待ちなさい二人とも、母さんも一緒に行くから」

車から降りて双子＋美鈴さん＋はやてはどっかに行った。

「取り敢えず荷物運ぶか」

「あら？当麻さんはこっちよ？」

「・・・お母様？そちらと言うのはそちらの荷物の事でしょうか？」

「あらあら？当麻さんにはそれ以外の何に見えるのかしら？」

母さんに指定された荷物は女性陣の荷物全だった。

「待って下さい！？なんで居る人の分まで？！」

「あらあら当麻さんは女性に荷物を持たせるのかしら？」

「お、親父っ！て居ねええええ！？」

助けを求めて振り返れば既に男性陣は居なくなっていた。

「「「・・・」」」

「（オロオロ）」

「せ、せめて手荷物ぐらいは持って下さい」

結果。女性陣に全面降伏。

「あゝ疲れたゝ」

あの後心配してくれた氷華だけが天使だった。そして女性陣は温泉に入りに行った。

「――た！――ですか！」

「――ね――」

「あん？」

誰かの言い合いが聞こえる。つか一人は知り合いの声だ。その声を頼りに角を曲がる・・・こっちは風呂場方面か。

「あははっ！ごねんねゝ知り合いにソックリだったもんでねゝ」

見れば知り合いの三人娘がどっかで見た事のある女性に絡まれていた。

「あっ当麻くん！」

「ん？・・・っ！？」

「あんた！来るのが遅いのよ！」

「アリサちゃん、それは理不尽だと思う」
「すずか嬢の言う通りだと思う。」

「で？どういう状況よ？」

「知らないわよ！その酔っ払い女がなのはが知り合いにソックリだったって言うだけで突っ掛って来たのよ！」

「あゝ落ちつけアリサ・・・取り合えず、間違えだって事だったんだろ？」

「そうよ・・・あと頭から手、どけなさいよ」

取り敢えず無視。そして例の女に向き直る・・・すっごい睨んでいます。

「あんたも謝ったのか？」

「・・・一応はね」

「ならそれで良いじゃねーか。これ以上面倒事はお互い得になん

いだろ？」

「・・・それもそうだね。じゃあねーおチビさん達」

そう言って女性は去って行った。

「あんた、いい加減退けなさいよ、燃やすわよ？」

「はいはい、俺も風呂でも入るかな」

「あ、当麻くん！ユーノくんが逃げちゃってたからまだ洗ってないの」

「お、そう言えばお前も居たんだったな・・・お前もオスだったな。なら男同士仲良く入ろうぜ！」

「きゅう！」

そう言って左手で受け取る。

「じゃあお願いね！」

「後で卓球勝負よ！」

「えっと、それじゃあまた」

そう言って三人娘も去って行った。

「・・・お前も大変だなユーノ」

「・・・そうなんですよ、なのは以外は僕の事、ただのフェレット
としか思っていないから・・・なのはのフォローがなきゃ今頃は
――」

「・・・インデックスにバインド各種で絞られてたかもな」

「うっ！？思い出させないでください！！」

「まあ、辛い事は風呂場で流そうぜ。・・・あと、さっきの事」

「分かってます。・・・ところでさっきの女性とは何かあったんです
か？去り際に『今度はその訳分かんない力ごと食い破ってやる』っ
て言う伝言を預かったんですけど？」

「あゝそれも後で話すわ。風呂で」

なんだその目は。またかこのヤロウって目してんぞ。

Side Out

Side…士郎

近くにある湖の畔をゆっくりと歩く、隣には愛する人が、桃子が居る。

「こういう風に、ゆっくりとするのは久しぶりですね」

「・・・ああ」

「店も他の子たちに任せる事が出来るぐらい成長しましたし」

「そうだな・・・あの時は、迷惑を掛けたな」

「構いませんよ・・・貴方が今ここに居る。それだけで幸せですから。それに、もう危ない事はしないんでしょ？」

「ああ、約束だったからな、今の俺は喫茶翠屋の店長兼マスターさほんと、良い人を見つける事が出来たもんだ。」

「・・・」

「なのはの事、心配かい？」

「もちろんです。何時かの時に味わった言い様のない程の不安がありますよ」

「そうだな・・・でも、今はあの子を信じて待てあげよう」

「分かっていますよ・・・何せあの子は私達の子ですから」

その言葉に桃子が体を寄せてくる。・・・これはもう一人追加か？そう思い顔を近付けるが・・・。

「「「（ドキドキ）」」」

「・・・何してるんです？」

視線を感じて近くの茂みに声を掛ける。

「え？！あ、いやゝすみません良い所を邪魔しちゃって」

「あらあら、美鈴さん達着いたのね」

「ええ、ついさっきです」

と言う事はこれで全員揃った事になるな。

「「・・・」」

「あら？どうしたの二人とも」

何時の間にかとまりちゃんとはずみちゃんが俺達に近寄っていた。「大丈夫だよってとまりは答えてみる」

なにが大丈夫なんだろう？

「えっとね、どんな事があっても当麻にいとあの人が居るから大丈夫ってとまりは確信してみる」

「そっか、当麻くんが居るから大丈夫、か」

「そうですよ桃子さん、なにせ美琴ちゃんミコちゃんの当麻くんが居るんですもの」

俺も桃子も一瞬、時が止まるがそう切り返した。・・・美鈴さん？

「ええ、そうねなのは当麻くんが居ればあの子も無茶しないわね」
おっと此処もそろそろ危なそうだな。子供たちを連れて非難しなきゃな。

「そう言えば、以前お姉さまが『将来は私と氷華と当麻で翠屋を継いでなのは看板娘にすれば完璧よね』とブツブツ言っていた記憶がありますと、はずみは既に将来設計が出来ているお姉さまに脱帽します」

「なんやそれ」

うゝん翠屋の将来としては明るいが、親としては素直に喜べないな。

「おおうハーレムだゝととまりは序にあの人と私達も入れてくれな
いか頼み込んでみる」

「・・・なあ、それってウチも入ってるんか？」

「「え？」」

御坂家の女性はたまに分からなくなるな。

Side Out

Side..当麻

あの後、温泉に浸かりながらゆっくりと話し合い。双方の情報を元に出した結論、おそらくジュエルシード探索者の少女の使い魔という結論に至った。同時にこの近辺にもあるかもしれないという結論にも。

「やりたきや一人でやれ。はずみの世界がやばいんだよあれ？今のはずみだよな？」

「って！誰だ！？はずみに酒飲ましたの！？」

「あ、わたひれひゅ」

「ファリンさん！！」

何時の間に！？

―どさっ

「とーまー」

インデックスが背中に乗って来た。

「な、なんでしょうか、インデックスさん」

「とーまは、もっとわたひに構うめきなんりゃよ」

「お前もかっ！」

「とーまー、構ってー！構わなきゃ噛みつくんらよ！？」

「まって！インデック（ーガブツ）にぎやあああああ！！」

言い終わる前にインデックスが俺の頭に食いついて来たってマジ痛え！！

「あっあんた私の当麻に何してんのって臭っ！酒臭い！」

「あの！えっと！ほ、ほらインデックスちゃん？唐揚げだよ」

「ん？・・・いたらきまふっ」

氷華の差し出したから揚げにインデックスが食いついた為、俺の頭からは離れてくれた。

「た、助かったぜ氷華」

「い、いえ・・・それより大丈夫ですか？」

「ああってそうだ！はずみの奴が酒飲んじまったんだ！？」

「大丈夫よ、ほらアレ」

そう言って美琴が差した場所。そこには・・・。

「すう」

「いいなゝはずみ・・・私もやりたいてとまりは駄々をこねてみる」

「ホンマやなゝ・・・って違う！？う、ウチは何考えてんのや！？」

「・・・うるせエガキ共、むしろ退かせ、つーか全員がアどっか行け」

はずみを膝枕（むしろ膝に覆いかぶさるように寝てる）している
アクセルとその周りで駄々こねてるアホ毛と子狸がいた。

「・・・平和だな」

「そうねーあつ当麻おかわりどう？」

「ん、貰うわ」

「あ・・・はいお茶です」

「お、あんがと氷華」

「当麻くん！どうだった！？私達の歌！」

「おお、よかったぞーなのは。ほれ見ろ、親父三人衆がさっきの聞いて大盛り上がりだぞー」

マジで大盛り上がりだ。つーか親父殿、インデックスも氷華も家の子じゃないぞ？・・・あ、親父と旅掛さんが殴りあい始めた。つて、士郎さん！鋼糸は駄目ですって！！

「ちよつと！あんた！」

余所を見てたら話を聞き逃したのかアリサがやって来た

「ん？どうしたアリサって顔赤いぞ？」

「もっと、わらひにかまいなひゃいよ！」

「・・・ファリンさーん！？」

「うー！とうま！もっとわたひにかまっへえー！！」

またか！？インデックス！！

ーぎゅ

後ろから誰かに抱きつかれた・・・誰だ？なのはか？すすかか？
美琴か？・・・って、何で選択肢が全員子供？！もっと大人をプリーズ！

「とうまくーん」

「氷華キターーー！？って！当たってる！？何がと言わないが当たってます氷華さん！！て言うか何時の間に酒飲んだ！？」

「とーまー」

「・・・待って下さい美琴さん！って駄目だ、お前もか！？くそつ、ノエルさん！助けて下さいませんか！！」

緊急措置として比較的安全圏のノエルさんに救助を求めるが・・・。

「すみません当麻様、お嬢様がこれ以上暴走しないために離せません。っ駄目ですお嬢様、此処にはまだ人が居ますっ！っすずか様！？見ては駄目です！くっファリン！ファリンはどうしました！？」

ぶっ倒れた恭也さんを守るために体を張って忍さんを止めていた・・・主に脱ぎそうな服を抑えつけ、体にダメージがない程度にサブミッションを極めて。しかもそれをすずかが見てるし。あと、ファリンさんは原因をばら撒いた後そこら辺で寝てます。

「・・・駄目だなアレは」

「にゃーとーまーくん」

「この声っ！なのはか！？ってなんでネコミミ！？」

さらに何故かネコミミを付けた、なのはが迫って来た。ホント誰だよネコミミ持ってきたの！？・・・まあ美鈴さんか桃子さんだろうがな！？

「アクセル！」

「頑張れよオ当麻ア・・・俺はもう、駄目だア」

「んだと！？・・・お前どうしてそうなったっ！？」

最後の頼みのアクセルは仰向けに倒され、追加でとまりが腹をはやてが腕を枕代わりにして寝ていた、ついでに芳川先生が近くに座って写真を撮っている。って貴女の手にあるの緊急用の能力者制御装置ですよ！？さらに何で空の酒瓶が転がってるんですか！？

「あははっユーノはかわいいな」

「きゅう！？」

あ、美由希さんも壊れてやがる！しかもユーノがお手玉にされてる！？

「とうまーくん・・・はむっ」

やめろ氷華！耳たぶ噛むな！？

「とうま！」

お前も囓むな！？微妙に痛えんだが？！

「えへへ、とーまー・・Z Z Z Z」

・・・お前が比較的楽だな寝てるし。

「あんらね！さっきゆからあに無視してるによよ！もっと構いなさいによ」

はいはい、そっちはただの空瓶だから。

「にゃーん、にゃー」

「ニャー」

こいつも楽だな、さっきから胡坐組んだ所に座って歌ってるだけだし、しかもスフィックスと一緒に。

「・・・不幸だ。あと何時間このままで居れば良いんだろか？」

「知ンねェよ」

――――――――――

あの後宴会を一旦止め、潰れた奴や寝てしまった者を寝室に運んだ後、大人組みは二次会に突入した。俺は精神・肉体共に限界だったので俺も寝るつもり・・・だったんだが。

「もう何も突っ込まねえぞ」

右を見る。なのはを間に挟み、そのなのはを抱き枕にした美琴が俺の腕を枕にして寝てる。離れた所の布団でアリサとすずかが仲良く寝ている。

左を見る。インデックスと氷華が仲良く俺の腕を枕代わりにしてる。恐らくだがアクセルも今頃同じ様な状況に陥っているだろう。

「（左手に当たる氷華のサラサラした髪がくすぐりたい・・・）って違うだろ俺？！」

「みんな起きちゃいますよ？」

枕元からユーノの声が聞こえた。

「お？ユーノ、もう大丈夫なのか？」

「・・・ええ、何とか、持ち直しました。・・・それよりも、ジュエルシードの事です」

その言葉に思考を切り替える。

「・・・何かあったのか？」

「いえ、今のところは何の反応もありません。ただ何時発動してもおかしくないと思います・・・それは向こうも分かっていると思います」

「もう一組のジュエルシード探索者か」

「はい。あと頼みがあるんです」

「頼み？何だよ」

「その・・・」

ユーノがしゃべろうとした瞬間。

「「っ!」?」

「ガバッ!」

「はえ?」

「?・・・インデックスちゃん?」

ユーノが何か言いかけた途端、今までぐっすり寝ていたのはとインデックスが急に起き出した。ついでに美琴と氷華も起された。

「とうまっ」

「・・・来たか・・・氷華は此処で待っていてくれ」

「美琴お姉ちゃんっ!ユーノくんっ!」

「・・・そう言う事っ!」

「分かってる、なのは!」

「・・・気をつけてね」

——その瞬間、日常は非日常へと移り変わる。

——その一方

「「っ!」!来た!」

「はっ、久しぶりに暴れられそオだな」

双子とはやてに抱き枕状態だったアクセルも外に出る。丁度満月

が闇夜を照らしていた。

「ああア、今日は良イ夜だア・・楽しいイストレス解消になれよオ？」

——今宵、四組のジュエルシード争奪戦が始まる

おまけ

——移動中

「（ーブルッ！！）っ！？」

「どうしたのよ？当麻」

「どうしたの当麻くん」

「？何かあったんですか？」

ユーノを先頭にジュエルシードのある場所に向かっている途中、物凄い悪寒がした。

「いや・・なんか、このまま行くと激しくヤバい気がする」

「んゝアイツが当麻と戦いたがってるんじゃない？」

「・・・いやっ！まっさかゝ？あいつも今の状況が分かってる、はず・・・だよな？」

まゝさかなゝ？

温泉旅行・日常編（後書き）

ぞろ2「2のぞろ目と」

当麻「上条当麻の」

ぞろ2・当「あとがき談話」

ぞろ2「旧刊見てないのに新約読んでみた」

当麻「そんなんでもいいのか？」

ぞろ2「浜面があんな事になったので、こっちでも色々できるようになった」

浜面「具体的には」

当麻「いきなり来た!？」

ぞろ2「具体的に言うとな無印後から年単位でフル改造する感じ」

当麻「だってさ？」

浜面「俺の将来的な平穏生活は？」

ぞろ2「さあ？」

HAMADURA「ぶち殺すぜー!!」

当麻「わー!? 待て待て! 俺もいるから!!」

HAMADURA「ヒヤッハー!!!!!!」

しばらくお待ちください

ぞろ2「じゃ、じゃあ次回予告宜しく」

浜面「それは良いがちゃんと考えとけよ? 俺の平穏生活」

当麻「俺も今欲しいな」

——非日常の中、交差する少女たち

——ぶつかり合う無能力者と超能力者

次回「温泉旅行・非日常編」

——力とは何なのか、その答えを少年は知る

浜面「こんなんの良いのか？」

当麻「良いんじゃない？」

ぞろ2「良い仕事してくれたからヒントやる」

浜面「ヒント？」

ぞろ2「おう、浜面は無印後・・・宇宙に行きます」

当・浜「は？」

温泉旅行（非日常編）（前書き）

最後にアンケートがあるのですが、出来れば意見をください。

温泉旅行（非日常編）

Side..なのは

森に入り、川沿いを走りそこに辿り着いた。そしてその子は居た。以前見た時と同様に長い金髪をツインテールにし、黒を基調とした服とマントを羽織り、戦斧の様なデバイス―確か名前はバルディッシュ―を持った女の子。寂しさを感じさせる赤い瞳が私を見ていた。・・・来るのが分かってたんだ。

「おやおや、昼間に忠告したはずなんだけどね？次あったらガブつと行くよって。しかもお仲間連れて来ちゃって」

「やっぱり、君はその子の使い魔だったんだね？」

「ユーノくん・・・使い魔って？」

―ガクツ

―ドサツ

音がした方を見ればユーノくんと、後ろに居たインデックスさんが転んだの。

「なあユーノ。今度はそっちの知識を教えた方が良いんじゃないかねーの？」

「えっとね？なのは、使い魔って言うのは簡単に説明すると魔力で生きるペットみたいなもんだよ」

「ついでに言うと、魔力も自然に吸収するんじゃないかって契約した魔導士から供給される魔力だよ」

・・・取り敢えず後でまた聞くの。今は・・・。

「ねえ、貴女の名前教えて。私はなのは。高町なのは」
「・・・」

あの子はだんまりを決め込む。

「フェイト！こんな奴に答えなくていい！」

「なるほどフェイトって名前なのか」

「はっ！？ご、ごめんフェイト！？」

けど、使い魔の女性があっさりばらしたの。

「そっか、フェイトちゃんって名前なんだ」

「？なのは、あの子はフェイトだよ？」

「？だからフェイトちゃんでしょ？」

「違うよ！あの子はフェ・イ・ト！ちゃんは要らないかも！」

「あんたちよ黙ってなさい」

「お前は黙ってろ腹ペコシスター」

「ちよっ！短ばもごっ！？」

割り込んだインデックスさんが美琴お姉ちゃんと当麻くんを口封じされた。

「えっと、フェイトちゃんは何でジュエルシードを集めてるの？」

「私は「フェイト！そんな事より早く帰ろ！」アルフ」

あ、なんかフェイトちゃんが若干落ち込んだ気がするの。

「ああん？なんだア！これはア？随分愉快な状況じゃアねエか？」

その時横合いから別の人の声が聞こえ、全員が其方を見る。

「あっアクセル」

「はあ、はあ、早いよ、二人ともって、とまりは、息を整えてみる」

「これはいつたい、どの様な状況なのか説明を要求しますと、はすみは言ってみます」

そこに居たのはアクセルさんだった。遅れてはすみちゃん、とまりちゃんもやって来た。

「そんなのはアどおオでも良いイイ、今の俺はなア！この体ン中でエ！溜まりまくってるストレスをオオ！ぶつけてエエだけだア！」

「っ！当麻！あいつピアス付けてない！！！」
制御装置

「マジっ！インデックス！！結界張れ！！？」

「わっ！わわっ！！ヨハネ！結界構築！！！」

美琴お姉ちゃんと当麻くんが叫び、美琴さんから解放されたインデックスさんが急ぎで結界を展開する。そして……。

「全員！離れろっ！！！」

「さあ、楽しもオぜエエエ！！！！！！」

「ゴアツツツツツ!!!」

その瞬間、アクセルさんが地面を踏み込み・・・周りの地面が爆ぜた。その様子を、いち早く避難した私とユーノくんは上から見ていた。

「あ、危なかったの・・・っ! ユーノくん! 皆は!?!」

「なのはより下の方に居るよ」

私より下の方で美琴お姉ちゃんとインデックスさんが、フローターフィールドの上に立っていた。

「・・・当麻くんは?! それにとまりちゃんとはずみちゃん!?!」

「あそこ、地面の方だよ・・・それにしても、凄いな」

そう言って指差した場所には、さっきまでアクセルさんが居た場所に二人は怪我一つ無く立っていた。その一方で当麻くんが居た場所では当麻くんとアクセルさんが高速で動きまわり接近戦をしていた。

「凄い・・・」

「・・・それより、なのははやりたい事があるんでしょ?・・・あの子たちならあそこに居る」

ユーノくんが差した方に目を向ける。そこには同じ様に戦う二人を見て啞然としていた二人が居た。

「フェイトちゃん・・・」

その声に反応して私の方を向く。

「・・・にゃはは、色々話したい事があったんだけど・・・全部吹き飛んじやった」

「・・・」

「何か用かい? アタシらはもう帰るんだけど?」

「あ、待って!・・・フェイトちゃんはジュエルシードを集めているんだよね? ムーノくん、今からやる事、許してくれる?」

フェイトちゃんに話しかける傍らユーノくんに念話で話す。

「・・・うん」

「構わないよ、なのはには、この件で色んな事に対して我が儘聞い

て貰ったから」

「へありがとう、ユーノくん」そっか・・・なら」

・・・頭を・・・思考を切り替える高町なのはっ！

「お互いの持つてるジュエルシードを賭けよう・・・」

目が、変わったっ！

Side Out

Side..当麻

右から来る跳び膝蹴りを回避し、右で殴りかかるが左手で受け止められ逆に踵落としが落ちてくる。それを大きく避けると奴の踵が思いっきり地面に接触し・・・再び大地が爆ぜる。

ドッ！！！！

「ぐうっ！！」

体を丸めて力を入れ、小石などの礫を耐えきる。

「はア・・・は、ははっ、あぎやははははっ！！！！あゝ楽しいイ

！そオ思わねエかア！？当オオ麻アアア！！！！」

うえ、口の中が血の味がする・・・少し切っちゃったか。

「（ープッ）・・・全然思わんわっ！！」

「そオゝつれねエー事言ってんじゃ、ねエよっ！」

そう言った瞬間、再び接近してくる。

「テメエ何時の間にマゾに目覚めたよ！？格闘少年、って、面じゃ、ねえだろっ！！」

「テメエだ！テメエがア俺の前に現れてからだ！俺アなア、芳川が引き取るまで、散々化け物扱いされた！ああア、別に恨んでも悲しんでも辛いとも思った事はねエ」

その間も俺達は神速に近い近接戦闘を行っている。

――殴ればかわされ、避けきれない時は捌く

――蹴れば避けられ、距離を取ろうと思えば逆に入りこまれる

「だがなアっ！」

「ゴオオオ!!!」

強烈な突風が俺を、土を、周りの木々を吹き飛ばす。

「つつっ!!!」

「テメエに分かるかア!? こんなにも戦ってエ!」

吹き飛ばされた俺は仰向けに倒れ。そして、その近くに吹き飛ばされた・・・否、恐らくは俺を狙って飛ばしてきた木々が轟音を立てて突き刺さる。

「未だに、テメエは俺の前にイ・・・化け物の前に立ってやがるっ! それどころかっ! その化け物から勝ちを奪っていく!!!」

周りからはアクセルの声しか聞こえない。・・・いや、俺の荒い息遣い、心臓の鼓動、流れ出る血の温かさ、そして・・・以前も感じた胸の奥で燦ぶる『何か』。

「その事に、ドンだけ俺がイラだったか、何度戦っても、何度ぶっ飛ばしても、そのたんに立ち上がって来るテメエに恐怖したと思ってる! テメエと戦う事にどれだけ楽しさを覚えたと思ってる!？」

「なんだ・・・楽しんでんのかよ? ならテメエは、化け物なんかじゃねえよ、ダチとケンカを楽しんでる・・・タダの人間だ」

怖いな、アイツじゃなく、俺の中の得体の知らない『何か』が怖い。俺の本能がコレは人じゃないって叫んでやがる。

「分かってねエなアア、オマエ? ^{超能力者}超能力者ってのはなア能力の違い、力の強弱、攻撃性の有無に関わらず、全員頭の造りが違いエンだよ。俺達は生まれた時から力と、怪物と一緒に居ンだよ。しかも、その怪物の操り方も無意識に理解してる・・・これが自分自身で周りとの差異となって、化け物が生まれンだよ」

「・・・化け物化け物、うっせー奴だな」

「分かんねエか・・・ならよオ、今日は徹底的に化けもんの恐怖つてエやつを、植え付けてやるよオ! 出来れば死ぬンじゃねエぞオオ?!」

化け物、か。なら・・・それに答えてやるっ!
^{化け物}

「殺す気で来い。でねえと・・・テメエの幻想がぶち殺されるぜ!」
^{化け物}

その瞬間。周りの空気が、結界内の世界が変わった。

Side Out

Side…インデックス

——上空

「派手にやってるわね……どっちも」

隣で美琴が呟く、近くではもう一個展開したフローターフィールドに美琴の妹二人が当麻ともう一人のひととの戦いを見ている。その顔には不安や、恐れ等の感情は一切浮かんでいなかった。そこから離れた所でピンクと金色の光が衝突し、下では突発的な嵐と、地震が発生している……その事で改めて、いや……恐らく初めて超能力者の力を実感した。

「……短髪は、何で止めないの？」

「……何で、か……多分、超能力者の殆どが思ってる事をあいつが言ってるからかしらね。あんたさ、周りに何の力を持たない子っている？」

「……分かんないよ……そんな人、居なかったから」

そう、分からない。私の周りには監視を含め、力がある人しかいなかった……まして普通の友達なんて居なかったから。

「私が幼い頃から当麻とか、普通に接してくれる詩菜さんや刀夜さんが居たから、今の私が居られるんだと思ってる。当麻と一緒に育ってなかったらもっと傲慢で、自分を素直に出す事も出来ない性格になってたんじゃないかと思うの。超能力者ってのは何処か他人を見下す傾向があるから、それが何の能力も持たない相手なら尚更」

私も、当麻に対してだけは初めて他人を気にせず自分を出したかも。

「だから、私は。当麻の傍に居たい。あの温かさを失いたくない……当麻は偶に何処か遠くに感じられるから」

その瞬間、空気が変わった。

「っ!？」

「?どうしたのよ、あんた」

これは、魔力?・・・違う・・・神テレスマの力に近い?でも、なんか違う。何処っ!?

「とうま・・・?」

その言葉は誰にも届かず空気の中に消えていった。

「あ、あなのはちの方なのはもそろそろ片が着きそうね。ちょっと行ってくるわね」

そう言い残し美琴は木の枝を伝って跳び下りて行った。ちなみに、今居る高さは木の上にあるので最低でもビル六階辺りの高さがある。「とうまの周りの人って何でこんなに行動的なの?」

もし当麻や美琴が聞いていたら、逆にお前が言うなとツツコミが来ただろう言葉を漏らす。

Side Out

Side..なのは

ーヒュンヒュン!　　パアァン!

「強いねフェイトちゃん!」

「そっちこそっ!」

今ここには私とフェイトちゃんの二人だけ。ユーノくんとアルフさんは、襲いかかって来たアルフさんごとユーノくんが別の場所に転移していった。

「「レイジングハート!／バルディッシュ!」」

「「ディバインシューター」」

「「フォトンランサー」」

同時に同威力、同じ数の誘導弾が形成される。その数五つ。

「「(同じ数)」」

「「(なら決め手は)」」

「「(技量が上まった方!)」」

「行って!」

「ファイア!」

その声と同時にその場に存在する計十二の魔力弾が動き出し、自らも高速で飛行する。時に相手の進行方向上に動かしては、逆に相手の魔力弾に追尾され。相手の動きを予測し直接ぶつけようと思えば、展開した金色の鎌で切り裂かれる。

「(強い・・・ついこの間戦った時とは違う・・・それに、あの目やるね、君」

「そっちこそ(思った以上に強い!・・・当麻くんと模擬戦闘の経験がなかったら数分で片がついてたかも)」

舞台は何時の間にか木々の中に移っていた。それでも二人は笑っていた―片や嬉しさで、片や引き攣った笑みだが―。
―ゴウッ!―!

その瞬間木々の合間を縫って突風が吹き荒れる。

「っ!バルディッシュ!」

「ブリッツアクション」

そして、一瞬にしてフェイトちゃんが消える。

「マスター!」

「っ!後ろ!?!」

振り向きざまにレイジングハートを振るい。

―ギイイン!―!

ギリギリで鎌の起動を反らし・・・。

「お返しっ!」

「ストライクスマッシャー」

右手に魔力を集中させ近距離砲撃を放つ。が、先ほどと同じ高速移動魔法で避けられる。

「・・・レイジングハート、次で決めるよ!」

「〈All right〉」

先ほどと同じ右手に魔力を集める。

「・・・バルディッシュ!」

「Yes, sir」

直球勝負なのか金色の鎌を展開する。

「……っ！」

そして、動きだそうとする瞬間。

「ゴオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

「にゃっ!？」

「くっ!？」

先ほどの突風より強力な、しかも熱を含んだ暴風が通り吹き飛ばされる。

「――がっ!？」

吹き飛ばされた先にあった木に背中を打つ。

「マスター!!」

「っ！」

「……私の、勝ち」

気付けば、首に金色の鎌が添えられていた。フェイトの方も何処にぶつかったのか若干フラついていたが、デバイスを握る力は失われていなかった。

「……はぁ……レイジングハート」

「Put out」

なのはが負けを認め、レイジングハートからジュエルシールドが一つ排出され、フェイトがそれを掴む。

「ねぇ……」

負けた事が悔しいのか、はたまた疲れからか普段より弱々しい声が出る。

「……なに？」

「あなたのお名前、聞かせて？」

「もう知ってるはず」

「違うの、貴女の声で、貴女の口から自己紹介して欲しいの」
その事に、少し戸惑いを浮かべる。

「……フェイト。フェイト・テストロッサ」

「うん・・・フェイトちゃん！今回は負けちゃったけど、今度は、勝つんだから！」

返事は貰えずフェイトちゃんは飛び去って行った。

「・・・負け、ちゃったね」

「しかし、良い勝負でした。・・・マスター、私的意見ですが・・・我慢なさらな方がよろしいかと」

「・・・うっ・・・うっ・・・っ————」

決して声には出さない。この程度の事で甘やかされたら、強くなれないから。また、あの背中が、大切な人達の隣が遠ざかってしまふから。・・・だから、このぐらいなら自分で立ち上がらないと成長できない。

木の幹に隠れるように美琴が見守っていた。

Side Out

Side..アクセル

既に神速に近いスピードで動きまわる、既にお互い意地で戦っていた。

——片や足技は一切使わず、スピードで翻弄し防御を考えず、ただ殴りに行く無能力者

——片や能力を使い、ベクトルを操り同じ様なスピードで迫り、同じ様に殴りに行く超能力者

ただ共通しているのは両者とも体中痣と傷だらけ、しかし両者とも本気で殴あう、その顔に浮かんでいるのは獰猛なまでの笑み。

——ちなみにその笑みに、某三姉妹が顔を真っ赤にして、時々妄想しながらも二人の喧嘩を見続けている。

そして、両者は一瞬で離れ、再び向き合う・・・どちらも構えなど取らない。

「（反射は使えねエ、奴は既に反射の攻略を知ってる、なら迂闊に反射をしようとすれば、逆にこっちがダメージを負っちゃまう）」

アクセルは考える、奴に勝つ方法を。殺す気で来いと言われ、殺す気でやってるのに尚も倒れない敵を倒す方法を。

「はっ！どうした！？テメエが飼ってる化け物の力ってのは、そんな物か！！」

「ぶっ倒れねエテメエが異常なンだよ！」

「やれやれ・・・おい、アクセル一つ言っておくぞ」
「ンだよ」

戦いが一時停止する。その間も思考する。

「人間の相手は人間が、化け物の相手は化け物がする。なら、今の俺はどっちだと思う？」

空気が重い、恐らく今俺が感じ取っているのが殺気ってやつだと思う。・・・空気？

「・・・テメエは化けもンになれねエよ（計算しろ、この場の全てをつっ！）」

「どうだろうな、今の俺は・・・俺自身が怖い。だがな、これだけは言える！お前は、アクセル・一方は人間だ！！」

「ならよォ！俺を倒してみろよォ！！」

そう言い、頭上に手を翳す。

——変化は、すぐに起きた。周りの空気が動き風になり、翳した手を中心に渦を巻く、その渦は次第に加速し、発光現象を生み出す。

「おい、何だそれ？！」

「プラズマって知ってつかァ？」

奴は一瞬だけ動きを止め・・・。

「・・・はっ！良いぜえ来いよ！！」

そう言い放った。

「いい度胸だァ・・・だが、度胸だけじゃ駄目だぜエ」
「ガッガガガガガガガ！！！！！！」

瞬間、圧縮されたプラズマが奴を襲い、周りの木々を燃やし、辺り一面が土煙りに覆われた。

「チッ、結界ってやつか？ぶっつけ本番じゃァ、予想してたより威

力がねエなア・・・やっぱり生きてるか」

視界の奥、さらに数十メートルの位置で木に寄り掛かりながらも立っていた。

「マジにぶっ倒れるまで続けてやる」

再び風を集める。今度は念入りに。そして、奴を見た瞬間・・・。
「っ!？」

傷付きながらも奴は俺をまっすぐに見ていた。

Side Out

Side..当麻

体中が痛い。とっさに木を楯にしたが、それでもダメージは避けられなかった。今も体中の切り傷、打ち身、筋肉、関節から痛みが襲ってくる・・・けど、まだ立っている。目が霞み、体の疲労からぶっ倒れたいのを気合いで跳ね除け、木に寄り掛かりながらも立っている。

「ははっ、やべえな、今回は負けるかも」

――勝ちたいのか？

「勝ちたいんじゃない・・・あいつに、解らせたいんだ・・・お前はまだ人だって」

内側から声が聞こえる、耳元で囁やかれるような声だ・・・この声、何処かで聞いた覚えがする。

――何故そうまでする？ 奴も自分自身で化け物と言っていたぞ？

「化け物じゃねえさ」

――やれやれ、やはり人の行動は理解しがたいな

「いってろ、どこぞの誰かさん」

――だが・・・

「？」

――その信念は嫌いじゃないな

「そりゃどーも、俺はあんたの事好きになれそーもねえな」

さで目が覚めた。・・・つか、まだ感覚が鋭いくて困るんだが？

「あ、起きた」

「インデックスか・・・なんで氷華が膝枕してんだ？」

周囲を見れば美琴は俺の横でなのはに膝枕している、俺を挟んだ反対側からインデックスが俺を覗き込んでいる。

「あの、大丈夫、ですか？」

ああ、さっきまでの殺伐とした精神が癒される。

「で、インデックス。あの後どうなってるんだ？」

「えっとね・・・」

どうやら、最後の駄目押しで放たれた暴風で両者共に頭を打ってダウン（その前段階でアクセルは気絶していたが、反射が機能していたので無傷）し、結界を解除。二人とも予想外に重かったのも、近くにあった湖で介抱の途中だったらしい。周りを見渡せば、アクセル―既に能力制御ピアスが付けられている―が双子に介抱されているのが分かった・・・と言うより双子、それはただのミイラだ。あと、治療キットを持ってくる際に氷華も着いて来たらしい。

「よつつ！・・・ありがとな氷華」

「ど、どういたしまして？」

状況把握が終了し、立ち上がる。傷はだいぶ塞がってるが足に結構違和感を感じる。

「おし、双子共々帰るぞー・・・旅館にだが」

「あ、じゃあ当麻にい、この人宜しくってとまりは可愛くねだってみたり」

「私達の部屋でお願いしますと、はずみは良い機会だから一緒に寝てみますと大胆発言します」

・・・まあいっか。美鈴さんは大喜びだろうな・・・上条さんは別に生贄が増えたなんて思っていないぞ？

「よいしょっ・・・当麻く私達は先に行くよ？」

「おう、先に行っろ」

なのはを背負った美琴が旅館に帰って行く、氷華も一緒に行くら

しい。って！なんで双子もそちに居んの！？あ、待てコラ！！

「はあ、お前は行かなくて良いのか？インデックス」

唯一この場に残ったインデックスに話しかける。

「とうま・・・とうまは本当に魔術も魔法も使えないんだよね？」

「あん？なに当たり前の事言ってるだよ、ついでに言うなら、超能力も使えませんですよ？」

「・・・そう、だよね・・・うん、わたしの思い過しかも」

「どうやら納得したらしく旅館に帰って行く。・・・っていうかお前も先に帰るのかよ？！しかし、とっさの判断で答えたが、俺の中は『奴』が居る。俺に右手がある限り魔術も魔法も効かないから調べられてもバレはしない・・・と思う。逆に言えば・・・俺は右手を失ったらどうなるか分からないと言う事だが。」

「（例えるならブラックボックス、もしくは絶望しかないパンドラの箱か）まったく・・・つーか俺達怪我人だぜ？そこんどこ、どう思うよ？」

「・・・そんなにピンションしてンなら、怪我人たア言えねエよ」

未だ倒れているアクセルに話しかけると答えは簡単に帰って来た。
「・・・いやいや、実を言うと未だ足全体が痛むし、所々関節つーか骨が痛いんだが。」

「お前動けるか？」

「今の状態で動けんなら、まずテメエに蹴りイくれてやる」

そう、未だに包帯でグルグル巻き状態のアクセル。手も封じられてピアスも取れない状態だ。
制御装置

「そのまま双子の布団に放りこんでやろうか？」

「やめろォ！俺を精神死にさせる気かア！？」

おっと声に出してしまったか、と言うか。

「斬新な死に方だな・・・で？まだ自分の事、化け物って思ってるのか？」

「ったりめエだァ・・・何度言われようと、この認識だけは変えるつもりはねエ」

「それは・・・自分が弱いからか？だから強さを、最強を目標としてんのか？」

その言葉にあいつは顔を背ける。沈黙は肯定ってな。

「なあ、剣術の極意って知ってるか？」

「あア？」

突然の話の切り替わりに戸惑っているが、構わず話を続ける。

「抜かない事だよ」

「なんだそりゃ、俺なら敵は迷わずブツた斬るぞ」

「だろうな、俺もなんだかんだ言って抜きそうだ」

我ながら矛盾してると思う。

「でもさ、だからこそ抜く時、切る時は選ばなきゃいけないと思う・

・力ってのは無差別だから」

「・・・その力が化けもンでもか？」

「そもそも前提条件が間違ってる。一番の化け物は・・・人の心だと思う」

そう、この世の中で一番怖いのは人の心。光る時もある、闇に染まる事もある、見える事もある、見えない事もある、有形にして無形である存在。

「はっ、俺より化けもンの癖して・・・偽善者かテメエ」

「そうだな、偽善者かもな、俺は周りの大切な人達が泣くのが大っ嫌いなただの偽善者だ」

俺の周りには温かい人たちが多く居るから。

「・・・俺はテメエみてエに割り切れねエよ」

「そりゃそうだろ、俺は俺にしかねないし、お前はお前だ・・・あと、お前に言っておく事が一つある」

「ンだア？」

「御坂家の女性は他人を振り回す才能がある。特に親しい相手、気になる人には特にだ・・・さ、帰ろうぜ」

反論を聞かずにアクセルを肩に担ぐ。

「待てエ、テメエ俺を何処に持っていく気だアア！？あ！？コラア、

離せエ!! 離せエエエ!!」

聞こえない、聞こえない。

――数十分後・大浴場

「ほれ、流すぞうなのは」

「にゃ」

現在、俺となのはは汗と土屑で汚れた体を温泉にて洗い流している、ちなみに俺たち以外誰もいない。え? 混浴? ... そんな事気にしたら美鈴さんの遊び道具おもちゃになってる。アクセル? あいつは双子が確保した家族風呂に放りこんだ。... キョウノウラミダ、アノヤロウ。

「「はふう」」

ああ、傷に染みるが、いい湯だ。

「...」

「... 負けたんだってな」

「... うん」

「悔しかったか?」

「... うん」

「勝ちたったか?」

「うん」

「なら、その悔しさを次で返してやれ」

「うん!」

良い返事だ。

その後は例の子―確かフェイトだっけ―の話聞きながらゆっくりと風呂に浸かり寝るだけになったのだが。

「どうしてこうなった?」

現在美琴、インデックス、俺、なのは、氷華の順で挟まれる様に寝ている。だから一人で寝かせろよ! ちなみにユーノも部屋隅で既

に眠りについてる。

「（むっ？ 良い匂いこれは・・・美琴か？なのかもインデックスも体温高いな・・・ふむ、氷華は寝付きが良いな、息もあんまり乱れてない）」

戦いの影響か五感が鋭くなっており、少し離れた所に居るアリサの寝言も聞こえる・・・アリササン？当麻が丸焼けってどういうことでせうか？！

――悶々とした夜は空が明るくなり始めるまで続いた

温泉旅行（非日常編）（後書き）

ぞろ2「2のぞろ目と」

当麻「上条当麻のー」

ぞろ2・当「あとがき談話ー」

ぞろ2「は、今回はなしです。代わりにアンケート取りたいと思います」

当「で？アンケートの内容は？」

ぞろ2「まだ読んでいない巻抜かして一気に新約読んだがな、浜面改造計画をどうすればいいか考えたんだが。ちょっと読者の意見も参考にしようと思って」

浜面「俺か！？」

ぞろ2「ああ、このまま原作通りでやって浜面イダーも良いんだけど、それじゃあ出番が減るんだよだからこそその改造計画」

当麻「前回のあとがき談話の『宇宙へ行く』発言はどうなった？」

ぞろ2「それ？後回し。とりあえず俺が出せる意見は以下の通り

1・武装錬金の核金を手に入れた戦士HAMADURA

2・西尾維新作品のめだかボックスの某暗器使いスキルを執念で手に入れたアサシンHAMADURA

3・とらハの設定を掘り出して霊能力者HAMADURA

4・ゲッ○ーの力を手に入れた超HAMADURA

5・やっぱり出番が少なくなってもいいからノーマルHAMADURARA

6・読者の意見で進化する厨二病感染HAMADURA

ちなみに作者のお勧めは、1・核金を手に入れた戦士HAMADURAR Aです。なぜならば、パピヨンが出せるから」

浜面「おい！4と最後のは何だ！？」

当麻「俺は4だな」

浜面「バカか！？俺をどんな変態的存在にしたいんだ！？」

ぞろ2「では意見がある事をお待ちしております。ほれ浜面次回予告しろ」

浜面「また俺かよ！？」

——旅行の二日目

——少年は世界の真実を、自らの過去の一部を話す

——ある少年は自らの生い立ちを話す

次回「温泉旅行——二日目の出来事」

——そして、少女の謎が増える

温泉旅行（二日目）（前書き）

前話のあとがきで行ったアンケートは一応、無印終了時まで受け付けています。

温泉旅行（二日目）

Side…当麻

——旅行二日目

自然と目が覚め時間を確かめる・・・そろそろ昼じゃん。

「・・・誰も居ない」

既に部屋の住人は全員出掛けたのか誰も居なかった・・・ただ一点を除いて。

「なんで俺の浴衣が肌蹴てんだよ？」

何故か胸元が肌蹴、鎖骨部分も丸見え。それにちょっと赤くて鉄くさい匂いがする液体が付いてるのは気のせいかな？

「取り敢えず・・・着替えてメシ食いに行くか」

浴衣から私服に着替え、財布を持ち旅館外にある喫茶店ぽい店に入る。そこで知り合いを見つけた。

「よう」

「あん？ああア、テメエか」

やる気の無さをこれでもかと態度に出したアクセルだった。テールの上には頼んだのか二杯目なのか知らないが、湯気の立っているコーヒーが置かれている。

「体はどうよ？」

「・・・今んとこ問題はねエな。テメエはどオなんだ？」

「とりあえず痛みは引いたな」

「チッ、テメエの体も化けもンだろ」

「ひどっ！？あ、Dランチセット下さい」

結構酷い事言われたが自分でもそう思っているのです、たいして気にせず偶々通りかかった店員の人にメニューを頼む。

「・・・体の事は否てエはしねエのか？」

「自分でもこの体の事は不気味に思ってるさ、小さい頃から人より自然治癒は早いし、筋力も同年代より上だし、何よりブツ倒れる度

に少しづつ耐久力も上がって前より壊れにくくなるし。おまけにこの右手だ、あのドクター・フロググも知り合いに調べてもらったのに何も分らなかったんだぜ？」

「ドクター・フロググウウ？・・・ああア、あのカエル顔の医者か。・・・怖くねエのか？」

「諦めた」

「はア？」

予想外の答えだったのか、レアな間抜けな顔をさらしている。

「ああ、諦めたって言うのは何でこんな右手なのかとか、この右手は何なんだって言う様な、まあ、疑問ってどこか？その疑問を抱える事を諦めた」

「ナンでだ？普通そこまで不気味なら不安に思うだろ」

俺はお前の口から普通とか不気味とか不安って言葉が出てくるのが驚きだ。

「結局のところ・・・『慣れ』なんだろうな・・・この右手はこうして有る。考えたって仕方ない。この右手は俺の右手だ、なら死ぬまでこの右手と付き合ってやるって答えを出したんだよ」

「呆れる程能天気だなアお前。いや、言葉通りに考えるのを放棄しただけか」

「そう言われるのは親父やドクター・フロググ以外で初めてだな。まあ、悪い事ばかりじゃねーぞ？不幸なおかげで高町一家とか浜面一ズとかと知り会えたし、小一の時に神裂きとかお前とも知り合いになれたし、めったに体験しない事にも巻き込まれるからな」

「ふんっ、やっぱりテメエは偽善者だ」

あらら、そっぽ向いちった。・・・お！俺の頼んだDランチセツトが普通に！ふ・つ・う！に来た。

「・・・そんなテメエに教えといてやる」

「ふあん（あん）？」

「・・・食べながらも良いイから聞イとけ、超能力者の存在を公式に発表したのはア裏がある。俺が芳川に引き取られる事にも繋が

った事件だ」

一旦食べるのを中断する。確か、なのはが小学校に入る前だったから・・・三年程前か。

「俺が入学する数週間前だ、元々俺ア海外の『特殊能力者多重研究所』通称、特力研つウ、珍しい能力を研究する非合法も兼ね揃えたクソツたれ共の巣窟に居た。まあ、あり大抵エに言えば後天的に一般人にも能力は使えるようになるのかを研究してるところだった」

非合法・クソツたれの研究者・後天的・一般人、ねえ・・・胸糞悪くなる想像しかしねえ、それに過去形か。

「テメエが考えてる通オリだろオよ、ある事件を折りに裏の研究が発覚した、その事件つウのが誘拐だ。ああア、ただの誘拐じゃねエぞ？能力者のガキイ一人を誘拐する為に偶々居合わせた親、研究者その他偶然居た人間全てを」

「殺した、のか」

「ああア、俺も殺されそオになったから数人は殺した」
やべえ、Dランチのハンバーグが食えなくなる。

「・・・その子は？」

「未だ行方知れず、犯人グループも尻尾すらア出さねエそオだ。まア名前は分かってンだがな」

「何でだ？」

「その犯人の一人つーか主犯だな、その犯行グループのリーダーはそこに居た研究者の一人だった」

何やら力が入ってる所を察するに因縁があるって所か。

「つまり、能力者と一緒に居るなら覚悟しておけて事だろ？・・・今更だ、それで避ける理由にはならねえよ」

「チッ、やっぱりテメエもお節介な連中の仲間か」

褒め言葉として受け取っておく・・・それよりも。

「・・・居るか？ハンバーグ」

「食えよ、偽善者ア」

このヤロウっ嵌めやがったな！そのめったに見ねえ笑顔は何だ！？

「それはそうと・・・」

「ン？」

呑気にコーヒー何ぞ呑みやがって！仕返しだ！！

「昨日はお楽しみでしたね」

「ゴフウツツ！？」

ざまあ！さて、俺もハンバーグを食うか。

「・・・うう、一口食うたびにSUN値が減ってくつ」

「ゲホッ！くくくつ、はア・・・なア」

「あん？何だよ」

「あの双子はなンで、あの戦いを見た後でも普通に接してくるンだア？」

「御坂家の女だからじゃね？」

「納得いかねエのに納得しちまう」

理解なんてしないでそう言う物だっと思え。と言い残し俺は店を出た。金は払ったぞ？

——すぐ近くに姉妹の様に仲の良い少女二人が聞いていたのにも気づかずに

——近くの湖

遅めの朝食兼昼食後、散歩ついでに昨日戦いの後手当を受けた場所に来た。

「ホント、魔法って凄いよな。あんだけ派手に暴れたのに全く痕跡がない」

本当なら地面も木々も吹き飛ばされ、所々穴も開き、地面も抉れているはずなのに今見ている風景は平穏そのものだ。そして、ふと思ひ出す。

「昨日のあの声・・・俺がこの世界に来る切欠になった奴^神の声だった。・・・居るのか？俺の中に」

右手を見る。その力が異能の力であるなら超能力でも魔法でも、

恐らく魔術でも打ち消せる不思議で不気味な謎に包まれた俺の右手。
こいつがあればアイツは表に出てこないと思う・・・が、アクセル
にはああ言ったが・・・。

「不安か・・・あるに決まってるんだろ」

「何が不安なん（の）（ですか）？」

「おわっ!？」

周りを気にする余裕も無かったのか、後ろから声を掛けられて物
凄く驚いた。

「びっくりしたー!？・・・氷華か、それにインデックスも・・・
今度から声を掛ける時は先ずはノックしてくれ」

「え、えっと・・・こんこん」

「どうぞー」

「失礼します」

「とうまも、ひょうかも何やってるの？」

「・・・どうだ氷華この旅行は？楽しいか？」

「うん、楽しい・・・こういう風に友達と一緒に旅行するって事な
かったから」

「そりゃ良かった。俺や美琴としちゃあ誘った甲斐があった」

「え？当麻君が考えたんじゃないの？」

「ああ、体の事。なのはが美琴に話したら何故かこうなった」

「・・・ふふ、なのはちゃんと美琴ちゃんらしいです」

あいつらは後先考えずに楽しむ派だからな。

「で？とうまは何を隠してるの？」

「（覚えてましたかー?!）」

さてどうする?!

「お!居た居た!当麻にいー!」

「あん?とまりか、どうしたー?」

「はやてとはずみを助けて!ってとまりは頼み込んでみる!」

「っ、何があった」

「えっとね、車椅子で遊んでたら崖から落ちちゃって途中に生えて

た木の根っこに引っ掛かって動きが取れないのって、とりまは状況説明してみる。あと一人で暇だった美由希さんにも応援を頼んだよ！」

どんな状況だソレ——！？

——数分後

「まったく、危ないと分かってんのに何でやりますかな?!」

「ごめんなさいと、はずみは反省はするが後悔はしない心意気で謝ります」

「ごめんなさいってとりまは新技、涙目の上目使いを披露してみる」

「おおきになく上条さん。でも実は楽しかったんや」

「こいつら全然反省してねえ!？」

あの後、全力で現場に駆けつけてみれば、見事に地上から九メートル程上の方に横に突き出ている木の根っこに引っ掛かつて二人を発見し救出。ちなみに救出方法は(腕力的な関係上)俺が美由希さんを下から打ち上げ一人ずつ救出する方法だ。見てる奴らは拍手喝さいだったがな!？

「ま、まあまあ麻くん、二人とも無事だったんだし」

「甘いです!美由希さん!!この二人はあの御坂家の女性だ!?!きつと同じ事を繰り返す!」

「「「えへへへへ」」」

オイそこ!なに照れてんだよ!？

「あ!アクセル発見!者共とりまに続けー!!!!」

「おっしゃー!!負けへんでー!!」

「甘いですと、はやての車椅子を引っ張ってみます」

「な!しもうた!？」

元気だな……あ、アイツ怪我しない程度に反射使いやがった。しかもあの態度だと声も反射してやがるな。

「はあ……美由希さんはこれからどうします?」

「私?ん、特に無いかなくお土産は明日の朝買えば良いし、夜は

夜でまたお父さん達は宴会だろうから」

「あの人達よりも母さん達マザーズが私上条さんは一番怖いんですが？」

「大丈夫だよ・・・私は巻き込まれないから」

「それは俺は巻き込まれるの決定ってこと?! 不幸だー!?!」

「あははははは」

「俺は笑いごとじゃねー!?!」

そう言えば氷華とインデックスが居ない。

――さらに数時間後

「では! 皆の物、杯を持て! 明日帰るので嵌めを外さない程度に騒ぎましょう! 乾杯!」

『かんぱーい!!』

それはあなた達大人組みに言いたい。が、それよりも。

「なあ、アクセル」

「ああん?」

「果てしなく嫌な予感を上条さんは感じ取っているのですが」

そう、果てしなく嫌な予感がしてならない。

「奇遇だなア、俺もそオ思ってたところだ」

同時にある一点を見る。主に周りに美琴やなのはが居ない事や、その美琴となのはを加えた女性陣離れた所で話し合っている事が特に!

「「逃げてエ」」

「おや? どうした当麻、それにアクセルくん」

親父が絡んできた、つーか。

「臭え!?! 開始数分で何でもう酔ってんだ!?!」

「それよりも君達も飲みたまえ!」

旅掛さんも絡んできた。ビールが入ったグラスを勧めて。

「俺達未成年! って!?! オイ! アクセル! 何でお前飲んでんの!?!」

「ふん、向こオでも少し飲んでたんだ、このてエど楽勝だ」

「ズルっ！？ テメエ！ そうやって嵐が過ぎ去るのを待つ気だな！？」
「悪リイか？」

「当麻くん」

その時士郎さんが近くにやって来た。どうやらまだ酔ってないらしい。

「士郎さん」

「当麻くん・・・すまん」

一瞬にして鋼糸に絡め取られた。

「へ？」

「恭也！」

「分かってる。当麻・・・すまん、立場の低い俺を許してくれ」

「何をっ？！」

恭也さんに担ぎ上げられた。

「・・・あばよオ当麻。テメエの事は直に忘れるわア」

「何ぞーーーーー！？」

――数分後

「嵌められた」

連れて行かれた場所は家族風呂。つまり男女が入っても問題なく、知り合い以外誰も入ってこない。つまり・・・。

「何が？」

「どうしたの？ 当麻くん」

「あうう、や、やっぱり恥ずかしい」

「あっ！？ 逃げちゃ駄目だよスフィックス！」

「フシャー！ー！？」

逃げ道を塞がれたって事だ。おまけに鋼糸で縛られたまま風呂に放り込まれたので、誰かが着替えを持ってきてくれないと出る事すら出来ない状態だ。さすが元プロの戦闘者高町士郎、見事な作戦です・・・

「所で俺の着替えはどうすりゃ良いんだ？ まさか濡れてる浴衣を着

ろと!？」

「私が持つてるよ？」

答えを返したのはインデックス。・・・はて？持つてる?・・・デバイスの中か!？」

「（完全に逃げ道を塞がれたっ!？）・・・はあ、で?何でこんな事になってんだ?」

「何でって、当麻が隠し事してるって言うから吐かせようと思ってやっぱりですかー?」

「取り敢えず・・・体が冷えるといけないし風呂入ろうぜ」

「で、何が聞きたい」

「当麻が隠してる事よ」

美琴がストレートに聞いてくる。

「やっぱそれか（・・・さて、どうする?話すか?）」

美琴達を見る・・・顔だけな!この温泉意外と透き通ってるから見えそうなんだよ!?・・・まあ、それは置いて・・・隠してるんだろうけど・・・不安、か?それに。

「やっぱり、泣かれるのは困るよなあ・・・」

「じゃあ、さっさと話してよ・・・」

「別に話してもいいけどよ、結構あり得ない話だぞ?」

「当麻君・・・私ね、こっちに關わって良かったと思ってるの」

「氷華?」

「だってそうでしょ?私は将来皆と違って長く生きるんだよ?知り合いがおじいちゃんおばちゃんになって死んでいっても私は生きてくんだよ?・・・何も知らなかったら、きつと辛くて寂しくて、何時死ねるのかも分からない毎日を生きてく事になったんだよ?だから・・・今度は私の恩返し、当麻君がどんな事情を抱えてても受け入れる」

氷華の告白を切欠に女性陣が本音をぶつけてくる。

「私はただ単に隠し事して欲しくないから迫ってるだけ。隠して後から嬉しくなるなら良いけど、そのせいで当麻が苦しむ事になるのは嫌だもん」

「当麻ちゃんと美琴お姉ちゃんの傍にいたいし、その二人が離れて行っちゃうと嫌だし困るの」

「何時ものとうまは陽だまりみたいに温かいけど、今のとうまは何処か余所余所しいかも」

皆さん結構度胸があるな……。話すか。

「……。はぁ……。まず始めに言くと、俺には前の記憶がある」

「前?……。それって今よりも昔の?」

「いや、なんて言うのかな……。」

どう説明しようか悩んでいる所にインデックスがポツリと言った。
「輪廻転生?」

「ああ、それに近いな。もう大部分が思い出せないけど、覚えてる範囲だと今みたいに結構科学技術は発展してた。ただ超能力は世間一般に公表されてなかったし、次元世界なんてのも知らなかったと思う」

美琴達は静かに聞いていた。

「ある時な、俺は神と名乗る奴と会った」

「「「へ?」」」」

まあ、実際話したらそうなるだろうな。

「そいつは俺にこう言ったんだ「俺が創りだした可能性を秘めた『世界』に行って貰う。その為に貴様の肉体から魂をに抜き取った」って、そして最後に見たのがそいつの右手が俺の体を貫く感触だ」
確か左胸、心臓近くを貫いたっけ?

「次に目が覚めたのが一歳の誕生日を過ぎた今の俺って訳だ」

「酷い、です」

「ねえ当麻。おじさん達は?」

「ああ、知ってる。確か美琴の能力が暴走して入退院した後だったかな」

沈黙が風呂場を支配する。

「ねえ、とうま。神様も天使も必要以上の殺しはしないの、そうしなきゃ世界のバランスが崩れるから。もし、そのルールを破ると自らの存在さえも消える事になるの」

「じゃあ、何で俺は殺されたんだよ」

「もしかしたら・・・そのルールを破ってでも、とうまに求めた物があつたのか・・・酷い様だけど、運命として決められてたのかも」
その考えは無かつたな。けど・・・殺された事には変わらないんだ。

「「「「・・・」」」」

「・・・あの、皆さん？その当たってるのですが？」

何がとは言わない。

「・・・ねえ当麻、じゃあ、いま告白したって無駄かな」

「・・・美琴？」

突然の告白に戸惑う俺を余所に美琴は話し続ける。

「私だけじゃないよ、なのはも、氷華も当麻の事が好き」

「・・・」

それは前から何となく分かった。

「私たちじゃ、当麻の隣に居られない？当麻から見たら私達ってまだ子供？」

「・・・お前らが・・・俺に好意を寄せてるのは知ってたさ・・・」

こっから先は偽善使いフォックスワードの域だ、俺はこれから優しい嘘を付く、どんな事があってもこいつ等だけには笑っていて欲しいから。

「だからさ・・・待つよ」

「え？」

「お前らがもっと成長して、一人で歩いて、色んな事を知って。それでも俺の事が好きだったら・・・」

先の事なんて分からない。もっと良い人が見つかるかもしれない。俺には不幸が付き纏う、そのせいで早死にするかもしれない。

「・・・もう一度告白してくれ」

あの日の誓いを思い出せ。大切な人達の心も体も守るんだろ！上条当麻！！

「その時は、俺もちゃんとした返事を返すから」

「うん、分かった」

「ごめんな、こんな返事しか返せなくて。」

「でも今は知っておいて欲しいの、御坂美琴は上条当麻の事が好きです」

「高町なのはも当麻くんの事が好きです！」

「えっと、風斬氷華も上条当麻君の事が好きです」

「ああ、しっかりと覚えとく」

あーなんかいつもの感じが戻ってきた。

「やっぱり、とうまはとうまだね」

「どういう意味だよインデックス。ってお前ら引っ付くな！？」
「シリ阿斯何処行った！？」

「なんだインデックス！その呆れ顔！？ってお前ら離せ！離れろ！
？ 離れて下さい！！インデックス！助けてなう！！」

「とうま、私そろそろ上がるね」

「使えねー！！！！」

少しは助けるよ！居候！？ハラペコシスター！？それでも聖職者か？！

「む？何かとうまを噛み砕かないといけない気がするかも」

え？何ですかその黒いオーラは？なんで歯を鳴らしてるんですか？
？そして、なんで後ろに回るんですか？！

「イタダキマス」

「待て、落ちつけインデックス！話し合おう！人間は話し合う事で
分かりあう生き物ですって、不幸だーーーー！！！！」

おまけ

寝る時になって気になった事を聞いてみる。ちなみに部屋は上条家が予約した部屋。親は未だに宴会で今居るのは昨日と同じメンバ―（アリサとすずちゃん除く）。

「そう言えば・・・今日起きたら何か鉄臭い臭いがしたんだが？」
―ギクッ

「・・・おい、なんで全員ビクついたんですか？・・・美琴？」

「ななな何?! べ、別に当麻の体見て興奮なんてしてないんだから!?!」

「・・・ん？」

「なのは」

「にゃ、にゃに?!」

「お前と美琴と誰だ？」

「にゃ?! 私に確定なの?! 鼻血が出たのはアリサちゃんと氷華さんだよ?!」

「はうっ?! なのはちゃん! それは言っちゃ駄目だって!!」

「氷華？」

「ううう・・・ごめんなさいい、で、でも浴衣を捲ったのはインデックスちゃんが」

「ひよ、ひようか?! それは違うかも! スフィックスがとうまの上に乗っちゃったから、右手が触れる前に退かそうと思っただけなんだよ?! それに、少し捲れた程度かも!!」

「どんどん真実が浮かんでくるな?! えっとインデックスが俺の上に乗ったスフィックスを取ろうしたら浴衣が気崩れして、俺の肉体美を見たアリサと氷華が血を出したと。」

「じゃあ、浴衣が肌蹴ってたのは誰だよ? 美琴となのはか？」

女性陣がお互いに顔を見合わせ声を揃えて言った。

『すずか（ちゃん）』

「・・・君だけは常識人だと思ってたッ!？」

温泉旅行（二日目）（後書き）

——白き少女の思い、それは小さくとも大切なモノ

——黒き少女との戦い、それは譲れない意志のぶつかり合い

次回「戦う理由」

——戦いの最中、世界が揺れる

あとがき談話は時間の都合上打ち切りになりました。ゴメンナサイ

m (m

戦う理由

Side…なのは

ゴールデンウィークの半ば、祝日でも休みの日でも無いので久しぶりの学校。ジュエルシードも搜索しているが相変わらず反応も見られない。

「（当たり前か、今は既に九個集まってるし、向こうも最低三個あるんだもん）」

「おはよーなのは」

「おはよう、なのはちゃん」

「あ、アリサちゃん、すずかちゃんおはよう！」

取り敢えず今日も頑張るの。

「取り敢えずなのは、今日は歩きなのね」

「見てたよ、なのはちゃん。上条さんにお姫様だっこされてたね」

「美琴も背後から抱きついてたわね」

どうしよう。早くも逃げだしたいの。

Side…当麻

Side…当麻

久しぶりの学校なのに強烈な登校の仕方をしたので、恐る恐る教室に入る。

「おっはよくカミヤん！・・・ボクは勝ちや」

「お、ようやくご夫婦の登場だぜい・・・ちっ、負けたにゃ」

「お、おはようございます！上条さん！・・・うう、負けました」

「おはようございます上条当麻・・・やはり勝ちですか」

「あら、おはよう上条美琴。浜面！私の勝ちだな！！」

「よう、久しぶりだな当麻。くっ！俺の負けかっ！！」

「あ、おはよう当麻君、美琴ちゃん」

可笑しい？何故皆そんなに普通なんだ？あと俺で賭けるなよ！？
って、氷華以外のクラス全員か！？

「おっはよー！！」

「おはよ・・・あといいい加減、降りろ美琴」

背中にへばり付いた美琴を降ろす・・・と言うより引き剥がす。

「カミやくん、連休はどうだったん？ボクは連休の殆どを女性との
仲を縮める事に費やしてたでー」

「それはゲームの中でだろ」

青髪が話しかけてくる。こいつの趣味は二次元中心だ、一応まだ
小学生だからか一八禁なゲームはやっていない・・・と思う。確か
今嵌ってるのはアイドルなマスターだったな。

「まったくだぜい、俺さまはデートをしてきたぜい」

「お前の場合は妹舞夏だろうが」

「わ、わるいかにゃー！妹だろうと女性なのは変わらんぜい！」

相変わらずのシスコンめ。

「そう言うカミやんはどうなんです？相変わらず嫁さんとイチヤ
ついてたんやろ？」

「まったくだぜい・・・爆はぜろカミやん！」

だが甘い！

「上条さんは旅行に行きましたよ！・・・家族って名詞が付きます
けどね！」

ただ高町家と御坂家と月村家とアリサと氷華とアクセル付きだっ
たがな、それは言わない約束だ。

「そこなんだが、三年の高町、月村、バニングスと風斬が一緒だっ
たって聞いたんだが」

『なにっ！？』

浜面の奴、余計な情報を！？・・・ちっ、男子クラスの半分が食いつ
きやがった！

「私はアクセルとその保護者も一緒って聞いたんだけど？」

今度は麦野か！？っーか、この情報の出処ってまさか！？

「美琴おおお!!」

「てへっ☆」

くそっ! 思わず可愛いから許すところだった!!

―ガシッ!

「カミヤん、ちょっと詳しい話をボク達みなしごに聞かせて欲しいんやけど」

背後からっ! 背後から凄まじい気が感じられる!?! だが敢えて言おう!

「羨ましいだろ?」

『コロス!』

・・・そう言えばアクセルがない。

――この乱闘は担任が来るまで続いた。むしろ担任さえも無視した。

Side Out

Side..フェイト

――海鳴市の隣にある街のマンションの一部屋
個室に一人の女性アルフが入り、部屋を見渡し、ベッドで寝ている自らの主を見る。

「・・・また。食べてなかったんだね、フェイト」

そう言っ、机の上に置かれた食事を見る。置かれてるのは鮭弁当。

「この前、べんとー屋の前であつた女に聞いたオススメの商品なのに」

ちなみに、一緒に居た少年と少女二人の反応は呆れ・他人のふりして映画のパンフレットを見る・虚空をボーっと見つめるの三通りだった。

「ーうん・・・あるふ・・・?」

「起きたかい? フェイト」

「うん・おはよう、アルフ」

寝起きでまだしっかりと目が覚めていないのか、目を擦りながら体を起こす。

「おはようじゃないよ、フェイト。ゴハン、しっかり食べないと何時か倒れるよ」

「うん、ごめんアルフ。昨日は術式を少し改良してたから」

「・・・あの白い子対策かい？」

「うん・・・今度戦う時は・・・前より強くなってると思うから」

二人して以前戦った魔導士二人を思い出す。

「そうだね、アタシも結局あのフェレットに一撃与える事が出来なかったし」

その時の事を思い出したのか、拳を強く握り締める。温泉の時に戦った際、ユーノは小型の結界を張りアルフを逃げられなくし、自らは極力動かずチェーンバインドで牽制し、周りには不可視のバインドトラップを仕掛け時間を稼いだのだ。

「次はぶち当ててやるっ」

「次も負けない」

二人は次なる戦いに向けて思考を巡らし、闘志を燃やす。

Side Out

Side…アクセル

「まったく。彼もそうだが、君もどうやったら此処まで放って置くのかね？」

温泉の時の戦いで骨に罅が入っていたのを放っておいた為、今朝になって腕が腫れ急遽入院。そして何時もの病院、何時もの医者そして。

「男には意地を張らなきゃいけない場面があるの！ってとまりはお母さんから得た知識を披露してみる」

「むしろ、あなたにそんな意地があった事に、はずみは心底驚きま

す」

「と言うか何やったらこうなるんや？」

「やっぱりあんたも男の子ってことじゃん？」

「黙れエサボリ魔集団」

何時もの見舞客。と言うより何時もより二人多い。

「あら？愛穂。あなたこっちに來てたの？」

入院道具一式を持ってきた芳川が入って來る。

「おう！久しぶりじゃんよう桔梗」

黄泉川愛穂。芳川桔梗の学生時代の友人で、つい最近まで地方の大学に行っていた女性。そして海鳴市内に立っている高校の教育実習生としてこの春から勤めている。

「どオでも良イから、そのサボリ魔共を連れてけ。つーかテメエらも仕事あんだろオが」

「あたし？あたしは今日、お見舞いで午前中だけ抜けさせて貰ったじゃん」

「私は元々貴方の付添いよ」

大人組みの反論。

「とまりは貴方が心配だったから遅れて行くことにしたの。てとまりは説明してみる」

「今朝がた芳川先生に連絡を貰いました。とはずみは貴方の間抜けぶりに呆れてみます」

「ウチは元々学校行つとらんし。今日は検査の日やったんねん」

と、ガキ組の反論・・・無茶苦茶だ。つーか何時の間にか双子は芳川と番号交換していたらしい。

「うぜエエ。良いからどっか行け、傷に響く！」

と言うより、同じ様に暴れたあいつが入院してないのが不思議だ。――この後、数時間は賑やかな病室だった

Side Out

Side..なのは

放課後。何時もの様に美琴お姉ちゃんと一緒に帰りユーノくんとか合流。そのままジュエルシード搜索に繰り出す。美琴お姉ちゃんからの話だと、アクセルさんが入院したからしばらくは、とまりちゃんとはずみちゃんは搜索から外れるらしい。

「どうしたのよ？なのは。なんか嬉しそうね」

「え？・・・うん、なんかこんな風に搜索するのが何時の間にか日常になったなって思ってる」

「そう言えばもう五月だし、そろそろ一カ月になるわね・・・ねえユーノ。管理局ってサボり魔集団？」

「違いますよ。多分、管理する世界と見回る範囲が広いんです」

「結局のところ、世界を広め過ぎてカバー出来ないってことよね？」

「そ、そうとも言えますね。初動が遅いと言う言葉も有る位ですし・・・それって、もしかして、管理局の人が来る前に終わっちゃうってこと？」

「そう言う事になるかもしれません」

駄目駄目なの。

——数時間後

「今日も無さそうだね」

「そうね。なのは今日はどうするの？家に帰る？当麻の家？それとも、わ・た・し（の家）？」

「明日も学校だし、今日は家に帰るの」

「ツッコまないんだね」

ユーノくんが何か呟いたけど聞こえないの

——キィイーン

「「！！」」

言ってる傍からジュエルシードの反応？！

「これは・・・まずい！魔力で強制的に暴走状態に持って行く気だ！」

「それってヤバイじゃない！？結界！結界！！」

「は、はい！！」

ユーノくんが結界を張るのと、ジュエルシードが暴走するのは同時だった。ちなみに美琴お姉ちゃんは魔力を帯びた物を持っているので、巻き込まれる事で結界内に入る事は出来るが、出入りする事は出来ない。・・・当麻君？当麻君は知らずの内に結界内に入っている事があるの。

「いた」

「もう封印はしてあるみたいだ」

バリアジャケットを纏い、暴走したジュエルシードの魔力を辿って行くと。既に暴走を沈めた二人（正確には一人と一匹）が居た。

「フェイトちゃん」

「・・・」

無言で私を見つめる。自然な構えだけど何時でも動ける体制を取っていた。そして、私も彼女と・・・その前に浮いているジュエルシードを見る。・・・そっか、私を待っていたんだ。

「レイジングハート」

「フライアーフィン展開」

足の側面から翼を生やし浮かぶ。

「なのは！ぶっ倒れるの覚悟で行きなさい！」

「頑張っ！なのは」

後ろで美琴お姉ちゃんとユーノくんが応援してくれる。

「気を付けてね？フェイト」

「大丈夫。ありがとうアルフ」

フェイトちゃんの方も

「行くよ、フェイトちゃんっ！」

「っ！」

そして、戦いが始まった。

お互いに一気にトップスピードで空を駆け、魔力弾を生成する。

「（今度こそ勝ってお話するの！）デイベインシューター！」

「（負けないっ！）フォトンランサー・・・」

「「ファイア！」」

そして、同じタイミングで撃ち出す。

「〈強いね！レイジングハート！〉」

「〈仮想敵として彼と戦って来て正解でした〉」

「〈でも、砲撃を撃つ隙が無い。当麻くんは空を飛べないし、魔法使いでも無かったから〉」

「〈無ければ作るまでですマスター。彼との模擬戦闘でも何時もそうしてきました〉」

念話で話し合いながらも相手の隙を作ろうとするが、スピード型のため瞬く間に距離を締められる。魔力弾を放つが、時に打ち消し合い、時に相手を追いかけて、ビルの壁を利用して魔力弾を潰し、降り注ぐ破片を利用して接近されるのを防ぐ。

一方、フェイトの方も勝つための思考を巡らしていた。

「〈強くなってる〉」

「〈ですが此方としても負けるつもりはありません〉」

「〈一番の脅威は砲撃・・・けど砲撃魔法は早くてもチャージに数秒は掛かる〉」

「〈彼女達もそれは理解しているでしょう。ならば此方のスピードで近接攻撃に持って行くのが最善かと〉」

何時もより少し饒舌な相棒に少しだけ笑みが浮かぶ。その間も、弾が足りなくなれば新しく作り出し、直ぐに撃ち出す。

「（そうかも知れない・・・）けどっ！」

ビルの間を後ろ向きで縫う様にして飛び抜ける。

「バルディッシュ！」

「サンダースマッシャー」

後を追いかけて同じ様にビルとビルの隙間に入って来た相手に向け砲撃を放つ。

「っ！レイジングハート！」

「フラッシュムーブ」

一瞬の判断で射線上から高速移動で回避するが。

「Warning!」

「っ!？」

「貰ったっ!」

回避した場所に同じく高速移動し、ハーケンフォームにしたバルディッシュを振り下ろすフェイトが居た。

「(回避は、間に合わない! 防御も駄目! ならっ!) レイジングハート!!」

「フラッシュインパクト」

当たるより早く、前に進み。バルディッシュとレイジングハートの柄がぶつかった瞬間、閃光が走り・・・両者ともビルより高い所に移動していた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「ハア、ハア――ふ」

「「(前よりも強い!) (強くなってる!)」」

「ゴォッ!!!!」

「「!?!?」」

しかし、その瞬間。膨大な魔力が放出し、衝撃波となって通り過ぎる。

「まさかっ」

「暴走!？」

二人の行動は早かった。

――――

――少し前

「くっ! あんたっ! 少しは近づいて来なよ! 噛み砕いてやるから!」

「無茶苦茶なこと言わないでよ!」

片や「せめて殴らせろ」と言わんばかりに動き回り接近を試みる女性^{アルフ}。片や殆ど動かず接近してくる敵をチェーンバインドで牽制し、動けなくさせる事を目的とする小動物^{ユノ}。傍から見ると中々に間抜けな絵図になる。

「・・・一対一^{サン}って人数が足りない暇になるわね・・・んっ、このヤシの実サイダー、中々おいしい」

離れた場所で自販機から買ったジュースを飲む美琴。そして有る事に気付く。

「ん?・・・ねえ!二人とも!」

「「何(んですか)!?」」

ハモっている分を見るに実は仲が良いのではないかと思うが。一先ず思考の外に出す。

「アレってヤバくない?」

その指さす方を見る二人。その先に点滅を繰り返すジュエルシードがあった。

「「・・・やばっ」」

「ゴォッ!!!!!!」

二人が行動に移すより一歩早く、膨大な魔力が放出される。

「のわっ!?!」

「きゃっ!?!」

「つく!?!」

衝撃波に飛ばされそうになる体を支える三人。その上を二つの影が通り過ぎる。

「フェイト!?!」

「「なのは!」」

「ガキっ!!」

「「あっ」」

その二つ影、なのはとフェイトが封印しようとデバイスを近づけ、ジュエルシードを挟む様に重なってしまう。こうなるとお互いの魔力が邪魔をして封印が出来なくなる、よって・・・。

—ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！

そして、お互いが引くより早くジュエルシードが本格的に暴走し、辺りの物を吹き飛ばす。

「フェイト!!」

「っ、レイジング、ハート？」

見ればコアやデバイス全体に若干罅が入り、場所によっては欠けている所もあった。

「フエイト!!!」

「まさかつ！あの子、自身の魔力で無理やり抑え込む気か！？」

た知識と、目の前で膨大な魔力を放っているジュエルシードを見て直感的に悟った。

その叫びも空しく、フェイトは素手でジュエルシードを掴み、自身の魔力を限界まで引き出し、封印の魔方阵を展開する。

その場に居た全員見守るしかなかった。

スと言う変換機を使うしか方法がない。しかし、現在フェイトはデバイスを使わずに魔力を引き出しているため、魔力の譲渡も出来なければ、再封印の手伝いも出来ない。手を出せば先ほどと同じ様に吹き飛ばされるからだ。

その人がジュエルシールドを殴ると、何かが碎ける音がした瞬間。魔力の暴走も・・・それによって引き起こされていた暴風も止んだ。

「・・・大丈夫か？つと、それよりもその子・・・」

「フェイト！！」

アルフさんの声で慌ててフェイトちゃんの様子を見る。今はユーノくんとインデックスさんが回復魔法を使っていた。それよりも・・・。

「酷いっ」

魔力切れで既にバリアジャケットから私服に戻っている。けど、一番目を引いたのは手の平だった。所々傷つき、白い肌だったから血の色が余計に目立った。

「大丈夫なの？」

「・・・取り敢えず大丈夫だよ、短髪」

「あんたね、いい加減名前で言いなさいよ」

近くで二人が言い争いを始めたが、無視してユーノくんに聞く。

「ユーノくん」

「大丈夫、治るよ」

「本当かい！？」

アルフさんが詰め寄るが、さすがに今、回復魔法を途切れさせるのはまずいと悟ったのか、フェイトちゃんの頭を硬いコンクリートの上から自らの膝の上に乗せた。

「ええと、なのは？どんな状況？」

当麻くんが状況説明を求めるので、素直に話した。

「なるほど」

「ううっ・・・ここ」

「フェイト！」

「フェイトちゃん！？」

その声が届いたのか、言い争っていた美琴お姉ちゃんとインデックスさんも一時休戦してこちらの様子を窺っていた。ユーノくんもフェイトちゃんから離れた・・・どうやら治療は終わったらしい。

「うん・・・私も。行こうアルフ」

「はいよ術式展開・・・転移」

そう言って何処へ転移して行った。

「よかったのか？」

「うん・・・それに、フェイトちゃんは自分の意志でジュエルシードを集めてるって分かったから」

「そっか」

そう言って頭を撫でられる。右手で触れたせいでバリアジャケットが強制的に解除されたけど気にしない。

「じゃあ、帰るか」

「うん」

「とーまー。私お腹減ったかも」

「私も今日は当麻の家で食べる」

・・・えっと、どうしよう？美琴お姉ちゃんに言った手前、私もと言いだすのは正直言って気まずいの。て、美琴お姉ちゃんが当麻くんに耳打ちしてる！？

「ふんふん・・・なるほど。なのは」

「ひゃいっ！」

「お前は どうしたい？ああ、迷惑だとか考えなくて良いぞ？お前・・・つか、お前らが行き成り家に上がって夕飯食って帰って行くのなんか頻繁にあるし・・・あれ？平然としてる時点で不幸なのか？どう思う？」

「いまさら何じゃない？」

「それよりも今日は何なのかな？！」

「豆腐が安かったから豆腐ハンバーグだ」

「・・・」

「どうしたの？なのは」

「へ？何でもない・・・当麻くん！私アレ食いたい！上条家特製オムライス！」

「何でだ！？話聞いてたか？！」

陽だまりの様な温かい場所。私が私で居られる場所。私が失いたくない大切な居場所。私の支えとなる大切な人。この場所を失いたくないから戦う・・・こんな簡単な事だったんだ私の戦う理由って、でも、とつても大切な事」

「?どうした?なのは」

「どうしたの?なのは」

「何でもないの。行こ!当麻くん!へその為に、力を貸してくれる?レイジングハート」

「へ問題ありませんマスター。私と貴女なら何処までも羽ばたけます」

——白き少女は羽を休める・・・再び羽^{戦いの}ばたく時の為に

おまけ

——現フェイト宅

「ごちそうさま」

「・・・」

「どうしたの?アルフ」

「いや、急に食べる様になったな。って・・・やっぱりあの子かい?」

「うん・・・今日は引き分けみたいな物だったから」

「(ウチの御主人ってこんなに戦闘狂だったっけ?)」

静かに闘志を燃やすフェイト。それを見て若干引き気味のアルフ。
「そ、そうだ。今日知ったお菓子があるんだけど食べるかい?」

「お菓子?」

冷蔵庫からアルフが取り出す。それは大きめのカップにドロリとしたチョコレートドリンクが入っており、その上にさらに生クリームが乗り、さらにチョコレートソースがかかっている甘党オススメ

の一品、その名も。

「ちょこらーた・こん・ぱんな・バージョンAだったっけ？取り敢えず食べよう」

「・・・あむ」

その瞬間、口の中に広がる甘さ。と言うより広がり過ぎて拒絶反応がおきる甘さ。

「（あつつまーーーーー！？）フェ、フェイト？大丈夫かい？」

「おいしいねアルフ」

「（マジ！？いや、でも精神リンクだと嬉しさが伝わって来る！！）ア、アタシは要らないからフェイト食べていいよ」

「ホント！ありがとう！アルフ」

こんなの良い笑顔が見れて嬉しいやら、この劇甘の一品を普通に食べる御主人に（将来的な）不安を感じるアルフだった。

戦う理由（後書き）

——やって来た次元の法を守る者達

——空気が読めない若き執務官

——交わされる契約

次回「時空管理局」

——何時いかなる時もポケの心を忘れない彼らは何処へ向かうのか

時空管理局

Side……

「エイミィ、昨日観測された次元震のポイントは割り出せた？」

一人の女性がエイミィと呼ばれた女性――見た目は十代半ばの少女――に話しかける。周りを見渡せば既存の技術では不可能な空間モニターや天井近くに大型のモニターなどがあった。

「既に割り出しは完了してます艦長」

エイミィと呼ばれた少女は上の艦橋に居る艦長――翠色の髪的女性――に答える。

「何処だか分かるか？」

「ちよつと待ってねクロノくん」

エイミィの傍に立っていた少年――クロノ――が話を進める。

「えっと、ここだね第97管理外世界」

「……たしか、この辺りで次元艦が一隻沈んだのよね」

「ついでの搜索届けが出されています。スクライアの少年一人に・

・発掘したロストログア、ジュエルシード21個」

「エイミィ。他に何かあった？」

「それがさっぱりです。次元震が二回発生した直後にパツタリと反応が消失。その世界はいまだ健在してる所を見ると封印したか、何らかの手段でロストログアの暴走を止めとしか思えません」

「そう……やっぱり出向いて調査した方が早いわね。全艦に通達！これより本艦は第97管理外世界に向けて発進します！」

「りょーかい！」

「クロノ」

「分かってます。もしもの場合は自分も出ます」

「頼んだようアースラの切り札くん！」

「茶化すな！エイミィ！」

その様子を見て時空管理局提督リンディ・ハラオウンは思う。

「（早く結婚しないかしらこの二人）・・・それにしても、次元震の反応が一瞬で消失、ね」

——この先、彼らは未知なる存在『超能力者』の存在を知る事になる。

Side Out

Side..なのは

放課後、久しぶりに当麻くと美琴お姉ちゃんと一緒の下校。レイジングハートは首にぶら下がっていない・・・昨日、壊れたー中破越えの損傷ー部分の修復リカバリーの為、若干減っても困らない程の魔力を持っているインデックスさんが所持している（リカバリーは魔力を注ぎ込んでデバイス自身が修復する機能らしい）。

「そう言えば、三人で帰るって久しぶりな気がする」

「そーだなー・・・四月から数回ほどしか無いな」

御坂家の次女と三女はアクセルさんのお見舞いーと言う名のふれあいタイムーで居ない。

「・・・色んな事があったの」

「ホントだな・・・このまま管理局の人間が来ない可能性もあんだよな？」

「みたいね・・・ま、無い物を強請ねだったって時間の無駄よ」

今はインデックスさん・ユーノくん・レイジングハートと合流する為に当麻くんの家に向かっている最中・・・なら、今は甘えるのとりあえず、二人と腕を組んでみた。

「おっ!？」

「っと!」

「えへへへ」

そこへ買い物に行く途中の美鈴さんに会った。

「あららー?何時の間になのはちゃんハーレムになったのよ?」

「な、なな何言ってるによよ!?!?なのはハーレムですって!?!?違う

わよ！これは、その、アレよ！子猫がどっか行かないように当麻と二人で繋いでるのよ！！！！」

美琴お姉ちゃんが何か暴走しだしたの。

「なに言ってるんだ美琴！？」

「がーん！み、美琴ちゃんがっ！美琴ちゃんが！！何時の間にかアダルティーナ世界に踏み込んでる！！？これは、赤飯ね！？」

「美鈴さん！？アンタ分かってねじ曲げてるでしょ！？」

「あ、アダルティーン！？私何時の間にか大人の仲間入り！？」

「そうよ美琴ちゃん！さあ、これに名前と住所と生年月日を記入しなさい！！！」

「くそっ！ツツコミが間に合わない！？つか！どっから出した！今どっから出した！？」

美鈴さんが胸の谷間から何かの用紙を取り出した・・・私もあれくらい欲しいの。

「こ、これは！！婚約届け！？わ、分かったわ」

「って美琴！そこ男性欄だから！つかなんで俺の名前書いてんだよ！？」

「甘いわね！当麻くん！よく見てみなさい！！！」

「・・・何で女性の書き込み欄が複数あんだよ！！！！こんな何処にもねーだろ！？」

「もちろん作ったのよ！！！」

「アホだこの人！！！！？」

「協力者は桃子さんよ！！！」

「何やってんだあの人！！！！！」

・・・あの書類って本当に通用するのかな？

「あれ？」

「今度は何だ！？」

「ねえ当麻、この一番下」

「？・・・なんで氷華の名前が！？」

「あ、さっき会ってね、書いてもらったの」

「いい加減にせいやああ!!」

――二時間後

結局、合流するまで三十分はかかった。それも来るのが遅くて向こうからやって来る形で。ついでに当麻くんが頭を噛みつかれたの。そして、再びジュエルシールドが発動した気配を察知する。

「来た」

「こっちです!」

ユーノくんの案内で全員が移動する。走っている途中で景色が変わる。多分アルフさん辺りが結界を張ったんだ。

「・・・海鳴公園?」

「ユーノくんと出会った場所だね」

話してる間も、視線は空を飛んでいる子に向けられる。

「・・・よかった」

「ほら、なのは。行って来なさい」

「頑張れよくなのは」

「と言いつつも、とうまは真っ直ぐアレに向かってるんだけどね」

「取り敢えずあのジュエルシールドの暴走体を止めましょう!」

「レイジングハート!」

「All right, Barrier jacket set up」

一瞬にして何時もの戦闘服を纏い、足から翼を生やし飛ぶ。

「フェイトちゃん」

「・・・まずはアレが先」

「!・・・うん!一緒に止めよ!」

改めて暴走体に目を向ける。そこでは既に戦闘が始まっていた。

「ハッハアッ!狙いが甘い甘いっ!!その程度のスピードで当てようなんざ百年早え!!」

「アンタ!何か理不尽さに磨きがかかって無いかい!?!このっ当たれ当たれ当たれ!!」

「よっ！はっ！！せいっ！！！（―ヒュンッ！！）危なっ！？」

既に暴れ回っている木のお化けの攻撃と、アルフさんの攻撃を普通に避けながら接近している当麻くんとユーノくん。・・・ユーノくんが出会った時より遅くなってるの。

「んゝなんか最近普通の電撃じゃ物足りなくなって来たわね」

「短髪もよく考えると理不尽だよね？なんで何万ボルトの電気を出してるのに平然としてるの？」

遠距離からチェーンバインドで拘束し、それを電撃で焼き切る美琴お姉ちゃんとインデックスさん。

「・・・遠距離からにしょっか、レイジングハート」

「バルディッシュ」

「カノンモード、セット」

「グレイグフオーム」

「ディバイイイイン」

「サンダー」

こちらに気付いたのかユーノくんとインデックスさんが左右に周りチェーンバインドで動きを封じる。当麻くんも射線上から退避する。

「バスタアアア！！」

「スマッシュアアア！！」

同時に砲撃を撃ち・・・暴走体を吹き飛ばし封印する。

「・・・近くで暴れてるとまた同じ事になるかもしれない」

「うん・・・レイジングハートもバルディッシュも傷ついて欲しくないもんね。当麻くん」

当麻くんに封印したジュエルシードを持ってもらう。封印が解けちゃうけど問題無いの。

「はいよ・・・なあこれって俺の得点になるのか？」

「「ダメ」」

「ですよねー、一応なのは得点って事にしておくか」

そう言って当麻くんは下がった。そして、私とフェイトちゃんは

向き合った。

「・・・フェイトちゃん」

「・・・」

「行くよっ」

「負けないッ」

不意を突くために真っ正面から仕掛けた。その行動に一瞬、目を見開いたが直ぐに戦斧形態のバルディッシュを構え、真っ直ぐに向かって来た。そして・・・。

―ガキイン！！

「そこまでだ！時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ、この場で戦闘行動は危険すぎる！直ちに戦闘行動を止める！！」

突然現れた男の子が私とフェイトちゃんのデバイスを受け止めた・
・空気嫁なの。

「ちっ、空気読めよ」

「状況読みなさいよね」

「とうま以上の空気の読めなさかも」

「か、管理局の人間が酷い言われようだ」

「なっ!?!」

男の子が困惑している内に取り敢えず離れ、当麻くん達の近くに行く。

「時空管理局!?!フェイト!逃げるよ!?!」

「っ!」

「っ!待て!?!」

困惑している隙についてフェイトちゃん達が逃げようとした時に、男の子が進行方向に魔力弾を撃った。・・・速い!

「今のは警告だ。直ちに武装解除しろ」

「悪いけど、そうも言ってらんないんでね!フェイト!」

そう言った瞬間、アルフさんが男の子に向かって魔力弾を放つ。そのすぐ後をフェイトちゃんの魔力弾が追従する。男の子は杖―恐らくデバイス―を前に出し防御魔法を発動しようとするが・・・二

つの魔力弾がその直前でぶつかり。

「パァァァァァァァァン!!!!」

『っ!!!?!』

大きな音と閃光が周囲を埋め尽くし。目を開けると……。

「……逃げられたか」

フェイトちゃんとアルフさんが居なくなっていた。ついでに。

「目がく目がく!私(俺)の目がああああ!!」

当麻くんと美琴お姉ちゃんが、顔に手を当てて叫んでいた。

「当麻くん!美琴お姉ちゃん!大丈夫?!」

心配になって声をかける……が。

「実は何ともないんだ」

「この程度の突発的な事態にも対応できないと、この先やっていけないわよ?」

一瞬で普通の状態に戻った。

「あなた達は一体どんな日常生活を送ってるんですか!?!」

「やっぱり理不尽かも」

「さ、流石だね!当麻くんに美琴お姉ちゃん!」

シリアスな空気も吹き飛んだ。

「エイミィ?」

『ごめくん、クロノくん。あの子たち連続で転移していったみたいで追跡できなかった』

男の子のすぐ傍に、女の人が写った画面が現れた。

「……そうか」

さらに画面が増える。今度は緑色の髪の女性だった。

『クロノ執務官』

「かあ……いえ、何でしょう艦長」

『今回の件の参考人として、その子たちを連れて来てくれる?』

「分かりました。……そう言う事なので付いて来てもらえるか?」

「だが断る」

「ガクッ」

周りの空気を一切を無視して当麻くんが言い放った。・・・空中でこけるなんて器用な事するの。そして全員の視線が当麻くんに向く。

「き、君は何を言ってるのか分かってるのか?! 此方としては任意同行して欲しいと言ってるんだが!？」

「いや、明日に出来ねえの? 今何時だと思ってる」

「そう言えば何時?・・・六時半?

「にゃあ!?! 家に電話しないと!」

「あちゃー今日も当麻の家かな?」

「そう言えば、お腹減ったかも」

「皆さん平然としてますね」

「な? はっきり言うが、今居る面子で次元世界出身者なんて二人ぐらいだ。他はこの世界で家があって、親がいる奴ら何だが」

再び当麻くんが男の子に話しかける。

「・・・どうします? 艦長」

『そうねえ・・・その中にスクライアさんは居るかしら?』

「あ、はい、僕です!・・・あの、一族から搜索願い出てましたか?」

「ああ。ついでにジュエルシードの搜索願いも同時に出ていた。・・・今回の件、ロストログア・ジュエルシード絡みと言う事で良いか?」

「はい」

『そちらの代表は・・・貴方で良いのかしら』

艦長と呼ばれた緑髪の女性が当麻くんの方を見てそう言った。

「・・・あれ? 俺?」

当麻くんが周りを見てそう言った。・・・違ったの? 美琴お姉ちゃんやユーノくん、インデックスさんまで頷いてるけど。

「・・・はい、俺で良いです」

『何だか意見の食い違いがあったみたいだけど。それならスクライアさんだけ此方に来て事情説明して、あなた達は今日の所は帰るっ

て事でどうかしら?』

「今日の所、ね。・・・明日の十一時頃、この町にある翠屋って言う喫茶店があるんで、お話があるならそこでどうです?・・・おいしいケーキがありますけど」

『是非そうしましょう』

「艦長!」?

『クロノくん! そう言う事にしとこ!』

「エイミィ! 君まで!」?

何か苦労してるの。

「そう言う訳で、ユーノ。構わないか?」

「ええ、構いません。元々の問題は僕のなんですから、事情の説明ぐらいどうって事ありません・・・例の件も含めて話し合ってます」

何だか難しそうな話してるの。

「ユーノくん」

「なのは・・・また明日」

「・・・うん! また明日ね! ユーノくん!」

そうだ、これでお別れて事じゃないんだ。まだフェイトちゃん
の事も、ジュエルシードの事も解決して無いの。

『じゃあ、明日。その翠屋って言う喫茶店で話し合しましょう・・・
正直言って、もっとごねるかと思ったわ』

「そうになったら実力行使でしょうが。まあこっちが勝ちますけど・・・
この町じゃ結構な有名店なので分かり易いですよ」

「・・・それでは、ユーノ・スクライア。君はこっちに来てくれ」

「はい。それじゃ皆さん。お休みなさい」

そう言っ。ユーノくんと男の子は消えて行った。

「よし、帰るか・・・と言いたいところなんだが・・・家に食材が残
ってないので買いに行くぞ」

「とうま! それは一大事かも!」

そう言っ。商店街に向けて歩いて行った。ちなみにユーノくんが

去った辺りから結界は消えている。

「・・・今日は家で食べよ。なのははどうする?」

「ユ一ノくん居ないから。当麻くんの家に泊まるの」

取り敢えず、直ぐに家に電話しないと。

Side Out

Side..当麻

――翌日

本日は休日。なので待ち合わせの十一時少し前に翠屋に行けば良い・・・はずなのに、現在十時。俺、美琴、なのは、ついでにインデックスは翠屋の仕事を手伝わされていた。

「何故だ?」

「良いじゃない、私は楽しいわよ?」

「とうま。何だか甘い匂いでお腹が減って来たかも」

この腹ペコがっ!

「いらっしやいませ・・・あれ?とまりちゃんにはずみちゃんに、アクセルさん?」

客が入ってきたので、なのはが対応しに行ったがどうやら双子とアクセルが来たらしい。退院したばかりなのか、アクセルは荷物と杖を付いていた。

「あれ?なのはちゃん?何やってるのってとまりは疑問に思ってた」

「お姉さまも居ますね。と、はずみは一切ツツコミを入れず普通の対応をします・・・こんな事するのは家の母ぐらいですか」

「お前、なにやってんだ?」

「おうアクセル、久しぶり・・・何って、見て分かんねえか?」

「いや、何やってるかア分かってんだが・・・なんで執事服?」

そう、俺は現在執事服を着ている。ちなみに美琴・インデックスはメイド服、なのはは何故かフリルのついたゴシックドレスだ。

「・・・桃子さんの趣味だ」

「あの女、そんな趣味があンのか？」

「ちなみに衣装提供は美鈴さんだ」

「ああア、あの女か・・・それなら納得できる」

「アクセルに納得される時点で貴女は変わり者です美鈴さん。」

「と、そうそうジュエルシードの件で進展があるけど聞くか？」

「何があった？」

「例の時空管理局とやらが昨日接触してきた。今日話し合いがあるが・・・参加する？」

「そう言う奴らなンぞ碌な連中じゃねエだろオが、遠慮すンわ・・・内容は今度聞く」

「・・・お前、何だか丸くなった？」

「・・・単に本調子じゃねエだけだ・・・じゃアな」

そう言つて俺から離れ、カウンターでシュークリーム数個と土郎さん特製のコーヒーを持ち帰りで頼んだ。そう言えばアイツ、土郎さんのコーヒーが数少ない好物だったな。

——それから約一時間後

「いらつしゃい・・・お」

「こんにちは。で良いかしら？」

「取り敢えず席に案内してくれるか？」

「昨日ぶりです」

入って来たのは時空管理局の三人（艦長と呼ばれていた女性とアホ毛少女と昨日の黒い）とユーノだったので、あらかじめ土郎さんをお願いして予約しておいた席に通す。その後俺達も土郎さんに話を通し接客から抜けさせてもらう。・・・あれ？元々俺達って店員じゃないよな？

「お待たせしました・・・イチゴのショートケーキが四つ、シュークリームが大量、ビターチョコケーキ、紅茶が六人分・・・あと俺の分」

何で俺まだ給仕してんだよ!? 確かに二度手間になるから構わないけどな!?

「さて、これで全員揃ったみたいなので始めましょうか。エイミィ「はいはい。・・・アースラに連絡して、この席の周りに防音結界展開させました」

「御苦労さま」

さっきまでと違い店内の雑音が聞こえなくなった。

「改めて自己紹介します。時空管理局提督L級巡航艦アースラ艦長のリンディ・ハラオウンです」

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

「時空管理局所属、L級巡航艦アースラ所属、通信主任兼執務官補佐のエイミィ・エミリッタ。エイミィで良いよ」

うん、取り敢えず。

「「黒いの(クロノくん)だけ短い(の)」」

「・・・そっちも自己紹介してくれないかッ!」

おっと少しキレ気味?

「上条当麻だ」

「上条美琴よ」

「えっと、上条なのはです」

「ストオオオオップ! 違うだろ!? お前らまだ御坂に高町だろうが!?!」

「まだって言った!? と言う事はしょ「言わせんねーよ!?!」むーっ! むーっ!?!」

「と、当麻くん、人前でこ、ここ告白なんて困「お前もそれ以上は言わせねー!!」むぐー!?!」

——数分後

「御坂美琴です・・・頭が痛い」

「た、高町なのはです・・・当麻くんがぶったの」
ちよっとお話して改めて自己紹介させた。

「え、えっと。で、貴女は?」

ほら見ろ、リンディさん以外が呆氣に取られて思考が停止してるぞ。

「十字教第零聖堂区『必要悪の教会』ネセサリウス所属インデックスだよ」

「っ」

「？」

リンディさんと黒いのが反応した？エイミイってやつは分かっているみたいだが。

「どうかしました？」

「え？い、いえ、そう、貴女あの『必要悪の教会』ネセサリウスの人なの」

「・・・なあインデックス、お前らって結構有名人？」魔道図書館

「んー一度でも魔道書の力に触れた人ならインデックスの名前は結構有名かも、それに管理局の人から見ると非殺傷の使えない魔術は忌避する人多いからそのせいかも」

ああ、なるほどね。

「・・・さて、されじゃあ話を始めますか」

取り敢えず以前インデックスに聞かされた事以外だと、ジュエルシードは最悪次元震と呼ばれる世界一つを滅ぼす力を持つ事、ユーノからの聞いた情報漏洩の件の報告、もう一人のジュエルシード探索者の事等の情報交換が行われた。

「そう言う訳だ、これより先は僕達管理局がジュエルシードの搜索と、もう一組のジュエルシード探索者の捕縛及び向こうが手にしているジュエルシードの奪還を行う事になった。君達民間人は首を突っ込むな」

何か棘があるな。

「あなた達は何も心配しなくて良いわ。この件に関わったのも事前に現地協力してくれた一般人として扱うから捕縛や何らかの罰則も無いわ」

「あの、ユーノくんは？」

なのはが質問する。

「ああ、彼も何の罰則も無いわ、この世界にばら撒かれたのだった事故だし、現地住民の貴女に魔法を教えてしまったのは・・・まあ、過ぎてしまった事ですし、その事についてはしっかりと話し合ったわ。それに、私達が来るまでに既に幾つもジュエルシードを回収し被害を最小限に食い止めてくれた事も有るしね」

そりゃよかった。

「艦長、そろそろ行きましょう。エイミィ」

「はいはい。・・・はい、結界解除したよ」

店内の雑音が戻る。インデックスが速攻でカウンターに突っ込んで行った。

「なのはさんも、ユーノさんと話し合って今後どうするか話し合いなさい。答えは後日教えてくれる？」

・・・ん？何か今変な感じが。

「なあ、何を話し合うんだ？」

「え？それは・・・もちろん、魔導士を続けるか止めるかってことよ？」

そう言う事か・・・アクセル、お前の憶測当たってるかもな。

「それは、魔導士を続けるなら即徴収って事か？」

「「「え？」」」

「・・・艦長？」

「「・・・」」

美琴・なのは・ユーノ・クロノ・エイミィは驚き。インデックスは予想してたのか平然とシークリームをおかわりしてる・・・おい、太るぞ？そして、リンディさんいや、時空管理局提督は・・・目を反らした。

「その反応、当たり前だな・・・おい、黒いのとアホ毛席に付け」

「その言い方止めろ！」

「アホ毛！？私のチャームポイントが見抜かれた！？」

「・・・いいから、話し合い第二幕と行こうぜ？提督さん、こっか

「先はガキと思ってる」と痛い目に会うぜ？」

「・・・そうね。エイミィ、もう一度、結界張り直してくれるかしら」

「そう言っただけで再び全員が席に着く・・・おいインデックス、そのそれぞれ手に持ってるお皿にたっぷり乗ってるシュークリームの代金はどう？・・・俺ですか!？」

「今度は交渉に入りましょう・・・その前に、大丈夫？」

「ふっ、（非公式な）アルバイト代が消えたただけだ、問題ない。で？そっちの用件は？」

「今度は美琴もなのはもユーノも警戒してる。クロノとエイミィは戸惑っている・・・場馴れして無いな。インデックスは平然とシュークリームを平らげている。」

「はつきり言いましょう、私達には戦力が少ないの。此処だけの話、アースラの戦力はここに居るクロノ執務官と武装隊一個中隊だけ、その人達も正直クロノレベルの人は二、三人程、あとは実戦経験の少ない人達よ・・・早い話、私達は訓練部隊の様な物なの」

「逆に、こっちは殆ど実践で鍛え上げられた魔導士二人と所属組織は違うがサポートに特化した魔導士一人・・・それに、正体不明の力を使う二人」

「昨日の内にこの世界の事は少し調べたわ・・・超能力者でしょう？あなた達」

「（俺は違う気がするが）よく、調べましたね・・・まあ公式に発表されてるし、そう考えるのは当たり前か」

「ええ、それに此方としても今後は油断出来ないの」

「情報漏洩の件か、はたまた別件か。」

「こっちのメリットは？」

「あなた達については名前は伏せるつもりよ、それに超能力者の事も」

「確かに、その情報は押さえたときたかったものだが。」

「・・・お前らは？何かあるか？」

「・・・今の生活を乱したくないの」

「私も」

「船のゴハンより、とうまのゴハンの方がおいしいかも」

「なのはと美琴、インデックスから意見が出た。お前は食べる事ばっかだな!？」

「じゃあ、こっちは普段通りに生活するが、ジュエルシードが見つかった際は情報をくれ、俺達も直ぐに向かう・・・様は臨時アルバイトだ、これでどうだ？」

「・・・そうね、それで良いわ」

「正気ですか?! 艦長! 彼らは幾ら戦えると言っても民間人です!」
今まで黙っていた黒いのが口を挟んできた。

「クロノ、あなたの言いたい事は分かっているわ。けど、ここは管理局の法外の管理外世界なの、不測の事態に備えるのは間違ってる事?」

「ぐっ!」

「クロノ、あなたはまだ若いわ、執務官としてもそうだし、生きてきた歲月も・・・管理局の法を守るのは職務上守らなければいけない事だわ。でもそれだけではダメよ、思考を柔軟にしなさい」

「・・・はい、了解しました」

「クロノだっけ? 物事全てに一定の法則や規律、ルールを求めるのは危険だぞ?」

「そのくらい熟知してるっ!」

「なんか俺だけに棘が無いか?

「・・・さて、以上かしら?」

「後は無いよな?」

「最終確認しよう、目的はジュエルシードの全確保ともう一人のジュエルシード搜索者の捕縛、で良いのか?」

「裏の逮捕も出来れば此方としては最高だけれどね」
欲張りだな。

「俺達は戦力の提供と、この世界で好きなように行動するから・・・」

独自行動、で良いのか？兎に角その許可をくれ」

「後は解決後の情報の一部秘守ね、此方は情報提供。・・・結構こちらが得してるけど良いの？」

「ねえ当麻くん。要求はこっちが多いけど何で向こうが得してるの？」

なのはが質問してきた。

「情報漏洩の可能性があるなら、超能力者の事は隠しておいた方が双方の為だし、私達はこの世界で行動するからその分遭遇率・危険度は高くなる。契約内容としては傭兵的な立場だから怪我とかの負傷は自己責任だからだよ・・・口の中が甘くなってきたかも」

インデックスが俺の代わりに答える・・・まあ、そう言うことである。あとインデックス、それは唯の食い過ぎだ。

「なんだよ？お金でも要求でもすれば良いのか？」

「あら、良いわよ？」

「「「良いんだ！？」」」

さらっと許可しやがった！？そして、すぐさま相談が始まる。

「ど、どうする！？上条さん的には不幸トラップの匂いがするんだが？！」

「ま、まあ、良いって言ってんだから良いんじゃない？」

「私はとうまが居るからあんまり必要としてないかも」

「俺は財布かよ！？」

「でも、とまりちゃんもはずみちゃんも。あと、アクセルさんも居るし」

「あいつには双子とデートさせるつもりだし・・・貰っとくか？」

「だったら私もデートしたい」

「わ、私もなの！」

「あの、僕が言えた義理じゃないけど、当麻さんって事件に関わってから食費とか増えてませんか？」

正確に言うならインデックスが来てからだ。

「とうま、遊びに行くなら私も行きたいかも」

「・・・と言う訳で報酬ありでOKでせうか？」

「良いわよ。と言うより、さっき言った様に、あなた達は現地で調達した傭兵みたいなものなのよ？」

そう言えばそうだった。

「じゃあ、よろしくね」

「この事件解決するまでだが、よろしく」

あの後、昼食にして連絡先を交換―技術レベルは向こうが上だった―し、食後の一休みに世間話をして解散となった。クロノは苦労性だと言う事と年上だと言う事、そして、リンディさんは激甘党だった。・・・紅茶風味の砂糖なんて初めて見た。

時空管理局（後書き）

——束の間の平穏

——個人の戦い方と組織の戦い方

——荒れ狂う海、吹き荒ぶ暴風

次回「嵐の海」

——少女の思い、それはただ一つ

「友達になりたい」

嵐の海（前書き）

浜面の声優を見て一言・・・武器使いフラグ？

嵐の海

夜の木々に囲まれた場所。そこに幾つかの動く存在がいた。

「そちらはどうだった？」

「駄目です。どうやら既に持って行かれた様です。どうしますかクロノ執務官」

「そうか・・・エイミィ」

幼い少年クロノが虚空に向かって話しかけると、すぐ横に少女が映った画面が現れた。

『はいはい、索敵の結果今回は負けだね。その場に残っていた魔力の残滓を調べたら例の子みたいだね』

「・・・僕達が動いていても裏を欠く様に行動する。手際も見事だ、万年人材不足の管理局からすると即採用だな」

『クロノくん・・・浮気？』

「ばっ！誰がだ！？第一僕と君は付き合ってもいないだろう？！」

『冗談だって。結局数日でこっちが一個、向こうが二個・・・あっちがどれだけ持つてるか知らないけど、未発見だったとして後七個だね』

「そうだな・・・撤収する。全員に通達後転送を頼む」

『了解』

数秒後、その場に居た人影は消えた。

Side..当麻

———昼

「と言う事があったのよ」

「皆、結構無茶を押し通すよね？」

現在連休も開け再び学校に通い、今は昼食中。場所は中庭の日当

たりの良く、意外と死角になってる場所。メンバーは魔法を知ってる組（俺・なのは・美琴・氷華）そして何故か居るインデックスとユーノ・・・と言うか何故居る？ いや、それよりも。

「インデックス」

「？なに？とうま、私はももこが作ってくれたお菓子を食べるのに全身全霊をかけてるんだよ」

「いや、それは良いんだが・・・いや、やっぱお前が学校に居る事自体が不思議なんだが・・・その服どうした？」

今インデックスが着ている服。それは紛れも無く聖祥大付属小学校の制服、しかも三年生。

「これ？みすずにとうまの学校に行きたいって言ったら、これに着替えれば大丈夫って言ってたから」

いや、確かにこの学校、進学校だから海外からの留学生やら、日本生まれやらハーフも居るからあんまり目立たないけどさ。

「（流石にそれは無い）・・・不幸だ。バレたら何故だか俺が怒られる気がする」

そう言えば最近不幸度が増えてきた気がする。

「ねえ、当麻君・・・」

「ん？どうした氷華？」

「怖く、ないんですか？」

氷華が不安気に聞いて来た。おい、美琴になのはにインデックス。見てないで助けるよ！・・・え？俺の役目？・・・はあ。

「さっき美琴ちゃんから聞いた今朝の事。それって戦いがもつと厳しくなるかもしれないって事なんだよね？」

今朝の事・・・確か俺をどうやって転移するか考えた事を実際にやってみた事だよな。

「怖いさ、怖いけど、俺の場合何もしないで周りが傷ついてくのがもっと怖くてな。立ち向かって行く方が楽なんだと思う」

「・・・それで当麻君が怪我してもですか？」

「まあ、怪我しないのが一番だがな。もし、誰かが傷ついてでも勝

ち取ったものが全員が笑って終わりに出来るなら・・・傷つく役は俺が引き受けるだろうな」

「駄目だよ！とうま！誰かが傷つく事にならないように、皆出来る事を精一杯やってるんですよ！」

今まで離れて聞いていたインデックスが話に割り込んできた。

「・・・そうだな、一番の方法はそうならない様にする事だよな。何弱気になってんだか・・・」

良い位置に頭があるのでつい手が勝手に撫でる。

「むう・・・子供扱いはやめて欲しいかも」

うむ、何か和む・・・和むついでに眠くなってきた。・・・よし！

「美琴ー、午後サボる！」

「わかったー私もサボるー」

おい？！って何時の間にか隣で寝る体勢作ってるし！？

「あの、どうぞ」

氷華が何時の間にか頭が来る位置に座っていた・・・膝枕ですか？・・・そうですか。

「・・・まあ、いつか。インデックス、お前は？」

「私？私も寝るかも・・・昨日は夜遅くまで少し術式調整してたから」

「あっそ、おやすみ」

「「お休みかも（なさい）」」

なのは？なのははとっくに俺の隣で寝てたぞ？

「ひょうか、隣良い？」

「え？うん、どうぞ」

「・・・ねえ、ひょうか。歌、歌って。私、温泉の時に聞いた、歌が聞きたいな！」

「良いよ。・・・――」

歌が聞こえる。優しく包み込むような綺麗な歌。確か、光の歌姫が歌ってるやつだったけ？

Side Out

Side..フェイト

「大丈夫？フェイト」

「大丈夫だよ、アルフ。その為に昨日はちゃんとご飯も食べて睡眠も十分とって、体力も魔力も回復させたんだから」

「・・・そうだね、ならアタシの役目はフェイトを全力で守る事だ！」

アルフが結界の準備をし始めたので、私も準備に取り掛かる。今までは海岸沿いも調べた、山奥まで行った、隣町まで行った、何処も私とあの子たちと管理局の人が調べ尽くした。後行っていないのは一つしか思い浮かばない。

「行くよバルディッシュ」

「何時でも可能ですマスター」

寡黙な相棒に少し勇気づけられ、真下に広がる海を見る。

「アルカス・クルタス・エイギアス」

静かに、けれど力強く呪文を紡ぎ出す。

「疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

アルフが結界を張る。念の為広範囲。

「撃ち碎け・・・」

「Photon Lancer Phalanx Shift」

狙いは定めない。ただ広範囲に打ち出すだけ。

「ファイア！！！！」

その言葉を言った瞬間、幾つもの雷を纏った魔力弾が真下に向かって打ち出される。

「ドオオオンッ！！！！」

そして、爆音を響かせ海に沈んだジュエルシールドに干渉させ強制的に暴走状態に持って行く。その数・・・六つ？

「っ！？予測してたよりも多い！」

「マズイよフェイト！！っ！？」

その瞬間、竜巻が結界内を覆った。

Side Out

Side..当麻

『起きろーーーーー！！！！』

『ーーーーーっ！？』

な、何事ー！？

「っーえーと・・・エイミイだっけ？どうした？」

いち早く思考が動き、近くで浮いている画面に目が行く。そこに映っていたのはアースラのオペレーターのエイミイが映っていた。

『どうした？じゃないよ！兎に角これ見て！！』

ようやく他の面々も目を覚まし此方を見る（大半が睡眠妨害した犯人を睨んでいるが）。そして別の画面が表示され、そこに映されていたのは・・・結界内と思わしき場所で、暴風と竜巻に放浪され身動きが取れなくなっているフェイトとアルフが居た。

「フェイトちゃん！？エ、エイミイさん！ここ何処！？」

『落ちつけ、なのは』

また別の画面が開きそこにはクロノが映っていた。・・・取り敢えず落ち着きのないなのはの頭を美琴と一緒に撫でる。とにかく今は情報だ。

「クロノ、状況の説明を頼む」

こいつが年上だと知ったのは驚きだったな。

『話が早くて助かる・・・場所は海鳴から数キロ離れた海上。彼女達は以前やった様に魔力を当ててジュエルシードを強制的に暴走状態に持っていた』

『現在暴走しているジュエルシードは六つ。これまでの情報を纏め

ると、恐らくこれで全部のジュエルシードが出揃ったはずだわ』
今度はリンディさんが現れた。

「そ、それよりも助けに行かないと!」

『その必要は無い』

「「「「え?」」」」

なのは・美琴・ユーノ・話を聞いていた氷華も戸惑いの声を上げる。

『このまま行けば彼女達は自滅する。僕達はその後で彼女たちを確保すれば良い』

「ちよつとアンタ!ジュエルシードの暴走はどうするのよ!?このまま放っておくつもり!」

その間、俺はリンディを見ていた。逆にリンディも視線なのは達を見ているが俺を見ていた・・・わざと動かそうとしてやがる。汚いな提督、流石監督汚い。

「インデックス。このままだと、どれだけ彼女達と結界は持つ?」

「・・・最低でも、半時持たないかも。結界が壊れたら、あの竜巻だと海鳴に被害が出るかも」

インデックスが、かもと言ってるが恐らく本当だろう。

「「「「っ!」」」」

その場に居た全員が息を呑む。

「行くわよ!なのは!ええい!アイツにも協力要請出してやる!」

「うん!先に行くね、美琴お姉ちゃん!行くよユーノ君!」

「分かった!今からなら飛んで行った方が早い!僕でも不可視の魔法^{イド}ぐらい使える!」

『ちよつ!君達!?なにをやっているか分かってるのか!?』

「ごちゃごちゃうっさいわね!私達は独断行動が認められてるんでしょ?!それに・・・私達の世界よ、部外者なんか任せておける訳ないじゃない!」

そう言っとなのはとユーノは空から。美琴は走りながら携帯を取り出した。

「・・・これで満足か？」

『ええ』

『艦長？』

『あああ？！ジュエルシールドの魔力値、さらに上昇！！』

ちっ！女狐が！

「さっさと索敵でも逆探知でも準備しとけ！行くぞ、インデックス！まずは、あんなふざけた幻想おもちゃぶっ壊すっ！！」

「・・・うん、やっぱ駄目だね。見捨てるなんて出来ないよ」
そして、管理局からの通信は途切れた。

「行ってらっしゃい、二人とも。・・・皆無事に帰って来てね」
タイミングよく、氷華から声をかけられた。

「うん！行って来ます！ひょうか！！」
「任せる！行ってくるな、氷華・・・あと、また歌、聞かせてくれるか？」

「うん、何時でも良いよ」
ホント良い女になるな！

Side Out

Side..フェイト

迫りくる竜巻をブリッツアクションで避けるが、移動した後も暴風の影響で体全体がフラつき体力を奪っていく。先ほど竜巻の数が増えてから暴風も勢いを増し、普通に飛ぶだけでも辛くなってきた。

「はあ、はあ、はあ、アルフ！」

「はい、よ！」

横合いからチェーンバインドが二つの竜巻を直線状になる様に縛り、私の砲撃が当たり霧散させるが。

「数が、多いッ！」

「切りがないね！魔力もやばくなってきたし！それに・・・」

その言葉に後ろを振り返る。結界を越えたさらに奥、そこには一つの街がある。あの子と幾度も戦った街。此方の世界の事なんか知らない街。

「何とか、しなくちゃっ」

「マスター!!」

「え？」

前を見た時には遅かった。既に目の前に大型の竜巻が迫っていた。

「(間に合わないッ!?)」

「フェイトオオオオオオ!!」

「ゴオオッ!!」

その瞬間、上空からピンクの閃光が竜巻を撃ち抜き霧散させる。

「え?・・・あの色、まさかっ!？」

閃光が来た方を向くと、・・・その子は居た。

「フェイトちゃん!!」

「二人とも!早くこっちに来るんだ!!そこはまだ危ない!!」

白いバリアジャケットを纏った女の子と、その肩にはフレットの使い魔(?)。自分でも限界が近いと思っていたので、一度その場から離れる・・・そして。

「バキイイン!!」

アルフが張った結界を破り―その外側にはさらに違う結界が張ってあった―二組が入って来る。一つは背に小さい竜巻を作り飛んで来る白い人と茶髪の女の子。もう一組は空中に足場を作りながら段々此方に来ている男の子と、その背中に真っ白な服の女の子。

「おしっ!間に合った!!アクセルご苦労さま!」

「それより、足場作れェ!テメェ、重てェンだよ!!」

「重いって言うな!!はいはい、ユーノ!足場作って!」

「あ、はい!」

あの子の使い魔(?)がその人達の足場―恐らくフローターフィールドだろう―を作り、足を付ける。

「よっと、これで全員集合か?」

「相変わらず無茶苦茶なんだよ」

その人達の近くに足場―此方もフローターフィールド―を作りその場に立つ人。

「でエ？アレ、どオすんだア？」

白い人の声にその場に居た全員（私とアルフも含めて）が竜巻と遂には紫電も纏い始めたジュエルシードの暴走地点を見る。

「なあ、インデックス」

「駄目だよとうま、あの竜巻は暴走の余波で生まれた唯の現象に過ぎないから、とうまの右手じゃアレは消せないよ」

「俺は出番無しですか」

「そうよ当麻！此処は私とアクセルの出番よ！」

「ンで、俺も入ってンだア？」

「何言ってるの、賭け。してたんでしょ？」

「チッ！先行くぞォ！当てんなよォ！レールガン！！」

白い人が再び背中に竜巻を発生させて飛ぶ・・・魔法じゃない？
「任っかせなさい！ユーノ！もっと近くに行くわよ！あと、鎖の準備も宜しく！」

「はい！！」

「フェイト！アタシも行ってくる！」

あっという間に四人が突っ込んで行った。

「フェイトちゃん」

「っ！な、何？」

その子は自分のデバイスを私のデバイスに当て、何かを流して来る。

「これは、魔力が・・・」

「うん！フェイトちゃん結構魔力使ってたんでしょ？だから私の魔力を分けてあげる。きっちり半分こ」

「また無茶なことやってる」

「とうまに言われたくないと思う」

周りで少し話しているが、そんな事、気にする事なんて出来なか

った。

「どうして・・・」

「ん？」

「どうして、助けてくれたの？私は、敵なんだよ？」

「ん～フェイトちゃん、取り敢えずアレ、封印するの手伝ってくれたら教えてあげる」

そう言ってその子はデバイスを構えた。

「・・・バルディッシュ」

「グレイヴフォーム」

同時にあの子と同じように構える。

「フルパワーで目標を一気に狙う」

「うん！全力全開だね！」

「Divine Buster Full Power」

「Thunder Smasher」

「行くよ！せーの！」

間近で戦っていた四人が左右に避ける。恐らく白い服のシスターが念話で連絡したんだと思う。

「「ファイア！！！！」」

二乗の閃光が残り少なかった竜巻も吹き飛ばし、ジュエルシールドを封印する。そして、結界内はさっきまでと違って青い空と穏やかな海が広がり、海上にはジュエルシールドが六つ浮かんでいた。

「フェイトちゃん、さっきの答え。私・・・友達になりたいの」

Side Out

Side…当麻

「とも、だち・・・？」

「うん、私はフェイトちゃんの友達になりたい」

目の前で二人の少女が向き合って話し合ってる。その奥の方、ジ

ユエルシード争奪戦は美琴・アクセル・アルフの三つ巴になっている。……今んとこ三人がそれぞれ一つ手にしてるって所か。あ、クロノが停止を呼びかけてが……駄目だな、そんなんじゃないっ等は止まらんぞ？

「っ！？とうま、来るよっ」

「何処からだ！？」

「……っ上から！？」

その瞬間、空が裂け雷が降って来た。周りは突然の事に止まっている……。いやっ！ユエルシードの方にも雷撃が行ってる？！広範囲か！？そして、なのは達の上にも雷撃が放たれる。

「っおおおおっ！？」

間に合わないと察し、思いっきり跳ぶ。それだけでなのは達より上に出た。そして……。

ーバチィィィィー！！

激しい音を響かせながらも雷撃は消え去った。

「とうま！」

「っ！とっ……サンキュ、インデックス！」

そのまま海に落ちる前にインデックスが再び足場を作る。

「フェイト！逃げるよ！！」

「あ……アル、フ？」

「待て！？っ！くそっ、ユエルシードが！？」

どうやらフェイト達は撤退したみたいだな。

「……どうなった？」

「あの子たちが二個、短髪が一個、白い人が一個、管理局の人が一個、遠隔転送で一個持ってかれたみたい」

「そうか……。おい！クロノ！」

「分かってる！エイミィ！」

『ごめん、直前のユエルシードの暴走した魔力が原因で捕捉出来なかった。けど、魔力パターンは入手できたから黒幕は特定できそうだよ！』

「そうか・・・わかったジュエルシードを渡してくれ。後はこっちで保管する」

「おい、良いのかア渡しちまって？」

アクセルが聞いて来る。

「つて！お前なあ、話しただろーが？」

「会うのはア初めてだ」

「そうだな、そもそも君は誰なんだ？！公務執行妨害で逮捕しても良いか？！散々邪魔してきたんだが！！」

「ああア？やってみろよ！糞ガキィ！」

駄目だこりゃ。

「あー・・・リンディさーん？」

『あら、どうしたの？』

「彼、引き取ってください。つーか見てたでしょ？アンタ」

『まったく。クロノ！早く戻りなさい！』

「す、すみません！今から帰艦します！」

やっと帰ったか。

「で、そちらさんは、これからどうするんです？」

『そうね、まずは情報ね・・・あなたは彼らがまだジュエルシードを狙ってると思う？』

「あれだけで満足できない、もしくはまだ必要なら数日中に行動に出ると思う」

「多分、来るよ。あれだけの魔力を保有してるなら一個でも十分だもん、けどあの子たちは執拗に求めてる」

「と言う事は、まだ終わって無いってことか」

『そうなるわね・・・私達はこれからこの世界近辺の搜索と、情報を集めるわ。あなた達も今日は解散して。何か分かったら此方から連絡するわ』

取り敢えず言っておこう。

「平日は音声だけの通信にしてください」

『大変ね学生も。ではまた』

通信が途切れた。そう言うならまともな面子揃えろよな！

「終わった？」

「ああ、お疲れさん美琴、それにアクセルも」

「ふん・・それよりも、これで全部なら賭けはどオなった？」
すっかり忘れてた。

「・・・なのはチームは？」

「えっと、フェイトちゃんとの戦いで取られた分は？」

「無効で良い」

「じゃあ六個」

「俺はア三つだ」

「・・インデックスサン？」

「二つだよ、とうま」

「・・不幸だー」

「罰ゲーム決定な」

「「勝ったー！！」」

「せめて、この事件が終わるまで待って下さい！？」

——この後数時間かけて了承してもらった

嵐の海（後書き）

——それぞれの思惑

——激突する忠義の狼と狂気の科学者

——将来を夢見る（妄想する）ツンデレ少女

次回「一時の日常」

——変貌していく翠屋の将来は！

日常と非日常（前書き）

指摘が無いのは良いのか悪いのかそれが問題だ（．．．；）

日常と非日常

Side…フェイト

——昼を過ぎ、学校では五時限目が始まる頃

「行くよー！フェイトー！」

「あ・うん、大丈夫」

青い髪の人に教えてもらった、おいしい洋菓子店のお土産を持ってマンションの屋上にでる。途中でこのマンションを管理しているシスターの人にも挨拶する。あの人は見た目は怖いけど、最初の頃は結構お世話になったので実は優しい人なんだと知った。

「バルディッツシュ、スタンバイモード」

「Yes, sir」

バリアジャケットは纏わずに通常展開する。

「開け、いざないの扉。時の庭園、テスタロッサの主のもとへ」

「座標軸設定、転移術式展開・・・オルググリーン」

「転移」

光が溢れ、数秒後には数週間振りに家に着く。

「・・・ただいま」

「さて、さっさとあの鬼婆に挨拶してゆっくりしよう」

「そうだね、でもアルフ。お母さんをそんな風に言っちゃ可哀想だよ」

アルフにそう言ったら不貞腐れた。

「フェイトー、アタシはここで待ってるから行って来な」

「?じゃあ、行って来るね」

そう言ってアルフと分かれ母さんに会いに行った。

「母さんと会えるのも久しぶり、かな・・・『今度来る時はジュエルシードを集めるまで帰って来るな!』なんて言うんだもん。あの時はびっくりしたな」

独り言を言いながらも足取りは軽く、一つの扉の前に立つ。ここ

を開ければ母プレシア・テストロッサに会える。

「（・・・お土産のケーキ食べてくれるかな？ いや、それよりもまずは、ただいまを言わないと。それとも、あの時助けてくれた事のお礼を言った方が良いかな？ けど・・・それよりも・・・）褒めて、くれるかな？」

しばらく一人で百面相した後、ようやく扉を開ける。

「ただいま戻りました。母さん」

灰色の艶が無い髪、痩せた顔と体。そして・・・笑顔？

「お帰りなさい、フェイト。ジュエルシードは手に入れたかしら？」

「・・・」

「どうしたのフェイト？」

「あっ！ は、はい！ 手に入れたんですけど、その・・・管理局の人が邪魔して結局6個しか手に入りませんでした。・・・ごめんなさい。・・・あの」

「どうしたの？ フェイト」

「何か良い事あったの？ この前と違って何か嬉しそうだよ？」

「・・・そうね、もうすぐ私の研究も最終段階に来たからかしらね」

「じゃあ！」

「・・・でもねフェイト？ 私達は合計七個しか持っていないの、これじゃあ足りないの。私の研究にはもっと必要なの、どうすれば良いと思う？ フェイト」

足りないならどうすれば良いか。そんな事分り切っていた。

「向こうから・・・奪うしか・・・でも！」

「フェイト。持って来てくれるかしら？」

プレシアの手が頬を撫でる。

「・・・はい」

フェイトの顔に影が落ちる。

「疲れている様ね、良いわ。今日は休んで行きなさい・・・ああ、バルディッシュを貸してくれるかしら？ 今までの戦いで疲労も溜まってるだろうし調整してあげるわ」

「はい・・・お休みなさい」

戦友を母親に渡し、そのまま部屋を出る・・・微かな違和感を心に残し。

Side Out

Side..当麻

「いや、すまん氷華」

「うう、は、恥ずかしくて死んじゃいます」

時刻は放課後。場所は翠屋。服装はバーテン服。そしてメイド服（つい何時からメイド服が制服の一部になった？）が数人と、結構肌の露出が多いメイド服が一人。肩が露出し、スカートはミニ、おまけにニーソも穿いて無いので白い足が見え、さらにオプシヨン装備としてウサミミも付いている。俺とペアを組んで居なかったら視線が凄いどころか、先ず更衣室から出てこない。と言うより、いくら暖房が利くとは言え春先の衣装じゃないです桃子さん。そしてよく着たな氷華。

ーカラーン

客だ、取り敢えず挨拶だな。

「いらっしやいませー・・・なんだ、浜面御一行か」

「？なんか期待外れだ、帰れて語外に聞こえるんだ・・・が・・・おい当麻。あれって風斬・・・だよな？」

それ以外に何に見える？俺には際どい衣装のウサミミメイドだ。

「あはははははっ！なんだそれ！風斬！お前凄い事になってるぞ！？」

そんなに笑ってやるな麦野。

「むむ？この際どいライン、それでいて少しも見えない・・・流石翠屋です」

絹旗、お前の中では翠屋はどんな場所になってんだ？

「がんばって、わたしはそんなエロ可愛いひょうかを応援してる」
何かあるとそのセリフ出すよな？ 後エロ言うな。

「んで？ 持ち帰りか？ それとも食ってくのか？・・・浜面？」

「・・・」

こいつ！！鼻から血が出てやがる！！？

「麦野！ 浜面が氷華に見惚れてるぞ！ どうすんだ！？」

「はああああぶうううらああああ！ ブチ殺し確定ねっ！！」

「はっ！？ ち、違うぞ麦野！ 俺はただちよつとウサミミが！ ウサミミが気になっただけなんだ！！」

アウトだ浜面、それは万死に値する。

「お客様、浜面をお持ち帰りですか？」

「ちよっ！？」

「「「お持ち帰りで！」」」

「待て待て待て待ってー！？ 待ってー！！！！！！！！！！」

ーカラーン

「その後、浜面の行方を知る者はいない。セーブオーダーロード」

「と、当麻君、わ、私着替えて来て良い？！」

「氷華・・・取り敢えず、そのモジモジした態度は非常にクルものがある」

「？」

ーカラーン

おっと、お客さんだ。

「いらっしやいませー」

「うう・・・い、いらっしやいませえ」

ちなみになのはや美琴その他は自由行動。

――まだまだ風斬氷華の試練は続く

Side Out

Side····

ガラスに指を這わせる。その中に居るのは自分にとって世界で唯一大切に愛おしい存在。

「アリシア···」

その時、後ろの方で物音がしたので振り返る。

「オイ、糞婆、それは、何だよッ」

「···あの人形は使い魔の躰も疎かにしてるのね」

「人形だって？アンタ！あの子の母親じゃないのかよ！！」

「いえ、それともリニスの教育がいき届かなかったのかしら？」

「何とか言えよ！！」

プレシアの独り言が途切れる。

「はぁ···飼いだの分際で私に意見するつもり？私が造った人形をどうしようと私の勝手でしょう？それとも···犬らしく噛みついてみる？」

「ッ鬼婆アアアアア！！！！」

その瞬間、アルフがプレシアに向かって駆け出す。

「所詮、獣ね」

「あああぁっ！！！！」

「バヂイイイ！！！！」

アルフの拳が振り抜かれた瞬間、プレシアの防御魔法が防ぐ···が。

「バキィーン！

そうなるで見越して自身の拳に貫通術式を付加していたので、数秒だけ防いだけで防御を突破し、そのままプレシアの顔面を殴る為に拳を振りかぶる。

「ズガンッ！！

「ガアアアア!!!!!!」

が、逆にアルフが吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。

「ガハアッ！（サンダー、スマッシュャー！？フェイトとは、威力が違うッ！！）」

「消えなさい」

「っ！？」

追撃で再び砲撃魔法が放たれる。

ドゴツツツツ!!!!

砲撃が当たり爆煙が着弾地点を覆う。

「・・・意外と優秀なのね、とっさに転移魔法を使ったのかーぐツ・カハアッ」

砲撃が当たった場所には瀕死どころか死体さえなかった。そして、プレシアが吐血する。

「まあ、良いわ。どうせ瀕死で、まともな座標の設定も出来なかったでしょうね・・・一人寂しく野垂れ死んでなさい」

そして、再び先ほどまで居た部屋に戻る。

「私には、時間が無い。だから・・・それまでに貴女に光をあげるわ。私の愛しい娘」

そこには一人が入る程の大きさの試験官と、その中に入っているフェイトそっくりの少女が浮いていた。

「準備を、急がないと・・・それに、管理局に対しても」

そして先程の部屋に戻るその部屋は周りには様々な道具が置いてあった。それを知る者が居ればこう言っただろう――魔術、と。

Side Out

Side..当麻

「そろそろタイムセールが始まるな」

時刻は一般家庭では夕食の準備に追われ、スーパーでは食品を求めに買い物客で賑わう頃、俺は未だに翠屋で拘束されていた。ちなみに今日は（インデックスも一緒に）高町家に招待されてるのである・・・とは言え。

「翠屋の手伝いまでされるとは思わなかった。いや、放課後暇だから翠屋に来たのが間違いだったか？・・・取り敢えずふこうだー」
ある意味口癖になりつつたセリフを棒読みで言ってみる。ちなみに氷華は既に帰り、代わりにインデックスがカウンターで日持ちしない商品を食い尽くしている。最近になって習慣になっているらしい。
「お前、そんなにいっぱい甘いもの食って夕食食えんのか？」
「大丈夫だよ、とうま！ももこの作ったお菓子もゴハンもおいしいから！」

理由になってねーよ！

ーカラーン

「っと、いらっしやいませー・・・あん？クロノか」

「ああ・・・取り敢えず席に案内してくれ。ついでに君もだ」
クロノがインデックスも指名する。

「・・・取り敢えず、注文は？」

「紅茶で。あと持ち帰りでケーキを幾つか頼む」

「あいよ」

重要な要件かな？

「ほい、紅茶な。持ち帰りのケーキは会計ついでに渡すわ」

「それで良い・・・本題に入ろう。今回の件で重要人物が一人浮かび上がった」

そう言ってクロノはデバイスから紙媒体の資料を幾つか取り出した。・・・良いなーデバイスって持ち運びに便利そうで。

「えーと・・・プレシア・テストロッサ。名前からしてフェイトっ

て子と関わりが有りそうだな」

「実際、あの時上空、いや、次元空間から撃って来た魔法の魔力パターンを解析した所、プレシア・テストロッサの魔力パターンに酷似・・・いや、一致した」

じゃあ黒幕とみて良いかもな。

「ふーん・・・後は娘が一人、名前はアリシア・・・あれ？フエイトじゃないのか？年齢も合わないし・・・しかも既に死亡？」

「ミッドの戸籍では地方に異動した後に数ヵ月後に行方知れずになっている。・・・この約十年の間に産んだのか、はたまた何処から引き取ったか」

「・・・これか、新型魔力駆動炉の実験の事故の責任。・・・これ事故後に裁判沙汰になってる。なあ、次元世界の裁判って数日で行われるものなのか？」

「いくら発展してるとは言え、そこまで早くは出来ない。問題はその裁判直前でプレシア・テストロッサが告訴を取り消して、彼女の口座に多額の賠償金が入札されてる事だ。しかも、その後に出された企業側の報告が『先の新型魔力駆動炉の実験の失敗は、責任者であるプレシア・テストロッサが違法な手段で違法エネルギーを用いた事で引き起こされた。彼女は周囲の安全よりもプロジェクトの成功を優先させたためである』と言って来たそうだ」

うわー、思いつきり隠蔽じゃねえか。

「で、どうするの？」

横からインデックスが話しかける。どうやら（夕食前なのに）間食は終わったらしい。

「そこでだ、ジュエルシードは全て回収した。この後、向こうはどうすると思う？」

「さらにジュエルシードが欲しいなら、必ず向こうから勝負に出てくるな」

「・・・多分またあの子が出てくると思う」

インデックスが続けて言う。

「そうだろうな。その勝負にあえて乗る。その際にジュエルシードを敢えて外に出して置く。その為に・・・そっちの子に協力して欲しい」

そう言って、クロノはインデックスを見る。俺もインデックスを見る。

「良いよ」

「良いのか？インデックス」

「心配？」

「そりゃ、な」

「大丈夫だよ、とうま。私のバリアジャケットは十万三千冊以上の魔道書を守るために幾つかの魔術理論も取り入れて、魔術・魔法に對して頑丈に作ってるもん。なのはの最大砲撃にだって耐えられるよ？」

「その基準が俺には分からないッ!？」

むしろなのはの最大砲撃って何?! 何処まで強いのか?!・・・まあ、任せていいんだよ、な?

「そう言う事で頼んだ、いま此方でも準備を進めている所だ。後コレも」

そう言ってクロノはジュエルシードを取り出した・・・その数14個。それをインデックスに渡した後、話は終わったと言わんばかりに会計のレジに歩いて行った。

「でも・・・」

しばらくゆっくりしていると、インデックスが口を開く。

「ん？」

「心配してくれるのは・・・嬉しいな」

「・・・そろそろ上がるから高町家に行こうぜ、なのはが愚図る」

「とうま、顔赤いよ？」

うっせー!! 狙ってやってんのか?!

Side Out

S i d e…アリサ

一台の高級車が道路を走る。その中に居るのは、なのはの友人の一人アリサ・バニングス。彼女は窓の外を見ながら考え事をしていた。

「・・・最近、なのはとすずかと遊んでないわね・・・いや、それは分かっているわよ？私はバニングスグループの一人娘だから習い事なんか一杯あるし、けど、なんであんなに夫婦仲が良いのに子共が私しか居ないのかしら？・・・将来、か・・・」

ふと、その言葉に思い浮かぶ光景があった。

——友人である少女の親が経営する喫茶店で働くツンツン頭の男性マスター

——今よりも茶色の髪が長くスタイルの良い女性ウェイトレス（モデル…その子の母親）

——親友がそのまま成長した女性パティシエ（モデル…やっぱりその子の母親）

——知り合いの先輩が成長した女性ウェイトレス（何故か胸の辺りが大きくなってる）

——そして・・・経理を手伝っている金髪のセミロングの女性（どこかツンデレ少女の面影がある）

「つて！無いわ！無いったら無いのよ！！わ、私が、あ、ああアイツの事をッ！？す、すす好きだなんてッ！何かの間違いよ！？」

百面相なお嬢様を、執事の男性は車を運転しながら微笑ましく思っていた。そのお嬢様、アリサはふと窓の外を見て・・・ソレを見つけた。

「っ！鮫島！車止めて！早く！！」

「はっ！」

直ぐに減速し側道に寄せる手並みは、最早プロのドライバーである。しかし、車が完全に止まる前にアリサはドアを開け外に出る。

直ぐさま鮫島もアリサを追いかける。

「酷いッ」

「・・・傷の具合から察するに、単に動物同士の争いと言う訳でもなさそうです」

「鮫島。この子を連れて帰るわ、車に乗せて」

「はっ」

アリサの我が儘や突発的な行動は日常茶飯事なのか、直ぐに自身の服が汚れるのも構わずに車に運ぶ。

「大丈夫よ、直ぐに怪我也治してあげるから」

アリサは撫でながら話しかける。それはオレンジと毛並みと首周риだけ赤色の毛並みの大型犬。プレシアによってボロボロに負かされたアルフだった。

「（フェイト？・・・違う、この子は・・・あの時、あの子と一緒に居た子・・・・・・フェ、イトオ・・・）」

手の平の感触にアルフは意識を取り戻すが、体の痛みから直ぐに気を失ってしまう。

日常と非日常（後書き）

——傷を負った狼が出会ったのは白き少女

——再び激突するのはとフェイト

——見守る当麻と美琴

次回「海上決戦」

——謎に包まれた「ブラックなのは」の出番はあるのか！

海上決戦

Side…当麻

『起きろー起きてー起きて下さいー！まずはその眠気を吹き飛ばす！』

何時もと違う目覚ましの音で目を覚ます。俺が昔なのはに頼まれてノリと勢いと涙目上目使いに敗北した結果吹き込んだ目覚まし音である。

「つーか自分の声で起されるって朝から微妙な気分になせられる」

「貴重な体験ですね当麻さん」

「……なあ、ユーノ。お前って人間なのに獣扱いされてね？」

「……言わないで下さい。自分でも内心複雑な気分なんですから」

朝から男二人（正確には一人と一匹）で落ち込む。昨日は高町家に招待されそのまま泊まった。寢床は高町夫妻に半強制でなのは部屋にインデックス共に押し込まれた……お二人とも、その笑顔は脅迫つつーんだよ！それに、温泉旅行以来なのはも美琴も氷華も遠慮が無くなっている様で困る。

「取り敢えず……二人を起すか」

俺の目覚まし声が鳴り響く中、未だに眠り続ける二人を起しにかかる。

Side Out

Side…なのは

——昼休み

何時も通りに登校し、普通に授業を受け。久しぶりにアリサちゃん、すずかちゃん、とまりちゃん、はずみちゃんと昼食をとる。ちなみに場所は屋上。

「なんか久しぶり、ってとまりは言ってみる」

「最近はずみ達の影が薄くなった気がします、とはずみは愚痴ってみます」

急に二人がしゃべり出した。そう言えば学校も偶に遅れて来たり、放課後もアクセルさんと一緒に行動してたの。

「?・・そう言えばあんた達と一緒に弁当食べるのも久しぶりよね」

「二人ともアクセルさんにベツタリだもね。何か進展した?」

すずかちゃんが詰め寄る。私も気になってるので視線で訴える。

「はずみ最近どうだった?ってとまりははずみに聞いてみる」

「・・最近はやてが怪しいのですがどう思います?とはずみはとまりに聞いてみます」

「だよね!やっぱり当麻にいの変な体質でも移ったのかな?てとまりは発言してみる・・どうすれば良いと思う?てとまりははずかとアリサに提案してみる」

その一言でその場にいた全員が私の方に向く。・・私?

「やっぱり所有者が誰かハッキリするべきじゃない?ほら、麦野さんとか」

「んゝ私はやっぱり、なのはちゃんみたいに周りをガードして牽制するのが良いんじゃない?」

「でもでも!あの人は当麻にみたいに近い近寄らせてくれないし、隙も無いんだもん!てとまりは訴えてみる!」

「それに所有者宣言に対してはあの人は反骨心だけは一人前です、とはずみは発言します」

そう言えば何となく一匹狼って感じがするの。

「ねえ、この話は今日の放課後私の家でしない?」

「んゝ良いよ!てとまりは即答してみる!」

「あの人を虜に出来る意見が出るならば構いません、とはずみは大胆発言をしてみます」

「私も良いよ。なのはちゃんは?」

「私?私も良いよ」

良いよ、ね？フェイトちゃんの方も動きが無いし。

「決まりね！私も皆に見せたい子が居るのよ！」

「あれ？アリサちゃんまた新しい子拾ったの？」

「すぐかちゃんがそう言うのと、アリサちゃんが携帯の画面を見せてくれた。って！この子！？」

「へっほー！とまりだよー！ねーなのは、この写真の子って確か」
「確か前に戦いましたね、どっかの小動物が、とほずみは確認してみます」

二人から念話が届く。と言うより二人とも念話出来るようになったんだ。

「うん、アルフさん、だと思う。でも怪我してる？」

「で、なのは？」

「行く！」

「取り敢えず確認しないと！」

Side Out

Side…当麻

携帯閉じる。なのはからの連絡で、アルフらしき動物がアリサに保護されてるらしく放課後アリサの家に行くらしい。とは言っても俺が行くのは不自然過ぎるので、アースラを介して会話を伝えてくれる事になった。

「カミやくん、嫁はんからの連絡はなんだったんですー？」

「いや！最近連れてる銀髪シスターさんと見たにゃー」

「じゃあ俺は高町からで・・・真相は？」

青髪とシスコン軍曹とバニー教がなにやら賭けをしているみたいなので。

「桃子さんからだ、なんか今日も来るよう言われた」

さらっと嘘をついてみる。まあ、間違っではないない。どの道翠屋

に行く予定だし。

「にゃーまた翠屋か」

「あの人、本気で前を後取りにしようとしてねーか？」

「言うな！」

取り柄えず、インデックス・・・は翠屋に居るだろうな。美琴はどの道ついて来るだろう、アクセルは・・・来るのか？ユーノは・・・なのはが連れてくдар、回復魔法使えるみたいだし。

「やな予感がする・・・遂に不幸を超越したか？」

「カミヤん、医者に行く事をお勧めするぜい」

「カミヤんも遂にバカの領域に來たんやな」

「デメェらに言われたくねー！シスコンに二次元趣味が？！」

「だ、誰がシスコンだにゃー！！」

「ふ、ふふふ！カミヤんにアニメ、ゲーム、マンガ、フィギュアの神々しさを教えてあげるで！！！」

上条組名物『殴り合いという名の意見のぶつかり合い』が勃発、ルールは簡単。戦闘不能になるまでに自らの意見を変えなかったら勝ち。ちなみに能力はコッソリ使うのが暗黙ルール。

「・・・お前ら揃いも揃ってバカだろうが」

「「「バニー教は黙ってる！！」」」

「上等だあ！変人共おお！！」

——この後、昼休みが終わるまで殴り合っていた

Side Out

Side..なのは

放課後。急いで家に帰り、ユーノ君を連れてアリサちゃんの家に向かう。道中に事情を説明し、インデックスさんに確認してみると。既に翠屋で皆集まってるらしい・・・皆早いのだ。

「いらっしゃい！なのは。他はもう來てるわよ」

「お邪魔します・・・アリサちゃん、拾ったって言う子見て良
い？」

「どうしたのよ？」

「あ、えーと、知り合いの人が飼ってたワンちゃんに似てたから確
認してみたいの」

嘘は言っていないの。

「そう？　そう言えば、双子もあの子の近くから離れないのよ」

あの二人はアリサちゃんの家だと勝手に寛ぐから、多分何時もの
事だと思ってるんだと思う。そして、一つの部屋に通される。そこ
には、とまりちゃんとはずみちゃんが居てその前にある檻には額に
宝石が付いている一匹の動物が居た。その動物が私をみた瞬間、頭
に念話が届く。

〈アンタ・・・〉

へやっぱりアルフさんだったんだ。少し待って

何か言いたそうだったけど、少し待ってもらおう。

「アリサちゃん、やっぱりこの子、知り合いの子みたい。私その子
に連絡するから、先に行つてて！」

「あ、うん。場所は・・・分かるか。そこの二人が私より詳しいも
んね」

「あ、あははは」

笑うしかないの。・・・二人とも私が知らない時に何やったの？
そしてアリサちゃんは部屋から出ていった。それと同時にユーノ君
が回復魔法を掛け始める。

「・・・アルフさん、どうして・・・」

「どうして、そんなにボロボロなのか、かい？」

言いたかった事を先に言われ頷いた。

「管理局の連中は・・・」

「それは・・・」

『聞いている。改めて名乗ろう、時空管理局執務官クロノ・ハラオ
ウんだ』

行き成り空中に画面が現れ、クロノくんが答える・・・さつきから皆に口を挟まれるの。

「あんた等に聞きたい・・・フェイトを、ウチの御主人を助けてくれるかい？」

『まずは話してくれ、でなければ何一つ分からない。話してくれるなら出来る限りの擁護はしよう』

「アルフさん、私はフェイトちゃんが困ってるなら助けてあげたいの。だからお願い！何があったの！フェイトちゃんは！？」

アルフさんはしばらく顔を伏せた後しゃべりだした。

「・・・お願いだ・・・フェイトを、助けてっ！」

「（・・・多分この一言で当麻くんが動くの）」

それからクロノくんがこっちの考えた作戦を教えてくれた。

「何時の間に？」

『昨日の内に上条当麻とインデックスには伝えたんだが・・・聞いて無いのか？』

即座に携帯を取り出しコール。

「当麻くん、あとでお話しの」

『待ってッ！話を聞いて下さいませ！！なのは様！』

「うん、分かった。だから後でOHANASIしよう？」

『ちよっ！？なんかさつきと違っ（プツッ——）』

言いたい事は言ったと言わんばかりに通話を切る。

「ご愁傷様、当麻にい、てとまりは手を合わせてみる」

「あなたの事は忘れません、とはずみは過去を振り返らない事にしました」

「二人とも・・・少し、酷いの・・・二人も私とお話しようか？」

「ぜ！全力でアリサの所に行くよ！ってとまりははずみについて居ねええええ？！」

二人とも足が速いな。

『決行は明日の早朝。場所は・・・海上の方が良いだろう。そこに大規模結界を張っておく・・・アルフと言ったか』

「わ、分かってる！フェイトと連絡が付いたら言っておくよ！！」
あ、そうだ。

「アルフさん。フェイトちゃんに、これが最後かもしれないから全力で行くよって伝えといてくれます？」

「わわわ分かった！しししっかり伝えておくよ！！」

アルフさんが挙動不審なの。どうしたんだろ？

「ユーノ君はどうする？私はアリサちゃん所に行くけど？」

「ぼ、僕はアルフの治療を続けてるよ！ま、まだ傷は塞がって無いんだッ」

『・・・そう言う訳で、頼むぞ。なのは、今回の作戦で一番の要は君だ』

「・・・うん。分かってる」

そう言って通信は切れた。・・・さて、二人とお話ししてこなくちゃ。

――翌日、早朝

朝霧に包まれた街を5人で歩く。今居るのは私・当麻くん・美琴お姉ちゃん・ユーノくん・当麻くん。背負われてるインデックスさん。とまりちゃんとはずみちゃんは、アクセルさんが来ないため不参加。

「待たせたね・・・アンタ、なんかつやつやしてないかい？」

海岸を目指して歩いていると、塀の上からアルフさんが話しかけてきた。

「んふふ♪何でも無いの！それよりアルフさん、フェイトちゃんとは？」

「大丈夫、昨日の内に連絡は付いたよ・・・それより何があったんだい？」

アルフさんが当麻くんに尋ねる。

「ん？いや、今日の為にコンディションを整える為に、昨日なのは

の我が儘をたっぷり聞いたらああなった」

「・・・具体的に言うത്？」

アルフさんがさらに聞いて来る。

「将来見たら黒歴史だな・・・あとで家人中、片づけねーと」

「魔法を覚えた分、過去最大で凄かったわね」

「所詮、私知ってるのは十万三千冊以上の魔道書だけ、それ以外は知らなかったんだね」

「ブ、ブラックなのは僕には早すぎたッ！」

「結局何があったのさ!？」

黙秘権を行使するにや。

そう言ってる間に海岸沿いに着く・・・そして、知り合いが一人いた。

「アクセルさん？」

それは来ないと言ったはずのアクセルさんだった。手に持つてるのはコンビニの缶コーヒー？

「アンタ来ないんじゃないの？」

「アホが、俺が来るついたらあの双子も付いてくんだろオが」

「お前・・・」

「それに、途中で投げ出すのはア趣味じゃねエ」

「・・・まあいっか。なのは、思いつきぶつかってこい！」

「頑張りなさい！なのは」

「なのは！頑張って！」

「・・・当麻くん、美琴お姉ちゃん、ユーノくん・・・行って来ます」

ユーノくんが当麻くん達と一緒にアースラへ転移する。ちなみに当麻くんは普通の転移は出来ないの、結界で上下四方を隔離して結界ごと転移する通称『宅急便方式』で転移している。

「さてと・・・エイミィさん！」

『はいよー！そこから少し先の海上に結界を広範囲で二重展開してあるよ、戦闘フィールド内に障害物としてレイヤー障害物を配置・

・障害物は海鳴市内を参考で良いんだよね?』

「うん・・・あの時の決着、ついてなかったから」

すぐにバリアジャケットを纏って飛び、結界内に入る。その中は海鳴市がそのまま水浸しになった様な光景だった・・・やっぱり技術力が凄い。私は飛び一つのビルの屋上に降り、アルフさんとインデックスさんは離れたビルの屋上に降りた。

「・・・ここなら、良いよね・・・出て来てよ、フェイトちゃん」

後ろにあった貯水タンクの上に一人の少女が降りて来た。

「フェイトちゃん・・・」

「フェイト!もう止めよう!あんな女なんかに着いて行っちゃ駄目だよ!このままじゃフェイトが!」

アルフさんがフェイトちゃんに向かって叫ぶ。

「アルフ・・・それでも私は・・・あの人が私のお母さんで、私はあの人の・・・プレシア・テストロッサの娘だからッ」

フェイトちゃんはバルディッシュを構える。私もレイジングハートを手を持つ。

「そうだね、フェイトちゃんは止まらない、だから私が止めるしかない。・・・お互い、全てを賭けよう!切欠はジュエルシード、なら終わらせるために必要なのもジュエルシード!」

レイジングハートから全てのジュエルシードが出る。それが全てインデックスさん達の元へ向かう。

これが私達の作戦。こちらのジュエルシード全てを囷として外に配置して相手を誘い、その間に私の我が儘としてファイトちゃんと決着を付ける。

「私達はまだ何も始めてない。だから!これで終わらせて、それから始めよう!フェイトちゃん!」

「バルディッシュ!」

「サイスフォーム」

その瞬間、フェイトちゃんが切り掛かって来た。

Side Out

Side…当麻

「始まったね」

「ああ・・・エイミィ、ジュエルシードの様子は？」

「今の所動きは無いよ。向こうも様子見って事かな」

「では此方も準備しましょう。武装隊には何時でも動けるように指示を」

管理局組が何か忙しそうだが俺達はモニターを見ている。

「心配かしら？」

リンディさんが近くにやって来てそう言った。

「そりゃ、な」

モニターを見る。その中では今もなのはとフェイトが戦っている。一人は母の為、もう一人はその少女をこれ以上誤った道に行かせない為。

「当麻さん・・・その」

「・・・分かってるさ、この中で唯一あの子を止められるのも、受け止める事が出来るのも、なのはだけって事ぐらい」

それは初めて会った時から決まっていた事なんだろう。美琴が俺に信頼を寄せる様に、アクセルが俺を戦うに値する敵と認識するように、出会った瞬間に決まった運命。

「ままならないな、『世界』って奴は」

「そんなもの当たり前の事だ。・・・それでも僕らはその世界で生きてるんだ、違うか？」

クロノが話しかけてきた。モニターの中は海上から上空へと移行していた。

「違うないさ。だからこそ、見届ける」

既に上空から、ビル街で撃ち合いに移行していた。

「終わりが近けェな」

アクセルの響きと同時に両者が砲撃を放った。
Side Out

Side…なのは

「ディバインバスター!!!!」

「サンダースマッシャー!!!!」

「「ファイアー!!!!」」

両者のデバイスからピンクと金色の砲撃が放たれ。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

「（ッ接近戦で来る!）レイジン（―バチィッ）!?!」

今までのパターンから接近戦で詰めて来ると読んだなのはが、移動するよりも前に腕を雷を纏ったリング状の物体が動きを封じる。

「バインド!?!何時の間に?!」

―バチィッ!バチィッ!バチィッ!!

次の瞬間、残りの四肢も封じられる。

「アレはっ!ライト二ングバインド!フェイトは決める気だ!」

アルフの叫び声が聞こえる。視線をフェイトの方に向けると先ほどよりも離れた位置に居た。いや、恐らく攻撃の余波が届かない位置に移動したんだ。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神」

その証拠に詠唱が続くにつれ、フェイトの周り数十メートルの範囲に光球が幾つも現れている。

「今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

「フォトンランサー・フアランクスシフト」

「レイジングハート!!! 全面に集中!!!」

「サークルプロテクション!」

なのはの前に半球状の防御魔法が展開する。

「撃ち碎け!!!!!!」

「Fire」

トリガーが引かれ、無数の雷撃の弾丸が直撃し爆発する。

「これでッ!」

爆発が続く中、最後に幾つかの魔力弾を一つにし雷撃の槍を放つ。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

未だに爆煙が立ち込めている地点を見る。

「(あの瞬間、確か防御魔法を使用した・・・でも、あの数を当てれば幾らなんでも防げない、バインドもあの短時間じゃ解けないはず。海に墜ちては無い、けど、ダメージはかなりあるはず)・・・勝てる、勝って母さんの所に戻るッ」

「ディバインバスター!!!!!!」

自身の勝ちを確信するフェイト。だが次の瞬間、爆煙の中から砲撃が撃たれる。

「っ!?!」

「ディフィンサー」

ーゴツツツツ!!!!!!

それをとっさの判断でデバイスが防御魔法を発動し、防ぐ。

「くうッ! (砲撃!?! でもこれ位ならッ! これを防ぎきれば!?!)」

そして砲撃が途切れる。込められた魔力が強かったのか、フェイトのバリアジャケットは所々ボロボロになっていた。

「ハアッ! ハアッ! ツあの子は?!」

砲撃によって爆煙も吹き飛んだので相手の状態を確認しようと見るが。

「居ない?」

「上ですマスター！」

「っ!？」

バルディッシュの声で慌てて上を、上空を見る。所々ボロボロのバリアジャケットを纏い、何時ものツインテールも片方が解けているが確かに健在だった。

「ファイトちゃん!今度はこっちの番!!やるよ!レイジングハート!!」

「Starlight Breaker」

術式が彼女を中心とした円を術式が描き・・・戦場となった結果の中に無数の光が術式に集まる。

「何を・・・?これっ」

その光が集まり次第にその大きさを増していく。

「集束、魔法・・・」

「マスター!回避を!!」

ーバチンッ!

バルディッシュが警告を発するが、それよりも早くフェイトの四肢を光の輪が拘束する。

「っ!?!バインド?!何時の間に!?!・・・あの時の砲撃!?!」

一瞬の内に思考し先程の砲撃の際に仕掛けられたと判断する。

「これが私の全てを込めた一撃!!」

「集束率90・・・93・・・95・・・98・・・100%突破。標的フェイト・テストロッサ。発射軸固定、何時でもどうぞ」

「全力!全開!!スターライト・ブレイカー!!!!!!」

トリガーボイスと共に直径20メートルまで集束された魔力が撃ち出される。

「バルディッシュ!!」

「ディフィンサー五重展開」

フェイトも魔力を振り絞り防御魔法を多重に展開するが、数秒と持たずに突破されていく。そして……。

「母さん……」

光の奔流に呑み込まれる。

おまけ

——戦闘直後の感想

「なんてバカ魔力だ」

「うわゝあの子トラウマにならないかな？」

「やっぱりスカウトしてみようかしら？」

「さすが私達の妹ね！」

「やっぱりなのはも戦闘民族高町家の一人か」

「それよりアルフとインデックスさん大丈夫なんですか？」

エイミィがインデックスに連絡をとる。戦闘の影響でデバイスを介して通信するらしい。

『わわっ！？こ、こっちらインデックスだよ！？要件のある方はこの後メッセージをどうぞ！』

「いや、お前が普通に出てるだろう」

『あ、その声、とうま？』

「おう、そっちは大丈夫か？確か前になのはの最大砲撃にも耐えられるって言ってたけど」

『とうま、砲撃と集束魔法は別物だよ？』

「……大丈夫なのか？」

『防御魔法張ったから大丈夫。と言うよりも、アレは私のバリアジヤケットでも直撃は耐えられないかも。むしろアレを耐えきるとしたらもう法王級の絶対防御結界『歩く教会』辺りか、とうまの右手

ぐらいしか思い浮かばないかも』

「よく分かんが、いま俺を化け物扱いしただろ？」

『・・・』

沈黙は時として肯定を表すんだってさ！！

海上決戦（後書き）

——少女達の戦いが終わるとき、大魔導師の実験が始まる

——求めたのは死した娘の存在

——金色の少女が崩れ落ちる時、全ては揃う

次回「大魔導師の魔術（前編）」

——目的の為なら、全てを踏み躪る覚悟がある

大魔導師の魔術（前編）（前書き）

アンケートをそろそろ締め切りたいと思います。
参加してくださった方々、貴重な意見ありがとうございます！

大魔導師の魔術（前編）

S i d e ..なのは

ブツ放した集束魔法は桁違いの威力に周りのビルも吹き飛ばし、海に着弾し津波を発生させ、さらに爆発の威力で残ったビルも吹き飛ばし薙ぎ倒していく。

「・・・や、やり過ぎちゃった?」

「問題ありませんマスター。非殺傷です」

「へなのは!やり過ぎだよ!」

「アンタ!本当に魔法使いになって1ヶ月そこらなのかい!」

なのはの呟きに境界内にいたインデックスとアルフから苦情が来る。

「ご、ごめんなさいー!ー!!ってフェイトちゃんは?!」

「目標を捕捉・・・海面、着弾地点です」

レイジングハートの返答に改めてスターライトブレイカーの着弾地点を見ると、丁度、海を漂っているフェイトを見つける。バリアジャケットは既に解かれ私服に戻り、バルディッシュも重さを考慮して既に待機モードになっていた為、海面に浮いていた。おそらく魔力ダメージによるブラックアウトだろう。

「フェイトちゃん!」

慌てて飛んで行き、近くの瓦礫の上に引き上げる。

「うっ・・・ここ」

「フェイトちゃん!?よかった!気がついた!」

「・・・そっか、負けちゃったんだ」

しばらく呆けていた後、先ほどの戦闘を思い出したようだ。

「バルディッシュ」

「Yes sir, Barrier jacket setup」

何時もの黒いバリアジャケットを纏い、ボロボロのデバイスを持って宙に浮く。その姿は行き場を失った様に儚かった。

「フェイトちゃん・・・」

「へなのは！来るよ！！」

「え？」

その瞬間、前と同じ様に上空から雷撃が襲ってくる・・・フェイトの上に。

「――っあああああああ！！！！」

「フェイトちゃん！――っ！！」

激痛に叫ぶフェイト。それを助けようとするのは。しかし、それを妨げる様に広範囲・無差別に雷撃が降り注ぐ。それは、インデックスが居たビルにも直撃する。

「っ！インデックスさん！アルフさん！」

「マスター！」

「っ！？」

回避に専念して数秒後、攻撃が止む。

「――っ、エイミィさん！」

虚空に向け声を掛ける、返答は数秒も立たずに返って来た。

『六個ほど奪われたが相手の根城は掴めた』

『今から回収するね、それと・・・下に居る子も、ね』

「え？」

エイミィに言われ下を見る。そこには先程の攻撃によって、再び気を失ったフェイトが居た。

――次元空間・アースラ艦橋

「武装隊各員。プレシア・テストロッサの居城に転移完了」

「生体反応一人確認。魔力反応・・・ありません。各員は速やかにプレシア・テストロッサの捕縛を！」

オペレーターの指示が飛ぶアースラの艦橋に、先ほど目を覚まし病院服の様な物に着替え手錠を嵌めたフェイトとなのは、インデックス、アルフはやって来た。

「頑張ったな、なのは」

「お疲れ様なのは」

「当麻くん、美琴お姉ちゃん・・・うん！勝ったよ」

劳いの声を掛けられ、二人に頭を撫でられる・・・フェイトちゃんには悪いと思ったが、自分にとって至福の一時である。

「御苦労さま、なのはさん。それと、始めましてフェイトさん。時空管理局提督リンディ・ハラウンです、よろしくね」

リンディさんが話しかけてきた。そして、フェイトちゃんにも自己紹介をする。声を掛けられたフェイトちゃんはさっきから変わらず無表情だった。

へなのはさん、フェイトさんを別室へ。これから彼女の母親を逮捕するわ・・・彼女には、辛い場面になると思うから」

へあ、はい」

「武装隊、玉座の間に入ります！」

なのはがフェイトを別室に案内するよりも早く、オペレーターの一人が状況を伝える。

「母、さん・・・」

正面のモニターに一人の女性が映る。その女性を見て今まで無表情だったフェイトが声を出す。それに釣られて当麻達が目を向ける。

「あの人が、フェイトちゃんのお母さん？」

「「なんてエロイ恰好！」」

当麻くんと美琴お姉ちゃんの声がハモった。本当にシリアスに向いていない面子である。

「にゃー！？当麻くんは見ちゃ駄目！！」

取り敢えず当麻くんの目を背後から塞ぐ。えっちいのはいけませんん。

「おわっ！？前が見えなくなった！？そして微かにシャンプーの匂いがする！」

えっちいのはいけません（例外を除く）。

『私のアリシアに近づかないで！』

『があああああああつ!!!』

『っ!』

「「え?」」

「いけない! 武装隊を直ぐに戻して! 同時に救護班へ通達!」

モニターから叫び声が聞こえ手を離す、周りからも息を呑む音が聞こえた。そして、私はソレを見た。液体が満たされた大きい試験官の中に浮いている、フェイトちゃんそっくりの女の子を。

「フェイト、ちゃん?」

「アリ、シア?」

「プレシア・テストロッサには一人の娘が居たのは知ってるよね?」

エイミイさんが話し始める。それは教えてもらったから知ってる・

・確かアリシアさん。でも、その子は死んだって。

「プレシア・テストロッサは事故の後、地方に異動させられ、そこで魔法生物。取り分け使い魔の研究をしていたみたいなの・・・でも、実際は違った。そこで研究していたのは使い魔を越える生物の研究じゃなく、クローンの研究だったの」

『あら、よく調べられたわね。異動後はそれほど情報のやり取りはしてないのに』

エイミイさんが話し、フェイトちゃんのお母さんがそれを肯定する・・・フェイトちゃんの方を向かずアリシアさんが入ったガラスに指を這わせながら。

「クロノ・・・知ってたのか?」

「ああ、調べて分かった事なんだが、その研究・・・と言うよりプロジェクトの名前が『プロジェクトF・A・T・E』」

『そう、その使えない人形の名前よ』

「人、形・・・?」

『せっかくアリシアの記憶をあげたのに、性格も、仕草も、利き腕もまったく違う物が出来るなんて』

「当たり前だろーが! 世の中に同じ人間なんていねーよ! 双子として生まれたってそれぞれに個性があるだろうが!」

『ええ、駄目だったわね。・・・だから要らないわそんな模造品』
「なッ!？」

当麻くんが反論するが、フェイトちゃんへの暴言は止まらない。

「じゃあ、あの時、笑っていたのは・・・？」

『決まってるでしょう？フェイト・・・貴女と言う人形遊びをようやく止められるからよ!!』

「っ！」

フェイトちゃんが体中を強張らせる。

『アリシアは普段は大人しく礼儀正しいけど我が儘も言う、休日と一緒に過ごす時はもっと可愛らしく笑ってくれたし、家事も手伝ってくれる。なによりッ、貴女みたいに暗い性格じゃない!』

「やめて」

「この糞婆あ!!」

『良い事教えてあげる、私が何時も何時も何時も思ってた事よ?』

「もうやめて!」

「止めなさい!それ以上は!!」

私と美琴お姉ちゃんの制止の言葉も空しくプレシア・テストロッサは言いきった。

『貴女^{模造品}なんか生まれてこない方が良かったのよ!!』

“フェイト・テストロッサ”を壊す^{一撃}言葉を。

「っ——」

フェイトが崩れ落ちる。

「フェイトちゃん!」

「フェイト!」

「しっかりしなさい!!」

幾ら呼びかけても壊れた玩具の様に反応しない。

『アハハハハハハハハハハハハハハハ!!!!さあ!始めましょう!!』

そう言ってプレシアさんは8つのジュエルシードを床と天井の四

方へ飛ばす。

「っ！時の庭園内部からジュエルシールド反応確認！数9個！それと同時に無数の魔力反応確認！これは・・・傀儡兵！？総数200を突破！？うそっ！まだ増える！？」

「まさか！ジュエルシールドで傀儡兵の複製をしてるのか！？」

「そんなこと出来るのかよ！？」

「可能だ、要は魔力で作られた分身の様な物だろう、何処かに装置があるはずだ！エイミィ！ゲートを開いてくれ！僕が出る！」

クロノくんが出ていった後、再びプレシアが動く。

『さて、私の実験はこれからよ・・・マイスター権限により緊急プログラム作動』

『緊急プログラム作動』

「「くっ！？」」

「「きゃっ！？」」

プレシアが呟くとバルディッシュが起動し、ジュエルシールドを一つ排出する。そのジュエルシールドから魔力が放出され、全員が身動きを取れなくなる。

「させるか！」

『ジュエルシールドを強制発動・・・座標固定。転移』

当麻くんがジュエルシールドを掴むが、それよりも早くフェイトちゃんが強制的に転移される。場所はモニターの中、プレシアの上。

「っ、くそ！何をする気だ！！」

当麻くんが聞こうとするが、モニターの中ではプレシアが一つの物を取り出す。

「針？」

それは銀色で、長さは二十センチ程ある針が六本。・・・それを床・四方の壁・天井に刺すと罅が入り。

「え？！・・・うそ・・・ジュエルシールドの魔力が、安定してる？」

「まさか、結界？・・・結界内だけの小規模な世界を創り出した？」

『あら、魔術を知ってるの？』

「ジュエルシードの膨大な魔力を針を起点として流れを作ってる・
・あなた、一体なにをするつもりなの?!」

『そうね、実験内容を知ってもらうのも良いかもね。ねえ、人を人たらしめる要因って何か分かる?』

その言葉に全員が黙る。

『ある書物にはこう書かれていたわ、人を構成するモノは『肉体と精神と魂』だど。でも幾ら技術が発達していても、魂の分野なんているはずも無い』

「錬金術? でも肉体と精神が合わないと拒絶反応で死にいたる・・・まさかっ」

「おい、テメエ・・・」

「ハッ、えげつねエなアオイ」

インデックスさんと当麻くん、アクセルさんが何かに気付いたらしい。

『フフフっ、優秀で頭の回転が速い子がいる様ね。さらに、その本には肉体と魂を繋ぐのが精神と書かれていた。肉体は用意した、精神は壊したけどまだ死んではない、ならまだ魂はあるはず。ジュエルシードは願いを叶える。それはつまり、使用者の思い、意志、願望を具現化させる事』

「アリシアさんの精神を具現化させて、フェイトさんに入れるつもり!?」

リンディの声にプレシアは顔を歪めて言った。

『さあ! 世紀の実験を始めましょう!!』

そう言ってプレシアさんはフェイトちゃんとジュエルシード1個を、アリシアさんが入っていたガラスの中に入れ、部屋の中心へ移動する。するとガラスの中でアリシアさんとフェイトちゃんが向かい合う様に上下に移動し、その真ん中でジュエルシードが光り輝く。

「艦長! 傀儡兵を複製しているジュエルシードを発見しました! けど、既に暴走状態で次元震の発生を確認! それと虚数空間の発現を確認!」

「!」

「アースラの魔力を私へ回して! 此方から次元震を止めるわ! クロノにも連絡して! 最優先は傀儡兵を複製しているジュエルシード!」

「ユーノくん、虚数空間って何?」

知らない言葉が出てきたのでユーノくんに聞く。

「えっと、簡単に言うなら魔法が発動しなくなる空間ってとこかな? それに、巻き込まれると二度と戻ってこれなくなるって言われている」

「そ、そんな危険な所にクロノくん行ったの?! た、助けに行かなくちゃ! それにフェイトちゃんも! よく分からないけど、このままじゃフェイトちゃんが、フェイトちゃんじゃなくなちゃうんでしょ! ? インデックスさん! . . . インデックスさん?」

確認の意味を込めてインデックスさんが居なかった。それどころか当麻くんも、美琴お姉ちゃんも、アクセルさんも居なかった。 . . . もしかして? !

「庭園内に転移反応確認! これは . . . あの子たち! ?」

「当麻くん!」

『なのは、お前はお留守番だ』

「ど、どうして?!」

『なのは、なのははフェイトとの戦いで魔力を大量に消費してるんだよ?』

『そう言う事、ここはお姉ちゃんたちに任せなさい!』

「で、でも! ?」

「なのはさん。今の貴女では戦力になるどころか足手纏いになるだけよ?」

背後からリンディさんが声を掛けてきた。

「それでも . . . それでも! 私は置いてけぼりはヤダ! !」

「 . . . はあ . . . 貴女も頑固で、融通の利かない性格ね、クロノそっくり」

そう言ってリンディさんはレイジングハートに触れる。

「魔力供給を確認しました」

「これ・・・魔力が回復してる？」

「この前、貴女がフェイトさんにやったのと同じよ・・・頑張りなさい」

「はい！ユーノくん！！」

「準備できてるよ！」

ユーノくんの転移魔法で私も跳んだ。

Side Out

Side..当麻

——時の庭園

「そう言えば、なんでお前らついて来たんだ？」

「私と当麻のラブラブでアタックな最終奥義が炸裂すると聞いて」

「派手に暴れられそだからだ」

「アタシはフェイトの使い魔だよ？」

「とうま一人じゃここに来れないじゃん」

「美琴以外はまともな答えで安心した」

当麻の質問に答える4人。

「君達、雑談はそこまでだ・・・来るぞ！」

最後にクロノが仕切る。

「じゃあ、一番手行っきまーす！」

美琴がコインを弾く。

—ゴツツツツツ！！！！

弾かれたコインがオレンジ色の閃光となって直線状に居た傀儡兵を薙ぎ払い、余波でさらに吹き飛ばす。

「お前らどうする？俺はあの女を殴りに行くんだが」

向こうの態勢が整う前に作戦会議する。

「憂さ晴らしで数が多いィ方だ」

「私は当麻と一緒に」

「私もとうまの方かも。魔術を知ってる人が居た方が良いでしょう？」

「僕は現在暴走状態のジュエルシードを止めに行く」

「アタシは断然フェイト優先だ！」

その時、頭上をピンク色の閃光が通り過ぎ敵を薙ぎ払う。

「私もフェイトちゃんの方に行く！」

「いや、君達はこの庭園の駆動炉を止めて来てくれ」

「「えっ?!」」

なのはも参戦を表明するが速攻でクロノに別の目標を言い渡される。

「この中で魔法が使えるのは僕を含め四人。僕は現在暴走しているジュエルシードを、フェイト・テストロッサの救出に大人数が行く。だからこの庭園の機能を停止させる。彼女も大魔導士とまで言われている人物だ、駆動炉から魔力を引っ張って来る事なんて簡単にできる」

「で、でも!？」

「なのは・・・」

それでも渋るなのはに話しかける。

「お前の友達はちゃんと助ける。だから・・・」

「当麻くん・・・うん、分かった。でも、それが済んだらすぐに行くからね！」

「話がまとまったな？なら行くぞ！」

またしてもクロノが仕切る。が、全員無視して動きだした。

「とうま!数が多くても本物の傀儡兵はそんなに居ないはずだよ！」

「要は触って確かめろって事だろ?!」

「よっしゃ!二発目！」

再び美琴がコインを弾き閃光を跳ばす、その後を当麻・インデッ

クス・美琴・アルフが続く。クロノとなのはは早々に飛んで行った。ちなみにユーノはなのはの肩に居る。そして・・・。

「さアアてエ、こっから先は一方的な蹂躪だア。せいぜエ楽しませてエ、俺のストレスをブチ撒けさせろよォ！木偶人形ォォ！！」

ーゴッッ！！！！

最強の能力者の蹂躪が始まる。

「アタリ、アタリ、ハズレ・・・これもハズレ、アタリ！」

前に進むのに邪魔な傀儡兵に触れながら突き進む。

「つと、エイミィ！前方の床が穴開いてんだけど？！」

『それは避けて！その真下は虚数空間が広がってるから！って言うか早いよ、君！！』

すんませーん！

『そこ真っ直ぐ抜けたらホールに出るよ！傀儡兵の反応もある・・・大型！？気をつけて！』

そうこう言っている内に広い部屋に出る。そこに待っていたのは六メートル程の大きさがある鎧の兵士数体と、人間サイズの傀儡兵が百体近く。

「でかっ！？それに多い！」

「おつきゝわねゝ・・・取り敢えず、えい」

ードゴォォォン！！！！

美琴が初っ端からレールガンをデカブツ一体に跳ばす・・・が、所々鎧が剥がれているが普通に動いていた。

「うわっ！まだ動いてる！！」

「たぶん、さっきまでの雑魚と違って障壁を張ってあるんだと思う！クソッ、プレシアの奴！こんなのあるなんて知らなかったよッ！

！」

驚く美琴と、愚痴るアルフ。そして足を止める当麻達。

「で、どうするよ？ たしか、この奥だろ？ プレシアが居る場所」

「教えて貰った通りならそうだよ」

当麻の問いにインデックスが答える。目指すべき場所は傀儡兵によって塞がれている。

「ツンツン頭」

「何だよ、アルフ。それと呼び方は特に指定しないけど、そのあだ名はやめろ」

「どうでも良いだろ・・・アンタはフェイトを助けてくれるかい？」

「何を今更、お前から言っただんら？ 助けてくれって」

「——っ、アンタお人好しだね」

「違うわよ、当麻のは唯の我が儘よ」

アルフの評価に美琴が訂正を入れる。

「だから、アンタに頼む。フェイトを助けて・・・此処は、アタシが残る！！」

「当麻、なのはとの約束、破ったら承知しないわよ？」

美琴が前に出た。

「なんだい、アンタも残るのかい？」

「私が行くより、当麻が行った方が確実だからね。だから、当麻の邪魔はさせないわよッ！」

「ゴツツツツツツツ！！」

美琴が再びレールガンを放ち、道を開く。

「分かった・・・怪我すんなよ！ 二人とも！！」

拓けた道を当麻とインデックスが走り抜ける。右手が痛い程きつく握られていた。

「だってさ」

当麻達が通って行った通路を守る様に美琴とアルフが塞いでいた。

「アタシとしては、プレシアと戦うアイツの方が怪我しそうだと思うんだけど」

その二人を排除する為に傀儡兵も動く。

「じゃあ、さっさと掃除するわよ」

「アンタ、何か口調が変わってないかい？」

美琴の聲がさっきまでと違い冷徹さを帯びていた。

「・・・唯の嫉妬よ」

「ウチの御主人にかい？あの、なのはって子は違うの？」

「なのはは別よ、むしろ私と当麻を繋げている・・・絆みたいなものよ」

「じゃあ、ウチのご主人さまに取られるか心配かい？」

「・・・迂闊に近づかないでね、私は味方だけ避けて力を使う様な細かい芸当なんか出来ないから」

「あいよッ！！」

アルフが駆け出し、美琴の体から電気が弾る。

長い通路を走る・・・この内に聞いておくか。

「インデックス、どうすればフェイトを助けられる？」

時々傀儡兵が出てくるが大半が魔力で複製された物で、それ以外は力技の内部破壊系の技でぶっ壊して進んでいる・・・今だけこの体が頑丈で良かったと思う。

「あの人がやろうとしているのは、精神だけを別の人の精神を植^{上書き}え付けることで過去の人間を蘇らせようとしているの」

そこは分かっている。問題は救出の方法だ。

「結界で世界を構築したって言うのは？」

「アリシア・テストロッサの精神が覚えている『自分は死んだ』って言う記憶を消す為際に起こる負荷を精神と体にダメージを与えない為に自分の空間を構築したんだよ・・・この計画、ジュエルシー

ドの膨大で無色透明の魔力があって始めて出来る事だね」

本気で、フェイトも、アリシアの事も侮辱してやがる！

「とうま。あの子を助けるなら術者を叩いても無駄、やるならガラスケースの中に入ったジュエルシードを無効化するしかないよ」

可能性があるとすれば奇襲＋神速だ。けど、出来るのか？俺が神速を使えたのって温泉旅行でアクセルと戦った時だけだ。

「とうま、良いの？あの子を、フェイトを助けるって事はプレシア・テストロツサの願いを踏みにじるって事だよ？とうまに出来るの？」

「・・・ああ」

「ごちゃごちゃ考えるな、上条当麻！今生きてるのは誰だ？生み出しておいて道具の様に扱われ、挙句の果てに『殺され』そうになってるのは誰だ？俺はここまで来る時に誰と約束して来た？助けてくれって言ったのは誰だ？」

「俺達が助けるのはフェイトだ、アリシアはもう死んだ人間だ。人は一度死んだら二度と生き返らない、もし生き返らせる手段があった誰かがそれを望んだとしても・・・生き返った人間がそうとは限らない！」

俺はそれが良く分かる。例え今前世に生き返ったとしても・・・過ぎた時間は戻らない。それに、今生き返るって事は美琴達を悲しませる事になる。

「うん。とうまの考えは分かったよ・・・だから、助けよ！」

俺達は大きな扉の前に立つ。

大魔導師の魔術（前編）（後書き）

——女は戦う、己の求めた未来の為に

——少年は戦う、少女達の思いを背負い

——少女は出会う、母が求めた少女と

次回「大魔導師の魔術（後編）」

——少年はまた一つ幻想を背負う

大魔導師の魔術（後編）（前書き）

アンケート終了します！

おかげで浜面の戦闘スタイルも確立しました！ただいま筆記中ですが浜面の戦いをお楽しみしてください！！

大魔導師の魔術（後編）

Side..——

気付けば暗い場所に立っていた。そもそも自分は誰なんだろう？それ以前に本当に立っているのか？もしかしたら横たわっているのかもしれない、むしろ自分の体があるのかも分からない・・・私の体？体ってなに？

——光が弾ける

目を開ける・・・目なんて有ったんだ。その目で周りを見る・・・そこは何処かの庭のだった。

——そこに『私』が居た

『私』が花飾りを作っている、その近くにはお母さんがいて微笑んでいた。それは“休日に見せてくれる笑顔”だった・・・休日？「お母さん！見て！お花で作ったの！」

「凄いわ■■■■。よく作れてるわよ」

お母さんが褒めてくれる。だけど肝心の『私』の名前が霞んでいる。・・・私はダレ？

——景色がブレる。

Side..当麻

扉を開く。そして、迫る雷の砲撃！

「っぐ！？」（出鼻を挫かれた?!）

右手で防ぐ・・・が、消し切るまでに数秒掛かり腕にも負荷がか

かった。

「いらっしやい、不法侵入者さん」

「手厚い歓迎ありがとよッ家主さん！」

入り口近くから部屋を見ると、床には不思議な文様を描いてあり、それは四方の壁にも描いてあった。そして部屋の丁度中心にガラスケースが浮いている、その中に入ってるのはアリシアとフェイト、それにジュエルシードが一個。それを守護するようにプレシアが立っていた。

「坊やが来たおかげで実験を中断せざる負えなくなったわ」

「そりやしませんねッ」

「それでも、確実に精神の融合は進んでる」

「あら、そっちのお嬢さんが魔術に詳しい人材？随分若いのね・・・そう、ジュエルシードが発動してる限り、確実に精神の上書きは進むわ。だからこそ、一番の脅威は坊やなのよ」

プレシアがデバイスからさらにジュエルシードを出す、その数二個。これで取られた分も出そろった。

「バルディツシュの戦闘データを見たわ、坊やは魔法を打ち消せるみたいね。でも許容量はある」

さっきの砲撃の事か？

「・・・関係ねーさ、俺達はフェイトを助ける！」

「そう・・・フォトランサー！」

プレシアが魔力弾を打ち出す。その数、50・・・って！

「幾らジュエルシードで魔力の底上げしてるとは言え多すぎだろ！？」

横に移動しながら右手で防ぐ。クソッ、神速のタイミングがズレたッ！

「（インデックスは！？）」

インデックスはどうしたか気になり一瞬だけさっきまで居た位置を見ると、入口の扉とチェーンバインドで防御しながらも対抗していた。

「（あれなら、しばらくは大丈夫そうだな・・・ならッ）本命を討つ！」

「フォトンランサー・ガンスファイア・・・させるとでも？」

後ろに周り込みガラスケースを狙おうとするが、プレシアが大きい魔力球を幾つも作り、それから魔力弾をインデックスに撃ち出し続け。本人は俺の方を向き、光る鞭を振るってくる・・・それを。
「ふんッ！」

多少態勢が崩れたが右手で掴む。

「これでッ！」「甘いわね」ッ！（消えない！？魔力を常に注ぎ込んでんのか?!）

右手で掴んでも消えず、鞭が意志を持ったかの様に動き逆に絡みつく。

「離れなさい！」

「ぐッ（まづっ!?!）」

そして当麻ごと振り回し、入り口近くの壁まで投げ飛ばされ・・・。

「――カハッ!?!」

受け身も取れずに叩きつけられる。

「受け取りなさい」

さらに追撃で砲撃が飛んでくる。

「とうま！」

横からインデックスが防ぎ・・・。

「ディバインバスター!!!!」

入り口からピンク色の砲撃が撃たれプレシアに当たる。

「大丈夫?! 当麻くん?! 美琴お姉ちゃんが先行ってて言ったから来たよ！」

「魔術で作られた結界って魔法じゃ打ち破れないんですね、始めて知りました」

「ユーノ、別に魔法でも打ち破れるよ? ただ、この結界は膨大な魔力で支えられてるから破れなかったただけだよ」

援軍としてなのはがやって来た。ユーノとインデックスは来て早々魔法抗議が始まってるし。それを見ながら俺も体勢を整える。

「サンキューなのは。それと助かったインデックス」

「あら、素敵なお友達ね。お迎えが来たようだし、いい加減帰ってくれないかしら？」

プレシアが話しかけて来る。その周りには再び魔力弾が幾つも浮いていた。

「「断る(の)！」」

「なら、さっさと死になさい!!」

再び魔力弾の嵐を撃ってくる。それをなのはが砲撃で牽制し、インデックスとユーノが防ぐ。

「インデックス」

「っなに?とうま」

近くに居たインデックスに話しかける。

「——って、出来るか?」

「っ!?!・・・可能だけど。本気?後は知らないよ?」

話した後、答えは貰ったが呆れられた。念話で聞いたのか、なのはとユーノが動揺していた。

「頼んだ」

魔法で守られている内に息を整え。

「・・・行くぞ!」

安全圏から一気に駆け出す。プレシアは俺を最優先に狙ってくる為、一瞬だけ視線がなのは達から俺に固定される。そこに・・・。

「「「ファイア!!」」」

後ろから俺を追い越す速度で魔力弾が撃ちだされる。

「(一人を活かすために全員が援護する・・・中々良い作戦だわ。けど今の私にはジュエルシードの恩恵がある。たかが三十発程の弾幕じゃ防ぎきれないわよ?でも・・・私の狙いは・・・)アナタよ!!」
真っ直ぐに俺に向かって砲撃が撃たれる。

「(御神流の戦いはっ!)」

全身の筋肉を引き締め、目標^{ガラスケース}だけに集中する。極限までの集中力によって体のリミッターを一時的に外す。

「あらゆる物を足場にして戦うこと!!」

迫る雷の砲撃をなのは達の魔力弾を足場にして回避する。

「ッ!？」

砲撃の向こうでプレシアが驚愕の表情になる。

「(その一瞬があれば十分だ!!)」

一瞬でプレシアを通り過ぎ・・・。

「これでッ!」

右手を手刀にしてガラスをブチ破り、ジュエルシールドを掴み。ガラスの破片で傷付くのも構わず右手を引き抜き。

「ついでに!!」

「あ」

空いた穴めがけて左足でガラスケースを蹴り壊し。フェイトと、アリシアを抱え離れる。

「か、返さない!! その子達を!! ツー——ガハッ!!」

正気に帰ったプレシアが叫ぶが、血を吐いた。

「お前・・・体が」

「ハア・・・ハア・・・そうよ、私には、時間が無いのよ。だから、それまでにアリシアにもう一度、光を与えたいのよ!」

血を吐きながらも、未だにプレシアはアリシアを生き返らせる事に執着していた。

「どうして邪魔をするの! 死んだ娘を生き返らせたいと思うのは悪い事!?! 幼くして死んだあの子を可哀想だとは思わないの!?! 私の事を調べたなら知ってるでしょう!!」

「だとしても! それでフェイトを生みだして、人形扱いして心を壊して、挙句の果てに自分の娘の記憶さえも書き換えて! それでアリシアが本当に幸せになれるのかよ! 幾ら隠したってお前のその体じゃ長く持たないだろ!?!」

良く見ればプレシアは杖に寄り掛かって立っている。足も震え、

目の焦点も俺を見ているかすら危うかった。

「お前が死んだ後はどうする?! いずれ真実を知るぞ、その時傷つくのはアリシア自身だろうが!!」

「それでも・・・それでも私は! アリシアに生きていて欲しいのよ!!」

プレシアが結界を解除し、ジュエルシードを全て手元に引き寄せた。十個のジュエルシードが共鳴し、膨大な量の魔力が溢れ出す。その魔力は発動者のプレシアの肉体さえも傷付ける。

「ああああああ!!!!」

全身から血を流しながらも、その視線は俺を離さなかった。その覚悟に一瞬、気後れした・・・が、気付く。俺の後ろには。フェイトと・・・アリシアが居るのを。

「(不味いッ! プレシアの奴、本気で俺を殺す気だ! その為に、娘さえも利用すんのか?!)」

だがプレシアの目を見て違う事に気付いた。目から血を流し、前が見えなくなっていた。恐らく声から俺の位置を大まかに特定したのだろう。魔法陣の大きさが後ろの二人さえも巻き込む程の大きさだった。

「(アイツ・・・もう持たないんだ。だから、何処に誰が居るのかも分からないッ!?)」

実質プレシア自身、もう何処に狙いを付けているのか分からなくなっていた。魔力の量に物を言わせて入り口の方にも魔力弾を撃ち続け、俺の方に特大の砲撃を撃とうとしている。

「このッ! 大馬鹿科学者!!」

後ろに居るのは彼女にとって大切な女の子。俺にとっては確かになんていい存在。

「だけど・・・死なせる訳に行かねえ!! それに! テメエにもまだ死んでもらっちゃあ困るんだよ!!」

駆け出すのと砲撃が撃たれるのは同時だった。

「おおおおお!!」

「あああああああ!!!」

右手と砲撃が拮抗する。

「ぐッ!？」

しかし、プレシアが血を吐き、砲撃が逸れる。その隙を突き一気に接近する。

「俺が止めてやる、だからッ、もう一度自分の娘達幻想に向き直れ!!」

「甘い、わねッ!」

足元に魔力弾が一つ現れ、弾ける。

「なッ!？」

顎を狙っていた拳の狙いがズレる・・・。

「

」

「っ!？」

そして・・・プレシアは笑った。

Side..フェイト

母さんと話していた『私』が『私』に気付く。そして・・・二人に別れ左右に走っていく。

——片方は母さんがいる方へ

——片方はアルフとリニスがいる方へ

これ・・・私と。

「そう、私の記憶だよ」

「っ!？」

背後から声を掛けられ振り返る。そこには私と同じ格好、同じ背丈、同じ顔をした女の子が居た。唯一つ違うのは表情。私が何時も無表情を装っているのに対し、その子は自然で明るい笑顔だった。・・・あれ？

「私・・・」

「うん。今ははっきりと自分が分かるよね?・・・フェイト」

「・・・うん・・・始めまして、で良いのかな?・・・アリシア」

「うーん・・・そうだね。私の方が生まれは早いけど、私は死んじやってるし。フェイトは私の遺伝子から生まれたから、お姉ちゃんって言われるのも何だか変な感じがするしね。って言うか私この年で娘持ち?!」

うわーどうしよう!?!と言いながらも扶養手当がどうのこうの言ってるアリシア。それを見て自然と笑いが込み上げてくる。

「ねえ、アリシア、ここは?」

「え?うーん、ここは・・・そうだね、私とフェイトが共通した記憶で出来た領域ってとこかな?フェイトでありアリシアであり私たちである場所」

共通・・・そう言えばさっきの花飾り、私もリニスとアルフに作ってあげた事がある。

「まあ、どうでもいいか・・・じゃあフェイト。私もう行かないと」
「え・・・?」

「だって、私はもう死んだ人間だもん。外でも男の子が言ってた、今更生き返ったって知ってる人はみーんな大人になってる。お母さんだってもう長く生きられない・・・そんな世界で生きたって・・・悲しい事や辛い事ばっかだもん。・・・そう考えるとあの子たちに感謝しないと」

「外・・・でも、母さんはアリシアが必要だった。私じゃ・・・駄目なんだよ」

その一言でアリシアは静かに考え始め。

「そうだね、お母さん。仕事で忙しくてストレスが溜まって、実験が失敗して・・・私を失くして。だから心が壊れちゃったんだね耐えきれなくて、自分のせいだって自分を追い詰めて」

「だったら?!」

「でもね、フェイト・・・フェイトはそれで良いの?何一つ自分が生きているって証を残せなくて」

「それを言うなら、アリシアだって」

「だ・か・ら！私はさっきも言った通りもう死んでるの！今ココに居る『私』だって肉体に残っていた脳から作り出された唯の記憶の塊に過ぎないの。そんな私と違ってフェイトはまだ死んでないでしょ？」

ふと、思い出す。私に真っ直ぐぶつかってきたあの子に何時も世話を焼いてくれたアルフ・・・そして、母さんの事を。

「うん、やっぱりあるんじゃない？」

「でも・・・」

「ほらほら、何時までもぐずぐずしない！」

何時の間にか後ろに光る鏡があった。

「ほら行く！！」

アリシアに背中を押される。

「アリシア！！」

「フェイト・・・会えてよかったよ」

寂しそうな顔に思わず手を伸ばす。・・・そして。光の中に消える。

目が覚める。そして目に入ったのが。白い服の子と良く一緒に居た男の子の背中と、口から血を流して寄り掛かってる母さん。

一瞬で眠気も気だるさも吹き飛んだ。

「母さん！！」

バルディッシュを持っていない事に気付き、走る。さらに向こうで誰かが叫んだのも耳に入らなかった。男の子が母さんを床に寝かせる。バリアジャケットは展開してない、服は血が滲み、今もなお流れて出ている。そして・・・私の方を見た。

「（良かった！まだ生きてる！！）お母さん！！」

口調が焦りからか変化していた。

「アリシア・・・貴女、アリシアなの？」

言うべきか迷ったが、自然と口が開いた。

「私はフェイトだよ、でも・・・アリシアも胸の中に居るよ」

「・・・そう・・・」

一言だけ呟き私から視線を外す。その先は、さっきまで寄り掛かっていた男の子に。そして・・・。

「よくも、私の邪魔をして・・・私を殺したわね」

楔を打ち息絶えた。

「え・・・」

「・・・」

一人はフェイトに、もう一つは当麻に。

「三人とも！そこから離れて！！」

真実を問う前に入り口近くから叫び声が部屋に響き。

―ゴツツツツツツツツ！！！！！！！！！！

理解する前に暴風に吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「――ッ！？」

それでも母さんを離さなかった事に安堵を覚え、意識が途切れる。

Side Out

Side..当麻

壁に叩きつけられる。激痛によって意識が落ちなかったのは幸運と見るか、不幸と見るか。起き上がろうとしても足が限界を感じ、勝手に震え力が入りにくい。

「（皆、は？）」

どうやら玉座の方に飛ばされたようで近くにフェイトとプレシアが倒れていた。そして反対側の入り口近くを見ると、なのはとユーノ、インデックス、美琴、アルフ、クロノが居た。どうやら全員無事らしいが、大半が床に伏している。それに床が所々ひび割れ、天

井からも瓦礫が落ちて来る。

『大丈夫！？』

「エイミィか・・・どう、なってる？」

『ジュエルシードがプレシアの手を離れたから完全に暴走してるんだよ！それより本当に大丈夫なの！今そこら辺、重圧が掛かってるんだよ！？』

通りで全員伏してる訳だ。ってそうじゃねえ！

「エイミィ！フェイト達をすぐに転送しろ！バリアジャケット来てない奴はヤバイだろ！！」

『最優先でやってる！！・・・これで！！』

遠くで美琴達の足元、近くではフェイトと、プレシアの足元に魔法陣が現れる。それは俺の足元にも表れる・・・が。

『えっ！？うそ！どうして君だけ転送出来ないの？！』

近くに居たフェイトは転送出来たらしいが、俺が転送出来ない事に慌て始める。

「おい、エイミィ、アイツ・・・アクセルは？真っ白い奴！」

『えっ！？ああ、大丈夫！その子も回収出来たよ・・・じゃなくて！どうして君は転送出来ないのさ！？そっちに行く時は出来たんでしょ！？』

「インデックスに聞け」

鬱陶しいので適当に別の誰かに振る。そして、玉座の背もたれを使い立ち上がる。「さて、あの宝石たちを止めますか」

『なっ！危険だろうが！今すぐ回収するから待ってろ！！』

クロノが話しかけてくる。

「バカかお前？あの宝石、放つと思ったら次元震とやらで世界が無くなっちまうんだろ？ッ！？」

一歩足を踏み出す・・・それだけで体全体に痛みが走る。

『た、確かにそうだ』

「・・・ッ、近くに、俺達の世界があんだろうがッ——ぐ！？」

横から魔力の暴風が吹き、俺の体を横薙ぎに倒す。

「クソッ、右手でも消せない程の質量が出てるのか・・・」

『おい！どうして彼は転送出来ない！』

通信先で何やら揉めている・・・うるさいので右手で声のする場所を殴る。それだけで煩わしかった声が消える。

―ドゴッ！！！

天井が崩れ始めたのか瓦礫が降って来た。それも俺の上に。

「っ！ラアアッ！！！」

右手は必要なため左手で防いだらイヤな音がした。・・・瓦礫を無理に弾いたお陰で、指が幾つかイッたらしい、それに・・・。

「やべ、米神辺りも切ったか？」

少しフラつき、膝を突く・・・早くアレ止めて帰って医者さんところ行かねえと。

（やれやれ、外が騒がしいな）

「（またテメェか・・・）」

内側から声が聞こえた。自覚したからか前よりはっきり聞こえる。

「（なあ、何で俺をこの『世界』に送った？本当は、何か別の理由があんだろ？）」

（・・・）

「（何とか、言えよ。クソ神様）」

（知りたいか？）

「（当然だ・・・理不尽に殺されて、見知らねえ世界に来て、知らない土地で過ごして、知らない人が行き成り親になった時にどれだけ困惑したと思ってやがる）」

激しさを増すジュエルシードに対し、精神的に逆に落ちついていった。愚痴っているが今更な事なので唯の嫌味で言っていた。

（知りたいなら生きろ。その世界で、この体で、ありのままのお前で）

中にいる存在は真実を語らずそう言い放った。だがそれは。

「(クソつたれの神様め、そんなの当たり前だ。まだ死にたくねえに決まってるだろ・・・それに)あブレスアの女との約束がある・・・ッ!」

さっき託された小さな幻想を、守らなくちゃならねえ。

(それで良い。確か魔力石持ってたな。それを左で握れ、力を貸してやる)

「・・・良いぜ、生きてやるよ! テメエに言われなくたって生きてやるさッ・・・だから! 今は力を貸せ!!」

氣力を振り絞って立ち上がり、言われた通り左で握る。そして、ジュエルシールドが発動する。

「(・・・周りの魔力と共鳴して発動したのか?)」

―ドクンッ

鼓動が聞こえた。胸の奥から・・・それにッ。

「がッ!?! 体が熱ッッ!?!?!」

体が熱を帯び・・・そして、見えた。右手に渦巻く異形の存在。

「りゅ、竜の頭?」

―オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

蜃気楼の様に実感がなく。しかし、生きているかの様な威圧感があつたその存在は俺の意志に反し、自らの存在を示すかのように咆哮を上げる。

イマジンプレイカー

ドラゴンストライク

(幻想殺しの本来の姿竜王の顎)

「ドラゴン、ストライク?」

今まで吹き飛ばされそうだった魔力の暴風も、竜に触れた瞬間キャバシテイから無効化している。・・・コイツ! 今までの違幻想殺しって許容量に限界が無い!?

「・・・なら!」

一気にジュエルシールド近づき、右手を振りかぶる。今度は俺の意

志に従って動き。その大きな口を開き・・・。

「喰らえよ！その幻想を！！」
ジュエルシード

ジュエルシード全てを喰らった。

（これのお陰で俺様も外には出れない、せいぜい大切にするんだな・・・）

掠れていく内側の声に。

「言われ、なくなつて・・・テメエになんか、好きにさせ、ねえよ・・・

ッ（ヤバい、血を流し過ぎたか？意識が・・・）」

遠のく意識の中で最後に見たのは。水色の光り。

「（イン、デックス・・・？）」

大魔導師の魔術（後編）（後書き）

——出会いと別れ

異世界の者達は自らの居場所へと帰る

——伝えられる言葉

それは感謝か恨み言か

次回「テストロッサ」

——そして、一つの影が動く

テストタロツサ（前書き）

やっところさ無印編終了

次回からは日常編。だけど大部分が戦いつてどう言うこと？

テストロッサ

Side…当麻

目が覚める。

「おはようだね？上条当麻くん」

「あ、ドクター・フロッグだ。つい事はここ病院か、と言うより今何時っすか？それと俺が運ばれてどのくらい経ってます？」

取り敢えず質問しまくる。

「昼近くに運ばれて今はもう夜だね。君がここに運ばれて十時間近く経ってるよ。いやビックリだね。行き成りコスプレ集団が来たと思ったら君が運ばれてくるとは」

魔法の秘守はどうした管理局。

「それと容体の説明に入って良いかな？」

「お願いします」

「まず左手の先だね、ここは指先が数本折れてるよ。右も腕の部分が結構ヤバかったね。それに胴体の方も、硬い物でも当たったのかな？痣だらけだったよ」

うわゝ思ってた以上に酷い。

「後は足だね、君、また神速を使ったね？一週間程前にも注意したが肉体が出来あがってない内は使用しない方が良いと言っただろうに。筋肉疲労で脛脛が痙攣してたよ？」

それは仕方なかったんです。あの女が強かったんです。

「それに右足。どうやったら骨に罅が入るんだい」

魔力弾を踏みました。

「後はまあ、出血と額の切り傷は大したこと無かったね」

そっちの方が大したことあると思うんですが？・・・ああ、何時もの事だったな。

「取り敢えず、君の回復力を考慮すると5日入院。その後しばらく通院ってとこかな？何か質問は？」

「連れは？」

「今日は帰ったよ。それと伝言が一つ『どっちが化けもんか分かったもンじゃねエなア』だそうだよ」

見られてたのか・・・と言う事は明日は質面攻めかな？・・・いや、心配掛けたからドキドキ甘くい看病コースも入るかも。

「そっちの方がヤダなあ」

「どっちにしたって覚悟しておきたまえ。医者との約束ごとを反故にすると後がヤバイ事を教えてあげよう」

そう言って部屋から出ていった。

「あれ？何気に恐怖の入院生活フラグ立った？」

――翌日。既に放課後

朝からインデックスが遊びに来た。その後、昼食後にユーノ・リンディさんがやって来てあの子の事を聞いた。ジュエルシードによって引き起こされた次元震は、あの竜が喰らった瞬間パタリと収まったらしく、明後日には次元の海も安定してそのまま本局の方へ帰還するらしい。ついでに俺が出した竜の事も聞かれたが、知らぬ存ぜぬを決め込んだ、だって実際俺にもさっぱりだし。

「当麻！」

「当麻くん！」

「し、失礼します！」

「あ！ひょうかだ！」

学校が終わって速攻で、なのはと美琴と氷華がやって来た。急いで来たのか息が切れてる。そこで二度目の説明会となった。

「―という訳で彼女は裁判を受ける事になるわ・・・生み出され利用されたとは言え、犯罪の肩棒を担いでいたのは事実だわ・・・言い逃れは出来ないの」

ちなみに、なのは以外は例外は偶々魔法を知った現地協力者と言う事になっている。

「あの、どのくらいになるんですか？フェイトちゃんの、その・」

「普通なら・・刑期200年って所になるわ」

「普通にあり得ねえ年数だよな？実質死ぬまでって事になるし。」

「そんな！？当麻くん！どうにかって、なんで二ヤついでるの！？」

「いやあ、だって・・なあ？」

「落ちついてなのはさん、私は普通ならと言ったわ。事件全体を通して言えば擁護出来る所はいっぱいある・・私だってプレシアの思い全てを否定するつもりはないから・・出来る限り刑罰を軽くするつもりでいるわ。幾つか手段もあるし」

その言葉でなのはがキョトンとしているが、状況が分かると笑顔になる。

「じゃあ！」

「ええ、早くて数ヵ月後、遅くて1、2年後になるわ」

美琴達が全員で喜びを分かち合う。お前らここ病室だから！（実はこの部屋だけ特殊な防音加工がされているため、ドアを開けない限り音が外部に響く事は無かったりする）

「・・それと、なのはさん」

「はい？」

「明後日の早朝、出発前にフェイトさんとの面会の時間が取れるんだけど、どうする？」

「フェイトちゃんと会えるんですか？！」

その一言でなのはが驚きの声を上げる。まあ、分からなくは無い、こう言う場合、普通は会えないと思うからな。

「ふふ、どうして？って顔してるわね・・今回の件、貴方達が居なかったら世界が幾つか消滅していたし。私達だってそれほど恩知らずじゃないわ。それに、昨日起きてからずっと塞ぎこんでたフェイトさんからの頼みでもあったの」

「フェイトちゃんのこと？」

「ええ・・それに、貴方にも良い事があるそうよ？」

そう言つてリンディさんは俺の方を向く。・・・俺？

「・・・恨みごと何かかな？」

「当麻・・・最後にプレシアが言つてた『私を殺した』って本当？」
美琴の一言で場の空気が凍る。

「それで、どうするの？」

「行くさ（それがプレシアが託した小さな幻想だから）」

「そう・・・じゃあ、明後日の早朝、海岸沿いの公園で会いましよう」

リンディが部屋から出ていく。・・・息子と違って空気読めるな。

「で？どう言う事よ？」

「「当麻くん（君）（さん）？」」「」

やべ、もっと居て欲しかった！

――2日後

早朝、病室を抜け出す為に窓を開ける―ちなみにこの病室は3階にあり、よく怪我して入院する俺やアクセルや巻き込まれた浜面が良く使う病室として有名になつてゐる―と、目の前に桜の木が植えてあるので枝を伝い地面に降りる。・・・そう言えば最近、浜面もこういう事が出来るようになったって言つてたな・・・。

「アイツもまともじゃない道に入りかけてるよな？・・・まあ、超能力者と付き合つていくならそっちの方が安全か」

主に肉体面で。

「つと、もう全員そろつてゐる？」

取り敢えず離れた所ではとフェイトがお話中（平和的な意味で）だったのでクロノ達に話かける。

「よう」

「む？来たのか」

「とうま！おはよう！」

「おはよう、当麻」

「おはようございます、当麻さん」

アルフから返事が無かったので、見ると。

「フェ、イ、ド、オ、オ」

号泣していた。訳が分からないので周りに助けを求めると、なのはの方を見ると催促される。

「――そっか、うまくいったんだな」

なのはとフェイトが抱き合っていた。見れば二人の髪が解け、縛っていたリボンが相手の手にあった。

「リボンを交換したのか」

「ああ見るとなのはって桃子さん似よね」

「まあ、血が繋がってるのってなのはだけだしな」

後は養子と腹違いらしいし。あ、なのはがこっちに来た。

「えっと、当麻くん。フェイトちゃんが」

「了解」

さっきまでなのはが居た場所に歩いていく。どうやら俺だけと話したいらしく他は誰も付いてこない。

「・・・よう」

声を掛けるが軽く会釈だけしてきた。

「俺に何か話があるんだって？」

「・・・取り敢えず、お話しておこうと思ひまして・・・アリシアの体と、母さんの事です」

それから、フェイトは一呼吸した。

「アリシアと・・・母さんの遺体は。ミッドの墓地に入れられる事になりました。私はこれから裁判もあるので葬儀はありません・・・母さんは必要ないって言いそうだから・・・それと、リンディさんからは母さんの友好関係を教えてもらいました」

「それは、初耳だ」

「母さん・・・もう親戚も居ないそうです。研究一筋で生きて、偶々知り合った局員の人と恋仲になってアリシアが生まれたそうです。その人も、もう居ないそうです」

「・・・お前は、どうなるんだ？」

「裁判まではリンディさんが後見人になってくれるそうです、それ以降は・・・私にも分かりません・・・あの」

フェイトが言い淀む。この場合は、相手から話して来るのを待った方が良さそうだよな。

「管理局の人からは、死因は病気の体で無理矢理に魔法行使して戦ったからだと聞きました」

「変わらないさ。あの人の最後の望みも砕いて、その後も流れで戦ったんだ。病気持ちで衰弱していた所に止めを刺した様なものだ。言い逃れする気も無い・・・お前は恨んでるか？」

あの時。プレシアとの最後の瞬間。あいつは砲撃を途中で消し、俺はギリギリ寸止め出来るはずだった・・・プレシアが前に出て俺の体制を崩し、右手を自身の胸に、心臓の位置に持ってこなければ、プレシアは死ななかつたのかもしれない。

アイツは最後の瞬間、娘の生きる理由として俺への憎悪・復讐心を植え付けようとしたんだ。

「トウマは罵りたいのかな？」

「・・・は？」

行き成り明るい声で罵られた。ってフェイトの奴笑ってやがる。

「・・・何か変な気分、自分が死んだ記憶があるのに、こうしてまた日の光を浴びて、誰かとお話ししてるなんて」

待て。死んだ記憶？また？

「まさかつ」

「あはは・・・はじめまして、アリシア・テストロッサです」

そう言って笑いながらもソイツは名乗った。

「・・・あり得ねえ、なんだそのビックリ!？」

「私も驚きだよ・・・そうそう、あなたには改めてお礼を言いたいんだ。ホントはフェイトに遺言みたいに託して消えようと思ったんだけど、意外と欲張りだったみたいで。アリシア!・・・あ、ごめん、今変わるから・・・全く」

傍から見ると一人芝居の様に見える。

「改めて・・・ありがとう、母さんを止めてくれて。私の為に怒ってくれて。フェイトの為に戦ってくれて。トウマが、皆が戦ってくれたから私は今ここに居るし、フェイトもここに居る事が出来るの」

「それでも、な・・・」

「ううん、本当は母さんも、恨んでなんかいないよ。だって、最後は笑ってたもん。あつ、そろそろ時間だ。あと私の事は管理局の人には内緒だよ？知ってるのはアルフだけだから・・・フェイトが最後に言いたい事があるって」

また雰囲気が変わる。二重人格つてのも忙しそうだな。

「・・・多分、母さんを殺した事は許せないと思います」

まあ、目の前で死んだから尚更だよな。

「だから、今度私が此方に来る事があれば・・・私と戦って下さい」

「・・・ハア・・・バトルジャンキーかよ・・・まあ、良いぜ。何度でも、何回でも勝負してやる、お前の気が済むまでな」

丁度良く、クロノ達がやって来る。

「時間なんだが、もう良いか？」

「はい」

フェイトがはっきりと答える。そして、フェイトの周りにクロノ・アルフ・ユーノが集まる。

「なんだ、ユーノもそっちなか？」

「ええ、取り敢えず。一族の方にも顔を出さないといけませんし。」

フェイトの裁判の方にも参考人として付いて行きます」

「そっか、体気をつけろよ？」

「当麻さんには言われたくありません」

「君が言える事じゃないな」

「当麻には言われたくないわよ」

「アンタには言われたくなよ」

ユーノ・クロノ・美琴・アルフに倍返しされる。

「とうま。今自分の状況分かってる？」

さらにインデックスにも指摘される・・・まあ、そうだな。俺自身が怪我人だし。

「フェイトちゃん・・・」

「なのは・・・またね」

「うん！またね！フェイトちゃん！！」

最後になのはとフェイトが挨拶を交わし転移した。

「行っちゃった・・・」

「・・・さて、湿っぽいのはここまでにして、学校行こっか？なのは」「それよりなのは、お前髪型どうすんだ？そのままストレートで行くのか？」

「にゃ！？・・・どうしようか？」

フラグ蒔いとくか。拾うかどうかは本人次第だけど。

「誰かブラシ持ってない？」

そう言ったら美琴が差しだしてきた。ちなみにブラッシングは良くやってると言うか、良くやらされた（主に美琴とか美琴とかなのはとか最近になってインデックスとかたまに氷華とか）のでお手の物だ。

「にゃ～～」

「いいな～私も～して欲しいな～」

「また今度な・・・なのは、一つ貸して」

「？一つで良いの？」

そう言って一つだけ渡しに来る・・・たまには髪型変えるのもいいか。

「あ・・・これって氷華さんと一緒？」

いつものツインテールを下ろし、左側を一房だけフェイトのリボンで結える。

「へ～中々似合ってるわよ？」

「やってみて何だが、中々に良い感じだな」

「うん、とうまにしては良いセンスかも」

なのはが美琴から手渡された手鏡をみて確かめる。

「うん、ありがとう！じゃあ、行って来ます！」

「行って来るね！当麻！」

「おう、行って来い」

学生の二人を見送る。

「さて、俺は病室に帰るか。お前は どうする？」

「私も行くー」

「そっか、じゃあ行くか」

俺達も病室に帰る。ふと、あの時言われた事を思い返す。

『恨まれ貰うわよ、あの子が生きる為に』

あの時の言葉は恐らくフェイトを思っただけの行動だったんだろう。
だが……。

「安心しろ、お前の娘“達”は強く生きる」

「誰に話してるの？」

「ん？さあな・それより早く帰らねえと、今度は食事の中にまで
苦い薬を入れられちまう」

—— 一つの事件が終わり、母の為に生きた少女は母の望みの欠
片を背負う

Side .. ——

其処は体育館程の広さがある空間。窓や扉、通気口すら無い場所。
壁や床、天井にまで複雑に絡まり重なり合ったパイプやコードが散
乱し、もはやジャングルの様になっている部屋の中心、天井から床
にまで届く赤い液体が満たされた円柱のガラスケースの中にソレは
居た。

「たった一つの事件で幾つものプランが短縮出来たか」

ソレは大人にも子供にも、成人にも囚人にも、女にも男にも見える『人間』^{アクセラレータ}だった。

「それに、粒子加速器、御坂の家系、それに風斬氷華もこちらの存在を知った」

ガラスケースの周りには、この部屋唯一の光源であるモニターが映し出されていた。

「しかし、コレは何だ？」

その人物は一つの映像を見た。それは時の庭園内の映像で、当麻^{ドラゴンストライク}が竜王の顎を発現した映像だった。しかもアースラのと違いより鮮明で様々な角度から間近で撮られていた。

「この瞬間、テレズマが内側から溢れ出している・・・神浄が発動した気配も無い。やはり『世界』の外部から引き寄せたからか？・・・内側に細工されている可能性があるな。精神？・・・いや魂の方か」

普段この人物を知っている者が見たら驚いただろう。普段は無表情で無口なのが眉間にしわをよせ饒舌だった。

「プランの大幅な変更が必要だな・・・貴様の言う通りだったな、エイワス。私はいささか早急すぎる様だ」

モニターが一斉に切り替わる。

「ふむ、やはり此方の準備には数年掛かりそうだ・・・やはり世界からして前とは違うな。まずは製造ラインに必要な施設の確立。幻想殺し^{ジンプレイカー}内の異物の調査。それに・・・あの世界の危険物を取り除かなければ・・・イレギュラーの始末は後回しだが・・・少し気長にやらなければいけないか」

モニターに映っていたのは一冊の本と、月だった。

おまけ

——退院後

数日前にレイジングハート経由で、俺の口座に契約金が支払われたようなので確認してみた。

「・・・マジ？」

通帳を見て驚いた。

「400万?・・・えーと俺・美琴・なのは・ユーノ・インデックス・双子・アクセルだから8人。と言うと一人50?」

管理局の提督職ってどんだけ給料貰ってんだよ?

「でも、この額って何かあったら宜しくって言われてる様な気がする」

テストタロツサ（後書き）

——覚醒する魔導の書。それは新たな戦いの呼び水

——されど、少女にとっては掛け替えのない幻想との出会い

次回「日常ふつうから非日常まはふつうじょうへ」

——「ウチは母になる!!」

人物設定・紹介＋aリメイク版

・第三管理世界ヴァイゼン

約70前程前に魔術発祥の世界となった。十字清教と言う宗教が存在するが、十字教内で様々な派閥があり、ヴァイゼン内の各地に拠点を作っているところがあるらしい。基本的に一般人は巻き込まず、十字清教内で片付けられているので管理局も手出しが出来ない。

・魔術について

空気中に存在する魔素（魔術用語ではテレズマ）をリンカーコアを通して変換・蓄積した魔力を用いて発動させる事が出来る。発動方法は様々。古いやり方だとリンカーコアも必要ないらしい。

・人物紹介

インデックス

本作ヒロイン？第三管理世界出身の少女、現在8歳。第三管理世界の宗教団体「十字清教」の必要悪の教会所属。ネセサリウス。ネセサリウスとは魔道書の解析・封印・保管・管理を目的とする部署。幼い頃に教会の神父が拾われ育てられた。教会に所属する前からあらゆる魔道書の知識を持っていた。教会に「闇の書」の情報が入って来たため一人で第97管理外世界にやって来た所、当麻と出会う。現在上条家を拠点にして闇の書もとい夜天の書を検索中。魔法は使えるが魔術は何故か使えない（ただし相手の発動した魔術に割り込む事は出来る）。ちなみに魔力ランクはSSだが、サポートに特化しているため実際の魔導士ランクはBランク止まり。

固有スキル

・完全記憶能力
・ミッド式魔法
デバイスはペンダント形のストレージデバイス「ヨハネ」

アリサ・バニングス

バニングス家の長女。発火系能力者。小学一年の頃に他者を見下し、すずかをいじめていた所をなのはのOHANASIで改心された。なのはの初OHANASI体験者。それ以降すずか、なのは、とまり、はずみとよく行動するようになった。

固有スキル

発火能力（パイロネキシス）

炎を具現させる事が出来る。

・月村すずか

月村家の次女。小学一年の頃アリサに苛められていた所なのはが止めに入り喧嘩になり、アリサが一方的に苛められ始めたので止めに入り仲裁。それ以降何故か気が合い一緒に行動するようになった。偶に黒化すると言う噂あり。

固有スキル

???

ユーノ・スクライア

PT事件の際に当麻達と出会い接近戦の鍛錬もし始めたがその他はほぼ原作通り。魔術が存在する事は知っている。なのはに対しては

恩を感じているがそれ以外の感情は持っていない（なのはが当麻に好意を持ってるのを知ってるため）。

フェイト・テストロッサ

プレシアの命令でジュエルシードを手に入れる為に地球にやって来た魔導士。その正体はかつて新型魔力駆動炉の暴走で死亡したアリシアのクローン。一度心を壊され時の庭園でアリシアの肉体として利用されるが当麻達によって実験は失敗し。その際にアリシアの精神を肉体に受け入れ、二重人格者となる。

固有スキル

・ミッド式魔導士

デバイス…バルディッシュ

・魔力変換資質…雷

・二重人格者

表の人格がフェイトであり、裏がアリシアとなっている。肉体の主導権自体はフェイトが持っている。

アリシア・テストロッサ

かつて新型魔力駆動炉の実験で死亡した人物。プレシアの実験のさい、肉体の脳に残っていた記憶から生み出された存在。実験の失敗と同時に消えるはずだったが、フェイトが自らの肉体に取り込んだ為、二重人格者の裏の人格となった。

追加設定

御坂 とまり（みさか とまり）

ユーノの念話を聞きとれ、インデックスが調べたところリンカーコアがある事が判明。本来持っていた能力『ネットワーク』とは別物。現在マルチタスクをすんなりと覚え。ネットワーク内でよくはずみ と遊んでいる（将棋・オセロ・しりとりe t c）。

固有スキル追加

・魔導士（ランク…？）（魔力変換資質…電気）
今のところ念話をする事が出来る程度。

御坂 はずみ（みさか はずみ）

ユーノの念話を聞きとれ、インデックスが調べたところリンカーコアがある事が判明。本来持っていた能力『ネットワーク』とは別物。現在マルチタスクをすんなりと覚え。ネットワーク内でよく とま り と遊んでいる（将棋・オセロ・しりとりe t c）。

固有スキル追加

・魔導士（ランク…？）（魔力変換資質…電気）
今のところ念話をする事が出来る程度。

風斬 氷華（かざきり ひょうか）

追加スキル

・高魔力抵抗

体内に高純度の魔素が存在する為の魔法・魔術に対する抵抗が高い。リンカーコアは存在しないため、ただ魔法の事件に巻き込まれやすい一般人。

高町なのは

ユーノの念話を聞きとった事によって魔法の力を手に入れる。ジユエルシード事件を通して自らの道を自分の足で歩いていく事を覚えるが、魔法の力を得ても精々こんな職業もあるんだ程度の認識。相変わらず当麻と美琴中心で動く事がある。

追加スキル

・ミッド式魔導士

デバイス・レイジングハート

・ブラックなのはキャット

当麻の右手でも打ち消せるか分からない正体不明の謎の生命体。^{幻想}

曰く「将来見たら黒歴史」「なのはの新たな境地」「10万3000冊の魔道書にも載ってない存在」。お子様には早すぎるゼ☆

上条当麻

事件を通し体術に磨きが掛かり、不幸に磨きが掛かった。自身の中に自分を殺した存在がいる事を知るが、結局何故自分がこの世界に転生されたのか分からずじまいとなった。

追加スキル

ドラゴンストライク

・竜王の顎

イメージブレイカー

神曰く幻想殺しの本来の姿。自身ではどうやって発動・発現させるのかも分かっていない。

日常《ふつう》から非日常《まほうしょうじょ》の存在へ（前書き）

ちよこつと解説、能力者制御のピアスについて。本作品に出てくるピアスには様々な段階がある。以下は開発の道のり。

腕輪型…能力の全てを封じ、力を発動させなくする

←

ピアス…上と同じ効果。ちなみにスポンサーはバニングスグループ。腕輪じゃ目立って娘に友達が出来ないという理由から資金援助。

←

多種多様の形…指輪・ネックレス・チョーカー・ブレスレット・制御装置接続式のメガネ・手錠etc

またもやバニングスグループ。娘にはもっとおしゃれに気を使ってほしいという理由から。

←

ピアス（特殊OS仕様）…芳川が申請しカエル顔の医者が開発、所持者はアクセルと美琴。とある原作で言うレベル1〜2まで力を押さえつける事が出来る。戦闘の際、美琴は電気でアクセルは生体電気を操り装置の機能を停止させて力を振るう事が出来る。現在テスト品と言う名目で二人に渡されている。

日常《ふつう》から非日常《まほうしょうじょ》の存在へ

Side..はやて

——6月3日

はやては何時もの如くベッドの上で本を読んでいた。

「この本、中々おもしろいわ」

はやてが読んでいるのは、吸血鬼の女王が東京の一面に自分達の王国を作るヴァンパイアでバンドな物語だ。

「それにしても・・・なんですすかちゃん、こないなモノ持つとるんやろ？お姉さんのかな？」

どうやら同じ読書仲間の友達から貸してもらった漫画らしい。確かに内容としては軽くR15向けだ。そして、ふと、ベッド近くに置いてある時計に目を向ける。時刻はそろそろ日を跨ぐようとしていた。

「もうこんな時間かいな・・・寝るか」

本を閉じ電気を消し布団に入り込む。

「明日はウチの誕生日、とまりちゃん達が泊まり込み覚悟で遊びに来るゆーとったな・・・考えたらウチ、誰かに祝ってもらえるのは久しぶりや」

思い浮かべるのは今年から親しくなった双子に始まり、その友達達・その子達の兄や姉・家族同然の付き合いがある人達。そして・・・何時も不機嫌そうな顔をしながらも世話を焼いてくれる白い男の子。思い出しふと口に出してしまう。

「一人は寂しいな・・・お父さん、お母さん」

次第に目から涙が出る。

——そして、0時を回る。

部屋の中にある本棚が光る。より正確に言うならば鎖で固められ

た一冊の本が。

その本が宙に浮かび。鎖が弾けるように外れ、ページが次々に捲くられる。

「――封印を解除します」

「――ふえ?!」

「――リンカーコアの安定を確認。魔力量・規定値をクリア。闇の書の覚醒を開始します」

眠りに就こうとしたはやても、その異変に気付き起き上がる。

「守護騎士システムを起動」

光が溢れる。そして・・・。

「闇の書の起動を確認しました」

ピンク髪をポニーテールにしたの女性が言い。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主をお守りする守護騎士でございます」
金髪のショートボブの女性が続け。

「我ら夜天の元に集いし雲」

犬耳を生やした唯一の男性が後を次ぎ。

「ヴォルケンリッター。何なりとご命令を、マスター」

赤い髪を二つの三つ綱にした少女が最後に締める。

――この日少女は自身が背負った運命が開く

「きゅう――」

――当の本人は後ろに下がり過ぎて床に落ち、頭を打って気絶していたが

――朝

「と言う訳です」

「うーん、なるほどな」

朝。何時も通りの時間に起き、昨日起こった事は全て夢だと思い

リビングに行くと。昨日現れた人達が居た事に仰天し。さらに説明を受けて魔法の存在を知ってさらに驚愕し。

「御分かり頂けましたか？」

「うにゃ、さっぱりや」

全く分からない事に啞然とした。あ、全員間拔けな顔さらしとる。「でも、一つ分かった事がある。闇の書とか、魔法の力だとか、ウチがナンバー1だとか、新世界の神だとか、王の選定に選ばれたとか、そこらはさっぱりやけど」

「いや、そこまでは言ってねーいや、言っていないですむ？ ツツコミの才能がある子がおる。」

「とにかくや！ ウチに家族が出来たと言う事やろ？」

「・・・は？」

ピンク髪のねーちゃんー確かシグナムーが啞然としとる。それを無視して、テーブルの上に置いてある本を手取る。

「この子はウチが幼い頃から（今も幼いんやけど）気付いたら家にあったんや。この子のマスターはウチ、ならこの子の中から出て来た皆もウチの家族ってことやろ？」

「なんや？ 全員戸惑っとる？ ウチなんか変な事言ったか？」

そう考えている内に金髪のおっとり系おねーさんーこの人は確かシャマルーがオズオズと話して来た。

「あの、力が欲しいとかそう言う事は？」

「見た目と違って厨二かいな、要らんわ」

「いらっ！？ いえ、それよりもチューニ・・・？」

どうやら意味が通じなかったらしく、シャマルは頻りに厨二の意味を考えている。

「で、では、国が欲しいとか、世界を壊したいとかッ」

「自分の故郷を壊してどないするんねん。それに国なんて貰っても結局管理が面倒で手放してまうわ」

シグナムの意見もバツサリ切り捨てる。

「じゃ、じゃあマスターは「はやてや」、マス「はやて」・・・は、

はやて、足を治したいとかは？」

一瞬、思考が止まる・・・けど。

「・・・それも、考えたよ・・・」

「「では?!」」

「でも、その力を振るうなら誰かを傷付けなアカンのやろ? ウチはそんなのは認められへん」

その一言で全員黙る。

「では・・・我らの存在意義は・・・」

「それならあるやん」

シグナムの独り言に答えを返す。

「ウチの家族や、それが私の願い。皆、荒んだ人生送ったみたいやけど。ウチがマスターの内はそんな事絶対に認めないし、させへん。だからウチからの命令・・・いやお願いやな、家族になつてくれへん?」

私からのお願いに戸惑う4人。最初に行動したのはちっこい子だった。

「あたしは、良いよ」

「ヴィータ?」

「ヴィータちゃん?」

まず一人。

「それが主の望みなら」

次にザフィーラが。

「シグナム・・・」

「・・・それが、主はやての望みなら。命尽きる時までお傍に居ます。・・・よろしいでしょうか?」

そう言って微かに微笑む。

「こ、こちらこそよろしゅう」

あかん、これがカッコイイ女か!? 惚れるとこやったッ!

「ま、まあ取り敢えず、最初にやる事は・・・」

全員を見渡す。そして、柵からメジャーを取り出す。

「服を買う事やな」

「あ、あの、なんで手をワキワキさせてるんでしょう？」

「それはな？・・・そこに山があるからや」

「主、私は変身魔法で狼に変身出来るので服は要りません」

「了解や！それにウチもペットが欲しかったんよ」

「ペット・・・いえ、それが、主の、望み、なら・・・ッ」

なんや、ザッフィーが壮絶な覚悟をしとる。

――数時間後

近場の比較的大きめの呉服店、その名も『セブンスミスト』。

「いやー買った買った！久しぶりにお金をいっぱい使ったわー、でも金が流れても世の中はうまくいかないんやー」

「（主）はやて（ちゃん）！それ以上は駄目です！？」

「わふ？」

世の中って不思議やねー・・・おろ？」

「ヴィータは？」

「あら？」

「・・・あちらです」

シグナムが指差したのは今まで通って来た道。その途中にあるフアンシーショップ。取り敢えず近づいてみる・・・食い入る様に見ていたのは一つの物体。のろいうさぎ？

「ヴィータ、それ欲しいん？」

「っ！？は、はやて？！いい、要らねーよ！こんな変にゃの！」

口調がなのはちゃんみたいになっとるよ？

「ってあれ？無くなっとる？」

「何っ！？」

何時の間にかショーケースに飾られていたのろいうさぎが無くなっていた。売られたんかな？と言うより買う人居たの？

『ありがとうございますー』

「さて、これで超準備は整いましたね」

「うん、後ははやての家に行くだけ」

「まだ時間あるし、どうする？一旦帰るか？」

「なあ、それよりもさっき買ったウサギのぬいぐるみ、どう言う意図があったんだ？」

「「テメエ（浜面）の（超）趣味としてはやてに送るんだよ」」

「待て！だから言ってるだろ！俺はバニーなんかに興味は無いんだって！？」

「大丈夫、私は必死になって弁解してるはまづらを応援してる」

「お店から一つのグループが出て来る。って、麦野さん達かいな！いや、それよりもウサギのぬいぐるみ？」

「ん？なんだ、今日の主役じゃん。こんなとこで何してんのよ？つか、何か増えてない？」

「え？あーウチの後継人のグレアムおじさんの親戚の人でな、昨日から家に来てるんよ」

「ウチ、良くとっさにこんだけの設定作れたな。」

「ふーん・・・ま、良いか。どうせ何かあったも被害が行くのは美琴の旦那か、浜面だし」

「後ろの方でひで〜とか聞こえたけど、無視して話を進める。と言うよりも浜面さんが持つてる荷物、人一人分の高さがあるんやけど大丈夫なんか？」

「それよりも、さっきそのショーウィンドウに飾られていたのろいうさぎって、麦野さん達が買ったん？」

「え？ああ、そうよ？可愛かったし。まあ、アンタの誕生日祝いなんだけど」

「アレを可愛いと表現出来る麦野さんってやっぱり大物やわ〜。そして、視線をヴィータに向けてみる。・・・うわっめっちゃ良い笑顔！？そして、尊敬の眼差しを送ってる！！」

「ん？へえ・・・浜面！さっきのぬいぐるみ出せ！」

「注文多いな！？」

と言いながらも、山積みになった箱を持ちながらも、一つの箱だけを下ろしてる浜面さんも只者やないな。ほら、シグナムの目が獲物を見る目になっとなる。

「ほら、やるよ」

「い、良いのか？」

麦野さんがヴィータにのろいうさをプレゼントした。・・・麦野さん？後ろの方でなんや騒がしいんやけど？

「ヴィータ、お礼は？」

「うっ、そ、その、あり、ありがとう」

「どういたしまして・・・さて、テメェら少し話がある。ちよつと施設の方まで行こうか？」

「そ、総員撤たって居ない？！早いなあいつ等？！」

「おら、早く行くわよ、はーまづらあー！ボサつとすんなー！！じゃあ、はやて。夜に会いましょ」

そう言って麦野さんは浜面さんを連れてどっかに行った。セーブOrロード。

「超セーブをお願いします」

「リプレイ」

絹旗さんと滝壺さんがウチの横に現れた・・・上から。どっから来とんねん。

「所ではやて、この後超暇なんです。何か楽しませて下さい」

「駄目だよ、きぬはた。私は陰からはまづらを応援しないといけな
いの」

「・・・それも超面白そうです」

決して助けへんやな。

「あ、はやて」

「ん？なんや、滝壺さん？」

「気を付けてね、前見た時より、はやてに纏わりついてる闇が濃くなってるから」

振り返った滝壺さんの目が片方だけ青くなっていた。

「・・・では、行きましよう滝壺さん」

「ん」

そう言って絹旗さんは滝壺さんを抱え走り去った。って早っ!？
「・・・主はやて、彼らは何者ですか？魔力を使ってもいないのに屋根の上まで上がったたり、闇の書が覚醒した事も気付いているようでしたか？」

シグナムが話しかけてきた。その手には剣の形をしたアクセサリを持っていた。

「敵意は無かったようですけど」

「敵、じゃないよな？のろいうさぎくれたし」

「それにあの少年の動き、随分と鍛錬を積んだ者の動きだった」
「続けてシャル、ヴィータ、ザッフィーが話しかけてきた（1人
念話だったけど）。そう言えば言ってなかったっけ？」

「この世界には超能力者がいるんやと、さっきのショートボブの女の子とヴィータにぬいぐるみくれた人がそうらしいで？どういう仕組みで使ってるか知らんけど、頭で何らかの演算をして力をつこーとるらしいんやって」

「・・・なるほど、魔法とは違う法則で力を使っているのですか・
・魔力の流れが掴めないのが戦い難いが面白そうではあるが・
まあ、蒐集の対象外だな」

私の説明で取り敢えずの納得はしたらしい。ただシグナムの戦闘大好きっぷりには若干引いたが。それに最後の方も小声で聞こえなかったし。

「ま、ええか、はよ帰ろう。他の人達も来るかもしれへんし」

「「「?」」」

「主、今日は何かあるのですか？」

ザッフィーから疑問の念話が届く、他の皆も疑問顔だ。・・・あれ？言ってなかったっけ？

「今日、ウチの誕生日なんよ」

「誕生日？」

「それって、はやて、ちゃんが生まれた日ってことよね？」

「なあ、はやて。そのタンジョービって何だ？何か凄い事すんのか？」

もしかして、この子達今まで誕生日ってもんを祝ってもらえてない？いや、確かにウチの前のマスターに仕えてる時は、酷い扱いを受けてるかも知れないと思っと思ったけど。

「どんだけー？」

「「「「？？？」」」」」

どうやら本当に知らないらしく。仕方なしに、一般的な誕生日の祝い方を教えたら、顔を面白いほどに変化させてテンパリだった。家に帰るまでに落ちつかせるのに苦労した・・・これじゃ、マスターとか家主通り越してお母さんや。

――数分後

「む？・・・主はやて、家の中に何者かいます」

シグナムがそう言うと、その場に居た全員が何かしらの動きをとった。シグナムが前に出て、ヴィータとザフィーラがウチより前に出て左右に移動した。ちなみにシャルは車椅子を押している。

「何してるん？はよ家に入りーや」

「い、いやしかし！敵である可能性も！？」

「あーもう、じれったい！」

「ちょッ！？」

手動で車椅子を動かし、ドアを開ける。

「お帰りなさい、とはずみは帰宅した者に拝察します。あと玄関先で待ち続ける事に飽きました、遅いんだよこの子狸」

まずはじめに御坂家の三女が出迎える。って！？

「罵詈雑言がパワーアップしとる！？」

「おや？見知らぬ方達がいいますね。始めまして御坂はずみです、とはずみは初対面の方々に自己紹介します・・・取り敢えず汚いところ

ですが居間へどうぞ」

「スルーされた?! あと汚い言うな! 昨日の内に掃除したんやけど予想外の出来事があったんや?!」

「またまた、当麻義兄さんじゃあるまいし」

無言を貫く。

「・・・マジですか?」

「マジや」

そこではずみちゃんが私からシグナム達に目を向ける。そのシグナム達は予想外の事で動きどころか思考も停止していた。

「まあ、どうせ被害が行くのは当麻義兄さんかあの人に決まっています、とはずみは干渉を貫きます・・・貴方達、何時まで石化してるんですか。早くはやてを移動させなさい」

その一言で、シャル達が動き出す中、はずみちゃんへの警戒はしながらシグナムが話を切り出す。

「貴様は、どうやってこの家に入って来た? 確かに鍵はしたはずだぞ?」

「お姉さまの力で、です。以前上条宅に潜入した時と同じ方法で入りました。と言っても初顔の方には分からないだろう答えを言います。とはずみはまず貴方がたは自己紹介も出来ないのですか? と指摘してみます」

シグナム達の雰囲気为重たくなった。なんや、この空気。

「ふざけるのも大概にしろッ、貴様、魔導士だろ!」

「は?」

シグナムの一言で間拔けな声を出してしまった。

「・・・ああ、なるほど。そちら側の人達でしたか、とはずみは納得した気になってみます」

そのシグナムの問いに呆気ない程はずみちゃんは答えを返した。

「え? はずみちゃんって魔導士やの? って事はえくと、御坂家は次元世界だっけ? その人達ってこと?」

「はやて、その答えには間違えがあります。まず私“達”はリンカ

ーコアがありますがそれイコール魔導士の構図は短絡的で脳筋でも考えられる驚くほど簡単な答えですが、別に魔導士なんてなるつもりはありません、とはずみは答えを返します。あと捕捉しますと私達御坂家はこの世界生まれです」

なんや長い説明の中にシグナムをバカにした発言もあったが、取り敢えず御坂家の人間はこの世界生まれだと言う事は分かった。

「だったら、なんでデメエはこっちの存在を知ってるんだよ！」
魔法

今度はヴィータが突っ掛かる。ウチははよう台所に行きたいんやけど？

「つい一ヶ月程前に魔法関係そちらの事件に突っ込みましたが？とはずみは事実を言ってみます。・・・クソッあの真っ白ウサギ、私達を置いて行きやがって」

何やら最後は呪詛を吐いてるし。

「貴様の言い分は分かっ「それよりも」・・・なんだ？」

「そろそろ、キッチンに行って良いですか？お姉さまの電撃は喰らいたくないし、そろそろとまり達が（ーピンポーン）来ましたか」

そう言っではずみちゃんはシグナム達の敵意の視線をものともせずに通り過ぎ、玄関のドアを開ける。つーか此処ウチの家だよな？今更なんだが何であの双子は我がもの顔で家を利用してるんや？！

「イツエーイ！はずみー！見て見てー！！ってとまりは車椅子を押しながら答えてみる！！」

「いらっしやいませ・・・やはり実物で見ると面白いです、とはずみはとまりにグッジョブ！」

ドアを開けた瞬間、ウチも、シグナム達も動きがとまった。そこに居たのは両腕がギブスで固められ頭やそれ以外にも包帯を巻き、消毒液臭い上条さんと、最近良く一緒にいる所を見るインデックスさんと、とまりちゃん。・・・そこまでは良い、問題なのは車椅子の上に乗せられてるアクセルさんは何故に。

「拘束具？しかも契約すると王の力を与える事のできる人の衣装」

「ついでに言うとかクセルの耳のピアス能力制御装置は旧型の問答無用で能力を

外に漏らさないタイプだよ！ってとまりは追加で説明してみる！」

「シグラーー！！」

アクセルさんが呻き声を上げる・・・取り敢えず。

「写真とううや」

「良いですね、とまり携帯を」

「そう思っが一番に撮っといったよー！後で送るねってとまりはしゃべり疲れたから早く入りたいんだけど・・・どうしたの？」

「はやて、何か増えてないか？それに何だか不穏な空気」

当麻さんがシグナム達に気付く。

「えーとな、この人達は「ヴォルケンリッターだね」そうそうって！？」

ウチの言葉を遮ったのは銀髪シスターさんのインデックスさんだった。ってシグナム達が警戒MAXになってもうた？！

「ちょっと！はずみ！とまり！それにはやても！さっさと手伝いなさいよ！！」

「あ、あの美琴ちゃん？そんなに大声出さなくても聞こえると思うよ？」

その空気をぶち破るかのようにキッチンの方から美琴さんと風斬さんが出てきた。

「話はパーティーが終わってからにしよう？そっちだって無関係の人間を巻き込みたくないでしょ？騎士ならなおさら」

インデックスちゃんが念話で話しかけてきた。

「・・・シグナム、他の皆も・・・」

「・・・良いだろ、この場は主はやての顔を立てて戦うのは避けて置く。それに、今宵は主の祝の席だ」

「あーなんかまた厄介事か？」

「とうまの右手が怪我してるのは有難いかも」

インデックスちゃんの言葉の意味はさっぱり分からなかった。

それから誕生日会は大いに盛り上がった。パーティー間近になって、浜面さん達や、アリサちゃん達がようやく着たり（浜面さんだけボロボロだった）。シグナム達が料理を食べた途端涙ぐんだり。年少組の一部がシャマルにウサミミを付けて浜面さんが鼻血出した（その後で麦野さんにボコられた）。フードファイター真っ青の吸引力拔群のインデックスちゃんにヴィータが対抗心を燃やしたり。

——八神家居間

時刻はそろそろ日が変わる頃。居間にウチら八神家の面々と上条さん・インデックスさん・双子・なのはちゃんがいた（つーか、なのはちゃんもかい）。それ以外は両親が使っていた部屋だったり、客間で眠りにっている。ちなみにパーティーの際、ソファア等は端っこに纏められていたので向かい合う様に設置し直した。そしてシャマルが魔法を使って結界を張るらしい。

「・・・取り敢えず防音結界を張ったわ」

「では、改めて聞こう。貴様は何者だ？」

「第3管理世界ヴァイゼン出身、十字教第零聖堂区『必要悪の教会』ネセサリウス所属、魔道図書館インデックスだよ」

長いな。

「何が目的で我らに接触した？」

「あなた達を止める為」

「・・・それは蒐集の事か？だとしたら無駄足だったな、我らは主はやてと共にいる内は蒐集活動は行うつもりはない」

「シグナム・・・」

会ったばかりなのにその約束を守ってくれるんか。

「・・・それでも、あなた達はいざとなったら蒐集を行うから」

「どうゆう事だ、テメェ！アタシらがそんなにホイホイ意見を変えらなくても言いてーのか！？」

「おお落ちつきい！ヴィータ！・・・何か証拠があるんかいな？」

キレそうになったヴィータを宥める。でも、どうゆう事や？

「幸せであれば幸せな程、失いたくなくなるって事だよ。ヨハネ、資料を出して」

「Put out」

インデックスさんの持っていたひし形の宝石がしゃべったと思ったら。テーブルの上に紙束が出てきた。ウチとしては紙束よりも、デバイスってやつが気になる。

「・・・これはっ」

「そんなッ!？」

「う、嘘だっ」

「信じられん・・・」

それがシグナム達が見た後に出てきた言葉。

「あれ？夜天の書？・・・何処かで聞いたようーな・・・ああっ！皆が出てきた時にザフィーラが言いとったな！」

「む？私ですか？」

「そうや！『我ら夜天の元に集いし雲』ってゆーとたやん？覚えてへんの？」

「いえ、それがさっぱり」

ザフィーラが首傾げて考え考え出した。

「うわ、これはひでー」

「これも・・・魔法、何だよね・・・」

向かい側で当麻さんと膝の上に乗ったのはちゃんが、資料を呼んでの感想を言う。・・・ツッコまへんで？

「・・・それで、お前は我らをどうするつもりだ？管理局にでも突き出すのか？」

シグナムが疲れた様子でインデックスに問う。ってちょい待ちい！！

「だ、駄目や！せっかく出来たウチの家族や！勝手に居なくなるなんてイヤや！」

「け、けどはやてちゃん！このままだとはやてちゃんが!？」

「でもイヤなんや!」

段々と行動が幼くなってきたのはやて。そこへ反対側の席から声かけられる。

「あのゝ」

「「「「なんだ!!!」」」」

「うっ!?! いや、俺の右手ならその魔道書も壊せるんじゃないのかって思ってた」

「「「「.....」」」」

当麻の一言で騒ぎが収まり、全員の視線がインデックスの方へ向く。

「出来るよ?」

「ほ、ホンマか?! なら「でも」?」

「本ごとヴォルケンリッターの人達も消えちゃうよ?」

「どう言う事さ?」

当麻が説明を要求する。

「えっと、こう言う魔法系の魔道書は専門外だけど、確かに当麻の右手なら無限転生機能も、自己修復も、防御ぶろぐらむーも全て無力化して本ごと消去できるけど.....本の中に守護騎士ぶろぐらむーも入ってるから本を消した途端、守護騎士達も消えちゃうの」

その一言で、当麻に期待させやがって的確な視線が殺到する。

「で、でもその部分も何とか出来れば問題ないんだろ?!」

当麻が慌てて自分のフォローに回る。

「あの、その事でもう一つあるんですが」

「まだ何かあるんか? シャマル」

「はい.....管理人格の事です」

「確か、その本をその物を管理してる存在だよな? インテリジェントデバイスのじんこうちのーみたいな奴。実物は私も見た事が無いんだよ」

インデックスが説明に入る。

「つまり、引き籠りがおるんやな?」

「いや、端折り過ぎだろ」

「身も蓋も無いの」

「お母さんは厳しいんや」

はやての一言に全員が疑問顔になる。

「とにかく、そいつの事もどうにかしないといけないって事だろ？
なんだ、希望はあるじゃなーか」

「やったね！はやてちゃん！」

「よっしゃ！じゃあ！その問題も皆で考えていこうや！」

『はい！！』

「じゃあ・・・もう遅いし皆寝よか？」

時刻は既に2時近くを回っていた。

「そうだな。おい、双子って！寝てる！？」

「ああ、通りで静かやと思った」

こう静かやとかわええのに。毒舌以外。

「・・・アクセルの所に突っ込むか」

「それは却下や、ウチの家でこれ以上の狼藉は許さへん」

結局双子ははやてのベットに運ばれる事になった。

「当麻くん、私は？」

「とうま、私は？」

「お前らは美琴と一緒に部屋だよ！！」

しぶしぶと二人も引き下がった。

——希望の光は未だ遠く、されど光は見える

おまけ

「所で、なしてアクセルさんと上条さんは怪我だらけなんや？」

「これ？まあ、賭けに負けたから、かな？」

ジュエルシード事件の際の賭けの支払である。

「ほう、どんな戦いをしたのだ？」

シグナムが興味を持った。そして八神家の面々がまたかこの女と思った。

「いや、アノ野郎。風を操るを覚えてからますます容赦がなくなつてな？ つーか、ほぼ密室の訓練室でアレは無い」

「とうま面白い様に激突してたね・・・壁に」

「ついでに天井にもなの」

「・・・それなんて無理ゲー？」

実際ぼろ負けである。怪我内容は両腕骨折（右だけ2か所）に全身打撲、足だけは何とか無事だった。

その後ご機嫌のアクセルを旧型の能力制御装置で捕え、拘束服を着せ八神家へ運送した。

「まさに試合に負けて勝負にかつた！」

勝利条件はアクセルを八神家へ連れていく事（何でも有り）

日常《ふつう》から非日常《まほうしょうじょ》の存在へ（後書き）

——神は言った、この世界は様々な可能性を秘めている、と

——少年が出会ったのは錬金術が生み出した生命体

——少女は言った

「君は力が欲しいの？」

次回「非日常へようこそ無能力者」

——少年の決意は新たな戦士を生み出す

「俺は、アイツを守りたいッ!!」

ちよつとした愚痴。

この小説を書き始めて初めて知った事実

幸運値が下がってる!!!!!!

・バイトを決めようとして電話をかけようとしたら大地震が起きて
電話が繋がらなくなる

・寝違えて首となぜか左肩が痛くなった（ホント何故だ？）

・たまに電車に乗り遅れる

・マッ○でてりやきチキンを頼んだら普通のチキンの方が出てくる。
抗議しようとしたらレシートの方も普通の方になってた

- ・ 自転車を使おうとしたら空気が抜けてた
 - ・ 買ってきたアイスをいつの間にか食われてた
- e t c

不幸だーーーーー!!

あ、ちなみにチキンフィレオ事件は3連ちゃん狙ってます

非日常へようこそ無能力者（前編）（前書き）

本作ではもしかしたら浜滝のCPは望めないかも知れない。
そう思えてきた作者（俺）は悪くねェ！・・・だって安定し過ぎな
んだもん此処の麦浜

非日常へようこそ無能力者（前編）

夜空に月が浮かぶ中、一つの異質な影があった。

「世界が違っても人の営みは変わらない、か。アンタはどう思ってる？」

「私は特に、しいて言うならば大空を飛べればそれだけで満足です」

「ああ、アンタは鷹を元にして生み出されたからねっと、反応あり！やっぱり世界が違っててもいるのね」

その影が手に持っていた不思議な物を見てそう呟いた。

「・・・少し訂正します」

「なによ？」

「後は、最高の獲物がいれば最高かと」

「私達を狩ってる奴は？」

「・・・アレはその価値はありません。強さだけなら確かに彼以上でしょう、ですがその内側。戦いにおける芯が薄い気がします」

「・・・なるほどね。残念ね、せっかくの強さが台無しか・・・それよりも、早くアレを届けましょう、彼の力を。アレだけは渡すつもりは無いわ」

「同感です・・・急ぎましょう」

ふと空を見上げる。その目に映っていたのは月。

「こっちは見つけたわよ・・・ええ、そちらは？・・・そう、完成まであと少し、か」

見えない誰かと話している様にしゃべる。そして、視線が前を向く。その者達が見ているのは一つの街、その名も海鳴市。

Side…当麻

あの時の夢を見る。

右手に感じる命が消えていく感触。そして、最後に聞こえたあの言葉。

『恨まれ貰うわよ、あの子が生きる為に』

――6月末

「ツ――・・・嫌な目覚めだ」

アラームは鳴らない、何故なら今日は日曜日だからだ。夢の内容を思い出す、あの時からたまに見る夢で起きる事がある。はつきりと思い出せる時点でマジで呪いだ。

「・・・またか」

そして、傍らに感じる人の温もり。インデックスが布団の中に潜り込んでいた、こういう事は一週間に数回ある・・・おかしい、こいつには一部屋与えてあるはずなんだが。部屋を間違える寝癖でもあんのか？

「何だその寝癖・・・時間は・・・」

時計を見ると5時。幾らなんでも早起き過ぎる。・・・土郎さんの所でも行くか、日曜に鍛錬をする事は良くあるし。

・・・そこで新たな事実に気付く。

「何で美琴まで潜り込んでんだよ・・・しかも男物のYシャツ・・・」

誰だそんな事吹き込んだの！って美鈴さんしかいないじゃん?!
・・・なのははしてないよな？

「朝食は美琴に任せるか」

さっさと着替えて家を出る。

――高町家道場

目の前で恭也さんと美由希さんが打ち合っている。その光景を壁際で見ているが・・・目覚めが悪かったのか全く身に入らない。

「そこまで！」

士郎さんの合図で二人が構えを解き、一礼をする。まったく集中できなかった。

「どうしたのかな？当麻君、全然集中出来て無かった様だけど・・・悩み事でもあるのかな？」

士郎さんが話しかけて来る。見れば恭也さん達は道場から出ていく所だった。

「・・・士郎さんは、目の前で思いを託された事ってありますか？」

「・・・無い、かな。恭也は僕の連れ子だったのは知ってるね？あの子の母親、まあ僕の前妻とは正直遺言さえ無かったから。その後は彼女の墓の前で恭也を強く育てる、と誓ったぐらいかな」

士郎さんの表情は強く育った恭也さんを誇っているようだった。

「そうですか・・・相談に乗ってくれて、ありがとうございます」

「構わないさ、何時も当麻君にはなのはが世話になっているし、我が儘を聞いてくれるからね・・・そのせいか、僕達よりも君や美琴ちゃんに甘えるようになってしまったから、頼ってくれるのは嬉しいよ」

あゝ何かすいません。

「朝食はどうする？」

「今日は遠慮します。こんな状態だとなのはに心配かけちゃいますから・・・それより士郎さん」

「何だい？」

「なのはの寝間着ってYシャツじゃないですよね？主に男物で小学校高学年サイズ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事は貰えず士郎さんは立ち去って行った。・・・それって肯定ですか？！

——海鳴公園

「なんか久しぶりだな、コンビニ弁当」

高町家での朝食を断った俺は公園近くのコンビニで朝食兼昼食の食糧^{弁当}を確保して食べていた。ちなみにメニューは幕の内と500?のペットボトルのお茶だ。

「・・・何か、一人でボートするのも久しぶりな気がする」

病院では看病と、見舞いと、遊びに来る奴らで賑やかだったからな。

「おや?そこにいるのはウチのガキのお友達じゃねーですか」

なんかアリサそっくりの声が聞こえたのでそちらに顔を向ける。

そこにいたのは現在高校生のアニエーゼと、そのアニエーゼを何処ぞの第五ドールの様に抱えている身長2メートルはある男の人だった・・・誰よ?

「お久さーアニエーゼ・・・で、どちら様?」

「駒場利徳だ」

「ウチと同じ大学に通ってるロリコンですよ」

「否定はしない」

「はぁ・・・はじめまして上条当麻です。って!そこはカミングアウトしちゃ駄目でしょ!?!」

なんかまた濃いメンバーが孤児院組に増えたな!?

「アンジェレネに微笑まれて動きが止まる様な男はロリコンで十分ですよ」

それは否定できないが、アニエーゼを見る。身長は確か160後半、すらりと引き締まったウエストとヒップ、ストンと落ちる胸・・・ロリコン派ならほっとかないだろう童顔。

「・・・デートですか?」

その一言で二人とも顔を背ける。分かりやす!?

「そ、そんな事はどうでも良いんです!・・・何か悩み事ですか?」
なんか無限ループになりそうなんで色んな所をぼかして話す。

「・・・これは、俺では答えられんな」

まあ、普通に生きてくならまずあり得ない問いかけですから・・・いま俺、自分自身で普通じゃないって言った？

「私は・・・生きる為に見殺しにした事がありますよ」

アニエーゼが話し始めた。

「私は幼い頃シスターオルソラに拾われるまで路地裏を根城にしました・・・幼い頃つっても5、6歳ですが」

何かを懐かしむ様にアニエーゼは話しを続けた。

「両親が殺され、生きる為に色んな事をしましたよゴミを漁り、物を奪い、盗みを働き・・・死んでいく人、死んだ人からも売れる物を盗んでは金に換金して生きてきましたよ・・・それでも限界はあった。それでも生きたい一心で体も売ろうと考えた時ですよ、あの人と出会ったのは・・・その時は女神みたいに見えました・・・後に鈍間な天然人間だと気付きましたかね」

笑ってしゃべっているが話の内容が暗過ぎて笑えねーッス。

「まあ、結局何が言いたいかと言うと、自分でやった事を何時までも悔んじやいけねーって事ですよ」

まあ、言いたい事は分かります。

「まったく、こんなのは私じゃなくてシスターオルソラの方が適任でしょうが」

「いや、随分様になってたぞ？」

「下僕風情がご主人様に意見すんじゃねーです」

「・・・すまん」

いやいや、何で貶されたのに嬉しそうな顔するんです？そして、なんでアニエーゼさんは顔を赤らめて悦に入ってますか？！

「ま、まあ、私に言えるのはこのくらいです・・・行きますよ犬」

「分かった」

そう言ってアニエーゼは駒場さんの肩に乗って去って行った・・・つーか周りの人がドン引きしてるぞ？

「結局、プレシアの死を背負って行くしかないんだよな・・・うし！街中でも遊びに行くか！！」

「お！カミやんはっけーん！」

「ん？土御——」

——その瞬間、俺の意識は途切れた

Side…浜面

薄明かりの夜の道を歩いて帰る。空を見上げれば生憎の曇り空で時間を確認すれば夕食にはギリギリ間に合う時間だった。

「遅くなっちゃったな」

いつも通りの天草式の訓練で土御門が『いつもどおりじゃ飽きるだろうから今日は特別ルールにゃー』と言って拘束した当麻を連れて来て、複数対複数の乱戦を提案して建宮さんや年配の諫早さん等が悪乗りした結果、その騒ぎを聞いた神裂の祖父が身近にいた当麻を殴り戦いが始まった。

その後、気絶しては復帰しの繰り返しで最終的にキレた神裂が暴れ回ってお開きになった・・・最初の時点で既に生き残りを掛けたバトルロワイヤルになってるし。チーム分けはどうした？

「・・・それにしても、才能が無いな俺」

そもそも経った2年しか天草式の格闘技を習っていないのだが、それでも劣等感を感じていた。それゆえに色んな格闘技の動きや、技術、さらには暗器術さえも見て、習い、試し、周りの人達の意見を聞き、改良しさらに鍛えていた。それでも目指している者は遠く先に見える。

「やっぱり、実戦で動けるかどうかだよな・・・」

浜面自身も天草式を通じて裏事情がある程度理解していた。海鳴がある程度の力が存在（土郎達御神流や天草式本家、意味不明の女子寮等）してるので安全だが、世界中で能力者を攫ったり犯罪者と

なる者がいる事を。

「アイツ、強くなつてたな・・この程度じゃ、力不足・・だよな・・」

独り言とも、愚痴とも聞こえるその声に。

「力が欲しいのかしら？」

聞いた様な声色。だが、明らかに違う人の声が答えた。

「・・・なに？」

「でも力は強ければ強い程、厄介事が付き纏うし。それ相応のリスクを負うわ・・君は一体どんな理由で力を求め、力を持つ事の覚悟を持ってるのかしら？」

前方の道、街灯に照らされ一人の女性が立っていた。髪は金髪のロングヘアで碧眼、何処かの制服の上から白いコートの様な物を羽織っており、年は中学生程の少女だった・・ただ、その少女を見た途端、捕食者に見つめられた様な感覚に襲われた。

「アンタ、何者だ？」

本능が彼女は危険だと判断し、隠し持っていたナイフを取り出す。「あら？何時の間にナイフなんて持ってたの？もしかして暗器？・・その年で違和感を感じさせない様に隠し持ってるなんて凄いわね」
「良いから答えろ！アンタは何もんだよ！？」

その少女は刃を向けられても気にせず歩きます。

「その直感は評価に値するわ。でもね・・始めに質問したのは私」
そのまま歩き続け、間合子に入ったのも気にも留めず目の前まで来た。いや・・振れなかった。例え腕を鍛えたとしても実際に振れなければ意味がない。それを、改めて思い知った。

「もう一度聞いわ、あなたは力を欲しいのかしら？力を持つがゆえに付きまとう責務を負う覚悟は？」

俺を見つめる目を見てみると、何故か一切の誤魔化しをしては駄目な気がした。

「正直言って、俺は力の責務とかリスクだとか分からねーし・・・世の中、力が全てじゃないって言うが、守るためには力が必要なのは事実だ」

何で俺は行き成り出会った人に、それも短刀を突きつけながらこんな事しゃべってんだ？

「俺には特殊な力なんて無いさ、覚悟なんてのも持てねーよ・・・でもよ、そんな俺でも守りたい奴がいるッ！」

「・・・その子と世界、どっちかしか選べないなら？」

「そいつを選ぶかもな。んでもってそいつがいる世界を守る。どんな手を使ってでもだ」

「く、くくく、あははははは！キミ、最高！！その子、女？もしかして惚れてんの？」

くそッ！思いつきり笑いやがって！？俺だって柄じゃないことぐらい分かってら！！

「・・・どうだろうな」

ただ、幼い頃から一緒に、寂しがり屋のくせして意地っ張りで、俺を下僕扱いする割には世話焼きで心配してくれるアイツの事は嫌いじゃない。

「あー笑った・・・うん、これあげる」

そう言っただけは奇妙な物を渡して来た。形は六角形で色は鋼色、触った感触は鉄の様に硬い割にそれほど重たくは無く、中心はさらに凹んでおり逆さのV字マークに4本の横棒が入ってるマークだけが刻んであった・・・そして、何処か温かみを感じた。

「おい、コレなんだよ？」

「今からソレはキミの物、いや、君以外には渡してはいけない物よ」
どう言う事だ？俺以外に渡してはいけないって。

「さて、じゃあ始めましょうか」

「始めるって？」

「その使い方。まあ、取り敢えず一言」

「な、なんだ？」

「生きたければ、相手を殺しなさい。さっきみたいに刃を相手に向けただけで止まってたら・・・麦野沈利も死ぬわよ？ 鷲尾！！」

「なッ——！？」

「了解です」

行き成り背を掴まれ、宙に浮く。そして、物凄いスピードで街外れに飛ばされる。

——海鳴市外の森

市外の森に突き落とされる。幸い木々が緩衝材になったようで大した怪我は無かった・・・所々痛むけどッ！？

「っっ・・・な、何なんだよ一体？」

「こっちだ」

「っ！？」

後ろから声を掛けられ振り返る。

そこには見た目は人だが、一点だけ人とは違う所があった・・・両腕。肩から先が機械のようになっており、手の部分は鋭い鉤爪で肩から翼が生えていた。

「アンタ、何者だよ？ さっきの女も、なんで麦野の事を知ってるんだ！？」

「質問ばかりだな、今気にしなければいけないのは・・・貴様の命だぞッ！！」

とっさに避けられたのは幸運か、日頃の鍛錬のお陰か。男のプライドで後者だと思いたいが、それでも無様に地べたを転がる。

「ッ！（人里は・・・駄目だ！とにかく体勢を——）」

「遅いぞ！」

それよりも早くに向こうが踵落としを決めて来る。それを横へ転がりながら隠し持っていた飛針を取り敢えず投げる。

「ッ！？」

それが丁度顔に向かって飛んだので、ソイツは一度後退した。その間に俺も木の後ろに隠れる。

「そうだ、やはり獲物は生きが良い方が狩りがいがある・・・褒美に先程の質問に一つ答えてやろう」

行き成りの実戦。急激な運動と緊張で固まった筋肉をほぐしながら耳を傾ける。

「我々はホムンクルスだ」

「・・・という事だ」

場所が割れる危険もあるのに聞き返した・・・いや、奴の視線。ハッキリと俺の方を向いている。

「始まりは中世のヨーロッパ圏で流行った錬金術だった。無論その当時でも眉唾ものだったわ」

何処からか先程の少女の声も聞こえてきた。・・・何処かで見てやがるな。

「でも本当は実在した。当時の物理学や生命工学さらにはオカルト、在りと在らゆる科学分野を結集してすることで幾つかの副産物を生みだしたのよ」

「おおおおおお!!!」

「っ!?!」

「バキィィィ!!!」

とっさに動けたが隠れていた木を薙ぎ倒され、移動せざる負えなくなる。

「それが今そこにいるホムンクルスと、貴方が持っている核金よ」
その一言で、先ほど貰った物を取り出す。

「コレ、が?」

「戦場で立ち止まるとは、死ぬぞ!!!」

「しまッ——」

直後、盛大に吹き飛ばされた。

「中々粘るわね」

先程まで浜面がいた場所に二人が揃っていた。

「ええ、それに・・・」

「・・・へー、やるわね。パパが見たら『将来は良い戦士になる』とか言いそうね」

浜面を吹き飛ばした人物、鷺尾の腕の関節。機械の繋ぎ目に投げナイフが刺さっていた。

「追いかけます」

「ええ（そろそろかな?）」

再び空を飛び浜面を追いかける。

「ぐっ——!! ツはあ、はあ、はあ・・・ここ、廃ビルか?」

派手に飛ばされ、何バウンドもしてようやく止まった場所は山奥の廃ビルだった。何とか受け身は取れたようで動ける事には動けるが。

「いっつゝゝゝ（マジでアクセルと戦う当麻はすげえな、こんな痛みを何度も味わってたのか・・・）」

「あ、あの」

「っ!?!」

突然声を掛けられ慌てて顔を向ける。そこには何処かの学校の制服を来たメガネを掛けた少女がいた。

「ぐッ! がッ!?! （何でこんな所に!!?!）」

声を出そうとしても体の痛みでうまくしゃべれなかった。

「あ、あの! 大丈夫!?! え、ええと、こんな時はけ、携帯! あれツ?! 無い!?!」

「い、良いから! 早く帰れ!! 此処は——」

「ほう、目撃者か」

言い終わる前に鷺尾が近くに降り立つ。

「え?・・・あ、ああっ!?!」

「目撃者は始末しろとの命令だ」

「ま——」

—ズシャアアアアア！！！！！

「あ・・・まひ・・・ちゃ・・・ん」

右肩から大量の血を噴き出し、少女は自らの作った血溜に崩れ落ちる。

「————ウゝッ——」

その悲惨な光景を初めて目にし、鼻から鉄臭さを嗅ぎ取り脳が理解した途端・・・吐いた。

「ほう？人の死を見るのは始めてか？いや、それとも目の前で死体で作られるのは始めてか？」

目の辺りにした死の恐怖。頭の中が真っ白になる。・・・そして、アイツハ、ナニヲ、イツテイル？

「————何で、殺した？」

自分でも驚くほど低い声が出た。

「言っただが？目撃者は始末する、と」

「それだけで・・・たったそれだけの事で人を殺したのか！？」

「主の命令は絶対だ」

「っ！おとおおおお！！」

その一言で、全てをかなぐり捨てて殴りかかった。

「その年で中々鍛えられている。だがその程度では俺は殺せんぞ！！」

大きく振りかぶる腕を姿勢を低くすることで避け、通り過ぎる際にナイフを取り出し脇に刺す・・・が、刺さらなかった。それどころか刃が欠けている。

「っ——良いぞ、良いぞ！その目！その殺気！」

後ろへ通り過ぎ反転。追撃で飛針を数本放つが、翼の羽ばたき一つで吹き飛ばされる。

「おおおおお！！」

「ッ——」

空中からの切り裂きをバックステップでかわし、短刀二本を取り出す。

「ッ——」

「ハハハ！良いぞ！！暗器使いと言うのも中々楽しませてくれる！！」

連続で切り裂いて来る鉤爪を、後退しながら二本の短刀で捌く……が。

「——だが」

「くっ！」

獲物の差か短刀に罅が入る。

「その獲物では耐久力不足だ！！」

「！！！！」

短刀が碎かれ、力任せに投げられ。

「ガハッ——」

ビルの壁に叩きつけられる。肺から酸素が強制的に出され、急激な疲れと痛みで壁に寄り掛かる。

「もう終わりか？」

「駄目かしらね」

何時の間にか鷲尾の傍に少女がいた。

「く……そ……ッ」

携帯が鳴るが痛みで腕が上がらない。

その携帯を何時の間にか近づいて来た少女が取り上げる。

「（この音、麦野からだ）……返せ、よ……」

「イ・ヤ」

そう言って少女は電話に出る。

『はーまああづううらあああ！テメエ、何処ほつつき歩いてやがる！！もう夕食の時間過ぎてんぞ！！』

『仕方有りませんよ麦野、だって超浜面ですから』

携帯の向こうから聞こえてくるのは、俺の守りたい日常・・・そ
つか、簡単な事だったな、守りたくなったら守りてーんだ。

『?どうした、浜面。何時もの様に慌てふためいて良い訳しろよ?』

『ついでにその場で超土下座してもらえと超大受けです』

あいつ等、心配してくれてるんだな。後、絹旗。今度テメエのお
やつ食ってやる。

「ごめんねー今、私達とお楽しみ中なの」

そんな中、少女が電話にでる。

『ーッ・・・誰だ、テメエ?』

「さあ?ご家族の方なら私達の仲を邪魔しないで下さる?」

『ぶち殺すわよ?今すぐ場所を言いなさい、速攻で私の下僕を誘惑
した事を後悔させてやるわよ』

「マ、ズ・・・ッ（まだ、体の痺れが!?!）」

「別に良いわよ?今私達がいるのは海鳴市外の森の中の廃ビルよ・
・さて?間に合うかしら?」

『超不味いです麦野!その近くは崖がありますッ!!!』

『!?!?浜面!生きー（バキンッ!）』

携帯が壊され電話が強制的に切られる。

「さあて、また一人、いやこの場合二人かしら?それとも仲良く三
人?」

「テ、メエ・・・ッ!」

体に活を入れ立ち上がる。動ける!まだ動ける!!

「あいつ等に・・・手を、出すなッ!」

「それはキミ次第ね」

「（武器は・・・駄目だ、全部効きはしない・・・なら最後は・・・）」
隠し持っていた核金を出す。・・・だが、肝心の使い方が分から
ない。

「さあさあ、どうする?浜面仕上くん?」

少女がニヤけた笑いを浮かべる。

「（・・・気に入らねえ、そうやってニヤついて）さ・ね・・・」

そうやって今度はあいつ等を、麦野をコロスノカ？

「（ッ来た！あの核金とのシンクロ率が上がってる）どうしたのかな？」

「（平然と人を殺して）させ、ねえ・・・」

殺されてたまるか、殺させねえ。ならどうする。

——戦え

「（そうだ、戦うんだ）」

——戦え・・・う

「（こんな理不尽と）」

——戦・かう

「あいつ等を、アイツを！」

——戦う

「守るためにッ」

核金が変化し一つの武器に変わる。

「俺は『戦う』！！」

——今宵、一人の戦士が生まれる

非日常へようこそ無能力者（前編）（後書き）

次回の投稿は明日・・・かなー？
後編＋タグ変更・追加があります

非日常へようこそ無能力者（後編）

Side..――

目の前の少年が発現させたのは継接ぎだらけで鏢無しの片刃の剣。だが、彼らが見ていたのは刃の方ではなかった。

それよりも柄の更に先にある柄頭、そこから更に連結具に繋がれているモノ。

――1メートル程の長さがある真つ赤な布

それは彼らにとって最も印象深い物。

鷲尾にとつてかつて己と戦い、最愛の少女と仲間たちの為に世界を救い、最後は人として逝った人物が使っていた武器に着いていたモノ。

少女にとって映像資料でしか見た事が無いが、それでも自分にとって最も印象深い男が付けていたモノ。

「フ、フフツ、やっぱりサイコーね、彼」

「最後の確認作業、行きます」

再び戦う為に前に出る。

Side..浜面

持ち手を握る。それはずっと使っていたかの様に自分に馴染む。

「来いよ！化け物！！」

こういった原理で起動しのかも分からない・・・が、まずやるべき事は目の前の脅威を倒す事。でなければ自分の大切な者が殺される。その為に両手で剣を構える。

「おおおおお！！」

「――ッ」

鷲尾が飛びながら切り裂いて来る。それを剣で反らす。さっきまでと違い衝撃が緩和され、罅が入る事もなかった。

「――ッおおお!!」

今度は攻撃を反らしながらも反撃する。

――その瞬間、刃が発光する・・・色は輝く様な山吹色

「「ッ!」?」

相手が防御するが・・・始めて腕の部分に傷が出来る。その事に両者が驚愕する。

――一人は始めて傷を付けられた事に
――もう一人は刃が燈したその輝きに

「(なんだッ?! 刃が光って・・・傷を付けられた? ナイフでも短刀でも傷つか無かったのに・・・もしかして)」

「(・・・なるほど)」

「「威力増幅(か)――(?)」」

二人共にその正体に辿り着く。

「だが、当たらなければどうという事は無い!!」

「――ッ!」?

今度は、翼から羽が射出される。それを剣一本で弾き続ける。

「これなら近づけられまい!(さあ、見せてみる!!)」

「――ッ! な、嘗めるなああ!!」

袖から一つの物を放り投げる。それは細長い筒状の物、それが羽の一つと衝突し・・・光が溢れる。

「ッ!?(閃光弾?! 目暗ましか!!)」

「おおおおおお!!」

「――ッ 刺突! 玉砕覚悟か!」

一瞬とは言え相手の目を潰した浜面が体勢を低くし、己の武器を体で隠しながら最後の特攻を仕掛ける。

「だが甘い!!」

それでも一瞬にして反応し、顔面に向かって鉤爪を突きだす。それを、体を回転させながら左手に持った短刀で反らし。

「っ!?(暗、器・ツ)」

「おおお!!」

右手の本命で左腕を切り落とす。

「がああ!!」

「これでッ!!」

さらに追撃で剣を引き戻し、心臓に向かって突き出すが。

「き、貴様こそ嘗めるなあああ!!」

即座に思考を切り替え、後ろに後退する。

「っ!?(届かない・・・届かないのか・ツ)」

遠ざかる体、離れる敵を追いかけるように剣が進む。

「(届け、届けよッ、あと少しなんだ!此処でこいつを倒さないと、麦野が!絹旗が!!)」

それでも諦めきれない思いが布を輝かせる。

「(くそっ!届け!届け!!)届けええええ!!」

その意思が武器に届く。

柄が前に傾きトリガーが現れ、刃の部分が折れ曲がり銃口が現れる。

「なッ――!!?」

相手が驚愕し、一瞬だけ動きが硬直する。しかし浜面にとってその一瞬こそが最後のチャンス。

「いっけえええ!!!!」

躊躇なくトリガーを引く。

―ゴッツツツツツ!!!!!!!!

銃口から山吹色の閃光が撃ち出され、鷲尾や、その背後の柱も撃ち抜き。轟音を断てて反対の壁を突き破る。

——直後、ビルが崩壊する

「ハア、ハア、ハア（な、何とか下敷きにはならなかったか）」

射撃の反動で反対側に吹き飛ばされ。ビルの崩壊から免れた浜面は、崩壊したビルを見てそう呟いた。

「どう？ 力を持った気分は？」

「ッ——？！ お前、生きて・・・ッ」

すぐ後ろに先程の少女が居た。すぐ近くには先程まで戦っていた男が転がされていた（左腕が無く下半身が吹き飛んでいたが）。

「？・・・ああ、安心しなさい、もう戦えないから。ついでに言うとホムンクルスの弱点は人と違って章印よ」

そう言って少女は男の額を指差す。が、すぐに放り捨て再び俺に向き直る。

「で、どう？ 力を持った感想は」

そう言って俺の後ろ、瓦礫の山となった廃ビルを見る。その光景をみて・・・急に震えが来る。それは歓喜によるもので無く、恐怖からによるもの。

「ふうん・・・ま、その事が分ければ大丈夫か・・・そうそう、名前を付けてあげる」

「は？ 名前？・・・核金じゃねーのか？」

「それは物自体の名前よ、あなたを人間と言ってるのと一緒に。そうね・・・『サンライトハートGS』よ」

「って、何か勝手に名付けられてるし！？ そ、それよりもコレの使い方！ ！」

「知らなくても良いわ。要はその力を誰にも渡すなって事だから。あ、そうそう。廃ビルの中で殺した女の子だけど・・・気にしないで良いわよ？」

「ッ・・・どういう事だ!？」

「あの子はこの為に用意した人を模して作った人形よ」

「・・・は？」

「言い方を考えれば色々あるわ、『人そっくりの人形』『肉の塊に人格プログラムを植え付けたモノ』『食用肉人形』『なんちゃってWナンバー』。つまりは死んでも誰も悲しまないし、元々いない存在だから・・・良かったわね、誰も死んでなくて」

一氣に気が抜ける。

「さて、私達は行くわ」

そう言って少女は男を担ぐ。

「なあ・・・アンタの名前は？」

「・・・ヴィクトリアよ、性は、捨てたわ。運が悪かったらまた会いましよ（それは戦いの運命が待ってるって事だけど）」

そう言ってヴィクトリアは去っていった。

「・・・はあ・・・動けねえ、体中が痛え、思い出したら腹減ってきた」

遠くから声が聞こえる。恐らく先ほどの山吹色の閃光を見て場所を特定したんだろう。握っていた銃はいつの間にか核金に戻っていた。

「サンライトハート、ね・・・あんな物騒なモン、誰にも渡せねーよ・・・腹減った〜」

誰にも見られない内に体の中に隠した。

Side・・・ヴィクトリア

そこから少し離れた場所、絹旗が自殺の名所と言った崖に腰かけていた。傍らにはボロボロの鷲尾が置いてある。

「凄いわ、あの核金とのシンクロ率が最初の頃の40%台から90%越えしてるわ」

手には手の平サイズのノートパソコンがあり、その画面には様々なグラフが表示されていた。

「ではやはり」

「ええ、仮説でしか無かったけど並行世界における異次元同一体説も、オカルト分野の物に魂は宿るのかって言うのも正しいみたいね」
「あの核金は彼以外使っていないですし、数十年も彼と共にありましたから」

「・・・もつとも、元の世界の帰り方なんて知らないから表彰もされないし。・・・戻っても彼らはいない」

夏の空気を含んだ生暖かい風が吹く。

「さて・・・何時までいる気かしら？」

「何だ、気付いていたのか」

彼女の後ろの木から一人の人物が歩いて来た。年は当麻達と同年代。茶色い髪に長ズボンにYシャツ、その上からブレザータイプの上着を着ていた。

「中々面白い見世物だった」

「あら、彼らを逃しても良いの？」

少女の視線の先には先ほどよりもボロボロの浜面と二人の少女が街に向かって帰っていく背中が見えた。

「俺らの任務はテメーら化け物の排除だからな」

二人の間は10メートルは離れて話し合っていた。

「・・・ねえキミ、私のパパは強かった？」

「ああ?・・・ああ、あの長髪で上半身裸の大男か、強かったんじゃないね?」

「そう」

そのどうでもよさげな態度にも苛立ち一つ立てなかった。

「さて、まだ仕事が残ってんでな・・・くたばれ、化け物」

少年の背から純白の翼が現れる。

「未元物資^{データマター}って言ったっけ？」

「おう、この世ならざる物資を生み出す俺の^{超能力}力だ」

少年はその事に誇っているかのように自慢げに話す。

「呆れるわ、^{暗黒物質}ダークマターってのは確かに未知の物質だけど世界が構成する上で必要な物質よ？この世ならざるなんてボケるのも大概にしときなさい」

その自慢話を呆れ顔で切り捨てる。

「・・・遺言はそれで良いな女」

少年の背から新たな翼が一对生える。それが少年の心境を物語っていた。

「残念だけど、此処にいる『私』は本体から遠隔操作可能な人型のインターフェイス。殺しても本体が死ぬわけじゃないし痛覚も繋げて無いから拷問もム・ダ」

「そうかよ、じゃあさっさと消きえろ」

純白の翼が少女ごと地面を薙ぎ払う。

——後には、抉れた地面だけが残った

「おう、俺だ・・・ああ、早く転送してくれ。はぁ？逃げないのかって？何処に逃げんだよ、俺の知り合いなんて全員殺されただろうが・・・ああ、さっさとアレの攻略方でも考えてくれ、俺は荒事担当だろ？」

数分後、そこには誰もいなくなった。

Side Out

Side..浜面

久しぶりの病室。ここに来るのも随分久しぶりな気がする。

「・・・やべえ、病室が懐かしい気分になるってどうなんだ？」

「君もこの病室の常連なんだけどね」

カエル顔の先生が独り言にツツコミを入れる。

「どうもありがとうございました。そう言えば、夕ご飯を食べ損ね

てしまいました」

「いえ、シスターオルソラ。今ここで出す話題ではありません」

「あら？・・・そうでしたね、浜面さん？お怪我は大丈夫ですか？何時までも帰ってこないで麦野さんと絹旗さんがそれはもう落ちつき様がなくて大へ」「それ以上しゃべんなオルソラ！！」あらあら、ところで夕飯はどうしましょう？」

「いえ、ですから・・・面倒ですオルソラを連れていきますよアンジェレネ」

「わ、私ですか？！はう！？痛いれす」

大声を出したアンジェレネがルチアに頬を引っ張られる。

「病院では静かにしなさいシスターアンジェレネ、頬を引っ張りますよ？」

「ひ、引っ張ってから言わないで下さって！わ、分かりましたからもう一度引っ張らないで！！！」

「あらあら、では後は若い人達でどうぞ」

オルソラ姉さんとルチ姉とアンジェレネが退室していった。ちなみにアニエーゼ姉さんは孤児院で他の子供の世話をする為に残っている・・・それにしても。

「（空気が重てえ）」

空気ブレイカーのオルソラ姉さんがなくなった途端、空気が重くなる。発生源は麦野。

「・・・し、心配してくれたんだな」

「・・・」

す、滑ったか？！

「・・・む、麦野さくん？」

「・・・何があったのか、話してくれないの？」

「う、すまん」

そう言えば病院に運ばれた理由も『不良に絡まれた』で通したんだっけ？でも本当の事を言える訳ないし。

「は、浜面！」

「な、何だ?!」

「わ、私が心配してやってるんだから! 早く治しなさいよ!! ま、まあそれまでは遊びに来るついでに見舞いに来てやんない事はないからな!!」

麦野が壊れたか?・・・まあ、心配はしてくれた・・・んだよね? それにしても、これがツンデレってやつか?と言うよりも明後日には退院なんだけどな。ツツコミ所がいっぱいあるな。

「麦野」

「何——ッ」

手を握っただけで動きが止まったし。

「あ、あんた何「ありがとう」・・・何よ? 行き成り」

「何となくな、言いたくなっただ」

握った手から感じられる温かさに生てる事を実感させる。その安心感からか瞼が重くなる。

「浜面?」

「お前に、心配されないぐらい、強くなるから・・・だから、さ・・・」

笑っていつもの麦野でいろ。

——その事をちゃんと伝えられたか分からず意識が落ちる

Side…麦野

眠った浜面を見る。相変わらず手は握ったままだ。本来なら他の誰かが居れば握られた瞬間に手を叩くが、幸いなことに誰もいなかったのでタイミングを逃した・・・だが。

「ばーか」

今だけはその手を放す気になれなかった。

「浜面のばーか」

手の平から伝わる鍛えられたごつごつとした感触。それが否応な

しにも目の前にいる幼馴染を異性だと実感させる。

「何が強くなる、だ・・・アンタは別に強くなかったって良いんだよ。無理すんなヘタレ。何時もみたいに後ろに引っ付いてくれば良いんだって」

何時もなら言わない事が口から出て来る。それは病院と言う環境だからか・・・それとも自分の知らないところで怪我をした浜面を見たからか。

「もしアンタが、私の横とか前に来たら・・・離れたく、無くなっちゃうじゃない」

能力者は孤独になりやすい、何故なら幼い頃から力を持っているがゆえに周りから人がいなくなるからだ。自分もあの時、力を振るった後はまた自分の傍から人がいなくなるんだと思っていた・・・だが。

「自分の事ながら重いわね・・・美琴の事をヤンデレ候補って言えないわ」

目の前の人は、たった一つの出会いでその壁を乗り越えた。そして成長するにつれて段々とその存在が自分にとって大きくなっていく。

「ホントに・・・バカなんだから」
周りを見渡す・・・そして。

「・・・んっ」

少しどちらかにするか迷ったが・・・結局、頬にキスをした。

「お休み、はーまづら」

おまけ

彼女たちの反応

——絹旗の場合

「超えらいモノを聞いてしまいました」

絹旗が病室の前で独り言を言う。空気が重かったので部屋に入らず・・・こっそり覗き見していた。

「どうしましょう、弄ったら何か上下に超真っ二つにされて絹／旗されそうです・・・此処は黙って置きますか」

部屋の中から足音が聞こえる。

「（やばっ、麦野が出てきます！超速攻で帰りますか！！）」
そう言って廊下の窓から飛び降りる。

——ちなみに窓は開いているのを気付いた麦野が閉めた

——滝壺の場合

——ガバッ！！

さっきまで寝ていたのに急に起きる。

「・・・ッ！南南西から浜面との距離を2ほど縮めた女がいる・・・ッ！」

どうやら電波を受信したらしい。後さりげなく多重能力者に目覚めたらしい。

——ちなみに起きたのはキスした瞬間だった

——?????の場合

「何だろ、かなり出遅れた様な」

「どーしたの？おねーちゃん」

「何でも無いよ」

結局なんだった訳？

——女の直感次元の壁さえ超えるらしい

———その後の麦野ちゃん

———自室

「（キ、キスしちゃった?! バ、バレて無いよね?!? 眠ってたわよね?!? 起きてたら・・・記憶が飛ぶまで殴るか? い、いや、でも私がキスしてやったんだか喜ぶべきでしょうが!! で、でも迷惑だったら・・・いやいや浜面だぞ? 女の子にキスされた事だけでも喜ぶべきだろうが!?!?・・・守る、か・・・か、考えるな! 考えるな麦野沈利!! あ、でも手・・・温かった・・・はっ!?!? だから考えるな! 今は、そう! 今はキスし事が、って違う!!!）」

麦野沈利の悶々とした夜は続く。

「（・・・これはこれで超面白いです）」

非日常へようこそ無能力者（後編）（後書き）

武器説明

・サンライトハートGS（GSⅡガンソードの略）

見た目はFF13の主人公（？）ライトニングが使用している武器。大きさは日本刀サイズで柄先に1メートル程の赤い布（武装錬金のカズキの布）が付いていおりエネルギーを蓄積できる。命名はヴィクトリア。

ソード形態

通常モード。所持者の闘志に呼応して刃の部分が山吹色に光り攻撃力を強化する事が出来る。

銃形態

所持者の意志に応じ変形する。布に蓄積されたエネルギーを弾丸にして撃ち出す事が出来る。またトリガーの引き具合で連射も可能。

次回予告

———彼女は自らを化け物と言った

「私は化け物を殺せる化け物」

———少女は自分が怖かった

「放して、下さいっ」

———少年はまた一つ世界の真実を知った

「なん・・・だっ」

次回「吸血殺しと吸血鬼の末裔」

——不良神父は言った
「ステイルⅡマグヌスだ」

吸血殺しと吸血鬼の末裔（前編）（前書き）

今回は少し飛ばし気味になったorz

吸血殺しと吸血鬼の末裔（前編）

——昔の事を夢に見た、まだ少し幼い私

——周りの人と違う私が怖かった

——行き成り周りの人達が私に襲いかかった

——姉に『恋人』が出来た。初めは怖かったけど本当は優しい人だった

——でもわたしは平気だった・・・勝手に相手が死んで行くから

——初めて出来た友達

——近所のおばちゃんも、知り合いの子供も、お母さんも、お父さんも

——一人は超能力者、もう一人は変わった知り合いがいっぱい居る普通の子

——残ったのは辺り一面の灰の山

——時々思う私は皆と違うのに、一緒に居ても良いんだろうか？

何故なら『私』は

Side…当麻

——7月25日

「で？ここ何処だよ？」

「そうだね、君に分かりやすく言うならイギリスという国のどっかの街だよ……まさかこんな形でイギリスに来るとはな」

「とうま！とうま！！この有名な食べ物ってなに？！」

時刻は正午過ぎ。周りはちらほら人が歩いている。隣には相変わらず仕事をしないニートシスター。そしてそのニートシスターを挟んだ反対側には十字清教第零聖堂区『必要悪の教会』所属のステイル・マグヌス。場所はイギリスのどっかの街らしい。つーか国外になったら俺だって詳しくは知らん。まあ、取り敢えずこうなった原因を思い返してみる。

——遡る事、数時間前

「とーまー、お腹減った、かも」

夏休みに入り、何時でも面倒事に巻き込まれて入院しても良い様に出された宿題を解いていたら、インデックスが例の如く言っていた。

「……お前は良いよな。宿題も無いし、例の魔道書探し物も見つけたからやる事無くて。つーか何でバリアジャケットなんか着てんだ？そんな恰好で暑くないのか？つーかやる気が出ねー不幸だー」

「バリアジャケットには温度調節機能が付いてるんだよ。それよりもお腹すいたー！」

理不尽だ！だが昼近くなのは理解してる！

「取り敢えず冷蔵庫の中身をチェックだ」

そして冷蔵庫の中を見た瞬間・・・絶望した。中に入っていたのは味噌やわさびといった調味料の類と麦茶、卵、ちくわのみ。しかもその卵に張っていた賞味期限のシールを見れば昨日・・・例のごとくこの言葉を言おう。

「不幸じゃね？」

あれ？間違えた。

「うわ、冷蔵庫の中身が空だね」

「ちくわ、卵はまだ何とかなる。が、問題は食糧だな・・・買いに行くか？」

外を見る。真っ青な空、照りつく太陽、温度計を見れば三十℃越・・・そう言えば今日は一段と暑いって言ってたな。

「不幸だ」

「大事な事だから二回言ったんだね！とうま！」

何故そのネタを知ってる？！

――二時間後

「何か解せねー」

「フッフフン♪フッフフン♪フッフフン♪」

あの後ひと騒動あった後、焼け付く様な日差しの外に繰り出し。偶々中華屋で冷やし中華激盛り早食いキャンペーンに遭遇し二人で頼み見事に制覇。おまけの賞金をゲット。臨時収入で気分良かった俺はそのままスパーに直行。何事も無く家に帰る途中である。そう何事も無くだ。あ、あり得ねええ！？

「あ、とうま」

「な、何だ！？上条さんはこのあり得ない事態に対して驚天動地の域に達してるんですが！？」

「・・・」

「あん？どうしたって・・・人が居ない？」

沈黙を貫いたインデックスを不審に思い周りを観察すれば、幾ら

暑いからと言ったって日中に人が居なさ過ぎた。おまけに車の音も
しない。そして・・・。

「・・・誰だアンタ」

「そう言う君は誰なんだい？僕はその子に用があるんだ」

何時の間にか二メートル前に人が居た。身長は170程、赤い髪
に右目にバーコード、両手の指には悪趣味な指輪が幾つも嵌めてあ
った。何よりも目立つのは、この炎天下の中真っ黒な神父服を着て
いた。

「ス、ステイル・・・ッ！」

インデックスが俺の陰に隠れるように身を隠した。

「・・・インデックスに何か用なのか？」

何時でも戦闘になっても良い様に足位置をズラす。

「なに、色々言いたい事があってね・・・まずは」

そう言ってその神父は懷に手を入れる。

「様もまあ、僕に面倒な書類仕事を押し付けてくれたもんだっ！あ
の中には君が目を通さなくてはいけない物もあったんだぞ！」

「・・・は？」

そう言ってその神父は懷から煙草を取り出し熟練者の手付きで吸
い始める。つかお前、見た目は中学生ぐらいなんだが？！

「お陰で僕が過去の資料を漁って確認して書類を片っ端から片づけ
なくてはいけなくてどれだけ苦労したと思ってる！？その間も書
類は増えていくし！最大主教は最大主教で好きにさせて置けと言う
わ！そのお陰で僕がさらに苦労してなきゃならなくてっ！」

「はうう？！ご、ごめんなさい！ステイル！」

「ごめんで済むと？おまけに君が居ない間も魔道書の解析の依頼は
来るわ、別件で魔術師を一人捕えなくては行けなくなるわっ！――
――以下略」

――数分後

「で、結局お前どちらさま？インデックスの同僚か何かだったのは

分かったが」

「そうだね、君にはソコのソレが世話になったみたいだし、一応挨拶しておこう。十字清教第零聖堂区『必要悪の教会』ネセサリウス所属のステイル・マグヌスだ。礼は言っておこう」

ステイルに指差されたソコインデックスのソレは、今や真っ白なバリアジャケツトと同じくらい真っ白になって壁に寄り掛かっている。つか、お前の自業自得じゃん。

「あううう、そ、それで、ステイルは私を連れ戻しに来たの？ 私はまだここに居たいかも。ご飯も美味しいし」

「・・・それもあるが・・・仕事だ。おまけに場所はこの世界で、だ」

そう言ってステイルはインデックスに紙媒体の資料を渡し、インデックスはそれに目を通し始める。

「それと、キミもだ」

そう言ってステイルは俺を指差した。・・・俺？

――そして冒頭に繋がる。

「なあ、結局何で俺を連れて来たんだ？」

訳が分からずに連れてこられたのでいい加減に理由を尋ねる。インデックスも知らないらしくステイルに疑問顔を向ける。いや、あれは不審顔だな。

「君も知っていると思うが、彼女の頭には10万3000冊以上の魔道書の知識が入っている。それゆえに魔術や魔法に関わり合う人間には必要以上に神経質になる・・・それは僕だって例外じゃない」
「まあ、それは何となく分かるが、それと俺がこの件に関わるのは何でだ？」

「それゆえに僕達の上司、最大主教ローラリスチュアートの直轄だ。アークビショップその彼女がある報告書を見てその内容にえらく関心を持った・・・

それが君だ上条当麻」

「・・・あれ？俺自己紹介したっけ？」

インデックスに聞くと首を横に振った。じゃあ何で知ってたんだよ。
「言っただろ？報告書を見た、と。僕は見せてもらえなかったが・
・ああ、管理局の報告じゃないぞ？僕達独自のだ・・・話を戻す
がそのローラースチュアートが一つの決断を下した」

何やら策謀の気配がする。しかもステイルの奴も何やらイラついているし。

「上条当麻、貴様を魔道図書館インデックスの管理人に指名した」

・・・はい？

「すまん、ステイル。もう一度言ってくれ」

「分からなかったか？簡単に言うと・・・彼女の保護者になれ」

「やっぱり聞き違いじゃなかった？！」

「ステイル！それなら私ここにいて良いの！？」

「そうなるな・・・まったく、最大主教も何を考えているんだ・・・
まあ、それに当たって各所から反発も起こるだろうから、それらを
黙らせる一種のデモンストレーション、実力試しだ」

「はあ、不幸だ・・・で？その仕事ってどんなんだよ？危ない事な
んだろ？」

「人命救出だよ」

「・・・どう言う事だよ？」

「この世界の現地住民を一人拉致って、結界を張って立て籠もって
るんだよ」

これが資料だ。と渡されたのは数枚の用紙・・・ご丁寧に日本語
変換されてる。まあ進学校の聖祥大に通ってるから英語も取り敢え
ず読めるんだが日本語表記なのは有難い。

「・・・名前は姫神秋沙。・・・調査の結果、姫神秋沙の力は『吸血
血殺デーブブラッド』と名称？・・・なんだ？吸血殺デーブブラッドしって」

蚊でも殺してくれんのか？

「その名の通り、ある生物を殺す事が出来るんだよ」

「吸血・・・もしやヒル?!」

「吸血鬼だよ!とうま!」

すまんシリ阿斯は長続きしないんだ。

「しかし、いるのか?そんな存在」

「さてね、だが吸血殺しディーアップブラットと言う物が存在しているならば」

殺す相手、吸血鬼もいるかもしれないって事か。

「実際のところなんんだ?」

「さあ?なんせ誰も見た事無いからね。吸血鬼を見た者は誰もいない。何故なら見た瞬間、死が待っているからだ。・・・ただ、姫神秋沙について調べた際おかしな証言がある。彼女の生まれは二ホンの山奥の山村なんだが、ある時近隣の街に救援要請が届いたらしい。その後すぐに調べに行った人が見た光景ってのが一面に広がる灰の山だったそうだ」

確か吸血鬼は死ぬと灰になるってやつか。

「その後、調査委員はその場で意識が途切れ次に目を覚ました時は隊舎に戻って来ていたらしい。奇妙な事にその次にその場所を訪れた時は何もない殺風景だったそうだ」

何だそれ。

「話がそれたな・・・街の奥にある一際高い建物があるのは分かるな?」

確かに三階建ての灰色の洋館がある。

「あの洋館に僕達の標的アウレオルスアップブラッドィザードが居る。恐らく吸血殺しの少女も居るだろう」

「?なんでその、アウレオルスって奴も狙うんだ?さっさと姫神って奴を助けてとんずらしちまえば良いんじゃないの?」

「無理だよとうま。・・・だって私達、既に結界に囚われてるもん何ですと?!俺の間抜け面に気付いたのかスタイルが話かけてくる。」

「なんだ?気付かなかったのか?まあ、無理も無い。僕や彼女も結界の中に入るまで気付かせなかった程巧妙だった・・・さすがだね」

「外部からは隠密を、内部からは侵入者を逃がさない作りになっている。それに・・・少し空間も歪んでる？」

「何やら凄そうなんだが。俺の右手は？」

インデックスがしばらく考え込んだ後、口を開いた。

「・・・無理だね。普通の結界ならとうまの右手が触れた途端に碎けるけど、触れた後でも機能してるって事は・・・詳しくは見ないと分かんないけど、霊脈を利用してるんだと思う。それに、この町を覆う様に張られてる」

「それってつまり姫神を見つけても外に出れないって事か？」

「そうなるね。この手の結界はあらかじめ外に楔を打って内側から発動する。言ってみれば封印や引き籠る為の結界だ」

「つまるところ・・・既に相手の領域？」

「「そうだ（ね）」」

うわー、この町全体が既に相手の領域かよ。スケールでけーな？！

「さて、ここで話し合っても埒が明かない。行くぞ」

ステイルが歩きだす。それに従って俺とインデックスも歩きだす。

一見、見た目は変わらない街を見る。普通に歩いてる夫婦も、老人も、カフェで一息ついている男性も平穩そのものだ。

「なあ、そのアウレオルスって奴はどんな奴なんだ？」

「錬金術師だ」

その事を聞いてプレシアの事を思い出した。

「とうま、プレシアが使った錬金術とはまったく違うよ。正確に言うならあの人は科学分野の錬金術、今回の場合は魔術分野の錬金術だね」

「正確にはチューリッヒ学派だけだね」

「どう違うんだよ」

「どちらも世界の真理を目指す物だが・・・魔術分野では世界の全てを呪文に変えシミュレーションし、世界を手足の様に操り空想を具現化させることさえも目指そうとしていた」

「していた？何故に過去形？」

「その呪文が長すぎるんだよ、時間に例えるなら百年単位は必要かも」

「魔術を発動するには呪文の詠唱が必須。一文字でも間違ったり詠唱中に間違った行動をとるとまた一からやり直しになる。世代を重ねてやろうとしても全員が同じ思考をしてる訳でもないし、いずれ何処かで狂いが生じる」

「・・・結局錬金術師の目的って何なんだよ？」

「そればかりは本人に聞くしかないさ。まあ、吸血鬼殺しディープブラッドを使って吸血鬼を呼びよせて生け捕りにでもするんじゃないか？」

「ただ、ステイルの奴なんか苛立ってるな。」

「そして、しばらく無言で歩く。」

「そう言えば・・・なあステイル。お前イギリス出身なのか？」

「？どうしてそう思う」

「いや、さっきこんな形でイギリスに来るとは〜とか何とか言っていなかったか？」

その言葉でしばらく呆けた後インデックスに顔を向けた。

「インデックス。彼はもしかして知らないのか？」

「・・・そう言えば、とうまがこんなに深く関わって来るなんて思わなかったから話してないかも」

「何だ何だ？」

「そうだな・・・こればかりは知っておかなければいけない事だ。」

幸い夕暮れ時になるまでまだ時間がある、そこら辺のカフェにでも入って話をしよう」

「私！スコーンって食べてみたいかも！！」

何故だか急に話題が変わり過ぎて訳が分からん。が、急遽近くにあった喫茶店でお茶する事になった。

「さて、まずはじめに言っておこう。これだけはインデックスの保護者になるからには覚えておく必要のある常識的な事だ」

喫茶店のカフェテラスに腰かけ飲み物を貰い、ステイルがそう切り出した。

「まずはじめに僕たちの所属している組織の名前を言ってみたまえ」
「は？確か『十字教』だろ？」

「そうだ、だが僕達の所属を正確に言うならば『イギリス派十字清教』だ」

「・・・何？」

「君は十字教についてどのくらい教えてもらった？」

「えっと、百数十年前から次元世界に存在している魔術師が集まって出来た組織で。主な活動は魔術の探究、魔道書の実管理・保管、時には魔術を悪用して一般人にさえ危害を加える魔術師の討伐を目的としているって事ぐらいか？」

「だいたいこんなもんだったと思う。」

「なるほど、成り立ちまでは話してないのか・・・良いだろ、良く聞け上条当麻。元々魔術発祥の地は・・・この世界だ」

「な、なんだってー！！！！（本気で）」

話を聞けば、確かに魔術師は数百年前から次元世界に存在しているが、その者達も元々はこの世界から消えた魔術師（次元漂流者と言うらしい）で代々伝えていった者や、弟子をとって伝えられた者らしい。それに魔術の行使にリンカーコアは必要としないらしい。まあ、当たり前か。そうだったら今頃この世界は管理世界になっている。

第3管理世界に十字清教が出来たのは今から70年程前。この世界で一人の魔術師を討伐する際に世界中から様々な魔術師が戦ったが・・・その結果、多くの魔術師、魔術結社、教会の人員が第3世界に跳ばされたらしい。その魔術師すげー。

「その時に、各魔術結社のリーダーや各教会の指導者の立場の人間が話し合い、余計な混乱をもたらすのは得策ではないと言って十字架を背負う宗教『十字清教』となったのさ。でもそう簡単に自らの

教えも捨てる事は出来なかった、だからそれぞれの宗教は裏では『イギリス派十字清教』や『ローマ派十字正教』『ロシア派成教』なんてのもあるし。派閥名や、更には術式の系統違いで色々名前が変わる所もあるのさ」

「あー・・・話が長くていまいち分かりにくいけど、同じ十字教徒だからと言ってあっさり信用するなって事？」

「それさえ分かれば良いだろ・・・さて、そろそろ向こうも攻勢に出てきたな」

「は？・・・ッ！？」

周りを見渡せばさっきまで和やかな雰囲気が一転、住民の皆さんが武器を持ってこっちに歩いて来たらっしゃる☆

「☆じゃねえ！？どうなってる！？」

「大方操られてるんだろ・・・上条当麻」

「なんだよ！？」

「僕はこれから下調べに行ってくる・・・彼女を守れよ」

そう言ってステイルは・・・俺を蹴っ飛ばした、ご丁寧に住民の皆さんに向かって。

「・・・へ、平和的に行きませんか？」

その言葉も空しく、殴りかかって来たので一人を足払いし、他の人を巻き込む様に投げ飛ばし。先程のカフェにお釣りを置き（ステイルに借りた）、インデックスを回収して逃げる。

「わひゃッ?!」

「ステイルの野郎ー！テメー！（いつか）ブツ殺スー！」

ついでに捨て台詞を忘れずに吐く。

「はあ、はあ・・・取り敢えず逃げたが・・・ここ何処だ？」

街の中を滅茶苦茶に逃げ回ったので、ハッキリ言って何処だかさ

っぱりだ。まあ元々知らない土地だったんだが。

「どっちにしたって私達追いかけられるよ？」

「どういう事だよ？」

「だって私達って結界の中だと異物その物だもん」

もっと詳しくプリーズ。

「えっと例えるなら、真っ青なキャンパスに別の色を書いてるのと、色そのものを消している感じかな？」

「消してるのは俺の力だとして、別の色って何だ？」

「私の魔力。このバリアジャケットは私の魔力で編まれてるんだもん。魔術的な結界内だと即バレちゃうんだよ」

「お前のせいかな?!」

「うう、だ、だって仕方無いんだよ?! 私には攻撃力が無いしぐだぐだとしやべりながら歩き続ける。」

「で、結局何時まで逃げてれば良いんだ？」

「・・・さあ？」

「・・・さあって・・・まさか日を跨ぐなんて事ある？」

「・・・さあ？」

間が、間が長いっす!

「きゃっ!?!」

「うお?!」

考え事をしながら歩いてたら曲がり角で誰かとぶつかった。俺は鍛えてあるから倒れはしなかったが、相手の方は尻もちをついていた。

「っと、大丈夫か？」

「は、はい! 大丈夫です!・・・あれ? 上条さん？」

ん? 何処かで聞いた声。紫色のウェーブのロングヘア、黒い瞳、目で分かるブランド物の服。

「・・・ああ、すずかちゃんか」

ヘアバンドが無かったから一瞬誰か分かんなかった。未だ倒れたままだったすずかを立たせる。

「え？」

「どうした？」

「あっ・・・い、いえ、何でも無い、です・・・」

「?・・・そう言えば何でイギリスにいった？」

「やっぱ旅行か何かか？」

「へっ? あ、その、一族の親族の集まりで来てるんです。月村の祖先の人ってイギリス人らしくて」

「へへ恭也さんは? 来てないのか？」

「はい、お姉ちゃんの恋人でもその、反対する人もいますから・・・あの、上条さん達はどうしてここに？」

「ヤバい、考えてなかった。どうする? インデックス! ?・・・なに? 任せたかも? 丸投げか? !」

「ええとな、つまりはインデックスのご両親の親戚人がここに住んでいるらしくてなインデックスの奴が俺の事を話したら是非お礼がしたいって言うから誘われて今ここにいる次第です!」

「・・・取り敢えず納得しておくね」

「それは有難い。」

「それにしても、すずかの親戚の家ってこの町にあるのか？」

「え? ううん、隣町なんだけど。気付いたら此処にいたんですあれ？」

「それって」

「意識が誘導されたんだね」

「インデックスが答えを言う。」

「いや、待てよ・・・確か、誰も見た事は無いって」

「それは本物、真祖の事だと思う。確かに純粹に実在するんだったら当麻の右手に触れた途端になくなる可能性はある。でもその子俺の右手に触れているが消えない。その代わりに顔が青褪めているが。」

「あ、あの、は、放して・・・放して!!」

「放しちゃ駄目だよ! とうま!!」

「分かってる!!っ——!落ちつけ!すずか!!」

決して放さない様に左手でも抑えつけ、インデックスもすずかを抑える。

「ッ・・・放して、下さい。私は、化け物なんですよ!!」

「駄目だって!!今放したらお前が死んじまうんだよ!!」

「そうだよ!すずか!!落ちついて話を聞いて欲しいかも!!」

「うん。その人達の言う通りかも」

裏路地に俺たち以外の女の声が出た。全員が動きを止め、そちらを見る。

「本当の化け物はそんな化け物を殺せる私」

日本人特有の黒い艶のある長い髪、そして何故か巫女服を着ている俺と年代の少女。

「お前が、姫神秋沙か?」

「そうだけど・・・君が今回来た魔術師?」

「まあ、魔術師じゃないけど助けに来た」

姫神はしばらく俺をみて口を開いた。

「君も、もう分かってると思うけど。私がこの結界の外に出ると吸血鬼が私を求めてやって来る」

すずかの手が強く握ってくる・・・やっぱりか。

「君は吸血鬼の事どれほど知ってる?」

「・・・本心から言うと、吸血鬼の事なんて一切知らない。けど、そいつらだって親しい友人や家族、大切な人だっている俺達となら変わらない奴らだと思ってる」

「・・・そう、君の言う通り。彼らだってちゃんと心を持ってる・・・でも私の中に流れている血は問答無用で吸血鬼を引き付け、血を吸わせ、そして・・・自滅させていく」

「だから・・・だから結界の中に引き籠って、自分から籠の中の鳥になる事で?」

「そう、私に殺されない様にしてるの」
なんて奴。

「でも、でも！現に被害は出てます！？」

今まで黙っていたさすが話がに入りこんできた。もしかして、さつき言った親族の集まりって。

「それは・・・それはあの人が自分の目的のためにしている事。私には・・・どうする事も出来ない」

「インデックス、どうにか出来ないのか？ここから出る手段と、『吸血鬼』も殺させない事と、姫神を助け出す事を同時に出来る方法は？・・・悔しいが、魔法も魔術も使う事が出来ない俺には全くと言って良い程手立てがない」

インデックスが考え込む。

「・・・あるにはあるんだけど・・・その為には一度ヴァイゼンに帰らないといけないかも」

ヴァイゼン・・・確か第3世界の名称だったな。つー事はだ。

「錬金術師の野郎をぶっ飛ばせば良い訳だな」

「戦うの？」

「ああ。っとすずかかと手離して大丈夫なのか？」

「だったら私は彼の元に戻る。あそこは更に結界が張られて私の存在そのものを隠すから」

姫神が踵を返す・・・。

「否。その必要は無い」

よりも早く、その男は俺たちの前に現れた。

おまけ

———姫神登場後小ネタ

「そうだけど、君が今回来た魔術師？・・・何か冴えないね」

「うっさい！あと俺は魔術師じゃなくて・・・何だ？」

「不幸探偵の小学生」

「そうそう、見た目は子共、中身は大人、俺は周り全ての不幸を背負う流離の小学生迷探偵ってなんでやねん？！」

「む？なかなか出来る、なら私は実は魔法使い」

「なんか普通の答え」

「の従者だったり」

「なんかアウトロー！！！」

「むう、なら私も！」

「なんかインデックスも対抗し出した。」

「とうまお兄ちゃん！！」

「――ゴフツ！！！」

「え、ええと。く、クオンは滅びの道を閉ざす鍵！」

「むむ。出来るならば自在法を使用せざる負えないかも」

「そっちこそ、梅ノ○財閥の権力を甘く見ないでほしいかも！！」

「え、えっと、お前たちこそ已六の力を甘く見るなー（棒読み）」

「剣が使えないなら剣を使わない剣士になれと言うのか！四季○記

○！！」

君はいくつ分かったかな？

吸血殺しと吸血鬼の末裔（前編）（後書き）

デーパーブラット編は書いてると何か意欲がガリガリと削られていく（汗）

プロットは完成していますが見直すと、筆記時間が削られたので投稿スピードは少し遅くなりますが、応援して頂ければありがたい。

そうそう皆さん。この言葉を聞いてどう思います？

オリジナルキャラクター略してOGキャラ

これ、もしかしたらネタばれになるかもしれないのよな

吸血殺しと吸血鬼の末裔（中編）（前書き）

今回少しgdgdになった感がある

吸血殺しと吸血鬼の末裔（中編）

Side…ステイル

人の気配の無い二階を歩く。

「これは・・・」

一つの部屋に入るそこは誰かの書斎の様だったらしく、開閉式の本棚が幾つもあり、部屋の隅にはマホガニーの机が置いてあった。しかし、筆頭すべきは床。床一面に埃と混ざっているが・・・。

「灰、か・・・しかも厚みが出来る程大量に」

足を踏み入れれば、しっかりと跡が残る程の厚みがあった。

「・・・大したものは無さそうだな」

そう呟き、別の部屋を目指す。確認したい事は色々あるが彼が一番欲している物は情報。それも今回の標的アウレオウルスが行おうとしている事だ。

次の部屋に入った途端、ステイルの足が止まる。そこは館の左側の丁度真ん中に当たる部屋。周りに乱雑に放置してある武器や鎧、壁画等が乱雑に置いてある様子から倉庫だと思われる部屋。

「・・・これか」

その部屋に掛かっていた一つの壁画。その壁画の裏を見ると、ミズガのた打ち回った様な模様があった。

「魔力でばれるかもしれないが・・・仕方ないか」

模様に手を当て魔力を注ぎ込む。そして、出入り口から正面、窓側に作られた暖炉が上に移動し渡り廊下が現れる。どうやら反対側の部屋まで繋がっているらしく、長い通路だった。

「中庭、か？・・・いや、中庭なんて存在しないな」

この館は上空から見ると正方形の様に立てられており、窓からは中庭が見えた・・・が。だが可笑しな事に一階に中庭に行く為の出入り口だけが無かった。

ステイルはおもむろに窓を叩く。叩いた感触、音、反響してくる

音さえも普通の窓に見えるが。

「・・・完璧に窓に偽装してあるが、これはダミーだな。中庭なんか無い」

そう結論し、渡り廊下を進もうとするが。

「何か用かい？」

「必然。用が無ければ接触しようとは思わん」

何時の間にか一人の男がいた。白いスーツ、緑色の髪をオールバックにした一人の男。

「久方しいなステイルⅡマグヌス」

「・・・」

「疑然。どうした？懐かしさのあまり声も出せなくなったか？」

「はぁ・・・」

ステイルはため息を漏らし煙草を吸い始め・・・。

「さつさと失せろ、僕は道具風情に用は無い」

そう言い放った。その一言を受け男は。

「感心。この肉体を一目で見破ったか。なるほど、あの時魔術のイロハを教えた時より知識量、技術力、精神共に向上しているか」

感心の表情を浮かべる。

「っ、これだから理性でしか行動しない者は嫌なんだ・・・その様子だと記憶の部分では本体と繋がってるな」

その様子にステイルが苦虫を潰した様な顔になる。

「本体と繋がっているなら都合だ・・・質問しよう。貴方は今も『黄金鍊成《アルスⅡマグナ》』を、世界全てを掌握する魔術を追い求めているのか？」

「当然、それが我が名に刻まれた道ゆえに」

「その為に吸血鬼を？」

「自然、人の身では長きに渡る」

まるで用意された答えの様に迷い無く答える。

「貴方は、人を捨ててまで何を求めている」

「鍊金術の目的は真理の探究。それは魔術だろうと科学であろうと

行きつく先は同じ、とりわけ私の専門は『人』だ。ゆえに長き時を必要な肉体が欲しいのだ」

「『人が、人としての姿と尊厳を保ったまま』を信条としていたはずではなかったのか？」

その一言にアウレオルスは更に笑みを浮かべた。

「魔法名ならこの実験をするにあたって捨てた。反問。逆に問おう、もし人のまま少しでも長き時を生きる術があるとしたら？」

「なに？」

「失笑。その意味を知りたくば私を見つけ出してみよ」

そう言いスーツの袖から黄金の鏝を覗かせ。

「『瞬間錬金《リメンⅡマグナ》』！！」

天井に付いていたシャンデリアに撃ち出し。

「ツ——」

一瞬にして溶けた黄金がステイルの上に降り注ぐ。

Side…当麻

行き成りソイツは現れた。長身に白いスーツ、緑色の髪をオールバックにした男。

「ア、アウレオルス？」

何？こいつが？

「理解。インデックス、君だったか今回の侵入者は」

そいつがインデックスを見ると挨拶をする。つーか知り合い？

「そして・・・はじめまして、真祖の血を引く者・・・いや、この場合夜の一族とでもいった方が良いのか？」

「ツ——・・・あなたがッ」

すずかの体が強張るのが分かる。そして何時までも空気扱いは勘弁して欲しいので質問を投げかける。

「おい、さっきその必要は無いって言ってたな、それはどういう意味だ？」

「疑問、誰だ貴様は？まあいい、その吸血鬼を渡せ、さすれば私も引き下がり外の結界も一時的に解除しよう」

「断る」

「・・・私と戦う気か？」

その一言で、俺たち以外に誰もいなかった路地裏に5人程集まる。

「デメエ・・・ッ、一般人も巻き込みやがって！！」

「元来、魔術師とは自らに足りない物があれば、余所から持つてくる事を一つの手段としている」

「貴方、何をしようとしてるの？」

インデックスがアウレオルスに質問する。

「その質問、もう一人の魔術師も聞いてきたな。人を理解する為には長く人を観察しなければならない、その為に永き時を生きる為の肉体が必要なのだ」

「その為に、何人も人間を殺したのか？！」

「必然。成功の裏には数多くの失敗がある・・・そろそろ無駄話も飽きたな」

袖口から金色の鏝を覗かせ。

「『瞬間錬金《リメンⅡマグナ》』！」

周囲の人間に向け撃ち出す。

「「ッ!？」」「」

そして鏝に貫かれた人間が一瞬にしてドロドロに溶けた黄金になる。

「そおらっ!!」

更に鏝を上空に向かって引き抜くと、溶けた黄金がソレに吊られる様に上空に跳び、幾つもの針に変わる。

「マズッ!」

即座に何をしようとしたか分かったので、すずかとインデックスを抱え神速で離脱する・・・その直後、無数の針が先程までいた場

所を貫く。

「殺す気か?!」

「否。一つ一つは小さい、死には至らん」

姫神の所まで移動しインデックスだけ下ろす。

「インデックス、姫神を連れて逃げる。奴の狙いはさすがだ」

「・・・分かった。あと、あの人が使っている鏃、刃の部分だけ気をつけて・・・それと、死んじゃ駄目だよ?とうま。・・・行こう! あいさ!」

誰が死ねるか。

「うん。分かった。それと私からも、あの人は唯のダミー。本物じゃないよ」

「サンキュ」

二人が裏路地を走り去って行く。

「すまん、すずか。本当は一緒に逃げて欲しかったんだが」

「いえ、良いんです・・・私が一緒にいたら他の人にも迷惑かけちゃうし、あの人も。もう誰かが死ぬ瞬間を見なくて済みますから・・・それに」

すずかが体と声を震えさせながらも気丈にしゃべる。

「私の、私達の血が原因なら。目を背けていられないから」

「(強いな・・・) 安心しろすずか。きっちり守って忍さん達に、なのは達にまた会えるようにしてやるから」

離れない様にしっかりと抱きしめる。

「敢然。別れの言葉は済んだか?」

「待ってくれてどうも。・・・なあ、姫神はどうしてテメェに協力してたんだ?」

「利害関係が一致したからだ。私は吸血鬼の末裔を調べ永き時を生きる事を模索すること、彼女は自らの存在を匿いこれ以上被害を出させない為に」

「貴方の研究が終わったら・・・あの人も殺す気だったんですか?」
「否、必要以上の殺しはしない。今も彼女の血を調べ吸血殺しの力ディープフラット」

を封じる法則を考えている」

「じゃあ、なぜ一般人の彼らを殺した？」

「案ずるな、この結界の中は既に我が『黄金鍊成』《アルスII》マグナ
『』の領域。私の意志一つで彼らは元に戻る」

そう言った瞬間、先ほど地面に刺さった針が逆再生するように液体に戻り。液体から5人の人間に戻った・・・なるほど、必要以上の殺しはしないと・・・。

「だが・・・すずかは殺させねえよ」

そう言いながらも横の通路を走りだした。

Side…インデックス

裏路地をひたすら走る。

「どうするの？」

姫神がインデックスに問いかける。

「今のとうまじゃ右手が使えない分、あの人と戦うのは危険すぎる。
だからまずは、あいさをあの館に送るの」

そう言いインデックスはバリアジャケットを解き、ヨハネをスリ
ープモードにする。

「これで、魔力の追跡は無くなるけど・・・向こうから来られたら
確実に終わるかも」

「そう・・・あの男の子の事は心配じゃないの？」

「とうまの事？ うーん心配は心配だけど、それは信頼しないってこ
とじゃないよ？」

「・・・うん、行こ——」

館に向かって移動しようとした姫神の動きが止まる。振り返ると
一人の女性がいた。

「お母さん・・・」

「えっ!？」

姫神の呟きにインデックスが反応する。長い黒髪で秋沙が巫女服なのに対し普通の洋服で、よく見れば確かに姫神の顔つきと似ていた。

「秋沙? もうすぐ晩御飯よ・・・何処に行くつもり？」

「・・・お母さん・・・行ってきます」

秋沙が短く答えると一瞬だけ驚愕するが、何処に行くのかを悟った。

「秋沙・・・そう、行くの？」

「うん・・・私の為に怒ってくれて、悲しんでくれて、心配してくれる人が来てくれたから。利用して利用される関係じゃない人達が出来たから。もう誰も見殺しにしたくないから・・・だから、ごめんなさい」

そのまま母親に抱きつく。向こうも強く抱き返す。

「秋沙、あなたは強いわね。ううん・・・強く育ってくれてありがとう」

「私も生んでくれてありがとう・・・今度はお墓参りに行くから」

「ええ、待ってるわ」

母は姫神の背を軽く押す。それだけで姫神は再び歩き出した。

「・・・いいの？」

「うん、お母さん。もう死んでるから・・・私に噛みついて目の前で灰になったの」

その目からは涙が流れていたが、悲しんでいる訳ではなかった。

「・・・遺留品か何かから母親と言う存在を具現化させた？」

「うん、そんな感じ。あの人は、私を育てること出来なかったから・・・行こう」

母への思いを振り切り、再び館へ行こうとする。

「必然。それならば私が案内してやろう」

声が聞こえた瞬間。意識が途切れた。

S i d e .. ステイル

降り掛かる黄金がステイルをすり抜ける。

「ッー！幻影！？」

すぐさまアウレオルスは看破し周囲を見渡すが、それらしい影は見当たらない。

『ま、結局道具ごときじゃ目の前で魔術を使ってもバレないのか』
目の前の幻影から声が聞こえる。

「ふ、ふふふ、よもや数年でそれだけの技量を身に付けるとは」
『どっちにしろ「終わりだよ」』

ズシャアアアアア

後ろから炎の剣がアウレオルスを肩から腰にかけて袈裟がけに切り、バスターを切る様に何の障害も無く寸断される。

「・・・ふん、結局は道具使い。実戦に出て来た時点で負けてるんだよ」

懷から煙草を取り出し吸い始める。

「さて・・・行くか」

見つめる先は下りの階段。

「卒然。それは困るな」

「ッ！？」

後ろから聞こえた声に、即座に振り返る・・・が。
「忘れろ」

その声が聞こえた途端、意識が遠のく。

Side…当麻

避ける避ける避ける。針、鏃、液体の面攻撃、更に増えた一般人からひたすら避ける……つか！

「しつこいッ！」

すずかを右手から放せないで、逃げの一手。更に逃げる為に俺一人の足で走った方が早いので横抱きにして抱えている。まあつまり、何が言いたいかと言うと。

「咂然。勇ましく吠えた割には逃げるだけか？」
攻撃できません。

「つと……表通りに出ちゃったか」

裏路地から広い通りに出た。

「ウオオオオオオン！！」

「ぐっ！？」

「きゃっ！？」

横合いから犬がぶつかって来た。更に横合いからも手が伸びすずかを奪われる。

「すずか！！」

「つ……あれ？衝動が、無い？」

左右から腕を固められたすずかが咂然とした表情になる。と言う事は、姫神は館の中に入ったのか。

「なら、こっちのなんだ！」

体勢を整え、後ろからやってくるアウレオルスに向き直る。

「娘一人がいれば良いのでな、貴様は死ね『瞬間鍊金』リメンⅡマグナⅡ」

金色の鏃が心臓を狙って撃ち出されるソレを避ける。

今までの動きから避けられると予想していたのか、すずかを捕まえていた男に当たり溶かしていく……その事に気が引けるが、一気に駆け出す。

「一つだけだとは限らんぞ！『瞬間鍊金』リメンⅡマグナⅡ！！」

更に反対の袖から顔面に向かってくるソレを・・・。

「——ッ！！」

右手で捌く。軌道を変えられた鍬が粉々になりながら突き進み・・消滅する。

「ッ！？リ、リメン」

「遅え！！」

再び鍬を取り出す前に懐に入り込み、顔面を思いっきり殴る。

「ッ——・・・は、ははは！なんだその右手は！」

右手で殴ったのにも関わらず、未だアウレオルスは立っていた。と言う事は実態があるって事か？

「不解！一瞬にしてこの肉体に宿るテレズマが殺ぎ落とされ、テレズマの流れさえも絶ち切るとは！！一体どういう原理が生じている！！」

「（・・・聞いてない訳じゃない！）ならッ！！」

後退しそうになる足を引き戻し、更に追撃を掛ける。

「予定変更だ！貴様も捕える！！その身を開き、私に新たな人の神秘を開示せよ！！」

「何回でもぶん殴ってやる！！」

向こうが攻撃を仕掛ける前に懐に入り足を払う。鍛えられていないアウレオルスが体勢を崩すので右手で殴り地面に叩きつける。

「っ？！！ま、まだまだ！！」

追撃で右手で触れようとしたら、横に転がり右手から離れる。・・・が。

「・・・ふむ、たった2撃で立て無くなる程か・・・だがその右手。恐らくは手首までが効果範囲らしいな」

転がった先で大の字で倒れていた。

「それが分かればやりようはある」

「関係ねえ、来るなら迎え撃つぜ。手間も省ける」

アウレオルスはそのまま動かなくなり、罅が入り消えていく。

「・・・はあ・・・大丈夫か？すずか？」

「は、はい・・・あの、これからどうします？」

そうだよな。このままずか置いて館に突っ込んで行く事も出来ないし。かと言って、ずか連れて館に行けば姫神がいるから右手を離せなくなる。・・・取り敢えず。

「移動するか。インデックスかステイルの奴に合流出来れば良いんだが・・・」

「僕がどうかしたかい？」

すぐ近くからステイルの声がした。って！

「近くにいたなら助けろよ！？」

「？何を言っている？」

「テメエ！ふざけてんのか？！」

「だから何に対して怒っているんだ？それよりあの子はどうした？君と一緒にじゃないのか？」

「テメエが押し付けたんだろ！！？」

「待て待て、さっきから何を言っている？僕たちはさっきこの町に入って来たばかりだろう？」

・・・何？コイツ、まさか記憶が書き換えられてるのか？

「・・・その呆けを吹き飛ばすッ！」

「？何（―バキッ！！）―ぐッ！！！！」

取り敢えず米神辺りを殴る。突然の攻撃に対処できずに横に吹っ飛ばされるステイル。

「痴呆症は抜けたか？」

「――ッ、そう、だね・・・ボケるにはまだ早かったな・・・一応、ありがとうと言っておくよ」

起き上がるステイル。そしてこちらを、ずかを見る。

「で？彼女は？それにあの子はどうした？」

「ずか・・・」

「・・・構いません。上条さんを信じます」

「・・・分かった。ステイル、良く聞け――」

ずかから許可を貰ったので大まかに話す。

「なるほどね。だから奴は『少しでも永き時』と言ったのか。人の身で吸血鬼クラスのテレズマを内包すれば確かに寿命は延びる。過去にもそう言う事例はあった」

場所を近くの空き家に移し、これから話し合った。

「インデックスから聞いた事はある。確か体内に宿していた膨大なテレズマを利用して破滅したんだっけ？」

氷華も同じ体質なんだっけ？

「過去の文献ではな。今はそれを制御し操る術は幾つか存在する」

「で、そっちの状況は？何か掴めたのか？」

「大方の実験場は見つけた」

そう言ってステイルは地図を取り出した・・・これ、あの館の上空からの地図か？

「この館、上からだと言わんばかりの正方形の様な形で建てられているが実際は違う」

その地図にステイルが一本線を加える。その為、館が□から日に変わる。

「二階の部屋から反対側の部屋まで渡り廊下が造られていた」

ステイルが部屋の四方にカードを張りながら話しを進める。

「恐らく中心あたりに螺旋階段があるはずだ。奴の根城はその地下にあるだろう・・・そこにはあの子もいるはずだ」

「インデックスと一緒にいた姫神もいるはずだ。そう言えばステイル。お前どういった戦い方するんだ？」

俺もこの倉庫内にある使えるような物を物色する・・・チツ、使えそうなのは無いな。ライダーの変身ベルトなんてどう使うんだよ？

「・・・僕はこのルーンのカードを霊装とした炎を攻撃とする。だがそれよりも、今回は効率を優先しよう。二手に分かれるぞ」

「・・・信じて、良いんだな？」

「・・・僕はね、彼女を、彼女の笑顔を守る為に力をつけたんだ。その笑顔を曇らせる様な事はしない」

そうハッキリと俺に告げた。

「君の事は気に食わないが、今は奴を優先する」

「はっ、上等！お前の事は気に食わないが・・・今だけは背中を任せてやる」

「そっちこそ、途中でくたばるなよ？彼女が悲しむ」
言ってくる。

「すずか、お前はここで待ってろ」

軽めの運動をして体を温めながら俺が言う。

「この結界の中なら2、3時間ほどなら外からの影響を受けないはずだ。外に出るなよ？死ぬぞ」

ルーンのカードを確認しながらスタイルがそう言った。

——目指すは錬金術師の居城

Side..すずか

二人が出ていった後、一人残された私は今までに起こった事を頭の中で整理していた。流石に今までの常識が崩れれば頭の中が混乱する。寧ろ今まで良く平然としていられたと思う。

そして、ふと思い出す。こんなに静かで、寂しくて、怖い夜は自分が普通とは違う存在だと知った日以来だと思う・・・いや。

「今日の方が、何倍も怖い・・・」

一瞬で、今まで普通だと思っていた日常が遠くに感じた。

バチンッ！！

「ッ!?!」

その時、ステイルさん? が張っていたルーンのカードが弾ける。

「悠然。失礼するよりトルレディ」

夕方に出会った錬金術師が部屋の中に入ってくる。

「ッ――・・・幾ら幼いからと言って、ノックも無しに女性の部屋に入るのは紳士としては失格ですよ?」

震える体を何とか支え気丈に振る舞う。

「敢然、この状況で気丈に振る舞えるとは驚嘆に値する。即答、多少手荒で済まないが御一緒にしてもらいたい」

気丈に振る舞うすずかに一瞬だけ評価するが、すぐに持ち直し手を差し出して一緒に来るように問い直す。恐らくこれが少女に振る舞う最大限の譲歩だった。

「お断りします。私はここで待ち人を待っているんです」

「そうか・・・当然。ならばせめて、苦しみの無い様に眠らそう!」
そう言いスーッとポケットから鉞を取り出し、首筋に刺す。

「ッ!?!」

「永久の眠「させないわ!!」ッ!?!」

寸前、横合いから一人の女性がアウレオルスにぶつかる。とつさの事に鉞を落としそのまま流れで横に倒される。

「こっちよ!?!」

「は、はい!! (この感じ、同族?)」

その女性に手を引かれ外に逃げ出す。

「驚愕、まさかあの子の母親が来るとは。・・・否、母親と言うのはああいった存在だったな・・・不足、この距離では足らんか」

二人が逃げる背を見ながら。アウレオルスは啞然とした表情を戻し、洋館の方に視線を向ける。

「・・・愕然、向こうも少々戦力不足か。あの少女も手に入れなければならんが、向こうも急務」

先程と同じ様に、鉞を首筋に刺し。

「捕獲、あの少女を手に入れろ! 女は殺しても構わん!!」

そう吼えた。その瞬間、町全体が蠢く。

「あ、あの、貴女は？」

逃げながらも、意外と思考は冷静だった。実際その通りで、人の限界で走る女性に付いて行く為、今現在はずかの両眼は鮮ワインレッドやかな赤つまりは、忌避しているはずの自身の『力』。吸血鬼としての力を発動しているので身体能力や思考、反射神経それら全てが強化されている状態なのである。

「秋沙がね、あの子が自分の意志でこの『世界』から出ようとしてるの。そうになったらあの子はこれから先、思い出の中しか私達を思い出す事は無いわ」

その女性ははずかの質問の答えの代りにしゃべりだした。しかし、その内容ですずかはその女性が誰なのかを悟った。

「だから、最後まで誰か犠牲にならないハッピーエンドを見せてあげたいのよ」

「ツ・・・なら、頑張らしましょう！頑張って逃げ続けて、居なくなる前にもう一度会ってお別れくらい言いましょう！！その位じゃないとハッピーエンドとは言いません！！」

それは自分にも言い掛けている言葉だった。

「（死にたくない、死にたくないよ！せっかく知り合う事が出来たんだもん！また皆と居る楽しい日常に戻る！！・・・それに・・・ごめんね、なのはちゃん）」

頭の中に一人の男の子を思い浮かべる。

「死んじゃったら、悲しませちゃうもんねッ」

「来るわよ！この町の人達が！！」

——文字通り命懸けの追いかけてが始まる

吸血殺しと吸血鬼の末裔（後編上）（前書き）

書いてたら後半だけ文量が大きくなりすぎた・・・どうしてこうなった？

吸血殺しと吸血鬼の末裔（後編上）

Side…当麻

洋館の前に立つ。ここまで歩いて来たが夕食時前にも関わらず、周りの家には明かりが点いておらず。大通りにさえ誰も出歩いていなかった。

「見取り図は？」

「取り敢えず階段と渡り廊下の位置は覚えといた」

「結構・・・やはり澱んでいるな」

ステイルが最後にボソツと呟く。確かに空気が重い感じがする。

「行くぞ」

中に入り・・・すぐさま鼻を塞いだ。漂ってくるのは錆びた鉄臭い匂い、それと同時に匂ってくるのは・・・腐敗臭。

「ッ——」

首元辺りまで胃の中の物が込み上げてくるソレを気合いで呑みこんだ。

「ふん・・・吐き出さないだけましか」

ステイルの視線は広いロビーの柱や、奥の壁、それに入り口横に向いていた。そこには引き裂かれた肉塊や赤く染まった鎧があった。

「惨いな・・・」

「だが覚えておけ、管理局が使う非殺傷なんて物を使う事なんてない魔術師の世界を」

声に出す代わりに、口元から手を離し拳を握る。

「ッ——行くぞ、こんな所に何時までも二人をいさせたくねえ！」

「その意見には同感だ・・・君は左に行け。もしかしたら僕が開けた扉が残ってるかもしれない」

階段は入り口正面と、洋館を一周りした反対側にもある。

「・・・その前に、団体さんのお出ましか」

ステイルがそう呟き、一階と二階の廊下から人がわらわらと出て

来る。そして微かに声が聞こえる。

「熾天の翼は輝く「光、輝く光は罪を暴「く純白——」」」

一人の人間が眩くと、それに続く様に二人、三人と続いていく。

「ヤバいな」

そう言ってステイルが当麻よりも後ろに下がる。

「どうしたステイル？」

「純白は浄化」の証、証は行動の結「果は未来、未来は「時間、時間は一「律は全て——」」」

「詠唱さ」

「詠唱?!この人数でか!?!」

聞いている限り、既に90人以上が一つの魔術を詠唱している事になる。

「言っただろ?世界の全てを掌握するには数百年掛かると。これはその劣化版だな、少人数で分担して詠唱することで大魔術の発動を短縮し発動させるつもりだな」

冷静に解説しているが今も尚詠唱は続いている。

「おい!何が来るか分かるのか!?!」

「・・・詠唱からして『グレゴリオの聖歌隊』だな、大元はローマ正教の最終兵器だよ。三三三三人の修道士の聖呪いのちによって生み出される大魔術だよ」

「なんでそんなに落ちついてられんだよ!?!?」

「標的は僕じゃなくて君だからだよ・・・さっきから視線が君にしか向いてないよ?」

振り返れば確かに俺しか見ていないご様子・・・ああ、なるほど。

『——己の罪を暴き内から弾け飛ぶべし——ッ!!』

詠唱が完成し、数百名の眉間からピンポン球サイズの青白い光の球が俺に向かって迫って来た。

「さっきも言ったが死んで彼女を悲しませるなよ?」

「ふ、不幸だ————!!!!」

猛ダッシュで通路の方へ走り出す。それと同時に反対側にステイルも走り出すが・・・光の球は俺だけに向かってきた。猛ダッシュで左の通路に入り長い廊下を走る。一瞬だけ振り返ると光の球は依然として追ってくる光景が目に入る。・・・気のせいかもしれんが増えてる気もするし?!

「ウオオオンッッ!!!」

「のわッ!？」

前方から大型犬が迫ってくるのを避ける。大型犬はそのまま光球の群れに突っ込み溶けて灰になる。そう、灰になるのである。吸血鬼に続き吸血犬とかマジありえねえし。

「(つーか、当たっても十個程しか消えないし!?)」

「シアアア!！」

「ってまた!？」

再び迫ってくる犬(今度はチワワだった)を避けると、漸く廊下の終わりが近づいて来た。その角の手前で回転しながら左の壁を右足で蹴り、減速せずに右に曲がる。

「見えたッ!」

数十メートル先に玄関の様な広い場所が見えた。恐らくあそこに二階に上がる階段があるはず。

「こっち」

「ーッ!」

あと30メートル程でロビーに着く寸前で行き成りドアが開き、聞き覚えのある声が聞こえた。とっさにその部屋の中に入る。

「とうま!」

「この声!インデックスもいるの・・・か・・・何やってんだ?お前?」

部屋に転がり込んだ俺が見たのは部屋の中心に置かれた椅子に座り、四方から繋がれたロープで縛られているインデックスだった。

「むうー、私だって好きでやってるんじゃないんだよ!?!気付いたらこうなってたんだよ!！」

それにしたって見事すぎる。

「もう大丈夫。私の部屋までは入って来ないみたい」
ドアを閉めた姫神が話に加わる。

「良いから解いてよ、とうま！右手で床とロープを触れば大丈夫だから。これはスレイプニルの原理を応用して魔法陣内に入った対象を狼に例えさせて――」

「はいはい。魔術講義は後で聞くから」

良く見れば床の方にも魔法陣らしきものが書いてある。それを右手で触れ、更にインデックスを縛ってあるロープにも触れると、結び目が勝手に解け床に落ちる。

「自由だー!!」

「良かったなご主人」

「おめでとう」

「まったく、地下にいるかと思ったんだが・・・ん？今渋い声がしなかったか？」

この部屋にいるのは俺・インデックス・姫神だけ。ふと、足に重みを感じる。

「・・・スフィンクス？」

「正解だ家主」

「お前、しゃべれたんかいッ!!?」

驚愕の事実である。いや、まあ、アルフとかザフィーラもしゃべれたから使い魔って人語を話す事が出来るのは知ってたが。今までしゃべってるところ見た事無かったし。

「まあ良いか。で、此処は何処なんだ？姫神の部屋って割には見た所物置っぽい感じがするんだが」

所々ガラクタだらけだった。積み木、人形、絵本、終いには子供用の玩具。さらに甲冑、段ボールの山、壁画なんてのもある。

「ここは、私がこの町に來た時に使ってた所」

マジか!?!・・良く見れば写真立てや、学習用の本、テディベアーのでっかいぬいぐるみなんかもある。ついでに迎撃のために消

費した飛針の代わりになる物や、目暗ましとして使えそうな物をポケットにしまう。

「それよりもこっち」

姫神に手を引かれ壁をぶち抜かれた隣の部屋に案内された。姫神はそのまま、窓を開ける、そこから見えるのは人二人分のスペースがある通路、その先には螺旋状の階段が見えるって、これって!?

「そう、地下に続く裏道・・・私には魔術は使えないから」

「そっか、ステイルの奴は魔術的な隠蔽をされた隠し階段を見つけたんだっとな」

「ステイルもいるの?!」

「ああ、別々に行動して地下に向かってるはずだと思う・・・行くか」

「私も行く」

「私も行くよ!」

「・・・分かった」

窓だった場所から進んで行く。

Side・・・ステイル

「ここか」

場所は洋館にある唯一の三階。洋館の二階、左の廊下からしか行けない屋根裏部屋。そこは部屋二つをブチ抜いたような広い部屋になっていた。そして、ステイルの前方にはこの町全体を模したミニチュアがあった。

「・・・なるほど、霊脈の流れる傍の町に結界を張ったのは、町を覆う結界の維持だけかと思ったが・・・霊脈からの魔力をこの町に流し住民を操る為の魔力ブーストとしても機能していたか」

そのミニチュアの所々に術式が書かれて、本物のアウレオルスが

使用している鍼等が刺さっていた。つまるところミニチュア自体が霊装となっているのである。

「まったく、陰陽術も取り入れているのか。これは一つつつプロテクトを解いていかなければならないのか……だが」

ステイルが大量のルーンのカードを部屋中にばら撒く。

「このミニチュアを破壊すれば住民を操る事も外の結界も作動しなくなる……違うかい？」

ステイルの問いかけに……。

「正当。だが、大人しくさせると思うか？」

答えたのは何時の間にか十人以上いるアウレオールの一人。各々術式を施した銃、銃剣、ボウガン、メイス等様々な武器を持っていた。

「キュリオディラー骨董屋。よくもまあ、そんなに集めたもんだ……。けど、忘れてないかい？ 僕がどんな戦いをしているか、――我が名が最強である理由をここに証明する『Fortis931』！」

自らの魔法名を口にすると同時に炎の壁を作る……。即席で作ったので数秒しか持たないが、ステイルにとってその数秒こそが己の切り札を切る為に必要な時間。

「――世界を構築する五大元素の一つ偉大なる始まりの炎よ『MTWOTFFTOIIGOIIOF』、――それは生命を育む恵みの光にして邪悪を罰する裁きの光なり『IIBOLAIIAOE』、――それは穏やかな幸福を満たすと同時冷たき闇を滅する凍える不幸なり『IIMHAIIBOD』、――その名は炎、その役は剣『IINFIMS』」

紡ぐ。自らを強者とする切り札を顕現させる為に。

「――顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ『ICRMMBGP』！
イノケンティウス！！」

ステイルの懷が膨らみ……。暴発する。その中から表れたのは紅蓮の人型。

「貴様は彼女に手を出した……。その報い、存分に受け取れ！」
イノケンティウスが声なき咆哮を上げる。

S i d e…当麻

階段を降りきったすぐ近くに大きな扉があった。……ラスボスの間かよ。

「それにしても、この地下って随分真新しいのな」

「……うん。確か、ここに来て結界を張ってからこの洋館を改装し出したから。……吸血鬼を呼び寄せ始めたのもつい最近だし。新しく問題が出る度にあの人はこの屋敷を改良していったの」

狂ってやがる。

「だから、もう終わりにしたい」

「そっか……じゃあ、この幻想を終わらせに行くか」

扉を開ける。部屋の広さは教室二つを縦に繋げた様な広さ。

左には檻があり、その中には人が囚われており、眠らされているのか静かだった。

反対に右には以前見たアリシアが入っていた試験管を思わせるガラスケースの中に液体が満たされており……その中には人の脳髓が漬けられていた。

「ようこそインデックス、姫神秋沙。そして、不可思議な右手を持つ少年」

その言葉で、正面を向く。血に濡れた十字架の様な実験台の近くにアウレオルスがいた。

「もう止めて！アウレオルス！！もうこれ以上人を殺しちゃ駄目だよ！！」

インデックスが叫ぶように奴を止めようとしている。

「否。言ったはずだ、私は人を理解し世界の全てを理解したい、と」
本気で狂ってやがるッ！

「……で？世界を理解してテメエは何をしてえんだ？神でも気取

るつもりか？」

「漫然。さて・・・理解する事が目的なのでな。これは既に錬金術師の性がだな」

アイツ！本当は何も考えてねえのか？！

「アウレオルス。貴方にはもうついて行けない」

「理解。町中にいた吸血鬼を捕える際、君の母君に邪魔されたのでな。そうではないかと思っていた」

「（あの野郎ッ！この状況ですずかも狙いやがったのか！？）これで最後だ、止まる気は？」

「断然、ない！」

懷から鉞を取り出し、首に刺す。

「倒れ伏せッ！侵入者！」

「ぐあッ！？」

「キャッ！？」

「ッ！？」

その瞬間、当麻とインデックスが床に叩きつけられる。

「（体が勝手に倒れた！？どうなってんだ！？）」

更に鉞を取り出し、首に刺す。

「圧殺！車体を上に！」

天井付近が波打ち、廃車が逆さまになって落ちて来る。

「ッ——オオオオオオッ！！！」

バキッッッ！！

体に力を入れるとそれだけで縛りが解る。そして駄目もとで右手を車に触れると・・・一瞬にして消える。

「（ッ！消せ、た？・・・まさか、実際には存在してない？）」

「ようやく分かったよ、貴方の魔術の正体が」

当麻の疑問をインデックスが話を切り出す。

「さっきので分かった、貴方の黄金鍊成《アルスⅡマグナ》は世界

を歪めてるんじゃない、この結界内のみ使用できる言葉で無から有を生み出してる・・・うん、この町に溢れ返っている無色の魔力で創り出してるんだね？」

「ほう、さすがは禁書目録^{インデックス}。そして、我が祖は彼の有名な魔術医師パラケルスス。人体の構造を知りつくした者。それはつまるところ・・・こんな使い方と併用できる」

そう言ってまた首に鍼を刺す。

「拘束、四肢を縛れ！刺殺、鉄杭に穿たれよ！焼死、炎を纏え！」
虚空が波打ち、鎖が当麻の四肢を拘束する為に撃ち出される。更に前方から1メートルはある鉄杭が打ち出され更に火が纏わりつく。その攻撃に右手だけ鎖を打ち消し、前方から来る杭を消す。更に追撃が来ない内に残りの拘束も消す。

「啞然、我が黄金鍊成《アルスⅡマグナ》さえも打ち消すか・・・いや、それでもなさそうだな」

アウレオルスが見たのは当麻の左手首。そこには先程の拘束の跡が残っていた。

再び首筋に鍼を突き刺す。

「理解、要は右手に触れなければ殺す事も出来る訳か。ならば、銃をこの手に！！」

「ッ！インデックス！姫神を連れて下がれ！！」

アウレオルスの左手に銃が現れる。レイピアの様に見えるが持ち手がグリップになっている暗器銃である。

「弾丸は魔弾。数は一つで十二分」

インデックスが姫神を連れて扉の向こうへ行く前に。

「人の動体視力限界の速度にて射出を開始せよ！」

アウレオルスの腕が銃を撃った瞬間。まさに一瞬。視界に黒いモノが見えたと思ったら体に衝撃が走る・・・見れば黒い弾が体にめり込んでいた。

「ッ————！！！！！」

体が鉛玉をぶつけられた痛みを訴え膝をつく。片手で体を支え、も

う片方は腹を抑えた……。正直鍛えてなかったら吐きそうだ。

「正答。やはり有効か……。その右手は調べる価値があるのでな、気を失う程度に留めておこう」

再び首筋に鍼を突き刺す。

「先の手順を量産！5つの暗器銃にて連続射出の用意！！」

左手を振ると持っていた暗器銃の両側に2個づつ、計5個の銃口が増える。

「射出！」

後ろを庇う為に即座に立ち上がり、腕を前で交差し全身に力を入れる……。が。

「――ガアツッ！！」

今度は血の尾を引きながら吹っ飛ばされる。

「驚愕、まだ気を失わんか……。先の手順を再量産！10の暗器銃にて連続射出の用意！！」

今度はもう片方の手にも同じ物を創り出す。

「射「待って！！」む？」

「あいさ！！」

アウレオルスが再び撃つ瞬間、姫神が俺の前に出る。

「もうやめて、これ以上はもう」

「敢然。だが退け、その右手は研究の価値がある」

「やめ、ろ……」

「どきません」

毅然とした態度で道を譲らない。その事に嬉しさを感じるが、今の状況では危険な行動だった。足に力を込め立ち上がる……。が。

「敢然、ならば」

右手に持っていた暗器銃を捨て。

「後ほど蘇らそう、だから今は……。死ね！」

鍼を首に刺し、そう言い放った。その一言で何の魔術的防御をしていない姫神は。

「あ――――」

有りと有らゆる手段・状況・過程を省き・・・・・・・・殺された。

「あいさ！！！」

「姫神いいいいいい！！！！」

体の痛みさえ忘れ駆け出す。

吸血殺しと吸血鬼の末裔（後編上）（後書き）

下のうPは今日中にはします

吸血殺しと吸血鬼の末裔（後編下）（前書き）

ディープブラット編終了・・・予想以上に長くなった。

吸血殺しと吸血鬼の末裔（後編下）

——気付いた時には遅かった

「生きて」

そう言って、今まで親しかったお母さんもお父さんも、近所のおばあちゃんも、おじいちゃんも、友達も、知らないお兄さんも、お姉さんも、子供も、周りにいた皆が私を求め。

——灰になった

全員が泣きながら私に別れの言葉を言っては灰になって逝った。誰も笑顔にならず、聞こえてくる言葉は別れの言葉か「ごめんなさい」の二通り。多分、その時に心を凍らせ、表情を失ったんだと思う。

しばらくして、同じ様に私を求めて来た人達がいた。でもその人達も私に近づいてきた途端、苦しんだあと同じ様に私を求め。

——灰になった

その時に彼に出会った。

灰の積もる山村にやって来たあの人はこう言った。

「私なら君の力を封じれる、限定的だが君の母親ぐらいなら生き返らせられる・・・どうする？」

そう言っ差し伸べてきた手を・・・取った。

その人も裏があったんだと思った。でもそれよりも、ただ生きたいと。生きて償わなければいけないと思ったから手を取った。

生きてどんな被害者も、加害者も、目の前で苦しんでる人も地獄から助けられる・・・それこそ、御伽話の中にいる魔法使いの様になりたかった。そう言う人に成りたいと仮初の生に繋がれているお母さんに言ったから。

だからあの時、自分の為に戦ってくれた男の子が危ないと思ったから飛びだした。隣にいた女の子の制止も振り切ってあの人の前に立った。

——そして訪れた死の感触

体が、心が、意識が私の全てが闇に沈んでいく感触。聞こえない筈なのに最後に聞こえたのは、私を助けに来た男の子の叫び声。その時、ただ単純に生きたいと願った。

S i d e ..当麻

倒れゆく姫神の体を支える。その瞬間右手が触れ、心臓が再び鼓動を打ち始める。その事実にあ堵する。

「驚愕！黄金鍊成《アルスⅡマグナ》によって失われた生命さえも蘇らせるのか！？いや、彼女の命は精神的な死だ、この場合数秒間だけの死ったからこそ、右手の力が打ち消した瞬間、生命活動を再開したのか。だとすると——」

奴が何かを呟いているが、攻撃の手が無い内にてインデックスの元へ姫神を連れていく。

「インデックス・・・」

「・・・大丈夫。命に別状は無いよ」

横たえた姫神をインデックスがすぐに検診し・・・問題無しの判

定を出す。そして・・・敵に向き直る。向こうも結論が出たのか視線を俺に向ける。

「デメエ・・・覚悟は出来てんだろぅなッ」

虚刀流七の構え杜若。かきつばたクラウチングスタートの態勢を一瞬だけ構え・・・一気に駆け出す。それと同時に、奴が首に鍼を刺す。

「・・・やはり研究のし甲斐がありそうだ！刺殺。串刺せ、土の槍！」

しかし、発動は向こうの方が早く。地面から大量の棘が迫り来る・・・が、低姿勢のまま、地面を殴る。

それだけで、土の槍は生えてこなくなる。

「ッ！？銃をこの手に！銃口は10！使用は魔弾！用途は散弾！数は一つで十二分！！」

再び両手に5づつの銃口を持つ暗器銃を出現させる。

「人間の動体視力を超える速度で射出せよ！！」

その瞬間10個の銃口から12個の弾が発射され、その弾がさらに破裂し襲いかかってくる。

「ぐッッッ！！！」

それをとっさの判断で腕を全面でクロスし防御するが・・・全身に激しい痛みを感じ立ち止まってしまう。

しかし、アウレオルスはここぞとばかりに追撃を繰り返す。

「絞殺、四肢と首を締めあげろ！圧殺、廃車を上に！」

先程と同じように空間が波打ち、四方から俺を縛る為にロープが現る。更に上から車が落ちて来る。

それを先ほどと同じ様に右手だけは何とか捕まらない様にロープを消し、上からの車は。

「チェーンバインド！！」

インデックスが受け止めてくれた。

「（サンキュ・・・ッ！）」

「やはり魔導士がいると不利だな」

奴の独り言に更に怒りがこみ上げる。

「デメエ！インデックスもか！！」

「当然。と、言いたいが・・・彼女とてその辺りは防御してあるはずだ。ゆえに」

そう言っただけでまた首筋に鍼を突き刺し。

「暴風。彼の物を捕えよ！」

ゴウウウウウ！！！！

「————！！！！」

その一言でインデックスを暴風が包み込む。その竜巻は天井近くまで高さがあるため隙間が無い。隙間の無い竜巻の中心は真空になる・・・するとどうなるか？

「インデックス！姫神！！」

長時間真空の中にいれば酸欠で死にいたる事もある。ましてや気絶している姫神はバリアジャケットさえも纏っていない。その事に気が付き、風の投げれに身を任せ助けに行こうとするが。

「させん！圧殺、重き石像を上にも！封鎖、高き壁を！」

アウレオルスの攻撃によって頭上からの落石を防ぐために一旦立ち止まってしまい。背後には床と天井から壁が迫り出し分断させる。「くそがッ！」

タイミングを失い。落ちて来る石像を打ち消す。・・・なんでバーニイ人形？

「さて、これで援護は無くなった・・・ふむ、面倒だ・・・いっそ右手さえ在れば構わんか」

その言葉で一瞬にして背筋が凍る。この体には訳の分からないクソツたれの神様がいます。右手がある限り奴は出てこれない・・・ならば、この右手を失えばどうなるか？

「腕を引き千切れ、吸血鬼」

左側にあった檻が開き、明らかに理性を失っている人間が迫ってくる。

体の硬直は咄嗟の判断にさえ影響を及ぼし、右手を掴まれる。

腕の部分を掴まれた感触がした瞬間。

生々しい音が耳に届く。

右腕を見る。先が引き絞られた様に赤く染まり……それより先が無かった。

脳が悲鳴を上げる。次第に腕が無くなった事への理解と腕の部分が灼熱の激痛に変わる。

┆

最後の方は悲鳴とも絶叫とも雄叫びとも知れぬ声だった。

全くしつこい。

「お気づかいどうもッ、倒しても倒しても限がないし。おまけに霊装の防壁解除もままならなくてね」

やはり霊脈の魔力を使ってるだけあって壊しても一度液体になって元に戻るし、流石にイノケンティウス一体だと10人以上の相手が分散して襲いかかってくると対応できなくなるな。おまけに相手

Side..すずか

行き成り町の人達が倒れ始めた。

「なにか、あった、んでしょか？」

これだけ長く吸血鬼化したことが無かったので流石に体力がヤバかった。

「・・・あれ？」

今まで隣にいた女の人がない・・・いや、足元に一山の灰があった。それだけで何が起こったのか予想がついた。

「上条さん・・・勝ったんだ」

そして、改めて足元の灰に目を向ける。積もった灰は少しの風で夜空に消えていく。先程まで一緒にいたのに別れの一言も言えなかったのが少し残念だった。

ドクンッ

「ツーーーーあぐ・・・ッ」

感傷に浸る前に急に胸が苦しくなりその場で膝をつく。全身が熱を奪われたかのように冷え、手が震える。顔は青ざめ冷汗が出、喉もカラカラに乾く。

「吸血、衝動ッ・・・でも、どういう事？この体を刺す寒さ・・・・洋館、から？」

見つめる先は当麻がいる洋館。彼女の紅い目には洋館の様子が良く見える。

——しかし、本能が行く事を拒否していた。

Side Out

当麻から奪った右手をアウレオルスは間近で観察する。

「漠然。一見普通の右手に見えるが……」

懷から取り出したのは銀の塊。ソレを右手に触れさせると、何かが碎ける音がした。

「当然、この霊装に掛かっていた術式が綺麗に破壊されて唯の銀塊に戻っている。テレズマを打ち消す力がこの右手に存在するのか？・・いや待てよ、テレズマとは即ち生命力の事、ならばこの右手に触れただけで人の命さえも打ち消せるはずだ」

アウレオルスは思い出す、この右手は吸血鬼の末裔にも触れていた事を、そして自身のダミーは一撃では崩れ落ちなかった。

「だがあの少女は死んでいない。いや、確かにあの時、殺したはずだ・・・まさか自然摂理に反する物のみを打ち消しているのか？」

びちゃ

「む？」

右手に夢中になっていたアウレオルスの耳に水たまりを踏む音が聞こえた。改めて意識をそちらに向けると、血溜りの中で立っている当麻がいた。出血を抑える為か

左手で右手の断面を塞いでいた。だが、見る物からすれば既に危い状態だ。

「まだ居たのか、貴様はもういらん。そうそうに去れ・・まあ、その出血量だと屋敷を出る前に死ぬ——」

「」

アウレオウルにとって当麻の右手がありさえすれば良いので、当麻の生死はもはや眼中にすら無かった・・・だがその瞬間、当麻から流れ出ていた血が炎になり、足元の血だまりに燃え移り、瞬間に部屋が炎に包まれる・・・更に抑えていた左手を放すと・・

・。

——その左手に炎の大剣が生み出される

それがアウレオルスに向かって振り下ろされる。

「ッ——」

危険を感知したアウレオルスはすぐさま後ろへ下がる。

ゴオオオオオオオオン!!!!!!

「ッ——!!?」

・・・剣の間合いは外れたが、床に接触した瞬間に起こった爆発で後ろへ吹き飛ばされる。その時に当麻の右手も手放してしまったが・・・そんな事よりも目の前の現実を見る。

「何だ、その魔力量は・・・」

アウレオルスが見つめる先、そこには体の周りが歪む程の赤い魔力を放出し・・・。

「何だ、その炎剣はッ」

左手には、ステイルの炎剣が霞む程の熱量と内包された異質な魔力で出来た炎の剣を持ち。

「何だ、その右手はッ!!」

右腕の引き千切れた腕から先、失った右手の代わりに異形の右手が存在していた。

「やれやれ、だから言ったんだ。その右手のお陰で俺様は外に出る事は無い、と」

当麻が言葉を発する・・・否、先程までの当麻とは違い、あきらかに異質な声質、冷徹なまでの眼差し、圧倒的なまでの威圧感・・・そして、町に充満している魔力が霞める程の魔力。

「馬鹿な!?! その右手! 火の属性か!?! それに天使級のテレズマ!

!まさかっ!?! まさか神の如き者だとも言うつもりか!?!」

「ほう、やはりローマ教徒。博識だな・・・まあ、知ったからには死んでもらうか」

「あり得ん！？天使は神の命が無い限り人の生死に干渉できぬはずでは？！」

当麻からの殺気に死の気配を感じたアウレオルスは、ひたすらしゃべりながらも後ろに後退していった。

「生憎と、俺様はコイツの中にいるs_jみ#z@を・・・いかな、人の世では言葉に表せないな・・・まあ、コイツの中に居る存在を塞ぎ止め、奴の計画を一秒一分一時間一日一年でも遅延させられれば良い様に埋め込まれた神の力で創られた唯のリミッターさ・・・遺言は終わりかな？ならば死ね」

「ッひ・・・ッー」

後ろに下がろうにも既に壁際まで来ていた。両者の距離は40メートルは離れていた・・・だが。

「距離も、早さも、狙いも・・・力も要らない」

アウレオルスが最後に聞いた言葉はそれだけだった。

「まったく、あのような雑魚に苦戦した挙句、右手を奪われるとは・・・せつかく手に入れた魔石の魔力を3個分ほど使ってしまった」
所々溶けヒビだらけの部屋を背を向け入り口に向かって歩く。

「2度目の生を得る事で神の子と同じ聖人になったはずなのだがな・・・やはり聖痕^{ステイグマ}を解放できなければ身体能力が優れた肉体でしかないか」

異形の右手を生やし、左手に千切られた当麻の右手を持った存在はアウレオルスが居なくなった事で消えた壁の先。気を失ったインデックスと姫神の元へ近づいて行った。

「ふん、禁書目録か再び見る事になるとわな」

そう言って当麻の右手を右手で潰した。

「歴史は繰り返される。イマジンプレイカー インデックス魔道図書館・・・この二人がまた廻り合う、か」

その瞬間、異形の右腕が何かに喰い潰され・・・右腕が再生する。そして、姫神に触れるように倒れる。

――後に残るは眠るように気絶している3人だけが残った

吸血殺しと吸血鬼の末裔（後編下）（後書き）

お決まりの次回予告

——夜が明ける・・・それは少女の旅立ち

「またね」

「ああ、またな」

——再開の約束

「行って来い、インデックス」

「うん！行ってきます！！」

——交わされる契約

「っ！？今、なんか横から奪い取られた気がする！？」

「アンタ、どんだけ高性能の女のカン装備してんのよ？」

次回「一時の別れ」

——そして、別れとは出会うことも意味している

「はじめまして、ギル・グレアムだ・・・闇に染まった書について話したい」

一時の別れ（前書き）

今回がディープブラット編の締めです

一時の別れ

S i d e ..当麻

——正午前

町の外れ、街道から逸れた森の中に俺たちはいた。

あの後、俺はアウレオルスに右手をブチ切られた後からの記憶が無く。俺とインデックス、姫神は地下で気絶していた。周りを見渡せばアウレオルスの姿形は無く、ドロドロに溶けて固まったヒビだらけの部屋と、中途半端に血だらけの俺の右腕だけが戦った証拠だった。取り敢えずアウレオルスの事は後にし、姫神の救出・一般人への魔術の被害は無くなったので一応仕事は終了した。

姫神は一時的にこの世界を離れインデックス達と共に第3世界に行き個人用の結界用霊装を創るそうだ。ステイル曰く、最大主教は・アークビショップ・まあ許可するだろうな、君に対して好印象を与えておきたいんだろう、だそうだ。

「・・うん、大丈夫。離れても良いよ、とうま」

インデックスが転送準備を終えた。この時間まで掛かったのはアウレオルスの実験データや、魔術に関する書物・資料・道具を整理又は処分し、持ち帰り研究対象にする物をステイルが乗って来たイギリス派教会が所持している運搬用の次元艦（大きさはイージス艦程らしい。それだけの大きさを一人で操縦できるって・・次元世界ばねえー）に先に転送していたりしたのでこの時間まで延びた・・朝食？昨日買った食料がインデックスのデバイスの中にあっただでサバイバル料理だ。

「じゃあ、行くね」

「ああ。まあ、大丈夫だとは思うが元気でな」

「別に、永遠の別れじゃない」

まあ、霊装貰ったら帰ってくるって話だったがな。

「あの、姫神さん。お母さんの事」

すずかが話しかける。ちなみに朝、と言うか昨日から姫神とは手を繋ぎっぱなしだ・・・おかしいな、風邪でも引いたか？背筋が寒いんだが。

「大丈夫。お別れはもうしたから。それに戻ってきたらお墓参りに行く・・・もしよかったら、一緒に行く？」

「・・・はい、お邪魔でなかったら」

「そんな時は俺も行くか」

「うん、君には来て欲しいと思ったから。手間が省けて良かった」
コイツ、意外と言う事言うよな。

「そろそろ行きたいんだが。お別れは済んだかい？」

インデックスの傍で突っ立っていたステイルが声をかけてくる。
「つか、テメエはタバコ吸いたいだけだろう！？さっきから煙草代わりに噛んでるガムはもう飽きたか！？」

「じゃあ、またね」

「ああ、またな姫神」

「またね姫神さん」

姫神の手を離しすぐにすずかの手を握る。そして姫神はそのままインデックスが展開した魔法陣の中に入る。

「とうま！またね！！」

「ああ・・・行ってこい」

「うん！行ってきます！」

魔法陣が光り、3人の姿が消える。

「さて、忍さんとこまで送ってくぞ」

「ありがとうございます・・・あの上条さん」

すずかが手を放し俺の方を向いて来たので、俺もすずかに向き直る。

「夜の一族の掟で、正体を知られた人には一つの選択を強いるんです。一つはその人と永遠^{とわ}の愛を誓い・・・その、恋人として、生涯の夫として将来の伴侶として生きる事」

恭也さんの事か。

「もう一つは秘密を守る事を約束し悠久の友でいる事」

「それが受け入れられない場合は死、かな？」

「そ、そんな事はしません！それは・・・確かに昔はそう言う事もしてみたいですけど！・・・その・・・私は、上条さんの事は嫌いじゃないです」

なにこのピンク空間？

——その頃の海鳴市

ピーーン！！！！

「この感じッ！また当麻が女を引っかけたわ！！」

「あんた、どんだけ高性能の女の感装備してんのよ？」

「美琴ちゃんだから仕方ないよ麦野さん」

「最早、天性の感を超えていますね」

「あの、それより夏休みの宿題、片づけませんか？」

——以上、喫茶翠屋から

「（―ゾク）ッ！？い、今何か寒気が！？」

「あの？・・・そ、それで・・・お返事を、貰えませんか？」

何やら先ほどよりも積極的に返答を求めるすずか。だが悪いな、俺はフラグを建てる事も折る事が出来るんだ！

「じゃあ友達で」

「じゃあ！？」

何やら驚愕しているが、悪いが、このまま叩かせて貰うッ！！
「あのな、すずか。お前今いくつだ？」

「えっと、もうすぐ9歳です」

まあ、なのはと同年ならその位だな。

「すずかの事を好きか嫌いかで言えば・・・好きと答える。だがお前は生まれて9年も程しか生きてない、いま生涯の伴侶を決めたって後悔するだけだ。・・・これは美琴達にも言った事なんだが、お前の気持ちは受け取った。だから、もっと成長して、色々な事を知って、それでも俺の事が好きだったら・・・その時は俺も答えを出すから」

逃げだとは分かってんだが・・・どうしても、な・・・妹とか娘にしか見えないんだわ。

「なのはちゃん達も・・・そっか・・・うん。分かりました・・・当麻さん」

すずかが呼び方を変えたと思ったら一瞬だけ、口に温かいモノが触れ・・・離れる。その時に見えたのが目を閉じたすずかの顔。そして女性特有の微かに香る匂い。

――その頃の海鳴

「ッ!? フシャーシャーッ!」

「わひゃっ!? どうしたの?! ってとまりはなのはの急な変化に疑問をぶつけてみる!」

「フニャー!」

「ダメですね、完全にネコ化しています。とはずみは冷静にお姉さまにコールします」

「おまえらー御茶入れてきたぞーって、高町が面白い事になってるなー?」

――以上、高町家なのはの部屋から

「(また変な寒気が)」

「今は、それで納得します。・・・そ、それと今のは契約の証です・
・別に必要ないんですけど、特別ですよ？」

顔が赤いぞすずか。

「じゃあ、お姉ちゃんたちの所に行きましょう？当麻さん」

差し伸べられた手を繋ぐ・・・コレが好感度UPフラグかつ！？

「・・・はあ・・・どうして俺の周りにいる女性は、こう、積極性がある奴ばかりなんだよ」

「女性とは元来そう言う物だぞ？家主よ」

「そうですよ、女の人は恋をすると凄いで、す・・・よ？」

恋に恋してる事を祈る・・・んん？さっきの声って。

「スフィンクス？！」

「うむ。今まで空気読んでしゃべらなかったんだが・・・流石に氣付いてもらわないと困るんでな」

「お前、インデックスと一緒に رفتんじゃなかったのか？」

「・・・べ、別にこっちのご飯がおいしかったからじゃないぞ？！」

流石、ペットは飼い主に似るんだな。

「まあいつか、取り敢えず忍さん所に行くか」

手を繋ぎながら少し長い道のりを歩いていく。ついでに意味もなくポケットを弄る・・・ん？

「何ですか？それ？」

ポケットから取り出した物を見てすずかがそう言った。右手に持っているのは姫神の遊び場で見つけた玩具の一つで、匣に使えるかと思って拾ってきた物。

手の平サイズで鋼色をした六角形の物で、中はさらに凹んで逆V字に4本の横棒が通ったロゴが描かれ、更にその下にCの文字が描か

れている。

「唯のC・・・じゃないよな？」

「んゝ・・・数字、じゃないですか？そのCはローマ数字に例えると100を意味しますから。玩具なら量産されていても不思議じゃありませんよ？」

「まあ・・・霊装だったとしても、もう使えないだろ」

しかし、自身の回復力に既に疑問を持つ事を忘れていた当麻は気付かなかった・・・通常よりも傷の治りが早い事を

「それにしても、結構距離があるな・・・この分だと着くのは夕方頃になるかもな」

当麻が言ったのは月村の別荘までの距離だ。と言うよりその距離から姫神の力で、すずかは引き寄せられたんだよな？

「ある意味凄いな」

「どうしたんですか？」

すずかが不思議そうな顔をして聞いていたので、取り敢えず何でもないと答える。実際、本当に何でもない事だし。

その時、横を車が通り過ぎ止まる。

「・・・乗るかい？何処に行くか知らないが歩きだと大変だろう」

窓を開け、白髪のおっさんが話しかけて来る。その提案には大いに賛同するんだが。

「「怪しい（です）」」

俺とすずかの意見が重なる・・・そう、めっちゃ怪しいのだ。まだ昼間だし車が通っても不思議じゃないのだが、この車は俺達の後方からやって来た。つまり、俺たちが戦ったあの町の方角からやって来た事になる。おまけに英語圏なのに日本語で話しかけて来るし・・・笑顔なのに笑ってる感じがしないのだ。

「はっはっはっ！これは一本取られたな！！リンディ提督の言ってた通り中々に賢いし・・・鋭いな」

そうハッキリ言うとおっさんが笑いだした・・・待て、リンディ提督？

「アンタ、まさか・・・」

「ふう・・・お察しの通り管理局の者だよ・・・まあ、出身世界は此処なのだが。時空管理局提督ギル・グレアムだ」

ギル・グレアム？・・・待て、確かはやての後継人の名前って・・・。

「闇に染まった魔導の書について話がしたい・・・キミの右手ならばどうにか出来るのではないかと思ってな」

リンディさくん！情報が漏れてるぞくく？！それとも十字教か？！
「・・・彼女を送り届けたらで良い？」

「構わないさ。今は有給を取って帰郷しているのでな時間は有る」
そう言いながらドアを開けてくれたので、すずかと共に車の後部座席に乗る。

「はあ・・・また厄介事か」

その呟きはドアを閉める音でかき消された。

おまけ

車に乗ってある事実気付く。

「俺、密入国じゃん！？」

「ええっ?!ど、どうしましょう?!・・・や、やっぱりお姉ちゃんどこに行きましょう!!」

グレアムさんにもっと早く出来ないか聞くと。

「はっはっはっは……ならば管理局の技術力をお見せしよう！」

そう言ってサイドブレーキと座席の間から更にレバーが出て来る・
・嫌な予感がッ！？

「フルブーストと行こう」

容赦なくレバーの先に付いたカバーを開きボタンを押す……
その瞬間、体にGが掛かる。

「ぬおおおおお！？」

「きやあああああ！？」

「フニャー！ー！？」

「どうだい？！トランクにターボエンジンを搭載！タイヤにはホバーリング機能！装甲は次元艦と同じ素材！動力源には低出力だが魔導動力炉を搭載した！実にクリーン！実にエコロジー！！」

って！宙にも浮いてんのかよ？！バレたら不味いだろ！？管理局員！！？

「しかも、幻影魔法オプティックハイドを余剰魔力を使って常時展開する私の自慢の愛車だ！」

アンタの自車かよ？！

「流石は我が友ヴィンデル・マウザー！相変わらず良い仕事する！」

！
――管理局の技術部は腐ってやがる？！（主に頭の中身が）

おまけ2

無事に、ホントーに！無事に月村の別荘に辿り着き、忍さんに密入国の件を話した所。

「密入国には密入国よ！ノエル！」

「はい、お嬢様」

と言う、有難い言葉を頂いた・・・・・・・・マジっスか！姉御！？

——奴の目は本^輝気よと言っていた

一時の別れ（後書き）

次回予告

——彼がいない海鳴市
それは、至って普通の日常

——不幸になる者も居れば
「どォしてこォなった？」

——逆に不幸を受け持つ人もいる
「って！？それは私の服です！！」

次回「夏休みの日常」

——彼女は不幸なのか？

「また噛んだ?!」

「すまん、噛みまみた」

夏休みの日常

S i d e .. 美琴

『喫茶翠屋』

海鳴市内の中で比較的有名な喫茶店。ここはあらゆる意味で有名である。

曰く、上条組の拠点（大多数の人談）

曰く、攻略不能の喫茶店（人類の半分の中にいるみなしご達談）

曰く、凛々しい喫茶店のマスターがいるお店（巷のマダム達談）

曰く、最近是最早メイド喫茶じゃね？（不幸な少年談）

曰く、目指せ！将来家族営業！（とある電撃使い＆白い魔法少女談）

曰く、魔境海鳴の中でも更に魔窟（八神家末女談）

曰く、私ここに住みたい（禁書目録の少女談）

そんな翠屋のパラソルの差してあるオープンテラスに一人の少女が座っていた。ハーフパンツに半袖、10人が10人とも可愛いと断言できる少女、御坂美琴。その彼女は今……。

「うにゃゝー」

見るからに暗い空気を纏ってダレていた……幸か不幸か、その空気を察して誰もナンパしてこない。むしろ遠ざかっている……が、別に翠屋の売り上げは落ちないと言う不思議。

「あんた、何やってんのよ？」

そんな少女に声をかける大物。膝上までのスカートに同じく半袖（少女の方が一部分盛り上がっている）、首にはスカーフを巻いている少女、麦野沈利。

「あ、麦のん久しぶり〜」

「そのあだ名やめろつつってんだろ！……で、何でそんなにダレてんのよ？」

「……しずりいい、当麻がないの〜」

思わずコケそうになるのを堪えた麦野……確かに傍から見たら

どうでも良い問題である。しかし、当麻に依存傾向のある美琴にとって当麻がいなくなって早5日ほど経っていれば大問題である。

「（私はギャグ担当じゃないギャグ担当じゃないギャグ担当じゃない……っ！）よし！」

気をとり直し美琴の対面にある椅子に座る。麦野がいることで緩和されたのか翠屋へ入る客も少し増えた。

「そう言えば沈利、浜面他2名は？」

「滝壺と絹旗は朝からどっか行った。浜面は……いいのよあんな奴」

浜面の話題になった途端、若干不機嫌になった。

「彼は天草式の何人かと分家の方に行きました。場所は出雲です」
そんな彼女たちに声をかける人がいた。

「あれ？火織だ、久しぶり」

「ええ、お久しぶりです御坂さん」

恐らく浜面の名前が聞こえたからか、神裂火織が話に加わり美琴の右側の席に座る。ちなみに服装は半袖、ジーパンなのだが肌の露出を気にしていないかのように上は片方が肩まで捲り上がり、下は片方は膝下、もう片方は太ももギリギリまで切り取られている。

「（相変わらず素でエロい格好）で、なんで出雲何か行ってんの？」

「それが、7月入ってから急に訓練に積極的になって……ついこの間、御爺様に変則的な剣術の訓練がしたいと申し出たみたいなんです」

入院明けから精神的に余裕が出来たのか、少し実力が上がっているらしく、神裂の祖父の古い知り合いの道場に夏休みの間少しの間だけ行ったらしい。

「私も剣の心得があるのですが、あそこまで変則的な所はありませんよ」

「へえ、どんな流派なの？」

「確か『千刀流』だったかと。千本の剣を扱うのではなく、剣を消耗品と考え、敵の剣を奪って戦い続け千本近くの刀を振るったこと

から名付けられたそうです」

何やら凄そうだが、生憎と二人とも興味が無かった。

「・・・そう言えば向こうの家には中学生くらいの双子がいるそうですよ？」

「へえ～～」

ぴくっ

居た堪れなくなった神裂が話題にと持ち出した話に約一名の肩が上がる。

「二人とも孤児で引き取られたそうです」

「孤児かゝ浜面と意気投合しそうだね♪」

「（ーブチっ！！）はーまーづーらあああ！帰って来たらブチ殺し確定ね！！」

その時、浜面の背に悪寒が走ったらしい。

「あの、私何かいけない事しましたか？」

「気にしない気にしない♪」

——神裂火織。文武両道に秀でているが機械の操作と恋愛事情だけは不得意科目。

「で、結局旦那はどうしたんだよ？」

数分間、一人だけの世界に行っていた麦野が冷静になり美琴に話を振る。

「そう言えば、ここ最近この街での騒ぎが少ないと思っていました。彼がいなかったからですか」

その話しに神裂も乗って来る。どうやらこの街が騒がしい〓当麻が何かしら関わっていると言う認識らしい。

「それがさ、5日前に当麻が女の子を引っかけた予感がしてさ、夜

なのはと一緒に当麻の家に帰ったんだけどさ」

「今のでツツコミたい部分が幾つかあったのですが・・・」

「無視しときなさい、話が逸れるから」

美琴の話に神裂と麦野が小声で話し合う。

「そしたら、誰もいなかったのよ！おまけにこの5日間帰った形跡も無いし！」

「それで不機嫌・・・と言うか何時も通りの元気が無かったのですね」

神裂がツツコミたいのを我慢し話を進める。

「つーか、良く一緒にいるちっこいのは？」

「なのはなら、昨日から旅に出てるって桃子さんが」

「・・・麦野さん」

「無視だ、無視しろ。こいつ等に一般常識を当て嵌めるとストレスで胃に穴が開くぞ」

麦野の言葉に一瞬だが納得してしまう神裂。

「では、風斬さんは？あの方は一緒ではないのですか？」

「氷華はあっち」

美琴が指差したのは翠屋。外から見た様子では接客をしている様に見えないので、恐らくは厨房だろう。その時美琴の脳裏に閃くモノがあった。

「そうだ！二人もやってみる？」

「お店の手伝い、ですか？・・・まあ、私は構いませんよ。実を言うとうと夕食の支度まで暇だったんです」

「私はパス。この後本屋に行く予定だから」

「よしよし、火織は参加ね・・・桃子さん！例の衣装を！！」

「って、接客の方ですか！？」

その言葉に反応したのが3人。美琴と美琴に呼ばれた高町桃子、そして何の衣装を指したのか察した麦野が・・・逃げ出さない様に神裂の肩を掴む。そして・・・。

「こ、こんな服着れませんッ!? あっ!? か、返して下さい! それは私の服です!」

——その日、喫茶翠屋に堕天使メイドが降臨し。彼女を知る者に（衣装効果による）笑いと（物理ダメージによる）恐怖を植え付けた

Side…なのは

——とある管理外世界

1日かけて地球から遠く離れた管理外世界に来た。理由は誰にも、特に管理局には知られたくない事をするからだ。

「なあ・・・本当に付いて来ても良かったのか?」

隣で一緒に飛んでいるヴィータがなのはに話しかける。そのなのはの反対側にはシグナムもいる。

「蒐集の事でしょ?・・・はやてちゃんの言いたい事も分かるよ? 誰だって自分が生きる上で、誰かの犠牲の上で成り立ってるなんて思いたくないもん。でも、私達は、ううん、私ははやてちゃんを助けたい!・・・それに、インデックスさんから週に1ページ位すれば、はやてちゃん負担も減るって言ってたもん。・・・それに、闇の書が完全に起動すれば世界が幾つも消えちゃうんでしょ?」

「らしいな。今思い返しても前の蒐集も最後の方はどうしてだか記憶が霞んでるんだ」

ヴィータもインデックスが開示した資料で自分たちがどのような状態になっているかは理解していたので、なのはの言っている事を

肯定した。

「私嘘下手だから良い訳はしないで言うけど、結局は自分の為なの。あの世界が好き、当麻くんが、美琴お姉ちゃんがいるあの世界が好き！だから壊されたくないの」

その決意にヴィータはなのはの事を友として認めた。

「強いな、高町は」

そしてシグナムもまた、なのはの事を一人の戦士として認めた。

「よっしゃ！行くぞ！にゃのは！！」

「にゃの！？違うよヴィータちゃん！な・の・は！なのはだってば！！」

「すまん、噛んだ・・・つか言い難いんだよ！お前の名前！！」

「逆ギレ！？絶対わざとなの！」

「スマン、噛みまみた」

「わざと、じゃないの？」

「悪魔を見た」

「何か理不尽な誹謗中傷を受けた気がするの」

しばらく二人の言い合いが続く。そして・・・。

「そう言えば、なによは」

「また噛んだ！こうなったら力づくでも名前を覚えさせるもん！レイジングハート！！」

「ディバインシューター、セット」

なのはの周りに4つの誘導弾が作られる。

「ハッ！やるか！？ケンカなら負けるつもりはねえ！！グラーフアイゼン！！」

「ヤヴォール」

ヴィータの左手の指の間に4つの鉄球が現れ、それを宙に浮かばせる。カートリッジを使わない所を見るに自力での勝負でやるらしい。

「シュワルベフリーゲン！！」

ソレをグラーフアイゼンで思いっきり叩き、なのはに向かって撃

ち出す。

「シュート!!」

なのはも誘導弾を撃ち出し、ぶつかり合い相殺される。その時には既に両者とも上空に上がっており、お互いの背後をとる為に高速で動き周っている。

「・・・魔力蒐集に来た、んだよな? 私達」

シグナムの呟きは二度目の魔力弾のぶつかり合いの音に消えていった。ちゃっかりと巻き込まれない地点まで避難している所を見るに、止める気はない様だ。

――1時間後

「はあ、はあ、はあ、はあ、レ、レイジングハート!!」

「集束率とマスターへの負担を下げ、速攻性を上げます。スターライトブレイカーの発生技」

フェイト戦に比べれば魔法陣の範囲は小さいが、紛れも無くなのは最大攻撃スターライトブレイカー。ソレを上空に居るヴィータに向けて構える。

「はあっ・・・はあっ・・・やるぜ、アイゼン!!」

「ギガントフォーム」

グラーファイゼンから葉莢が2つ排出され、先端の鉄槌が数十倍も巨大化する。だが、ヴィータから見ればカートリッジを使用した時点でこのケンカは負けだった。

「やるじゃねーか! 高町なのは!! だがタダで負けるつもりはねえ! 豪天爆碎!!」

「っ! ヴィータちゃんもね!! 受けてみる?! スターライトブレイカーの応用技! 集束した集束砲撃!」

なのはがレイジングハートを振りかぶり、ヴィータが巨大化したグラーファイゼンを構え横回転し速度を増し最後に上からの振り落として遠心力+重力加速が付いた鉄槌をなのはに向けて振り下ろす。

「ギガントシュラーーークッ!!!!」

「アルテリオンブレイカーーーー!!!!」

ドゴツツツツ!!!!!!

巨大な鉄槌と貫通力を増したピンクの閃光がぶつかり、周囲に轟音を響かせる。どちらも突破力と攻撃力は指折りの一撃。その結果・

「きゅ~~~~」

「ぐ、グググッ! アタシは・・・アタシは、落ちてねえぞ!!」

ギリギリの差でヴィータに軍配が上がる。

「・・・コイツ、この年でこれだけ出来るって・・・将来が怖いな」

「確かに。数年しっかりとした基礎を学び、幾つかの実戦を経れば我らにも匹敵する実力になるだろうな」

「決め手はデバイスの耐久値と得意レンジ、それと純粋な身体能力差ですか」

少し休んだ後、シグナムがなのはを背負う。その間に戦闘データを纏めたレイジングハートが戦闘考察を述べる。

「さて・・・この世界から早く出るか。管理局に知られるのも不味いな」

特に高町の立場がな。そう言って未だに熟睡しているなのはを背負い別世界に転移する。

S i d e…フエイト

——次元艦アースラ

与えられた一室で、なのは達から送られたモノを見るフエイト。ただし、見ている物は暇つぶしにと送ってきてくれたアニメだが。

『僕だって死ねない』

『・・・はっ、ようやくその気になったか・・・ならよ、奴に見せてやろうぜ。本物の超兵って奴をッ!』

その後、圧倒的な強さで敵を倒す。

「ほうほう、二つの思考によって反射と思考の分割思考、それによって超高速での精密な攻撃と動作を一つの肉体でやってるのか・・・あれ？出来んじゃないね？どう思うフエイト？」

どうやら今表に出ているのはアリシアのようだった。

（出来なくはないと思うよ？現に空戦魔導士のほとんどは空中機動をしながら魔力弾を撃つ事なんて当たり前だし。魔導士にとってマルチタスクは必須スキルだから）

今は意識の奥に引っ込んでいるフエイトの声が脳裏に聞こえる。

「こ、この世に舞い戻って良かったっ!!」

（でも、アリシアって魔法使えたっけ？）

裁判が終わるまでフエイトは魔法を使う事を禁じられている。現に相棒であるバルディッシュは手元にはない（本来なら魔力も練れない様にリンカーコアにもリミッターが掛けられるのだがリンディの判断で付けられていない）。

その時、部屋の来訪を告げるベルが鳴ったので、すぐさまフエイトと入れ替わる。

「入るぞ」

クロノが入ってくる。

「以前、申請した囑託魔導士の件だが」

「ど、どうでした？」

「問題無く通った、これで裁判の方も確実に勝てる。・・・結構スレスレの方法だったんだがな・・・管理局としては即実践に出せて将来有望な魔導士なら欲しいってところだろう」

クロノの心境は複雑だろう。あの事件以降リンディも少しずつ管理局の裏側を見せているので、管理局が少し歪いびつな事を知ったのだ。

「っと、そうそう、その事で訓練室が一室使えるようになるが・・・その顔だと聞くまでも無いな」

擬音が付くとしたら“パァーッ！”だろう。それほど嬉しそう
な顔だった。

「う~~~~ん~~~~あ~~~~」

あの後、久しぶりにバルディッシュを返されたフェイトは肉体をアリシアに渡し、訓練室の一幕で2つ程魔力弾を浮かばした状態でひたすら唸り続けていた。

「彼女は何をしているんだ？」

その光景を見たクロノは二人に問いかけた。

「あ、あはははッ！新しい魔法を考えてるんじゃないかい?!」
一人は使い魔のアルフ。

「もしかしたら、なのはと戦う時用に新技でも考えてるんじゃないかな?へアルフ、やっぱり彼女の事は秘密にしなくちゃいけないの?」

「そしてもう一人はアルフが自分のフォロー役として巻き込んだユ
ーノ。」

「そ、そうだね〜ウチのご主人様は意外と執念深いからねッ!へし、仕方ないだろう!?だってフェイトが黙ってるんだからアタシらが話す訳にはいかないだろう?!」

「?まあ良い。それよりも、君は何時までいる気だい?・・・フェ

「レットもどき」

「誰がもときだ?! 何で僕まで……」

ユーノ・スクライア。最近になって厄介事に巻き込まれやすくなった（主にフェイト関係）。

「うゝゝゝゝん　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（どうやんのよゝゝ！）」

（頑張って！アリシア！！少しずつフォトンランサーは動いてるから！！）

———
アリシアの魔法少女の道は遠いかもしれない

Side .. アクセル

「（どオしてこオなつた）」

久しぶりに翠屋のコーヒーを飲もうとして出掛けたら双子に遭遇。そのまま気付いたら八神家にいた。・・・意味がわからねえ。

アクセルとしては八神家に行くのは否定的だった。理由としては八神家、特にシグナム達の近くに居ると意味も無く腕が震えたり、肺が押し潰される感じがしたりするからだ。

「（どオしてこオなつた？）」

目の前が霞む。頭痛が酷いのに思考は意外とスッキリしている。理性では何の味もしないと言ってるのに、本能はエマージェンシーコールを鳴らしっぱなしだ。

「と、とまりは．．あなたと、一緒なら本望だよってとま、り．．は．．．．」

「とまり？・・・そう、逝ったのですか・・・とまり一人、逝かせ

ません・直、逝き、ま・す・．．．．．」
双子の意識が墜ちる。

「あかん、限界、や・．．．．．」

続いてはやてが墜ちる。恐らく、目の前の幻想^{料理}は（認めようとしていないが親しい男友達の）アイツでも打ち碎けないだろう。

最初に犠牲になったのはでっかい犬（つーか、犬に人の食いもん喰わせんなよ）。次に双子（と言うより、逃げられないと悟ったから最初に食って気絶した）。その後、家主だからやない、お母さんだから子供の不始末はウチが付けるんや！と言って小狸が食って・・数秒で逝った。

「う、ううっ！な、なんで？！どうして？！はやてちゃんの指示通りに作ったのに、何でこうなるんですか？！！」

シャルが嘆く。その手に持っているのは自分が始めて作ったと言える品物。

「才能がねエンだろオが」

なんでゆで卵を科学兵器に出来るなンぞ誰にも出来ねエよ。

——シャルの台所不可侵条約が発効された

夏休みの日常（後書き）

補足解説

アルテリオンブレイカー

レイジングハートが考案した劣化版スターライトブレイカー。スターライトブレイカーよりも集束率を落としチャージ時間を短縮。攻撃力の底上げとして攻撃範囲を絞ったため射程・速度の上昇・術^な者への肉体の負担は低下したが、命中率自体は下がった。命名理由は流星の如く突き抜けることから。

ちなみに攻撃力順で言うと。

S L B > アルテリオンブレイカー ≥ エクセリオンバスター（未登場）

≥ デイバインバスターフルバースト > デイバインバスター > 越えられない壁 > ストライクスマッシャー > デイバインシューター

の順となる。

上条当麻の道のり

Side…当麻

見慣れた街を歩く。此処は海鳴市、俺が帰るべき場所……な
んで帰るのに2週間も掛かんだよ!?

「もう、ぜってえー外国なんて行かねえ」

以下、海鳴帰還までの道のり。

——1日目

と言うか、すずかを忍さんの元へ届けた後。密入国に対し、此方も
密入国で陸路と海路で日本に帰る事になり、出発は明日の早朝と言
う事で一旦解散になったが。

ギル・グレアムさんと闇の書への対処で意見が対立。激論と話し
合いのすえ協力してくれる事になった。……実戦経験の差だと思
うが普通に強かった。

——その頃、海鳴

「当麻が居ない」

「居ないの」

夕方、上条家に入った美琴となのはは当麻がいない事を知る。

——2日目

朝早くに・・・簀巻きにされ車の後頭部席に放り込まれて出発（昨日の戦いで深夜遅く寝たので、起こしたのに起きなかったとはいえ、コレはひでえ）。ちなみに同行者は忍さんとノエルさん。

まずは一日かけて遠くの月村の家系の人が運営している漁港に行くらしい・・・が、途中である有名なクリステラソングスクールに寄った際に、忍さんと理事長のフェアッセさんの間に火花が発生し、女の戦いが勃発（かつて恭也さんをめぐって女の戦いをした中らしい）。

よって忍さんを放置し、ノエルさんと共に漁港へ出発（後で綺堂さくらと言う人が引き取るらしい）。ちなみに、朝から運転してて疲れないか聞いた所、自動人形オートマターと言う存在らしい・・・そう言えば魔術の発祥の世界が此処ならそう言った関係の物もあっても不思議じゃないな。

——その頃、海鳴

「ん・・・おはよう、なのは」

「ん~~~~・・・おは、よう・・・美、琴お姉ちゃん」

昨日はそのまま上条家に泊まる。ちなみに部屋は当麻の部屋。

——3日目

船の中。このままロシアの北側の沿岸で降りるらしい。

——その頃の海鳴

「お、おじゃまします」

「いらっしゃい」

「お帰りなさいませなの」

風斬氷華が遊びに来る。もちろん場所は上条家。

「・・・あの、何やってるの？美琴ちゃん、なのはちゃん」

「「上流階級ごっこ」」

その氷華を出迎えたのは何故かドレス装備の美琴とメイド服装備のなのは。

——4日目

だんだん寒くなって来た。どうやら北極海ギリギリまで通って行くらしい。

——その頃の海鳴

「それじゃあお願いします！」

「ああ、分かった・・・良いのだな？」

「はい！！」

「うしっ！なら行こうぜ！」

転移魔法で何処かへ消えるのはとヴィータとシグナム。

――5日目

反政府組織なんて大っ嫌いだ。

――その頃、海鳴

「あっ！アクセルはっけくん！！拉致るぜ！はずみ！！」

「了解ですとまり、生贄は多い方がいいです」

この二人に巻き込まれた事を悟ったアクセルは無駄な抵抗なく八神家に連れていかれる。

――6日目

ロシアを横断中。密林の中で何故か親父＋2名と出会う。どうやら商談が終了した後、お土産を買う際に迷子の女の子の世話を焼いたら。その子が政府非公認の超能力者だったらしく中国マフィアに狙われており、現在相手を巻いて潜伏期間中だったらしい。同伴していた田中さんには同情しておいた（ちなみに母さんはホテルに置いて来たらしい）。

ちなみに、インデックスが故郷に帰った事を伝えたので仕送りは一人名になった。

――その頃、海鳴

「うえー！ー！ん！！氷華ああああ！！」

「うん、そうだね、一人だと寂しかったんだね？よしよし」

御坂美琴。なのはも当麻も居ないので風斬家にお泊まり中。

――7日目

ちよっ!?!カスった?!カスった!?!?!

――その頃の海鳴

「やるな・・・」

「貴女こそ・・・」

お互い持つのは分厚い木刀と長細い木刀。

「だが、貴殿と戦うのは後ほど」

「ええ・・・今は」

お互いに手に持つ獲物を・・・建宮達。更に言うなら、その手に持った写真（何処かの喫茶店でメイドの衣装を纏った二人がそれぞれ写ったモノ）に激昂を宿した瞳を向ける。

『ヒイツ!?!』

「己の醜態を消し去ろうとしよう」

「同感です」

――この日十単位の人が海鳴大学病院に運ばれた

――8日目

結局中国マフィアを撒けないと悟り攻勢に出る。

——その頃、海鳴

「いやゝたまには人間心理学に則って海鳴を探索してみるものです」
小学生並みの身長的女性が一人の少女を連れて歩いている。

「小萌はお人好し？」

その少女の名は姫神秋沙。第三世界で結界型霊装であるケルト十字を貫いステイルに送ってもらった。

「むむ！？そのお陰で姫神ちゃんも住む所が決まったのですから感謝して欲しいものです！」

が、肝心の当麻が居なかった事で住む場所を探している所を、今年から風牙丘学園に勤める教師で木山や芳川と同じ超能力者専門の医師でもある月詠小萌に拾われる。

「着きましたゝ！」

小萌の足が止まる。そこは見た目はオンボロアパート。しかし部屋の中に入ると見た目に反して丈夫な作りになっている。そして入り口で立ち止まる姫神。

「どうしました？遠慮なく入って来て構いませんよ？例えるならRPGの勇者御一行の如く」

それでも玄関前から一步も踏み出そうとしない姫神。否、踏み出せなかった。そしてその事に気付いた小萌は・・・一言だけ声をかける。

「お帰りなさい、姫神ちゃん」

「ツ——・・・た、ただいま」

その言葉で漸く一步を踏み出す。

——10日目

あの後、今度はロシア側のマフィアと反政府組織が狙ってきたの

で。障害になりそうな組織だけを潰しておいた。（親父は俺が立派に育って嬉しそうな顔をしていた）

——その頃の海鳴

•
•
•
•

「……もう一度言ってくれる？　すずか？」

「えっと……当麻さんとキスしました？」

月村家の庭が沈黙で支配される。

 $\llcorner \llcorner \circ \lrcorner \lrcorner$

「も？」

「持って行かれたー！ー！ー！ー！！！」

その日、翠屋でヤケ酒ならぬヤケ食いする少女二人が居た。

「今月まだ長いのに」

「ドンマイ、すずか……あ、忍さん！このケーキ下さい！！」

そして一人の少女の懷が寒くなつた。

— — — — —
1
1
日
日

スフィックスのせいで、とある山村やみさかに着く。そして森の中でこの世界の魔術師と出会う。その名も闇咲逢魔。

何やら女性に魔術を行使している現場に遭遇↓取り敢えず介入↓
二人がかりで捕縛↓事情を聴く「呪いをかけられた人《女性》を救
いたいだけなんだ!!」↓協力↓無事解決その後宴会（どうして
こうなった?!）。

途中から記憶がかすれて分からない……が、ノエルさんの膝は柔らかかった。

——その頃の出雲

「は——まああづうううらあああああ——！」

結局我慢できず、一人で出雲まで行った麦野が見た光景は・・・
女の人と仲良く昼食の準備をしていた浜面だった。

「?! 麦n——」

爆音と共に一人の少年が病院行きになった。

——12日目

二日酔い状態↓車で上海へ↓船に乗り込む↓海に向かって吐く。

——その頃の高鳴

「美琴お姉ちゃん、氷華さん。もう、ゴールしてもいいよね？」

「なのは————!!!!」

「も、もうすぐ当麻くんも帰ってくると思うから！頑張っ——！」

何故か砂浜で漫才染みた寸劇を繰り広げるなのはと美琴。そして
本気で宥める氷華。

——13日目

漸く日本に到着。字がすらすら読めるって感動モノだねえ・・・

ただ何故に北海道？俺、上海に居たよな？・・・だが味噌ラーメンは美味かった。そう思うだろ？スフィックス？

「高級猫缶には負けるがな」
うるせえ！！

――その頃の海鳴

「あははっ、ねえ当麻。今何処に居るの？私の思い出の中？うふふ。可笑しな事言うのね？だって当麻は今私の目の前に居るじゃない？」
当麻の部屋の隅っこでツンツン頭の人形に話しかける美琴。

「美琴お姉ちゃんが壊れたの」

「なのはが言える立場じゃないわよ？目見なさい、瞳から光が無くなってるわよ？」

「うーん、そろそろ限界かな？」

「ノエルも帰って来てないし・・・どうしよつか？ファリン？」

「わ、私に聞きますか？！え、えくと・・・取り敢えず、お茶にしません？」

その後、上条家の食卓に香ばしい紅茶の香りが漂った。

――14日目（今日）

海鳴に到着。ただしそろそろ夕食時・・・あ。

「よく考えたら冷蔵庫の中身なんもねえじゃん！」

なんせ買い物帰りにイギリスに強制連行だったし。

「今から買い出しか・・・金は・・・ほぼスカラカン・・・ダメじゃん?!」

大手牛丼のチェーン店で一食も食えない。

「へえ〜なら家で食べる？」

「感謝しま・・・す？・・・フワタ」

背後から嬉しい提案が出され、振り返った所で・・・今日最大級の不幸が存在した。微かに電撃を纏いながら仁王立ちした雷帝・御坂美琴と、瘴気が発生してそうな程の暗い雰囲気をつつたブラックなのは化した高町なのはがいた。二人とも目の下に隈をつくっている・・・これは・・・ご機嫌取りで（精神的な意味で）死ぬかも。「家主よ世話になった。また会おう「待てい！！」フニャッ！？」

危険を察知したスフィックスが逃げだそうとしたが、右手で掴む。

「さあ、逝きましょう？当麻」

「さっさと来るのじゃ」

そう言って腕を組んできた。

「で、出来ればお手柔らかにお願いします」

「ダメ。今日は目一杯付き合って貰うんだから・・・付き合う？・・・えへっ・・・いや、でも前にもっと大人になってからって言った・・・言ってたけど・・・その間に他の女が寄ってこないとも限らないし—————」

「にやはっ♪当麻くんの匂い当麻くんの手当麻くんの温かさ当麻くんの—————」

あれ？こいつ等何時の間にヤンデレになったんだろ？・・・結構前からか、依存症は結構前からあったし。

「「ねえ当麻（くん）」」

「何だ？」

「他の女の人の匂いがするの」

「それに、数日前にすずかが良い笑顔で宣戦布告して来たんだけど？」

二人して同時に聞いて来る。って！痛い痛い！指が喰い込んで痛いです！？

「あゝもう！不幸だ—————！！」

今後の課題として、如何にして一人立ちさせるかと言う難題が増

えた。・・・出来るのか？俺に！？

——出来ませんでした

上条当麻の道のり（後書き）

もうすぐ20万PV達成するんですが何かリクエストってあります？
作者の脳ではネタが少ないんです（汗

八神家の日常

Side..はやて

——早朝

「んっ・・・んあゝゝ・・・朝や」

大きめのベットから一人の少女が起きる。此処、八神家の家主である八神はやてだ。未だ寝ぼけている思考回路を起し、まずはじめにやる事をする。それは・・・。

「ほら、起きい。朝やでゝ3人ともゝ」

「ん・・・おはよう・・・はやて」

「眠い・・・って、とまりは言ってみる」

「と言う事なので私達はもう一度寝ます」

昨日泊まりに來た御坂家の双子と、八神家の末っ子を起こす事だ。

「はよ起きんかい！特に双子！あんた等今日から二学期やろう！？」

「・・・おお！学校だ！とまり！！！」

「分かりました。さっそくサボる為に連絡を入れましょう」

「そうそう、取り敢えず無難な所で夏風邪にしようって！それはあれか？！学校行けないウチに対する嫌味か！？」

朝から物凄いテンションの高さである。更に漫才をしようとはずみがボケを放とうとするが、とまりの携帯が鳴る。

「ん？・・・あ、お姉ちゃんからだ、もしもし？」

『——サボンなよ？』

携帯の向こうからドスが利いた美琴の声がとまりの耳に届く。その声は双子の精神ネットワークを通してはずみにまで届き・・・結果。

「「はッ！精一杯登校させて頂きます！！サー！！！」」

『ママよ！』

条件反射の如く背筋を伸ばし、目の前に居ないのにも関わらず片手は軍隊張りに敬礼していた。

「・・・さすが姉妹や。伊達に付き合いは長くないな・・・ウチまで学校に行きそうになった」

「アタシもだ」

どちらも敬礼はしてないものの背筋は伸びていた。

「じゃあ行って来るね〜ってとまりは元氣よく挨拶してみる！」

「それでははやて・・・優雅な不登校生活を、とはずみは嫌味を含みながら家を出ます」

二人が制服と御泊まりセットを持ち八神家を出て行く。

「・・・だからそう言う嫌味は隠しいや」

なんだかんだと言いつつ、玄関から二人が出て行くのを見送るはやて。その後ろからゲートボール用のスティックを持ったヴィータが通り過ぎる。

「お？ヴィータもお出かけ？」

「おう！今日はじーさん達とゲートボールの約束しててよ〜」

口調は仕方なくと言った感じだが、表情は楽しみにしていたのか笑みを隠し切れていなかった。

「気い〜つけや〜」

「行ってきます！はやて！！」

準備を整え掛け足で出て行くヴィータを見送る。

「・・・さて。ウチも」

「はやてちゃ〜ん、食器洗い終わりましたよ〜」

「お！おおきに

ードオオオオオン！！！！

なあああ！？なんや！？」

キッチンから顔を出したシャルマにお礼を言おうとしたら、突然

爆発音が聞こえた。

「・・・あゝ・・・アレは確か御坂さんのレールガンの軌跡」

発生音の方角を向くと、オレンジ色の閃光が空気に溶ける様に消えたのを見た。よくよく思い返してみると、視線の先は確か上条家があったはずだ。

不幸だあああああ！！

そして、聞こえない筈なのに彼の何時ものセリフが聞こえそうな気がする。

「でもそれが出て来るって事は今日も海鳴は平和そうやな」

「そ、そうですね・・・取り敢えず一息入れます？」

シャルはまだ慣れへんか。若干顔が引き摺つとるで？

「そやなく・・・その後は病院行くで」

「はい、はやてちゃん」

取り敢えず、中庭に出て辺りを見渡しているシグナムを落ち付かせよう、そう考えながらも今日の予定を組み立てる。

S i d e .. シャマル

「シャルさん・・・でよかったかしら？」

「あ、はい。・・・どうですか？はやてちゃんは？」

はやてが検査の為、別室に移動した後担当の医師である石田先生に話しかけられた。そして、駄目元とは言えはやてちゃんの症状を聞いてしまった。

「可も無く不可も無く、と言った所ですね」

その事に関しては正直言えば期待はしていなかった。真実を知った今、はやての両足のマヒは闇の書の浸食が原因だと理解しているからだ。

「家ではどんな感じですか？何度かあの子の家まで送り届けた事はあるんですけど・・・はやてちゃんから聞いた限りでしか私生活を知らないですよ」

それは当たり前のことかもしれない。仲が良い関係だとしてもはやてと石田の関係は医師と患者でしかないのだから。

その事で、シャルもかなり前に聞いた事がある。自分たちが消えれば足も元に戻り、友達と一緒に学校にも行けます、と。その後はやてが男女平等ビンタと言って頬を叩いた後こう言ってきた。

「大丈夫ですよ、『家族ですから』」

「・・・ふふ、はやてちゃんらしいわ」

ウチは家族を犠牲にして得た幸せなんていらん、と。出会って数日、戦う為の存在である私達をはやてちゃんは家族と言い受け入れた。

ならばこの身は全て主はやてに捧げよう。あの子が私達と共に居る事に幸せを感じているのならば、私達は誰一人欠けずに死ぬ時まで共に居る・・・もちろん書の中に居る子も一緒にだ。大丈夫。いざとなれば私達^{幻想}の存在を殺してくれる彼に任せよう。

『ドクターフロッグ！ケースKです！！至急処治室において下さい！！繰り返します———』

「あら？随分久しぶりねケースKが発動するのは」

「（・・・本当、大丈夫なのかしら？）」

ちよっと先行き不安になったシャルだった。

Side…シグナム

——午後

午前中の剣道場のアルバイトを終え、見慣れた街を歩く。

我らがこの地に転生し既に3ヶ月程。たったそれだけの時間でこの地に親しみを覚えた。

「（それも、壊したくないと思える程に）」

転生初日で我らが^{闇の書}壊れている事を知り、超能力者の存在を知り、高町達の様な得がたき友人にも恵まれた……そして。

「まだ高みを目指せる者達とも出会えた」

一軒の武家屋敷に着き、開け放たれた門を潜り道場に向かって歩いて行く。耳を澄ませば聞こえて来る武の高みを目指そうとする者たちのぶつかり合いが聞こえる。

「失礼する」

「お！よく来たのよな……テメェら！姐さんが来たぞ！！」

『おはようございます！！姐御！！！！』

戸を開け近くに居た人物、建宮斎字に声をかける。丁度休憩を取っていたのか汗を拭き飲み物を飲んでいた。

「姐さんは止める」

「気にするな。悪い気はしないだろ？」

「ふん……それよりも……アレは何だ？」

視線を横に向ける。その先には道場の隅っこで暗い雰囲気^{好敵手}を纏った神裂火織と、必死に慰めている——確か五和と言ったか？——が居た。

「あゝウチのお嬢は、その、アレだ」

「今日学校で調理実習があつてにゃー」

「アイツ、和食は得意なんだが……ソレ意外となると、な」

「見た目に騙されたよな」

建宮に続き、彼女と同級生の何人かが話に加わって来た。

「ふむ……なるほど、限定的ポイズンクッキングと言うヤツか。・

・作ったモノはどうした？」

「「「^{上条当麻}アイツはイイ奴だったよ（ぜい）」」」

・・・今朝も騒ぎに巻き込まれてなかったか？

「――そうです、何故簡単な事にさえ気付かなかったのでしょうか・・・」

「ん？」

神裂が何やら眩きながら立ち直って来たようだ。

「答えを得ました五和」

何やら悟った表情をしている。

「何も問題なんて有りません・・・洋食なんて作らなければ良いのです！！」

（駄目だこりゃ）

全員の意志が一つになった。

「ん？ああ、いらしてたのですか」

神裂がシグナムの存在に気付く。

「気にするな。それよりも一勝負どうだ？」

「構いません。貴女との打ち合いは学ぶべきものがありますから」

お互いに獲物を持ち道場の中心へと歩いて行く。

「勝敗は？」

「やはり一本勝負でいきましょう」

むしろ毎回同じやり取りをする。これはただ単にお互い戦いの場ではやり直しが利かない事を理解しているからだ。

「では」

その一言でお互い構えたまま動かなくなる。戦場では開始の合図など無いのも理解しているからである。

「「はああああああっ！！！！」」

そして、同時に駆け出す。

「今日は何時までかかると思う？」

「40分」

「俺は一時間で」

「じゃあ私は――」

そして何時ものように周りは試合時間の長さを賭けるのも日常茶飯事だった。

Side…ヴィータ

――翠屋

爺ちゃん婆ちゃんが言うゲートボールの試合（昼食込み）が終わった後、大概は此処に来る。はやてが言うにはアタシの様な見た目だと、日中―特に午前中は―怪しまれる為、顔見知りがある所に居る方が安全らしい（と言ってもアタシらの知り合いなんて居ないし、はやてなんか殆ど病院か図書館か家と言う公共の場か自宅しかない為、必然的に翠屋に来る事が多くなる）。

「（アタシとしては此処にはあんまり来たくないんだけどな）・・・
・負けた」

「「勝ったー！」「」」

そして、必然的と言っているのかこの店に集まる親子連れの片割れ、ガキ供の世話を見る事になった。ちなみに、この子守は此処のオーナー兼パティシエの高町桃子としては大変助かる事なので、よくお土産（シュークリームや日持ちしない商品）を貰う事になった。お土産を貰う↓家に帰る↓皆が喜ぶ（特にはやてが喜ぶ）↓来たくないのに来てしまうと言う悪循環になる。

「なのであのガキ共はあんなに強えーんだよ・・・」

「あらあら、それは仕上さんのお友達がよく遊びに来て頂いた時に、相手をして貰っていたからでございますよ？」

ヴィータの愚痴に傍に立っていた女が答える。

「あんた・・・確かオ・・・オルソラだっけ？」

「あら？覚えていただいて光栄でございますヴィータさま」

「呼び捨てで良い！様付けなんて拒絶反応が起きる！！」

子どもたちは既に別のテーブルに集まり。ヴィータの対面に。お菓子を持ってきたオルソラが座る。

「？そう言えば此処のシュークリームは絶品なんでございますよ」

「アタシの話聞いてたか？！あと、何勝手にアタシのシュークリームを食ってんだよ！！？」

オルソラの持ってきたお菓子はどうやらヴィータの物だったらしい。それを何食わぬ顔をして食べていた。

「そうそう、あの子達の面倒を見ていただいてありがとうございます」

「行き成り戻ったな！オイ？！」

「所で何か悩み事ですか？」

「また行き成り話題が変わるな！！？・・・何でもねえ無えさ」

「あらあら、そうでございますか・・・悩みには二通りありますのをご存知ですか？」

「？・・・いや、知らねえな（と言うかアタシの悩みは目の前に居るコイツなんだが）」
オルソラ

オルソラの問いかけに答える。

「人に話してスッキリするのと、自らで答えを出す事の二通りです」

「そっか・・・じゃあ、なんでお前はアタシのお菓子を全部食ってんだよ！？」

「あら？・・・不思議でございますねー？」

「責任者ああ！！保護者でも良い！コイツを引き取ってくれ！！もしかしたら殴らせろおおおお！！！」

——この後シスタールチアが変わりの品を買い、オルソラは引き取って行った

「ただいまー！！！」

夕飯時。丁度家に着き玄関から真っ直ぐに居間に直行。

「ただいま！はやて！！シヤマル！！」

「お帰りなさいヴィータちゃん」

「おかえりーヴィーター。もうすぐで出来るから手洗って持つきい」

そして、はやてとシヤマルに帰って来た事を告げ、はやてとシヤマルもまた笑顔で向かい入れる。

「おっしや！・・・あ。シヤマル、コレお土産」

持っていた翠屋のお菓子をはやての料理の補佐をしていたシヤマルに渡す。ちなみに夏休みの一件以来、シヤマルははやての許可なく料理どころか包丁さえ持たせて貰えない。

「あら、今日はお土産があるんですね♪」

「おお！翠屋のお菓子かあ・・・おいしいのは良いんやけど食べ過ぎるとお腹が」

プログラム体のヴォルケンリッターと違い、はやては生身の肉体だ。それも、車椅子生活ゆえに、食べすぎればお腹が横に広くなるのを危惧していた。

「あら？・・・はやてちゃん是要らないんですか♪」

「（ーブチッ）シヤマル、ゴハン抜きな」

嬉しそうなシヤマルの声に、はやてが非情な判断を下す。

——その晩、シヤマルの悲鳴が近隣の住宅に轟いた

おまけ

——とある休み時間

「・・・・・・・・」

「どうしたんだ？ 姫神」

とあるクラスで一組の男女が話しあっていた。

「・・・君は存在だけでも本編に出れるんだね。その逆、私なんか
転校初日なのに此処おまけでしか出てこない」

「何か知らんが、メタ発言はもっと出番に響くと思うぞ？」

その一言で更に瘴気が少女の周りに漂う。

「・・・ねえ」

「今度は何だ？」

「惚れないか？」

——その瞬間、クラスの時間が止まった

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・てへ」

——そして時は動きだす

「姫神・・・お前にはエロいキャラは無理だ」

「えっと・・・が、頑張って!!」

「ごめん、私でもそんな誘い方はしないわ」

「にゃー人には得て不得手があるもんだぜい」

「・・・俺もちょっとって麦野!？その振り上げた拳を下げてくださいませ——ッ!!!!」

「死ね!!」

「ねエなア・・・これはねエわア・・・」

「——」↑夏休みに起きた黒歴史を思い出し放心中

「こ、これはッ! 私と同じ不遇体質・・・ッ!!」

「うは——!! 小学生の大胆な誘い! これは乗らなぎゃぶらッ!？」
全員から有難い（慰めの）言葉を貰い、最後の一名に全員から自重しろとの鉄拳が炸裂する。

——この後、更に濃いキャラに遭遇し少女が更に落ち込むとは誰も予想していなかった

月のホムンクルス(前書き)

今回は人気投票1位のあの方が出ます! さあ皆さん一緒に!!

(。V。)(。O。 < パ・ピ・ヨン☆ パ・ピ・ヨン☆

月のホームクルス

Side…当麻

——11月末

そろそろ12月に入ろうかと言う日。俺と浜面は12月のパーティーの下調べをしていた・・・何故1カ月も先だと言うのに今やるのかと言うと厄介事に巻き込まれ易いからと言うしかない。本来ならアクセルもこのメンバーに入るのだが、本人曰く「俺はテメェらと違って厄介事担当じゃねえんだよ!!」らしい。俺から言わせればお前もトラブルメーカーだと言わざる負えない。

「理不尽だ」

「ああ、理不尽だ」

「不条理だ」

思わず浜面と二人で短歌を歌ってしまふ。季語はなんだろう? 『理不尽』か?・・・どんな季節だ。

「所で当麻、お前の予算幾らだ?」

「2万程。そっちは?」

「こっちも同じ位だ。・・・どうする?」

俺は美琴・双子・なのは・氷華・アリサ・すずか・姫神に、今はいないインデックス・・・ああ、世話になった忍さんとノエルさん、ついでにファリンさんもか。浜面はいつものメンバー(3人)＋神裂と五和ぐらいか(両者とも男性陣は無視している)。

「なあ、当麻・・・なんか人少なくてねえか?」

浜面がある事に気付き、俺も言われて初めて気付いた。確かに人通りが少ない道を歩いていたが、それでも人の通りはある道なのだが全く人がいない。・・・つーかこれと同じ事が前にもあったな。

「来たね」

「やっぱりか」

前方に見知った不良神父と・・・。

「あ！とうま！！」

暴食シスターさんの魔術師コンビ。

「なあ当麻、何だ？この異色の二人組」

「あゝ何と言えいいのか・・・俺の不幸属性が呼んだ結果？」

周りに確認してみると肯定された。それだけで浜面も納得した・・・不幸だ。

「不幸だ。おっと、つい声に出してしまった・・・で？今日はインデックスを届けに来たのか？ステイル」

「それだけなら良かったんだけどね・・・君、これに見覚えは？」
そう言ってステイルは一つの写真を見せた。

その写真には鋼色をした六角形のモノで中心部分が凹んでおり、中には逆V字に4つの横棒が入ったマーク、その下にLVの文字・・・これって確か。

「姫神の遊び場で見つけたのと一緒にゃねーか。・・・いや、文字だけは違うな、こっちは・・・55、か？」

「ふうん、数字の読み方は分かるみたいだね。その写真に写ってるのはアウレオルスが持っていた資料の中に入っていた物だ・・・この意味が分かるかい？」

「霊装っつーんだろ？だけど右手で触っちゃったから「あっ！！」・・・なんだよ浜づー？」

「浜づー言うな！！さっきから話を聞いてたけど。言ってる事がさっぱり分からんが・・・これもそうなのか？」

その場にいた全員が息を呑む。

浜面が袖から取り出したのは・・・紛れも無く写真に写っているのと同じ物だった（ただし、何の数字も書いていなかった）。

「君は、何処でこれを？」

「いや、6月末に女の人に行き成り渡されたんだ・・・その後、実戦だとか言う理由でホームクルスってのと殺り合う事になってな」
そう言えば7月に入って浜面が入院したって聞いたな。

「なるほどね・・・話を戻すが、これは実は霊装では無いらしい」

「霊装じゃないってどういう事だよ？」

「言葉通の意味さ。彼はこの写真と偶然手に入れた物品で知った様なんだ。・・・そこで」

「調べに行くのか？」

その言葉にステイルが頷く。はぁ・・・またこのパターンか。・・・今度のお仕置きはどうなるんだろ？

「ま、待ってくれ！俺も連れて行ってくれ！！」

浜面が話に入ってくる。

「マジ？」

「大マジだ。俺だってこんな訳の分かんないモノ渡されたんだ、真意を確かめてみたいんだ」

「・・・時間が惜しい。来るなら覚悟を決めろ」

そう言ってステイルは歩きだす。その後に浜面が続き。インデックスと俺が最後に続く。

「そう言えば、今度は何処に行くんだ？前はイギリスだったろ？」

「ああ。言ってなかったっけ？・・・月だ」

・・・俺、帰って良いか？

「次元世界って凄い技術力なんだな」

浜面がそう言って艦橋の外を見る。その向こうは漆黒の世界、その名も宇宙。

現在地球を経て早20時間。ステルスモードを起動させ地球側からは発見されない様にして進んでいる・・・つか一日程で月に行けるって改めて考えると凄いよな。

「ツん——ぷはぁ——！ごちそうさま、とうま！」

「はいはい・・・相変わらず良く食うようで安心した」

そして現在、食事時（ちなみに昼食）で食事はインデックスの希望で俺が作る事になった。ステイル？アイツも食う専門だ。浜面？・・・オルソラさんがいるから作る機会はそうそう無いな。

「認めたくはないが確かに人並みの腕前だね」

嫌なら食うな！

「麦野は・・・意外と出来そうだな。理後は時々家事を手伝ってるって言うし、最愛は・・・あれ？」

何やら浜面が周りの女性の家事能力を分析してる。

「つと、そろそろ着くよ？」

ステイルの言葉で俺と浜面とインデックスは窓の外を見る。そこには暗黒の海と、真っ黒い陸地が存在した。俗に言う月の裏側である・・・そう言えば。

「どうやって外に出るんだ？」

外は真空の空間。バリアジャケットがいかに優秀でも空気が無くては生きていけないと思うんだが？

「・・・いや。どうやら歓迎してくれるらしい」

ステイルの言葉に改めて月面を見ると、この船一隻が入れるほどの大きさのゲートがゆっくりとだが開き始めていた。・・・めっちゃ罨っぱいんだが？！

「い、行くのか？」

「こうしても罨が明かないだろう？」

浜面の問いかけにステイルが軽く答える。つゝかまた正面突破かよ？！芸がねえな？！

――そう思っている間に船はゲートを潜る

「思ってたよりも広いんだな」

それが船を下り、一つしかない通路を歩いた際に出た感想。今俺たちは二人並んでも楽に通れる通路を歩いている（ちなみに並び順は俺・インデックス・浜面・ステイルだ）・・・と、足が止まる。目の前には壁・・・。

「じゃないよな？」

「恐らくね」

ええい！迷ってても仕方ない！！

近づいた途端、自動ドアの様に壁が左右に開く。そこは野球場よりも広い空間になっており天井までの高さも、左右の広さも、桁違いに広がった。だがそれよりも、目の前に居たのは。

「ようこそ！キミ達が来るのを待っていたッ！！」

青白い肌に痩せ細った体軀の男が顔に蝶のようなオレンジ色の仮面を付け、タイツの様な衣装を纏い、見事なまでの変態ポーズとっていた・・・正直に言おう。

「変態か？」

「変態かも」

「変態だ?!」

「そこまで来ると清々しいまでのかつこよさだな」

・・・あれ？

後ろを振り返る・・・視線が俺に集中している。

前を向く・・・何やら頷いている仮蝶仮面。・・・あれえええ？

「当麻・・・スマン、お前の事が分かんなくなった」

「よく分かってるじゃないか、そのツンツン頭くん☆」

浜面と仮蝶仮面から賛否両論の意見が当麻に下る。

「不幸だ、氏のう。死ぬんじゃなくて氏のう」

当麻は崩れ落ちた。

「で、君は一体何者かな？まあ、彼《浜面》に聞いた通りならホームクルスって事になると思うけど」

行動不能になった当麻を放置してステイルが仮蝶仮面に話しかけ

る。その後ろでは当麻が体育座りで落ち込みインデックスが必死にフォローしている。

「ノン☆ノン☆まずは自己紹介から始めたまえ。それが人と人の関係を円滑に進める秘訣だ。ち・な・み・に！私の名前はパピヨン。呼ぶ時は愛を込めて発音して欲しい」

「・・・・・・ステイルⅡマグヌスだ・・・・」
ステイルは思った。変態に社交性を説かれるとは屈辱の極みだ、と。

「浜面仕上だ」

浜面は思った。ああ、コイツ、恰好は変だが常識が通じる人だ、と。

「ふむ。では私の衣装に高評価な採点を下した彼とそのシスターさんはどちら様かな？」

パピヨンはジョジョ立ちをしながら当麻の指差す。

「ああ、男の方は上条当麻と・・・・」

「彼女の名前はインデックスだ」

浜面とステイルが簡潔に紹介する。

「ふむふむ、良い名だ！・・・・さて、浜面。君が持っている核金を一度貸してもらえないかな？」

パピヨンの言葉に悩む浜面。あの時の少女、ヴィクトリアは誰にも渡すなど言っていた、だが眼前に居る存在はその核金を知る人物。「ソイツになら別に渡しても構わないわよ？」

悩む浜面に声が届く。その声の持ち主は当麻でもステイルでもインデックスでもなかった。

「・・・・アンタ、やっぱり此処に居たのか」

「久しぶりと言ったところかしら？浜面仕上」

その人物は6月の終わりに浜面に核金を渡した人物、ヴィクトリアだった。

「貴方達は始めましてかしらね。ようこそ、複数の核金を使った私の武装錬金『アンダーグラウンドサーチライトverムーンクレイ

ドル』へ」

ヴィクトリアが浜面たちを歓迎する。

「月のゆりかご、ね。随分と皮肉ってるじゃないか。そもそも「そうかしら？意外と合ってると思ってるのだけれど？」

パピヨンがヴィクトリアのネーミングにケチをつける。

「別にこんな施設が無くとも生きていけるだろう？」

「じゃあ出て行きなさいな」

「生憎と、私にはやる事がある」

「ならさっさとしなさいよ（長くは持たないわよ？）」

「（どのくらいだ？）」

「（・・・3日程ね）」

会話の途中から小声での密談になる。

「ふむ・・・十分だ、と言う訳で核金を渡してくれないかね？」

「さっさと渡しなさい浜面仕上」

「なんで二人が掛かりで言うんだよッ！？・・・ほらよ」

結局浜面は核金を渡す事にした。

「では、3日ほど待ってくれたまえ！」

「「「は？」」」

当麻達の疑問を余所に核金を受け取ったパピヨンは何処ぞへと消える。

「って、三日も俺達此処にいなきゃなれねーのか？！」

「美琴達にどう言い訳しよっかな？・・・プレゼント選びに時間が掛かったって言えば納得してもらえるかな？」

「無理だろそれ！？」

当麻の現実逃避に的確にツッコミを入れる浜面。

「はぁ・・・タバコがそろそろ切れそうなんだがな」

「アンタ、幾つだ！？見た目、中学生位にしか見えねえんだが？！」

「確か、なのはと同年代ぐらいだ」

浜面がステイルの年齢に疑問を持った様なので教えた。

「もっとダメだろおお！！？」

完全ツッコミマシンと化した浜面のツッコミ響く。

「お腹すいたかも」

「そのちっこいのは腹ペコ魔人ですか?! そうなんだな?!」

「短い時間で良くインデックスの特性を理解できたな」

浜面の発言に当麻が評価する。

「こっちに来なさい。核金の・・・私達の世界の裏歴史を教えてあげるわ」

「そうしよう、元々僕達の調査はその事を調べる為なんでね。苦労せずに済むならそれに越した事は無い」

ヴィクトリアの提案にステイルは即答し、後に付いていく。当麻達もその後にししぶ付いて行く（既にインデックスは当麻に背負われている）。

――一言で言えば、この施設は広かった

――三日後

「世話になった」

「素手で戦える人って中々いなかったから新鮮だった」

「何! こっちこそ若い戦士と出会えたのは何よりの幸運さ!!」

目の前には腹に穴が開き、片腕はもげ、足も無く無様なオブリジェ

と化したパピヨン製ホムンクルス・ブラボーが倒されていた。その一方で俺と浜面はボロボロの煤だらけで、所々血を流しているが・
・立っていた。

この三日間、俺たちはヴィクトリアが複数の核金で作り出された『アンダーグラウンドサーチライトyearムーンクレイドル』で戦闘訓練に明け暮れていた。や、最初の数時間は座学的な講義だったんだが・・それを終えた途端やる事が無くなって浜面と体を動かしていたら、ヴィクトリアがSつけたっぷりの顔で一人のホムンクルスを紹介してくれた。その人物が彼らの世界で戦士の一人の人格をコピーして生み出されたホムンクルス・ブラボーである。

その後はボコられ休んで、ボコられ休んでの繰り返し。漸く預けた核金を返してもらった浜面と二人が係りで倒す事に成功した（後に聞いたがブラボーは本来なら核金を使う事も出来る人？だったそうだ）。ちなみに俺の武装錬金は何故か発動しなかったが治癒力向上は健在だった。

「さて。やるべき事も、報告書に書ける事も書いたし。帰るよ君達」ステイルが俺たちに声をかける。本来なら初日でアイツのやる事は終わったのだが、ヴィクトリアの許可が無ければ格納庫のゲートを開閉できないのでそのまま留まざる負えなかったのだ。

「おめでとう浜面！そんなキミにコレをあげよう☆」

別れ際にパピヨンが浜面に一つの物を渡す。それはナンバー44の核金と・・SD化した親指サイズのパピヨンの人形。

「核金、は良いとして・・・この人形何だ？携帯のストラップにでもしとけばいいのか？」

「その核金はキミが持っているナンバーレスの核金と対になる物だ・
・・失くすなよ？ちなみにその人形は私の世界で流行った超人気マスコットキャラクター『蝶人パピヨン』さ！・・失くすなよ

☆

「最後に☆付けんな!!」

即座に始まる即席漫才。

「色々ありがとな」

「構わないわ、私としても久しぶりに楽しいひと時だったから」

浜面とパピヨンの漫才を余所に当麻とヴィクトリアも別れの挨拶をしていた。

「……なあ、やっぱり」

「言ったでしょう？仲良くなれても結局、私達は異邦人なの……死が訪れる時まで此処で過ごすわ」

「……はあ、分かったよ……またな」

「ええ、運が悪かったらまた会いましょう」

随分と不吉な言葉を返してくれた。

「挨拶は終わりがい？なら行くよ」

「おう」

「わ、分かった！またなパピヨン！」

「えっと、お邪魔しました？」

それぞれ思い思いの言葉を言い船に乗り、ヴィクトリアの意志に反応しゲートが開く。

S i d e .. ヴィクトリア

外部映像を見て無事に彼らが地球に帰った事を見届けた。

「言ったわね」

「ああ・・・さて、招かれざる客のお相手をしよう」

その瞬間、ヴィクトリアの武装錬金『アンダーグラウンドサーチライトverムーンクレイドル』を覆う様に結界が張られる・・・そして。

「よく入って来られたわね？」

「なに、宇宙空間でも活動できる装備を着てゲートが開いた時に入り口付近に転移すれば案外すんなり行った」

当麻達が最初に出会った広いホールにパピヨン達以外にもう一人存在した。

「後は宇宙空間でも活動できる様、特殊な結界を張れば・・・逃げられないコロシアムの出来あがりだ」

着崩したブレザータイプの制服に茶髪の幼い少年。6月の末に鷲尾とヴィクトリアのダミー人形を吹き飛ばした人物だった。

「・・・やっぱり私達が狙いなんだ」

「ああ。そんでもって・・・此处で仕留める、確実にだ」

少年の背から3対の翼が生え宙に浮く。

「ふんッ・・・今の私は蝶☆サイコーなのでな！それに・・・生憎と、私は最後まで抗う事が好きなんだ。泣いて帰れ糞ガキ」

パピヨンの背から黒い霧状の蝶の羽が生える。

「はっ！これだけ長引かせたんだ、あっさりと死ぬなよ？変人」

「抜かせ、ひよろっこいメルヘン少年」

お互いの毒舌が琴線に触れたのか両者の額に青筋が浮かび、空気が張り詰める。

「「ブツ殺す！！！」」

――数時間後、月の裏側に大きなクレーターが一つ現れた

そして・・・。

「はぁ！？なのはが管理局に搬送された？！！！」

——海鳴でもまた新たな戦いが幕を開ける

月のホムンクルス（後書き）

次回予告

——始まるのは新たな戦い
「シグナム、さん・・・？」

——戦う敵は知り合った者達
「・・・ゆるせ、いや、許してもらおうとは思わん」

——暗躍する使い魔と騎士
「もうすぐ彼らが来るわ」

「そうか・・・ヴィータには辛い戦いになるだろうな」

次回「困惑の戦い」

——窮地に出会うはかつての宿敵^{ライバル}
「と、通りすがりのと、友達だっ！」

困惑の戦い（前書き）

やっところさAー S編突入！

困惑の戦い

S i d e .. シグナム

目の前で管理局の魔導士が二人倒れる。確かに錬度はあったが私から見ればベルカの戦乱時代と比べれば格段に下だ。

・・・もつとも、今の高町だと13〜5人居れば苦戦するレベルだが。

「書よ」

「蒐集」

シグナムの声に、手に持っていた闇の書が答え倒れた魔導士から魔力を吸収する。

そして本格的にマズくなる前に収集を止める・・・詳しくは診ないと分からないが恐らくは4、5日程度は寝込み魔法を使えなくなるレベルだ。

「・・・これで良いのか？」

その場から少し離れ声をかける。

「ええ、これで局に通報して次元艦を持ってこれるわ・・・恐らく巡航範囲で考えればアースラになるわね」

シグナムの問いかけに、何時の間にか後ろに居た灰色の猫が答える。

「その船ならば書をどうにか出来るのか？」

「次元艦の中では最新だから設備は良い物を使ってるわ。後は技術者と・・・あなた達の協力次第ね。今私達も怪しまれない範囲でベルカの資料を漁ってるけど・・・問題は」

「時間、か・・・今の所、主はやては問題なく過されているが・・・」

時間が限られているのはお互い理解しており、二人（一人と一匹？）の間に沈黙が降りる。その沈黙に耐えきれなかったシグナムが話題を変える。

「恨んでいるか？我らの事を」

「・・・正直言ってね。お父様の指示じゃなかったら今すぐにでも殺傷攻撃で殺してやりたいわ」

シグナムの一言で灰色の猫から殺気が漏れる。その殺気に背を向けたままのシグナムも自然と剣を身構える。

「・・・安心しなさい・・・私だって、これ以上悲劇が続かなくなるならそっちを選ぶわ・・・もう、あんな光景を見るのは嫌よ」

「・・・そうか」

シグナムがこれ以上はお互い踏み込んではいけないと察し黙る。今度は灰色の猫が話しかける。

「・・・それよりも、良いのね？あの子に被害が及ばないようにヴオルケンリッターに罪を着せるって事で」

「ああ、我らの犯した過ちは例え主はやてがどう言おうと我らで償わなくてはならん。・・・特にヴィータは主はやてを巻き込むことを忌避しているからな」

脳裏に甘えん坊になったの鉄槌の騎士を思い浮かべ僅かにだが笑みが零れる。

「・・・変ったわね。昔のあなた達はもっと感情なんて持って無い殺人マシンの様だったわ」

「生きているのなら環境しだいで誰だって変わりゆくさ・・・その変化が怠惰となるか成長へと繋がるかはその者しだいが。・・・私は強くなれたと思う」

その言葉に改めて昔出会った時とは違うのだと猫は感じ取った。

「やっぱり変わったわ・・・そろそろ行きなさい。もうすぐ異常を察知した局の人間が来るわ」

「そうさせて貰おう・・・しくじるなよ？」

「誰に言ってるのよ？それでも局の中では古参なのよ？」

そう言いシグナムはその場を全速力で離れる。その場に残った猫も救難信号を発信してその場から消える。

——これが今から8日前の出来事

Side…リンディ

「連続魔導士昏倒事件？」

アースラのブリッジでリンディが友人のレティ・ロウランと次元通信で話し合っていた。

『ええ、数日前から次元世界の各所・・・と言っても報告例が少な
いから事件ってほどでもないんだけど。以前から、哨戒に当たって
いた部隊が管理外世界に生息している魔法生物が昏倒している所を
発見してね』

魔導士・魔法生物・昏倒・・・どれも嘗て経験した事件を彷彿さ
せるワード。

『ああ、あとその人達に共通してるのが搬送された時の症状が魔力
の急激な消耗で衰弱状態だって話よ？』

魔力の衰弱・・・それも嘗て夫が関わった事件の報告書に載って
いた。

「そう・・・ありがとう、レティ。私の方も、気をつけてみるわ」
『？大丈夫なの貴女、顔色が悪いわよ？』

「大丈夫よ・・・ただ、ここ最近夜遅くまで書類仕事が続いてたか
ら疲れが溜まって得るのかもしれないわね」

こういう時は、感が鋭い友人の洞察力に感心するが、ちょこつと
嘘を吐く。・・・まあ書類が多いのは事実だ・・・なんせこの艦に

は元犯罪者の現嘱託魔導士がいるのだ。きちんとした報告をしないと彼女の今後の人生を駄目にしてしまう。

『そう？なら長話もここまでにしておくわ・・・また今度、飲みに行きましょう。良い店予約しておくわ』

「ええ、良い情報ありがとう」

通信が切れる・・・さて。

「グレアム提督に相談してみようかしら？」

嘗ての事件の責任者だ・・・アレから11年。彼は今でも贖罪の為に様々な情報を集めているだろう、ならばもしもの時は良い情報が貰えるかもしれない。・・・その時ふと脳裏に思い浮かぶワードがあった。

「『禁書目録』・・・まさか、ね？」

彼女は今でもあの世界に居るのだろうか？

——これが今から3日前の出来事

S i d e ..なのは

——早朝・高台

海鳴の街を見渡せる高台に一人の少女が居た。その少女の手にはテニスボールが2つ握られていた。

「すう・・・はあゝ・・・いくよッ！」

「何時でもどうぞ」

手に持っているボールを上投げ、即座に誘導弾を作り出す……その数6個。それらを撃ち出しランダムにテニスボールに当て地面に落ちるのを防ぐ。

「カウントスタート。1・2・3・4・5――」

それを10分ほど行くとレイジングハートがカウントを取り始める。なのはがボールに当てるたびにテニスボールに当てた数を計測する。

「99・100……101……102――」

100を超える辺りで次第に動きが乱雑になり、なのはの額にも小粒程の汗が滲み出る。

「159、160・161……162――」

「ッ――」

「188……189・190――」

「――あっ……」

そして、誘導弾の制御を誤り片方のボールを強く弾いてしまう。

「くっ（まだ！まだ地面にはついてないっ！）アクセル！！」

突然の事態にも、直に意識を切り替え誘導弾の一つを加速させ弾いたボールを再び宙に弾く……が。

「マスター、もう片方のボールが落ちてます」

「あ……」

一つのボールに意識を集中させすぎて、もう片方のボールを忘れていた。レイジングハートの声に改めてボールを見ると……物の見事に地面にバウンドしていた。

「「あ」」

更に、先程弾いたボールとぶつかり……2つとも反対方向に跳んでいく。

「「にゃー……！！！！！」」

広場を捜し回り、ようやく2つとも見つけベンチにダレる。

「はぁ~~~~・・・そう言えば、結局何回いったの？」

「197回です」

「にゃ~~~~あと少しで200回行けたのに」

レイジングハートからカウントを聞き、更にダレ度が上がる。

「ですが、空き缶100回の頃よりは難易度も違います。魔法を覚えて半年では凄まじい成長だと思います」

「そうかな？」

「はい・・・ですので、焦る必要はないかと・・・当麻さんの事なら心配なさらずとも直に帰ってきますよ」

「にゃっ!？」

レイジングハートの一言でなのは思いっきり動揺する。

それもその筈、今日で当麻が月に行ってから4日。夏休みの出来事で2週間も居なかったのに比べればまだ許容範囲内だが、当麻に依存傾向な美琴となのはにとっては傍に居ない事には変らない。

「ううう、レイジングハートが意地悪なの・・・ あ、そう言えば、今日はフェイトちゃんから手紙が来るんだった」

遠く離れた友人からの手紙を思い出し、急いで練習道具を片づけ・・・フェイトと別れた後に変ったサイドテールを揺らしながら家に急ぐ。

——昼・学校屋上

「ハァ……」

「え、ええっと、その……げ、元気出して下さいッ！」

既に冬入りしたが今日は比較的温暖な気候なので屋上にて昼食。

上条組の女子組が揃った。そして、その中で暗い雰囲気纏う少女が二人。そして、励まそうとしている少女が一人。

「当麻が居ない……」

「浜面が居ねえ……」

「だ、大丈夫ですよ！？ 今日辺りに帰って来ますよ！！」

美琴と麦野が暗い雰囲気纏う原因を咄き、五和が必死に励ましている。

「じゃあ、今日中に帰ってこなかったらクリスマスにお前メイド服着ろよ？」

「ちよっ！？」

「良いわね、桃子さんにおも……Er……とにかく用意してもらおうわ」

「今、面白いとかエロいって言おうとしてませんでしたか？！って、ちよっ！？ 顔を背けないでくださいいい！！」

五和の必死の説得にも耳を貸さずモソモソと弁当を食べ始める……相変わらず壁に向かって重い空気を発生させながら。

その一方でその漫才染みた会話を聞きながら弁当を食べる氷華と神裂、そして2学期から編入してきた姫神の同級生ズ。

「良いの？ 止めなくて」

この騒ぎを初体験の姫神が氷華に話しかける。

「？……ああ、美琴ちゃんの事？ 大丈夫、まだ現実を見てるから」その氷華からは普段からは聞けない暴言が飛び出る。逆に氷華からすれば、あの夏休みの2週間に比べればまだまだ軽いと言う認識だ。

「それにしても……本当にどうしたのでしょうか？ 4日前に確か商店街に行ったきり行方知れずですし」

「んゝゝゝ・・・直にでも帰ってくるんじゃないかな？」

神裂の心配も余所に氷華が答える。その言葉には当麻の事を心配している様子は一切なかった。その事に姫神と神裂は思った。

「「（これが本妻の余裕（と言うものでしょうか）？）」「」

当麻の外堀は確実に埋められて来ているらしい。

S i d e ..なのは

——自室

夕食後、なのはは自分の部屋で勉強を・・・。

「痛ッ！ゝゝゝむう、もう少しかな？」

していなかった。

片手に針、片手に布を持って何かを縫っていた。指の痛みに耐えながらその何かに綿を詰め、再び針で縫っていく。

「出来たっ！ゆっくり当麻くん！！」

それはツンツン頭で何処かデフォルメされた当麻・・・の頭（何処か暗黒の宇宙そらで不幸属性の少年がクシヤミをし、目の間に居た少年に掛かり関節技を掛けられた）。

「んふふっゝゝこのもふもふ感！やっぱり最高なの！」

そのゆっくり当麻をベット上に置いてある、同じ様な感じの美琴

のぬいぐるみ（なのは曰く「ゆっくり美琴お姉ちゃん」）の近くに置く。

「よしっ！・・・今度はゆっくり氷華さんでも作ろうかな？」

次に作る物を考え、紙に作画しようとした瞬間。

キイイイインツツ

世界が変わる。

「マスター！」

「結界？！（此処《部屋》じゃ狭い、外に出ないと！）」

即座に今すべきことを選択し、レイジングハートを起動しバリアジャケツトを纏って窓から外に出る。そして・・・。

「シグナムさんっ！？」

結界の中では既に戦闘が始まっていた。一人はピンクの髪をポニーテールにし甲冑服を纏ったシグナム。もう一人は仮面を被った青い髪の青年。両者共に他には居ないようで、お互いに剣と拳がぶつかっては離れ、またぶつかっては離れる事を繰り返している。傍から見ているだけでも青年の方は錬度が高い事が窺う事が出来る。

「って、助けに行かないと！」

「解析完了。どうやらこの結界はベルカ式の様です」

「と言う事はシグナムさんが張ったのかな？とにかく行こう、翼を！」

「フライヤーフィン、展開」

足の側面からピンクの翼が生え空を飛ぶ。何が起こってるのかシグナムに聞きに行く為に。

S i d e .. シグナム

空中戦からビルの上屋上に降り、陸戦に切り替える。足元を気にしない分、目えの前の的に集中できる。

迫りくる拳撃を剣の腹で反らし返しに一閃するが、決して深追いせず後退し楽に避される。逆に此方から迫ろうとして一步踏み出そうとするが、間合い逸らされ攻め込むタイミングを失う。

「(・・・接近戦闘に慣れているな。ミッド系では珍しい・・・中々に楽しい一時だが。これからの事を考えると・・・興が乗らんな)」

「ヴォルケンリッター」

この事に自分達は賛同した。元々我らの事情にあの者を巻き込めない。唯、出掛ける前に見たヴィータは・・・高町が込めたカートリッジの弾丸をずっと見ていたな。

「(ヴィータは、優しいな。それに我らは良い友を得られたものだ)」

「ツーーーー！」

突如、相手が後方へ飛び去る。そのすぐ後に先程まで立っていた場所にピンク色の砲撃が通過する・・・来たか。

「シグナムさん！」

何の警戒心もなく私の近くに降り立つ。たった数カ月で私も信頼されたもんだな。

「さっきの人は？！何があったんですか？！ヴィータちゃん？！シャマルさんは？！ザフィーラさんは？！あと！あとはやてちゃんは？！」

「落ちつけ高町。・・・主たちなら無事だ、帰る途中に襲われたのでな。急場しのぎだが結界を張らせて貰った」

嘘だ。この結果はシャマルが張った。予め管理局の戦力を聞いてヴィータもザフィーラも近くで待機している・・・後は・・・。

「高町・・・こんな時に何だが、お前には感謝している」

「シグナムさん？」

高町が困惑している・・・それもそうか、これではまるで別れの挨拶に見えるからな

「シグナム・・・」

ヴィータから突然念話が聞こえてくる。

「（・・・ん？・・・ああ、分かった）ヴィータも・・・口には出さんが今の生活が気に入ってる。シャマルも、ザフィーラも、だ」

念話で話しかけてきたヴィータの思いを口にする。

「こ、こんな時にそんな事言うなんて・・・ッ！？まさかシグナムさん達、はやてちゃんを置いて行っちゃうの？！」

「それは無い・・・高町。他者を想えるお前は優しい・・・それゆえ、我らと一緒に居てはお前の人生が駄目になってしまう・・・だから「嫌！！」・・・高町」

精一杯の説得も高町に拒絶される。

「（そうだな・・・お前は、そういう性格だったな・・・仕方ない・・・いや、違うな。私が、私達が決めた道だ！・・・ならばッ！）レヴァンティン！！」

「カートリッジロード」

「ッ！？」

レヴァンティンから葉莢が一つ排出されシグナムの魔力が上昇する。ソレに気付いたなのは、即座に飛行魔法を発動させ空中に逃げが。

「悪いが、この距離は私の間合いだ！紫電一閃！！！」

「プロテクション！」

一気に距離を縮められ、炎を纏った一撃が迫る。その攻撃をレイジングハートが咄嗟の判断で防御魔法を発動させるが。

「叩き斬る！！」

パキイイイイイン！！

プロテクションごと高町を押し切り、レイジングハートの柄を半ばで叩き斬る。そして、その凶刃は……。

「ジャケットパージ！」

高町を斬る寸前で、高町のバリアジャケットの上着が外れ爆発する。

「煙幕……ふむ、やはりあの者たちの相性は良い様だなへまだか？」

レイジングハート緊急手段としてバリアジャケットの上着を爆発させ、その反動で緊急離脱すると同時に煙幕を張りシグナムの目を眩ませたのだ。

「もうすぐよ……私は行くわね」

「へああ、出来るだけ早くに頼む」

「分かってるわ……時間が無いもの」

念話が途切れる。いつの間にか戦っていた青年も消え去っていた。

「さて、時間一杯まで粘るか」

そう呟き、高町を追いかける。

「はあ……はあ……大、丈夫？レイジングハート」

「マスターこそお怪我は？咄嗟にジャケットをパージして間合いから離れましたが」

「ちよ、ちよっとキツイかも……連日寝るのは夜遅くだったし。それよりも……」

レイジングハートを見る……持ち手の部分が半ばから断ち斬られていた。すぐさま2つに斬られていた柄を繋げ、魔力でリカバリさせる。

「ありがとうございます……やはり強いですね。デバイス自体は頑丈なアームドデバイスですが、戦闘経験が半端ないです」

「……ねえ、レイジングハート」

「…………マスターを遠ざける為でしょう。私の推測では恐らく……」

視界の中。ビルの中にシグナムが入ってくる。

「管理局がこの世界の周辺に来ていると思われます」

「——正解だ」

レイジングハートの答えに、シグナムは答える。

「お前を犯罪者にしたくはない……分かってくれとは言わない。今までお前には世話になったし、この件が終われば再び世話になる事もあるだろう。恩を仇で返す様な事は私としては心苦しい……だが」

顔を上げたシグナムの表情は……冷静さを装おうとして失敗した表情をしていた。

「我らはこの道を選んだ……レヴァンティン！」

「カートリッジロード！」

剣を逆手に持ち、シグナムの足元に魔法陣が現れレヴァンティンから葉莢がまた一つ排出され炎を纏う。

「この一撃で倒れてくれ、フレイムシュランゲ！！」

逆手に持ったレヴァンティンを床をスレスレで振りかぶり、なのはに向かつて一直線に炎の斬撃が疾る。接近戦しか能の無いシグナムが考え出した中距離用の技だ。

ドゴオオオオオオン！！！！

その炎蛇が命中し爆発が起きる。

「……速いな（来たか……）」

だがなのはには当たらなかった。当たる直前に横合いから入り込んできた人物に助けられたのだ。

——金色の髪に黒き衣装

その人物はなのはを静かに下ろす。その人物を見たなのはの顔が驚きの表情になる。

——黒きマントを翻し、戦斧を構える

その仕草だけで戦闘訓練を受けた事のある者だとシグナムは感じ取った。

「何者だ？」

そして、その人物は言った。

「と、通りすがりの、友達だ・・・ッ！」

「（ネタに走っちゃ駄目だよフェイトちゃんッ!?!）」

——フェイト・テストアロッサ参戦

裏切りは誰の為（前書き）

書いていくほどにフェイトがアホの子キャラになっていく・・・

裏切りは誰の為

——アースラ

オペレーター達が忙しく腕を動かしている。

「結界内に魔導士三名の侵入・・・成功しました！」

「・・・結界の術式を特定！・・・古代ベルカ式の封時結界です！
！」

そこから次々に状況が伝えられる。それを聞き判断するのは一人の女性、リンディだ。

「古代ベルカ式・・・まさかとは思ったけど」

「恐らくは彼らでしょう」

ブリッジの上段。そこにいるリンディとクロノの顔が険しくなる。その脳裏には11年前の悲劇を思い出していた・・・だが。

「この件、必ずここで終わらせるわよ」

「分かってます・・・あんな悲しい事は、これ以上増やしちゃいけない」

二人は心が強かった。管理局員として、一人の人として・・・そして何よりも、あの悲劇を体験した者としてこの事件を解決させる、そう決意した。

「結界内の映像、出ます！！」

「第3世界、地球の周囲にて次元艦の反応アリ！」

「・・・所属は？それと通信回線開ける？」

最後の報告に即座にリンディは反応し、クロノは頭を抱える。こんな予想外の事をやってのける人物を思い出したからだ。

「回線、繋がりました！正面モニターに出しますか？」

「いえ、此方に回して」

オペレーターに指示を出すと同時に、リンディの前に空間モニターが現れる。

『ぬを？！やめろ浜面！そっち、そっちには腕は曲がらない？！』

『うつせええ！クシヤミぐらい手で押さえろ！！汚えだろうが！！』
『とうま！お腹が減ったかも！！』

『さつき食ったろう！？お婆ちゃんか？！・・・待てインデックスサン？今のは俺が悪かった悪いです悪うござんしただから齒を鳴らさないで大きく開けないで俺の頭を両手で固定しないでやめ、やめっ、やめてえええええええんぎやあああああああ———』

『すまんが、一度切るぞ』

通信が途切れ、アースラのブリッジを沈黙が支配する——。

「おい、見たか？人体構造上あり得ない方向に向いてたぞ？」

「それよりもあの女の子の頭、一瞬だけ体の3倍は大きく成らなかったか？」

「最後に出てきた赤髪の子、タバコ啜えて無かった？」

「——事なく、オペレーターの局員達（エイミィ除く）がコソコソと話し合う。」

「んんっ！海鳴内の結界の監視を怠らない様に！」

「「はっ！」」

リンディが修正し、話し合っていた全員が真面目に仕事に取り組む。

「バカばっかだ・・・ッ」

クロノがポツリと呟く。

「——再び通信を開いたのは戦いが終わってからだった

——海鳴市内

向かい合う二人。フェイトとシグナム。先程までいたなのはは後から来たユーノとアルフに任せ、離れて貰う様に頼んだ。

冬の冷たい空気が二人の間を通り過ぎる。と、フェイトの体が一瞬にしてブレる。否、フェイトが得意としている高速機動戦に持ち込んだのだ・・・その攻撃をシグナムは受け流す。

鎌を振るうが避けられ、魔力弾を撃つが剣で断ち切られ、逆に接近され高速移動魔法で離れる。

「(強い・・・ッ!)」

「(ほう・・・)」

ただ一言で相手の实力を表せた。

「だがまだ甘い!」

「ッ——」

再び接近戦を持ち込まれ連撃が迫る。相手の戦術を分析すればただ単純に『接近して斬る』それだけだ。それだけゆえに下手な小細工も策も要らず、純粋な力量がモノを言う。

「はあああッ!!」

「(右上!!)——くっ!」

剣閃が迫る。それを展開した魔力刃で防ぐ・・・鍛えた動体視力でも剣閃を捉えるのがやっと、アリシアの第三者からの空間把握の協力で漸くまともに打ち合える。

「らああああ!!」

「むっ——」

横合いからアルフが拳を構えシグナムに迫る。それを剣の腹で往なし離れる。

「チェーンバインド!」

「ッ!」

両側から翠色の魔法陣が現れ、シグナムを捕える。

「はあ、はあ、はあ・・・ッ(大丈夫?! フェイト?!)(大、丈夫・・・心配してくれてありがとう、アリシア)・・・はあ・・・」

アルフ、ユーノ・・・なのは？」

息を整え、近くまでやって来たユーノたちになのはの状態を聞く。他者を気にする余裕が無かった為、なのはの状態を気にする事が出来なかったのだ。

「大丈夫。今は回復魔法陣と結界を張って安静にして貰ってる・・・ただ、疲労からか寝ちゃったけど」

「・・・そう」

ユーノの言葉で漸く一息つく。ただユーノの診断には誤りが在り、単純に寝不足だったのでユーノの回復魔法によって眠ってしまっただけだ。例えるなら寝不足で登校し日が当たる席に座ってしまった様なものだ。

「さて・・・アンタの事をしゃべって貰おうか？」

（フェイト、フェイト。自己紹介）

「あ、じ、時空管理局所属囑託魔導士フェイト・テスタロッサです。直ちに武装の解除及び結界の即時解除をして此方の指示に従って下さい・・・えっとコレで良いんだよね？（・・・フェイト。それは無いよ）・・・え？」

アルフの言葉とアリシアに言われ、慌てて自己紹介を始め警告指示する・・・カンペを読みながら。その事をアリシアに指摘され自分のミスに気付く。

「はうっ!？」

「「「（・・・）」「」」」

慌て過ぎて予行練習の癖で持っていた紙を出してしまった。慌てて誤魔化そうとしたが、それが余計に周りから白い目で見られる。

「（ど、どうしよう?! アリシア!? 何か余計に抜け出せない穴に嵌った気分だよ?!）（ごめん、無理）」

表面では冷静さを保っているが、脳内ではアリシアに泣きついていた。

「鋼の軛いい!!」

その時、更なる介入者がユーノのチェーンバインドを引き裂く。

自由になったシグナムは即座に後方に下がり・・・介入して来た人物と並び立つ。

「珍しいな、お前が戦場で動きを止めるとは」

「いや、すまん・・・アレを見たら、な・・・」

「はうっ?!」

同情の眼差しがフェイトの精神を貫く。

「あゝウチの御主人は放つといて、アンタら何者よ? 最近噂になってる魔導士襲撃事件の犯人かい?」

最近頭のポンコツ具合が進行して来たフェイトを放ってアルフが話を進める。後ろで更にフェイトが落ち込んだがフォローはユーノに任せた。何故なら使い魔とは、主の足りない部分を補うのが役目だからだ。

「そうだ(目的は達したが・・・さて、どう逃げるか)」

シグナムもアルフの後ろを無視して話を進める。内心では逃走ルートを思案する。シグナム達にとって、今回の襲撃は管理局を呼び寄せた時点で目的は達成した様なものだからだ。

「何が目的?」

「言えんな(もつとも、『表の目的』なら管理局なら知っているだろうな)」

「あっそ・・・なら、ボコッてから話を聞くよ」

「・・・気が合うな。私も倒してから逃げるとしよう」

アルフが拳を構え、その後ろでも持ち直したフェイトとユーノも戦闘態勢をとるのを見た途端、シグナムも剣を構える・・・どうやらバトルジャンキーの本能を刺激したらしい。隣に居るザフィーラは呆れた表情だ。

「ならブッ飛ばえええ!!!」

「な――ッ!?!」

だが、そこへ新たな人物が鉄槌を振り回し割り込んでくる・・・狙いはユーノ。とっさに防御魔法を発動させるが呆気なく破壊され吹っ飛ばされる。

「「ユーノ!?」」

横合いから飛び出したヴィータにユーノが吹っ飛ばされ戦いが始まった。

「余所見をしている暇はないぞ?」

「くっ——ッ」

シグナムが再びフェイトに迫り。

「ゆくぞッ!」

「——来なよ!デカブツ!!」

ザフィーラとアルフの拳が同時にぶつかる。

Side..なのは

「ん.....私、寝ちゃってた?」

辺りを見渡すと、どうやらビルの上で寝かされていた様だった。

足元には翠色の魔法陣、ユーノが張った回復用の魔法陣だ。

「おはようございます、マスター。寝起きで恐縮なのですが、何処まで覚えていらっしゃいますか?」

レイジングハートの声で先程起きた事を思い出す。

「そうだ!フェイトちゃん!シグナムさんも!?」

「まだ戦闘中です。現在フェイトさんとシグナムさん、アルフさんとザフィーラさん、ユーノさんとヴィータさんがぶつかっています」
見渡せば遠くで金と紫、翠と赤、オレンジと青白い光がぶつかっているのが見える。

「ッ.....止め、ないと.....!」

〈なのはちゃん〉

「.....シャルさん?」

回復したとは言え、未だフラ付く体に活を入れ立ち上がったなのはに届く念話。シャルからだ。

「貴女の気持ちは嬉しいわ・・・でもね、これは本来私達が背負うべき宿命なの」

「それは・・・そう、だけど」

シャルの言葉を否定したいのに否定できない。自分にとって最優先なのは当麻や美琴であるように、彼らにとってはやての幸せこそが優先される事だから。

「大丈夫。私達ははやてちゃんからは離れないし・・・この世界を壊したくない。それは一緒に行動しなくてもなのはちゃんと同じ、でしょ？」

シャルの労わる様な優しい言葉が、なのはの精神を癒していく。確かにインデックスとの話し合いで最終的には管理局の技術や設備を必要としていた、だが管理局から見れば闇の書はS級危険物のロストロギアだ。動く事も戦う事も出来ないはやてが主だと知られれば即回収・封印される。

それゆえに、シグナム達は手間を掛けたのだ。インデックスからは十字教に、当麻を通してグレアムからは自分たちの後ろ盾になってくれそうな組織『聖王教会』に保護してもらえるように。

「なら、今この場から逃げないとね・・・それが私に出来る最善の一手」

「・・・ありがとう・・・それと、ごめんなさい」

シャルからの念話が途切れる。

「やれる？ レイジングハート」

「マスターの望みのままに、カノンモード及び術式選択。スターライトブレイカー、セット・・・広範囲攻撃で結界を破り管理局の観測を一瞬だけ眩まします」

レイジングハート頭上に構えらるとなのはを囲む様に魔法陣が現れ、周囲から魔力素をかき集める。

「カウント60・・・53・・・48」

なのはが制御に集中し、レイジングハートがカウントと同時に周囲の魔力素をかき集める。それと同時に、シャルが他の3人に指示を出したのか、なのはを狙う様に段々と近づいて来る。

「30・・・29・・・28・・・27」

だが移動速度を考えれば数秒の差で間に合わない。恐らくはそう見せかけて一気に別方向で去るのだろう。

「15・・・14・・・13・・・集束率規定値をクリア・・・9・・・8」

「スターライト——」

〈ごめんなさい——〉

ズッ——

「あ——」

スターライトブレイカーを撃とうとした絶妙のタイミングで・・・なのはの胸から腕が生える。否、なのはは見た事があった。それはシャルが得意とする特殊転移魔法『旅の鏡』だ・・・そして、その手には紅い結晶の様な物が掴まれていた。

「マスターのリンカーコアの異常を確認！！直ちに——」

「ス、スターライトッ、ブレイカーアアアア！！！！！！」

——オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

パキイイイ——

レイジングハートが異常を感知し、緊急で魔法の行使を止めようとするが・・・それよりも先になのはがトリガーを引きスターライトブレイカーが上空へ放たれガラスが碎ける様に結界をブチ破る。

「——っ——はあっはあっ、はあっ——ッ！」

「Emergency! Emergency! バイタル低下! 呼吸及び脈拍の異常数値を確認!! 直ちに医療班の要請を!!!!」

「「「なのは！！」」」

なのはの状態を見てフェイト達はシグナム達の追跡を諦め、ユーノとアルフは即座に回復魔法を掛ける。

『直ちに此方に搬送します！！エイミィ、医療班に連絡を！』

『了解です！！』

薄れゆく意識の中でなのはは笑った。それはやり遂げた事か、シグナム達が無事に逃げれた事か、それとも・・・誰かが傍にいてくれる事にか。

裏切りは誰の為（後書き）

今回は何か短い気がするのでおまけでちょっとした予告

出会えば、戦うことは決められていた・・・。

「『デュエル!!』」

二人の男女が対峙していた。片腕には不思議な機械を付け、もう片方にはカードを持っていた。

「先行、俺のターン!!! いきなりで悪いが手札から『技術者KAP PA』を召喚!」

1人が腕の機会にカードを入れると、男の前に水色の衣装を纏い大きなリュックを背負った女の子が現れる。

「行けっ! KAP PA! 相手にダイレクトアタック!!」

男の命令に従い少女が相手に攻撃を仕掛ける。

「甘い、手札から速攻魔法『二重結界』を発動」

だが対峙する少女は慌てる事無く、手札から一枚のカードを腕の機会に翳す。すると少女の前方に半透明な幕が現れ、KAP PAからの攻撃を防ぐ。

「くっ・・・やはりその紅白の巫女服は伊達ではなかったか!？」

「・・・コレ、普段着」

「――グハッ?!」

何故か少女の答えを聞き・・・男が吐血する。
おわれ

うん、ただの妄想なんだ。別に東○を更にクロスさせようと思った
ら何故かカードゲームになったなんて思っていないんだよ? ○☆方☆

王とか考えてないよ？本当だよ？

なのはのデッキの切り札が魔界の神だとか、美坂家の双子が「シンクロ召喚ッ！（ってとまりは言ってみる！）」（っとはずみは言ってみます）」とか、アクセルが「出るよォ！アルティメットサディスティッククリーチャーアアア！」とか、五和が「妬ましいです」とか言う事はないデスヨ？

戦いの痕《あと》（前書き）

A・S編は他では見られないパターンにしようと思った

その結果がコレだよっ！

では本編をどうぞ（――）っ

戦いの痕《あと》

Side…当麻

——アースラ

現在アースラの休憩室で静かに座っている。

あの後、一度海鳴の海岸で十字教の艦を降りアースラに転移して来た（本来ならなのはが収容された本局とやらに行きたかったのだが、転送ポート以外での転移は禁止されている為に行けなかった）。ちなみに今いるメンバーは俺とステイルにインデックスだけ、浜面と海鳴で別れた。

「意外だね。君は身内が傷ついたら真っ先に激怒するタイプだと思っていたんだが・・・いや、そうでもないか」

対面に座っているステイルが俺の手を見て意見を変えた・・・力を入れ過ぎて青白く変色し、滲み出た血で彩られた片手。もう片手は俺の腿を枕にして寝ているインデックスが握っている・・・コイツは本当にフリーダムだな、白と青と所々金色的な意味で。

「そう思うならタバコ吸うの止めろ」

「それは失敬」

タバコを揉み消すが、恐らくはインデックスがいるからだろう。

俺だけだったら絶対に吸い続けるな。

「お待たせ」

「ッなのはは?!」

待合室にリンディが入って来た・・・と言うか俺たちを呼んだ本人だし。取り敢えず俺にとって一番重要な件を聞くことにした。

「大丈夫よ。今は容体も安定してるわ・・・ただ、医療班の話によれば数日は魔法の行使は出来ないわ」

「魔法云いはどうでもいい、とにかく無事だって事は理解した」

当麻のどうでもいい発言にリンディの口元が一瞬だけヒクついたが、本当に一瞬で元に戻った。もっとも俺もステイルもその一瞬を

見逃さなかったが。

「話と言うのは他でもないわ・・・今回の件よ。十字教所属の『^{セサリウス}必^ネ要悪の教会』、その中でも特に重要人物の位置にいる彼女が、なぜ地球に居るのかしら？」

随分と痛い所を突いて来た。幸いインデックスは既に深い眠りの中に旅立っている・・・よって。

「そう言えば俺もそこら辺詳しく聞いてなかったな（チラ）」

ステイルにパス。・・・あ、ステイルの奴、舌打ちしやがった。

「・・・お察しの通り、僕らの目的も闇の書・・・正確に言うならば書の構成と、中に記述されているかも知れない魔術の把握だ」

「魔術の記述か、それって出来るのか？」

「さてね、そればかりは中身を見てみない事には分からないさ。そもそも近年では魔術の行使にリンカーコアを使用する事も出来るが、使わない人・・・と言うよりもそんなモノ持っていない魔術師が多いからね」

管理局の一局員としては欲しい人材だろう？と言って締めくくった。って、お前挑発すんなよ？！

『艦長・・・すみませんお取り込み中でしたか』

その時、行き成り空間にモニターが現れエイミーから通信が来る。

「良いタイミングで来てくれたエイミー！今度海鳴近辺のデートスポット教えるぞ！」

『えっ！？良いの？・・・っと、そうじゃなかった。艦長、本局のマリー・・・じゃなかった、マリエル・アテンザ技術官からの連絡なんですが・・・見て下さいコレ』

「————ツ・・・本気なの？あの子達」

『そう、思いますよね？』

何やらリンディとエイミーの二人で納得し合ってる。

「おい、何かあったのか？」

「ああ、ごめんなさい・・・もしかして貴方の影響？」

「何がさ？！」

何やら理不尽な評価を受けたので、画面をのぞき見る。そこに記述してあったのはたった一言。

“CVK-792の実装を要求します”

何のことかさっぱりなのでエイミーに目で訴えてみる。

『CVK-792。ベルカ式カートリッジシステムの事だよ』

「ミッド式のデバイスは構造からして実装出来る様にはなっていないの。本局の方でもどうかして実装出来ないか試みてはいるのだけれど・・・よりによってインテリジェントデバイスに載せるなんて、あの子達も随分と思いきった無茶を言うもんだわ。使用者への肉体の負担も馬鹿にならないってのに」

『艦長、それが・・・レイジングハートからは改造プランも提出された様でして・・・特に問題点も見られないんです』

あの馬鹿デバイスウウウウウ？！

「そうね・・・なのはさんの意志を尊重するわ」

それって暗にOKって言ってるよな？　つか・・・。

「・・・引き込む気か？」

「局員として登録するんじゃないわ。本件は正式に闇の書事件として私達アースラに事件解決の命令が下ったわ。幾つかの部隊にも応援要請は出したけど・・・実質動いてるのは私達だけ・・・戦力が足りないのよ圧倒的に」

俺とリンディの間に沈黙が支配する。要はプレシアの時と同じ臨時のアルバイトとして雇うということだった・・・俺としては、なのはにはこれ以上危ない事には首を突っ込んで欲しくない、と言うのが本音だ。

「失礼するよ」

その沈黙を破ったのは、俺でもリンディでもステイルでもインデックスでも無かった。以前会った時と違い管理局の提督服を着たグレアムだった。

「グ、グレアム提督！！入らしてたんですか？」

「やあ、リンディ提督。なに、デスクワークが意外と早く終わったんでね・・・そちらとは始めましてかな？時空管理局提督ギル・グレアムだ。よろしく」

「・・・始めまして《・・・》上条当麻です」

「どうやら、初対面を装うらしいので取り敢えず俺も挨拶を交わす。

「あの。提督はどうして此方へ？」

「おおっ、そうだった・・・11年前のケリを着けたくてね」

「ツーーーー・・・と言う事は・・・」

「ああ、今回の件。私も協力させて貰おう・・・それに、私の部隊から被害が出ているのでな」

「もしかして自分の部隊を使ったのか？・・・このおっさん、マジだ。」

「私のコネで幾つかの部隊には空いてる時間で手伝って貰えるようになった・・・それと、君の所に居るスクライアの少年に頼みたい事があるのだが」

「ユーノさんにですか？・・・分かりました、今後の事も話し合いたいのですが・・・」

「・・・ああ、君の執務室にでも行こう」

リンディが一瞬だったが俺の方を見た。恐らくは局員、もしくは提督クラスの話し合いの為に部外者が入らない場所を選んだんだろう。そしてグレアムもそれに応じた・・・狸だな。はやても狸だし実は血が繋がってんじゃないやねえ？

「取り敢えず・・・俺達帰って良いのか？」

「さあね」

まずはインデックスを起さないと。その前になのはと合流した方が良いのか？

Side…なのは

医者の人がスキャナーの様な物で胸のあたりを調べる。確かリンカーコアの状態を調べるモノだって言ってた・・・別にどうでもいいのに。

「（あ、訂正。やっぱり今回の件が終わるまで魔法は有った方が良いの）」

「ふむ。リンカーコアに損傷は見られながら・・・4日程経てばまた魔法を使えるようになるよ」

「どうやら、ただ指を咥えて見ているだけの観客にはならなくて済む様だ。」

「えっと、ありがとうございました」

「はい、お大事に。・・・ああ、見舞客が来てるけど会うかい？」

「取り敢えず通して貰う事にした。見舞客？・・・当麻くんかな？それともフェイトちゃん？」

「・・・なのは」

「あ、フェイトちゃん」

お互いの名前を言い合った後、お互い無言になる。

「「・・・」」

しばらく沈黙続く。それもそっか、手紙では何度かやり取りしてたけど、実際に会うのはあの事件以降だから久しぶりだし・・・。

「（あんな事あったし・・・）」

意識を失う瞬間に聞こえたシャルさんの声、その前のシグナムさんの攻撃・・・今でも正直言って戸惑っている。が、ハッピーエンドを目指すのは当たり前だとして、何をどうすれば・・・どうやって・・・どんな風にすれば皆が笑っていられるかを延々と考えだし、次第に

止まらなくなる。

「な、なのは！」

「へ？・・・な、何？フェイトちゃん？」

思考の渦にグルグルと掻き回されている所にフェイトちゃんから声を掛けられた。危ない危ない、フェイトちゃんに心配掛けさせちゃうところだったの。

「えっと、なのは・・・その、リボン・・・は？」

一瞬なんの事かさっぱりだったけど、フェイトちゃんのツインテールを見て思い出す。

フェイトちゃんが身に着けているツインテールの髪留めは、淡いピンクのリボン。それは別れの際に交換したなのはのリボンだった。そして、今私の髪型は片側に一纏めにしたサイドテール。しかもリボンは一つしか使っていない。

「え？えっと・・・に、似合わない？」

「ううん！！似合ってるよ！」

言えない。本当は当麻くんが友達大作戦！とか言ってこの髪型を進めてきたって。

「フェイトちゃんは？あの後戦ってたみたいだけど」

「私は大丈夫だけど、結構バルディッシュに無理させちゃって今はメンテナンス中・・・レイジングハートも・・・最後に撃ったスターライトブレイカーの余波を全て受け止めたみたいでボロボロだったから同じ様に・・・行く？」

その誘いに直に頷いた。

「―――本気？！」

「あちゃー、あのツンツン頭の影響でも受けたのかね？」

「またヤツか！！！」

メンテナンスルームに入った途端そんな声が聞こえた。

「ツ——マスター！ご無事でしたか？！」

レイジングハートが私に気付き、釣られてその場に居たユーノくん、アルフさん、クロノくんも声を掛けてきた。私もそれに返し何があったか聞くと・・・グナムさん達が使用していたデバイスに付いていたカートリッジシステムの事を、クロノくん経由で聞いたレイジングハートとバルディッシュが自分にも載せろと言ってきたらしい。

「本気なの？レイジングハート」

「バルディッシュも。聞いてた限りだとバルディッシュも危ないんだよ？」

フェイトちゃんの言う様に以前聞いたシャマルさんの話によれば、ベルカの騎士の様に鍛えられた肉体を持った人でもカートリッジの連続使用は危険を伴う物らしい。

ましてや、インテリジェントデバイスはアームドデバイス程強度は高くない。それゆえにカートリッジ使用時に、封入した魔力の反動に耐えられないって話だった筈。

「ご心配なくマスター。その事ならば以前から考えておりました改修プランをエイミー様に提出した際に、問題点の洗い出しは終わっております」

「・・・強く成りたいんだね」

「イエス。マスターの負担は全て私が引き受けます」

「・・・クロノくん・・・」

「クロノ」

しばし思考が巡回した後、なのはとフェイトはクロノに声を掛ける。

「・・・はぁ・・・彼の無茶振りそっくりだな。分かった、技術部にレイジングハートとバルディッシュ用の改造プラン用の部品を手配しておく・・・恐らくは4日程掛かるだろう。・・・それと、なのは」

「協力する！」

クロノがなのはにこの件へ参加するかどうかを聞くが、即断でなのは答える。

「分かった。ならブリーフィングルームへ行くぞ」

Side…シグナム

私達はあの後四方に別れた後、シャルの転移魔法で一人ずつ合流して家に帰った。

そして、家に帰った時に待っていたのは・・・既に夕食時を過ぎても戻ってこなかった私達（シャルの携帯は電源が切ってあった）を心配していた怒れる主だったが・・・それも泣いた跡があるヴィータを見た瞬間静まった。

「お風呂沸いたで〜？シグナムも入る？」

「いえ、私はこの後少し素振りでもしようかと思ひまして。お風呂はその後頂きます」

「そう？ほなら一緒に入ろうヴィータ」

「珍しい事もあるもんだな、シグナムが一番風呂を遠慮するなんて。って、先行くなよはやて?!」

私の事を珍しがっているヴィータを置いて主はやては浴場に行ってしまったので、ヴィータも慌てて追いかける。

我らの内誰か一人は主はやての傍に居る。それは足の不自由な主の身の回りの世話は私達自身からやり始めた仕事だった。

「・・・今日の戦闘か？」

思考の海に浸っていた私を足元に居たザフィーラが現実に取り戻

す。

「ああ」

セーターを少し捲る。脇腹の辺りに斬られた様なアザが付いていた。「お前に一太刀入れるか。近年の幼子というのは末恐ろしいな」

「いや、二太刀だ」

左肩を抑える。丁度服が覆い被さって見えないが、左肩に誘導弾が当たった痕がある・・・少し押すと痛みが走る。

「接近戦と同時に誘導弾の制御をするとは・・・高町といい、あの少女といい。最近の子供というのは良い才能を持っている」

最近行った覚えのある道場。確か天草式格闘術と言ったか？そこに居た神裂と言う少女、あの者もあの年で良い体捌きだった。

「回復魔法でも掛ける？」

食器洗いを終えたシャルが話しかけて来る。

「気にするな、この程度ならしばらくすれば直るさ・・・それよりも、シャル。お前の方が疲れているだろう？何度も転移魔法を使用したんだ、お前の方が休むべきだ。それに・・・言いたくはないが、高町から蒐集したんだ。6、7日ぐらいなら蒐集しなくても主に問題は起きない筈だ」

それに、もうすぐ600ページを超える。そろそろ、向こうの準備を終えてくれなければ・・・我らは主はやても、世話になった者が生きるこの世界も壊してしまう。それだけはやってはいけない。

「分かったわ。なら少し、蒐集活動も減らしましょう・・・ヴィータちゃんの事もあるし」

シャルの一言でこの場の空気が重たくなる。

合流時、ヴィータは最後に合流した。その時に見たのは血が滲み出ているのにも関わらず、鉄柱に何度も拳をぶつけ、声を必死に殺しながらも泣いていたヴィータだった。

「この中ではヴィータが一番高町と親しかったな」

「一緒に遊びに行ったり、偶に模擬戦もしてたわよ」

「話によく出るのは高町や、その友人たちだったな」

沈黙が降りる。そして意味も無く窓の外、夜天の空を見上げる。

「（高町・・・許せとは言わん、恨んでも構わん。我らが願うのは筋違いだが・・・無事だろうな？）」

そして、高町関係で一人の少年を思い出す。我らを殺す右手を持つ者。

「お前は、我らの幻想^{想い}を殺すのか？それとも守ってくれるのか？」
小さく囁いた声はシャル達には聞こえず、空気に溶けていった。

Side…当麻

——アースラのブリーフィングルーム

あの後、ようやく起きたインデックスに事情を説明し、帰ろうかと思った時になのはからボディータックを喰らい、あれよあれよと言う間にアースラのブリーフィングルームに連れてこられた。

そして、現在なのはを膝の上に乗せて話を聞いている最中である・・・
・・・何だこれ？

「と言う訳で、我々アースラは今回の一連の『管理外世界内の魔法生物昏倒事件』『魔導士襲撃事件』等の一連の事件をS級危険物ロストログア『闇の書』が引き起こしていると見て捜査を行います」

正面のモニターの前でリンディが説明している・・・あいつら、本気ではやてを救う為に全部背負うつもりか？

「今回の搜索は過去に引き起こされた闇の書事件を省みて、複数の部隊と連携して行う事となりました・・・まずは、知ってる人も多いですが。現地協力者の高町なのはさん！」

「はい！！」

リンディに呼ばれなのはが勢いよく返事をする。ちなみなのは

のテンションが高いのはさっきからずっと俺に甘えまくってたからだ・・・ほら見ろ、一人身の男性からの視線がイテェし、女性陣も砂糖を吐いてる奴もいるぞ？・・・おいその女性スタッフ、なんで飢えた獣みたいな目でなのは見てる？

「次に十字教からインデックスさんとステイルⅡマグヌスさん」

「んにゃ・・・？」

「基本、別行動の独自行動だな」

二度寝していたインデックスが呼ばれて返事(?)をし、ステイルが俺の隣で皮肉る。

「そして、最後に・・・グレアム提督」

リンディの隣に立つ白髪のおっさん。だが歩き方を観察すれば鍛えられた猛者だと分かる・・・つーか一度戦ったし。

「始めましての者もいるだろう、ギル・グレアムだ。・・・まず、はじめに言わせてもらおう。私は11年前、当時の闇の書事件に遭遇している。そこで、有望な若者を死なせてしまった」

その言葉にリンディとクロノの表情が若干曇る・・・親しい人物だったのか？

「その時の悲しみを此処に居る諸君には味合わせたくない・・・キミ達の力を、貸してくれ」

その言葉と同時に、グレアムが頭を下げた・・・そう、下げたのだ。管理局の提督クラスの間が。

「へえ・・・あの提督。本気だね」

「だろうな・・・つーか、お前が他人を評価するなんて珍しいな？」
ステイルがそうグレアムを評価した。付き合いは短いがコイツはインデックスを中心にして考えてる節があるから、他人を評価するなんて本当に珍しいと思う。

「失礼だね・・・純粹に凄いと思ってるさ。自分の目的のためなら頭を下げる事も厭わない・・・僕は管理局の人間は好かないがソレⅡ局員全てが嫌いと言う事じゃないさ」

ホント、珍しい意見が聞けた。そして俺達の話しの合の間もグレ

アムの話は進んで行く。

「それと、管理局技術班からは実戦投入可能な資材と闇の書の解読可能な人材の派遣。教導隊のメンバーが現在の任務が片付き次第此方に合流してくれると言う報告も上がってる」

「次に、闇の書の騎士達『ヴォルケンリッター』の行動範囲を調べた所、第97世界管理外世界『地球』を中心として行動しているのではないか、と言う推測に当たりました。また、この世界周辺の世界には無人世界等の人が居ない世界の為、闇の書の主が居るのもまたこの世界の可能性がある為・・・作戦本部を異動したいと思えます」

その言葉になのはとフェイトが顔を見合わせる。つーかそれが本命だろ。

「場所は海鳴市。なのはさんのお家の近くになるわ」

「はっはっは！既に部屋は取ってあるぞ」

段々グレアムのおっさんがはっちゃけてきている気がする。

――これが今日起こった事。そして『闇の書事件』と呼ばれる事件の始まり

束の間の日常 part 1

Side…当麻

——休日

昨日アースラで作戦本部を海鳴に移転する事を聞いた俺達（俺、なのは、インデックス、ステイル）はあの後すぐに海鳴に帰った。家に着いた時には既に深夜近くと言う事もあり夜食を適当に作り（インデックスが駄々をこねた為）、風呂を沸かし（ステイルは何故か日本式の風呂の入り方を知っていた）、就寝時になのはに強襲され一緒に就寝（むしろ深夜に騒ぐ事を避ける為、俺が折れた）。

そして、現在・・・久方ぶりの雷帝美琴様の前で正座しております。

「（どうしてこうなった？・・・いや、原因は分かってんだけどな）」

恐らくは5日程行方知れずになっていた事だろう。

「で？当麻・・・なんでハラペコシスターが当麻の家に住む事になつてんのよ?!」

「そっちかよ?!」

「当たり前じゃない!? この家はいずれ私達のあ、愛の巣になるのよ?!」

「いつ決まったよ?! 俺の人生設計にはそんな事載ってないぞ!!」

「1万と2千年前からよ!!」

ネタ発言キターー!!!?

「今すぐ貴方と合体したいわ!!」

「自重しろ美琴ー!!」?

現在インデックスの引っ越し作業中である。メンバーは俺、美琴、氷華、双子、インデックス、ステイル（最早俺と美琴は戦力外）。ちなみに、なのははアースラ組の拠点を見に行った。

「上条当麻、彼女の荷物は取り敢えず運んだ。僕は一度報告書を出

しに1週間ほど離れる・・・彼女に傷一つでも付けたら、まずは君を焼き殺しに来るぞ」

「あゝはいはい。さっさと行って来い」

「当麻！まだ話は終わってないわよ！！これから私の上条家嫁入り計画の詳細を話してあげるんだから！」

それは言ったら無駄になる気がする。

Side..なのは

今日はフェイトちゃん達の引っ越し作業に手伝いに来た。あの後リンディさんの話では私の家の近くと言っていたから歩いて来たけど・・・実際に来ると本当に近かった。徒歩十分って・・・当麻くん達は警護も含んでるって言ってたっけ？

「フェイトちゃんー？これは何処に置くのー？」

「あ、それは服だからそっちのハンガーの近くに置いといて」

手に持った小さめの旅行鞆サイズの段ボールを見る・・・服？

「（服って・・・少くない？）」

「フェイトー服が入ったヤツがエイミイの部屋に行ってたよー？」

考え事をしていると、後ろからアルフさんが入って来た。手には同じ様なサイズがもう一つ。

「・・・アルフさん。フェイトちゃんってあまり物を持たないの？」

「ん？あゝ・・・ほら、フェイトの親を思い出してみ」

「・・・・・・・・何だか納得した。確かにあんな環境だと装飾とかに

興味を持つとは思わないの・・・むしろ何な奇抜なファクションセ
ンスが遺伝しなかったことに驚くべきかな？

「こんな時にリニスが居ればな」

「リニスさんって？」

アルフの口から知らない人の名前が出て来たので、気になったな
のはは聞き返す。

「ああ、あんたは知らないか・・・リニスはプレシアの使い魔でね。
フェイトの教育係で・・・フェイトとアタシに戦い方を教えてくれ
たのもリニスさ」

「でも、何時の間にか居なくなってた・・・多分、契約を果たして
・・・」

途中からフェイトちゃんの声が窄んでくる・・・話を聞いた限り
だと何だか凄い人なの。

ちよっと気まずい雰囲気になりながらも3人で衣服を整理する。

「3人とも、クロノ、が・・・あ」

「「「あ」」」

ドアの向こうからユーノくんが声を掛けて来るが・・・タイミ
ングが悪かった。私が手に持つるのはパジャマだからまだセーフ。
だけどフェイトちゃんとアルフさんが持つてるのは・・・下着。

「・・・ユーノ何か言い残す事は？」

アルフさんが拳を構える。フェイトちゃんも訓練用なのか細長い
棒を持つてる。

・・・そして、私はユーノくんの脇を通り過ぎる（別名・見捨てる）
。

「そういう事をするならドアを閉めてね？」

「「今度からそうするっ！」」

ギヤアアアアアアアア！！！

「そろそろお昼なの」

ドアの外、廊下から男の子の悲鳴が聞こえるが……気のせいなの。

「集まったな……約一名既に死にそうだが」

その場に居た全員の視線がユーノに突き刺さる（アルフとフェイトは気まずさで逆に視線を反らした）。

「取り敢えず始めよう……エイミィ」

「はいはい」

エイミィが空間モニターを起動させ居間に幾つかの画面を表示させる。その中にはシグナム達ヴォルケンリッターの面々と一冊の本『闇の書』が映っていた。

「この人達って……？」

「僕達の今回の搜索対象、ロストログア『闇の書』。そしてソレを守護する4人のヴォルケンリッターと呼ばれる守護騎士たちだ」

フェイトの疑問にクロノが答える。なのはの表情に若干影が落ちる。

「この人達ヴォルケンリッターはね、正確には人じゃないの」

「それってどうゆう事？……私みたいに生まれが特殊って事？」

エイミィの言葉にフェイトが若干顔を伏せながら言う。フェイトは自身の中に居る姉妹^{アリシア}に諭され、自分の生まれを否定するつもりは無い……が、それでも自分が人とは違う生まれ方にコンプレックスを抱いていた。

「フェイトちゃんとは……ううん、私達とは全然違うんだよ。この人達はね、この書を守る為に創り出された……何て言うのかな、実体を持ったプログラムって言うのかな。そう言う存在なんだよ」
エイミィがフェイトの為に補足説明する。

「……気になるのはソコだ。今までの事件の際にヴォルケンリッ

ターが感情的に戦闘していたなんて事は無かった」

クロノも暗い雰囲気は何とかしようと話を無理やりに繋げた。

「でも実際に戦った時には彼女達は悔しがったり、苛立ったりしてたよ？」

ようやく復活したユーノが話に加わる。実際ユーノと戦ったヴィータは攻撃が当たらない事に苛立ち、フェイトと戦ったシグナムは戦いの最中薄らとだが笑みを浮かべていた。

「そう、そこなんだ。今までの闇の書事件の報告書では彼らは感情と言うモノが無い様な話し方だった」

クロノの言葉になのはは見えない様に拳を握る。話したいのに話せない。今すぐにでも「はやてちゃんが皆を受け入れたからだよ」と言いたい。だがそれは今までの彼らの苦労を無にってしまうかもしれないからだ。

「ともかく、僕達が最優先で見つけ出さなければならぬのが、この闇の書の主となった者だ」

気付けばクロノの話は終わりに近づいていた。

「そこで、キミにやって貰いたい事がある」

「へ？」

「「？」」」

クロノが指名したのはユーノだった。突然の事にユーノは呆け、なのは達は疑問顔になり、エイミィは苦笑していた。

——時空管理局本局

場所は時空管理局所有の無限書庫。クロノくんの説明によると、時空管理局設立以来に起こった様々な事件や資料が纏められて保管されているらしい。

「わっ！？わわわ?!」

幾つか扉を潜ると、行き成り体が軽くなり浮き出した……これは、無重力？

「この無限書庫の中はね無重力になってるの……だから」
前を浮いて行くエイミィさんがさっきまでとは違う扉を開いて中に入る。それに続き私達も中に入ると。

「「凄〜い!!」」

「あんまり騒がないでくれ」

フェイトちゃんと共に驚きの声を上げるとクロノくんは怒られた。天井近くまである本棚には所狭しと本が詰め込まれており、更にそこから本が浮いていた。

「足の踏み場が要らないから、こんな風に出しっぱなしのままにしちゃう人が結構いるんだ」

エイミィさんが続きを言う……それって駄目なんじゃ？

「司書もいるんだがそれ以上に入ってくる資料の方が多いから中々片付かないらしい……っと居たか、ロツテ！アリア！」

クロノくんの視線の先にはネコミミを付けた女の子が二人……ライバル？

「お！クロ助じゃ〜ん！久しぶりぶり!!」

始めに活発そうな子がクロノくんに気付き……抱きついた。

「ちよっ!？止めッ！止めろッ!？あ、コラ！すり寄ってくるな？

！服を脱がすな!？」

「何だよ〜？良いじゃんよ〜気持ちいんだろ？うりうり」

うわあああ、この数秒で軽く15禁までいっちゃった。ユーノくんのは啞然としてるし、フェイトちゃんはアルフさんに目隠しされてる……エイミィさんは爆笑してるの。

「エイミィ」

気付いたらもう一人の子がエイミィさんの近くに来ていた。

「あ、アリア。久しぶり〜」

「ええ、そうね……ロツテ！何時までクロノとじゃれついてるの!」

アリアと呼ばれた少女はもう一人の少女ロッテ（さん？）に声を掛ける。するとロッテ（さん？で良いよね）はクロノくんから離れた此方にやってくる・・・その際にユーノくんを見て舌舐めずりをした。

「（ーゾク・・・ッ！）おおっ！？」

「どうしたの？ユーノくん」

何やら隣に居たユーノくんが行き成り奇声を上げる。

「な、何でもないよ！なのは！！」

「「？」」

フェイトちゃんと二人で首を傾げる。すぐ近くに居たアルフさんは何故か同意していた。

「で、此処に來たって事は・・・提案を受けてくれるの？」

「ああ・・・その為に使えそうな人材を連れてきた」

アリアさんの話に復活したクロノくんが話を進める。するとアリアさんがこちらを見る。より正確に言うならユーノくんを。

「・・・あの子？」

「ああ、あの小動物だ」

何か巻き込まれそうな気がするからしばらくはこの中を探索しようと思ひ・・・取り敢えずその場から離れた。

Side…当麻

「――と言う訳だ・・・恨むか？我らを」

「・・・いや。なのはの為を思っただろ？・・・どっちにしたっ

てなのはの奴ならこの件に自分から飛び込んでくるだろ」

現在、引越し作業の後、家にシグナムが昨日の件を説明しに来た。恩人を犯罪者にしなくなかったから態と遠ざけたって・・・恨めないだろうが。精神的に辛いのはそっちだろうに（主にヴィータ）。

「それで？あんた等は今後どう動くんだ？」

「書のページももう600台なのでな、向こうの準備が整うまで蒐集活動は少し控えめになるだろうな・・・完成してしまつては意味が無いのだろう？」

「うん。管理局のでーたーだと書の完成と同時に暴走が引き起こされるみたいだから」

シグナムの問いにインデックスが答える。

「お茶入りましたよ」

話し合いが終わつたのを見計らつたかのように、氷華が飲み物を持って入って来る。ちなみに美琴と双子は夕飯の買い出しとやらで家から出て行つた。

「ふむ、やはり日本茶と言うのは落ちつくな」

その意見には賛同だが・・・たつた数カ月で馴染み過ぎだお前。

「あ、みかん有りますよ？」

「ん、貰うわ」

「わたしもー！」

「・・・」

「どうした？」

シグナムが目で何かを訴えていたので取り敢えず聞いてみた。

「いや・・・何となくお似合いだなと思つてな・・・言い方は悪いが熟年夫婦の様だったぞ？」

「ふっ、夫婦！？そ、そそそそんなじゃないですよ？！そ、それは確かにそのい、一緒になれたらいいな〜とか思つてますけど！」

「はいはい、落ちつこうなく氷華〜」

何やら暴走し出した氷華を宥める為に空になった湯呑にお茶を入

れる。インデックスは我我かいせずにみかんを食べていた。

「聞き捨てならないわ!! ウチのすずかを放って嫁ですって!?!」
あんたどっから入って来てんだよ!?!?」あだツツツ!?!?」

何故か2階から降りてきた忍さんに一瞬で接近してツツコミを入れる……うん、神速の無駄遣いだな、医者から禁止されてるのに。

「ウチの美琴ちゃんを差し置いて嫁だ「アンタも黙ってろ!!」あだツツツ!?!?」

訳の分からない事を言いながらベランダから入って来た美鈴さんにチョップを繰り出す。

「いえ、此処は是非ともお嬢様の番と成られるのが宜しいかと「あんたもかっ!?!」ふっ、甘いですな」

更にキツチンから出てきた鮫島さんにもチョップを繰り出すが。

「受け止めたっ?!」

「お若いのにやりますね」

腕をクロスして受け止められた。

「……何やってるのよ? 鮫島」

「お姉ちゃんも玄関から入ろうよ?」

今度は普通にアリサとすずかが入って来た。

「「「たっだいまゝ!」」」

そのさらに奥から買い出しに行った御坂三姉妹が入ってくる。うん、ここお前らの家じゃないからな?

「ふむ……そろそろ帰らせて貰おう。あまり遅くなると主はやてに心配かけさせてしまうからな」

「ああ、じゃあ何か良い知らせが入ったら伝えるわ」

「よろしく頼む……それと、すまなかった」

「その言葉はなのはに言ってくれ」

「この件が片付いたらな」

そう言ってシグナムは家から出て行った。

おまけ

無限書庫——そこは管理局が集めた膨大ともいえる資料が保管されている場所。その膨大過ぎるゆえに無造作に放置された資料を探すのにも一苦勞である。此処に配属された者は過勞で倒れる者が後を絶たない事で有名な場所。

そんな場所ですばらく自由行動と言う事で書庫内にある本の表紙を見てみる事にした。

『良い上司の在り方―飼い犬版―』

『良い上司の在り方―少数チーム版―』

『良い上司の在り方―教会版―』

『これが私の上司様』

『マッドドクターGENSEI』

『東砲流弾幕の作り方』

『幻想郷縁記』

『邪神ナイア様が見ている』

『ミシャグジ様が見つめている』

『寺子屋デイズ』

『集束砲撃・外伝―これが攻撃と言うモノです―』

『今叫べ！亡霊の蹴り30選』

『地獄営業マンQ〜べ〜』

『最終兵器ほむら&まどか』

『ぱぴ☆よん』

『鈴科百合子の憂鬱』

『真・けったーボロく世界最後のアノ日く』

『魔人があああ！ツウェット！！』

『楽勝だ、SSSランク魔導士』

『これなんてヤンデレ？く男が離れられなくなる法則く』

『狙撃の法則』

『ブレイク・コンビネーション―必殺！秘奥義集―』

『最高評議会共』

『ド根性勇者王777』

『もし管理局の上司が現場の空気を読めなかったら』

『この複雑すぎるも美しき数式』

小説からマンガ、何かの論文や説明書、果てには何かの設計図なんてのもあった。

「何か、滅茶苦茶なの・・・幾つか気になる物もあるし、どれか読もっかな？」

その時、ふと目に入った物から目が離せなくなる。

『木イイイ原くウウウウウウウの次●連結方式くこれで貴様は造物主にして冥王く』

まるで本自体が手に取れと言われてる錯覚に陥り無意識に手を伸ばす。

「なのは？」

「――ッ！？な、なに？！フェイトちゃん！！？」

もう少しと言う所でフェイトに呼ばれる。

「？クロノがもう行くって」

「わ、分かったの！！」

フェイトちゃんに声を掛けられた瞬間に我を取り戻し。慌ててフ

エイトちゃんの後について行く。

——後日、此処にあった本は必要悪ネセサリウスの教会が凶悪な魔道書として封印処理して厳重保管したと聞いた

束の間の日常part1（後書き）

今回はおまけが作者にとって本編です（笑

皆さんは幾つ分かりました？

束の間の日常 part 2

Side..なのは

「はい！皆さん！今日から新しいお友達がこのクラスに来ました！」

「フェ、フェイト・テストロッサ、です・・・宜しく、お願いしましゅ！！？」

（（（（か、噛んだー！？））））

突然ですが、今日からフェイトちゃんが私の学校にやって来ました。昨日はユーノくんだけを無限書庫に置いて私達は帰って来ました（実際私は今現在魔法が使えず、フェイトちゃんは戦闘要員なので）。

そして、拠点に戻って来た私達を迎えたのは朝から居なかったリディさんでした。どうやら拠点のマンションのオーナーに挨拶に行ったり（後に聞いた所オルソラさんだった）、情緒教育を込めてフェイトちゃんを学校に行かせる為の準備をしていたそうです。

・・・制服を見た時のフェイトちゃんは顔を真っ赤にして喜んだの。

―――休み時間

「フェイトさんは何処から来たの？」

「えっと、イギリスから」

「何処に住んでるの？」

「えっと海鳴市の×××って所なんだけど」

「趣味はある？」

「くんれ・・・か、体を動かす事・・・かな？」

休み時間。転校生名物の質問攻めを受けて戸惑いながらも受け答

えしていくフェイトちゃん。ちなみに男子より女子の方が食いついてる。

「決め台詞はありますかっ!？」

「えっと・・・」

あ、こっち見てる。・・・あはっ♪困ってる困ってる♪

「好きなタイプは?！」

「え?」

「私の事はお姉さまって呼んで!」

「ええっ?」

「罵ってください!!」

「えええっ?!」

なんか段々と変な方向にズレてるの。

「受けですか?それとも「はい!そこまでー!」!」ちっ」

漸くアリサちゃんがストップをかける。

「そこ!舌打ちすんな!!」

最後に質問したはずみちゃんは舌打ちしたただけで大人しくなる・・・
・当麻さんのクラスもだけど、私のクラスも大概なの。

「さて、はじめまして。私はアリサ・バニングスよ・・・貴女の事はなのはから良く聞いているわ」

「なのはから?・・・えっと、は、はじめまして、フェイト・テストロッサです」

アリサちゃんの名乗りに、若干戸惑った感じはするがしっかりと名乗り返した。

「始めまして、月村すずかです」

「私はとまりだよ!ってとまりは名乗ってみる!」

「御坂はずみです、とはずみはすかさず名乗ります」

「そして私がクラスの清掃委員、土御門舞夏だ!」

アリサちゃんの自己紹介に続き皆が自己紹介していく。

「改めて、高町なのはだよ!」

私が最後に名乗り。

『ようこそ!!』

「よ、宜しく」

全員で歓迎する。それにフェイトちゃんも返す。

―――昼

「それにしても、なのはから聞いた限りじゃあもつとクールな感じがしたんだけど・・・結構、天然ね」

「天然・・・」

アリサの言う天然とは、休み時間の度に色んな質問をされては、時たま見当違いな答えを言う部分の事を言っている。

「（多分魔導士時のフェイトちゃんだと思うの）」

「それよりもなのはちゃんの家の近くなんでしょう？遊びに行っても良い？」

「あ！それ良いかも！」

「えっと・・・」

すずかの提案にアリサも乗って来た。だがフェイトからして見れば、現在住んでいる家はハラウン親子とエイミィと自分とアルフが住んでいるが、闇の書探索における前線拠点である。結局のところどうすれば良いか判らずになのはに助けを求める。

「結構広かったよ？」

「えうっ?!」

「ホント!？」

「わぁゝ行ってみたい！」

だがそんな視線にも気付かずに訪問フラグを立てるなのは。

「じゃあ！今日の放課後フェイトの家に行きましょう！」

「」「」「おー!!」「」「」

「増えてるッ!？」（みんな行動力あるな）（そんな事言ってる場

合じゃないよアリシア!!」

何時の間にか双子と舞夏まで来る事になった。

「(・・・せめて次元世界の技術は見つからない様にしていくれ
る・・・かな?) (頑張れ〜フェイト〜)」

アリシアは既に樂觀モードだった。

――放課後

「た、ただいま」

『おじゃましまーす!』

その場に居た全員がフェイトの家に遊びに来た。

「あら? お帰りなさいフェイトさん」

「ん? おお〜! もうお友達が出来たんだ〜」

リンディとエイミイが出迎えた。ちなみにグレアムが契約した部屋は4つ在り、一つは前線拠点、一つがフェイト達(＋リンディ、クロノのハラオウン親子)の部屋、残りの2つが男女別にエイミイ達オペレーター要員の宿泊施設となっている(それ以外の部署はアースラに居残り)。

「あ、リンディさん・・・た、ただいま。エイミイも来てたんだ」

「う〜ん、初々しいね〜・・・どうです、艦・・・リンディさん。

例の件、このまま引き取るってのは」

「それも、良いわね。娘が欲しかったと言えなくもないし、ね」

「え? それって・・・」

「ええ、どうかしら? この期にウチの子にならない?」

『・・・・・・・・』

リンディの突発的な話題にフェイトは顔を附せ、なのは達も空気を読み静かになる。

「(どうしよう、アリシア・・・)(うゝん・・・フェイトのしたい様にすればいいんじゃないかな?)」

思考の内でアリシアと話し合う。

「(確かに今フェイトの中に私は居るけど結局の所、肉体の主導権はフェイトにあるの。だから私はフェイトの意志を尊重するし、応援もしてあげる・・・フェイトはどうしたい?)・・・私は・・・・少し、考えさせて下さい」

「ええ、それで良いわ。この件は結局、私個人の我が儘みたいなものだから・・・幾らでも待つてあげる・・・さて、少し暗い空気にしてしまったけど。いらっしゃい皆さん」

暗い雰囲気打ち消すかのようになのは達に声をかける。

「びっくりした」

場所を移してフェイトの部屋。そして、アリサが先程の感想を言う。

「そうだね」

「フェイトはどうしたいんだー？」

アリサに同意するようにすずかもため息を付きながらしゃべり、舞夏がフェイトに話かける。ちなみに双子は部屋を漁っている。

「・・・正直言っ迷ってる。リンディさんが良い人だって事も理解してるんだけど・・・それ以上に、お母さんの事を思い出にしない」

部屋に戻っても尚、下を向いたまま話すフェイト。

「パンパンッ！」

「はいはい、その話しはここまでにしときましょ！」

再び暗い雰囲気が部屋を包みそうになった時、アリサが手を叩く。

「フェイト、さっきの人、リンディさんだっけ？あの人も直に答えを出さなくてもいいって言ってたんだから、焦らないで自分なりの答えを出した時に言えればいいでしょ」

「うん・・・そうだね」

「じゃあ！何して遊ぶ？！ってとまりは部屋を漁っても何も出てこない事に驚愕してみる」

「遊び道具の一つありません、とはずみは家探しの結果を公表してみます」

「あんた等は少しは遠慮って事を覚えなさいよ！？」

フェイトが納得した事で一先ず話を終わらせる。そして、双子が部屋を漁っても遊び道具が無い事に驚愕し、アリサが二人の傍若無人ぶりにツツコミを入れる。

「・・・あは、あははははははは！！」

「フェイトちゃん？」

「「「「？」」」」」

「おい、フェイトが壊れたかー？」

その息の合ったコンビネーションに思わず笑うフェイトだった。

Side..当麻

相手の放った炎弾を高速で移動することで躲し、相手の懐に入り徹を込めた回し蹴りを側頭部へ放つ。回し蹴りを放った隙を付いて放たれた雷撃を右手で打ち消し、怯んだ隙を逆手に取り。

「ガーーーーッ！？」

接近戦を仕掛けてきた奴の水月に肘打ちを放つ。

「ふう・・・お疲れさん浜面」

「・・・お前、こんな事してたのか？」

先程、炎弾を放ってきた男を倒した浜面に声をかける。

現在の場所は海鳴駅前の裏側（反対側には商店街があるため大変賑わっている）。ちなみに今戦っていた相手は、海鳴市内にいる超能力を悪用する弱小グループだ。

「毎回絡まれてる訳じゃないぞ？・・・週に2、3回あるぐらいだ」
「普通に多いって？！」

浜面の一言でショックを・・・受ける訳ない。何故ならもう慣れたからだ。

何故俺達が此処に居るかと言うと、以前クリスマス用のプレゼントの下見をしようとして月に行ってしまった為、結局の行けなかったので今日する事にしたのだ。

ところが、いざ店に行こうとしたら目の前を女性が通り過ぎ、いかにも追われてます的な追手と鬼ごっこしていた所に遭遇。

——結果

はい、巻き込まれました。お陰で技の練習には事欠きませんでした。

「それより、早く行こうぜ？もたもたしてると——」

「居たぞっ！あのガキどもだ！！」

「・・・おい」

「よし！逃げるぞ！！」

別名・明日に向かって前進。に、逃げてる訳じゃないんだからなっ！

『まてえええ！！』

「「待てません！勝つまではっ！！」」

この後、夕食時まで逃げ回りお互い理不尽な目に合うのだった。

Side..なのは

「・・・」

「・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

現在、フェイトちゃんの部屋で二人つきり。既に夕食時で他の皆は既に帰った。私はフェイトちゃんに話したい事があると言われ今も尚、フェイトちゃん家に残っている。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・あの」

「（―ビクンッ!）な、何っ!？」

でもずっと黙ってばかりだったので、こっちから話しかけてみたら・・・思いつきビクついた。

「・・・あの、そのね・・・なのはには隠し事はしたくないから・・・話しておきたかったんだ」

漸く、フェイトちゃんがポツポツと話し始める。こう言う時は黙ってるのが良いんだっけ？

「（・・・アリシア）（よし来たあ!!）初めまして、なのは!」
「へ?」

行き成りフェイトちゃんの話し方が変わったと思ったら挨拶された。

「えっと、初めまし、て?」

「うん、こう言った形では初めて会うんだから初めまして・・・改

めて自己紹介しよつか。私の名前はアリシア、アリシア・テストロツサだよ」

・・・え？

「ええええええー！？」

なのはの叫び声が響く。

『どうした？！何かあったのかアルフ！！』

『あゝ何でもないよ、気にしないでクロノ』

『いや、気にするなと言っても』

ドアの向こうではなのはの叫びを聞いたクロノが、ドアの前で立っていたアルフに問い詰める声が聞こえる。そんな話声を聞き流しフェイトは、否アリシアはニコニコと笑いながらなのはの間抜け顔を見つめ、なのはは哑然とした表情をアリシアに向ける。

「えゝゝゝと・・・アリシア、ちゃん？」

「そうだよー」

「ホントに？」

「ホントのホントだよゝ」

再び沈黙が部屋を支配する。

「・・・マジ？」

「マジ也大マジ・・・俗に言う二重人格って奴だね。いやゝこうやって誰かに話して驚かれるっていうのは楽しいねゝ・・・所で話は変わるけどフェイトの事なんだけど」

「・・・あ、もしかして養子の件？」

「そうそう」

それは先程の事。フェイトの家に来た際にリンディに言われた正式にハラOWN家に入るかどうかの話。

「正直言ってね、フェイトは迷ってるってのも本当。それは私の事もあるんだろうけど、お母さんが私を蘇らせようとした際にやった記憶の同化の事もあるの」

プレシアが行った反魂術で記憶の同化を行った際に、フェイトは死体だったアリシアが見ていたプレシアの苦悩の日々も見たのだ。

その結果、アリシアが生きていた頃のプレシアの笑顔、死んだ後のプレシアの苦悩と絶望の日々を見、そして今も尚、アリシアを自らの内に宿している自分がテストロッサの名をそう簡単に捨てて良いか迷っているのだ。

「うーん・・・難しいの」

その事を聞いたなのはそう判断した。

ファミリーネーム

「だよねー、なのはちゃんならあっさりと高町の名前を放りだして上条性をなのっちゃうし」

「そうだね」

「・・・」

「どうしたの？」

「いや・・・実際に聞くと凄くなって」

アリシアのからかいもアッサリと肯定し補足説明も加える。その即決即断ぶりに流石のアリシアも若干引いた。

「・・・でも・・・うん、やっぱりこう言うのはフェイトちゃんとアリシアちゃんの二人で決めるべきだと思うの」

そんな様子に気付かずに自分の意見を言う。

「二人で、かー（そうだね、なのはの言う通りかもねフェイト）（一緒に・・・考えてくれるの？）（うん、やっぱり第三者の意見ってのは貴重だね・・・正直、さ。迷ってたんだ）」

それは死んだ者が抱える一つの思い。自分の居場所は既に無いという過去と現実との差異。

「（でももう大丈夫。なのはの答えでやっと踏ん切りがついた・・・私は此処《現実》にいる）（・・・大丈夫。アリシアは此処にいるよ）ありがとう、なのは」

礼を言いながらアリシアが立ち上がり机に歩いて行く。そして一つのモノをなののはに渡す。

「コレは・・・リボン？」

それはフェイトとは違う水色のリボンだった。

「私からの贈り物。フェイトと友達になった時にリボンを交換した

んでしょ？だから私も交換しようと思って・・・本当はなのは私
が持ってるので一对のリボンなんだけど」

そう言って自身が持ってる同じ色のリボンを見せる。

そして一つの事に気付く。それは今の自分の髪型、サイドテール。
それと当麻の言っていた言葉の意味。

「もしかして当麻くんは・・・」

「うん、あの時のお別れの時に私の事を話したよ」

「（本当に・・・お節焼きなの・・・でも）ありがとうアリ
シアちゃん。大切にするね」

「こっちこそ、ありがとう」

——コンコンッ

「話は終わったかい？ならそろそろ夕食だよ」

話し合いが終わったのを見計らってアルフが夕飯の準備が出来た
事を伝える・・・って！家に電話しないと！？

「あ、なのはの家には連絡入れといたよ」

「そ、それで納得したの？」

「ツンツン頭に聞けば誰か分かるって言っておいた」

確かに当麻くんならフェイトちゃん達の事知ってるし、問題は無
いと思うけど・・・何だかな～。

Side..当麻

「た、ただいま？」

自分の家なのに恐る恐る入る。あれからあいつ等を撒くのに時間を費やしたため、既に夕食時は過ぎてしまった。よって暴食シスターが暴れていないかを恐れているのだ。

「?・・・嫌に静かだな」

入って気付いたが居間の電気は点いているのに、テレビの音も誰かが不法侵入して夕食を作っている音もしなかった。

「イヤ、後半は駄目だろ?! 殆ど当たり前になってたから気付くのが遅かったがな!?!」

自分でも気付かず美琴に毒されているのに今更ながら気付いた当麻。

「インデックス?」

「とう・・・ま?」

「む・・・う? 家主、殿・・・」

居間に入り目に着いたのはソファでうつ伏せになりながらも声を返したインデックスと、その上に同じ様な状態のスフィックスだった・・・別に慌てる必要は無い。以前もこう言う事はあったから。

「すまん、後20分待て」

「1200秒も?! おーなーかーすーいーたーー
ー!! もう待てない!!」

「そうだ! そうだ!」

「うるさい欠食児共め! 少しは手伝うとか考えねえのか?!」

俺の言葉にインデックスの動きが止まる。

「手伝ったら早くなる?」

「(コイツ! あくまでも自分に正直だな?! だが考えろ、コイツに手伝えば少しは早く食えるという認識を植え付ければ俺の苦労も軽減されるんじゃない?) ご、5分は短縮できる」

その言葉に即座に立ち上がりバリジャケットを纏う・・・何故に纏う必要がある? もしかしてアレか? エプロン代わりか?

「さあ! 私は何をすれば良いの!?! とうま!」

「・・・取り敢えず、布巾でテーブルを拭け」
まあ、ヤル気がある内に手伝わせるか。

——束の間の日常が過ぎ去って行く

おまけ

——インデックスの家事能力

「じゃあこれでテーブルを拭いてくれ」

「わかった!!」

——べちゃ

「・・・」

渡された布きんを水に濡らし絞らずにテーブルを拭いく。

「お皿出してくれ」

「わかったかも」

戸棚から皿を取り出す

「あ」

―ガタンッ！

「・・・・・・・・」

皿を置く場所にあった醤油のペットボトルを倒す。

「あ、すまんインデックス。足元の戸棚から砂糖取ってくれ」

「わかった・・・」

足元の戸棚から袋を取り出し渡す。

「って！コレは重曹だ！！」

「に、日本語は難しいんだよ！？とうま！」

「英語でも書いてあるわポケェ！！」

――総合判定

「お前少しづつその頭に叩きこんでいくからな？」

「うー、ご飯は食べるだけが楽かも」

同年代の少女より酷いレベルだった。

束の間の日常 part 2 (後書き)

パート2投稿！・・・パート2と言えばハリポタの映画見たいな～
・・・・・・・・秘密の部屋から見えないけど！

次回からオリジナル要素が少し入ります。具体的に言うとなのはの
愛機が！ついでに言うところ？？？×ユーノのフラグが！別に珍しく
ないけど(多分)

再戦・海鳴市（前編）

Side…クロノ

——海鳴市拠点

『——と言う訳だね』

ユーノの説明が終わる。4日程でしかないが、知りたかった事の幾つかは知る事が出来た。

「なるほど、闇の書とは管理局が名付けた暫定名称。本来の名は『夜天の書』。嘗て起こった戦争の際、ベルカ式の魔法を後世に残す為に作られた動き回る資料だったと言う訳か」

海鳴市の拠点内でユーノから送られてきた資料に目を通してクロノ。ユーノを無限書庫に送ってからたったの4日で此処まで調べられたのはクロノにとっては驚きで、正直言ってスクライア（この場合はユーノの）の発掘技能を軽く見ていた。・・・だが。

「・・・ユーノ。守護騎士達・・・ヴォルケンリッターについての関連資料は無いのか？」

今動き回っている守護騎士、シグナム達の資料は見つかっていなかった。

『それが、サッパリ。元々闇の書じゃなかった、夜天の書を守る為に生み出されたのか、それとも書を手に入れた持ち主が書き加えたのか。その事さえも分からなかったよ』

「となると、管理局が書き残した資料だけが頼り成るのか・・・」

『不安なのかい？管理局の執務官ともあろう者が』

「執務官だからこそ、だ。事件を完全に解決するにはあらゆる事象・事実を見、事件の裏さえも把握しなければならない・・・僕がこの半年で散々言われた事さ」

『・・・変ったね』

ユーノに言われ。自身も変わったと思った。

4月——あの頃、なのは達に会った時の自分は、今思い返せば自

分勝手な発言ばかりだった。あの事件を区切りに母であるリンディは公私の区別をはっきり付ける様になり、管理局の『汚い部分』も自分に見せる様になった。確かに初めの頃は自棄になりそうだった「自分達は次元世界の法を守る者だ、なら何故真実を隠す様な事をする!」と叫びそうになった。

『で? そっちは何か進展あった?』

「さっぱりだ。4日前のなのはが襲われた後も此処地球を中心に三人一組で捜索を行ってるが・・・以前として彼らの行方は掴めていない」ユーノから話題を振られるが、何も見つかっていないのが現状だった。

「嘗てのデータから闇の書は666ページに達すれば暴走を始め周辺世界全てを破壊し尽くす。詰まる所・・・」

『彼らが闇の書を完成させるのが先か、その前に僕らが解決策を見つけ彼らを捕える事が出来るか、だね・・・分の悪い賭けだね』
「だが、やるしかない・・・それに、一管理局員としては遣る瀬無いが、人数はこっちに分がある」

『当麻さんになるのは、だね・・・あんまり当てにしない方が良いと思うけど?』

「・・・分かってるさ。特に彼に頼むのは最後の最後だ。それに・・・」

『それに?』

当麻に頼れば今回の件は確かにすぐに片付く。だがクロノはその案を簡単に出したくは無かった・・・なぜなら。

「例え此方次元世界の事を知っていたとしても、彼らは民間人だ。そこに管理世界、管理外世界の区別など無い」

クロノ・ハラオウンは次元世界の平穏を守護する管理局員だからだ。

『へえ・・・言うね。なら僕の事も少しは労って欲しいんだけど?』

「知らないのか? 淫獣には人権なんてないんだぞ?」

『誰が淫獣だっ!!?』

真面目に話し合っていたのに一瞬にして何時もの言い合いになった。

だが、彼らは知らない。自分たちが追っている者たちが自分たちの置かれている状況を既に理解し、最善の道^{ハッピーエンド}の為に行動している事を。

ちなみに、クロノとユーノの良い争いは、改良したレイジングハートとバルディッシュを受け取ったエイミーが来るまで続けられていた。

Side..なのは

——放課後

やって来ました海鳴拠点。今日は漸くリンカーコアが完治し、更には預けていたレイジングハートとバルディッシュが帰って来る日。その為アリサ達からの遊びの誘いも断り足は早くフェイトと共にやって来た。

「おっ！来たね〜こっちだよ〜」

リビングで他の局員とシグナム達の搜索をしていたエイミーが二人を出迎え、二人を隣の小部屋に招く。その部屋の真ん中に置かれた前のガラス張りのテーブルの上には、見慣れた赤い球と金色の三

角形のデバイスが置いてあった。

「久しぶり、かな？ レイジングハート」

「はい、お久しぶりですマスター・・・体の調子はどうです？」

声を掛けると久しぶりに聞くパートナーの声。隣にいるフェイトも同じ様に話し合っていた。

「私は大丈夫！ ゆっくり休んだし、一杯甘えてきたから！」

「何時も通りで安心しました」

「レイジングハートこそ大丈夫なの？」

「それに関しては・・・」

「はいはい。2人ともうって言うか4人とも、説明は私がしてあげる。と言うかさせて！」

なのはとレイジングハートの会話にエイミーが割り込んでくる。どうやら暇を持て余しているらしい。

「まずはじめに言うと、二人のデバイスに新しく追加された装備はコレ」

自身の傍に空間モニターを展開する。その画面に映ったのは銃等によく用いられる回転式とマグナムタイプの弾倉。

「型式名CVK-792、通称ベルカ式カートリッジシステム。コレの最大の特徴は・・・理解してる？」

「えっと、弾丸に込められた魔力と上乘せする事で、攻撃力を上昇させる事が出来る、だっけ？」

エイミーの質問にフェイトが答える。

「そう。コレの最大の特徴は弾に込められた魔力を使用する事で、爆発的な魔力を得て、攻撃力を上昇させる事が出来るの。・・・だから、本来はデバイスの中でも衝撃・耐久性の高いアームドデバイスに載せるし、カートリッジから送られてきた魔力の衝撃に耐えられる肉体、急激に増える魔力を制御する魔力コントロール。それらが合わさって初めて使いこなせる代物なの」

モニターを消し、普段は見せない真面目な表情をしたエイミーがなのは達に向き直る。

「二人の事だからカートリッジを使うなって言っても無駄だと思う。だからこれだけは言わせて……無茶だけは、絶対にしちゃ駄目」その言葉に二人は頷く。

「……よし！なら詳細に移ろっか。これは二人に言えることだけど、今回改良の際にメモリーの方も整理して、一部の魔法のプロゲラムを改良して名称が変わってる所もあるから後で確認してね」

再び空間モニターを出し、バルディッシュを映し出す。

「フェイトちゃんの方はバルディッシュ・アサルト。希望通りバリアジャケットの方も防御を上げるより高速戦闘を意識した機能に変更。カートリッジはリボルバー式で最大6発まで装填可能になるよ。後、フルドライブのザンバーフォームの方はまだ使用しないでね」

「分かった……所でエイミー、頼んでみた件はどうなったの？」バルディッシュの説明を聞いた後でフェイトが逆にエイミーに尋ねる。

「アレか、グレラム提督を通して一応技術局に話したんだけど……」

「どうだった？」

「出来るって……ただ、二人のデバイスを優先してお願いしたから、出来るまでにはあと数日掛かるって……あそこはもうマツドの巣窟だね。私でも引かずに話を聞くのがやっとだったよ」

ほんと、マリーのやつよくあんな所で働いていられるなと愚痴りながらも仕事はするのかモニターを切り替えた。

「お次はなのはちゃんね」

気を取り直したエイミーがレイジングハートの画面に切り替える。

「なのはちゃんの方はレイジングハート・エクセリオン。レイジングハートからの改良案が思ったより完成度が高くてね、弾丸の装填数は小型のカートリッジを使用するから最大で10発。フレームの方も強化したからある程度の衝撃にも強くなったよ」

バルディッシュと違い、レイジングハートが細かく指示した為か

話す箇所が幾つもあるようだった。

「ただ、コアメモリーの容量増加はコア自体を換えなきゃいけなかったからそこまでは出来なかったんだ」

「構いません。それでも改良前より戦闘能力が向上しています」

エイミイの言葉にレイジングハートが答える。なのはからすれば既に頭から煙が出ているのを幻視出来る。

「あ、後なのはちゃんの方も、フルドライブモードは今んところ禁止されているからね」

「・・・っは！？わ、分かったの！」

「（大丈夫かな？）」

話が終わったのに気づいたのはが咄嗟に返事をしたが、エイミイとフェイト、アリシアは不安になった。

―ピーッ！ピーッ！ピーッ！

「―「ッ！？」」

説明が終わり、次に魔法の説明に入ろうとした瞬間、アラームが鳴る。エイミイがリビングに駆け込み、原因を調査する。

「・・・コレはッ！クロノくん達が海鳴市内でヴォルケンリッターを捕捉したみたい！」

大型のモニターを部屋の中央に映し出す。

「（ヴィータちゃん：ッ！ザファイラさん：ッ！）」

その画面には赤いゴシッククロリータ服を着たヴィータと、尻尾と耳を生やした大男ザファイラを囲む様に数十人の管理局員が取り囲んでいた。

「この結界は複数人の結界魔導士で張った強装型の捕縛結界だよ。この前、なのはちゃんが囚われたベルカ式の結界と同じ強度だから簡単には抜け出せないけど・・・」

「問題は、相手の力量だね」

クロノの放ったステインガースナイプ・エクスキューションシフ

トが放たれ、爆煙に包まれたモニターを見ながら言うエイミーの言葉に、フェイトが続けて言う。

事実クロノの魔導士ランクはA A A +、他の武装局員にしてもA A A ~ A ランクの人材で構成されている。逆にヴィータ達はA A A ランクとA A ランクと、クロノよりも下だがベルカの戦乱時代を駆けた猛者であり、対人戦特化のベルカ式の使い手だ。

「エイミーさん！ 私達も・・・」

「・・・なのはちゃんは駄目だよ」

「どうしてッ!？」

なのはが自分たちも行くと言言するが、エイミーが出した答えはフェイトだけを出させる事だった。

「忘れたの？ なのはちゃんはまだリンカーコアの検査が済んでないんだよ？ 確かに今日完治するって言われてるけど、実際に診て判断してもらわないと・・・上官としては出撃を許可できないよ」

確かに現時点でなのは様な高位魔導士を出せば相手を捕える事が出来る。だが組織、それも法を守る管理局と言う組織としては医師の診断でG O サインを貰っていない人物を出させる訳にはいかなかった。

「ッ！ エミリッタ補佐官！ 結界内に民間人の反応をキャッチしました!！」

「・・・え？」

オペレーターの一人が緊急事態をエイミーに伝える。戦況が映し出されたモニターのほかにもう二つ表示される。そこに映っていたのは・・・。

「あ、当麻くんは氷華さん、とまりちゃんにはずみちゃん、それにアクセルさんに・・・はまづーさん？」

学校帰りなのか制服を着たアクセルと双子、浜面のグループと、当麻と氷華の二人のペアだった。

Side…海鳴市

「いっくしッッ?！」

すぐ近くで突然クシャミをした浜面から若干距離を取りながら、アクセルは口を開く。

「たりイー」

物凄くやる気がなかった。

「くそ、誰か俺の禁止ワードをしゃべりやがったな？」

「すごい！ってとまりは噂をクシャミで感じ取れるはまづーに驚愕してみる！」

「これこそまさに野生の本能ってやつですね、とはずみは現状を無視しているともりを叩きます」

何となしにとまりの頭にチョップを喰らわすはずみ。むしろ本人の方が現実逃避しているのかもしれない。

「って?!痛いよ?!痛っ!痛ッ!!痛いつて!とまりははずみのチョップを受け止めてみ痛ーッ!!!!」

流石に痛かったのか、はずみのチョップを挟んで受け止めたとまりの頭に今度はアクセルがチョップを喰らわす・・・割と本気で。

「痛エのか、ならコレは現実って事か・・・はあ、アイツじゃねエけど不幸だ」

「それでもなさそうだぞ？」

「ああア?・・・またヤツかア・・・」

アクセルの愚痴に浜面が一定の方を見て否定する。その視線の先には当麻と氷華の二人。喫茶店内で話しているのに夢中なのか周りの変化に気付いていなかった。

「鋼の軛!!」

「「お？」」

「あ」

「空気を読めない方ですね」

偶々近くで戦っていたザフィーラが魔法を使用し、喫茶店の天井を突き抜ける様に床から光の柱が現れる・・・が、その内の何本かが突然消える。

「だー！クソッ！！誰だ今の攻撃使った奴！！」

「だ、大丈夫？当麻君」

砕けた窓から二人が出て来る。風斬の方は無傷、逆に当麻の方は所々服が破けていた。

「お？・・・何やってんだ、お前ら？」

「こっちが聞きてエよ」

『それはこっちが聞きたいよ！！』

「おわッ？！何だ？！」

突然空間にモニターが出現し、エイミーが慌てた様子で話しかけて来る。驚愕した浜面は無視している。

「お、アホ毛じゃん。久しぶり」

「ンだよ、何時かのアホ毛か」

「おー！アホ毛だ」

「お久しぶりですアホ毛さん。状況を説明してくれるとありがたいのですが」

「えっと・・・はじめまして？アホゲさん？」

「いや、風斬。アホ毛は唯のあだ名だろ？」

『アホ毛アホ毛言わないでよ！？気にしてるんだから！！』とそれより何でキミ達此処にいるのさ？！』

全員がアホ毛と言い、エイミーが激しく抗議する。だが、すぐに意識を切り替え質問する。

「馬鹿かテメエ？此処に住んでんのに、何でいるとか言われてもよオ」

「俺は心配かけた氷華とデート？なのははこの前から甘えまくって

たし、美琴はクリスマスにデートに誘えって言われたんで」

「いや、麦野が双子と帰るって言って一緒に着いて来ただけなんだが？・・・つか、何時の間にか居なくなってる事に怒ってねえ・・・よな？」

アクセル、当麻、浜面の順に話す。

『キミ達さく割とトラブルメーカー？』

「失礼な（ア）、当麻と一緒にしな^{野郎}いでくれ」

「ひでえ?!」

味方からの口撃で当麻が落ち込む。そしてソレを風斬が慰める。

「パキイイイイ!!!!!!」

『!?!』

「ああアン？」

その時、破碎音と共に結界から紫色の閃光が突き抜けて来る。

『結界が突破された?! フェイトちゃん!』

『分かった! すぐに行く!』

空間モニターが消える。

「あっ!?! オイ! 説明くらいしてくれって、消えちゃった・・・当麻」

「はいはい。良く聞けよ——」

浜面がエイミィに尋ねるが、それよりも早くに通信が途切れる。

そして、そのシワ寄せが当麻に向かう。その一方で当麻も現状を正しく把握するのは決して無駄にはならないと思ひ話す。

——その一方

シグナムが援軍として来た為、一時的に士気が下がった管理局組だが。見渡しの良いビルの上に移魔法陣が現れる。そこに現れたのは・・・。

「フェイトにアルフ、それになのは?!」

クロノが啞然とする。何故なら、なのはの参戦不可を決定したのはクロノだからだ。その逆に、無事なのはの姿を見てヴィータ達は気付かれない様に安堵の息を吐く。

「レイジングハート・エクセリオン!」

「バルディッシュ・アサルト!」

「セットアップ!!」

その二人がデバイスを起動させる。一瞬だけ光が覆うと白と黒のバリアジャケットを着た二人が姿を現す。

「アイツ：ツ! アタシらと同じシステム積んだのか?!」

「何ともまあ、無茶をする者だ」

「やはり戦士の魂を持っていたか」

レイジングハートを見て、ヴィータとザフィーラが呆れかえり、シグナムは自分の考えが正しかった事を確信した。だが、各々に共通している事はなのはが無事だった事、その事だけで自分たちを苦しめていた不安が消え去った。

「全く・・・なのは、体調はどうだ?」

一時的に戦況が止まったので、クロノがなのはに近づき体調を聞く。

「にやは・・・当麻くんが居るって聞いて無理やりついてきました。反省はしてます、でも後悔はしてないの（それに私が無事だった事、ヴィータちゃん達に教えたかったし）」

「~~~~ッ、アルフ・・・」

「無理無理、こうなったなのはが梃子でも動かない事知ってるだろう?」

事実なのはにも譲れないモノがあった。例えその為に自分が傷つこうとも・・・否、それだけの覚悟を持って此処に来たのだ。

「なのは、クロノ。あの人は私が」

そんな中、フェイトがシグナムから視線を一切動かさずに言う。恐らくは初戦闘で防戦一方で終わったのを根に持っていたのだろう。明らかにシグナムに対して闘気を放っている。

「こっちもかッ?!」

「あちゃーウチの御主人も意外と根っこの部分はしつこいんだっ
た・・・でも、まあ。アタシもあのデカブツに様があるんでね」

「コイツもかッ!?!」

クロノのツツコミが主従コンビに炸裂する。アルフもアルフで同じ戦闘スタイル。そして動物的な本能で同じ狼型と言う事を見破ったのだろう。

「じゃあ、私もあの子と戦おうかなリベンジへ再戦だよ」

そしてなのはもヴィータに視線と、秘匿念話を送る。夏休みでの一件の事を言ってるのだろう。その気迫を受けヴィータもまたデバイスを構える。

「へっ、同じ様なシステムくっ付けてきた位で勝てると思うんじゃないぞ!だが、あの時戦った優男よりかは戦い安そうだ!」

「・・・アルフ(・・・あれ?フェイト?)」

だが、ヴィータの一言でフェイトの雰囲気が変わる。その変化にいち早く気づいたアリシアだが、フェイトは意に返さずアルフに話しかける。

「あの赤い子・・・確かユーノと戦ってたよね?」

「そうだね」

「確か不意打ちでユーノをぶっ飛ばしてたよね?」

「そう言えばそうだったね」

突然話しかけられたアルフは動じずにフェイトの質問に答える。

「そっか・・・なのは」

「フェ、フェイト…ちゃん?な、何かな? (この気配…ッ!前に

当麻くんを馬鹿にした人をやった時の美琴お姉ちゃんの気配と一緒だ!?)」

フェイトの変化に気付いたなのはが、若干引きながら返答する。

「変って貰っても、良い?」

「う、うん、良いよッ! (フェイトちゃん、もしかしてユーノくんの事・・・)」

フェイトの要求になのはは頷き、内心でその可能性に至りる。

「ヘッ! 何だか知らねーが誰だろうと相手になってやるぜ!」

「(ヴィータちゃん・・・それは藪蛇だよ!?)」

「今は亡きユーノの為に! この一戦、負けられない! ツ!」

「死んでないよ?! ユーノくんまだ死んでないって!」

(何だか面白い状況になってるなく良いぞ! フェイト! やっちやえ! ! !)

フェイトの発現になのはがツツコム。その逆にアリシアが精神の内からフェイトを煽る。

「なら僕は最後の一人を搜索する・・・全員、深追いはするなよ?」

「「当然! !」」

「そ、それで良いの!? クロノくん! ?」

フェイトとアルフの2人がそれぞれの相手に向かって飛び立ち、少し遅れてなのはがシグナムに向かって飛び立つ。そして残ったクロノは各部隊に指示を出す。

「武装局員各員に通達! 残った者で二人一組ツーマンセルを組んで残り一人の搜索に当たる! !」

クロノの指示で残った局員でチームを組み、最後の騎士シャマルの搜索を開始する。

「ハラオウン執務官! 負傷者はどうしましょう?!」

局員の一人が声をかけて来る。

「エイミィ!」

『はいはゝい、負傷者に関しては直にでも転移可能だよ』

「なら早急に頼む!」

『了解！・・・で？一般人の彼らはどうするの？一人は見ない子だけど』

「~~~~ッそっちにも数人護衛に回せ！！どっちにしたって生き残りそうだなッ！！！」

『それには同感』

再戦・海鳴市（前編）（後書き）

新約2巻買ったZ E！ いやはや良い話題がいっぱい有った・・・黒
夜とか黒夜とか黒夜とか！！ あと番外個体とか。

再戦・海鳴市（後編）

海鳴のオフィス街。そこでは中規模な結界が張られ、3組の魔導士たちが激突していた。

——ギイイインツツツ！！

「くっ！バルディッシュー！！（アリシア！誘導お願い！）」

「プラズマランサー展開」（おっけー！ドンと来い！！）

バルディッシュからカートリッジが排出され、フェイトの周りに雷を纏った鍬の様な魔力弾が複数展開される。それを制御するのはフェイトのもう一つの人格ともいえるアリシア。

この数カ月、魔法の訓練をしたとは言え、未だ直接的な戦闘は出来る様になったとは言えないアリシア。だが魔力弾の制御をひたすら訓練したお陰で、フェイトの中からでも誘導弾を制御する事ぐらいは出来る様になった・・・その結果。

「はあああああ！！！」

「サイズフォーム」

（行つくよー！！）

お馴染みの鎌を展開し、不規則な動きをする誘導弾と共に接近するフェイト。

「ちょッ！？在りかよそんなの！！？」

それはヴィータからすれば戦っている相手が魔力弾の制御と空中戦、及び接近戦を同時にしかけて来るような物だ。戦士としての経験が近づかれるのはマズイと判断し、近距離戦闘から中距離戦闘に切り替わる。

「ユーノには一杯迷惑かけちゃったし、一杯お世話になったっ！！だからッ！」

「んなことアタシが知るかッ！？」

ヴィータの言い分は正しい。だが、純粹培養された様な環境で育ったフェイトからすれば、大切な人達<<<<<<<<赤の他人と言う大變極端な思考回路で戦っている。

「（つく！？こんなところでカートリッジ使うのは持ったいねーが・・しかたねえ！）アイゼン！！」

「ヤヴオール！」

そしてアイゼンから1つの葉莢が排出されヴィータの魔力が急激に増え、片手の指の間に鉄球が現れる。

「シュワルベフリーゲン！！」

「バルディツシュ！」

「イエッサー！ プラズマランサーセット」

ヴィータが鉄球を撃ち出すのと、フェイトのプラズマランサーが

「何処から来る？」

煙に閉ざされ視界が封じられたフェイトは無暗に動かずにヴィー
タが仕掛けて来るのを待ち伏せる。

「
・
・
・
・
あれ？」

だが一向にしかけて来る気配も無く煙が晴れる。慌てて辺りを見渡せば遠ざかつて行くヴィータの後ろ姿。

「?・・・ッ待て!! (あつちには・・・なのはがっ!?)」

その更に向こうには、防戦一方になっているのはとシグナムが見えた。

一方、なのはは。

――斬撃を躲し、魔力弾を撃つ

――魔力弾を斬られる時にはシグナムの一足の範囲から逃れる

そんな行動を既に二桁に届く位やっている。ハッキリ言って防戦一方だ。だが、見方を返れば。

「はあああッ！へ・・・戦い方がうまくなったな。それに・・・やはり時間稼ぎか？」

「くっ！？へバレちゃった・・・うん、今は管理局の人達と行動してるし呑気に話してると疑われちゃうから」

「フラッシュムーブへそれにマスターは病み上がりですから」

そして戦いながら念話で会話していた。

「フッ！！へ・・・それに関しては、スマンとしか言いようが無い」

「――ッへ気にしてないよ・・・私を犯罪者にしたくなかったから、なんだよね？」

これは別になのはが強くなった訳でも、シグナムが弱くなった訳でもない。なのはが防戦一方で戦い、シグナムがなのはの動きに合わせる事で、手を抜いている事を周りに悟らせずに戦い続けているのだ。

「へああ。協力者の助言でな、我々が普通に管理局に投降すれば恐らく・・・否、確実に待ってるのは主はやてと引き離される現実だけだ」

シグナムが言うには、まず初めに闇の書と言うロストログアが活動し始めた事を知らせる。その裏でその協力者が聖王教会に根回しをし、教会から書に記述されている各資料に歴史的な価値がある事で書の保護を訴える。

後はこの事態を收拾させた後で、聖王教会と管理局に貢献する条件

としてはやての家族と過ごせる様にしてもらえれば良い、と言う事だった。

「へシグナムさん達は・・・それで、良いの?」

どっちにしたって書を管理局、もしくは聖王教会に渡す事になる。そしてはやての家族として過すと言う事は、それ即ち夜天の書の騎士を放棄すると言う事だ。

「・・・・・・・・」

二人の視線が交差すし、その一瞬だけ戦いが止まる。

「へ構わんさ。長きに渡り様々な主に仕え、時には道具として、時には・・・主の欲を満たす為だけの人形として過して来た。・・・今回の主、はやてが・・・あの子が最後の主になるのなら逆に誇らしいぐらいだ」

それはシグナムの本心からの言葉。

「へ・・・話が逸れたが、その為にはまずは管理局側の準備が整わなければならん。それまでは我らは捕まる訳にはいかん」

警戒心を一瞬とは言え、解いたなのはの隙を突きなのはに接近し・・・。

「・・・へ?」

なのはを追い越す。

「アレは!」

慌てて振り返ったなのはが見たのは、丁度シグナムとヴィータがすれ違いシグナムがフェイトと高速機動戦に入り・・・。

「第二ラウンドと行こうぜッ!!」

アイゼンを振り回し接近してくるヴィータがいた。

「へチェンジシフト:ツ」望むとこなの!!」

そしてその挑戦を受けるなのは。

Side…当麻

——その頃の当麻達

「暇だな」

「良いんじゃないの？食うか？」

「・・・貰うわア」

あの後、説明しながらも戦域から離れ今は結界ギリギリの位置に
来た。このまま結界外に出るのは簡単だが、それだと管理局が張っ
た結界を壊してしまう為出るに出れない状況だった。

ちなみに浜面が差し出したのは偶々持っていた新商品の酢昆布“新
感覚海の味”だ。普段なら絶対に他人と関わらないアクセルさえも
暇を持て余しているらしい。

「それにしても、あの高町の嬢ちゃんがこんなに戦えるなんてな・
・驚きを通り越して・・・いや、あんまり驚かないな。流石当麻
の知り合い」

「んだそりゃ？！俺の知り合い!!ビックリ人間の法則でもあんのか
?!!」

「むしろテメエがビックリ人間だろオガ」

男性陣の視線の先では今も魔力弾が飛び交う戦場が見える。

その一方で女性陣は。

「デュエル!!」

「先行は私ですね。ではまず初めに『地霊殿の精霊』を召喚、更に
トラップカードを2枚セット。ターンエンドとはずみは宣言します」
巷で流行っているカードゲーム『東☆方☆王』をしていた。

「ならばこっちは場にフィールド魔法『地底への孔』を発動!この
カードは地底属性の妖怪をデッキの中から特殊召喚出来る!って説
明口調でしゃべりながらデッキを漁ってみる!・・・あった!いで

よ『嫉妬する橋渡し』!」

ちなみに二人とも地霊殿デッキだそうだ・・・つかお前らってお互いの思考が駄々漏れじゃなかったっけ?

Side Out

―バチイイイッ!!

ゴッ!! バキイイ!!

お互いの拳と拳、蹴りと蹴り、それぞれ四肢に込めた魔力と魔力がぶつかり合い派手な音を立てる。

「いい加減に落ちなッ! このデカブツ!!」

「フンッ! 例え大義名分がそちらに在ったとしても・・・此度の戦い、負ける訳にはいかぬッ!!」

実力は拮抗していた。お互い主を補佐すると言うスタイルなのか、攻めるよりも守る方が得意な二人だからだ。

―バチイイイッ!!!

アルフの振り下ろしの拳と、ザファイラの腕を交差した防御がぶつかる。

「アンタ! 分かってんのか?! あんた等の持っている魔道書は――ッ!」

「――全てのページを埋めれば途端に暴走し、周辺に存在する世界全てを巻き込み滅ぼすのだろうか?」

「——え？——ぐあッ！！？！」

アルフのセリフを途中から引き継ぐザフィーラに一瞬動きが止まる。その隙を突きザフィーラの蹴りがアルフの腕に炸裂する。

「~~~~ッ、アンタ・・・そう言えば、さっきからずっと急所は外して攻撃してきたね」

「不必要な殺生は好かんのでな」

「馬鹿にしやがってッ、それがあんた等の主の方針かい？！」

「・・・主はこの事を知らん」

「はあ？」

「これは我らの独断だ・・・故に裁く際は我等だけを裁け」

「アンタ・・・ハッ、良いねえ！気にいったよ！」

そのセリフでアルフは気付く、恐らくは彼らのマスターはこの世界^{世界}の住人。そして、高町なのはと同類の相手を気遣える優しい人物なのだ・・・そして、恐らくは魔道書の現状も把握しておきながらも蒐集を否定したのだと。

「それでこそ主の楯となり矛となる使い魔だ！！」

「その呼び名は好かん・・・ベルカでは主の楯となり矛となる者、守護獣だ！」

「どっちも変わんないだろう？！！」

もっともな叫び声を出しながら再びぶつかる。

——アルフとザフィーラの攻防が再び始まる頃

一人の女性が給水塔の影で立ち竦んでいた。

「へそっちはどう？シグナム？」

「ああ・・・っと！こっちは完全に手詰まりだな。向こうが強いのもあるが、此方が必要以上に戦って戦力を減らすのもイカンからな」
「こっちはそんな余裕ねーよ。シャマルだってなのはの戦闘能力は知ってんだろ？手え抜いたらこっちが落ちる・・・まあ、アイツも此処でアタシらを捕まえる気は無さそうだけどな」
「こっちも抜けそうに無い」

否。その女性、シャマルはシグナム達からの状況を聞き、策を練っているのだ。

「へ・・・なら此処で少し消費しよう」

「それしかないな・・・複雑な気分だ。嘗ては書のページを消耗する事は避けようとしたはずなのに、な・・・」

「良いんじゃないの？少しでも時間稼ぐならページの4、5枚くらい」

「へじゃあそれで行きましょう・・・今回は合流は避けて各自で無事に帰宅する事・・・あと、そろそろ夕食だから出来るだけ早めにね？」

「へへ了解！」

話が纏まり念話が切れる。

「さて・・・闇のSY「ストップだ」・・・（私が最後になりそうね）」

いざ書の力を使おうとした所で首筋にデバイス―S2U―が添えられる。何時の間にかシャマルの後ろにクロノが居た。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。罪状は・・・分かってるな？」

「・・・魔法生物の襲撃、管理局魔導士への攻撃、管理外世界への干渉、後はロストログアの不法所持、かしら？」

首筋に武器を突き付けられても動じずにクロノの問いかけに答える。

「不法所持も何も、その書がキミ達の本体だろう？それは見逃す。管理外世界への干渉も書の転生機能で偶々此処に来ただけだ」

「お優しいのね。それで？実刑はどの程度になるのかしら？」

「なるほど、現状は理解してるんだな」

「・・・（カマを掛けられた…ッ）」

クロノの言葉で、探りを入れられたのだと理解した。クロノは問答無用で攻撃するのではなく、敢えて捕縛ではなく、情報収集を優先したのだ。

「まあその情報の出処は予想が付く。彼らが関わっているのならこの事件は解決したも同然だろうが・・・どっちにしたって僕がやる事は変わらない」

首筋にデバイスを当てたまま魔力を込める。

「一応聞いておこう、任意同行してくれないか？」

「・・・断るわ」

「そうか・・・ならば、ヴォルケンリッターの泉の騎士シャル。キミを現行犯逮捕で（ドゴッ！！）——ガアアッ！！」

だが、クロノが魔法を発動するよりも早く、クロノの体が吹き飛ぶ。

「貴方・・・」

クロノの体を吹っ飛ばしたのはシャルではなく・・・シグナムと戦っていた青年だった。

「・・・蒐集しろ」

「・・・本気？」

青年がそう呟く。それに反応したシャル。

「今、計画を狂わされてはいけない」

「それは、そうだけど・・・」

「（お父様は、これ以上の辛い決断をしたんだ。私だって・・・ッ）」

「どうしたの？」

「ッ、何でもない・・・数日は眠っていて欲しい」

青年の小さな呟きが聞きたれなかったシャルが聞き直すが、何でもないと言い作戦を説明する。

「・・・分かったわ、かなりギリギリまで削るから周囲の警戒お願い」

「ああ（こんな気持ち二度と味わいたくない・・・ッ）」

青年が周囲を警戒する中、シャルが闇の書に命令する。

「書よ」

「蒐集開始」

「ウウツ――」

クロノから魔力を吸い始めページが少しづつ捲れ始める。

「・・・・（ごめんね・・・クロ助）」

その光景を青年は黙って見ていた・・・否、シャルからは見えない位置で拳が痛いほどに握り締められていた。

「終わったわ。結界を壊して此処から逃げるわ」

青年が頷くのを確認したシャルは闇の書を掲げる。

「書よ、守護騎士シャルが命じます！あの結界を撃ち破って！！」

「対象の術式を特定、術式選択・破壊の雷」

闇の書から黒い雷が放出され、結界とぶつかり。

―パキイイイイン！！！！

そのまま結界をブチ破り上空へと消えて行った。それと同時にシグナム達も逃走を開始する。

『――あ、やっと繋がったクロノ君。・・・クロノ君？ッ、しっかりして！直に転移させるから！！』

そして、その場には漸く通信が繋がりクロノの状態を認識したエイミィと、魔力を限界近くまで吸われ意識を失ったクロノだけが残されていた。

急変

Side…なのは

——— 本局入院施設

クロノ君が蒐集され1週間が経った。あの後シグナムさん達が逃走し、クロノ君が蒐集された事を知った私達は2度目の追跡（1回目は私の時だった）を断念し、本局の病棟に入院したクロノ君のお見舞いに良く来ていた・・・何故なら。

「こんに・・・ち・・・はー・・・あ」

「あ」

病室に入ると、眠っているクロノ君に覆いかぶさるようにエイミイさんが顔を近づけていた・・・ちっ、後数秒遅ければ良かったの。「ご、誤解しないでね?! いい加減に起きないかな? って思ってた今なら起きるんじゃないかな? って思って寝起きドッキリでちよっと顔を近づけてみただけなんだよ?!」

「良いから続きやれなの」

「ごめんなさい! 調子にのってましたッ!! 素じゃ無理っす!! って言うかなのはちゃん達みたいに隙あらば狙おうとなんて出来ないよ!?!」

私と美琴お姉ちゃんは、未だにすずかちゃんに先を越されたままなのに・・・寝てる時? 相手の意識が無い時にするのはノーカンなの、やっぱり相手の記憶にも残らなきゃ。

「それよりも・・・まだ、起きないんだねクロノ君」

「・・・うん。ジュエルシード事件の後からね、艦長と一緒に仕事する事になってから偶に寝不足ぎみなんだ。ソレに加えリンカーコアからもギリギリまで吸われてたみたいだね」

そう、アレから一週間。蒐集されたクロノ君は眠ったままになっている。医者の話では既にリンカーコアの回復し、何時でも目が覚めても良いらしい。

「まったく、何時までサボるんだか。早く起きないと、闇の書が完成しちゃうぞ寝ば助クロノ・・・」

「・・・うっ・・・」

「クロノ君!？」

「うる・・・さい!・・・そんな事、言われなくたって、分か
つてる・・・ッ!」

「――良かった・・・起きた・・・起きたよお・・・」

「(お邪魔虫は消えるの)」

ついでにナースコールを押すのも待ってあげるの。

――クロノ・ハラオウン復帰

Side…海鳴

――八神家

八神家のソファで一人の女性、シグナムが落ちつきの無い様子で座っていた。

「まだか・・・」

「落ちついて、シグナム・・・貴女のそんな態度をはやてちゃんが
見たら動揺するでしょう?」

そのシグナムの様子をシャルマルが宥める。

「・・・すまない。・・・だがな、そろそろ向こう管理局側でも準備が整っ
て良い頃だろうか?」

「それは分かってるわ・・・それに、はやてちゃんの事も・・・」

「主は、無理をしているな」

そこへ今までしゃべらなかったザフィーラが会話に入ってくる。

そしてザフィーラが言っている事は日に日に元気を失くし、やせ我

慢でも空元気で過ごそうとしているはやての事を言っていた。

「主はやては、何時まで「たっ、大変だッ！はやてが！！」
『ッ！？』」

「んもう、驚き過ぎやて」

「本当に大丈夫なのですね？」

「せやから、思った以上に強く突き指しもうてうずくまってただけやて」

あの時ヴィータが見たのは、声を殺しベツトの上で蹲り何かに耐える様になっていたはやての姿だったのだ。

「だ、だってよ」

「まったく、人騒がせな騎士だ」

「あら？　そう言うシグナムだって見事にうろたえていたじゃない？　慌てた様子のヴィータを見た瞬間、最速で動き・・・見事に部屋を間違えはやてが攫われたと勘違いしたシグナムは甲冑服を纏い、一目散で窓から飛び出そうとしたのだ。

「・・・言うな。そもそも紛らわしい行動をしたのはヴィータだ」

「なっ？　！　言う事に欠いてアタシのせーかよ？　！」

シグナムの一言で病室が騒がしくなる。

「まあまあ、落ち着きな・・・幾ら個室とは言え騒いだらあかんですよ？」

「むう・・・はやてが言うなら仕方ねえ、今回は引いてやる・・・アイスくれたらな」

「ふう・・・分かった分かった、後で買ってやる」

「ッ！　本当だな？　！」

「ああ、本当だ・・・だからしばらく主はやてと一緒に居ろ。私達

は入院の手続きをしに行くのでな」

「おうっ！任せろ！！」

その現金な態度にザフィーラを除く3人が苦笑する。かなり前からヴィータをからかうと高確率でアイスを強請って来る様になった。「それで？どうなんだシヤマル」

部屋を出て直にシグナムがシヤマルに問い詰める。

「・・・話に聞いた・・・闇の書の症状と同じだわ」

「そうか・・・幾ら蒐集をして時を延ばそうとも大元^{闇の書}が存在する限り結果は同じ、か」

「ええ。それに思っていたよりも進行が早いわ」

「もしや、この前の結界を破る際にページを使ったからか？」

「それに、この間も酷い怪我をしたヴィータちゃんを治す際にも1ページ使っちゃったし」

つい2、3日前にヴィータが蒐集活動を行い・・・救援に行かなければ、その場でブッ倒れてもおかしくない程のボロボロの一步手前まで傷付いたのだ。

「もしそうだとすれば、書が既に壊れている事を知らなければまず蒐集に躍起になっていただろうな」

「過去の事はあまり覚えていなくて・・・そうかもしれないわね」
彼女達の推測は外れていなかった。

改変された闇の書は、主が力を望めば騎士たちは収集を始める。蒐集の際に騎士達が怪我を負い、書の力を用いて傷を治せば主に負担が行く、その負担を何とかしようと益々蒐集を行う。

そして、それらの悪循環がやがて書の完成を導き・・・世界の破滅へと繋がるのだ。

「考えても仕方ない・・・取り敢えず、入院手続きでもしよう」

「そう、ね」

嘗てあり得たかもしれない過去を思い空気が重くなるが、考えても限が無いと思いいたり。取り敢えず数日の入院手続きをしに行くのだった。

S i d e…グレアム

「――そうか、クロノが起きたのか・・・ああ、連絡ありがとう」
通信を切る。本当は本人が連絡をしたかったが検査で数時間は拘束されているらしく、さっき入った連絡はアースラのメンバーからクロノが起きた事を伝えてくれた・・・だが、此方は申し訳ない気持ちで一杯だ。幾ら円満に終わらせるためとは言え、嘗ての部下の息子を切り捨てた様なものだ。

「とは言え、あの子が無事起きてくれた事は嬉しいのだが、な」
鍵付きの引き出しから一つのカードを取り出す。否、それは待機状態のデバイスだった。

「第二プランに必要なモノは揃ったな」

「届いたのですか？」

書類仕事を手伝ってくれているエリアが話しかけて来る。

「ああ、先程ヴィンデルから届けられてな・・・セットアップ」

「オーライ、ボス」

グレアムの手に槍の形をしたデバイスが握られる。

氷結の杖・デュランダル――本来なら術者が先天的に持っている属性変換能力を付加したデバイス。それは本来ならグレアムが計画していた『闇の書の永久封印計画』の中枢を担っている武器だった。

「皮肉な物だな。本来なら一番重要な物となるはずだったのに・・・

今はコレを使いたくないと思っている自分が居る」

「・・・それは。お父様が、本当は誰にも死んで欲しくないと思っ
ていらっしゃるからではないですか？」

っふ、アリアも言う様になったな。誰にも死んで欲しくない、か・
・・・あの時の少年は確か『管理局の正義ではなく、自身の信じる
正義を貫け。本当にその人の為の復讐なら、その人が本当に望む結
末を見せてやれ』か・・・難しい事を言う。

「だが、もうすぐだ。もうすぐで終わりが見える」

デュランダルを待機モードに戻し、再び引き出しの中にしまう。

「その時は、私達が裁かれる時ですね」

「そうだな・・・全てが終わったらあの子にも全て話さないとな」

ーバンッ！！

「お父様ッ！大変！！」

「ッ——何があった？」

今まではやての監視をしていたロッテが、慌てた様子で部屋に入
って来る。その事に一瞬だけ思考を止めるが、すぐさまロッテに状
況を聞く。アリアもまた何時でも出れる様に意識を切り替える。

「——はやての症状が悪化した」

「ッ、バカな！早すぎる・・・ッ？！」

「で、でも今日はやてが部屋で苦しんで倒れたんだって？！」

「落ち着きなさいロッテ！お父様も落ち着いて下さい！！」

「「ッ——」」

ロッテの報告にグレアムは慌てるがアリアが二人を宥める。

「・・・それで？八神はやてはその後どうなったの？」

「あ・・・騎士達が病院に運んで行ったよ。確か数日は様子見で入
院するって」

「そうか・・・報告御苦労だったロッテ」

「いえ・・・どうします？お父様」

ロツテがこれからの行動を聞いて来る。が、うまく思考が纏まらない。これで時間はもう限られた時間しか残されていない。

「（聖王教会は・・・まだ連絡が返って来ていない。デバイスマイスターは・・・此方は後1、2日で準備が整う筈だ。戦力・・・教導隊メンバーは間に合うか？・・・いや、本局は当てにならない。今いる戦力で対応するしかない・・・切り捨てるしか・・・無いのか？）」

幾ら思考を巡らそうと最悪な策しか思い浮かばなかった。

「お父様・・・彼らを、ヴォルケンリッターを切り捨てましょう」

そんな中アリアが案を出す・・・ヴォルケンリッターを・・・闇の書を消そう、と。

「アリアッ?!それは・・・ッ!」

「分かっているでしょう!?彼らと八神はやて、どちらが命の優先順位が高いか!」

「――でもッ!」

アリアとロツテが良い争っているのが聞こえる。アリアの『モノは切り捨て人命優先』と、ロツテの『例えどんな命であろうと命は平等』と言う言葉・・・それはどちらもグレアムの本心だった。

「私は――」

「失礼しますよお」

「「っ!」」

その時、執務室に一人の少女が入って来た。その事にグレアム達が驚く、今日の予定には誰かと面会する予定も無く・・・またアポの一つも入って来ていないのだ。

「おやあ?随分と驚かられていますねえ?」

「――失礼、突然の事だったのでね。それで?キミはどちら様かね?」

グレアムは改めて少女を見る。見た目は美琴達とそう変わらない年齢だろう。服装はグレアム達も見た事がある聖王教会のシスター服で、それなりに長い金髪をストレートに下ろし、袖から見える手

には蜂の巣を連想させるレースが入った手袋が見える。

「あああ、自己紹介が遅れましたあ。私は聖王教会しよくほうみさき所属の食蜂操しよくほうみさき祈と申しますう」

「聞いた事が無い名前だな」

「ええ、所詮私は代理ですからあ」

そう言いながら少女、食蜂は右手の手袋を外し手を差し伸べる。その手をグレアムは友好を込めての握手と思い握り返す。

「あ、そちらの御二方も始めましてえ。私たちの方も貴女方のお噂は良くお聞きますわあ」

グレアムと手を放し、お世辞なのか本気で言っているのか分からないが、リーゼ姉妹にも話しかけ・・・握手を求める。

「あ、ああ、ありがとう」

「・・・どういたしまして」

その称賛を社交辞令と受け取り手を握り返す。

「さてえ、それでは」

「ああ、此方からの――」

「私の改竄力をご覧あれえ」

「失礼します、提督。お話しがあるのですが・・・？・・・」
提督？」

数時間後、検査が終わり事件の容貌に一番詳しい人物であるグレアムに聞きに來たクロノが見たのは・・・誰も居ない執務室だった。――その後、数日たっても戻らず行方知れずとなった

S i d e . . . ? ? ?

携帯を取り出し何処かへ連絡を取る少女―食蜂操祈。

「あ、もしもしいい？ご依頼のお仕事は滞りなく終わらせましたわあ」

『ふむ、御苦労』

返って来た言葉は、男かも女かも区別が付かない程の平坦で感情のない声だった。

「えええ？それだけえ？もつとこう、『よく頑張った！ご褒美に数カ月休暇をやろう！なに、その間の給料も出そう！！』とかないんですかあ？」

『その必要は無いだろう。第一にキミは此処管理局の人間ではないし、家の財源は豊富だったはずだ。ゆえに給料は出ないし、休暇も無期限に有る』

「・・・そう冷静に切り返されるとお本気で反旗を翻したくなりますよお・・・お、人、形、さ、ん？」

『・・・・・・・・』

罵倒されても声の主は無言だった。

「知ってますよお？貴方、管理局の腐った脳ミソ共が仲介役の人形だって言うウ・ワ・サ」

『・・・・・・・・』

「本当の所どうなんでしょねえ？」

『話は終わりかな？何時までも本局に居ると怪しまれるぞ？』

「（チッ、都合が悪くなったたら放しの切り替えですかあ？）はいはい、お仕事が終わったならこんなムサツ苦しい所なんかごめんですよお、さっさと帰りまーす」

話は終わりと言わんばかりにマシンガントークを浴びせ通信を切り歩き出すが、ふと思ひ出す。

「無期限休暇、ねえ・・・いつその事、お父様と相談してみましようかあ？一人でいると退屈過ぎるわあ・・・あそこは海鳴楽しそうね

え、候補に入れておきましようかあ」
そして何時も利用する転送ポートへと歩きます。

急変（後書き）

気付いたら50話も書いていた自分に驚いた（へーへ；）
このチョーシで行くとSTS編までに100話突破する計算になる
と言う凄い事に（汗）

話は変わりますが、しばらく作者の本編に出せないショートストーリーをあとかぎに書こうかと。

では第一弾。本作×まどマギ

事態は唐突に動き出す

「ボクと契約して、魔法少女になってよ！」

「・・・ブチ殺すぞオ小動物？」

——邂逅する（営業する）白と（狂悪な）白

お菓子の空間に銃声が響く。

「今日は観客がいるの・・・だから負けられないのよ！」

「ママさん、凄い・・・私も負けてられないの！レイジングハート
！」

「ぶちかましてやりましょう！あのお菓子の魔女に！」

——乱入するピンクの閃光

「な、なんか盛大にフラグが折られた気がするんだけど」

「気のせいじゃないの？まどか？・・・それよりいつの間にか高町

さんの衣装が変わってただけど？」

「砲撃対決だね！ってとまりは声に出してみる！」

「まあ、なのはの方が勝つと思いますかと、はずみは冷静に判断します・・・ところで、此処にあるお菓子は食べられるのでしょうか？」

「君たちは何時も騒がしいね」

それを遠巻きに見る者達。

「なあ？時が止められるならアレやってくんね？」

「J O J O ネタは既にやったわ」

「いや違くて、アレだよ『時よ止まれ、お前は美しいから——』
って奴」

「止まれ違いよ、消えなさい」

「って？！どっから出したその黒光りするモノ？！」

——出会うは1人の為に時を遡る少女と幻想殺し

「ねえ、ボクと契約して魔法少女になってよ？」

「魔法少女なら既に居るわ！他にも能力者吸血鬼幼なじみ同級生下級生メイドシスター巫女ネコミミイヌミミメガネっ娘大和撫子暴食っ娘巨乳並乳貧乳美乳金髪銀髪黒髪白髪、ありとあらゆるパターンを取りそろえてるわ！」

「美琴さーん・・・年上属性がおらへんで？」

「迂闊・・・ッ！」

「それよりよォ、白髪って誰の事だ？あア？！」

「訳が分からないよ」

——出会う人物を間違えた白き獣

そして・・・

「わ、私・・・もう、一人ぼっちじゃないんだ・・・」

「うん！お友達に、なる？」

「あたしって、本当バカだ」

「諦めんなよ！！お前は自分にとって本当に大切な奴に自分の全てを駆けたんだろう？！そんなこと誰だってできることじゃねー！！もっと誇っていい事だ！」

「私のして来たことは・・・無駄・・・？」

「無駄なんかじゃ、ない・・・っ！」

「君は本当に神にでもなるつもりかい・・・っ？！」

「神様でもなんでもいい、今まで戦ってきた魔法少女達の思いを無駄になんてさせたくない。それを邪魔するルールなんて変えて見せる・・・さあ！叶えてよ！インキュイマジンプレイカー「幻想殺し！！」べえ？あ、あれ？ワルプルギスの夜は？！」

「待たせたわね、まどか！もう終わったわ！」

「いやー、止まった時の中を動くって中々に新鮮だったぜー！」
「・・・・・・・・えー？」

魔法と魔術と超能力と・・・契約の魔法少女達、公開！

なんてあるわけないよ！

12月24日

Side…海鳴

——12月24日・病室

はやてが倒れてから1週間近くが経った。シグナム達は倒れてたはやてを病院に運び終えた後、書の進行を食い止めるため急遽蒐集活動を行った。

その結果、進行のスピードは収まった・・・が、今まで一度蒐集すれば一週間程度は蒐集しなくても良かったのが此処に来て急にその頻度を縮めて行き・・・その為に闇の書のページは650を超えてしまった。

「大丈夫ですか主はやて」

「大丈夫やて、最近は調子良いんや・・・それよりも」

だが、その事を知らないはやては今一番不安に思っている事があった。

「ごめんなあ。シャマルの料理はキツイやろ？」

自身の体の事ではなく、シグナム達の胃の心配だった。

それもその筈、八神家の台所は実質はやてが握っている。そのはやてが倒れた今ヴォルケンリッターの中で唯一料理経験があるのはシャマル唯一人なのだ。

「お気になさらずに主はやて・・・偶に侵入してくる御坂の双子が多く作るので何とか持ち堪えています」

「そか、あの双子もたまには役に立つなー（それよりもウチの家の防犯について考えなアカンかも・・・あの子ら何してんのや？ピッキングか？ピッキングなんか？日常的にいらんやろ！その技術?!）」

「一先ず家族の無事を喜んだが・・・はやての関心は二人が料理が出来る事よりも不法侵入している事にツッコミんだ。そう考えている内はまだまだ常識人である証拠だ・・・ツッコミ属性の性とも言

えるが。

「まあええか、それよりも今日はヴィータはいないんか？」

「・・・はい、今日はゲートボール仲のご老人達とお茶会だそうで」「そっかる・・・ヴィータも寂しがつとるやろうし、はよ治さんとな」

「そうねはやてちゃん」

「そや！昨日、アリサちゃんと会ってな——」

その一言でシグナム達に緊張が奔る。

アリサ・バニングス。一般人であり・・・なのはとの繋がりもある人物。それが意味する事は——

ーコンコン

「失礼するよ」

シグナム達の思考を遮るように一人の男性が入って来る。見知らぬ人物の登場でシグナムたちが警戒心し始める。

「あの、失礼ですけど病室を間違えていらっしゃるのでは？」

その人物に困惑の表情を浮かべながら話しかけるはやて。それもその筈、何故なら行き成り見覚えの無い人物が入って来たのだから。「はっはっはっ！いや、間違えてなんていないよ・・・まあ、こうして会うのは初めてになるのか」

「初めて？・・・まさかっ!？」

「ああ、私がギル・グレアムだ。・・・それと、そちらとは始めてになるのかな」

そこに居たのは行方知れずとなっていたグレアムだった。話でしか聞かない人物に警戒していたシグナムは少し迷った末に・・・その握手に応じる。それと同時にグレアムから秘匿話が届く。

「へそれともまた会ったと言うべきかな？闇の書の騎士ヴォルケンリッター」

「ッ?! へもしや貴様が上条が言っていた管理局側の——」

「へおっと、長い話は今夜にしないかな?」

シグナムの問いかけにグレアムは軽く受け流す、その視線ははやてに向けられていた。その視線に少し迷った後、シグナム達もその意見に同意した。

今のはやてに余計な負担を掛けるのは得策ではないと判断したからだ。

「へ・・・良いだろう。ただ一つ聞かせろ、準備は整ったのか?」

「へ・・・此方の準備は整った」

「へなら、良い」

話は終わりだと言わんばかりに念話を切る。

ーコンコンッ

念話が切れると同時に病室をノックされ。

「邪魔するわよー!! 起きてるゝはやてゝ?」

「お邪魔します」

ドアを開けて入って来たのは今さっき話していたアリサと友人のすずか・・・そして。

「お、おじやまします・・・ーッ!」

フェイトだった。そして、病室に居る人物を見て驚きで固まる。

「おっ! いらっしゃい! 今話してたんや」

「そう? あ、この子が噂の美少女転校生のフェイトよ・・・フェイト?」

「ーへっ・・・な、何?」

アリサに話しかけられ、シグナム達を凝視していたフェイトが我に返る。

「だから、こっちの狸っぽい子「誰が小狸や?!」がフェイトに紹介したかったはやてよ」

「えっと、よろしく?」

「何で疑問系?・・・まあ、ええか、八神はやてや。ちなみに、ひ

らな三つではやてやで」

「・・・将来は執事さん？」

「億単位の借金なんか背負うかッ！」

「じゃあ新幹線」

「東北新幹線な、ちなみに型番はE2系—1000や覚えときい」

「えっと・・・」

「後は戦闘機でもフェリーでもプロレスラーにもマンガの主人公にもなった事は無いで？普通の女の子や！」

「女の、子？」

「普通、かな？」

「アリサちゃん？すずかちゃん？何か文句在るんかいな？」

「「何もないよ（わよ）」？」

フェイトと話していた筈が何時の間にかアリサとすずかとの漫才トークになっていた。その隙にフェイトは普通を装いながらもシグナム達と念話で会話していた。

「〈貴女達が此処に居るって事は・・・まさか〉」

「〈やはり気付くか。そう、八神はやてこそ我らヴォルケンリッターの主だ〉」

「〈やっぱり〉」

シグナムの答えに自身の推測は間違っていないかったと確信するフェイト。だが、もう少し頭の回転が良ければ気付いただろう。シグナムは『闇の書の主』とは言わず、ヴォルケンリッターと言った事に。

「〈グレாம்提督はどうして此处へ？〉」

「〈私も個人で彼らの事を探っていたのでね〉」
グレாம்も念話を繋げ話しかける。

「〈あの、部隊は？〉」

「〈動かしていなよ・・・個人的に彼らと話がしたくてね〉」

「〈・・・連絡は？〉」

「〈無駄だよ〉」

「へええ、この病室に簡易の結界を張らせて貰ったわ」

グレアムとの会話にシャルが割り込んでくる。その声に釣られフェイトがシャルの方を見ると、既にクラーヴイントを起動させていた。

「へ予めこの病院には幾つかのマーキングがしてあるから、通信妨害の結界ぐらいなら管理局の観測にも引っ掛かる事は無いわ」

「へ・・・此处でやる気？」

「へいや。その必要は無い」

更にシグナムが割り込んでくる。そのシグナムの言葉に訝しげな視線を送る。

「へそう怪しげな視線で見るな・・・どうしても知りたかったら今夜教えてやろう・・・構わんだろ？ギル・グレアム」

シグナムの言葉に驚愕し、慌ててグレアムの事を見る。

「へ・・・そうだな。もう“此处”まで来たんだ・・・今夜、向このビルの屋上で話そう」

グレアムが見つめる先には、他よりも少し高いビルが立っていた。所で、今日なのはちゃんはどうしたんや？」

最近になってなのはと遊ばなくなり、家にも遊びに来なくなったのはを心配してヴィータに聞いた所「ケンカした」と言う理由を聞いている。

「「「・・・」」」

「え？なんやそのイヤな沈黙」

三人が一斉に黙った事ではやてが動揺する。

「なのは・・・毎年恒例の・・・」

「えっとね？なのはちゃんは・・・」

「なのはは確か・・・」

『翠屋のクリスマスセールの手伝いよ（だよ）（だって）』

喫茶翠屋。毎年クリスマスの時期は事前予約と当日販売（23（25日限定）で平均300ホール売れる為、最近になってお菓子作りが出来る様になったのはも戦力として組み込まれた。

ちなみに例年の如く美琴が参戦し当麻が巻き込まれ。今年から風斬と舞夏が参戦、翠屋の出資者であるオルソラ率いるアキナス孤児院組も参戦し・・・女性陣（十土御門）の策略で神裂も巻き込まれた・・・売り子として。

――夜

「――て、は――っ、はやてッ！」

「んん――？・・・ヴィータ？どうしたん？」

昼間のグレアムとの一時が楽しかったのか、夕食時にはぐっすり寝むっていたはやては横から聞こえる声に起された。その声の持ち主は今日は見舞いに来なかったヴィータだった。

「起きたか？はやて」

「起きたって・・・まだ8時かいな？！アカン、途中で眠ってしもーたんやな」

思い返せば今日は楽しい一日だったとはやては思う・・・少し早目のクリスマスプレゼントを貰った気分だった。

「はやて、一緒に来て欲しいところがあるんだ」

「今から？」

ヴィータは無言で頷く。様子に少し悩んだはやてだったが、ヴィータの様子。まるで出会った頃の様な肌にピリピリ来る様な空気を纏っている様を見て・・・頷いた。

「よし、なら行くぜ」

「って、窓からかいな？！」

自分と同じくらいの身長差しかないヴィータに抱きかかえられ（体格的に横抱き、つまりはお姫様だっこ）はやての頬が赤くなる。

そして人生初の空の旅が始まる——その先に絶望しかないとは知らずに。

Side…当麻

「あ、ありがとうございますー………終わった」

時は少し戻り、時刻は午後7時前。予想よりも早くに店外ケーキ販売が終了した。コレも恐らくは彼女のお陰である。

「ありがとうな……神裂」

「それは良いのですが……着替えて良いですか？」

現在の服装。

俺Ⅱ赤服サンタ

神裂Ⅱ普通の魔法使い

ちなみにさっきまで恭也さん（同じく赤服サンタ）もいたが既に店頭販売のテーブルを片して店内に引っ込んだ（忍さんとデートらしい）。

「……良いんじゃない？そのままで」

「嫌ですっ!!」

断固拒否られた。

「あのおう？」

神裂と漫才してたらお客さんがやって来た。見た目は全員美琴より年下の女の子が3人組だ。

「っと、いらしゃいませ〜何名様でしょうか？」

「3名ですわ……所で、此処が海鳴の有名スポットの翠屋……ですのよね？」

ツインテールのお嬢様言葉で話す子が聞いて来た。

「そうだが？」

「そう、ですの・・・所で貴方お幾つですか？少なくとも高校生以上には見えませんが」

「小5だ」

「良いんですの?!」

「大丈夫だ、問題ない・・・給料なんか貰ってないからな」
今思い返せば去年からずっと無給で働いてた？

「ギ、ギリギリ法律の穴ですね」

「白井さん！早く入りましょーよ！私、寒いのは苦手なんです！」

髪飾りがお花畑の子がツインテールの子ー白井ーを呼ぶ。その近くでは黒髪ストリートの子が忍さんと話している。

「では、連れが騒がしいので失礼しますわ」

「おう、ごめっくり」

軽い挨拶を交わして白井は店内に入って行った・・・さて。

「俺たちも店内を手伝うか」

「な、なら着替えても良いですか?!」

神裂が願望を込めた声で聞くが。

「あら？着替えたいの?・・・ならこっちはどう？」

桃子さん強襲。手には冥界の2代目庭師の衣装（二刀付き）。

「えゝ?い、いや、それは、ちよつと・・・ッ」

「だっはっはっはっ!!俺は良いと思うぜい!ねーちん!」

土御門が笑いながら現れる・・・ついでに青髪もいる。

「つ、土御門?!だ、誰のせいでこんな事になってると思ってるんですか?!」

「唯でさえ武士って感じなんだから、少しは女らしいかっこうすれば良いんじゃないかにゃー?」

「いやいやつつちー?あの衣装の人物も片っ苦しくて頑固で真っ直ぐな性格なはずやで?・・・でも委員長体質の女の子が、顔を赤ら

めて恥ずかしがる所は物凄く萌えやな―」

「・・・有りだな」

「有りだぜい。だが俺としては敢えて委員長よりもメイドをお薦めするぜい」

「つつちーも通やなあゝ」

即座に始まるバカ会談。

「――二刀流」

そして、神裂が未だ桃子さんの手に有る衣装に付いている小太刀の模擬刀を手にし。

「秘剣・燕返し――ッ！」

「あだッ?!」

「おうッ?!」

「あべしッ!?!」

物理的なツッコミを入れる。ってオイ?! 今本当に両方とも3つに分裂したんだが?!

「修練の賜です」

「そ、ソウデスカ」

最早ツッコム気も失せ。俺は大人しく店内に入り、土御門と青髪は夜の街に紛れていく。

そして・・・

「(この模擬刀・・・どうすればいいのでしょうか?)」

手にした小太刀の模擬刀をどうしようか悩む、普通の魔法使いスタイルの神裂だけが残った。

「着てみたら?」

「お、お断りしますっ!」

そんな神裂に冥界の庭師の衣装を進める桃子。その意見をすぐさま拒否し、早歩きで歩く神裂。

だが、前方に意識を向けるのを忘れていた為。

「あ、神裂。さっきの模擬刀なん――ッ」

「へ――」

—ゴンッ!!—

—ドサッ!

—キイイイインッッ

丁度、店内から出て来る当麻とぶつかる。ソレを受け止めようとして当麻が一步引くが。思っていた以上にスピードが速く、当麻を押し倒してしまう。

「イテテ、大丈夫か神ざ——」

「だ、大丈夫で（ふによ——）んっっ——」
そして気付く。

——当麻は外の景色がセピア色に染まっている事に

——神裂は当麻の右手が自分の成長途中の胸部に触れている事に

「コ、コレ「キ、キャアアアア!!」（ゴスンッ）はぶらッ——
——!!——」

当麻が何かを言う前に神裂のストレートが当麻の顔を襲う。

「お、おいしい役が奪われた?！」

「って美琴お姉ちゃん! そんな事言ってる場合じゃないよ?! 後、神裂さん! その役割譲って下さい!!」

更にその瞬間を見た美琴となのはが駆け寄って来る。既に翠屋の店内は魔法関係者と数人の客しか居なかった。

「オイッ! そんな事言って「キャアアアアア!!」るぶらあ——!!——」

再び当麻が何かを言い掛けるが、再び神裂が左ストレートを決める。

「か、神裂さん! 落ち着いて——!!」

今の状況を理解した風斬が神裂を止めに入る。

――神裂の暴走は数分続いた

12月24日(後書き)

次からようやく最終バトル突入!!

な、長かった(汗

A・S編終了までで50話突破するなんて連載当初からは想像もできなかった(^^ゞ

あ、今回のあとがきクロスストーリーは延期です>m () m<

復讐する牙

——時を遡り、はやてが眠りについた後

「「「「「.....」」」」」

街中を一風変わった集団が無言で歩く。メンバーは、はやてのお見舞いに来ていた魔法関係者だ。

「（フェイトどう？）（.....駄目。全然繋がらない）」

アリシアに問いかけられ答える。病室を出てから直に海鳴の前線基地に連絡を取っているが.....全く反応が無いのだ。

「（そう言えば今日アースラが来るんだっけ？）（.....あ）」

繋がらないのは当たり前だった。本局で対闇の書用の武装の取り付けの為、本局に置いたアースラが今日此方に来るのだ。

その為、オペレーター人員は全てアースラに出向き、海鳴の前線基地は無人状態なのだ。

「（じゃああの人達が言う様に話し合いだけで済むのを祈るしかないね）」

戦力差は2対3。しかも此方は実力が分からないグレアムと即席コンビを組まなければいけないし、向こうは接近戦主体の戦闘スタイルに集団戦では重要ポジションのセンターガードが居る.....正直言って不利である。

「（そもそも何で提督クラスの人が単独行動取ってるの？）（それは.....何でだろう?）」

アリシアの疑問にフェイトは答える事が出来なかった。その間もグレアム達は歩き続け.....一つのビルの屋上に辿り着いた。「此処なら良いだろう」

グレアムがフェンス近くまで歩き久しく声を出す。立ち位置はフェンス側にグレアムが立ち、ドアの近くにフェイト、そして三角形の形になるようにシグナム達が立っている。

「（フェイト変って）（.....分かった）では、どう言う事かお聞

きしても良いですか？」

アリシアがフェイトと変わり表に出て話を切り出す。

「（？雰囲気が変わった？）良いだろ。結論から言えば・・・我らは裏では管理局と繋がっていた」

「ッ！？（ッ！？）」

「始まりは・・・そう、我らがこの地に現れた日だ」

二人の驚きを余所にシグナムは語り始める。闇の書の真実も、所持者を蝕む呪いも、自分たちの想いも・・・最終的には管理局の設備を頼る事も。

「それじゃあ・・・なのはは・・・」

「ああ。我らの事を知っていた・・・故に我らはあの時高町を攻撃したのだ」

自分たちから遠ざける為に、加害者と被害者と言う分かりやすい構図にし、罪を被らない様に。

「恨むか？親しき友を傷付けた我らを」

しばらく悩んだ末にアリシアは・・・否、フェイトは首を横に振った。

「色んな事情があるのは分かったし・・・なのはは恨んでなかった。だから私が貴女達を恨むのは筋違いだと思う」

「・・・そうか・・・ギル・グレアム。今こそ我らは管理局に投降し――」

「それは困るな」

バチインツツツ！！！！

『――ッ？！！』

一瞬にしてその場に居た全員が四肢と首にバインドに掛かる・・・否。

「投降なんかしてもらっては本当に困る・・・私の宿願が遠退いてしまう」

唯一人、グレアムだけが悠然と佇んでいた。

「貴様！どう言うつもりだ？！」

「クッ！？外れない？！」

「唯の・・・バインドではない・・・ッ？！」

シグナム達が叫びながらもバインドを外そうと足掻くが、中々外れない。寧ろ時間が経つにつれて次第にきつくなっていきっている。

「非殺傷解除した拷問用のバインドだよ・・・次第に苦しくなってくる」

「どう言うつもりですか？！提督！？」

シグナムが尋ねた事を今度はフェイトが尋ねる。

「復讐だよ」

「復、讐・・・？」

「おや？君は考えた事は無いかな？——母を殺した者に殺意を抱いた事は」

「——ッ」

その一言にフェイトは硬直する。

「な、何・・・で」

その言葉は身に覚えがあり過ぎた、つい半年ほど前の出来事なのだから。

そして、別の意味でも驚愕していた。

「何で・・・その事を知っている・・・の？」

半年前のP・T事件。提出された報告書には事故として死亡扱いされているのだ。この件はリンディから実際に謝られ事情を聞かされた。

その裏には超能力者の存在を隠す為だ。幾ら弱体していたとしても実質Sランク近くの實力を持っていた者が魔導師で無い者に倒される。この件が本局に伝われば事実を知る為に地球に調査に来るだろう・・・そして、その先に待っているのは管理局の介入だ。そうならない為にリンディは隠蔽したのだ。

「情報と言うモノは完全な隠蔽など出来ないと言う事さ」

だがその一言で切って捨てる。

「手を、取り合う気は、無い、と？」

ザファイラが息も絶え絶えに問いかける。既にギリギリ呼吸が出来る程に締めつけられているが、その眼光はグレアムを捕えて放さない……だが。

「手を取り合う？——誰が友を殺した者と手を取るかッ!!」

そんな眼光さえ今のグレアムには届かない。

「9年、9年も私は耐えたのだッ!あの時、彼を、クライドを、友人を自らの手で殺した時の瞬間を何度夢見た事かッ……貴様らに分かるか?!分からないだろう?!分かってたまるか!!!!」

剥き出しの憎悪を叩きつけられる……。その一つ一つがシグナム達に突き刺さる。他者から向けられる憎悪の言葉。それがこんなにも激しいものだとして初めて気付かされたのだ。

「(重い、な……) 貴様の想いは分かった。ならば話を変えるが……. . . ヴィータはどうした？」

「「ッ?!」」

シグナムの別の問いかけにシャルとザファイラの二人が反応する。今この場に居ない最後の一人の事に漸く意識が向いたのだ。

「もうじき分かる……アリア」

「了解です」

「ッ、何時の間に?!」

だがその質問に意味有り気な視線を向けた後、何時の間にかフェイトの近くに居た自らの使い魔——リーゼアリアーに言い放つ。

その一言を受け……アリアとフェイトの二人が消える。

「テストロッサ?!」

「他者を心配している暇は無いぞ?——蒐集」

「なっ、何故貴様が持っている?!!!」

シグナムが驚くのは無理もない。グレアムが手にしているのは……紛れも無く闇の書だった。

「蒐集開始」

「「ぐッ——、あああああ——！！！！」」

シグナム達の胸から紅い結晶——リンカーコアが浮き出る。その輝きが無くなっていくと同時にシグナム達の体も段々透けて行き・
・・・・・そして。

「確か、守護騎士たちは自らの魔力を捧げ闇の書を完成させるのだ
ったな」

残ったのは、シグナム達が着ていた衣服だけが残された。

「——何でや・・・？」

「来たか」

グレアム以外の声がある場所に響く。その声の主はグレアムは視線を向ける。

「どうして・・・なん？なんで、小父さんが・・・？いや、それよ
かシグナム達をどないしたんや？！」

そこに居たのははやてだった。傍にははやてを連れて来たヴィー
タもいる。はやての言い分から察するに、先程の光景を見ていたの
だろう——シグナム達が消える瞬間を。

「彼らをどうした、か・・・消えて貰ったのだよ」

「消えた？！消えたってどういう事や？！」

「？・・・ああ、君は次元世界の事は知っていても、次元世界の法
は知らないんだったな。彼らは・・・犯罪者だ」

一瞬はやての言っている事が分からなかったグレアムだが、自身
の記憶でははやては何も知らない管理外世界の住人だと言う事を思
い出す。それゆえに真実を述べる。

「た、確かに昔は色んな人に迷惑かけたって事は知っとるけど・・・

」

「迷惑？それに昔、だと？何も・・・何も知らない小娘がッ！！」

「ひッ——」

グレアムの豹変にははやての体が竦む。それも無理無い事かも知れ
ない・・・何故なら、グレアムが放っているのは紛れも無く——
殺気。

「何故貴様らは生きているッ?! 何故クラウドが犠牲になって死に、貴様らは再び生を得て平穏な暮らしをしている?!」

そして――憎悪。

「あ、あう……。だから……。だから何か……。? ウチから、家族を……。シグナムたちを奪うんか?!」

「ああ、そうだよ」

震える声で問いかけるはやてに、肯定の意を告げるグレアム。

「それにしても……。家族、ねえ?」

「……。そや、大事な……。家族や」

「その家族が内緒で犯罪行為を働いていたとしても?」

「どう、言う事や……」

「言った通りだよ。管理局が定めた次元法。その中に記されている『ロストロギアの不法所持』『管理外世界への許可なき転移』『観測世界内の魔法生物への干渉』」

次々と上げられるシグナム達が犯した罪状が述べられる。

「そして、一般人への攻撃。ああ、確かキミのお友達が狙われたのだったね」

「へ?」

信じられない事続きで、一瞬グレアムの言っている事が理解できなかったはやてだが、此処最近の友好関係を思い出し……。家に遊びに来なくなった友人を思い出す。

「まさか……。なのはちゃん?」

その答えを聞き、グレアムが嗤う。

「どう言う事や?! ―――ヴィータ!!」

「……。くっ」

「……。ヴィータ?」

「くつくつつ、あははははは！！ヴィータ？誰の事を言ってるの?!」

はやての傍に居たヴィータが笑いだし、その体が光る。そして、そこに居たのはグレアムの使い魔リーゼロッテだった。

「あ、アンタ誰や?! ヴィータはどうしたんや!!?」

「ヴィータ?・・・ああ、鉄槌の騎士ね。彼女なら」

パチイン!!

ロッテが指を鳴らし、今まで隠されていたモノが宙に現れる。

「そこに居るわよ?」

「――え」

――三つ編みの髪は片方が解け

――両腕と首にバインドで絞めつけられ続けたのか顔は蒼く

――纏っていたバリアジャケットは既に服の意味さえ為さず

――血が滲んだ肌は冬の外気に晒され

――未だに流れる血は、足元に無造作に置かれたヒビだらけのアイゼンを紅く彩り

「ヴィー、タ・・・?」

――ヴィータが其処に居た

「ヴィータ・・・ヴィータ! 起きい!!」

自らの声に反応しないヴィータの様子を見たはやては一瞬、嫌な

想像をするが。僅かながら上下する胸を見てまだ生きている事が分かる。

その事実がはやてを安堵させ・・・怒気を含んだ目をグレアムに向ける。

「小父さんが・・・やったんか・・・？」

「ああ、そうだよはやて」

だがそんな様子のはやてを見、逆に笑みを浮かべる。

「そう！その目が見たかったっ！！」

グレアムが手を上げる。その指示に従いヴィータの近くに飛んできたリーゼアリアが闇の書を掲げる。

「ッ、やめ——ッ」

その行動に気付いたはやての脳裏に蘇るシグナム達が消えていく光景。

「蒐集」

「蒐集」

「————あ、アアアアアアッッッッ！！！！」

「止めてえええ！！！」

はやての叫びも空しく。ヴィータの体からリンカーコアが浮かび上がり、抜けていく魔力に比例するように体が透けていき。

「は、や——」

ヴィータが消えた。

「嘘や「いいや。現実さ」——ッ」

現実を否定するかの様に呟くはやての耳に届くのは無情なまでの一言。

「これでまたキミは一人だ」

「ッ——」

グレアムの言葉がはやての心を襲う

「さて、次は誰を狙おうか？」

「やめ・・・ッ」

天涯孤独だと思っていたはやてにとって、家族とは・・・シグナ

ム達は心の支えの一つだった。

「君に関わると不幸になる事を知って貰わないと」

「嫌や・・・」

今やシグナム達を奪われたはやてを支えるのは・・・友人。

「ああ！そう言えば君には今年から親しくなった双子の姉妹が居たね」

「嫌や——ッ」

理不尽な宣告を受け、尚も現実を否定するはやてに一つのモノが視界に入る。ヴィータが消えた場所に一つの本——闇の書が落ちていた。

「（魔法の、本・・・確か、願いを叶えるんやっただけ・・・？）
そして一つの結論に至る——ソレを奪われるくらいなら。」

「その子達も消えて貰うか」

「（止めて・・・それだけは許したらアカン！もう、1人になるのは嫌やッ！！）」

脳裏に蘇る1人だけの家、1人だけのご飯、1人だけの夜。そんな生活に戻るくらいなら。

「（——嫌や、嫌や嫌や嫌や嫌や——）嫌やあああああああ
あ！！！！！！」

——例え世界を否定しようと自分の大切な者たちとの永遠を望む、と

「闇の書、完全起動しました。主の願望を確認————ユニゾン開始」

はやての足元に白銀の魔法陣が浮かび上がり。その次の瞬間、魔力光が黒く染まりはやてを黒い光が包み・・・弾ける。

——少女の体から大人の女性へ変化し

——シヨートヘアの髪は腰まで届く長さまで伸び白く染まる
——顔、腕、足には赤い線が入り

——体を包む甲冑服は自らを戒める様なベルトが幾つも巻き付き
——その背からは死を象徴する様な黒き翼を生やしていた

はやてであった女性は顔を上げ紅く染まった目でグレアム達が居た場所を見る・・・が、既にそこには誰も居なかった。

「標的のロストを確認。周囲の魔力残滓から推測・・・転移による離脱ではないと判断。これより主の第二の願望を実行する」

女性は言うや否や足元に魔法陣を描く。

「対象・主の親しき者。術式設定——世界よ、閉じよ」

イイイイイイン！！

その一言で海鳴市全てが結界に閉じ込められる。

「サーチ・・・不特定多数の生体反応を確認。肉体からAIM拡散力場と呼ばれるモノを感知、能力者と断定————主の望みとは言え、この中から主のご友人を探すのは一苦勞ですね・・・ん？」

女性は何かに気付いた様に一点を見つめる。

「対象の一人を確認」

その視線の先にはピンクと、金色の魔力光を輝かせながら近づく少女達が居た。

——今、聖夜の戦いが始まる

復讐する牙（後書き）

〓今日の一発ネタクロス劇場〓

エヴァンゲリオンに当麻達が居れば

「逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ！」

「俺は不幸じゃない俺は不幸じゃない俺は不幸じゃない俺は不幸じゃない」

「当麻は私のモノ当麻は私のモノ当麻は私のモノ」

「おなか減ったかもおなか減ったかもおなか減ったかも」

「死にたくない死にたくない死にたくない」

「私は死なない私は死なないわ私は死なないわ」

「にゃーにゃにゃーにゃーふにゃー」

「何アレ？」

「いやー！あの子たちにお酒飲ませたらどうなんだろうって思っ
てねー？シンちゃんもアスカも鬱酒って奴かしら？」

「あらあら当麻さんったら」

「美琴ちゃんも独占欲が強くなっちゃってー」

「もう、なのははやっぱりかわいいわねー」

「・・・無様ね（なのはちゃんって言ったかしら？あの子、良い素
材だわ・・・っ！）」

酔った子ども組と大人組みの一幕より

はい！とうとうラストバトルに突入！・・・突っ込みたいこ
ろは多々あるでしょうが多めに見てくだSイ

次話の投稿は少し(?)遅くなります > m
(
m <

ナイトメア・クリスマス（1）（前書き）

約一か月ぶりに更新！

それでもまだA・S編が書き終わらないorZ

ナイトメア・クリスマス（1）

Side…なのは

翠屋で異変を察し、当麻に説明役を押し付けたなのはレイジングハートが感知した魔力の波動の発生場所へと飛んでいた。

「・・・やっぱり、結構な数の人が取り残されてる・・・ッ」

「――遠距離からの観察から察するに、結界内に居るのは超能力者と判断します」

目的の場所へと飛行している間も、海鳴の街を見る。そこから自分たちがどのような状況になっているのか判断出来ずにいる人が大勢い居た。それら全てが超能力者である事が判明している。

空から見た所、今はそれほど大規模な暴動などは起こって居ない・・・が、それも時間の問題だろう。今はまだ結界が張られて数分しか経っていないからこそ落ち着いている様なものだ。時間が経てば、痺れを切らした者達が暴動を起こし始めるだろう。

「早く、解決しないと・・・」

「肯定です・・・左からフェイトが来ます」

レイジングハートの言葉に左を見れば、フェイトが真っ直ぐ此方に飛んでくるのが見えたので、少しの間その場に留まる。

「なのは・・・」

「・・・フェイトちゃん？」

目の前に停滞したフェイトはなのはに声を掛けるが、その声は沈んでいた。

「シグナム達から、真実を聞いた」

フェイトの言葉に息を呑む――。

「・・・軽蔑、した？」

――事は無く。逆に隠す事もせず聞き返す。

「・・・正直言って、何で黙ってたんだろうって思ったし・・・話してくれなかった事に悲しかった」

フェイトの冷静な反応に、なのはは言うべき言葉を失くした。

フェイトがこうまで冷静なのは一重にアリシアの存在だ。クリスタルケージに囚われた後、はやてが来る前に引き離されたフェイトは、何故なのはがシグナム達と知り合いなのか黙っていたのかを話し合っていたのだ。

「でも・・・あの人の影響を受けたのはなら、多分皆が笑ってる未来にしたいからって思ったんだ」

フェイトの言うあの人。言わずもがな、なのはの人生に多大な影響を及ぼした当麻の事だ。そして、フェイトの言った事はなのはの考えていた通りだった・・・だからだろうか。

「フェイトちゃん。私ね、皆が笑顔で居られる未来が見たい。シグナムさん達も・・・管制人格の子も・・・誰一人欠ける事の無い、欠けてない未来が欲しいの」

「うん（やっぱり、なのはちゃんだね）（うん、やっぱり、なのはは・・・なのはだった）」

「だから・・・だから、力を貸して！」

「うんっ！アリシアも、そっちの未来が見たいって言ってる。だから行こう！」

フェイトが目標地点に向かって飛び立ち・・・そして、前方に明らかに魔導師らしき人物が居た。

「データ照合——ッ!? 夜天の書の管制人格と一致しました!！」

「そんな・・・ッ」

レイジングハートの照合に、なのはは今起こっている異常事態の正体を察する。隣に居るフェイトは既に戦闘態勢を取っていた。

「はやてちゃん!!」

「その名は主の名だ・・・私には・・・名など、無い」

なのはがはやての名を叫ぶ。だが返って来たのは感情が抜けた無機質な声と、否定の言葉。

「はやてちゃんは?！」

「主は今や眠りに付いておられる。話しかけても無駄だ」

「そんな・・・」

はやての現状を知り、絶句するなのは。代わりにフェイトが話かける。

「じゃあ、何でこんなことした？結界内に能力者を捕えてどうするつもり？」

「・・・主は真実を知り、親しき者達が目の前で消える瞬間を見た。その時願ったのは幸せな時間を奪った者への復讐と、幸せな時間をもっと続いて欲しいと言う2つ」

管制人格は左手に闇の書を浮かべ、右手をなのは達に向ける。

「復讐の対象は後で探そう。この結界は入るのは容易いが、内から出る事は叶わんからな・・・ゆえに」

足元に三角形の魔法陣が浮かび上がる。なのはも思考を切り替え戦闘態勢に移る。

「まずは貴様から書の中へと導いてやろう（どれが主のご友人か分からん・・・広範囲攻撃は使えんか。時間~~が~~無いのに）」

「（・・・そんな事になったら当麻くんと結婚できない？——ッ！）断るの！！」

「（狙いは・・・なのは?!）やらせないっ！」

三者三様の意志がぶつかる。

「敵を穿て、ブラッティダガー」

紅いダガーがなのはとフェイトに向かって放たれる・・・その数、200。

「多いよッ!？」

「マスター、距離を取ります！アクセルフィン!!」

「バルディッシュ!」

「同意見です！ブリッツラッシュ」

管制人格が放った魔力弾の数に高速移動による離脱と回避を選ぶ二人。

「逃がしません。羽ばたけ、スレイプニール!!」

だが、なのはを逃がすつもりが無い管制人格が飛行魔法を使用す

る。背中の羽が大きく羽ばたき、高速で飛翔する。

なのはは思考する。この状況を打破する方法を。

「……良い手が思いつかないの」

だが、考えても良い手が思いつかなかった。

「取り敢えずは海上に出ましょう。周りに人が居なければ彼女に集中できます」

「その意見には賛成」

すぐ近くを飛んでいたフェイトもレイジングハートの意見に同意する。

「問題は彼女がソレを許すかどうか、と」

「向こうも条件は同じと言う事でしよう」

デバイス二機は同じ結論が出ていた。管制人格がなのはを捕える気なら、広範囲と遠距離からの攻撃で弱らせれば簡単なのだ……だが。

「はやてちゃんは親しい人達と一緒に居たいって思った」

「ただ倒すだけなら初撃で広域殲滅魔法を使えばいい」

だが、最初からそうはしなかった。それは一重に御坂の双子の命も奪う事になりかねないからだ。

「ッ！警告！後方から攻撃が来ます！回避をッ！！」

「「ッ！？」」

話し合う間もなく。レイジングハートから警告され、即座に回避行動を取る……が。

「（間に合わないッ?!）レイジングハート！！」

「カートリッジロード！ダブルプロテクション！！」

スピードの遅いのはが避け切れず、即座に防御に入る……その瞬間。

——ドゴオオオオオンツツツ！！！！

轟音を鳴り響かせ防御魔法とピンクの砲撃がぶつかる。

「なのはッ?！」

その魔力光を見たフェイトは着弾地点に近づく。

「~~~~ッ、あ、危なかったの・・・ッ」

「忘れていました。確か、闇の書は蒐集した魔法を書の魔力を用いて使用する事が出来ましたね」

爆煙が晴れ、一先ずは無事な姿を見せる。レイジングハートは何事も無かったかのように解析結果を告げる。

「今の・・・何? 以前見た砲撃魔法より強力だったよね?」

「今のは恐らくアルテリオンブレイカーですね」

「見た目は砲撃魔法ですが・・・アレは集束砲撃です」

「集束砲撃?！」

フェイトの疑問にレイジングハートが答え、バルディッシュが攻撃の種類を判断する。その事にフェイトは驚愕する。

フェイトが驚くのも無理は無かった。魔導に精通した管制人格が撃ったとは言え、集束砲撃とは本来、自分の魔力を使わず、敵味方の区別なく周りの魔素を再結合させ一点に集めるSランクレベルの技術を要する。その為繰り出される砲撃もSランク相当の攻撃力があるのだ。

なのははその技術を生かし自身の魔力を消費する事無く、且つ、本来の砲撃と同じチャージ時間で集束砲撃を撃ったのだ・・・そして、その攻撃は次への攻撃に繋げる事を可能としている。

「~~~~っ、まずいです! スターライトブレイカーが来ます!！」

「緊急事態発生!! 我々の後方、射軸上に幾つかの生体反応が有ります! 恐らくは巻き込まれた民間人かとッ!！」

「「ッ?!!」」

その発言を聞き、なのはがフェイトに掴まり、フェイトは全速力で飛ぶ。

――その一方

「まったく、どうなってんのよ？」

バルディッシュが察知した生体反応の一番近い場所に居た人物――アリサは困惑していた。

はやてのお見舞いの後、パーティ会場の翠屋に向かって歩いていったが・・・突如、空は灰色に染まり。大通りを歩いていた人達は一部を残して大半が消えてしまったのだ。

「おまけにすずか以外はみんな能力者ってどう言う事よ？」

「そ、そうだね（・・・コレって、やっぱりそうなのかな・・・？）

」

だが、困惑しつつも成績優秀でありながらも柔軟な考えが出来るアリサは周りを観察し、能力者だけが同じ状況に陥っている事に気付いていた。

一方、その隣にいたすずかも最初は驚きを隠せていなかったが、次第にコレが魔術関連の事件ではないか（あながち間違っていない）と察していた。

「おまけにさっきは変なピンク色の光線が上空を通り過ぎるし、ホントどうなってるのよ。まさかどっかの超能力者の仕業？それとも

――」

「（考え事が尽きないな）・・・あれ？・・・ねえアリサちゃん
向こうから何か飛んでくるよ？」

尚も続くアリサの愚痴を聞き流したすずかが、何かが自分たちに向かって飛んで来るのに気付く。

「へ？・・・本当だ」

すずかに指摘され思考の海から帰還し、すずかが見ている方向を見る。そこには顔は分からないが、確かに白と黒の服装の人物が此方に飛んでくる光景が見えた。

「空を飛んでるなんて、珍しい能力者・ね・・・・なのは？」

「なのはちゃん？・・・・それに、フェイトちゃん？」

その人物が自分たちの知り合いだと言う事に愕然とする。

「ア、アリサちゃん？！それにすずかちゃん？！」

「アリサっ？！すずかもッ？！」

その一方、なのは達も自分たちを楯にして管制人格からの攻撃を防ぐために、一番近い生体反応に近づいたが・・・・それが自分たちの知り合いだと言う事に驚愕する。

「ッ！？チャージが早い？！・・・・マスターを前面に！フェイトはマスターの後ろから遠隔操作で防御魔法を！！」

レイジングハートの指示に従い、急いで地上に降り行動する。

「来ます！！！」

前方からピンク色の光りが押し寄せて来る。

——タンッ

だがそれよりも早く、一つの影がアリサを、すずかをフェイトを・
・そして、なのはを通り過ぎる。

——ゴオオツツツ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

その影がピンク色の光とぶつかり・・・・川の流れが分断されるかのように分かれる。

「あ——」

なのはが小さな声を漏らす。それと同時に、強張っていた体から余分な力が抜ける。何故なら目に映る人物——上条当麻の右手は、例えばどんな強大な力であろうと、その力が幻想の存在ならば打ち消

す事が出来るのだから。

やがてピンクの閃光が途切れる。周りのビルや道路はヒビ割れ、窓は碎け散り、一部の壁は崩壊さえしているが、当麻の後ろに居た者の被害は0。当然、魔力なんかも使っていないので疲労も皆無だ。「——ッ、たく・・・おい？今のってなのはのスターライトブレイカーだろ？どうなってんだよ？（つーか、俺の右手でも打ち消すのに数秒掛かるって・・・なのは恐ろしい子・・・っ!）」

「む？今なんか変なこと考えて無かった？」

「イイエ、メッソウモゴザイマセン」

当麻が状況を確かめようと話しかけて来るが、頭の中ではなのはの考え出した集束魔法の威力に驚愕していた。

そんな考えを直感で感じたなのはは当麻を見る。

「・・・」

「・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

お互い見つめ合う。

「・・・・・・（ファイ）」

「あ?！今、目を背けたの!」

先に折れたのはやはりと言うべきか当麻の方だった。なのはの目のハイライトが段々と薄れていくのに耐えきれなかったのだ。

「デート！今度デートに連れてって!!」

「今はそれどころじゃないでしょ?!!」

遂に耐えきれずにアリサがツツコム。

「いいな〜私もデートしたいな〜?」

「すずかもかッ?!今はそんな事言ってる場合じゃないでしょ?!」

「でもアリサちゃんもデートしたいよね?」

「えっ?!そ、それは・・・まあ、してみたいわよ?で、でもアイ

ツはなのはと美琴が周りを固めてるから——」

「アリサちゃん」

「なのは・・・」

次第に愚痴から自分となのはと美琴を比べ出す。そんなアリサになのはが声を掛ける、その声色は優しさが含まれていた。

「応援ありがとう!!」

「遠慮なしかコンチクショウっ!?!」

「恋愛は引いたら負けなのよ!」

何時の間にか後ろからやって来た美琴が話に加わる。その後ろには浜面、麦野に絹旗、巻き込まれた神裂・・・そして。

「やっぱり、闇の書が完成したんだ・・・ッ」

「っで?はやてはどうなったのよ?」

インデックスが居た。インデックスの言葉に、大体の事情を理解した麦野ははやての事を聞く。

「・・・多分、闇の書と融合してると思う」

「そう、主はやては私の中で永遠の夢を見ておいでだ」

麦野の疑問にインデックスが答え、近づいて来た管理人格が答える。

「永遠?はっ!バカじゃねーの?!そんなに寝てたら餓死しちゃうだろうが!」

その答えに麦野が異議を唱える。

「覚める事の無い眠りだ・・・死んだ事さえ気付かせない」

「バカだ」

「ええ、本当に超バカです・・・正直言って浜面より超バカです」
「酷っ?!」

管制人格の答えに麦野は苛立ちを持って答え、絹旗も同意する。

「どちらにせよ・・・貴方方ももうじき気にしなくなります」

そんな評価も一切気にせず、管制人格ははやての願い通りに行動を開始する。

「っ!気をつけて!あの子、はやてちゃんと親しい人物全員を取りこむつもりだよ!」

「遅い。――来たれ、赤き竜よ――」

なのはの忠告も空しく、管制人格が闇の書のページを捲り・・・蒐集した魔法を使用する。

その瞬間、当麻達を囲む様に触手が地面から生える。

「きゃっ!?!」

「ぬおっ?!」

更に当麻達の足元からも生え出て・・・一般人を守るか回避に専念するか迷ったフェイトと、元より無断仕切っていたなのは、麦野と絹旗を守ろうと行動した浜面を捕える・・・が。

「嘗めんなっ」

「超鬱陶しいです!」

「なのはを放しなさい!」

既に能力制御装置から解き放たれている超能力者には無力化され。

「っと」

「――七閃」

当麻の右手に召喚魔法陣を打ち消され、神裂にはワイヤーで切り裂かれ。

「悪いけど、その子には指一本触れさせる訳にはいかない」

遅れて合流したステイルに焼き尽くされる。

「っと、ありがとうございます!美琴お姉ちゃん!（リ、リアル触手プレイはちょっと・・・）」

「あ、ありがとうございます（あの本、アレ自体が魔法の発動体?）」

「当然よ!（私のなのはに何て事してんのよあの女ツ!）」

「いえ、お気になさらず（これが魔法、ですか）」

「（ードスンッ）あだっ!?!（弱え、俺ってホント弱え・・・ッ）」

「全く、何やってんのよ浜面?・・・アンタに守られなきゃならない程、私は弱くないわよ?（男の触手プレイなんて見たくないわよっ!）」

「超同意です（言葉では超ああ言ってますが、浜面を縛っていた触手を撃ち抜いたのは超誰なんでしょうねえ?）」

「あ、ステイルだ（それよりも、今のは召喚魔法？ となると蒐集した魔法全て使えるとみて良いかも）」

直に飛行魔法を使用し脱出するなのはとフェイト。そして、受け身に失敗し尻から落ちる浜面。目の前に起こった事に全く動じないインデックス。それぞれ心の中では色んな事を考えていた。

「やはりこの程度では足止めは出来ないか。なら——」

即座に上空に飛び、障壁を展開し……詠唱を唱える

「来たれ、夜の帳に羽ばたく怪鳥――」

その頭上高くに描かれる巨大な魔法陣。

「ちよつ?! どうにか出来ないかインデックス!？」

「無理だよ?! 今のあの子は魔道書そのものって言って良いほど術式に無駄が無いんだよ?!」

「なのは！」

「え、ええつと……。取り敢えず、撃つとく？」

[illegible]

なのは言うよりも早く、魔法陣から出て来る無数の黒鳥が現れ始める。

――夜明けは未だ見えず

ナイトメア・クリスマス（1）（後書き）

今回の一発ネタ

「「^{流出}Atziluth——」」

「Res novae——」 「Dusolst——」

三者の詠唱が終わる寸前、一つの影が空から落ちてくる。

「Also sprach Zarathustra!!」 「Di
es irae!!」 「Acta est fabula」

「ふ、不幸だああああ!!!!」

——その後、上条当麻を見た者はいない

データロード

or

ゲームが終わる

やってみたいけど、上条さんじゃすぐ終わる（笑

ナイトメア・クリスマス(2)

海鳴の上空を埋め尽くす黒い怪鳥の群れ群れ群れ……それを見た一同の反応。

「……私、しばらく鳥肉食えそうにないわ」

「超同意です」

全員の心境を代弁するかのように麦野が呟く。

「……あのさ」

そんな中、アリサが当麻に話しかける。

「どうした、アリサ？怖くなったか？」

「違うわよっ！聞いた限りじゃあ、はやての目的って私達なんですよ？」

「まあ、なのはに聞いた限りじゃあそうだな」

「なら、私達以外の人達って……どうなるの？」

「っ、それだけじゃないよ！はやての目的は二つ！もう一つは結界内に居るグレアム提督に対する復讐もあるんだよ？！」

『……ッ！？』

アリサとフェイトの言葉で管制人格がやろうとしている事に気付く。

「まずいぞッ！アイツ、俺たち以外の人間には容赦しない……ッ！」

事実、管制人格は当麻達が集まれば自分一人では荷が重いと判断し。結界内に潜むグレアムと使い魔2匹を炙り出すのと、当麻達の戦力の分散させ各個撃破に切り替えたのだ。

そして、更に状況は悪化する。

「——我が下に集え、騎士達よ——」

管制人格の足元に魔法陣が輝き……光が治まると、彼女の周りに蒐集され消えたはずのヴォルケンリッターが居た。

「烈火の……将……シグナム、此処に」

「鉄槌の・騎士・・・ヴィータ」

「泉の騎士・・・シャマ・ル」

「楯の・・・守護獣・・・ザフィーラ」

各々声を出し自らの存在を証明する・・・だが、その声は以前の彼らと違い機械的なまでに無機質で無感情、そして・・・無表情だった。

「騎士達に命ずる・・・彼らを捕えろ・・・生きたままだな」

「「了解」」

管制人格に命じられ、それぞれが当麻達に襲いかかる・・・が。

「チェーンバインド!!」

「らあああ!!」

横から強襲してきた者達が放った翠色の鎖にシャマルは投げ飛ばされ、ザフィーラは吹っ飛ばされる。それに反応し、シグナムとヴィータもまた行動を中止し、空中で留まる。

「ユーノくん?！」

「アルフ!!」

「お待たせ! フェイト! あの二人はアタシに任せな!!」

「二人は夜天の書をッ!」

言い終わるよりも早く、シャマルをユーノが、ザフィーラをアルフが引き連れ離れて行く。

「な、何だったの? それに今、ユーノって言わなかった?」

「私もそう聞こえた」

そんな二人を唾然とした表情で見送ったアリサとすずかの二人。次々と変化する状況に思考が追いつかない二人だが、最低限の情報は耳にしたらしい。

「ねえ!? 今あの男の子の事ユーノって言わなかった?」

「・・・アリサ」

困惑するアリサに当麻が声を掛ける。

「何よ?」

「色々話したい事、聞きたい事があるんだろうが・・・今は目の前

に集中しようぜ？・・・終わった全部話すから・・・・・・・・..なのはが」

「私?!」

どうやら翠屋での件を根に持っていたらしい。

「・・・分かったわ。取り敢えず、今はあの女の人のはやてで、取り敢えずぶっ飛ばせば良いのね？」

「アリサちゃんったら・・・でも、そうしなくちゃ大変な事になるってのは分かったよ」

頭の回転が速いアリサは取り敢えず、この事態を終わらなせないと落ち着いて話し合いも出来ない事を理解した。同じく若干戸惑っているすずかも、現状はこの世界が危険に晒されている事は理解できた。

アリサも能力制御装置を外し、すずかも服のボタンを幾つか外し動きやすい様にする。

「話が早くて助かる」

「流石私の（恋の）ライバルね」

「か、関係あるの？」

当麻もまた意識を管制人格に向け、美琴はアリサとすずかを褒め、なのはは美琴の発言にツツコミを入れる。どんな時でも変わらない3人のコント。

「ま、どっちにしたって・・・降り掛かる火の粉は自分で振り払うって事ね」

「その意見には超同意です・・・折角の翠屋のクリスマス特別ケーキが食べられなくなるのは超嫌です」

「相変わらずだな最愛（まあ、麦野達を放っとく訳にもいかねーしな）」

麦野、絹旗の二人も口では面倒臭そうだが、力を存分に揮えるこの状況はまたとない機会だった・・・そんな二人を心配する浜面も戦う事は否定しなかった。

「若輩な身ではありますが、私も手を貸しましょう。・・・所で、

「そ、そんな事出来るの?!」

エイミィの答えになのはが驚きの声を上げる。普通の魔導師ならば即座に魔力切れを起こしかねない行為だからだ。

「可能だよ」

「ああ可能だ。魔術と魔法と言う違いがあらうと。例えば改悪されようとアレは魔道書だと言う事さ」

例えば破壊されようと自己修復し、ページの一つ一つが術式となり、地脈からの魔力を吸い無限の活動をする。それはまさしく魔道書の原典の特徴・・・闇の書は紛れもなくベルカ式で再現した魔道書だった。自己再生を無限転生に置き換え、ページの一つ一つを魔力の貯蔵タンクにし、大気中の魔素を吸収する事で無制限に魔法を使用する事が出来る。

「恐らく、歴代の書の持ち主が魔道書を創ろうと思考錯誤した結果が闇の書の始まりだと思う」

「まあ、歴史調査は後回しにして・・・エイミィ、シグナム達はどうすれば良い?」

『・・・酷い言い方かもしれないけど、彼女たちの本体は闇の書そのもの。だから、死んでも書の中に戻るし、書が存在する限り管制人格か書のマスターが望めば再び現れるよ』

「なら、浜面、麦野、絹旗でヴィータを、シグナムは・・・」

「私が行きましょう」

神裂が自ら名乗り出る。

「良いのか? 一人で?」

「構いません・・・一戦士として彼女とは全力で戦ってみたかった」
神裂の顔には戦士としての笑みが零れていた。

「まっ、仕方ないか・・・ほらバカ面! 絹旗! 行くよ!」

「ちよっ?! バカは無いだろ! バカは!!!」

「いいえ、浜面は超おバカだからあながち間違ってもいません!」

先制に麦野が極太の閃光をヴィータに撃ち引きつけ、絹旗が麦野を抱え走り去る。ついでに浜面も追いかけていった。

「では、私も——はあっ!!」

対して神裂も鋼糸を放ち、シグナムを自らに引きつけ……剣戟が始まる。

「残り一人（さっきの子、あの年であの動き……まさか、聖人？……後でヤツにでも確認を取るか）」

「さて、残りは……」

「アリサ！すずか！街に行くわよ！！氷華が心配だわ！」
当麻の言葉よりも早く美琴が動き出す。

「つて、オイ！美琴?!」

「後は任したわよ！当麻！……絶対に助けなさいよ？」

美琴が真っ直ぐに当麻を見る……揺ぎ無い信頼しきった目を。

「——たく、当たり前だろ？」

「それでこそ私の当麻だわ！」

「まったあああ！誰がアンタのだって?!」

だが其処にちよつと待ったコールを掛ける少女が一人。文字通り火を噴きながら意義を唱えるアリサ。

「お、抑えてアリサちゃん！熱い！熱いよ?!」

「なら勝負よ！どちらが多くての鳥を倒せるか!!」

「私が勝ったら？」

「当麻の一日自由権」

「乗ったわ」

本人を無視して自分の権利を賭けられる勝負。当の本人は諦め我瓦解せずの精神だ。

「すずか。判定、任したわよ？」

「レディー——」

「GO!!」

一気に駆け出す3人。吸血鬼としての力を発揮させたすずか……どうやら賭けに参加したらしい。

「……ま、いっか。じゃあ残りは……」

——母の願いの為に自分を押し殺したフェイト

——はやての願いを叶える事以外他は何も要らないと言う管制人格

「はやてだって、貴女だって、これから幾らでも変わって行けるんだよ！なんでそんなに自分を否定しようとするの？！」

嘗ての自分を見ている様で感情を抑える事が出来なかった。

「——なるほど、貴女は私と似ているのですね」

「そうかもしれない・・・でもっ！私にはそれが間違ってるって！違うんだって教えてくれた子が居た！！」

「・・・興味深い。ではその絆がどれほどの物か見させて貰いましょう——ッ！」

「させない！」

「ブリッツアクション！」

お互いに高速移動でお互いの死角を突こうと動き回り。

「シュヴァルツェ・ヴィルクング」

「サイズシュラッシュ！（アリシア！）（任せて！——誘導弾の制御、行つくよ！）」

「イエッサー！魔力を圧縮し、威力を強化します」

高速移動一気に接近戦へと切り替える。

——片や、自分に強化魔法を施し身体能力を上げ

——片や、魔力鎌にバリア貫通術式を付加し、多数の誘導弾を操作しながら

こうなると空を飛べない当麻とステイル、空戦適正の低いインデックスは見ているだけとなり。

『——って感じかな？質問は？』

「大丈夫！それよりフェイトちゃんが今一人で頑張ってるの！」

『了解！直にレイジングハートに転送するねーやり方は・・・』

『理解してます————追加プログラム受信しました。直に圧縮

データを解放します。これで漸く全力で行けますよマスター」

「・・・ありがとう、レイジングハート。私の為に」

「貴女だからこそ、ですよマスター」

なのははレイジングハートの最終調整をしていた。

「捕まりました」

「――まだ：ッ」

上段からの踵落としを高速移動で回避し。

「其処っ！！」

「楯」

背後からの一撃を、一瞬で作り出した障壁で防ぎ・・・。

「これで――」

「――ッ！！（間に、合わ――）（フェイト！！！！）」

そのまま一気に懐に入り。アップー気味に掌手を繰り出す。

――ゴツツッ！！！！

「――うあ――（マズ、い・・・！術式が、組めない・・・）」

顎の強打。例えばバリアジャケットに守られていたとしても・・・否、守られていたからこそ管制人格の強化された掌手を喰らっても尚、軽い脳震盪で済んだ・・・だが、それこそが狙いだった。

「我が内で眠ると良い」

フェイトの体が光に包まれ。

「吸収」

闇の書の中に取り込まれた。

「「フェイト（ちゃん）！！」」

「エイミィ！！」

『分かってる！！————大丈夫、生命反応はあるよ……けど』

「あの本の中、かい？」

ステイルの質問に頷く事で肯定する。

「さて……次は誰だ？」

管制人格が当麻達に問いかける。

「悪いが、取り返すもんが増えちまったんでな……次は無い」

「そうか……なら次はお前だ。その奇怪な右手、切り落とせば書の中に取り込む事が出来るだろう」

管制人格が足元に魔法陣を展開させる。

「……悪いが美琴達に心配掛けさせたくないんでな、そうなる前にテメエの幻想を終わらせてやるさ！」

なのは達から一步前に出て構えを取る。

「私から当麻くんを離す気？……なら、貴女は敵なの《レイジングハート》」

「この身は確かにマスターの為に有ります。ですが唯マスターの願いを叶えるだけでは芸がありませんよ？夜天の書の管制人格さん？《イエス、マスター……もしもの為にリミッターの解除の準備に入ります》」

管制人格の発言に顔から感情が抜け、静かに自身の魔力をレイジングハートに込める。

「早くしないとこの料理が冷めちゃうもんね！」

そう言いつつも視線は管制人格からは逸らさない。

「……フウ……そろそろタバコが切れそうなんだ……夜に吸う分が無くなってしまおう」

啜っていたタバコを捨て、静かに自身の魔力を練り上げていく。

「……フローターフィールド！」

「……羽ばたけ、スレイプニル」

一瞬の静寂後、最初に仕掛けたのはインデックスと管制人格だった。空を飛べない当麻の為にインデックスが土台を創り出し、管制人格が高速移動魔法を使う。

「――取った」

「させない！」

「アクセルシューター」

フローターフィールドを避け、当麻の頭上に移動した管制人格が強化された拳を振るう。だがその前に空に離れたなのはが誘導弾で追尾する。

「こっちもだ」

「くっ――」

更に横からステイルの炎剣が薙ぎ払われる。

「――貫った！」

「ッ、楯――！」

再び空中に離れた管制人格に、インデックスが展開したフローターフィールドを足場に神速を使い当麻が接近する。管制人格も急場しのぎの楯を張るが……

――パキィィン！

一瞬で当麻の右手で無力化される。

「っと……高速移動魔法か」

「今のは危険でした」

だがその一瞬で当麻から離れる事に成功する。

「今の……なのはのフラッシュムーブだな？」

「正解です。どうやら貴方方には手加減などしている余裕はなさそうですね」

再び管制人格の足元に浮かぶ魔方陣。当麻も油断せずに周囲に気を配る……だが。

「あうッッッ！！！！」

「っなのは?!」

今度は当麻を狙ったモノではなく、なのはが吹き飛ばされる。

「ぐあ――ッッッッッッッッ」

「ステイル!!」

その次はステイル。

「ディバイン——」

「砲撃か?!」

次に姿を現したのは空中。しかも、真上に現れピンク色の魔法陣を展開し、聞き覚えのある攻撃名を聞きとる・・・その狙いは。

「バスター」

「プロテクション!!」

ピンク色の砲撃と淡い水色の楯がぶつかる。その余波で当麻も近づけなくなっていた。

「——」

「くうううっ（砲撃が、止まない・・・ッ）」

だが、次第にインデックスが押されていた・・・否、砲撃の威力が衰えず、楯ごと後ろに押されているのだ。

「インデックス!!」

「邪魔はさせません、ステインガーブレイド——」

右手を楯にインデックスに近づこうとする当麻に、管制人格はディバインバスターを撃ちながらも当麻に向けて魔法陣を展開する。

「——エクスキュージョンシフト!」

「今度はクロノのか?!」

ほぼノータイムで撃ち出される水色の魔力刃の嵐。それを避け、打ち消し、飛針で撃墜する。

本来ならば追撃で爆発させるのだろうが、足止めの為だけに大規模魔法を使い、その間もインデックスへの追撃を止めない。

「クソ・・・ッ!」

「何をしている、上条当麻!早く、あの子の元に行け!!」

後ろから荒い息をしながらもステイルの声が届くのと同時に、火炎放射機並みの炎が当麻の前方の魔力刃を焼き尽くす。

「すまんっ!」

「礼、よりも、あの子を助けろ・・・!（このままじゃ、またあの

子の居場所が——ッ」

息も絶え絶えながら、燃え盛る炎の壁の先——インデックスと管制人格の居る場所を見る。

ステイルが魔力刃を焼き尽くす頃、インデックスも限界に近付いていた。

「う、ううう……」

「そのバリアジャケット、思っていた以上に硬いですね……どういった術式を組み上げたのですか」

元々低い空戦適正のため空を飛ばずに地上を逃げ逃げ回っていたが、それも所詮時間稼ぎに過ぎなかった。

「はあっ！はあっ！——ッ、そこ！」

各種防御魔法と拘束系のバインド各種で攻撃を反らし防いでいたが、一度破られてからは魔法を張る暇も与えられずに攻撃を受けっぱなしだった。それでもバリアジャケットに護られ致命的なダメージは無かった……だが。

「これで、終わりです——シュヴァルツェ・ヴィルクング」

「（……とうま——生きて）」

管制人格が振り下ろす過剰な魔力で魔法で強化された拳を、インデックスはただ見てるしか出来なかった。

右手で炎を打ち消し、駆け出し……その光景を見た。

「————」

「蒐集」

インデックスの胸から右手が突き出し。その手の平には赤い結晶が浮いていた……紛れもなくインデックスのリンカーコアである。

「皆！ 大丈夫——インデックスさんッ!？」

「ご無事……ではなさそうですね」

遅れて空からなのはもやって来て……現状を一瞬で把握する。

「——ッ、テメェ！」

「夜天の書さん!!」

「ん? ……ああ、遅かったな。……少し待ってろ。この者の魔力を抜き取り、書の中に取り込んだ後、貴様たちの相手をしてやる」
管制人格の言葉など聞かず、真っ直ぐに走りだす。

「マズイ……全員死ぬぞ……ッ！」

——故に気付かなかった、後ろにいたステイルが呟いた言葉を

「「肉体のダメージが許容量を突破。これより魔道図書館保護の為、
迎撃殲滅術式『ヨハネのペン』を起動します」」

戦場に無機質なインデックスの音が響く。

ナイトメア・クリスマス(2) (後書き)

あとがきまで読んでくださった皆様に質問なのですが。リインフォース生存√とリイン?誕生√が発生してるんですがどちらがいいと思います?

?リインフォース生存 ↓ リイン?の出番が消える ↓ 脳内でCVゆかな再生が出来ない(エ)

?リインフォース消失 ↓ 原作通り ↓ 但し将来的にはやての人生難易度がhardに(え)

?俺は両方取るぜ! ↓ はやて無双。但し原作以上に甘えた性格

?アギトファン「アギトこそ唯一無二の融合機!」 ↓ 人生そんな甘かねーよ! ↓ はやて「肉体言語こそ夜天の王よ!」

ナイトメア・クリスマス(3) (前書き)

久っさびさの投稿!!

楽しみにしていた方々、お待たせしました!

年末近くと言うこともありリアルの方が激しく忙しく、なかなか筆記作業が進みませんでした〜(泣

目標としてはクリスマス終了までに最終決戦終了! 今年一杯にはA
'S編を終わらせたいと思います!

あ、(下)と付いてますけど、この回でバトルパート終了じゃない
です(汗

ナイトメア・クリスマス（3）

その場に居る誰もが戦場の空気が変わった事を察していた。

その空気の元は管制人格にリンカーコアを蒐集され、本来なら命の危険に侵されているはずのインデックスからだった。無機質な表情で虚空を見つめ・・・言葉を紡ぐ。

「「並列思考により肉体の治療を開始。周囲に生命体の反応アリ・
・禁書目録の安全を優先。眼前の敵性勢力を駆除します。禁書目録の記憶を検索——最重要敵生体を確認——術式『^{セント}聖ジョージの聖域』を発動します」

インデックスの正面に空間の亀裂が奔り・・・光が溢れる。

その光が向かう先は——当麻

——ゴツツツツツ！！！！

爆撃の様なけたたましい轟音を発して右手と閃光がぶつかる。普通なら一瞬にして吹き飛び塵さえも残さず消し去る攻撃が右手一本に防がれている・・・だが。

「ッ——！！！！（お、重い——ッ！！）」

「当麻くん！？」

「ッ——なのは！俺の後ろから出るなッ！！」

その光を右手一本で受け止める・・・だが、右手に打ち消されても尚、少しずつ後ろへ下がっていく。

「馬鹿な・・・聖ジョージの聖域・・・だと？」

その時、後ろに居たステイルが唾然とした表情で呟く。

「おい、ステイル！」

「あり得ない、たった一人に対しての攻撃じゃないぞ・・・ッ！それを防ぐ右手だとッ？！」

「ステイル！！！」

「ッ！！」

当麻の怒声に正気に変える。

「アレは何だ？！インデックスはどうしちゃったんだ？！知ってる事は全て教えろ！！」

「――アレは彼女を守る為の・・・彼女の首輪だよ」

少しの苦悩の後、己の知っている事を口にする・・・教会の総意と自分の立場・己の信念・今後の彼女の人生と幸福・・・それらを一瞬だけ考え、後者を取ったのだ。

「首輪？」

「そう、不思議に思わなかったかい？彼女自身が魔術を使えない事、危険な10万3000冊の魔導書の知識を持っているのにも関わらず放し飼いに近い扱い、バリアジャケットが強固だと言っても限界があるのにも関わらず従者の一人も居ない事」

「・・・そう言う事か・・・っ」

淡々と喋るステイル。言われれば言われるほど違和感が浮き彫りになり、その全てが今のインデックスの変化に繋がっている事を確信する当麻。

「それが・・・アレなの？」

「そうだ。彼女の肉体に危機が迫ると・・・彼女の身に刻まれた呪いが反応し、デバイスが彼女の思考全てを乗っ取って敵を・・・彼女を利用しようとする可能性がある人間全てを排除する」

次第に閃光が弱まり、視界がクリアになっていく。

その視線の先には、膨大な魔力を放出させながら体の周りに不可思議で複雑で奇怪な陣を纏わり付かせたインデックスが存在した。次の手を考えているのか、その瞳の中の魔方陣が不規則に変化していた。

「それがシステム『ヨハネのペン』。彼女を縛りつける『首輪』にして・・・皮肉な事に彼女に自由を与えている『武器』だ」

「ペンは剣より強し、かよ？笑えねジョークだ・・・ッ」

「当麻く——ッ、酷い・・・、手が・・・ッ」

余波を防ぎきれなかったのか当麻の右手は所々裂け、血が流れていた。

「唯のかすり傷だ・・・それよりなのは。お前ははやてを追え」

「え？・・・居な、い？」

「・・・どうやら僕たちの事は放って、他の連中を捕えに行ったらしいな」

先程まで宙に居た管制人格は姿を消していた。

「で、でも！」

「なのは」

無傷な左手でなのは頭に手を置き、なのは目を見ながら・・・頼み込む。

「なのはだってハッピーエンドが見たいだろ？だから今、全員がそれぞれに出来る事をしてる・・・だからなのはにはアイツを、はやてを止めて欲しいんだ」

「・・・デート」

「はぁ・・・分かった。ただまた怪我しちまったから病院行ってかな」

「約束だよ？」

「おう」

「アクセルフィン展開」

その答えに満足したのか。飛行魔法を発動させ、一瞬で飛び立って行く。

「・・・良い判断だ、彼女を逃がしたのだろ？」

ルーンカードの枚数を確認しているステイルがポツリと呟く。

「まあな……………さて、さっさと終わらせてデートの予定を立てないとな」

「惚気るのは後にしろ。今は彼女に集中しないと——死ぬぞ」

「わーってるよッ！」

「『演算終了。——多数の攻撃にて対象の破壊を行います』フィンの一撃』」

当麻に向けられたインデックスの指から、黒い塊が次々と撃ち出される。

「（ガンドとはねッ！やってくれる・・・ッ）気をつけろ！その一撃は少しでも喰らうと体調に不調を来たすぞ！！」

ステイルのアドバイスを聞き・・・二人で左右に別れる。先程まで居た場所にインデックスの攻撃が当たり——コンクリートの道路を次々と抉っていく。

「（ゲッ！あんな攻撃でもあの威力かよ?!）って！やっぱり俺だけが狙いか！」

避けた先でもインデックスの攻撃は当麻を狙い続けていた。

「ッ、気を、付けろ、ッ！今の彼女は、機械と言って良いほど、壊す事に躊躇しないッ！！」

優先順位が低いが、それでもインデックスの攻撃を必死に避けるステイルが叫ぶ。

「『パターン変更。一撃必殺での完殺に切り替えます——七つの鍵をもて開け』」

詠唱と共に、インデックスの前方に七点を起点とした文字が描かれる。

「（——アレは、ヤバイ——ッ！！）」
「『七鍵守護神』」

閃光が当麻の視界を覆い尽くし——直感で突き出した右手がソレを遮る。

「ぐううう——っ!!!」

「馬鹿、かッ! 何故避けなかった!!」

「あんな攻撃! 避けたらッ、被害がッ、広がんだろうがッ!!」

ステイルからの罵倒に反論する。足に負担が掛かるが避ける事は出来た。

だが、そうする事で避けた後の事が頭を掠め・・・防ぐ事を選択したのだ。

「く…っ! ステイル! 数秒で良い! 隙を作れ!!」

「(ルーンの配置は出来ている。だが、相手はあのインデックスだ、出来るか? ……ええいッ、どうとでもなれ!!) 一度だけ援護してやる!!」

魔道図書館

当麻の叫びに近い声に、ステイルが攻勢に入る。

今まで逃げ回っていたのは、何も魔術を使用する隙が無かったのではない。逃げ回る事で下準備を進めていたのだ——最後の決めに手に繋げるための。

「(決めるよ…ッ、上条当麻!!) ———イノケンティウス!!」

今まで逃げ回っていたステイルが動き回るのを止め、自らの切り札を切る。先は一度だけ援護すると言ったが、本音を言うなら一度しか援護できないのだ。

「————目標変更、術式の逆演算——ルーンを媒体とした魔術と判断。ルーンの魔力から術者を特定——逆算」

「ツ——、ぐ……ッ、が…ッ、ぐがああああああ!!!」

ステイルが突如、悲鳴を上げる。

インデックスがその知識を用いて、ルーンに使用されている魔力を辿りステイルにダメージを負わせたのだ。

「ステイルッ!!」

「――目標変更。『エリ・レマ・サバクタニ神よ、何故私を見捨てたのですか』」

奇声を上げ倒れたステイルに気を取られた瞬間、先ほどよりも早く魔術が発動する。

赤色の閃光が撃ち出される。

「しま――ッ（速――間に、合わない――ッ!）」

迫り来る閃光。その輝きを見つめ――。

「させません…っ!」

ワイヤーが道路を切り裂き、インデックスの足元まで届き、インデックスの足を引き寄せる。

足を引っ張られ視線が上を向き、攻撃もまた上に向かって逸れて行く。

声が聞こえた先を見れば、所々破けボロボロの服の神裂が居た。死闘だったのか傷を負い血を流しているが、瀕死に至る程の大怪我は負っていない様だった。

「今です、上条さん!!」

「ッ、サンキュ！神裂！！」

「それよりも行け！上条当麻！！」

ステイルの声に意識を切り替え、駆ける。

目の前には体勢を崩されたインデックスの姿。インデックスとの距離は目測十二〜三メートル程。

恐らく二度と来ないであろう絶好のチャンス。うかうかしていると直に体勢を立て直され、今度は神裂を含めた殲滅パターンに計算し直すだろう……。恐らくは数秒、一瞬で片を着けないといけない。狙いはインデックスの胸元。其処に存在するヨハネのデバイスコア……。恐らくはソレがインデックスを操っている。

「今、解放してやる——（持ってくれよ、俺の体……っ！）」

御神流奥義之歩法『神速』

集中し、集中し、集中する。極度の集中によってアドレナリンの分泌が起こり、時間の感覚が曖昧になる。

それによって肉体のリミッターを外し、限界を超えた身体能力を引き出す。

「お前を縛りつけてる、その首輪幻想から……ッ！！」

右手が、触れる。

「「—————デバイスコアからの信号途絶、————正体不明の力により魔力の生成不可、————『ヨハネのペン』の機能を停止します」」

亀裂を砕き、インデックスの目に映っていた魔法陣も消え、ヨハネもその機能を停止した。

「気を抜くな上条当麻!!」

気が抜けそうになった瞬間、ステイルから警告が飛ぶ。

「上です!!」

それに続き神裂が叫ぶ。

その声に釣られる様に上を向く。その視界には天から降り注ぐ光る羽が映っていた。

Side..なのは

——インデックス撃破の少し前

飛来する魔力弾をギリギリの所で避け、接近する管制人格の攻撃を防御魔法を使い反らす。

「粘りますね」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・当然、なの・・・今日の私は、最高にハ

イって奴なのッ!!」

テンションだけは高いなのは。だが、相手は疲れ知らないのに加え、底なし魔力を持っている管制人格だ。幾らヤル気が高くとも、体力の方が限界に近付いていた。

「(どうしよう・・・お店の手伝いが予想以上に堪えてるの)」

それもその筈、この戦いの前になのはは翠屋の手伝いをしていたのだ。日常でも繁盛する店が、クリスマスと言うイベントも追加され、その忙しさは軽く2倍。

まだ幼いと言う事もあり、手伝い程度の仕事しかないが・・・それでも9歳という年齢ではその後の連戦はキツイ物がある。

「短期決戦、一発勝負・・・」

「全力全開。一撃での魔力ダメージによるノックダウン、それが最善の手でしょう(マスターの体力を考えれば・・・ミスれば後に待っているのは闇の中、ですか・・・一寸先は闇とはよく言ったものです)」

なのはとレイジングハート、二人の意見は一緒だった。

「行くよ! レイジングハート!!」

「イエス、マスター! ――フルドライブ、イグニッション!!」

レイジングハートから1つの葉莢が排出され。その全てがフォームチェンジの為の魔力に使われる。

三日月状だった先端は金色の穂先になり、カートリッジのマガジンは上部に、砲撃用のトリガーも最初から展開され、柄も身の丈ほど長くなる。

今のレイジングハートは、その存在全てが時空管理局技術部の試作段階の技術の塊だ。インテリジェントデバイスにカートリッジシステムの搭載、試作の小型カートリッジ、魔力伝導率の高い複合装甲。

「カートリッジロード！」

「アクセルスフィア！」

レイジングハートから6つの葉莢が排出され、なのはの両脇に2つの大型の魔力球が現れる。

「・・・魔力スフィア？」

「ねえ、夜天の書の管制人格さん——勝負しよ」

空になったマガジンを交換しながらも、なのはは管制人格に話しかける。時間稼ぎの意味もあるが、これからやる事は一発勝負の賭けをするのだ。

「勝負だと？」

「うん——私の一撃、耐えきれん？」

「——良いでしょう。貴女の持つ幻想、打ち砕いて見せましょう」

自身の足元に魔方陣を展開させ管制人格に宣戦布告をする。
管制人格もまた、全身を強化し背中の翼も大きく羽ばたく。

「「・・・ッ！！」」

掛け声と共に、なのはがトップスピードで管制人格に向け突撃する。そのなのはを援護するように2つの魔力スフィアが管制人格に向けて魔力弾を撃ち出す。

「っ——その程度など!」

「やああああ!!!!」

管制人格が撃ち出される魔力弾を弾きながら接近し、なのはは管制人格に向け真っ直ぐに駆け抜け・・・両者共にすれ違う。

「(更に加速した・・・?!ですが、あのスピードでは長く持たない筈です)」

「(くっ———か、加速がキツイの・・・ッ)」

「(頑張ってください!マスター!ここからです!!)」

通り過ぎたなのはは急カーブを描き、再び管制人格に向かっていく。その逆に管制人格は、なのはの出すスピードでは逆に術者本人が力尽きると予測しその場に止まり防御の姿勢を取る・・・だが、それこそがなのは達の狙いだった。

「止まりましたッ!此処です!!」

「———ら、ランダム…ッ、ファイア!!」

なのはの掛け声に2つのスフィアが無数に拡散する。

「なッ———?!」

管制人格が驚愕する。迫り来る魔力弾は速度の違うモノもあれば、狙った様に自分に当たりに来るモノ、速いだけで無操作のモノ、時には直前・直後・真横・真下・真上でお互いがぶつかり閃光と爆音をまき散らすなど・・・まさにランダム。

「クッ・・・あの者は何処に?!」

幾つか当たったが一つ一つの威力が小さく、大したダメージは無かったが・・・閃光と爆音で標的^なを見失う。

「これが私の！」

「私達の」

「全力全開！！！」

「正面？！――楯！！！」

――バチイイイイッッッッ！！！！！！

レイジングハートの穂先から突出した魔力刃と管制人格の防御魔法が激しい音を立てて激突する。

「これで――「アクセル！！」ッ！まだ残って――ッ？！」

受け止め全てを出し切ったと思った管制人格の左右から、1発の誘導弾が管制人格を襲う。

「――ッ（しま――ッ）」

たった二発とは言え、頭部に直撃を受けた事で防御魔法に揺らぎが出来る。直後に穂先の一部が楯を突きぬける。

「コレが、私達の、一撃・・・ッ」

「マニニューバーGRaMDs^{グランデイス}です」

その穂先に現れる魔方陣。

「（零、距離、砲撃――！）」

———管制人格の視界がピンク色に染まる

「はあ…ッ、はあ…ッ、はあ……ッ（か、体が、ガタガタなの）」

「大丈夫ですか、マスター？」

幾ら技術の発達した魔法文化と言えど限界はある。バリアジャケットで軽減したとはいえ魔力も大量に消費し、現在出せる最高最速のスピードで駆け抜けた。残った気力も殆ど0状態である。

「はあ……どう、思う？」

「出し尽くせる手札は出しました。これで駄目だった時は…。」

既になのはに出せる手札は出し尽くされ、魔力も3分の1以下。残った手は諦めるか…残った魔力を駆使してスターライトブレイカーを撃つぐらいだった。

「…当麻くん達、大丈夫かな？」

「彼ならば心配いらないうでしょう。むしろ私としては——」

「？レイジングハート？…ッ——！」

途中で言葉を止めたレイジングハートを不審に思ったのはだが…直にその原因に視線が行く。爆煙の中から服がボロボロになった管制人格だが、確かにその場に浮いていた。

「…言うだけの事がありますね。確かに先程の攻撃は効きました」

管制人格の体がゆっくりとなのはに近づく。

「主が起きていたのなら或いは・・・いえ、それも過ぎた事でしょう」

確かに先程の一撃は管制人格の意識を持って行くレベルの攻撃だった・・・唯一の誤算は内に眠るはやてが未だ目を覚ましていなかった事だった。

その事を悟ったのはは悔しそうに顔を歪める。疲れ切った肉体ではこれ以上の戦闘は無理だと判断してしまったのだ。

「疲れただろう。私の内で眠ると良い」

管制人格がなのは目の前に魔法陣を展開し、なのはの体が光に覆われていく。

「お休みなさい。次に起きた時には幸せな時間を過ごせます」

「次は・・・はやてちゃんごと、ブチ抜いてやるの・・・」

温かく包まれていく感覚に意識が持って行かれる間際、脳裏に浮かぶのは大好きな人の背中。

「（・・・まだ、あの背中には届かない、か）」

——なのは、闇に堕ちる

S i d e ..アースラ

「ツーーーーなのはちゃんの反応が・・・消えました」

エイミィの報告が艦橋内に静寂をもたらす。

「エイミィ・・・」

「生命反応は有ります。ただし、位置は書の管制人格から・・・フ
エイトちゃんと同じ状況です」

念のためにリンディが詳細を求めるが、エイミィの報告は変わら
なかった。アースラのクルーに絶望が頭に過る。

4月の時、高ランク魔導師相手でも引けを取らなかった子達が揃
って戦闘不能に陥ったのだ。

「（不味いわね、クルーに不安が広がってるわ）・・・エイミィ、
あの子ーーーークロノ執務官はどうしているの？」

以前の癖で呼びそうになるのを堪え、艦長としての立場で戦況の
立て直しを図ろうとする。

「未だ、グレアム提督の行方を探っているようです」

「そう・・・・・・なら、グレアム提督の搜索は一時中s「その必
要は無い」-----誰!？」

リンディの指示を、行き成りブリッジに入って来た人物が止めさ

せる。

藍色の長髪に痩せこけた頬に鋭い眼光、細いが鍛えられた四肢、管理局の制服の上から白衣を纏った男性と・・・その後ろにもう一人、ピンク色のセミロングの女性が立っていた。

「失礼、少々立て込んでいたようなのでね。勝手に入らせて貰った」ブリッジの誰もがその男に不審な目を向けていたが、何事も無かったかのようにリンディの前に歩き。

「時空管理局本局第一技術部所属ヴィンデル・マウザーだ」

「同じく補主任のレモン・ブロウニングよ。宜しく、お若い艦長さん」

「ッ、貴方が！・・・お話しはグレアム提督からお聞きしていました・・・ご協力、感謝します」

その二人がグレアムが協力を要請していた技術部の人間だと分かり、警戒を解く。

「構わんさ。遅刻の分は優秀な助っ人を連れて来た事でチャラにしてくれ」

「それじゃ、私達は自分の持ち場に行くわ・・・やる事がたっぷりあるみたいだしね」

メンテナンス室

そう言って、すぐさまブリッジから出て行く。

「「「（所で、助っ人って誰？）」「」」」

その後ろ姿を見送りながらブリッジに居る大半の人間が心でツツコム。

「ッ！結界内に新たな反応が複数！！」

「大丈夫よ・・・彼らは味方よ（それも強力な、ね）」

リンディの見つめる先。正面のモニターに新たな5つの反応がそれぞれバラバラに散って行く所だった。

ナイトメア・クリスマス（4）（前書き）

残業が憎い！深夜近くまで残る仕事が増い！鳴りやまない腹の虫が憎い！

半額弁当が美味しい！

半額弁当がありがたい！↑重要なので2回

半額弁当が懐に暖かい！↑超重要なので3回

読み返せば修正点が出てくる自分の小説がヤバイ（汗

ナイトメア・クリスマス（4）

——???

上も下も前も後ろも左右も見えない真っ暗な場所で自分が漂っているのが分かる。普段なら、こんなにも真っ暗な場所に居るなんて怖くてたまらない——筈なのだが。温かく、包み込む様な眠気が自分の意識を落そうと迫って来る。

「（うち、なんでこないな所にいるんやろか……あかん、眠いわ）」

そして霞む視界の中、一人の女性が見える。何処かで見た様な長い銀髪の女性だ。

「ご安心ください主。もうすぐ主の願いを叶えます。それまでは、どうか安らかな眠りを——」

その女性を見たはやては——。

——???

朝。目覚ましの音で目が覚める。

「朝……（……あれ？私、何時の間に寝たんだっけ？）」

「うう……ん……なの？どうしたの、今日は休みよ？」

声を掛けられ、自分が当麻ちゃんと美琴お姉ちゃんに抱きしめられて寝ていた事を思い出す。

「あ、ごめんね美琴お姉ちゃん（……夢？……夢……夢、だったの？）」

二人と寝ていたのなら何時の間にか寝ていたとしても不思議じゃない。この二人の傍が一番の安らげる場所だから。

「おい。なのはに美琴、朝は朝だけだな……もう昼回ってんだが？」

「……あ、ホントだ」

初めっから起きていたのか、当麻から声を掛けられ改めて時間を見ると……本当に正午を回っていた。

「むう。もう少しこうしていたいけど……ご飯にしましょう！」

「その後はデートだねっ！」

休日のパターンとしては大概デートと称した買い物か、それぞれの家でダラダラとしているか、翠屋で手伝いをしているかが私達の日常だ。

「おう、良いぞ？今日はなのはの行きたい所に行ってやるぞ？」

「ホント?!じゃあ水族館に行きたい!!」

「それなら向こうで昼食も取るわよ！」

善は急げと言わんばかりに当麻は部屋を出て、美琴は御泊りセツトの着替えの中から良い服を選ぶ。

少し遅れ自分も着替え、いつも首から下げている赤い球の付いたアクセサリーを身につける。

「・・・あれ？」

一瞬、微かな違和感を感じた。

——???

朝の陽ざしで寝が覚める。

「——へ？」

「うん・・・？　どうしたのーフェイト？」

隣から聞こえたよく知る声に気付き視線を向ける。

「——アリ、シア・・・？」

「どうしたの？　そんな『ゼ○ダの伝説の主人公の装備が剣と弓じゃなくてライ○セイバーとブラスターピストルだったぜ☆』的な顔は？」

「それ何て蹂躪ゲー？」

二人が何でそんな言葉を知っているのか不思議だが・・・彼女た

ちのクラスメイトと友好関係を見れば自ずと気付く。

「フェイト〜アリシア〜?・・・何だ、起きてるのかい?」

「(この声……アルフ……?)」

中々起きてこない二人を起しに来たアルフがとっくの当に起きていた事を知る。

「起きてるんなら早く来なよ?」リニスとプレシアが起こるからね」

「「はい」」

言う事を言ったのかアルフは部屋を出ていく。その後を追う様に二人は簡単に身だしなみを整え顔を洗う為に洗面台へ行く。

顔を洗い、寝癖を整え、何時ものピンクのリボンで長い金髪をツインテールにする・・・毎度のことと思うが自分たちは双子だ。髪型も一緒だと被って見分けがつかないんじゃないかと。

「・・・あれ?」

鏡を見た瞬間フェイトは微かな違和感を感じた。

――海鳴市海上

海鳴市全体で今も尚、攻撃音が響く。白い閃光とオレンジの閃光

がぶつかり合い、赤竜の叫びが響き、怪鳥の羽ばたきが聞こえる。

「少し、苦戦しましたか」

そんな光景を海の上空から見つめる管制人格。

「時間がありません。早急に彼らを書の中へと導かなくては」
「――その必要は無いだろう」

上空から聞こえた声に反応し、咄嗟に障壁を張る。

バチ――ツ――！

直後に障壁とぶつかる数発の紅黒い魔力弾。

「・・・何者ですか？」

「時空管理局の者だ」

管制人格が声の主に向き直る。其処には一人の男性が居た。肩まである金髪の髪、黒のグラサンをかけ、黒一色のGパンにスラックス、黒いコートを羽織り、二対の大型銃のアームドデバイスを持った男がいた。

「名は・・・そうだな、レーツェル・ファインシュメツカーとでも名乗ろうか」

「謎？食通？明らかに偽名ですね。ふざけているのですか？」

「いいや、本気さ・・・私は名乗ったぞ？今度はキミが名乗る番だ」

「・・・名などありません。敢えて名乗るとしたら管制人格、とても名乗りましょう」

あからさまな偽名に管制人格も戸惑うが、レーツェルから逆に名前を聞かれ返答に詰まる。

「ほお？『夜天の書』は付けないのか？」

「・・・今の私にその名は相応しくない」

管制人格の顔に悲しみの表情が浮かぶ・・・が、直にまた無表情に戻る。

「自己紹介はこれ位で良いでしょう・・・そこを退きなさい。私には・・・やる事があります」

「断る。キミを止めるのが我らが果たすべき事だ」

「そう、ですか・・・ならば私がすべきことは一つ・・・貴方を排除します！」

「出来るかな？・・・ゼンガー！」

管制人格が話しは終わったと言わんばかりに魔法陣を浮かべ・・・レーツェルが叫ぶ。

「応！！我が一刀は紫電の煌めき！！！」

「ッ、上？！」

「斬艦刀・疾風怒濤！！！」

直後、雲を切り裂き、一直線に管制人格に迫る銀閃を障壁で防ぐ・・・が。

「ッ？！（重い・・・ッ）」

重圧に耐えきれず海に叩き落とされる。

「やったか？」

「否、やってない・・・障壁で全て防がれた」

「ほう・・・流石、と言うべきか」

レーツェルの視線の先には海から浮いて来る管制人格が居た。

「二対一ですか」

「卑怯とは言わないでくれ。我らも我らの使命があるのだ」

二挺の大型銃を構えるレーツェル。

「構いません。障害があるのなら排除すれば良いだけです」

魔法陣を展開する管制人格。

「笑止ッ！我が斬艦刀は闇を切り裂く剣なりッ！！」

身の丈程ある大剣を構え吼えるゼンガー。

「・・・彼は何時もあるあんな感じなのですか？」

「・・・スマンな」

「問答無用！！」

「楯よ（・・・人格はともかく――強い）」

大剣を振りかぶり、突撃して来るゼンガーに対応せざる負えなかった・・・彼の戦法は単純、『近付いて斬る』それだけだ――だが技量が半端なかった。記憶を共有していたシグナムの力量も知っていたが、目の前の相手はそれ以上だった。

ギイイインツツッ!!

障壁と剣がぶつかり、火花を散らす

ピシッ――

管制人格の障壁に小さくヒビが奔る。

僅かとは言えゼンガーの攻撃が障壁の耐久力値を上回ったのだ。

「――貴方の魔方陣、ミッド式ですね？何故遠距離からの攻撃をしないのですか？」

「・・・俺は不器用な人間だ。故にアレもコレもと学ぶ事なんぞ出来ない・・・だから一つに絞った！」

ゼンガーが振り払うと同時に管制人格も後ろに下がる・・・それを追う様にして魔力弾が迫る。

「ぐっ・・・そう言えばもう一人居ましたね」

「忘れて貰っては困るな（成る程、Bランク程度の威力では大したダメージは与えられそうにも無いな）」

障壁を張る間も無く魔力弾をくらう。

だが、威力は小さかったのか大したダメージは与えられていなかった。それを理解したレーツェルも認識を改める。

「時間が惜しい――羽ばたけスレイプニル！」

「悪いが、付き合って貰うぞ！最後の一時まで!!」

「一意専心！我が太刀筋に迷いなし!!」

三者が同時に高速戦闘へと移る。

——某ビル

海鳴市内の戦場から少しだけ離れたビルに彼らは居た。

「どう？アリア？」

「・・・援軍よ。こんな時に教導隊が来たわ・・・どうしますか？お父様」

「ふむ。来て欲しい時に来ずに、来て欲しくない時に来るとは・・・相変わらず空気の読めない連中だ」

はやてを絶望させ、この戦いの原因であるロッテ・アリアのリーゼ姉妹とその主ギル・グレアムだ。

彼らは此処で時を待ち、闇の書の暴走段階が最終段階になるまで潜んでいるのだ。

「だが、彼らのお陰で——我らの勝機は見えた」

「果たして。そう上手く行くかな？」

「「ッ！！」」

声と同時に、足元に浮かび上がる魔方陣。それに気付いたグレアムが一瞬で逃げだが。

「「あう——ッ！！」」

逃げ遅れたリーゼ姉妹が捕えられる。

「アレを避けるか、流石だなグレアム」

「お前こそ流石だなギリアム。戦場に参戦して数分で私の居場所を突き止めるとは・・・それに」

声の聞こえた方に向き直るグレアム。其処には薄紫色の長髪の男性が居た。さらに下を向けば自分の使い魔を捕えた弟子。

「その二人に気付かれずに捕縛するとは、強くなったなクロノ」
「提督・・・」

クロノ・ハラオウンが居た。

「グレアム。何故今になって自身の計画を使った？」

「・・・決まってる。彼らに私が味わった苦しみ、犠牲になった者たちの嘆きを思い知らせたかったからだ!!」

狂気の孕んだ怒声をギリアムに向かって吼える。

「・・・変ったな。数ヵ月前の君の目には光が見えたのだから」

「それがどうした。私は最早止まれんし、止まるつもりも無い!!」

両者が同時にデバイスを手に取り、同時に魔力弾を撃ち出す。

「やるなッ！」

「そっちこそ！」

二つの魔力弾がぶつかり合う頃には、既に両者ともさらに上空で接近戦へと持ち込んでいた。

「これ以上余計な混乱を招くのは避けたいのでな、此処で落させて貰う！」

「出来る物ならやってみろ！ギリアム！！」

「元よりそのつもりだ！」

直後、一気に降下しビルの中へと滑り込む様に入って行くグレアム。それを追う様にギリアムもまたビルの中へと突入する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4999q/>

魔法と魔術と超能力と・・・

2011年12月28日01時50分発行